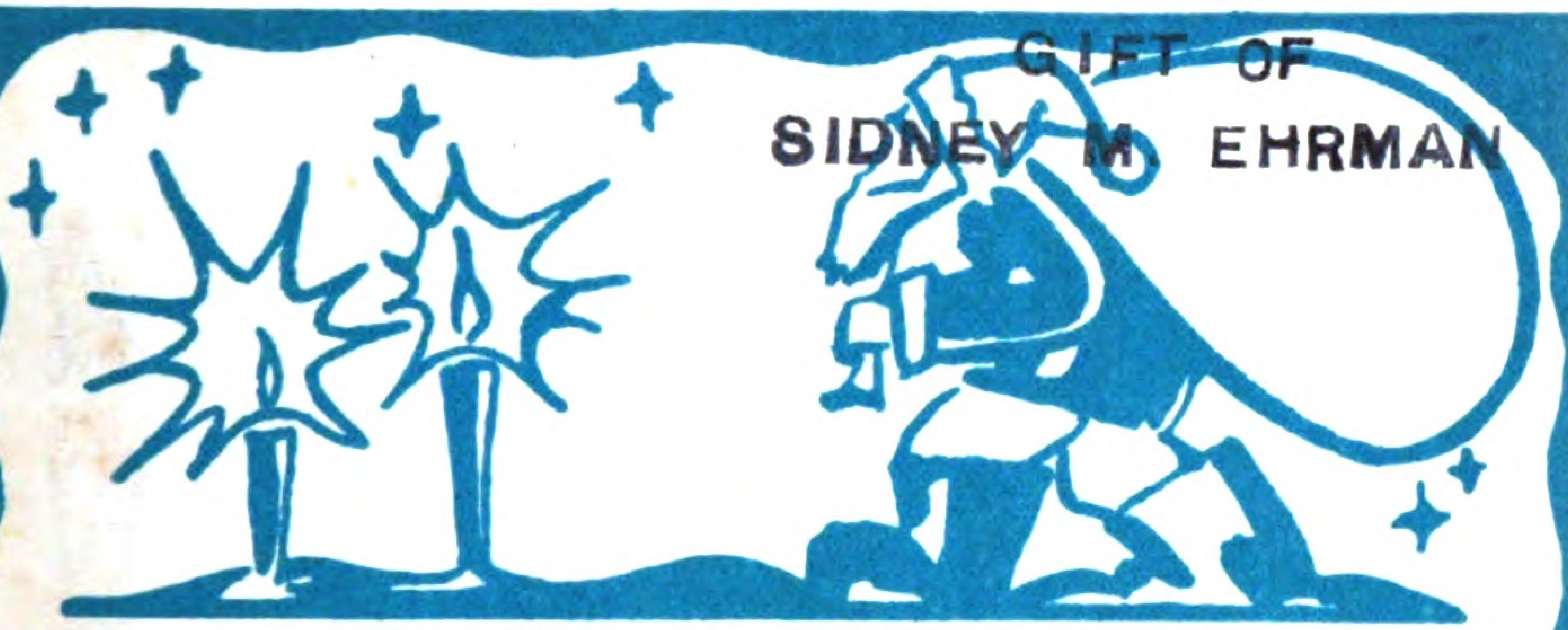
KAIZO

改造

十二月號

1926





改造十二月號目次

明治文學のおもひ出

〔創〕作

◇吉波彦作氏新著◇

大好評 新刊

韓非子詳解

（高等學校專門學校學生必讀の參考書）

菊判最上製美本 全壹册五百餘頁

正價金四圓八拾錢 送料廿七錢

韓非子の刑名誌術は其思想嚴勵峻直其文辭警拔簡勁實に支那先秦文學の精華であり諸子百家の白眉である本書は其最も人口に膾炙せる二柄・説難・孤憤・説林・五蠹・顯學等の名篇雜章二十有五篇を選拔しこれを篇旨・訓讀・語釋・通釋・評釋の五段に分ち每節詳密叮嚀に著者が其蘊蓄を傾注して韓非子の精髓を闡明したるものである。東洋古代思想の研究家は勿論文檢受驗者並に高等學校各種專門學校漢文科の參考書として必讀缺くべからざる唯一無二の好著である。

哲學の一斑 基礎概念講義 市川一郎譯 五圓八拾錢 送料廿七錢

高尚なる理論を平易に講義せる 哲學概論 市川一郎譯 四圓八拾錢 送料廿七錢

哲學教科書 稻毛金七著 參圓八拾錢 送料十八錢

最新哲學辭典 渡部政盛著 五圓八拾錢 送料廿七錢

カント研究 大關增次郎 七圓八拾錢 送料卅六錢

改訂增補 オイケンの哲學 稻毛詛風著 壹圓六拾錢 送料十二錢

社會道德論 一條忠衞著 參圓五拾錢 送料十八錢

體育原論 島田正藏著 參圓八拾錢 送料十八錢

◇岡部精一・高橋與惣共著◇

（名は文檢を冠すと雖も何人にも有益の良書です）

好評 拾貳版

文部省檢定 受驗用

大日本歷史

菊判最上製美本 全壹册壹千百餘頁

正價金七圓五拾錢 送料卅六錢

本書内容は國史の本幹を形成せる事實を精細に通説し又古今史學家の發表せる新説の穩健なるものは努めて之を採錄せり文檢準備としては第一回より最近までの問題を盡く解答して一々精密に各章末に添附せり加ふるに著者多年の經驗と研究とを以て些の遺漏なきを期したれば本書は實に繁簡適宜あらゆる重要史實を網羅して餘蘊なき最も完備せる國史參考書たると共に更に斯學隨一の羅針盤たるべき良書である。

東京市神田區表神保町七番地 大同館發行 振替貯金口座東京八七貳番

近代文明の指導者
大隈侯の傳記成る!!

□全四册　本文三册
□　風雲偉觀（書簡集）一册

菊判背皮クロース堅牢美本　二千七百頁　挿繪約三十枚
四六倍判鮮明コロタイプ　百二十七枚　極上大和綴

大隈侯八十

偉人の再現!!!　世界的巨人大隈重信侯の復活!!!

それは我等に取つて大なる力だ。見よ！今や史傳文學の大作「大隈侯八十五年史」成つて雄姿堂々太陽の如く現はる。二千七百頁の大册に於て近世現代日本史そのもの、觀ある侯の面目を縦横描寫して紙上侯の聲を聞くの感がある。本書は苦心五年あらゆる史料の蒐集に努力してそれらを組織的に取*

*纏め且武富、犬養、高田、尾崎、矢野、久米、市島、中野、箕浦の諸氏及び令嗣信常侯の校閲監修の下に、史傳文學の第一人者高須芳次郎氏主として執筆に當り、改稿十回增補修正數十回、空前の大努力大奮發に依て完成せられた。

新年號豫告

見よ！此
評判の三

來る新年號から是非本誌を

此の一誌！

辯を練り修養を助け、潑剌たる意氣を養ひ必ず諸君の成功出世の指針となる

辯論、修養、美談、逸話、政治、社會記事を始め小說、講談、漫畫、漫文等記事豐富、内容の充實は本誌のみの特長！

◎一國一人巨人は斯く世界に豪語す

何人も見よ、此の熱烈の辯、之を讀んで誰か感奮興起せざるものがあらうか？ 又と得難い讀物

◎現代一流實業家政治家の尊い體驗談

濱口内相の雄辯苦心談、澁澤榮一翁の得難い修養談を始め苦學成功、海外奮鬪等眞に驚くべき活記事！

◎ムッソリニの處女演說（世界的名演說）

聞け！ 世界の傑物、黑シャツ黨の首領ムッソリニが熱火の大獅子吼………永井柳太郎

◎時事問題批判（舌端火花を散す如き熱烈深刻なる新人名家の論）

快味津々、その辛辣の辯舌に、現代時事問題を縱橫無盡、眞に快刀亂麻を斷つが如き明快な批判！

雄辯

大附錄の内容

第一附錄

我が國運を支配する十大問題

國民よ！ 之を讀んで我が國狀の如何に憂ふべきかを知れ！

愛國者必讀記事

慶應大學長林毅陸博士、經濟學泰斗太田正孝博士、帆足理一郎氏其他各方面專門大家國を憂ふる大熱論！

第二附錄

職業の選び方並に成功實際談

世に出でんとする者、失職に惱む者の必讀記事五十頁に亙つて掲載

政治經濟法律醫學文學技術其他新聞雜誌記者等凡ゆる職業の選擇法及び各方面一流名士の成功秘訣談！

第三附錄

千古に輝く名談判名裁判

奇略よく人を助け國家の危機を救ふ

江戸城明渡しを始め小村ウイッテ機略の應酬大石良雄十八ヶ條の申開き等、胸もすく快讀物十一篇！

◎此外五百二十八頁 悉く又と得難い活記事揃！

◎名作揃ひ「小說讀物」

○戀愛小說……沖野岩三郎

○新小說……佐々木味津三

○新講談……白柳秀湖

○探偵小說……正木不如丘

○滑稽小說……佐々木邦

○武勇講談……今東光

◎此外映畫小說、校風奇談等面白き讀物多數。

本號定價 一圓二十錢（送料四錢）

東京市本郷駒込坂下町

大日本雄辯會（振替東京三九三〇）

河田嗣郎著

社會問題綱要

定價金參圓拾錢
送料金貳拾三錢

最新刊

社會問題の口にさるゝ今日より甚だしきはない。而かも社會問題の何物たるかを確と把捉せず、好加減な臆測と間に合せの斷片的智識によるを以て、盲者象を論ずの嗤笑を招く「識者」が多い。本書は社會問題に造詣深く且つ其立脚點の中正公平を以て知らるゝ博士が社會問題の發生、現勢、將來に就き正確と平易に且つ詳細に記述されたもので「社會問題とは何ぞや」の問に對し最も適確なる解答を與へ得るものは本書を措いて他にない。

發行所　東京市芝區愛宕下町　振替東京八四〇二　改造社

編輯
岡本綺堂　中村吉藏
菊池寛　山本有三
仲木貞一

菊判大本全二十卷

第三版
豫約募集

現代戲曲全集

現代戲曲全集は明治大正の四半世紀に亘る我が劇壇の巨匠大家が、心血を注いだ全劇文學の精粹であり、眞隨である。言ふまでもなく、其の内容と技巧に於て泰西の名戲曲に拮抗して敢て遜色なく、殊に我が國土に生え拔きの生一本の純眞無垢なる國民的意志の體現であり、情感の發露である、雄篇傑作を網羅したる所に最大の價値がある。

(1) 坪内逍遙
(2) 岡本綺堂
(3) 松居松翁　高安月郊　山崎紫紅　伊原青々園　岡鬼太郎
(4) 中村吉藏
(5) 菊池寛
(6) 谷崎潤一郎
(7) 武者小路實篤
(8) 倉田百三　長與善郎　吉井勇
(9) 里見弴
(10) 長田秀雄
(11) 木下杢太郎　小内山薫　久保田万太郎
(12) 久米正雄
(13) 山本有三
(14) 秋田雨雀　仲木貞一　藤井眞澄
(15) 灰野庄平　島村民藏　關口次郎　近藤經一　小寺融吉　田島淳
(16) 池田大伍　額田六福　岡榮一郎　金子洋文　正宗白鳥
(17) 眞山青果　瀬戸英一　清見陸郎　邦枝完二　川村花菱
(18) 坪内逍遙　岡村柿紅　右田寅彦
(19) 山崎紫紅　岡鬼太郎
(20) 生田葵　長谷川時雨　坪内士行　中内蝶二　佐竹守一郎
楳茂都陸平　久松一聲　勝本清一郎　郡虎彦　鈴木泉三郎　森鷗外　島村抱月　岩野泡鳴

△内容見本申越次第進呈
△豫約申込十二月廿三日限

規略
▲申込金金五圓▲毎ヶ月拂込金四圓貳拾錢▲一時拂金八拾四圓十ヶ月前金拂四拾參圓▲外に送本料を要す▲送本大正十六年二月より毎月一冊宛

體裁
▲菊版天金▲總布製極美本▲全部九ポイント組▲紙數五百五十餘頁

東京市麴町區内幸町一丁目
電話銀座七八三・二一八八
三六八六
振替東京五二三九八

國民圖書株式會社

末弘嚴太郎著

勞働法研究

四六判上製
定價參圓
送料廿四錢

新刊

勞働と資本の對立鬪爭は現代社會の避くべからざる事實で、兩者の交戰地折衝地並に緩衝地は即ち勞働法である。資本家はこゝに其の既得權を守し、勞働者はこゝに彼等の生存權を獲得する。深遠なる法學の立場より活問題を把えて平易に解說し、資本家を警しめ勞働者を勵ましつゝある博士の此の新著は資本家勞働者は勿論、立法に干はる選良、司法行政に干はる當局者、社會問題を研究する學者學生に甚大なる敎訓を與へるであらう。

末弘博士の勞働法講坐は我國にて始めての試みで、そして尤も完璧せる講坐と稱されている。今本書を繙くものは坐ながらにして博士の新講義を聞くの思ゐがある。

內容＝一勞働組合法論二根本的に改惡されたる勞働組合法案三「勞働組合取締法案」を評す四佛國新職業組合法五勞働協約と法律六佛國勞働協約法七就業規則の法律的研究八勞働爭議調停法解說九公益企業と同盟罷業

發行所　東京市芝區愛宕下町　振替東京八四〇二番　改造社

有島武郎遺著（新刊）

愛する人々へ

定價參圓
送料二十四錢

「涙になりたがる僕の弱さよ」の自評は適中するか

◇彼は自分自身を評して「涙になりたがる僕の弱さよ」とつくづく述懐している◇彼はかく弱くはあつた、しかし兄弟、妻子に涙で一生涯懐しまれた◇彼の情愛の濃かさよ！病妻に月毎に送るこの短章を讀んで誰か涙を催さざる◇或る人から觀ればそれは余りに歯がゆい程の仲好しであつた。女のやうな情愛の持主ではあつた◇だが・彼は生涯を通じて「妥協」と云ふことを尤も忌んだ◇悪い藝術、疎悪な藝術を忌むこと蛇蝎を見るが如くであつた◇そして未來の藝術は少數專門家の手より離るると斷言した◇父と母と兄弟とには自分の志を尤もよく打明けた◇彼の父は常に松方老侯の財政論を執筆した當時の能文家であり、彼の母は社交以外藝術―和歌―に堪能の賢母であつた◇恵まれた環境にあつたのびのびした彼が全心、全力をその父母に傾けつつそして何が故に山荘の露と消えた◇この一書その謎を解く。

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

廣津和郎著

（四六判上製）

定價壹圓六拾錢
送料十八錢

秋の一夜

最新刊

廣津氏の作品はどれも秋空のやうに澄明で、明快で、そして實に深い。胸に滲みいるやうな豐潤な美感と、チエホフのやうな溫い人生觀。それが、見事に綾をなして、この絶品「秋の一夜」、「獵犬」外六篇を得た。誠に氏によつてのみ見らるる氣品と魄力と名人的牙とを兼ね備へた尊敬すべき短篇集である。吾々は一讀再讀して尙味ひ深き作品に溢れて居る。今や氏によつてものされた新しき靈と淸新なる美感の融合化に吾々は夢と現實の美しき一致を見、更に生命の寂と藝術の深さを知り自ら高雅なる美の世界に飛翔し得るであらう。

東京芝愛宕下町
振替東京八四〇二

改造社

電話銀座四五五八



所謂學生事件に關する理論的考察

佐々木惣一

本稿は、去る十月九日、京都帝國大學々友會講演部が、所謂學生事件に關する學內諸教官の意見を學內の人々に紹介するが爲に學內で講演會を開いた際、私が、意見の發表を求められた者の一人として、試みた所の講演の筆記を補正したものである。私は、當時、學生をして、所謂學生事件を理論的に理解せしめ、又、之に關連して、一般に學問を研究するに當て持つべき用意を定めしめることを、適當と考へて居た折であつたから、專ら學生の參考に供するが爲に卑見を述べたのである。從て、私は、當初、此の講演の內容を公にするの意志を持つて居なかつた。然るに、其の後私の講演に關して起つた或事情に由り、私は之を公にするの必要を感ずるに至つたのである。私は、他の機會に於て既に述べた通り、今回の事件を起した學生を有する學校の一に關係して居る者として、社會に向つて、今回の事件が社會を騷がしたことを謝するのである。併し、それと同時に、一の學究として、今回の事件を理論的に考察することを怠つてはならないと思ふのである。

第一　理論的考察の必要

目下學生事件といふ名を以て世間に傳はつて居る一の事件があることは、何人も知て居る。然しながら、其の事件が如何なる事實であるかといふこと、及び其の事實が如何なる意味を持つものであるかといふことは、世間の多數の人の間では、正當には理解せられて居ないであらう、と思はれる。それは無理もないことであつて、其の主たる理由として考へられるものが二つある。其の一は、此の事件の勃發以來、事件の報道が唯斷片的に行はれて全般的に行はれて居ない、といふことである。其の二は、此の事件が人の思想と關係して居る、といふことである。各人はそれ〴〵一定の傾向の思想を持つて居て且それを維持しやうとするものであるから、自分と反對の傾向の思想を背景とする行動を見ると、或は始めから之を憎み、或は憎まずとも之を理解しやうとしないことが多い。これは敢て他人を責める意味で云ふのではなく、私自身も矢張さうであると思ふて、其の弊に陥らないやうに努力して居るのである。兎も角も、前に述べたやうな理由があつて、所謂學生事件なるものが正當に理解せられて居ないといふことは、實際であると思ふ。そこで、今後何時になつたら、此の事件が正當に理解せられるやうになるであらうか、と考へて見ると、之を自然に放任して置いたならば、恐らく其の時期は到底來ないであらうと思ふのである。何故かといふに、第一には、此の事件は、從來の實際から察すると、今後とても、徹底的に世間に公示せられた姿で、取扱はれる折はあるまい、と思はれる。やがて行はれる筈になつて居る裁判も、多分、傍聽禁止になりはしないかと思ふ。傍聽禁止の下に於て行はれた訴訟の辯論は、新聞雜誌に於て公表し得ないのであり、縱令差支ない範圍に於て公表せられたとするも、それは斷片的の報道たるに止まるの外はない。全般的に事の眞相が世間に知れるといふことは到底期し難い。從て、自然に放任して置いたならば、今後此の事件が正當に理解せられることはむづかしい、と思ふ。第二には、此の事件の背景となつて居る思想の性質から、此の事件が冷靜に批判せられ難い狀態に置かれて居るのである。今回の事件は不敬罪、國憲紊亂文書出版罪、治

安維持法違反罪といふやうな重大な犯罪に關係して居るから、多くの人は、かゝる犯罪に關係して居るといふこと其のことで十分であるとし、果して如何なる狀況で之に關係して居るかを考へやうとしないらしい。之を考へる者があつても、今日の事情では、之を批判することを、何となく憚らねばならないやうな羽目に在る、やうにも思はれる。かゝる理由から、自然に放任して置くならば、今後とても、此の事件が正當に理解せられることはむづかしいと思ふ。然らば、吾々は此の事件を正當に理解しないで放任して居て宜いものであらうか。問題はこゝに移るのであるか、私の考に依れば、かゝる事件こそ、正當に理解せられなければならぬ必要を、他の普通の事件に比して一層多く、持つて居るのである。之を正當に理解しないで置くならば、社會に、暗雲低迷して居るやうな氣もちを、與へると思ふ。それは、獨り、此の事件に關係ある思想と同一の思想を持つ人々に取てさうであるのみでなく、それと反對の思想を持つ人々に取てもさうである。而して此の事件を正當に理解しやうとするには、此の事件を理論的に考察しなければならない。單に、興味を持つて他人を噂するといふやうな態度で、此の事件を取扱ふてはならない。かゝる問題を冷靜に取扱ふことを、何となく、憚らなければならないやうな空氣のある我社會に於ては、私は、特に、かゝる事件を理論的に考察するの必要を思ふのである。それは、考察の結果として生ずる判斷の如何なるものであるかといふこととは、關係ないとであつて、理論的に考察するといふ態度其のものゝ必要といふことである。而して、今日我社會に於て、比較的冷靜にかゝる問題を考察し得るものがあるとするならば、學界は少くとも其の中に加へられなければならない。それ故に、かゝる事件を理論的に考察することは學界の任務である。其の事件が學界自身に關係して居るといふことは、少しも右の學界の任務を免除する理由となるものではない。加之此の事件は學界に關係して起つたのであるけれども、本來、獨り學界のみに關係ある事件ではないのであつて、一般社會に重大の關係を持つて居る事件であるのである。併し、私

は、玆に、一般社會の取るべき態度を考へて見やうとするのではなく、學界殊に學生が取るべき態度を考へて見やうとするのである。要するに、私は、所謂學生事件を正當に理解するが爲に、理論的の考察を爲すことを必要とするものであつて、玆に私自らも聊か之を試み、更に學界殊に學生が、其の研究に於て、如何なる態度を取るべきかといふことに就て、卑見を述べて、學界殊に學生の參考に供したいのである。

所謂學生事件なるものは、法律問題を基礎として發展して居るのである。社會思想の研究に從事して居る所の學生の或行動が、或は私有財産制度の否認を實行するものとして治安維持法に觸れ、或は國憲紊亂文書を頒布するものとして出版法に觸れ、或は不敬行爲として刑法に觸れたといふのである。一定の傾向の思想に關係して或行動を爲したことが此等の處罰法に觸れた、といふのである。それ故に、此の事件に就ては、適用せられた處罰法が、果して、今回の學生の行動に適用せらるべきものであるかといふ問題と、一定の思想に關係して爲さるゝ行動の限界といふ問題とを、考へねばならない。前者は全く法律の解釋の問題である。而して、それが、此の事件の理論的考察に於て、根本の前提となるべきものであるから、本稿は、先づ、此の事件を法律問題として取扱ふことから、着手しなければならない。然るに、此の如く學生の行動其のものを法律問題として考察するに先つて、別に法律問題として考察しなければならないことがある。それは學生の檢擧の手續である。それはそれ自身一の重大なる法律問題である。それは、學生の行動に處罰法を適用することが正當であるか否かといふことゝは關係なく、それ自身獨立した法律問題であつて、而も甚だ重大なことであるから、先づ以て此の問題を明かにして置かねばならない。

第一　檢擧の手續の違法

當初官憲が學生に就て犯罪を搜査するや、彼の行政上の檢束の手段を用ゐたのである。或場合に行政上の檢束を行ふことは行政執行法に依て認められて居るのであるが、併し之を行ひ得る場合は限定せられて居る。玆には行政上の檢束を行ひ得る場合其のものを詳に論ずるの必要はない。要するに、行政上の檢束は犯罪の搜査の手段として行ふべきものでない、といふことを明にして置けばよい。翻て犯罪搜査の手續は如何にすべきものであるかといふに、それは即ち司法警察の作用であつて、刑事訴訟法が嚴重に規定して居るのである。加之、特に司法警察機關に向て司法警察職務規範といふ訓令が下されてあつて、犯罪を搜査するに當ては、法令の規定以外にも此の規範に遵由すべきことを命じて居るほどである。これは畢竟國家が犯罪搜査の手續を愼重ならしめやうとする趣旨であるが、國家が犯罪搜査の手續を愼重ならしめやうとするのは、重大な理由のあることである。犯罪の搜査の手續に於ては國民の自由が侵害せられる。或は身體の自由、或は財產の自由、或は住居の自由、場合に依ては信書の自由までも、侵害せられる。此の如き自由は、吾々が現在の社會に於て生活を營むに必要缺くべからざる根本的の條件である。それ故に國家は其の安全を保障して居るのである。實は此の如き自由を保障するといふことが國家の任務の一つであるのである。之を保障して居ると云ふても、勿論絶對的に之を侵害してはならないと云ふのではない。固より國家は必要に應じて之を侵害し得るのであるけれども、之を侵害しやうとするならば、必ず國法の定むる所の手續に依らなければならないのである。これは我憲法の根本精神である。それ故に、此の根本精神を蹂躙して顧みないならば、實は、それこそ、精神的には、國憲を破壞することである。かゝる自由尊重の精神は、犯罪の搜査の手續に就ても、固より同樣に守られなければならない。自由の侵害が、犯罪の搜査の手段として行はれる場合であるからといふて、國法の定むる手續を無視してよいと考へるならば、それは憲法の根本精神に反するものである。且犯罪搜査の手續に於て行はれる所の自由の侵害は、其の苦痛の實質に於

ては、刑罰に依て加へられる所の自由の侵害と、少しも異ならないのである。それ故に、法に依らずして犯罪を捜査するといふことは、法に依らずして刑罰を科すると、實質に於ては同樣である。其の違法が犯罪の搜査の手續に關するものであるといふ、その手續といふ言葉に誤られ、之を屆出などの手續と同一に考へて、輕視するが如きは、實に、憲法の根本精神に悖るものと云はなければならない。其の手續と云ふのは、吾々の生活の根本條件たる自由といふものを侵害するのには、法の根據がなくてはならない、といふ憲法の精神を實現する所以の手續、といふことである。單に形式的な、內容のない手續ではないのであつて、實質的な、內容を持つた手續である。遺憾なことには、右の手續の尊重といふの意味が、まだ、世間一般には能く知られて居ないやうである。此のことは今回の學生事件に關聯して推察出來たところであるが、大に殘念なことである。そこで、今回の學生事件に於て、當初官憲は、右に述べた所の、國法所定の司法警察の手續に依らないで、行政上の檢束の手段を用ゐたのである。即ち、國法が犯罪檢査に付て要求する手續を無視して、國民の自由の侵害を行つたのである。之を、たゞ手續の違法といふことで輕視することは、今日の立憲國が尊重して居る人格を、自ら侮辱することである。それは、人格といふものを單に物質上の利害關係にのみ結び付けて考へ、物質上の利害に關係のない所に人格の問題を生じない、とすることである。憲法は、法に依らなければ、國民の自由を侵害しないとすること其のことに、人格を尊重するの意味を置て居るのであつて、物質上の利害關係の有無に依て人格を尊重すると否とを定めるのではない。これが我憲法の認めて居る所の、人格に關する吾々の根本要求である。國家機關の行動が此の、憲法に依て認められた、吾々の根本要求を顧みないで差支ないとするならば、國家が國民に向て憲法尊重を要求することがどうして出來るであらうか。然れば、當時京都帝國大學法學部教授一同が——私も其の末班に加はつて居たのである——意見書を公にして、右の點を明にしたのは、至當のことである。其の意見書は、犯罪搜査の手

續が違法であること、及び其の違法といふことが重大なる意味のものであるといふことを論じたのであつた。法學部教授一同の意見書に對する世上識者の判斷は、前述の點に關する限りに於ては、これを諒とするもの丶やうに察せられたので、教授一同は其の點に就ては、それで默してしまつた。尤も、當時、官憲の一部では、右の意見書に對して、顧みて他を言ふが如き辯明を試みた向もあつたのであるけれども、併し、教授一同は始めより事の衝に當つて居る個人を眼中に置いてそれを責めやうとしたのではなく、單に理論を主張したのであるから、理論に觸れないで顧みて他を言ふが如き辯明を聞ても、固よりそれを顧みなかつたのである。以上は學生檢擧手續の違法なる所以を明にしたのであるが、注意したいのは、此の問題が、學生の行動が犯罪となるや否やといふ問題と、全く關係がない、といふことである。それが犯罪を構成するや否やは、學理として何人も判斷して差支ないことであるが、有權的には、裁判機關の決定する所に從て取扱ふの外はない。故に、學理上の判斷は自由であるけれども、實際上の取扱は當該官憲の取扱に一任するの外はない。唯茲に、一つ、京都帝國大學關係者として遺憾なことがある。前述教授一同の意見書は、幸にして、公平なる新聞紙に掲載せられたのであるが、併し京都帝國大學自身の關係する京都帝國大學新聞に登載することが出來なかつたのである。それは、當時、官憲に依て、掲載禁止の事項に含まれるものと取扱はれたからである。右のやうな、全く抽象的な理論を述べた意見の掲載を禁止するの必要は、當時に於ても、考へられなかつたのであるけれども、兎に角掲載することが出來なくなり、其の結果、此の事件に付て後日最も有權的なる記錄たるべき京都帝國大學新聞には、右の意見書を登載するの時期を失してしまつた。

　そも〳〵、國家が犯罪を捜査するが爲に、國民の自由を侵害するのは、實力を使用することである。今日の法制の下に於ては、實力を使用し得るのは法に認められた場合に限る。それは、單に國民のみに對する制限であるのではなく、

國家と雖同じく此の制限を受けて居る。法の認めざる場合に實力を使用するとき、其の實力は暴力となる。實力が暴力であると否とは、それが法の認めざる場合に使用せられると否とに依て定まる。實力を使用する者の何人たるかに依て定まるのではない。それ故に、國家が法の認めざる場合に實力を使用するならば、國家が暴力を使用するのである。實力は、それが國家に依て使用せられる限り暴力とならない、といふが如く考へてはならない。凡そ暴力の使用は社會生活を破壞するものであつて、許されない。元來暴力の使用が許されないといふことは、暴力そのものと社會生活との關係から觀て主張せられ得ることであつて、之を使用する者の如何に依て異なるべきものではない。それ故に、國家と雖、法の認めざる場合に、實力を使用することは許されないのである。國家が法の認めざる場合に實力を使用するならば、それは國家自らが社會生活を破壞するものである。國家が國民の暴力の使用を禁止するのは當然のことであるが、自らも暴力を使用せざることに注意しなければならない。それには、先づ、國家に依る實力の使用であつても、法の認めざるものは、暴力であると、いふ、前述の理論を忘れてはならないのである。然るに、今日我國に於ては、國家の暴力といふ觀念が明白でなく、從て國家機關たる人々が、法の認めざる場合でも、平然として、國家の名に於て、實力を使用することが、少くない。これは慨くべきことである。併し、私は、之が爲に、國家の機關として直接其の衝に當る人々を責めることは出來ない。責むべきは、かゝることを認めるといふ方針を取て居る所の、且場合に依てはかゝることを賞賛するらしく思はれる所の、政府の態度である。而も、それは、單に現政府の態度といふのでもなく、一般に我國の政府といふものゝ態度であるかのやうに、察せられる。即ち、我國の官界に、一般に右のやうな空氣が出來上つて居るのではあるまいかと思ふ。それ故に、私は、別に、何人を責めるといふのではなく、我國朝野の人士が、一般に、國家の暴力といふ觀念を明かにして、國家と雖、法の認めざる場合に實力を使用することは、許されない、といふ思想を確

立することを切望するのである。

第三　學生の行動と法律問題

學生の行動が、果して、目下擬せられて居る所の處罰法に觸れるか否かは、極めて冷靜に判斷しなければならない。其の判斷は唯法の意味を明かにすることに關するのであつて、決して學生の思想に贊成するとか反對するとかの問題ではない。法を極めて冷靜に解釋せねばならないのである。然るに、始めにも述べた通り、學生の行動は、全般的には、世間に知られて居ないのであり、又、豫審の決定の內容が報道せられたけれども、それは官憲の公式の發表であつたのではないから、到底之にのみ依ることは出來ない。よし、他の方法で其の內容を知り得たとしても、それを公にすることは德義上出來ない。それ故に、學生の行動其のものとして、動かない事實といふものを示して置て、之を前提として、之に對する法の適用如何を考へるといふことは到底出來ないのである。唯問題となつた法の學理的の解釋を試みて、之に依て、如何なる行動が法に觸れるかを、抽象的に考へるの外はない。なほ、茲にことわつて置きたいことがある。學生の事件を法の上から觀察するに當ても、私の研究事項及び之に關係ある事項の範圍の外に在る問題もあるのであつて、之に就ては、勿論、私は學問的に論斷し得ないのであるから、此の如きものに就ては、單に論點のみを明かにして置く。論斷は更に其の方面の學者の教を待つの外はないのである。

一　不敬罪に就て

不敬罪と云ふに就て考へて見やう。學生が、數年前某高等學校在學中某地方に旅行したとき、日誌に或感想を書い

た。又同年其の學校の天長節祝賀式に參列した日、日誌に或感想を書いた。それが、今回犯罪捜査の手續として行はれた捜索に際して、發見せられた。其の學生が刑法第七十四條に定むる所の不敬罪を犯したものとして起訴せられ、又、豫審に依て公判に附せられたのである。其の學生が日誌に書いた感想といふの内容は玆に示すことを遠慮しなければならない。唯、一般的に、刑法の解釋の問題として、次のことが論點となる。

刑法第七十四條は、第一項に「天皇、太皇太后、皇太后、皇后、皇太子又ハ皇太孫ニ對シ不敬ノ行爲アリタル者ハ三月以上五年以下ノ懲役ニ處ス」と規定し、第二項に「神宮又ハ皇陵ニ對シ不敬ノ行爲アリタル者亦同シ」と規定してある。これは固より必要缺くべからざる規定である。唯日誌に何等かの感想を書いて、且それを他人に示すの意思を有するのでもなく筐底に藏めて居たのを、何かの機會に、他人に發見せられたといふやうな場合も、不敬の行爲ありたる場合といふに含まれるのであるか、どうか。これは學理的に解釋をする必要のある點であると思ふ。勿論、今私は、それが含まれぬといふのでもなく、含まれるといふのでもない。其の論斷は私自身の研究として與へ得ない所である。其の方面の學者の教示に依るの外はない。之に關連して一言して置きたい。右の場合に、假りに其の方面の專門學者の研究に依て、それが刑法に所謂不敬の行爲には屬しないと解釋せられるやうなことがあるとしても、之が爲に、國民の態度は、刑法に所謂不敬の行爲といふことにならなければ、それで差支ないと云ふことは、勿論出來ない。國民は、固より、皇室の尊嚴を傷けるやうな態度を取つてはならない。それが刑法の所謂不敬の行爲であると否とには關係ない。唯法の規定は冷靜に解釋せねばならないものであるから、如何なる態度が、刑法の規定する所の、不敬の行爲といふのであるか、といふことを、學理的に説明することは、許されねばならない。

二　國憲紊亂文書出版罪に就て

國憲紊亂文書出版罪といふに就て考へて見やう。新聞紙の報道に依れば、學生が種々の文書を印刷して之を一定の範圍の人に配付した。それが出版法第二十六條定むる所の、政體を變壞し國憲を紊亂せむとする文書を出版するの罪を犯したものとして起訴せられ、又豫審に依て公判に附せられたのである。之に就ても其の事實を玆に詳述することは出來ないから、矢張法の規定を解釋して其の論點を明にして見やうと思ふ。

第一、それが出版であるか。これが第一の論點である。出版といふことの概念は出版法が明に示して居るのであつて、之に依れば、苟くも文書を印刷して頒布することが出版である。そこで文書の印刷と其の頒布とがあるならば、それは出版となる。

一、文書の印刷とは、手寫に依らざる限り、あらゆる方法を以てする複製を包含するものである。それ故に、例ば學生が、文書を、活版に依らないで謄寫版や鐵筆版などで、複製したやうな場合でも、それは矢張印刷である。從て、それを頒布するならば、出版である。活版でないから印刷でなく從て出版でない、といふやうなことは、主張することは出來ない。

二、印刷したる文書を頒布するといふのは如何なることであるか。それが文書を多數人の閲覽し得る狀態に置く場合のことであることは、疑ないけれども、其の多數人が不特定の多數人たるを要するか、又は特定の多數人であつてもよいか。換言すれば、印刷した文書を配布したことが問題となるとき、それが不特定の多數人に配布せられた場合のみが出版であるのかどうか。議論がある。（一）我國では、どちらかと云へば、不特定の多數人に配布する場合のみを頒布

とし從て出版とするといふ見解の方が多いと思はれる。大審院の判例も亦曾て同樣の見解を明示して、「頒布ハ不定多衆ニ對シ出版物ヲ配布スル行爲ヲ指稱ス」るものと言ふた（大正五年九月二十二日宣告大審院判決參照）。此の見解に依ると、例ば文書を一の團體員にのみ配布することは勿論、文書を特に指定した人のみに配布することは、頒布でなく從て出版でなくなる。世上の名士大家と云はれる人が、種々の機會に、或問題に關する意見書を各方面の人に郵送することは、今日實際に履行はれて居る。それは出版法所定の手續に依らないで行はれて居る。それは、特定の人に配布するのであるから、頒布でなく從て出版でないと、解して居るのである。かゝる見解及び實際に從ふならば、一の會を組織して居る多數の學生が文書を印刷して會員間に配布することや、特に指定した人に配布することは、前述の諸例と同樣に、頒布でなく從て出版でないと云はざるを得ないであらう。故に、其の文書の內容の如何に拘らず、出版法違反とはならないであらう。今回の學生事件に於ても、若し學生が、其の研究團體內に配布し、又研究團體外の特に指定した人に配布したのであると、假定するならば、前述の見解及び實際に依れば、頒布でなく從て出版でないといふ結論に到着せざるを得ない。それ故に、今回、官憲が出版法違反を以て學生事件に擬したのは、官憲が、前示大審院判例の見解に反して、不定多衆の人に配布することのみを頒布とするといふの立場に立たなかつたのであるか、又は、學生の方が、新聞に傳へられて居るのとは異なつて、不定多衆の人に文書を配布したのであるか、いづれかであると云はざるを得なくなる。（二）以上は今日多分多數の見解と思はれるもの及び大審院が曾て明に示した見解を述べたのであるが、私自身の解釋では、右の見解は誤である。頒布といふのは多數人の閱覽し得る狀態に置くことをいふのであつて、其の多數人の不特定たると特定たるとを問ふものではない。これは、出版法が、思想が、有形的の手段に依て、一般的に傳播せられる、ことに就て取締を爲すものであるといふ趣旨から、さう考へられるのである。さうでないとするならば、例ば或

書物の配布會を作つて其の會員のみに書物を配布することや、又、例ば議員某々や、學者某々、教育家某々といふ特定の人を指定して、之に或書物を郵送することは、出版とならなくなるであらう。これは出版法の趣旨ではない。それ故に、特定の多數人を限て之のみに文書を配布するのも、矢張頒布であつて從て出版である。併し玆に一つそれに似て非なるものがある。それは、私が、平生大學の講義に於て、信任關係に在る者の間の配布といふて居る所のものである。之を信任關係に於ける配布と云ふて置く。或は信任的通達と云ふ人もある。信任關係に於ける配布が如何なるものであるかは後に述べるが、兎に角それは單に特定の人への配布といふのとは異なるものであつて、出版法に所謂頒布ではなく從て出版でないのである。

　信任關係に於ける配布とは如何なることを云ふのであるか。學者の說明は一致しないが、要するに、或人々は信任關係に在るのであつて、其の關係に在る人々の間に於て行はれる文書の配布は出版法に所謂頒布とならず從て出版とならないのである。唯其の信任關係に在るといふことが如何にして定まるか。これが問題である。次のやうな考へ方がある。(一) 親族關係、同僚關係、友誼關係、事務關係等に依て結合せられて居る所の、公開せられない範圍の人々に印刷物を交付することが、信任關係に於ける配布である、といふ考もある。(二) 一人が他人に印刷物を交付し、其の場合に、其の他人が其の印刷物を更に傳播しないといふ條件があり、又其の交付者が其の他人に依て更に傳播せられないといふことを意識して居るならば、其の交付は信任關係に於ける配布である、といふ考もある。(三) 相互的の又個人的の關係であつて、確實なる親交を成立せしめる關係に在る人々に印刷物を交付することが、信任關係に於ける配布である、といふ考もある。(一) の見解に依れば、例ば或書物を親族間、友人間、同僚間に配布するが如きことは出版でなくなる。これは、單に特定の人に配布するといふのとは、異なるけれども、殆ど之に近いものである。(二) の見解

に依れば、例ば甲が乙に或書物を交付し、乙に向て、之を更に他人に交付することを禁じ、且乙は之を更に他人に交付しないであらうと思ふならば、それが出版でなくなる。（三）の見解は（一）の見解と略同じいが、併し之に依れば、例ば單に同僚間に或書物を配布することは信任關係に於ける配布ではないが、親族間に配布するのは信任關係に於ける配布である。此等の種々の見解の存することは、右の如く、範圍の大小はあるけれども、或範圍に於ける配布を以て出版法の頒布とせず從て出版としないといふことを、社會生活上、要求するの思想があることを、意味するものと思ふ。

例ば私が屢大學の講義に於て引例とする所であるが、大學其の他の學校に於て教授が講義案を印刷して學生に配布するが如き、議會や官公署に於て議案や事務上の文書及び參考資料を印刷して配布するが如き場合に、一々出版法所定の手續を取らねばならないといふことは、不條理である。且今日實際に於ても、此等のことは出版法所定の手續を取らないで行はれて居る。これは、條理上、印刷物を何等かの範圍に配布すること──其の範圍が如何なるものであるかは、玆に研究しつゝあることであるが──が、出版でないといふことが、要求せられ、それが、世間に、無意識に又漠然たる意識を以て、行はれて居るのである。唯其の範圍を明にして居ないのである。そこで其の範圍を明にすることが、學理的に法を解釋することの任務である。其の結果信任關係の理論が出るのである。右に示した所の、學校に於ける講義案の配布や、議會官公署に於ける議案、事務上の文書、參考資料の配布は、前に述べた所の、信任關係に關する諸說の何れかに從て、信任關係に於ける配布となるものであつて、從て出版ではない。故に、大體から云へば、以上の諸說は適當であるけれども、併し、私の考に依れば、なほ一層正確に考へるの必要がある。例ば教授が學校に於て、其の學生のみに、自己の講義案でない所の、或書物を配布するが如き場合は、どうであるか。これは講義案の配布と似て非なる場合である。問題を明瞭にするの便宜上、玆に再び兩者を並べて見やう。第一の場合は、學校に於て教授が學生に

講義案を印刷して配布する場合である。第二の場合は、學校に於て其の學生のみに講義案以外の或書物を配布する場合である。兩者の區別は、第一の場合は信任關係に於ける配布であり第二の場合にはさうでない、といふことに在る。次に之を說明しやう。凡そ人々が、或點に於て、個人的に接觸して一體をなし、其の點に關係して、信任を以て、交涉して居る、と考へられる關係に在るとき、其の人々は其の點に於て信任關係に在るのである。即ち人が親族といふ緣故、友誼、授業、研究といふが如き點で、個人的に接觸して一體をなす場合であつて、其の人々の間には、其の點に關係しては、信任を以て交涉して居ると考へられる。其の一體をなす人々の間に、其の一體をなす所以の其の點に關係して、印刷物を配布することは、出版法の意味に於ては頒布でなく從て出版ではない。それ故に、次の結果を生ずる。(一)印刷物を一定の限られた人にのみ、配布するのであつても、其の人が一體をなす人でなければ、信任關係に於ける配布ではない。それは唯特定の人への配布といふのみである。故に勿論頒布であり從て出版である。前にも示した所の、一名士が其の意見書を、個人的に指定した人々に郵送するが如きは出版である。但今日實際に於ては、之をも出版でないとして取扱て居るのであるから、吾々が日常の實際生活に於て、便宜上此の方法に依るのは勿論差支ないことである。(二) 印刷物を、一體をなす人に配布するのであつても、其の一體をなす人の相互間に於て行はれる配布でなくて、其の一體をなす者以外の者よりの配布であるならば、信任關係に於ける配布ではない。これも唯特定の人への配布といふのみである。故に頒布であり從て出版である。書肆が珍書頒布會を作つて會員にのみ販賣するが如きは勿論、文部大臣が道德に關する自己の著書を特定の學校の學生にのみ寄贈するのも、人が議會の議員のみに、意見書を郵送するのも、皆出版である。唯實際の取扱に於ては、右の中最後の例の如きものは出版とせられて居ないやうであるが、これも、前述(一)の場合と同じく、特定の人への配布を出版でないとする誤解に基くものであらうと思ふ。併し、假りに

此の誤解である見解を許すならば、書肆が一定の範圍の人に書物を販賣するのも、一名士が一定の範圍の人に意見書を寄贈するのも、共に均しく、出版でないとせざるを得ないであらう。然るに、實際に於ては、前者は出版とせられ後者は出版とせられて居ない。即ち、茲には、誤解たる見解を前提としても、取扱上の矛盾があるのである。察するに、これは、一は有償であり他は無償であるから、或感じから、無意識にかゝる差別を生じたのかも知れないが、併し有償と無償とは出版と否とに關係がない。（三）印刷物を、一體をなす人の相互間に於て、配布するのであつても、其の印刷物を配布することが、其の一體をなす所以の點に關係して、行はれるのでなければ、信任關係に於ける配布ではない。これも唯特定の人への配布といふのみである。故に頒布であり從て出版である。教授が講義と關係のない著作や意見書を學生のみに配布するが如き、議會や官公署に於て、議案、事務上の文書、參考資料と關係のない印刷物を議員のみに配布するが如き、皆出版である。實際上かゝる場合があるかどうかは知らないけれども、あるとすれば、其の取扱に於ても勿論出版と取扱はれて居るであらう。

以上述べた所に依れば、信任關係に於ける配布は、單に特定の人への配布といふのとは、大に異るのであつて、兩者は混同し易いけれども之を區別しなければならない。教授が講義案を學生に配布するのは、此等の者の一體を成立せしめる所以である所の點即ち學問の授受に關係して行ふのであり、政府が議員に議案や參考資料を配布するのは、此等の者の一體を成立せしめる所以である所の點即ち立法事務の處理に關係して行ふのであり、官公署に於て署員に事務上の文書や參考資料を配布するのは、此等の者の一體を成立せしめる所以である所の點即ち行政事務の處理に關係して行ふのである。それ故に此等のものは出版とならない。それが出版とならない理由は特定の者への配布であるからではなく、信任關係に於ける配布であるからである。右の外更に例を設けて以上の原則の適用を明にして見やう。教官が、學

校の演習用の爲に演習材料を印刷して、それを演習に參加する學生に配布することは勿論、學者、學生が組織する學會、研究會に於て、之を組織する者自身の意見、他人の意見、事實の報道等を印刷して、研究資料として、之を組織する者に配布するのも、出版とならないのである。且それは、決して、獨り、學問の研究といふ場合にのみ限るものではない。例ば或家族の一人が其の家の沿革、系圖を一般歴史との關係から調査し記述し、之を印刷して家族間に配布するが如きは勿論、其の家の强固なる維持を計るが爲に、家族制度を尊重すべき所以を明にした自己又は他人の意見を印刷して、其の家族間に配布するのも、出版とならない。これは、皆、前に述べた、信任關係に於ける配布が出版でない、といふ原則から生ずる結果である。若し此原則を立てないならば、學校の教官が講義案を印刷して學生に配布することや、學校に於て、外國書講讀の授業又は外國書試驗に際し、其の書物の全部又は一部をプリントにして學生に配布することも――これは實際に於て行はれて居ることである――出版となり、出版法の手續に依らないときは、出版法違法とならざるを得ないであらう。又、今回の學生事件に類する事件が起つて、例ば學生が鐵筆版で印刷して配布した或文書が、出版法に觸れるといふことが問題となつて、官憲や學校に於て、多數の人が、職務上其の內容を知るの必要を生じた爲に、其の問題となつた文書を、鐵筆版で印刷して、此等の職務を有する人に配布することも、出版とならざるを得ないであらう。而して、それが出版法の手續に依らないならば、其のこと自身が又出版法違反とならざるを得なくなる。其の文書がかりに國憲紊亂に問はるべきものであるとするならば、右の場合に職務上參考として其の文書を印刷配布した學校、官憲の人々も亦國憲紊亂の文書を出版したといふ罪に問はれざるを得ないであらう。此の如きことの妥當でないことは明白である。此の如きことは、全く信任關係に於ける配布といふことを注意しない結果、生ずるのである。

今回の學生事件に於て學生が配布した文書の總てが活版に依て居るか鐵筆版に依て居るかは知らないが、鐵筆版に依るものもあると聞いて居る。併しそれは問題とならない。鐵筆版に依て居ても印刷であり、從て、之を頒布するならば、出版である。併しそれを頒布したかどうかゞ問題である。それは、つまり、如何なる人に頒布したかに依て決する問題であるが、それは明瞭でない。唯、新聞紙上に傳へられた所に依れば、主として學生の組織する團體の內部に於て配布し、又少し團體外の特定の人に配布したものゝやうに見える。併し明瞭でないから、私は茲に、今回の事件を離れて、一般的の問題に就て論斷を下して置く。或範圍の學生が――學生に限らない、何人でも同樣である――一の點に於て、個人的に接觸して一體をなして組織する團體內で、其の點に關係して、文書を作製して其の團體を組織する者に之を配布するのであるならば、それは、信任關係に於ける配布であつて、出版とならない。併し其の團體を組織する者以外の者にも配布するならば、もはや信任關係に於ける配布ではなく、從て出版である。其の配布を受けた團體外の者が特に指定せられた人のみであるならば、それは、從來の判例や實際では、出版でないと取扱はれて居るけれども、私の考では、其の取扱は誤であつて、矢張、出版である。特定の人への配布と信任關係に於ける配布とを混同してはならない。

以上は出版法に所謂頒布の意味を示したのである。印刷物を、右の意味で、頒布することが出版である。但直に頒布しなくとも頒布するの目的を以て印刷することは、出版法に依て出版と同樣に取扱はれる。それ故に、或研究會を組織して居る學生が、其の會員の研究資料として會員間に配布した印刷物であつても、本來廣く會員外の者にも配布するの目的を以て印刷せられたもので、其の場合に、それを會員に配布したのであるとするならば、それは出版法に依て取扱はれるの外はない。併し、事實をかくの如きものと觀るのは、多くの場合には、適當でないと思ふ。

右の如く、信任關係に於ける配布が出版とならないと云ふのは、唯、出版とならないと云ふだけである。それは唯出版法に觸れないといふだけである。それが、他の關係に於ても常に、一般に、法に觸れないといふことではない。それが法に觸れることは、勿論、あり得る。併し、それは、其の配布が出版であるとして、出版法の適用に依て問はれるのではなく、配布といふ行爲其のものが觀察せられ、或は個々の配布行爲として、或はかゝる行爲を含む全體行動として、出版法以外の法に適用に依て問はれるのである。信任關係に於ける配布が出版でない、といふ主張を觀て　それが一般に法に觸れないといふ、主張であるかのやうに早合點するならば、それは正確なる法理を解しないものである。

今回の學生事件が、特定の人への配布が出版でないといふ理論を適用すべき場合であるならば——私自身の贊成しない理論であるが、——或は信任關係に於ける配布であるならば、それで出版法上の問題は消滅する。更に進んで、それが如何なる出版犯罪であるかを考へるの必要はない。併し、これは現に起つた事件に關しては結局問題を避けるのと同じである。寧ろ、それを、如何なる意味に於てゞも——誤つた理論の下に於てでも——出版であるものと假定して、さて、今噂せられて居るやうに、果して、國憲紊亂の文書を出版したものであるかと、問題を進めて行かねばならないのである。

第二、學生が文書を印刷し配布したことが出版法に所謂出版となるとして、さて、それが、同法に所謂、政體を變壞し國憲を紊亂せむとするの文書であるか。これが第二の論點である。

此のことに就ても先づ立論の方法を定めて置く。今回の事件に於て學生が配布した印刷物が、出版法中最も重い制裁を定めた第二十六條に所謂「政體ヲ變壞シ國憲ヲ紊亂セムトスル文書」であるとして、起訴せられ、又豫審に依て公判に附せられたのである。果して同條を適用すべき場合であるか否かは、問題たる出版物の内容を十分に明にするでなけ

らねば、論斷し得ないのであり、而も今其の內容を十分に示すことを憚らなければならないから、茲には、前記出版法の規定の解釋を研究して、之に該る場合と該らない場合とを考へて見るの外はない。

出版法第二十六條に所謂、政體を變壞し、國憲を紊亂せむとする文書とは、如何なる文書をいふのであるか。これは同條を適用するが爲めには、文書が一定の內容を有せねばならぬ、といふことを定めたものである。出版責任者が、出版に依て一定の計畫を遂するの意圖を有せねばならぬ、といふことを定めたものではない。換言せば、文書の內容が、政體を變壞し國憲を紊亂するやうな事項を含むならば、同條の適用を受けるのである。出版責任者が、之を出版することに依て、政體を變壞し國憲を紊亂しやうと、いふ意圖を有するや否やは、全く問ふ所でない。それ故に、例ば、學生が或意見を印刷して頒布したことが問題となつたとき、學生のことであるから政體を變壞し國憲を紊亂するやうな意圖を有するものでない、といふが如き理由を以て、出版法第二十六條の罪とならないと主張することは、出來ない。又、學生が他人の著作を印刷して頒布したときでも、それが他人の意見であるといふが如き理由を以て、右の罪とならないと主張することも、出來ない。問題は唯其の文書の內容如何に在るのである。

然らば、文書が如何なる內容を有するとき、それが政體を變壞し國憲を紊亂する事項を含むものとなるのであるか。政體を變壞するといふに所謂政體の何たるかは、特に論ずるまでもない。一般に政體とは國家統治權の行使の根本的樣式であつて、特定の國家の政體といふときは、其の國家が、國家制度として、現に其の統治權行使の根本樣式と定めて居る所のものである。我國では、國家制度として、立憲主義に依ると定めて居るのが、政體である。此の如く、國家が現に立憲主義を政體として定めて居るといふ事實を、制度としてではなく、事實手段で、破壞することが、政體を變壞するといふのである。それ故に、單に、立憲政體を定めて居る制度を、制度其のものとして批判し、之を非難するこ

とが政體を變壞することでないのは勿論、其の制度を、制度として、改正すべきことを論ずるのも、亦、政體を變壞することではない。制度を、制度として、改正するといふことは、勿論、當然一般に制度を改正するの方法として定められて居る所の手續に依ることを、前提として居るのである。そこで、或文書の内容が、右のやうな意味での、政體を變壞するといふ事項を含んで居るとき、それが出版法第二十六條に觸れるのである。それが、唯、立憲政體を制度として非難し、又制度として改正する、といふ事項を含んで居ても、それは出版法第二十六條に觸れないのである。

國憲を紊亂するといふことも、右と同樣の見地で解釋すべきものである。國憲とは、國家が、國家制度に於て、其の國家的生活の基本的組織に屬する事項を定めたものである。國家が、現に、或事項を其の國家的生活の基本的組織に屬するものと定めて居るといふ事實を、制度としてではなく、事實手段で、破壞することが、國憲を紊亂するといふのである。それ故に、單に、國家的生活の基本的組織に屬する事項を定めて居る制度、例ば議會、貴族院、内閣、樞密院等に關する制度を、制度其のものとして批評し、之を非難することや、其の制度を、制度として、改正すべきことを論ずることは、國憲を紊亂することではない。國家が、國家制度に於て此等のものを國家的生活の基本的組織と定めて居るといふ事實を、制度改正の手續に依らないで、破壞するに至つて、始めて國憲を紊亂することゝなるのである。從て、或文書が國憲を紊亂する文書として出版法第二十六條に觸れるのは、其の文書の内容が、右の意味での、國憲を紊亂するといふ事項を含で居るときである。其の文書の内容が、單に、國家的生活の基本的組織に屬するものを、制度として批判し非難し、又制度として改正する、といふ事項を含で居るに止まるときは、出版法第二十六條に觸れることはない。何故にかく解釋するのであるか。元來國家の制度は社會生活の進歩を計るが爲に設けられるのであるから、社會生活の變遷に隨て、國家制度も亦變遷する。さればこそ、國家は制度改正の手續を定めて居るのである。制度の改正を許すこ

とは、當然に、制度の批判を許すことを前提とする。批判なくして改正はあり得ない。然れば國家の制度を解釋するに當ては、特に反對の理由なき限り、制度を制度として批判することを不能ならしむるやうな推論を爲してはならない。此の如きことは、一般に改正を許されて居る國家の制度といふものゝ意味を、明にしないものである。

以上述べた所に依れば、例ば、學者學生が、單に制度として、專制政體を可とし、內閣制を難じ、無政府主義を是とする、ことを說いた文書は、決して政體を變壞し國憲を紊亂する文書ではない。從て出版法第二十六條には觸れない。加之、社會的生活に關する事項、經濟組織に關する事項は、國家的生活に關する事項ではないのであつて、政體や國憲の問題ではない。それ故に、例ば學者、學生が、制度として、私有財產制度を難じ、マルキシズムを可とすることを說いた文書は、本來政體や國憲の問題とは關係がなく、從て出版法第二十六條に觸れるものではない。尤も、それが、單に私有財產制度其のもの、マルキシズム其のものを取扱ふのではなくて、之を基礎として、之を實現するの方法として、政體や國憲を取扱ふことはあり得る。此の場合には、其の文書は政體や國憲に關係ある事項を內容とするものと云ふてよい。併し實際に於ては、かく解釋すべき場合は少いであらう。力めてかく解釋するやうな態度に出づべきものでは勿論ない。文書が、政體や國憲を、制度としてゞはなく、事實手段で破壞する、といふ事項を內容とするときは、前述の如く、政體を變壞し國憲を紊亂する文書であるが、之に就て注意すべきことがある。之を、制度としてゞなく、事實手段で破壞する、といふ趣旨其のものは、其の文書自體に於て、積極的に明となつて居なければならないのである。政體や國憲を制度として非難し、又之を變更すべきことを、如何に力強く論じても、それは、當然に、之を、制度としてゞなく、事實手段で破壞すべきことを論じたものとは、云へない。制度の變更其のことと、制度の制度に依る變更とは同一のものではないから、或文書が、制度を非難し其の變更を力說したからとて、唯それだけで、制度と定められたもの

を、制度に依らないで事實手段で變更するの趣旨である、とは云ひ得ない。それ故に、此の趣旨が積極的に明になつて居なければ其の文書は、政體や國憲を、制度としてゞはなく事實手段で破壞するの文書といふべきではない。且其の趣旨は其の文書其のものの示して居る趣旨でなくてはならない。其の文書の示して居る所のもの以外に、文書の責任者が、制度を、制度としてゞなく事實手段で破壞するの意圖を有するや否やは、全く關係がない。かゝる意圖を有する場合であつても、それは、其自身別に、法的に判斷せらるべきものであつて、其の文書の內容を問題とする所の、出版法第二十六條の適用に就ては、無關係のことである。尤も、其の文書其のものの意味を明にするが爲めに、文書責任者の意圖を知ることも、時に、無益のことではないであらう。併し、出版法第二十六條の適用に就ては、文書其のものの趣旨を問題とすればよいのであつて、文書責任者の意圖を問題とすべきものではない。從て、文書の趣旨は、其の文書に用ゐられて居る文章が客觀的に與へ得る意味、でなくてはならない。要するに、或文書の內容が、其の文書自體の意味を客觀的に解釋すると、政體や國憲を、制度に依らないで事實手段で破壞するといふの趣旨を、積極的に示す、ものであるとき、茲に始めて政體を變壞し國憲を紊亂するの文書があるのである。

三　治安維持法違反罪に就て

治安維持法違反罪といふに就て考へて見やう。治安維持法は昨年新に制定發布せられた法律であつて、今回の學生事件に際して、始めて適用せられたほどであるから、其の如何なる法律であるかは、世間一般に知られて居ない。故に、今、先づ、其の規定を示さう。同法第一條は、第一項に、「國體ヲ變革シ又ハ私有財產制度ヲ否認スルコトヲ目的トシテ結社ヲ組織シ又ハ情ヲ知リテ之ニ加入シタル者ハ十年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス」と規定し、第二項に、「前項ノ未遂罪

ハ之ヲ罰ス」と規定し、又第二條は、「前條第一項ノ目的ヲ以テ其ノ目的タル事項ノ實行ニ關シ協議ヲ爲シタル者ハ七年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス」と規定する。そこで、今回の學生事件が如何なる點で治安維持法に問はれたかと云ふに、學生が屢々會合して種々のことを相談して決定した。それが前掲治安維持法第二條に所謂協議を爲したものとして、起訴せられ、又、豫審に依て公判に附せられたのである。如何なることを相談して決定したのであるかといふことを、今詳述することは出來ないから、茲でも、治安維持法の規定の解釋を試みて、如何なる場合が之に觸れるかを研究しやう。

第一、先づ、治安維持法第一條所定の結社のことを研究しやう。

治安維持法第一條は、國體を變革することを目的として、又は、私有財產制度を否認することを目的として、結社を組織し又は情を知つて之に加入したる者を、處罰するの規定である。

國體を變革することを目的として結社を組織するといふやうなことが、今回の事件に於て、問題となるやうなことは、まさかあるまいと思ふけれども、一言しやう。結社を組織するの目的が國體を變革することに在るならば、それで、直に、同條に觸れるのであつて、其の結社が、右の目的を達するの手段として、如何なる行動を爲すかを問ふものでない。國體を變革するといふのは、我國の今日の國體を現實に變更してしまうことである。それ故に、一般に國體を研究することを目的として會を組織するのは、國體を變革することを目的として結社を組織するもの、とは云へない。併し、苟も國體を現實に變更してしまうとするのである以上、それが、國體に關する制度を改正することであつても、又、制度改正に依るのでなくて、事實上の手段を以て之を變更することと、即ち國體を破壞することであつても、共に國體を變革することである。それ故に、例ば、憲法中の、天皇を統治權の總攬者とするの規定を改正しやうとするのであつても、矢張、國體を變革するのである。從て此の規定を改正することを目的として結社を組織するのも、亦、治安維持法第一

係に觸れるのである。此の如く、制度の改正も國體の變革となるといふ點に於て、前に述べた所の、出版法に所謂、政體の變壞及び國憲の紊亂即ち政體や國憲の破壞と異なるのである。これは勿論至當のことであつて、國體を變更することは、それが制度の改正に依ると事實上の破壞手段に依るとを問はず、許さるべきでないのである。

結社を組織するの目的が私有財産制度を否認することに在るならば、それも亦治安維持法第一條に觸れる。併し、同條の適用に就ては、私有財産制度を否認するといふことの意味を明にするの必要がある。それは、一般に私有財産制度といふものを、現實に、無くしてしまう、といふことである。私有財産制度を現實に、無くしてしまうといふのは、獨り事實上の破壞手段を以て——制度の改正に依らないで——之を無くすることのみではなく、制度の改正に依て之を無くすることをも含む。それは、國體の變革といふのと同樣であつて、彼の出版法所定の、政體の變壞や國憲の紊亂といふのとは異なる。併し(一)それは、私有財産制度を現實に無くするといふことでなければならない。單に私有財産制度を批判して其の得失を明にするが如きことは、私有財産制度を否認するものとは云へない。從て、私有財産制度の得失を論ずることを目的として結社を組織することは、治安維持法第一條に所謂、私有財産制度を否認することを目的として結社を組織すること、ではない。又、其の結社が私有財産制度を不可とする意見を發表したとしても、それだけでは、其の結社が私有財産制度を否認することを目的として組織せられたものと云ふことは出來ないのである。次に、(二)それは、一般に私有財産制度といふものを、現實に、無くすると云ふことでなければならない。一般に私有財産制度と云ふものを、現實に無くすることではなくて私有財産制度に屬する個々の制度を無くすると云ふことであるならば、それは、治安維持法に所謂、私有財産制度を否認することではない。例ば炭坑や水力と云ふやうなものを、私有財産から奪つて國有としてしまうとして、炭坑國有期成會や水力國有期成會など云ふものを組織するとする。これは、

無論、炭坑、水力に關する私有財產制度を現實に無くすることを目的とするのであるけれども、併し、一般に私有財產制度と云ふものを無くすることを目的とするのではない。故に、炭坑國有期成會や水力國有期成會は、私有財產制度を否認することを目的として組織せられた結社ではない、のである。

第二、次に、治安維持法第二條所定の協議のことを研究しやう。

治安維持法第二條は、國體を變革し又は私有財產制度を否認することを目的として、其の目的たる事項、即ち國體を變革し又は私有財產制度を否認すること、を實行しやうといふことに關して、協議を爲した者を、處罰するの規定である。

國體を變革するといふの意味、私有財產制度を否認するといふの意味は、前に述べた通りである。それを實行しやうといふことに關して協議を爲すとは、それを實行しやうといふこと其のことに、直接に關係して、論議を爲すことである。私有財產制度を不可とすることを論談し、之を不可とするの意見を普及することを論談するのは、單にそれだけでは、私有財產制度を否認することを實行しやうといふこと其のことに、直接に關係して、論議を爲すのではない。從つて、私有財產制度を否認することを目的として、それの實行に關して協議を爲す者とは云へない。それは私有財產制度非難の意見を普及する教化運動に關係して協議を爲す者とは云へやう。併し教化運動は、教化運動其のものとしては、それが私有財產制度非難の意見の普及であつても、私有財產制度否認の實行とは云へない。但其の普及でも私有財產制度を現實に無くしてしまうことを實行する爲であることは有り得る。其の場合には其の普及に關して論談することは、私有財產制度の否認の實行に關する協議と云へる。併し、私有財產制度非難の意見の普及の運動其のものが、單に教化運動として、當然に、私有財產制度の否認の實行であるとは云へない。それには、それが教化運動であるといふこと以

外に、別に、其の普及を私有財産制度否認の實行であると、解せしむる所以の、理由がなくてはならない。併し此の如き理由の存在は濫りに推斷すべきものではない。教化運動が、單に教化運動其のものであるか、又は私有財産制度否認の實行として考ふべきものであるかは、極めて複雜な事實であつて、觀方に依て、いづれとも議論を立て得ることである。從て、私有財産制度非難の意見を有する者が其の普及に關して論談した場合に、それを、單に教化運動其のものではなく、私有財産制度否認の實行としての普及運動に關する協議であると速斷するが如きことは、最も愼まなければならない。例ば、其の協議を爲した者が學生である場合には、其の實行能力の點から考へても、右の如き推斷を爲すことは、多くの場合には、困難であらう。我國一般の學生は未だ力ある政治運動を爲す者ではないから、私有財産制度を、制度の改正に依て、現實に無くしてしまうといふ實行力を有するものとは考へられない。又、社會的にも、制度の改正以外の事實上の手段に依て、現實に之を無くしてしまうといふ實行力を有するものとは考へられない。此の如き學生の行ふ所の、私有財産制度非難意見の普及運動を以て、輕々に教化運動ではなくて、私有財産制度を現實に無くすることを實行しやうといふことと其のことであると解し、從て、之に關する論談を以て、私有財産制度を現實に無くすることを實行しやうといふことと其のことに、直接に、關係して論談するものであると解するならば、それは、治安維持法の實際的意味を見誤るものではあるまいか。而して却て同法の權威を輕からしめるものではあるまいか。

以上、私は今回の事件に擬せられた諸法規の一般的の解釋を試みたのであるが、之に依て、此等の規定の解釋を爲すに當て、種々の論點を明瞭にして考察せねばならぬことが分る、と思ふ。從て、實際に之を適用するに當て、少くとも疑問を生ずることは當然である。今回の事件の如き場合にも、法律問題としては、先づ、虚心坦懐に、法規の解釋に關する疑問を疑問として、冷靜に研究することを怠つてはならない。

併し、これは、法の適用の問題を考察したのである。法の適用以外の問題、例ば學生の實際行動は、法に觸れても、何等かの見地から、許されるものであるか、又、それが法に觸れさへしなければ、一般に許されるものであるか、といふやうな問題は、全く別のことである。それ故に、假りに、それが法に觸れないと判斷しても、其の判斷は、それが一般に許される、と云ふ判斷ではない。然しながら、或行動が特定の法規に觸れるか否かの問題は、それが法の問題を離れて一般に許されるか否かといふ問題とは、全く獨立して、考察せられなければならない。或行動を、法の問題を離れて一般に許さない、といふ感じに基き、其の感じを現實するが爲に、之に特定の法規を適用するといふが如き態度は、勿論避けねばならない。之に特定の法規を適用すると否とは、一に、其の法規の冷靜なる解釋に基き、之を適用すべき場合であると否とに、依るべきものである。然れば、法の問題を離れて一般に許されないと思はれる行動に就ても、之に適用しやうとする特定の法規の解釋を冷靜に研究することが、最も大切である。之が、國家制度の下に在て、社會生活を維持し發達せしめやうとするに當て、必要なる根本的態度である。

第四　學問に對する國家の態度

以上は、今回の事件に於ける學生の行動に關して、問題となつて居る法律の解釋を説明したのであるが、他方に於て、法律問題を離れて、一般に、學生の行動が學生として、如何なる範圍に於て許されるかといふ問題を研究するの必要がある。此の問題は、學生の個々の行動に關する法律問題と、同一のものではないけれども、併し、關係がある。學生の個々の行動に對して或處罰法を適用することを決するに當ては、一般に學生の行動が如何なる範圍に於て許されるかを知ることを有益とする。其の行動が、一般に、學生として、許された行動の範圍に屬するもの と考へられるなら

ば、それが處罰法に觸れると解釋することは、通常の場合に於ては、適當でない。通常は、其の行動が、一般に、學生として、許された行動の範圍に屬しないと考へられるとき、それが處罰法に觸れるのであるが、併し、一般に、學生として許される行動の範圍に屬しない行動が、常に處罰法に觸れるものではない。それ故に、學生の或行動を視て、學生としてはあるまじき行動であると感ずる、其の感じから、之を處罰法に觸れしめるやうなことがあつてはならない。然れば、法律問題を離れて、一般に、學生の行動が、學生として、許される範圍を知ることを必要とするのである。但茲に學生の行動と云ふのは、勿論、學生の任務たる學問と關係ある行動のことである。學問と關係のない行動は、特に茲に考ふべき限りでない。學問と關係ある行動と云ふても、如何なる意味で關係があるか。學問研究の手段としての行動もあり、又、學問研究の結果を行ふものとしての行動もあり、之に依て許されると否とが異なるのであるが、それは、後に述べるとして、茲では、廣く學問と關係ある行動と云ふて置く。然るに、これは、實は、獨り學生の行動のみの問題ではなく、學者の行動の問題でもあり、又單に學生、學者等、學問を任務とする者のみの問題でなく、總ての人の、學問と關係ある行動の問題である。それは、學問の性質から解決せらるべき問題である。

第一、國家は、學問に就て、如何なる根本見地に基て、其の態度を定むべきものであるか。學問は、云ふまでもなく、眞理を探究することである。凡そ眞理を知ることは容易でなく、或は不能であるかも知れない。それにも拘らず、眞理吾々が眞理を知らうとする要求は、人間として、自然に持つて居る所の要求である。故に眞理の探究即ち學問は、眞理に對する要求といふ人間の本然的要求に基く活動である。これを、國家は、如何に取扱ふべきものであるか。學問に對する國家の態度は消極的のもの及び積極的のものの二樣に分つて考へられる。消極的には、國家は、吾々の眞理探究を放任するか又は制限するか、といふことに關して、態度を定むべきである。これは即ち學問の限界の問題である。又積

極的には、國家は、吾々の眞理探究を助成するか否か、といふことに關して、一定の態度を定むべきである。これは即ち學問の保護の問題である。

先づ消極的の態度のことから考へやう。眞理の探究は、前述の如く、人間の本然的要求に基くものである以上、國家と雖之を消滅せしむることは出來ない。故に、國家は、强制的に、人間をして學問を爲さゞらしめるやうな、態度を取るべきものではない。かゝる態度を取ても、それは、唯外形的に人間を抑壓し得るのであつて、到底、人間の眞理探究即ち學問を抑壓し得るものではない。然しながら、吾々が眞理を知らうとする場合に、それに伴ふて現はす所の外的行動に對しては、國家は無關心ではあり得ない。一定の事情があるならば、それを制限するの理由を生ずるのである。其の事情は後に述べる所である。要するに、學問に對する國家の態度は、消極的の方面に於ては、學問に於て現はれる外的行動に對する干與であつて、學問の禁止であつてはならない。

次に積極的の態度のことに就て考へて見る。國家は其の目的から觀て、學問といふものに就て、何等かの利益を持つて居るのではないか。利益を持つて居るならば、國家は、單に、消極的に、學問を禁止しないといふことを以て滿足すべきものではなく、積極的に、學問の發達を來すやうに保護しなければならない。然らば、國家は學問に就て何等かの利益を有するかと云ふに、それは、國家を觀念する人の見地に依て、必ずしも一樣の解答を得るとは云へない。併し、私は、兎に角、國家は、吾々が或理想を持つて之を實現しやうとする努力の現れであるとし、從て國家の任務といふことを考へる所の、一種の觀念論的の見地を取つて居るのであるが、此の見地では、國家は、社會生活に關して、その時々の時代に於て、之を構成する人間が、實現し得ると考へる理想を、實現することを任務とするものである。一言にして云へば、社會生活の進歩を來すことを任務とするのである。然るに、社會生活の進歩は何に依つて達せられるであら

うか。それは、其の社會を構成して居る所の吾々自身が、社會生活に關する理想を持ち、又、其の理想を實現することに努力することに依るの外はない。吾々が社會生活に關する理想を持ち、又、之を實現することに努力することは、つまり吾々の現に營みつゝある社會生活が、元來如何なる狀況に在るのであるか、又、如何になり行くものであらうか、更に又、如何にすべきものであるかと、考へねばならない。かく考へることは、社會生活に關する眞理を探究することであつて、即ち學問である。故に、學問なしには社會生活の進歩の目標を求めることが出來ない。學問なしには社會が進歩しないと云ふても、敢て過言であるまい。然れば、國家は、學問に就ては單に、前に述べた如く、之を禁止するやうな態度を取つてはならないのみならず、之を發達せしめるやうに保護しなければならない。それが實に國家自身の任務を遂げる所以であるのである。要するに、學問に對する國家の態度は、積極的の方面に於ては、學問の保護でなくてはならない。

　第二、國家が學問を保護するといふ根本見地に立つとして、さて、如何にせば保護し得るのであるか。學問を保護するの方法は、有形無形の、種々のものがあるであらうが、併し、其の根本的のものは、國家が、學問が學問本來の性質に隨て發展することを得るやうに、素地を固めることである。それは即ち學問の自由を保障することである。國家が、如何に多くの財力を以て學問研究の設備を整へ、又、如何に大なる好意を以て學者を優遇するとしても――それも勿論學問の保護の方法ではあるが、――學問の自由を保障しないならば、根本的見地に於ては、學問を保護するものと云へない。場合に依ては、それが、寧ろ、學問の發達を阻害するの機緣を作ることもあらう。學問保護の根本的のものは學問の自由の保障である。それ故に、玆に少しく、學問の自由の保障に就て考へて見たい。

　學問は、學問的と呼ばれる態度で、事物に就て思惟することであるから、云ふまでもなく、學問の自由は思惟の自由以

に屬する。併し、思惟は學問の場合に於て特に存するものではない。吾々は常に思惟する。思惟するといふことは、人間を人間たらしめる所以の品質であつて、思惟せざる人間はあり得ないから、國家は、如何なる場合に於ても、思惟の自由を認めざるを得ない。思惟は、それが眞理探究即ち學問といふ特殊の立場に於てせられるのでなくとも、自由である。それ故に學問に就て思惟の自由といふことを云ふならば、それは、一般に思惟の自由といふことを云ふのではなく、思惟が、眞理探究との關係に於て有する、自由といふことでなくてはならない。それは思惟をして眞理の探究たらしめることの自由である。詳に言へば、思惟の結果たる或考が眞理と考へられるや否や、を審査するの自由である。故に、學問の自由は、學問としての思惟の自由と共に、思惟の結果が眞理と考へられるや否やを、審査するの自由を含むのである。從て國家が學問の自由を保障するといふことは、學問としての思惟の自由を保障すると共に、思惟の結果が眞理と考へられるや否やを、審査するの自由をも保障することであらねばならない。

然るに、自己の思惟の結果が眞理と考へられるや否やを審査するには、其の結果を、自己の思惟以外の方法に依て、ためすの外はない。其の方法は二種に大別せられる。一は、それを、自己以外の者の思惟に依て、判斷せしむることである。便宜上之を主張と云ふて置く。學術論文を發表し、學術講演を爲して批評を請ふの類である。他は、それを、思惟以外、事實に照し合せて、自己の眞理とする所のものが妥當性を持つか否かを考へることである。便宜上實證と云ふて置く。自然科學に於ける實驗の類である。實證と云ふ言葉は、熟して居ないし、又、之を實驗と言つても字義上差支ないやうであるけれども、實驗と云ふと自然科學に於ける實驗と同一のものといふ誤解を生ぜしめるから、暫く實驗と云ふ言葉を避けて置くのである。右の主張及び實證の二方法は兩立することが出來るけれども、學問の種類に依つて、或は其の一を重んじ、或は其の兩者を均しく重んずるのである。醫學、農學、工學の如き自然科學に在ては、從來、右の

三つの方法が並び行はれ居て、主張以外に實證——自然科學に於て實驗と云ふて居るもの——の必要なることは、何人も疑はない。然るに、法學、政治學、經濟學等の社會科學に在ては、從來、研究方法として、主として、主張即ち、自己の思惟の結果に付て、他人の思惟に依る判斷を求むることが行はれて居る。又何人も其の必要を認めて居る。併し、實證、即ち、自己の思惟の結果を、事實に就て、照合して見て、自分の眞理なりとする所のものゝ妥當性を考へることは、從來、比較的に輕んぜられて居る。且之を輕じてもよいとし、或は、之を輕んずべきものであるとさへするの風がある。併し、かゝる傾向は正しいとは云へない。法學、政治學、經濟學等の社會科學に於ては、或は、現に起つて居る個々の社會現象を、其のものとして、考察する。此の場合には、勿論其の現象たる事實に就て、其の考察の結果を照合す以外に、確實に其の妥當性をためす方法はない。或は、社會現象の全般を考察して、社會生活の發達を示す所の法則を明にし、又、社會生活の發達を促す所の政策を立てる。此の場合に、其の法則や政策は多數の事實より歸納せられるものではないけれども、併し、事實に就て、其の法則や政策に含まれる所の眞理とせられるものゝ妥當性をためすことは、有益である。法律、政治、經濟の研究者が、實際の法律現象、政治現象、經濟現象を觀察するのは之が爲である。尤も、經驗的に、內容を有するものとしての社會生活を考察するのでなく、超經驗的に、社會生活一般といふやうなものを、考察するのであるならば、考察の結果の妥當性を、社會生活の事實に照して、ためすといふことの必要は理論上ないと云ひ得るかも知れない。併し、經驗的に、內容を有するものとしての社會生活を考察する場合に、考察の結果の妥當性を、社會生活の事實に照して、ためすことの必要が、理論上ないと云ふことは、出來ない。其の必要があると云ふのも一の研究方法であり、其の必要がないと云ふのも一の研究方法であるが、併し、それは要するに研究方法上の立場の問題である。社會生活の發達に關する眞理に就ては、勿論見地が分れる。或は、論理上、或必然なるものを考へ、其の必然なる

もの丶發展に、社會生活の發達に關する眞理を求める必要もある。其の必然なるものは、論理的に考へられたものであつて、事實から歸納せられたものではないが、併し、それが社會生活の經驗的事實に關するものである以上、其の必然なりとするものを社會生活の事實に照して見ることは、有益である。寧ろ必要であらう。或は、吾々が時代〱に於て有する價値意識の發展に社會生活の發達に關する眞理を求める觀念論もある。吾々が時代〱に有する價値意識も、社會生活の事實から歸納せられるものではないけれど、社會生活の事實を地盤として發展するものであるから、其の價値意識なりとするものを社會生活の事實に照して見ることは、必要である。然れば、社會科學に於ても、考察の結果の妥當性を審査するが爲に、それを社會生活の事實に照して見ること、即ち實證することは、必要である。少くとも、之を必要とするといふ、一の立場は認められなければならない。之を必要でないとするのも、亦、一の立場であるから、其の立場を取る者が、社會生活の事實に就て、自己の考察の結果を實證しないことは、勿論差支ない。併し、之が爲に、社會生活の實際を觀察することを非とし、或は責むることは、當を得たものでない。かく考へ來ると、社會科學に於ても、事實に就て實證することが許されるといふ點は、自然科學に於けると同様である。唯自然科學に於けるが如き實驗といふことは許されない。それは後に明となるであらう。

右に述べた所の、考察の結果を、社會生活の事實に就て實證するといふことは、決して、社會生活に關する實際問題を、自己の考察の結果たる理論に依て、解決するといふことではない。考察の結果を、社會生活の事實に就て實證することは、學問上の態度であるが、考察の結果たる理論に依て實際問題を解決することは、學問上の態度ではないのである。學問上の態度でないからとて、それが不可であるのではなく、又、學問研究者が之を行つてならないと云ふのでもない。學問研究者が之を行ふことは、勿論差支ないが、併し、それは學問をするのではないのである。

思惟の結果の発表は、此の如く、思惟の結果の主張と其の實證とを必要とする。而して學問の自由の保障は、前に述べた通り、思惟の結果の発表をも保障することを含むものであるから、國家は、學問としての思惟に就ては、其の結果の主張と實證とを自由ならしめねばならない。之を制限することは即ち、學問の自由を保障しないことである。

第三、學問は、右の如く、國家に依て保障せられるが、併し學問も、勿論、他のものと同じく、法的秩序の下に於て、なされなければならない。而も、社會生活に關する學問は、法的秩序其のものをも研究の對象とするものであるから、法的秩序を批判しなければならない。そこで、社會科學に在ては、特に法的秩序との關係を考察するの必要を生ずるのである。

そもく、國家は、前に述べた如く、社會生活の進歩を來さしむることを任務とする。社會生活の進歩は、社會生活が變遷することを許す立場に於てのみ、之を期することが出來る。社會生活の變遷を許さないでそれが常に或狀態に固定して居るべきものであるとする立場に於ては、到底社會生活の進歩を期することは出來ない。それ故に、國家が社會生活の進歩を來さしむることを任務とする以上、國家は社會生活の變遷を豫想して、之を許す、ものである。然るに、社會生活の變遷を來す動因には、社會生活に必要な手段の變化もあり、社會組織其のもの丶變化もある。先づ、社會生活に必要な手段とは、例ば道具、衣服、家屋、食料、衛生設備、治療方法等であつて、此等のもの丶變化に依て社會生活が變遷するのである。國家は、社會生活の進歩を來さしめるが爲に、社會生活の變遷を許す以上、其の變遷の動因たる前述の手段の變化を認めなければならない。從て、勿論、此等の手段に關して、研究する所の、工學、醫學等の學問が、此等の手段の變化を研究することを、認めねばならない。併し、此等の學問は社會組織其のものを研究するものでないから、問題はない。次に、社會組織其のものに就ても、國家は、其の變化を認めねばならない。必然論の立場を取

るならば、社會組織は、必然的に定まれる或傾向に變化するより外はない。觀念論の立場を取つても、社會組織は變化すべきものである。何故かといふに、吾々が理想を實現せんが爲の努力として一定の社會組織を立てるのであるとする以上は、本來其の時々に於て不完全である所の人間が、完全に近づかうと考へて、進むに隨て、人間の努力に基く所の社會組織は變化せざるを得ないのである。故に、國家は、社會生活の進歩を來さしめるが爲に、社會生活の變遷を許す以上、其の變遷の動因たる社會組織の變化を認めねばならない。從て、勿論、社會組織に關して研究する所の、法學、政治學、經濟學等の、社會科學が、社會組織の變化を研究することを、認めなければならない。社會科學の研究に於て、社會組織の變化を研究することを不可とするならば、それは、社會生活に關する學問を認めるといふことに對して、論理上の矛盾である。それ故に、社會生活に關する學問を認める以上、學問の研究として、社會組織が變化すること、又は、變化すべきことを、主張することも許されなければならない。

國家は、此の如く、一般に社會組織の變化することを許すものであるけれども、併し、その時々の社會に於ては、兎も角も其の社會の組織とする所のものを定め、吾々をして、其の組織の下に於て、社會生活を營ましめるのである。其の組織を定めるものは即ち法的秩序である。故に、國家は、一般的には、社會組織の變化することを豫想するものであるが、その時々の社會に於ては、其の社會組織を定める法的秩序の現に存する限り、其の社會組織を維持するのである。それは、前に述べた如く、社會組織を不動のものとして固定せしめやうとするのではないけれども、其の變化が、之を定める所の法的秩序の變化に依て、行はれることを要求するのである。それは、社會組織の變化を阻止するのではなく、社會組織の變化に秩序あらしめやうとするのである。それ故に、社會生活を研究する社會科學が、社會組織の變化を說くことは、固より、國家の認める學問の自由に屬するけれども、併し、學問を爲すことに就て法的秩序を破壞す

ることは、許されない。然しながら、法的秩序の破壞といふのは、國家が法的秩序と定めて居る所の事實を、法的秩序自身に依らないで、事實手段に依て、變更することである。單に法的秩序を變更するといふことではない。從て、法的秩序に價値批判を加へて、法的秩序其のものとして、之を變更すべきものであると判斷することは、決して法的秩序の破壞ではないのである。併し、法的秩序の破壞は、學問の爲であつても、許されないのである。これは國家生活を是認するといふ立場を取る以上、當然の結論たるに過ぎない。それ故に、かの「ローマ法に依て、ローマ法の上に」といふ名句の口調が、屢々借用せられるが如く、學問と法的秩序との關係についても、「法的秩序に依て、法的秩序の上に」といふことを言ふことが出來る。

第四、此の如く、學問の自由にも、法的秩序を破壞してはならないといふ限界がある、といふことが明となつた後、再び前に述べた所の實證に就て考へて見るの必要がある。學問に於て、實證——自然科學に於て實驗と云ふて居るもの——が、必要又は有益であることは、曾て述べた。併し、實證といふことに付て、自然科學に於けると社會科學に於けるとに依て、重大なる差異のあることを注意しなければならない。自然科學に於ては、學問上の假說の妥當性をためすに當て、例へば動物試驗の如く、機械試用の如く、其の假說を實際に行つて見ることがある。これが實證の方法として許されるのは、一般には、始めから、法的秩序に影響しないからであるが、併し、法的秩序に影響するものもあつて、それが許されて居る。これは、法的秩序自身に依て許されて居るのである。例ば醫學に於て、研究の爲に——單に治療のみの爲でなく——人の身體を取扱ひ、手術を行ふことは、許されてある。然しながら、社會科學に在ては、かゝる意味での實證は許されない。法學、政治學、經濟學等に於て、社會組織に關して一の假說を立てたとき、其の妥當性をためすが爲に、之を實際に行ふて見るといふことは、許されない、それは、其の限度に於て、社會組織を現實に變化せし

むることであるから、法的秩序の變更に依らない以上、それ自身法的秩序の破壞となる。故に、社會科學に於ても、社會生活の事實に就て、自己の眞理とする所のものの妥當性を照合して見るといふ、實證を許すけれども、併し、それは自然科學に於ける實驗即ち通常實驗と稱せられるものと、異ならざるを得ない。自然科學に於けるが如き實驗は、社會科學に於ては、許されないのである。此のことは、必然論に依る社會觀を取る場合も、又、觀念論に依る社會觀を取る場合も、同樣である。例ば、社會生活の發展に随て、租税制度の如きものは、論理上無くなるものであると、いふ假說を立つる者が、其の論理に何等かの缺陷がないかをためす爲に、試に租税を納めないで、其の結果を見やうとすることは出來ない。又、政策上、或租税制度を廢止すべきであると、いふ假說を立つる者が、廢止の利害をためす爲に、試に其の租税を納めないで、其の結果を見やうと、することは、出來ない。此の如く、社會科學に於ける實證が制限せられるのは、其の學問の對象が社會生活であるからである。社會生活は、それが法的秩序に依て整理せられて居る範圍に於ては、法的秩序自身の變更に依らなければ、變更せられてはならない。かゝる變更は法的秩序の破壞であつて、法的秩序の破壞は、學問の實證の方法としても、許されないのである。

第五　大學に於ける學問

以上は、一般に學問といふものと國家との關係に關する理論である。從て、前に述べたやうな學問の自由は、何人でも、學問を研究する限り、之を有するのであつて、獨り學問の研究を任務とする所の學者、學生等のみが、之を有するのではない。學問は、其の研究を任務とする者の專有物ではなく、何人に依ても爲されるものであるから、學問の自由の問題は、實は、獨り學界のみの問題ではなく、一般社會の問題である。然しながら、學問の研究を任務とする者に關

して、特に、學問の自由の問題が實際上の意味を有するものであること、云ふまでもない。學問の研究を任務とする者の主なるものは、勿論、大學であるから、私は、更に、進んで、問題を大學に於ける學問といふことに限定して、考察して見たいと思ふ。國家が、大學に於ける學問に就て、特に、學問の自由を尊重しなければならないといふことは勿論である。國家は、一般に學問に對して、自由を尊重すべきであることは、既に述べた通りであるが、それのみでなく、國家が、特に、學問の研究を任務とするものとして、大學を認めて居る以上は、其の任務を果さしめる爲に、其の自由を尊重するといふ方針を取るべきものであつて、此のことが國家自身の任務の一である。即ち、學問の研究が大學の任務であると共に、大學に於ける學問の自由を尊重することが國家自身の任務の一である。然らば、大學に於ける學問の自由といふことは如何なることを指すのであるか。

大學に於ける學問の自由といふことは、私の考に依れば、二つに分れる。

第一に、大學に於ける學問の自由がある爲には、大學に於ける個々の學問研究者の學問の自由がなくてはならない。大學に於ける個々の學問研究者は教官及び學生である。教官の學問の自由に就ては、別に、云ふことはないが、學生の學問に就ては、特に考察するの必要がある。私の考に依れば、大學の學生も、學問の自由を有すべきものであつて、此の點に於ては、教官と異なるものではない。成程教官は學生に教授する。併し、教官が大學に於て學問を教授するといふことは、決して、教官が學問的に思惟する所を、無批判に、眞理なりとして受け入れよと指定するのではない。眞理なりや否やを思惟する者は學生自身であらねばならない。教官は學生の思惟に對して、其の材料を供し、又、方法を示すのである。且其の思惟の材料及び方法其ものに付ても、亦必ずしも、無批判に之を受け入れよと、指定するものでない。即ち大學に於て教官が學問を教授するといふことは、私の考に依れば、如何なる意味に於ても學生に、教官の學問

的判斷に從ふことを、要求するものであつてはならない。學生自らが學問を研究するのである。既に此の如く、學生自らが學問を研究するのである以上、學生が學問の研究に際し、一般に學問に付て許されて居る自由を、有すること、當然である。それ故に、學生と雖、其の思惟の結果が眞理と考へられるや否やを審査するが爲に、前に述べた所の、主張や實證を爲し得るのである。其のこと自身を以て、直に、學生としてあるまじき行爲とは云へない。又、學生の學問研究には不必要であるとも云へない。それは研究方法に關する問題である。或者が、學生は教官の講義や著書に就てのみ思惟すればよいのであつて、主張や實證をするの必要がないと、説くのも、研究方法に關する一の立場であるから、敢て差支ない。併し、其の者は他の立場を取る者が、學生と雖、教官の講義や著書のみに就て思惟することは不十分であるから、主張や實證を必要とする、と説く、ことを難ずるの理由を持つものではない。現に自然科學を研究する學生は、實際、それを行つて居るのである。唯社會科學に於ては、社會生活を對象とするが爲に、其の主張や實證として爲す行動は、自然科學に於けるものとは異なり、往々、法的秩序の破壞を伴ひ、又は少くとも通俗にはさう誤解せられるやうな結果となる、ことがある。法的秩序の破壞は勿論許されない。それ故に、社會科學の研究に在ては、法的秩序との關係に就て、自然科學の研究に於ては必要のないやうな、注意を施すの必要を見るのである。且學生は、如何なる學校の學生であつても、學校の秩序を破壞してはならない。官立學校の秩序は其自身一の法的秩序であつて、學生は二重の秩序を守らなければならない。學生が、私立學校の學生であつても、其の學生である限り、一般の法的秩序の外、其の學校の秩序といふ二重の秩序を守らなければならないこと、同樣である。學生たる者が、全然、其の學校の秩序を守ることを望まないならば、其の學校を脱退するの外はない。併し、學生にして苟も、一般の法的秩序及び學校の秩序を守る以上は、學問研究の方法として、主張や實證を爲すことを許さないと、いふ理由はない。それは教官に許されて居る

ものである。學生であるといふことは、當然に、それを許すべきでないといふこと、を推論せしめるものではない。

然るに、學生が、其の主張や實證を爲すに當て、其の守るべき秩序の破壞となることがありはしないかと、いふことを知るは、往々容易でないことがある。況して學生自身に取ては、屢々困難であらう。元來現に存する秩序といふものは一の經驗的事實であるから、之を認識することに就ては、勿論、大學當局の能力を以て、學生の能力に優るものと考へねばならない。故に此の點に於ては、大學當局が學生に或ことを指定し、學生が大學當局の指定に從ふことは、差支ない。之を以て、學生に學問の自由を奪ふものとすることは、至當でない。大學の內部に於て、學生の行動を、守らるべき秩序に照して、或場合に、拘束することは、大學々生々活としては內面的拘束であると云ふてよいので、外面的拘束ではないから、學生がかゝる拘束をも、全く、受くべきでないと、いふことは正當でないと思ふ。併し、これは、勿論、其の拘束自身が、前述の、學問の自由といふ立場から、正しい制限を定めるものでなくてはならない。

大學に於ける個々の學問研究者は、學問の自由を有するのであるから、研究者が、學問上、或一つの立場を取るも自由である。或は資本主義を取ることもあり、或は社會主義を取ることもあらう。勿論其の立場を取るに先ち、其の立場自身を研究するのであつて、研究の結果其の立場を取るのであるが、其の立場を正當と考へて居る間は、其の立場に於て事物を觀察することは、矢張學問である。學者が一定の立場に立て事物を觀察することを、學問でないと非難することは誤である。尤も學者は一定の立場を取て居りつゝも、常に、其の立場自身を反省しなければならないけれども、其の立場を正當とする間は、其の立場に於て事物を觀察するの外はないのである。これは立場の種類の如何に依て異なることではない。それ故に、例ば學問的判斷の結果社會主義を取る學者が、其の立場に於て社會を批判することを目して、社會主義といふ一面のみから研究するのであるから、學問的でないと云ふことは、出來ない。若しかゝる非難を許

すならば、同じ意味で、例ば學問的判斷の結果、資本主義を取る學者が、其の立場に於て社會を觀察することをも、非難せざるを得ないであらう。社會主義といふ立場に立つでもなく、又資本主義といふ立場に立つでもないことのみを、學問といふのではない。一定の立場を取つても、其の立場に立つこと自身が、學問的の判斷に依つて定められるならば、それでよいのである。學問的と否とは、一定の立場を取らぬと否との問題ではなく、其の立場を取るに至る態度の問題である。故に資本主義の立場から、又は、國家主義の立場から、社會を觀察する場合でも、學問的でないことがある。單に社會主義を取り無政府主義を取るといふ立場に就てのみ、學問的でないといふ非難を下すべきではない。兩者共に學問的でもあり、又、非學問的でもあり得るのである。然れば、學者が、時々に、一定の立場を取ることは、差支ない。唯或立場を取りつゝも、其の立場自身を疑ふことが必要である。玆に疑ふといふのは、學者自身が其の立場を取ることが正しいか否かを疑ふといふのではない。自分は正しいと思ふから之を取るのである。唯、其の立場が、一般に學問の性質上、他の立場を取る者に依てくつがへされることの可能性を認めるといふことである。其の立場を取つて或主張を爲しつゝ、それを疑ふといふことは出來ない。疑へば主張することは出來ない。少くとも疑あることを保持してでなければ之を主張し得ない。眞理なりと主張する間は、之を信じて居るのである。但他の立場から、他のことが眞理なりとせられるかも知れない、といふ可能性を、一般に認めて居なければならない。從て、自分でも、自己の現に取つて居る立場を反省すべきものである。此の如く、學問の研究者が自己の現に取りつゝある立場自身を反省するといふことは、大學に於ては、教官に就ても云へるのであるけれども、學生に就ては、一層多く之を言はねばならない。教官は相當の努力を以て研究の結果一定の立場に立つものであると云ふてよい。之に反して、學生は、其の立場を定めることに就て、一般には、學問的努力に於て十分であるとは、云へない。それ故に、學生が、現に一定の立場に立つことは、

差支ないけれども、併し、常に其の立場自身を反省するの用意を怠つてはならない。これは、教官に取ても同樣であらうが、然しながら、學生に取て、特に必要であると思ふのである。

第二に、大學に於ける學問の自由がある爲には、大學が全體として學問の自由を持たなければならない。大學が全體として學問の自由を持つといふことは、大學に於ける個々の研究者をして、それぞれ自由に、其の眞理とする立場を取らしむることである。それ故に、大學全體としては、一定の學問上の立場があつてはならない。大學全體としては一定の學問上の立場を持たないから、個々の研究者の、それぞれ自由に研究して得る學問上の立場、を包容することが出來るのである。即ち大學に於ては色々の學說が主張せられるがよい。その結果學者相互間に於て學說が練られる。又、學生も色々の學說を比較研究して、以て、自己の正しいと信ずるものに從ふのである。これが、學生中獨り大學生のみが享有する特權である。

之を要するに、大學に於ける學問の自由がある爲には(一)大學に於ける個々の研究者が、自由に自己の學問上の立場を取り得ること、及び、(二)大學全體としては、特に定まつた學問上の立場がない、といふ二點が具はらねばならない。而して、(一)の點は、理論上、(二)の點を前提として存立するものであり、實際上は、(二)の點が具はるならば、自ら(一)の點も具つて來るのである。且學生と雖、(一)の點に就いて、教官と何等異なる所はないけれども、それが守らるべき秩序の破壞に導くことを防ぐ爲に、其の點に就て、大學當局の指定に從ふべきものである。之に從ふことは、決して、學生の學問の自由を妨げるものではないのである。

第六　理論と實際行動

以上述べた所の態度で、社會科學を研究する者は、必ず、社會組織に關して、一定の思想を懷くやうになる。其の思想の內容は、或場合には、社會が、論理上、必然に、一定の傾向を取て發達する、とすることであらう。又、或場合には、社會をして、政策上、一定の理想に向て發達せしめなければならない、とすることであらう。其の何れであるにせよ、學問研究の結果として得られた所の、社會組織に關する思想は、即ち、社會組織に關する理論である。而して、其の理論を、實際の社會現象として、實現せしめやうとして、爲す所の行動を、其の理論を基礎とする實際行動と云ふ。社會科學に於ける理論と實際行動との關係、換言せば、其の實際行動の是非、といふことは、常に世間の問題となる所であるが、私の考に依れば、先づ、世間の所謂實際行動といふものゝ中には二種の異なつたものを含むものである、ことを知らねばならない。世間が實際行動と云ふ場合には、それは、單に思惟する、といふことに對して、何等か事實上の行動に出づることを、意味して居る。此の意味で、漫然と、學生が實際行動を爲してはならないと云ひ、或は、研究と實際行動とは別であると云ふ。併し、かゝることを云ふ前に、先づ、所謂實際行動中、二種の異なつたものを分たなければならない。學問の研究者が、單に思惟するのでなくて、何等か事實上の行動に出づる場合に二つある。一は、學問研究の過程に於て、其の研究の方法として、或事實上の行動を爲すのである。それは、前に述べた所の、實證である。實證たる事實上の行動は、既に述べた如く、一定の範圍に於て、許されるのである。保障せられたる學問の自由其のものの範圍に入るのである。これは理論を基礎として爲す所の、實際行動ではない。唯漫然と、實際行動を許さないといふ場合に、世人は、通常、以上の如きものをも含ましめて居るが、それは、實際行動なるものゝ意味が明白でないからである。此の如きものは、理論と實際行動とを對立せしむる場合の、實際行動ではないのである。二は、學問研究の結果たる理論を實現しやうとして、或事實上の行動を爲すのである。これが、眞に、理論を基礎として爲す所の、實

際行動である。此の、眞の、實際行動と、前に述べた所の、事實上の行動とは、類似して居るが爲、世間では、兩者を、共に、實際行動と呼んで居る。且漫然と、實際行動は許されない、と云ふ。其の結果、單に實證に過ぎない所の、事實上の行動をも許さないこととなるのであるが、それは正當でない。前の事實上の行動は、學問其のものとしての行動である。勿論許される。後の實際行動は學問其のものとしての行動ではない。併し、學問其のものとしての行爲でないことは、それが許されない、といふことではない。それが許されるや否やは、全く、別の問題である。茲に於てか、社會組織に關して研究を爲す者が、研究の結果たる理論を基礎として、實際行動を爲すことが許されるか、といふ問題を生ずるのである。

理論と實際行動との關係といふことは、獨り社會組織に關する學問のみに限らない、一般に學問に就て屢問題とせられる。さうして多くの場合に、世間は學問に依て理論を思惟するのは善いが、實際行動をなすのは惡い、と一口に斷定し去るの風がある。併し、私は、之に就て、私に疑を懷くものである。凡そ、理論と其の理論の實現とは、概念上別々のものであり、從て、理論の思惟と其の理論を實際の現象の中に見たいといふ要求——理論實現の要求と云て置く——とは、概念上別々のものである。併し、人間の實際の意識作用を考へると、人間の人格は統一せられて居るのであつて、人間が一の理論を思惟するときは、普通ならば之に伴ふて、其の理論を實際現象の中に見たいといふ要求、即ち理論實現の要求を生ずるものである。理論の思惟と理論實現の要求との對立は、概念上明であるとしても、人間の實際意識に於て、常に對立するものとは考へられない。人間の本性を省察すると、寧ろ、或理論を思惟するときは、其の理論を實際現象の中に見やうといふ要求をも伴ふの傾向を有するものであつて、普通は、單に思惟するのみでは滿足しない。尤も其の要求の程度は人に依て異なる。其の理論の通りの實際の現象の發現することを要求することもあらう。これが、

理論實現の要求の大なるものであるが、又自己の思惟する理論の眞理であることを、他人にも理解せしめて、他人も其の理論を思惟するやうになる、といふことを要求することもあらう。これは、理論實現の要求の稍小なるものである。學者が其の學説を發表する場合にも、それが既述の、研究の道程に於ける實證としてせられたのでない限り、右記、程度の小なる、一種の、理論實現の要求を有するのである。併し、理論の實現の要求といふのは、必ずしも、思惟者が、自己自身で、之を實現せしめるといふことではない。唯、實際の現象の中に自己の理論を見るといふことである。それ故に、理論實現の要求は、それ自身では、思惟する者の、理論を基礎とする實際行動ではない。然しながら、普通の場合では、思惟する者は、自己自身で、之を實現しやうと要求するものであつて、其の者の實際行動となるのである。例ば禁酒がよいと思惟し、人を救ふべきであると思惟する者は、自分が實際に禁酒し、實際に人を救ひたいといふ要求を起すのである。單に、他人をして禁酒せしめ、人を救はしめるといふ要求のみを起すのではない。此の如く考へ來ると、一般に、理論と之を基礎とする實際行動とを、唯概念上對立せしめるのみでなく、實際の意識作用として、全く分別したものと考へることは、それ自身理論上不當である。單に理論上不當であるのみならず、人間の修養としても適當でない。是なりと思ふ所は、實際にも之を行ふといふの覺悟があるので、人格の向上がある。唯、何が正當なるかを考へさへすればよい、之を實現しなくてもよいといふのでは、人格の向上の路はない。禁酒がよいと思惟する者は、又、實際禁酒しやうと力めなければならない。即ち、一般には、理論は理論を基礎とする實際行動となるべきものである。これは、即ち、理論と實行との合一であつて、これあればこそ進歩がある。且理論と實行との合一は、實は吾々東洋人の固有の思想である。一般に、理論と實行との分別を説くのは、理論上も、修養上も、不可であつて、且正しく吾々東洋人の固有の思想に反すると思ふのである。

此の如く、理論と理論を基礎とする實際行動とは、一般には、分別すべきものではなく、合一すべきものであるが、併し、これにも、一定の制限がある。

第一は、法的秩序に依る制限である。前にも既に述べた如く、法的秩序を、法的秩序其のものに依らないで、破壞することは許されない、のであるから、理論を基礎とする實際行動を爲す場合に於ても、法的秩序を破壞してはならない。このことは、社會組織に關して、理論を基礎とする實際行動を爲す場合に、特に、注意すべきことである。玆に法的秩序とは、學生の如き者に就ては、其の所屬する學校の秩序をも含むものとして云ふのである。

第二は、人の任務に依る制限である。學問上の理論を研究することは、何人にてもなし得ることであるが、社會的に、特にそれを任務とする者がある。學者、大學生等は之に屬する。學者は、繼續的に、理論の研究を爲すの任務を有し、學生は、學生である間は、理論の研究を爲すの任務を有する。今先づ學者に就て述べる。學者は、先づ理論を明瞭に確立することに努力しなければならない。而して、學者が、或事項に關して理論を確定したと思ふならば、言論文章に依て之を發表することが、其の社會的職責である。社會的職責といふのは、社會的に存立を與へられたものが社會的に寄與することを云ふ。此の限度に於ては、學者も理論を基礎とする實際行動を爲すべきものであり、今日實際に於ても之を爲して居る。併し、學者は理論の發表以上の實際行動を爲すことの、社會的職責を有するものとは云へない。故に、學者が、其の研究したる理論を發表すること以外に、之を基礎とする實際行動を爲さないからと云ふて、其の職責を怠るものとは云へないのである。併し、これは、學者が他の實際行動を爲してはならない、と云ふのではない。之を爲すや否やは、個々の場合の事情、學者の性格等に依て定まることである。且之を爲すことが、社會的に、必要又は有益である場合もある。此の場合でも、それを爲すことは學者としての職責を盡すのではない。かゝる意味の實際行動を

爲すことは、一般に學者といふものゝ職責には屬しないが、併し、それが社會的に必要又は有益である場合には、之を爲す所の學者は又其の點に於て、學者としての職責以外に、社會に寄與するものである。此の點に於ては、社會科學者も、自然科學者も變りはない。世間、往々、社會科學者が、自己の研究して得た理論を基礎として、實際行動を爲すことを指して、其の學者としての價値を損するかのやうに思ふ者があるけれども、それは偏見である。彼の自然科學者が、迷信打破の運動をなし、電熱器普及の運動をなすも、社會科學者と同じく、實際行動をなすものであるが、それは自然科學者としての價値を殺ぐものではない。但それは、學者が、學者としてある限り、學者としての任務を妨げない範圍に於て、行はれなければならない。其の範圍に於てせられる以上、學者が其の理論を基礎として實際行動を爲すことは差支ない。それを爲すと否とは、學者たる人の能力、趣味等、個人的の問題であつて、一般に學者の問題でない。

學生も、亦、法的秩序や學校の秩序を破壞しない限り、其の研究した理論を基礎として、發表其の他の實際行動を爲すことを妨げるものではない。併し、それは學生に與へられた社會的職責ではない。それ故に、學生は、前述の秩序を破壞しない限り、右の發表其の他の實際行動を爲しても差支ないのであるが、併し、之を爲さないからとて、其の社會的職責を怠るものではない。これが、學生と學者との、大に異なる所である。學生が、其の時々に、自己の信ずる所に依つて、一定の理論を思惟することは、必要であり、且、それを完成したものと考へるならば、之に基て行動することも、秩序を破壞しない限り、差支ない。併し學生が早く、其の思惟する理論を、完成したるものと、考へること其自身は、學問的態度として、よいことでない。かゝる傾向に陷ることは、注意して避くべきものである。學生は、其の時々に思惟する理論を、常に假說であるとし、完成せられざるものとして、學生時代を通じて、之を完成しやうとするとしても、差支ない。寧ろそれがよい。殊に、學生が學校を以て、學問をするのではなく、或主義を實行する舞台とするが

如きことは、到底許されることでない。社會主義、無政府主義を取る學生のみではなく、資本主義、國家主義を取る學生でも同樣である。尤も、これは、學生であるから、絕對的に理論の思惟以外に、之を基礎とする行動を爲してはならないと云ふのではない。それを必要と信ずる學生が之を爲すのは致方ないが、併し、それは學問を完成する所以ではなく、又、それと守らるべき秩序との關係に於て、自ら責任を負ふの覺悟がなくてはならないのである。このことは、學生の思惟する理論が、既に一般に認められて居るものであるとき、これを實行する場合には、論はない。例ば、今日、學生が選擧權を與へられて居り、又、政談集會にも出席することを許されて居る。これは、學生と雖、選擧權を與ふべきであり、且又、政談集會に出席することを得しむべきものである、と云ふ理論が一般に認められて居るのであるから、學生自身が、之を必要とする場合に選擧權を行使し、政事集會に出席することは、固より當然である。それも一の實際行動であつて、且政治に關係する所の有力な實際行動である。それ故に、一口に、學生の實際行動と云ふことを、非難し去ることは、適當でなく、又、現在國家制度の取て居る方針にも合はない。唯、それには、前に述べた如き限界に就て、用意を必要とするのである。私は今回の如き學生事件が起つたことを、大に遺憾とする。之に關連して學生の實際運動と云ふことが問題とせられた。これも、勿論問題とすべきである。唯其の問題の着眼點を正しくつかむの必要がある。世間の所謂實際行動といふ中には、社會科學の研究者が私の前に述べた所の實證として、實際現象を觀察することをも、漫然、含ましめて居るやうである。これは、誤であつて、此の如き研究の道程に於ける實證の行動は許さなければならない。この點を明にしないで、漫然、所謂實際行動を非難するのは、實證を必要とするといふ立場をとるものにとつては、研究を不能にし、研究心を阻害することゝなる。又、輕々しく研究の結果たる理論を基礎とする實際行動を爲すことは、勿論難ずべきである。併し、唯、漫然と、理論と實際との分別を說くならば、それは、理論を實現す

るの要求を持つと云ふことそのことを難ずべきであるかの如く、誤解せしめ、遂には、一般青年をして理想に向つて進むの意氣を失はしめることゝなる。國民、殊に、青年が、理想に向つて進むの意氣を持つ場合にのみ國家は進歩する。唯それに一定の限界があり、殊に、法的秩序を破壞してはならないのである。又、學問の完成を急いではならないのである。不用意に、唯、漫然と、理論と實際行動とを分別して說くことは、往々にして、一般青年の理想要求及び理想實現の要求をにぶらしめる。それは理論の內容の如何を問ふものではない。此の如きことがあるならば、それは單に、學問の爲めのみでなく、國家の進歩の爲に、憂ふべきである。理論と實際行動との關係を說くものは、實に思を茲に致さねばならない。

以上、私は、所謂學生事件を中心として、學生の取るべき態度を說き來つた。顧つて思ふに、これは、單に學生を戒めるといふのではなく、私自身が、かゝる事件の起る每に、學者としての任務、社會的職責、覺悟に就て反省し、自ら警める所以に外ならないのである。なほ、私は餘論として、一般にかゝる事件を、一の社會的事象として見て、其の原因、意味を考へ、引て之に對する國家の政策にも論及ずる豫定であつたけれども、都合に依て之を省くことゝした。

時評

勞働農民黨の分裂憂ふるに足らず

安部磯雄

昨年十二月農民勞働黨が組織され、間もなく政府によりて禁止された以來無産政黨運動には絶へず重大なる問題が附き纏ふてゐた。それは即ち左傾分子に對して如何なる態度を取るべきかといふことであつた。然し農民勞働黨が政府によりて禁止されたといふことは政黨創立に關係した人々をして當然左傾分子を除外しなければならぬといふことを決心せしめたのである。

大體から見れば農民組合は左傾分子に對して門戸開放論を唱へ、勞働組合は除外說を主張したのである。殊に勞働總同盟の如きは最も強く左傾分子を排斥せんと試みたのである。若し政黨關係者が左傾分子の加入を承諾するようになれば、勞働總同盟は斷然政黨から脫退する外なきことを公言した位である。これがため勞働評議會、政治研究會、無産者青年同盟といふが如き團體は自發的に政黨に加入することを遠慮することになつた。故に政黨創立に關係した人々は此等左傾團體の精神を諒とし、政黨の基礎が確立する迄彼等の入黨を遠慮せしむることが得策であると考へたのである。これには二つの理由が存在してゐたように考へられる。第一無産階級は全國を通じて單一政黨を造らねばならぬといふことが其の當時に於ける無産階級のスローガンであつたから、左傾分子を入れることは黨内の分裂を來す虞れがあつたのである。第二は無産政黨に對する政府の態度であつた。昨月十二月に於ける農民勞働黨の禁止は政府の態度が如何なるものであつたかを明示して居る。若し左傾分子の意見が黨内に於て大なる勢力を得るようになれば、何度でも政府が無産政黨を禁止することは何人も想像することの出來る事

實である。此の如き事情の下に於て左傾團體が自發的に入黨を遠慮したといふことは最も賢明なる態度であつたと思ふ。若し左傾團體がこの精神により飽く迄も隱忍してゐたならば、今日の如き勞働農民黨の分裂を見ることはなかつたかも知れぬ。私はこの意味に於て左傾團體が先般來急激に積極的態度を取るに至つたことを悲まざるを得ない。

私は凡ゆる思想に對して寛大なる態度を取りたいと思ふ。思想征伐の如きは私の最も好まないところのことである。故に私は共産主義の思想に對しても共鳴する點が少なくない。少なくとも凡ゆる思想に對して相當の敬意を拂ふことが私共の取るべき途ではないかと考へる。然し政治は思想にあらずして實行である。勿論政治から全く思想を除外することは不可能であるけれども、政治の本質が主として實行にあることは言ふ迄もない。換言すれば私は思想としての共産主義に對して寛容の心を有するけれども、政治的立場から見た共産主義には寧ろ反對の態度を取らざるを得ない。これは單に私一個の考ではなくして、勞働農民黨を脱退した勞働組合員多數の心ではあるまいかと推測する。

何故に私共が共産主義者の態度に反對するかといふに、其主たる點は共産主義者がマルクスの所謂階級鬪爭の意義を極端に解釋して居るといふ點にある。私共は決して階級鬪爭といふことを否認するものではない。然し私共は共産主義者の如く腕力に訴へても特權階級に反抗すべしといふことには同意することが出來ないのである。共産主義者はその理想を實現するためには革命手段によることをも辭しないのであるが、私共はこれに對して全然同情を表することが出來ないのである。私共は飽く迄も議會政策によつてその目的を達せんことを希望して居る。私共が政黨を組織する目的は私共の代表者をして議會の過半數を占めさせんとするにある。この合法約手段によらずして、寧ろ革命手段によらんとする位ならば、私共は議會運動などを全く中止することが適當ではないかと思ふ。勿論これに對して共産主義者の側から相當の意見が提出せらるべきことは私が豫期するところであるけれども、私が以上述べたことは單に共産主義者と私共との意見に大なる相違のあるといふ事實を示すに過ぎないのである。

以上述べた如く共産主義者の考へて居る實行方法と私共の主張して居る手段との間には可なりの相違があるけれども、結局これは私共が議論を戰はして居る間のみに限られるのであつて、一度實際政治の境界に進むに至れば、上記の相違も殆んど消滅するのではないかと思ふ。若し右傾分子及左傾分子の代表

者が議會に送られたと假定すれば、彼等は尙ほ其の時に於て各自の意見を固守するであらうか。議會に於て取扱はれる問題は何れも實際的である。革命手段といふが如きことは全然これを表明する機會がないのである。其結果左傾的の人でも右傾的の人でも實際問題に立脚して意見を戰はさねばならぬことになる。この時に於て右傾的代議士も左傾的の代議士も共に無產階級の代表者であるといふ立場から、共同戰線に立つことの出來ぬ筈はないのである。換言すれば今日左傾右傾と二つに分れて相爭ふてゐても、少數の無產階級代表者は必ず議會に於て握手することが出來ると信ずる。

私が勞働農民黨の中央委員として推薦された時私は左傾右傾の問題に就いて熟考したのである。然し前に述べた如く、無產階級を代表して議會に送られたる人々の間には決して左傾右傾といふことのために一致團結の出來ぬといふ事情は生じないであらうといふことを私は考へた。これがため私は快よく中央委員たることを承諾したのである。且つ私は微力であるけれども、出來得るだけ左傾分子と右傾分子との調和を計りたいといふことをも考へたのである。故に左傾團體が當分勞働農民黨に加入することを遠慮したといふことは私の立場から見ても最も喜ぶべきことであつた。前に述べた如く右傾派も永久に左傾派を排斥するといふが如き考を懷いてはゐなかつた。若し政黨の基礎が確立さへすれば左傾派の人々が加入することも敢て差支へはないといふ極めて寛大な心を有してゐたのである。

然し左傾團體の所謂遠慮といふことは有名無實に過ぎなかつたように思はれる。右傾派の人々の言ふところによれば、左傾派は絕へず農民組合の內にその勢力を扶植することを怠らなかつたようである。殊に勞働農民黨の支部が各地に設けられるやうになつてから、左傾派の運動は益甚だしく、各支部の幹部には共產系の人々が可なり多く入り込んで居るといふ評判もある。從つて各支部を承認するか否かといふことは本部に於て可なり重要にして且困難なる問題となつた。私は此等の風說が果して何れの程度迄事實であるかは確言し得ないけれども、農民組合の間に多少左傾的の分子があることは疑ひなきことのように思はれる。言ふ迄もなく組合員が左傾して居るといふが如きことは考へられない。農民の性質は概して保守的なものであるから、彼等の間に共產主義が果して勢力を占め得るか否かは疑問である。但し農民運動に指導者として働いて居る人々は多く知識階級に屬して居るのであるから、共產主義を奉じて居る者の少なくないことは容易に想像することが出來る。これが勞働農民黨の發達に大なる妨害となつたことは爭はれぬ事實であ

る。何となれば支部の大多數は農民組合であつて、勞働組合は殆んど全く傍觀者の位置に立つてゐたからである。私共は一時勞働總同盟を初め其の他の勞働組合が勞働農民黨に對して餘りに冷淡であることを不快に感じたこともあつたが、黨内に於ける左傾派の策動を考へる時には、彼等の態度が必ずしも非難すべきものでないことも判つたのである

本年の七月二十六日大阪に於て開かれた第四回中央委員會は可なり多く人々の注意を惹いたのである。何となれば委員會に於て左傾派の問題に關し激論が行はれるであらうと豫期されたからである。警察側からは十數名の警官及角袖が隣室に陣取つて、會議の經過に大なる注意を拂つた位であるから、その會議が如何に緊張裡に行はれたかを推測することが出來る。二三の問題を討議した後左傾派除外問題は提出された。勞働總同盟の代表者は先づ起立して委員會は前回の決議通り嚴重に左傾團體を除外するにあらざれば勞働農民黨の發達は決して望むべからざることを論じた。賀川豐彥君も私も同一の意見を述べたのである。農民組合の代表者は五六名に過ぎなかつたのであるから、多數を占むる勞働組合の代表者の意見は終に可決されたのである。私は農民組合の代表者から相當に強硬なる意見が提出されることを豫期してゐたのであるけれども、彼等が全部この問題に關して多く發言しなかつたのは全く案外のことであつた。私共は兎に角左傾團體除外問題が再びこの會議に於て確定的となつたのであるから、勞働農民黨の前途に幾分か光明を見ることが出來るように感じた。

然し私共の豫想は全く裏切られた。勞働組合は依然として傍觀者の態度を繼續した。これは私の推察だけかも知れぬが、勞働總同盟の如きは農民組合の誠意に對して尙少なからぬ疑惑を有してゐたらしい。私はこの點に關して農民組合と勞働總同盟との何れに責任があるかを明言することが出來ない。私は大阪の中央委員會に於ける決議によりて左傾派團體の問題は大部分解決されたものと考へてゐたけれども、勞働總同盟は決して私の考へる如くには簡單に考へてゐなかつたのである。言ふ迄もなく私は一の門外漢に過ぎないけれども、勞働總同盟は大なる團體であるから、各方面より得た材料によりて農民組合と左傾團體との關係に就ても比較的多くの報告を得て居るらしい。而して勞働同盟の推測が正確であつたと思はれる事實が其の後引き續いて生じたのである。第一は勞働評議會の大會が從來の遠慮主義を放棄し、積極的に政黨へ加入すべきことを議決したことである。これは確に右傾派に對する挑戰と見ることが出來る。勿論評議會の側からいへばこの決議には相當の理由がある

ものと考へられる。彼等が政黨加入を遠慮することにより勞働組合が全部勞働農民黨に加入して實際的運動を起すのであれば、彼等は何時迄も政黨加入を遠慮する理由があるけれども、勞働組合が飽く迄傍觀的態度を續けるならば、自分等は最早や遠慮する必要がないと考へたのであるかも知れぬ。

その意見の正否は別問題として、兎に角評議會の積極的行動が勞働組合の脱退を促進するに至つた原因であることは爭はれない。私の推測するところによれば勞働總同盟及其の他の勞働組合が脱退を決意したのはこの時ではなかつたと思ふ。然し農民組合の態度如何によりては、來年開かれることになつてゐる勞働農民黨大會迄勞働組合はその脱退を決行しなかつたかも知れぬ。然るに十月二十四日に於て開かるべき勞働農民黨中央委員會に先だち農民組合中央委員會は左傾團體のために門戸を開放すべきことを決議したのである。これがため勞働組合及私共が辛ふじて繋いでゐた一縷の望も全く絶へてしまつた。其の結果二十四日に於ける中央委員會に於て勞働農民黨の分裂が事實となつて現はれたのである。

然し私は勞働農民黨の分裂を悲むものではない。何となれば今度の分裂は出來得るだけ善意をもつて行はれたからである。若し同一黨内に左傾と右傾の分子があつて、互にその論爭を繼續すると假定したならば、其の結果はどんなになることであらう。必ず双方の間に激烈なる反感を生じ、終には仇敵の如き思ひをもつて分裂することになるであらう。此の如くなれば將來に於て再び共同戰線に立つが如きことは絶體的に不可能である。これを思へば私共の感情が未だ高まつてゐない今日に於て手を分つといふことが最も賢明なる方法であるように思はれる。二十四日の中央委員會に於て、未だ議事に入らざる前に於て脱退者が退席したといふことも上記のことを考へたからである。若し中央委員會に於て左傾團體除外問題が提出されたとせんか、左傾派と右傾派との間には可なり激論が行はれたに相違ない。勿論最後の決議に於ては右傾派が多數を占めるとしても、それは單に少數派の感情を激せしむるだけのことであつて何等の益はない。若し兩派の調停が行はれぬものとすれば、寧ろ全く議論を避けることが双方のために得策であるといふことが私共の考へであつた。

單一政黨といふことは確に理想であるけれども、氷炭相容れざる二分子がある場合には寧ろ二つの政黨を組織することが全體のために利益である。卑近な例をもつていへば、老夫婦と若夫婦とが別居するようなものである。親子である二夫婦が同居して一の家庭を作るといふことは理想に相違ないけれども、若

し二夫婦の間に面白からぬ感情が生ずる場合には一日も早く別居するに加くはない。而して別居といふことは親子の關係を薄くするものではなく、却てその親密を増すことになる。朝夕同一家屋に住居すればこそ二夫婦の間に感情の衝突も起るけれども、一度別居して折々接近することになれば兩者の關係は以前よりも必ず幸福になる。私は勞働農民黨の分裂に就いても同様のことを言ひ得ると信ずる。これがため私は勞働黨の分裂に對して何等憂ふるところはないのである。

勞農黨の分裂と今後の形勢

赤松克麿

一

創立以來、内部に不安の空氣を漂はしてきた勞働農民黨は去る十月廿四日の第四回中央委員會に於て、遂に分裂するに至つた。去る六月廿日大阪に於ける全國勞農組合會議設立協議會の破綻によつて、無産階級の經濟戰線が分裂したのであるが、今度は、その政治戰線が分裂することになつた。これらの二個の事件によつて、我國の無産階級戰線は、經濟的にも政治的にも、はつきりと左右兩翼の對立を見ることになつたのだ。共産派の所謂共同戰線論に、茲に至つて完全に破綻を示したのだ。

顧れば、「共同戰線」といふスローガンが造られたのは、大正十年の七月、モスコウで開かれた第三インタナショナル第三回大會であつた。更に同年の末、第三インタナショナルの執行委員會と赤色勞働組合インタナショナルの執行委員會とが聯合委員會を開いて、「共同戰線」の宣言を發表したのであつた。しかして此のスローガンは、ロシアを中心とする共産勢力が、一擧に世界の勞農大衆を風靡しやうとした當初の計畫が旨く行かないで、案外にも反共産黨的大衆の根強いのを看取した結果として、案出されたものであつた。つまり、喧嘩面の一點張りでは調子が惡いので、相手に對して、右手では穩かな握手をし

ながら、左手では財布を引き抜かうといふ悧巧な戰術に出て來たのであつた。しかしながら此の陰險な共同戰線論は、世界的に見て、大體に失敗の歴史を重ねてゐる。例へば、英國に於ても、勞働黨は何遍か共產黨の加盟申込を拒絕して居る。此のモスコウ原產の共同戰線論が、我國に輸入されたのは大正十一年であつた。そして足掛け五年間に亘り、モスコウ原產品の直輸入商人の一群が、あらゆる懸命な努力を注いで、所謂共同戰線の確立を企てたにも拘らず、事實は却つて反對の結果を示し、遂に前述の二個の事件によつて、その完全なる破產が宣告されたのであつた。之れ我國無產階級運動の一段階の進展を示すものである。

二

勞働農民黨は、去る三月五日大阪土佐堀靑年會館に於て結黨式を擧げたのであるが、此の結黨式は前後二回に亘る無產政黨準備懇談會（一月十二日と二月十三日）と一回の無產政黨創立委員會とを經過したものである。しかして二月十三日東京市外玉姬倶樂部に開かれた準備懇談會では、評議會、政治研究會、無產靑年同盟、水平社靑年同盟は、その幹部たると平會員たるとを問はず、共產主義的色彩あるものは、絕對に入黨を拒絕すること、並に其他黨の綱領規約に反する者は一切拒絕することを、滿場一致申合せたのであつた。日本農民組合が此の申合せに同意したことは勿論である。次いで三月三日の大阪中の島公會堂に於ける無產政黨創立委員會は、前記玉姬倶樂部の申合せを完全に繼承したのである。更に三月五日の黨の結黨式が、右の申合せを構成方法の一精神としたことは云ふまでもない。越えて三月五日の結黨式終了の直後、第一回中央委員會が開かれたが、そのとき次の聲明書を發したのである。

「本黨は勿論一般大衆の參加を熱望するものなるも、黨將來の健實なる發達を圖るため、特に此の際、次期中央委員會開催までは、左記團體に屬する個人のみを勸誘するものとす。日本農民組合、日本勞働總同盟、官業勞働總同盟、東京市電自治會、司厨同盟、日本勞働組合總聯合、製陶勞働同盟、海軍勞働組合聯盟、日本海員組合、大阪市電自助會」

右に述べた經過によつて明瞭なるが如く、共產派排斥は勞農黨創立の根本精神の一つであつたのだ。共產系勢力と共同戰線を張ることが、黨の健實なる發達を期する所以でないことは、創立當事者の間に一致して認識された事柄であつたのだ。即ち此の政黨は、共產派の希望するが如き所謂全國的單一政黨では最初からなかつたのである。重ねて云ふが、農民組合は、創立

當事者の重要なる一員であつた　ところで去る七月廿六日、大阪で開かれた第三回中央委員會は、共産系排除の精神を更に徹底して、評議會、無産青年同盟、大衆教育同盟等（水平者無産者同盟は考慮）の共産系勢力を一切排除すべきことを、滿場一致を以て可決したのであつた。之れによつて勞農黨は、反共産黨たる色彩を、最も明白に發揮するに至つたのである。」

三

右の過程に至るまで、各當事者の意見が、圓滿に一致して進んで來た譯ではなかつた。總同盟は共産系排除の急先鋒であり、農民組合は共産系の取扱を寛大にしやうとする最も熱心な主張者であつた。そして此の兩者は、黨の最も重要なる構成分子であつて、此の二者の握手は、黨の發展を意味し、その決裂は黨の致命傷を示すものといつても差支ない程であつた。農民組合の好漢山上武雄君の如きは「我々は總同盟との關係を善くやつて行きさへすればよいのだ」などゝ、放言した位であつた。ところで此の二者の間には、いつも多少の意見の喰ひ違ひがあつた。そこに黨の不安もあつた。總同盟の方からいへば、共産派を排除すると云ひ乍ら農民組合の對共産派の態度政策には、どこかルーズな點があつた。しかして第三回中央委員會以後の農民組合の態度には、段々怪しい節が見えて來た。特に關西地方の農民組合支部の組織する勞農黨支部には、共産系分子が續々と加盟した。そして又、此等の支部は、共産派機關紙「無産者新聞」の提唱する「議會解散請願運動」に參加した。一方共産派は、從來の頽勢を盛り返さんとして最近所謂進出運動を起し、その目指す所は、勞農黨の門戸を開放せしめて、之を我手に奪還せんとするに在つた。しかして共産派はその目的を達成するために、農民組合に最も強く働きかけたのであつた。それがまた最も有効な戰術でもあつた。共産派は、自派の諸勢力を動員して、十月十九日、大阪九條市民殿に於て議會即時解散請願運動を題目として、全國無産團體協議會なるものの開催を目論むに至つた。關西地方の農民組合を主勢力とする勞農黨支部は、之れに參加する形勢が見えた。玆に於て勞農黨本部も事態容易ならずと見て取つて、三輪書記長は、十月十七日、正式に全國協議會參加の各支部に通牒を發し、その不都合を難詰し、會議參加の中止を命じたのである。

農民組合員の奇怪なる行動に對して、總同盟其他の幹部は、內心頗る不安の念に驅られつゝあつたが、しかし農民組合出身の黨中央委員から何んとか警告があるだらう、特に杉山黨中央委員長は、農民組合長でもあるのだから、農民組合員の輕擧盲

動に對しては、十分戒告する所があるだらう、と我々は私かに期待して居つた譯だ。ところが農民組合員の黨規違反の行動は益々劇しくなるばかりであつて、しかも組合幹部は之れを戒飭するどころか、却つて共産派の威勢に壓迫される有樣であつた。此の形勢に對して、總同盟の一部幹部は、農民組合をして共の行く道を誤らせたくないといふ親切心からして、總同盟第十五年度大會が大阪に開かれたのを機會に、十月五日の夜、農民組合の一部幹部と會見して、農民組合の自重を說き、組合内部の極左派の妄動を制肘するの必要を勸告したのでつた。農民組合の幹部は總同盟側の意を諒として、自ら組合の内部を整理すべきことを約して別れたのである。若し此の時、農民組合幹部にして、總同盟側の切なる勸告を容れて、組合内部の整理を斷行したならば、たしかに勞農黨今日の大分裂を見ないで濟んだのであつた。

　總同盟は大阪の大會に於て、共産派の進出運動に對しては、積極的に對抗する腹を決め、勞農黨の門戶解放に對して、絕對に峻拒する決意を示した。そして若し農民組合にして眞に總同盟と隔意なき信義の上に協調を續け得るならば、勞農黨の前途にも一縷の光明があるやうに感じられた。ところが十月十四日に至り、農民組合の一幹部は、突如總同盟の一幹部を訪ねて、先晚相約した農民組合の自己整理は、到底望みなきことを通告して來た。かくて總同盟が農民組合に示した最後の誠意も、空しく水泡に歸したのである。殘念ながら農民組合は共産派の進出運動に打ち負かされたのである。しかして勞農黨の重要構成分子たる此の二組合の好意的關係は、此の日を以て決裂し、從つて、勞農黨分裂の胚種は、正に此の日に植えつけられたのであつた。

四

　共の後の農民組合の行動は、全く軌道を踏み外して、共產派の意のまゝに引き廻された感があつた。無產者新聞の提唱した議會解散請願運動全國協議會は、十月十九日大阪市九條市民殿に開催されたが、之に對し、勞働黨本部からの中止命令があつたにも拘らず、農民組合員を含む多數の勞農黨支部又は支部聯合會は之に參加し、更に又、農民組合の縣聯合會又は單獨組合にして之れに參加したものもあつた。此の協議會は、一議案である。勞農黨第四回中央委員會に對し門戶を解放し既設支部の無條件即時承認を要求すること、を可決し、更に、緊急動議として提出されたところの、農民組合擴大中央委員會に對して門戶開放の方針を以て勞農黨中央委員會に出席されんことを希望

することゝを可決したのである。此の協議會は、共産派の勢揃ひであると共に、一面に於て、農民組合擴大中央委員會に對する示威運動でもあつた。次いで十月二十日及二十一日に開かれた農民組合擴大中央委員會は、左翼と右翼との間に、可成りの論戰が交へられたけれども、結局、左翼の暴論が壓倒的氣勢を示して、遂に、農民組合は議會解散請願運動に贊意を表すゝこと、勞働黨第四回中央委員會に對し門戸開放の提案をすること等を決定したのであつた。かくして共産派の策は功を奏して、農民組合を左翼陣營に引きづり込んだのである。しかして勞農黨分裂の危險は、愈々確實性を示したのである。

果然、十月二十四日協調會館に開かれた勞農黨第四回中央委員會は、總同盟等五團體の脱退となり、知識階級を代表する安部磯雄、賀川豐彦兩氏も續いて脱退し、餘す所は農民組合と製陶同盟とのみになつた。その製陶同盟も、出席代表者が自稱代表者なることが判明し、去る十一月一日正式に脱退するに至つた。脱退者の理由は必しも一樣ではないが、總同盟は「黨構成の重要分子たる農民組合と、吾が總同盟とは、共産派排除といふ根本的重大なる問題に就いて、意見を異にすること明瞭となり、從つて協力一致して、黨の健全なる發達を圖る望みなきことが明瞭となつたので」斷然脱退するに至つた旨を聲明し、賀川豐彦氏は、農民組合が政治道德を重んじないが故に之れと協力する能はざる旨を言明した。農民組合を除く各團體及個人が、かくまでに事つて勞働黨に見切りをつけやうとは我々も豫想しないところであつた。

五

右翼團體が、あくまで勞農黨に踏み留つて黨の健全化のために努力するのが至當であつて、黨を脱退することは輕擧盲動であると難ずる論者もあるやうに見受けるが、それが善意の忠告だとするならば、現實に對する認識不足から生れた議論だと云はざるを得ない。若し黨の組織方針に關して、農民組合の意見を容れ、左右兩翼が同一の傘下に結成するとしたならば、黨の内紛は限りなく繰り返されて、黨の積極的發展は何等期し得られないであらうことは、少しく現實の事情に通ずる者の容易に首肯する所である。かの共産派の唱ふる共同戰線論は問題外とするも、形式的な大義名分に拘泥した階級單一政黨論は、現實問題としては、一個の空想論である。むしろ指導精神を異にする集團は、各々別個の政黨を組織して、その上で個々の政策につき、共同戰線を張り得る場合に張ることにした方が、眞に合理的な共同戰線であつて、且又さうした方が無產階級戰線の全

點から見て優に能率を上げることが出來る。

勞農黨は農民組合の左翼化によつて、右翼政黨から左翼政黨へ轉化した。此の黨には既に評議會其他の左翼團體員が加盟して居るが、今後といへども、彼等は大手を振つて加入するだらう。左翼は勞農黨を其の掌中に收めたのである。我々のかへすがへす遺憾に思ふことは、農民組合幹部諸君の心なき仕業である。都市勞働者の團體が、共産派との共同戰線を拒絶しつゝある今日、最も保守的傾向を有する農民大衆を抱容する農民組合が共産派と協力するとは、我々の了解に苦しむ所である。農民組合の幹部諸君は、果して眞に農民大衆の意志を忠實に代表して居るだらうか。諸君の意志は、土に生き土に死ぬる農民大衆の意志を離れて、或る職業的革命家の一團の意志に追從しては居ないだらうか。我々は我國農民運動の健實なる發達のために、農民組合幹部の三省を促して止まぬものである。

六

勞農黨が左翼的立場を取るに至つた以上、右翼的立場に立つた大衆政黨が出現するのは當然の成行でなければならぬ。これにつき我々は如何なる政黨を要望するかといへば、第一、黨の指導精神がロシア直傳の共産主義にあらずして、現實主義的社會主義であること、第二、黨の構成が組合聯合體にあらずして、組合に偏しない一般大衆的であることを要する。黨は無産大衆の政治的經濟的社會的地位の向上をはかりつゝ、資本主義の根本改造を志向するものでなくてはならぬ。それと同時に、其の手段方法は飜譯的にあらずして、特殊的國情に立脚したものでなければならぬ。そしてまた、黨の態度は公黨の面目を發揮するに足る公明正大性を保持しなければならぬ。神經衰弱的な、陰謀的な、狂燥的な、相場師的な政治運動は、健全なる無産大衆政黨の取るべき軌道ではない。

また黨の構成が勞農組合を中心とすることは之を避けなければならぬ。かくすることは政黨の順調なる發達を阻害すると共に、勞農組合の健實なる發達をも毒するものである。現在、我國の組合は、思想的標準に於てこそ一人前の格構をして居るけれども、その陣容に於ては極めて未發達の狀態にある。我々は尙ほ勞働組合主義の發達を圖る必要があり、しかして其の發達の餘地が多分に在ると信じて居る。共産派理論家のいふが如く、我國の資本主義は既に回復することなき恐慌に襲はれて居るがために、勞働組合發達の餘地がなく、從つて一切の經濟鬪爭を轉換し、以て斷末魔の資本主義に對して最後の決戰を試むべきだとする主張には、我々は根本的に意見を異にする。世界

の資本主義が崩壊期に立つて、その一環たる日本の資本主義も断末魔にあるといふことは、驚くべき非科學的なる獨断であつて、我々は斯くの如き認識の下に政黨を指導し組合を統制しつゝある共産派諸君の大膽不敵さに喫驚せざるを得ない。第三インタナショナルの宣傳的修辭の尻馬に乗ると、我國の無産階級運動を飛んだ方向へ向けることになる。

組合が政治運動に沒入することは、我國現在の状態から見て確かに不可である。組合は自己に有利なる政黨を支持すべきではあるが、組合として直接政治運動の衝に當らずして、組合員が個人の資格を以て自由に政黨に加盟すべきである。しかして組合は組合として自己の充實と發達とに專心すべきである。來るべき新政黨は、組織勞農階級に偏することなく、未組織大衆、進歩的中產階級分子をも廣く抱容し得るものでなければならぬ。英國勞働黨の如く、黨員の九割九分までが勞働組合であり、黨の主體が大組合の聯合であり、各組合員が會員數に應じて定額の會費を出し、以て勞働黨の經濟的基礎を確保して居るやうなことは、我國の現狀に於て到底望まれない。我國の無產政黨は我國特殊の道を歩むより外はない。

勞農黨の分裂

山川均

一

ブルジョアジーとプロレタリア、新しい投票の餌に喉を鳴らす既成政黨と、この投票を商品としてブルジョアと取引きしようとする仲買人、無產大衆の政治勢力を踏み台にしようとする既成政黨の落武者と小ブルジョア・デモクラット、無產農民の力によつて、都市の商工資本と利潤の配け前を爭はうとする地主の階級——一言にすればあらゆる階級——の注目と凝視のうちに生まれた勞働農民黨は、十月二十四日五日に亙つて第四回中央委員會を開催した。

「これより先き、黨は創立の當初から、昨年結黨式を擧げて忽ち解散を命ぜられた農民勞働黨に對する官憲の態度に鑑がみ、資本家及び官憲の喜ばない勞働組合評議會その他の四團體の自發的の『遠慮』を要求すると同時に、四月九日の第二回中央委員會は右の態度をつゞけつゝも、なほ且つ原則としては、有ゆる無産者團體と無産階級分子とに對して、黨の門戸を開放するといふ、極めて當然な決定をしたのである。しかしながらこの決議があつたにも拘らず、實際においては評議會その他の四團體に對しては、依然として從來の『遠慮』が要求され、四團體もまた四圍の情勢に鑑がみてこの自然的の『遠慮』をつゞけてゐた。そこで第二回中央委員會の決定は、一面に於いては評議會その他の四團體を無産階級の政黨から排除せしめようとする官憲の意圖と、この官憲の意圖と必然にか偶然にか同一の意圖を抱き、必然にか偶然にか共同戰線に立ち、そして若し意の如くならぬ場合には、何時でも黨を破壞して逃げる機會を窺つてゐる勞働總同盟とに對する或る點までの讓歩妥協を意味したものであつた。けれ…これと同時に第二回中央委員會の決定は、有ゆる無産階級分子に對して、原則としては黨の門戸を開放するといふことによつて、黨は官憲と勞働總同盟との意圖に、必ずしも全然屈從するものでないことを示したものであつた。」

然るに七月二十六日の第三回中央委員に於いては、この問題は勞働總同盟出身の中央委員によつて再び議題に上ぼされた。そして勞働總同盟を代表する委員が脫退をもつて中央委員會を脅迫した結果、委員會は無定見にも三ケ月前の決議をひるがへし、勞働組合評議會その他の四團體の排除を積極的に決議したのである。かやうに勞働黨の中央委員會は、勞働總同盟が黨を破壞しようとする積極的の運動（消極的のサボターヂは最初から續づけてゐたが）を回避する目的のために、完全に、官憲と勞働總同盟との共同の意圖に屈從したのであつた（中央委員會のかやうな判斷の正否は別問題である）。

然るに官憲と勞働總同盟との意圖に屈伏して、勞働農民黨をして事實上、もはや有ゆる無産階級要素を結合する階級的單一政黨たる性質を失はしめんとするに至つたこの第三回中央委員會の決定に對しては、現に組織せられてゐる黨支部がこぞつて反對した、勞働總同盟がその組合員のみによつて、水入らずで作つてゐる一二の支部は例外である）。のみならずこの反對の氣勢は、第四回中央委員會の期が迫るに從つて、澎湃として全國に高まつてきた。なぜならば現におの／＼地方において組織せられてゐる黨支部は、極めて稀れな例外を除いては、その地方における有ゆる無産階級要素を包容した事實上の階級的單

一政黨の性質を備へたものであつて、若しこれを理由として中央委員會がこれ等の支部の承認を拒むなら、黨は事實上に消滅してしまふからである。この事實は官憲と勞働總同盟との共同の努力と猛烈な逆宣傳（ブルジョア新聞は常にこの逆宣傳を助けてゐる）とが行き渡つてゐるにも拘らず、尚ほ且つこの逆流を押し切つて、有ゆる無産階級要素が一つの政治勢力に結合してブルジョアジーの政治勢力に對峙しようとする恐ろしい力の現はれであつて、從つてまた單一政黨主義の主張が、如何に無産階級の切迫した要求に根ざして居り、從つて無産大衆から如何に熱烈に要求され支持せられてゐるかを示したものである。

官憲と勞働總同盟の指導者とは、單一政黨主義の主張者に『共産派』『共産系』といふ烙印を押すことにより、大衆を恐れしめてこの正しい主張に打ち勝たうと試みた。これが彼等の唯一の戰法であつた。この戰法は最初のほどこそ多少の効果を奏したが、今日では、もはや反對の結果を現はしかけてゐる。かつては『共産派』と呼ばれることを恐怖した大衆は、彼等の逆宣傳の結果として、『共産派』の烙印を押されることが少しも恐れるに足りないこと、現に彼等から『共産派』と呼ばれてゐる分子こそ、最も信頼するに足る協力者たることを、事實によつて經驗したのである。大衆は、ブルジョアの政治勢力に對抗する唯一の方法は無産階級の有ゆる要素の結合であり、單一無産政黨であることを感じてゐる。若しこの切實な要求に從つて行動するために『×××』と烙印せられるなら、『×××』といふ烙印を受けてもこの要素に從つて行動する――これが官憲と勞働總同盟との逆宣傳に對して、大衆が支部の組織といふ實行によつて答へた答であつた。

のみならずこれ等の支部は、殆んどその悉くが、謂ゆる『左翼分子』の活動に待つて組織せられたものである。官憲と勞働總同盟とに喜ばれぬ四團體に屬する人々は、黨の中央機關ばかりでなく、これ等の地方支部からも自發的に『遠慮』してゐるにも拘らず、彼等の報ひられない椽の下の力もちが、全國に亘る黨の實際の組織を形成したのである。そこでこれ等の『左翼分子』を排除することは、これなくしては黨の組織の存立しない活動分子を排除することを意味してゐる。そこで第三回中央委員會の決定は、原則の上からも、勞農黨がこの使命とする無産階級の單一政黨たることを自ら拒否したものであるばかりでなく、實際の上からは、黨がその活動の力と存立とを自ら拒否したものであつた。即ち第三回中央委員會の決定は、勞働農民黨が自分自身でその生命を拒否したものであり、自分自身の手でその頸に麻縄を巻きつけたものであつた。否一層精密に云ふ

ならば、自ら絞殺の下手人となることを好まぬ支配階級は、その協力者を使つて、勞農黨をして自ら縊れしめようとしたのである。

そこで反對の氣勢は、澎湃として全國に高まつた。近づき來る第四回中央委員會に對する門戸開放の要求と現存支部承認の運動とは、官憲と勞働總同盟とその逆宣傳の道具に利用されるブルジョア新聞とによつて、『共産派の勞農黨乘取り運動』として宣傳せられたにも拘らず、事實はこの神經衰弱者の手から、自殺の兇器をもぎ取らうとした運動であつた。この宣傳に對しても、大衆は正しい判斷をしたのである。

この大衆の要求は、勞働黨の中堅要素たる日本農民組合の上に、勢ひ最も有力に響かざるを得なかつた。第四回中央委員會を眼前に控へて開かれた十月二十日二十一日日本農民組合最初の擴大中央委員會當時に陷入つた過失を棄て、黨の門戸解放の主張を明かにした。越へて二十三日に開かれた勞働總同盟の中央委員會は、これに反して、あくまで『共産系四團體及びその色彩あるもの』を除外する』決議をした。早くも『勞農黨の分裂』が傳へられた。

『門戸開放の動議を徹底的に排斥し、採決に入ることなく、五委員退場のこと』、これが勞働總同盟中央委員會の決定であつた十月二十四日『國民新聞』)。黨中央委員會の豫想は、出席委員二十一名で、四團體排斥の主張は一票の差で勝利を得る筈であつた。そこで二十三日の總同盟中央委員會の決定は、この問題がどうならうとも、總同盟は從來の消極的サボターヂの態度から積極的破壞の運動に移る決意を宣言したものである。

二

勞農黨が謂ゆる(特に謂ゆる)分裂した第四回中央委員會の直後、十月二十六日の紙上において、『東京朝日新聞』は『勞農黨の分裂』と題する社説をかゝげ、特に『總同盟の責任を論じて『今次とつた所の態度は、吾人の賞賛を難しとするところである』と云つてゐる。『東京朝日新聞』は決して無産階級を代表する新聞ではない。況んや『共産派』や『左翼』に同情を有する新聞ではなくて、明らかに『評議會一派の戰術と指導精神に贊同することを得ないこと』を『勿論』としてゐる新聞である。從つてこの批評は謂ゆる『公平な』、若くは公平ならんとする批評であつて、特に興味がある。ブルジョアジーの進歩的な意見を代表する『公平な』觀察者は、總同盟の態度を次の如く見たのである。

『成立直前脱退して、第一次無産政黨たる農民勞働黨を解散の

運命にをはらせた總同盟『共産派』ないしは『左翼』の反對者たることを聲明するブルジョアジーの新聞は、第一次無産政黨禁止の責任が左翼にあつたとは見ないで、總同盟にあつたことに一點の疑ひをも挿んでゐない、然るに無産階級運動の内部―自らは左翼を以て任ずる中間派なるもの丶間には、この責任を全然、謂ゆる極左翼に負はしめようとするもの丶あることに注意せよ）が、農民組合と共に第二次無産政黨たる勞働農民黨を作つた時には、相當の決意があつたはずである。……門戸開放は黨の基礎が確立するまで待つといふ決議は、まだ發されずにゐる。總同盟脫退後の中央委員會（黨の）は賢明にもこの決議に觸れないでゐる。その程度のものである以上は、總同盟としては、もつと親切にして愼重な態度を取るべきであつたのである。……總同盟としては評議會を敵として戰ふならば、勞農黨内に止まつてこれら農民組合員（農民組合中の右翼的分子を意味す）をも防護すべきであつて、評議會來るの聲におびえて逃げ去るが如き醜態をさらけなくてもよかつたのである。また總同盟の主張の通つた七月末の第三回中央委員會において、「日本の無産階級解放のため都市と農村の勞働者間に農民のみの政黨組織を企つるものあるを悲しみ反對す」と決議しておきながら、日本農民黨に友誼團體として祝辭演説をしたる如き、出所進退の輕率にして自信なき、無産大衆の信賴を失ふなきやを恐れるのである（この總同盟は、各地の農民組合が評議會その他の四團體など丶協力の下に、勞農黨外の運動としての議會解散請願運動を行つてゐるのを見て、日本農民組合は第三回中央委員會の決議に反し黨の統制を亂すものだとし、これを脫退の主たる理由としてゐるのである！）。……今までのところを結果から見れば、總同盟は常に無産政黨をこわすことにのみ働いてゐるのである。さうして實は自らその孤立を悲しんでゐるのである……』

無産階級運動とは赤の他人であつて、しかも左翼に同情のないことを公言する一新聞の見解と、勞農黨の前書記長にして、總同盟の脫退に從つてその職を去つた三輪氏の見解とを比較するときに、吾々は一層大なる興味を感ずるものである。

『……かうなれば兩翼同罪だ、總同盟も惡い、農民組合も惡い、四團體内の愚劣な心理が、黨をしてつひにこの窮地に陷らしめたのだ、餘りにも右はむさぼり、左はあはて過ぎたことを遺憾とする。』（十月二十四日『國民新聞』）。

左右兩翼どちらも惡い、即ち左右同罪であるが、しかしながら黨をこの窮地に陷し入れた罪は左翼にある！

勞農黨分裂の全責任を勞働總同盟、即ち右傾主義者に認める

見解から、左右同罪であるがその罪は左翼にありと見る見解を經て、その責任を全然左翼に歸する第三の見解に移つてゆくと、かような見解の順次的な差異は、さらに一層教訓的なものとなるのである。

三

勞働總同盟は、勞農黨脫退聲明書のうちに、次の如く述べてゐる。

『……黨構成の重要分子たる農民組合とわが總同盟とは……根本的重大な問題についてその意見を異にする事が明瞭になり、從つて協力一致して黨の健全なる發達を圖る望みなきことが明白になつたので、わが總同盟關係の黨中央執行委員はこゝに斷然脫退するに至つたのである、吾等は經濟的にも政治的にも、共產系勢力との共同戰線を拒み、指導精神並に實際政策において大體傾向を同じくする勢力との協同を圖ることが吾等の全國大會の精神に副ふことであり、またわが國無產階級運動の堅實なる發達を促す所以であることを固く信じて疑はざるものである。』

日本農民組合や勞働組合評議會などゝ、『指導精神並に實際政策』を異にするために、絶對に相容れないとするところの勞働總同盟が、右の聲明書と『大會の精神』とに基づいて、『大體傾向を同じくする』道づれとして選んだのは、吉野作造、堀江歸一、安部磯雄三氏によつてこの度び名乘りをあげられた新無產政黨の產婆委員會なのである！この道づれの性質は、第一次無產政黨を破壞し、第二次無產政黨を脫退した勞働總同盟の『指導精神』と、今日まで無產政黨問題に對して取り來つた總同盟の『實際政策』の裏の裏を、千百萬言の註釋よりもより明白に、白日の下に無產大衆の面前に曝らしたものである。

三博士一教授の聲明書は、『今日既に無產政黨を標榜するもの所在にこれ無きに非ずといへども、吾人はこれをもつて眞に堅實なる基礎に立つ大衆の結成と認むることは出來ない』と云ひ、それ故に『理想的新政黨の誕生の產婆役としていさゝか犬馬の勞を取るは、(無產階級のためではなく)國家社會のため無用の業にあらざるべしと信ずる』と云ふのである。三氏は『我々の目論む政黨は決して既存の無產政黨を排斥するものでなく、友誼關係を保ちたい』と語られゐるにも拘らず、その聲明書が明らかに示してゐる如く、この目論見は、勞農黨を眞實の無產大衆の政黨と認めぬこと——勞農黨は無產政黨の僭稱者であるといふ見解——に出發してゐるものであつて、勞農黨に對する公然の挑戰に外ならぬ。勞農黨を、眞實に無產大衆の政

黨と認めぬ見解は、官憲が勞農黨に壓迫を加へようと欲する時に、いつでも使用する便利な見解なのである。また三氏の目論見は、(一) 國法を尊重すること、(二) 直接行動を排除して合法的運動を行ふこと、この『二つの根本方針』によつて、各方面の無産階級團體と一個人とに招待狀を發して促進會を開くといふのである。かりそめにも合法的の政黨組織を主張する者は、國法を無視して政黨を組織しようとするものでないことは自明である。また無産者運動においては、本來『直接行動』とは、主としてストライキその他の經濟行動を指すものであるが、三氏の意味は、日本のブルジョア的用語例に從つて『暴力』を指されるものと思はれる。今日、無産政黨を口にする人々のうちに、暴力主義の團體ないしは運動を頭に描いてゐるものが、たゞの一人でもあるだらうか。そこで少くとも無産政黨問題の範圍においては、すべての人々すべての團體は、合法的運動の主張者なのである。

それにも拘らず、この明らかな事實をことさらに曖昧にし、既成の無産政黨たる勞働農民黨が、あたかも『國法を尊重』せず、暴力主義といふ意味での『直接行動』を『根本方針』として『不合法的運動』を目的とする政黨であるかの如くに誣妄し、これを以つて無産階級運動の陣營内に對立的な朋黨を作る口實に供すること、これが三氏の目論見の『根本方針』であつて、官憲が勞農黨の壓迫を欲する時に、いつでも使用する戰法なのである。二博士一教授が、そも〳〵何者のために犬となり馬となつて働かんとせられてゐるものであるかは、自づから明らかである。一般に三氏の目論見が、自ら好んで窮地に陷つた勞働總同盟幹部のために出された助け船と解せられてゐるのも尤もである。

こうして二博士一教授の犬馬運動、ないしは産婆運動が開幕した。これが第四回中央委員會で打つた總同盟の芝居の中幕である。たゞこの産婆は、たゞの産婆でなくて、同時に小ブルジョア要素と勞働者との野合を取り持つなかほど人である！

四

勞農黨第四回の中央委員會の結果は、普通に勞農黨の『分裂』と呼ばれてゐる。しかしながら精密には勞農黨の分裂ではなくて、黨の實際の組織から全然遊離してゐた從來の中央執行委員會の分裂に過ぎないものであつて、黨そのものには殆んど少しの影響もない。黨の現在の組織は十一聯合會六十一支部であつて、その九割までは（なかんづくその中の活動的な支部は）、一部中央委員會の脱退のために何等の動揺をも感じない

（十二月十六日『中央新聞』）いた總同盟自身の内部にすら、脫退反對の運動が漸次に組織化されつゝある。現に總同盟に屬する（一）日本鑛夫組合足尾支部、（二）神奈川合同勞働組合、（三）關東合同日暮里支部、（四）神奈川鐵工淺野ドック支部、（五）自動車勞働組合の五組合、（六）關東合同、（七）神奈川縣聯合會、（八）關東紡織、（九）東京革工、（十）遞友同志會の五組合の少數派によつて『勞農黨脫退反對同盟』が組織せられてゐるのであつて、總同盟の積極的破壞行動への進出が、勞農黨の分裂はさておき、總同盟自體の分裂に終らなければ幸ひである。

然しながら勞働總同盟の指導者と、これと『指導精神』と均しくする人々によつて率ゐられる相當數量の組合勞働者は、彼等と共に、小ブルジョア自由主義者の指導に引渡され、勞農黨以外の別個の政黨――無産政黨の名を僭稱する小ブルジョア黨――に結合されるにちがひない。これは單一無産政黨の幻滅であらうか。

この疑問に對して然りと答へる者は、勞農黨の結黨式によつて、單一政黨がすでに出來上がつてゐたものゝ如く考へる幻想者であつて、總同盟の破壞運動は、この幻想の破壞にだけは見事に成功したのである。單一無産政黨の樹立は、無産階級政治運動の展開する過程――しかも困難な過程――であつて、決して一片の結社届や一創立大會によつて形式せられるものではない。單一無産政黨は、決して單なるスローガンではなくて、現實にこれを實現せしめることを目的とする主張であつた。けれどもそれと同時に、單一無産政黨は、無産大衆を階級的政治運動に動員するところのスローガンなのである。無産大衆は、單一無産政黨を實現しようとする努力と鬪爭そのものによつて、無産階級の階級的政治運動に進出する。單一無産政黨は、この實現に意義があるやうに、同時にそれを實現せしめようとすることに、その實現に劣らぬ重大な意義があるのである。單一無産政黨は、總同盟指導者らの脫退によつて、必ずしもそれ以前より以上に可能性を減じたものでもなく、謂ゆる分裂によつて、その主張の意義を失つたものでもない。否な反對に、單一無産政黨の主張は分裂以前よりも一層必要となり、一層意義あるものとなつたと云はねばならぬ。

明年度豫算案と財政計劃

堀江歸一

一　經費空前の膨脹

明年度豫算に於ける經費要求額に對しては、過日來査定に關する閣議の行はれつゝあるやに聞いたが、此程に至つて確定し、歳出は經常臨時を合せて、十七億三千三十七萬三千圓と云ふ巨額に達し、我國未曾有の大豫算として、世間の注目を惹くもの少なしとしない。若槻内閣は今や孤軍を擁して、敵の重圍に陷れるの狀に居り、其將來に於ける運命の不安甚だしきものありとされる。此窮境を脱して、内閣の爲めに、延命保身の術を講ずるには、明年度豫算案の編成に際して、成る種の經綸を施し、斯くて財政の安定、經濟社會の振興に資することを以つて、當面の急務とするのである。今吾人の眼前に示された豫算案に於て、果して此種の經綸の認められるものがあるかどうか。豫算案の編成された以上は、其處に或る計劃のあり、方針のあることは、否定するを得ないが、其計劃なり、方針なりが多く屑々たる小策か、然らずんば一種の野心を包藏する狡智に基くものであつて、堂々たる經綸を以つて、目す可からざることは、吾人の遺憾とする所である。

先づ豫算案を一瞥して、第一に吾人の眼に觸れる所は加藤内閣以來の――否憲政會在野時代以來の消極政策なるものが今や如何なる邊にも其跡を留めざる一事である。歐洲戰爭の直前から、我國に於て積極政策なるものが行はれ、政友會内閣の下に於て、其累を我國の財政並に經濟に及ぼすもの甚だしく、財政に於ては、經費の濫增と爲つて、經濟を壓迫し、大正九年の恐慌の勃發したのも、其後に於て、經濟社會の疲弊の著しいのも、一に積極政策の餘弊之を然らしめると云へる。故に憲政會が在野時代に於て、天下に呼號した消極政策に對しては、識者の同意し、贊成する勢頗る强く、同會が護憲三派の中心勢力と爲つて、加藤内閣の組織を見るを得たのも、此點に關する所識しとしない。現に私の如き消極政策を可なりとする信念から、

憲政會に好感を持ち、其政權を獲得する日の到來することに、期待を繫いだ次第であつた。斯くて加藤内閣は他の二派の意嚮如何に拘はらず、成立の當初に於て、財政上に消極政策を實行し、更に進んで同一の方針を以つて、經濟社會を指導することを期したのである。然も消極政策の適用に依つた財政上に齎された結果は如何なるものであつたらうか。大正十年度豫算に於て、經費は十五億九千一百二十八萬餘圓に上つたが、是れこそ我國近年に於ける經費の最高記錄であり、其後大正十三年度の施行豫算に於て、十七億八千五百四十四萬餘圓の經費を數へて、右の記錄を破つたのは、復興事業の關係上、已むを得ざる所であつたとしても、尙ほ十四年度の經費が消極政策の適用されたに拘はらず、十五億四千九百八十一萬餘圓に達し、震災前の最高記錄と伯仲の間に居るに至つては、吾人をして消極政策の効果如何に疑を挾まざるを得ざらしめたのである。蓋し我國に於て財政行政を整理するや、其聲は頗る高かつたに拘はらず、實際に行はれた所は或る數の官吏を罷免して、人件費を削減した一方に或る種の繼續費を後年に繰延べて、收支の均衡に一時の安きを求めることを以つて、重なる計劃としたのであつて、行政制度の根本なり、財政策の眼目なりに就て、何等の刷新改廢を施した次第ではない、一旦削除された吏務は年を經るに隨つて、復舊と爲り、往年罷免された吏員は再び雇傭される一方に、後年に繰延べられた經費も亦當然支出される時期に達したならば、經費の一時縮少されたことの如き、一場の夢と同樣、空しく消滅して、形跡すら殘さゞるに至るのである。即ち大正十四年度に於て、十五億四千九百八十一萬餘圓と爲つた經費が翌十五年度に於て十六億三千九百二十八萬餘圓に上り、同十六年度に於て、遂に十七億圓を突破して、之を超過すること、三千三十七萬圓の多きに至り、更に之に追加豫算を加算したならば、十八億圓と云ふが如き未曾有の數字が示されるであらう。從來若槻內閣の消極政策なるものは、經費を削減するを得ないまでも、其膨脹を制限するを得たと云ふことに於て、聊か當局者をして辯護の餘地あらしめたのである。即ち政友會一派の積極政策であつたならば、經費の增加、測り知る可からざるに至つたであらうに、消極政策の下に、之を抑制するを得たと云ふことが世間に對する唯一の申譯であり、又誇負する所であつたのに、其れも今は一個の空念佛と爲り、經費の膨脹、右の如き勢を示すに至つた。我國に於ては財政の局に當る者が政友會であると、憲政會であるとを問はず、經費を節約して、財政を刷新するが如き豪壯なる政策の行はれることは、望まれないのであつて、所謂消極政策なるものも、其首尾を全うする能

はざる今日に於て、早くも打切られたと見るの外はない。英米兩國に於て、千九百十九年若しくは千九百二十年度の豫算案編成に臨んで、經費に大斧鉞を加へ、或は之を三分の一に、或は之を二分の一に減縮して、國民經濟に對する壓迫を除去し、戰後疲憊した經濟社會に向つて、起死回生の力あるを得せしめたことの如きは、我國民に取つては、何處までも外國の異事珍聞であつて、遂に我國の事とするを得ない、是れ吾人の遺憾とする所である。

二　經費に關する日英米三國の狀況

英米兩國に於て殆んど徹底的と云つて憚らざるまでに行はれた經費の減縮が我國に於て行はれるを得ないのは、何故であるかといふ疑問は當然吾人の腦裡に起らざるを得ざる所である。此點に就て私は簡單なる解答を與へるに苦しまない。第一戰後の英米兩國に於て、財政の局に當つた政治家（英國に於ては、オーステン・チエンバーレン、米國に於ては、カーター・グラス）何れも一流の政治家であり、又は財政に達識ある老練家であり、加ふるに强大なる政黨の擁護を受けて居つたこと、第二固より英米兩國共に財政の縮小に依つて、一時經濟社會に打擊を及ぼすには相違ないが、平生から財政に對して、國民經濟の基礎の鞏固なる兩國に於ては、其打擊の如き、必ずしも致命的のものに非ざること、第三、國民亦戰後の財政の緊縮されざる可からざる事情に就て、確乎たる理解を持ち、政府の爲す所に對して、多大の援助を與へ、以つて之を達成せしめたことの三點とで、英米兩國をして戰後の財政整理を遂行せしめるを得た重なる理由と爲るのであつて、英國が戰時特設した諸官廳を廢止して、以つて行政費を削減したことの如き、合衆國が豫算編成法を一新して、經費の緊縮を容易ならしめたことの如き、兩國共に斯の如くして物價下落の端を開き、之を以て戰後に於ける經濟社會整理の基調に充て、國民亦爲めに生ずる物價下落の影響に堪へたことの如き、何れも上記三點の齎した效果であると云へる。

然らば是等の三點に就て、我國の狀況は果して如何であるか。我國に於て財政上に消極政策の標榜されて以來、財政の局に當つた濱口、早速、片岡の三氏は英のチエンバーレン、米のグラスに比較して、人物、力量、識見に於て、幾何の相違があるであらうか、私は此問題に對する判斷は世間の人物評論家又は讀者に任せて、何事をも云はない、唯我國に於て三氏の屬する憲政會は三派の聯合の斷絶して以來、衆議院に於ける多數の勢力を代表せず、貴族院に於ける黨與は更に少なく、常に他の黨派

の援助を求めざる可からざる地位に居り、軍閥官僚等にすら尙ほ氣兼して、所信を斷行する勇氣に缺けて居つた一方に、大正九年の恐慌以來今日に至るまで、依然として趣きを更めざる不景氣は民心を萎縮すること、甚だしく、今消極政策の下に、此勢の甚だしきを告げたならば、社會上に如何なる波瀾を生ずるやも測り知る可からずとする恐怖心は常に政府をして消極政策を標榜しながら、之を實行するに躊躇し、其方針を二三にするの已むを得ざらしめた。殊に我國の經濟生活に於ては、國家財政が特に重大なる地位を占め、國家が物資の購入者として、勤勞の雇傭者として、國民經濟を支配する勢力は頗る大なるものがある。其國家が率先して經費を縮小することは、經濟社會の整理若しくは復興の爲めに、一時の過程として、避け難き所であり、斯くて生ずる犧牲の如き、國民の甘受せざる可からざるものであると云ふ道理は一通り了解されて居つても、尙ほ其犧牲の餘りに大なることは、政府をして消極政策に猛進せしめず、國民をして之に贊同せしめざる所以と爲る。我國に於て消極政策の實行された跡を顧みて、微温的であり、其微温なるものすら、今全然排除されるに至つたのも、畢竟以上の事情に基くのである。憲政會の下に、又憲政會を助けたならば、消極政策が徹底的に行はれて、經濟的復興に資するを得べしとしたことの如き、憲政會を買被つたものであり、又我國情を無視した嫌なしとしないのである。

三　積極政策の價値如何

明年度の豫算案に於ける經費が十七億三千萬餘圓に上り、更に追加豫算を加へて、十八億圓に達しやうとする狀勢に居るのは、若槻內閣が從來より以上に消極政策を續行して、世上の不景氣を甚だしくしたり、又は景氣の挽回を妨害したりすることを以つて、政略的に不利益であるとし、今日を潮時として、消極政策を打切らんとする決意の然らしめたものと云へる。元來我國には政友會一派の主張として、積極政策に依つて、經濟社會の人氣を一新しやうとする說は永く行はれて居り、一部の實業家之に和して、憲政會並に現內閣の消極政策を以つて、不景氣を醸す原因であるが如くに附會し、政府に對する攻道具の一に充てゝ居ることは、隱れもなき事實である。政友會の主張する所謂產業立國策の如きは、要するに積極政策を換骨脫胎したものであつて、唯其代辯者が高橋氏から田中氏に代つたとの相違に過ぎない。然も今日の時勢に於て、積極政策を以つて、我國の財政を律したとして、其實現に要する經費に就ては、如何にして其財源を調達するかと云へば、增稅か、公債發行か、

二途の一を擇ぶの外に道はなく、前者を取れば國民の負擔は忽にして加重し、最近行はれた税制整理の效果の如き、一空に歸するの外なく、後者にして行はれたならば、財政を以つて金融を壓迫するの結果と爲り、景氣を挽回しやうとして、却つて不景氣を甚だしからしめるの危險すらなしとしない。政友會の産業立國策の如き在野時代の今日であり、殊に何時に爲つて、政權を獲得するか、測り知る可からざる狀態に居るのであるから、一場の放言として、差支なきもの丶、國民が此空手形に幾何の信用を拂ふかは、大なる疑問に屬する。

四　明年度豫算案の内容

憲政會や、若槻内閣は世間の人氣に悍り、又一部の希望に阿つて、消極政策を打切つたもの丶、從來の行掛りもあり、又財政の現狀を知悉する當局者としての當然の配慮もあつて、政友會の主張するが如き積極政策に移り難きは勿論であつて、斯くて明年度豫算案に掲げられた經費にした所で、聊か目星しき增加を告げたものは、昨年來の懸案であつた補助艦艇製造費の追加、新艦船の維持費、義務教育費國庫負擔增額、自作農維持創定費增額、遞信事業雇傭人給料增加等であつて、他は何々奬勵費とか、何々調査費とか云ふが如き些少の經費を合せて、結局一億四千七百七十萬餘圓の經費新規要求額を成すに至つたのである。唯此間に於て、政府の爲めに財政上一新機軸を發揮したものとして、特筆す可きは、大藏省所管に於て、國債整理基金繰入額に四千四百五十一萬一千圓の增加の見積られて居る一事あるのみである。此事に就ては、更に後段に論述するが、兎に角大正十六年度豫算案を通じて、窺はれる若槻内閣の財政方針は消極方針を打切つたものであることは勿論であるが、左ればと云つて、積極方針に就いたものでもなく、兩者の中間に彷徨して、頗る曖昧である趣きを存する。此事たる、恰も過般政府が日本銀行を慫慂して、金利步合引下の擧に出でしめながら、飽くまでも其趣意を徹底し、我國金融市場をして、緩和の趨勢に就かしめるだけの決心はなく、偶々市中諸銀行の反對に會して、彼等の間に預金利子の引下の行はれざるや、問題は之を其儘にして、將來の發展を謀らず、爲めに政府は今後如何なる金融政策を行はんとするものであるか、徒に世人をして迷はしめると同じく、財政方針に對する世人の推測を不可能ならしめるものである。從來我國の經濟社會に整理緊縮の行はれつ丶あつたことは、爭ふ可からざる事實に屬する。物價の下落したのも、金利の低落したのも、總て緊縮政策の効果であつたと云へる。唯此緊縮政策が一年とか、二年とか云ふが如き短日月の間

に其首尾を全ふする能はず、三年に及んで、尙ほ其方針の續行されることが國民に對する大なる負擔と爲り、遂に政府をして半途に其爲す所を一變せしめ、少なくとも之を緩和せしめるものとすれば、其結果は果して如何であらうか。即ち大正十六年度豫算案が成立して、實行された場合に、如何なる影響を經濟社會の全體に及ぼすであらうか、是れ吾人の考量を要する所である。

五　豫算成立の結果如何

近年我國に於て諸物價が一般に下落した一原因は爲替相場の上進に依つて、輸入品の市價に低落を來したことに存する。然も物價の低落が輸入品なり、輸入品の競爭を蒙る或る內國物資なりに止まらず、廣く一般の物資に及んで居るのは、要するに財政に消極政策の行はれて、不景氣の上塗りを爲した一方に、財政上に於ける消極政策が民間當業者を誘つて、事業の整理を促進するに至らしめた爲めである。然るに今や政府自ら消極政策の埒を破つて、經費膨脹の端を開いたならば、我國に於ける物價低落の歩調の如き、未だ歐米諸國と同一水準點に達せざる今日に於て、早く遮斷されて、次第に騰貴の勢に就くものと想像されるし、賃銀の如きも亦大體同樣の趣きを生ずるであらう。固より本年の如き米穀の豐作に際しては、一時米價の低落することはあり、米價の低落が或る程度まで、一般物資の安値を促すことはあるとしても、尙ほ財政の力に依つて、一般物價の騰貴することは、之を認めなければならず、殊に爲替相場は平價に近き所に達し、此上に騰貴する餘地は甚だ乏しく、隨つて從來の如く爲替相場の騰貴に依つて、輸入品其他の價格を低落せしめた勢にして、殆ど絕無と爲つたとしたならば、物價の騰貴は遂に避け難き所に屬する。

物價の騰貴が景氣恢復に對する一の刺戟と爲ることは、論を俟たない。然も景氣の恢復するには、從來低落の歩調に居つた物價が騰貴の緖に就くと共に、金融緩漫であつて、當分金利歩合の低廉であることを以つて、必要の條件とするのである。如何にも昨年來我國の金融は緩漫であると云へる。然も其緩漫たる、資金の供給、國內に充實して然るのではなく、寧ろ不景氣の結果、諸般の事業萎縮して、資金に對する需要の乏しきが爲めに、生じたものであつて、現に其事實は過般の日銀利下が市中諸銀行をして之に追隨せしめるを得ず、日本銀行亦第二回の利下を敢行して、諸銀行の追隨附和を强要する勇氣を持たざることに依つて、立證されるのである。果して然らば今、政府の財政策一變して、物價を騰貴せしめるとしたならば、金融上に

現はれる第一の事相は金融の繁忙であり、金利の上進でなければならず、從來の市場に於ける金融の緩和が資金の充實から來つたものでないとすれば、此種の影響は殊に急速に現はれることを覺悟しなければならない。消極政策を徹底せしめる、然も短期間内に之を徹底せしめたならば、如何にも一面には種々の支障はあるであらうが、他の一面には物價は低落する所まで低落し、財政を以つて金融を壓迫する弊は根本的に除去され、金利は低落の極に達して、充分に金融を緩和せしめ、消極政策の下に、民間事業界に整理の行はれると共に、冗費が省約され、一方に物價の低落に依る國民生活の安定と相俟つて貯蓄を增進し、民間資力の充實は健實に事業界の振興に資して、玆に景氣恢復の基礎を築く道理である。

固より經濟社會の如何に動くかと云ふことに就ても、人事百般の事相に於けると同じく、理外の理なるものがあつて、必ずしも一片の定則を以つて、之を律するを得ない。殊に國際經濟上の關係の頗る密接なる今日に於ては、外國に起つた出來事が存外の影響を内國の經濟社會に及ぼす場合がないとしない。假に今後數箇月の間に於て、合衆國なり、支那なりの經濟社會に於ける面目が一新されて、我國の物貨に對する需要に急劇なる增進を來すが如き事があるとすれば、其我國の經濟社會に振興する力と爲ることは論を俟たない。此場合に偶々大正十六年度の豫算案が實行されつゝあつたならば、政府は必ず經濟社會の振興を以つて、財政方針變更の結果に歸し、政府の施設に對して、自畫自贊を縱にするに相違ないであらう。然も斯の如きは偶然の紛れ當りであつて、其必然性を期し得べきではない、斯る偶然の事相は姑く之を措き、當然の道理から推窮すれば、我國には今日未だ景氣の恢復す可き原因は充分に具備されて居らない。(一)市中諸銀行に不良貸付の整理されざるもの依然として存在し、銀行自ら金融を緩和するを得ざる狀勢に居ること、(二)爲替相場の急騰、合衆國に於ける景氣恢復の一進一退、支那の内亂等相重なつて、我國貿易の逆勢に居ること、(三)民間經濟社會の整理も不充分であつて、國民資本の充實して居らないことの諸點は即ち之に當るものと云へる。本年上半季中に於ては、我國經濟社會は比較的順調に推移して居つたのであるが、其後に於ける狀勢は多く之を逆轉せしめつゝあるやうに見へる。此際に臨んで偶々政府が或る程度まで積極政策を加味した豫算案を編成した所で、能く大勢を挽回する望みがあるであらうか、私は其然るを信ずるを得ないのである。或は消極政策を打切つて、積極政策に一變する——否一變しないまでも、積極政策を加味して、經費の增加を企てるとすれば、其政策の及ぶ

所は眞實國本を培養し、國力を旺盛にし、幾年かの後に於て、國民經濟の振興に資するものであつてこそ、之を正當視するを得るのである。然も政府の積極政策たる、補助艦建造と教育費分擔金增加とに其端を發したに止まる。國際間を通じて、平和を重んずる風の盛なる今日、特に補助艦建造を急ぐが如き、要するに海軍側の要求を容ふして、内閣の運命を安んじやうとする以外、現内閣に幾何の所信があるであらうか、教育費增加にした所で、前議會に於て、政友本黨と妥協する一條件として、認められた約束を重んじ、次第に依つては再度の妥協を試みる楔子たらしめやうとする以外に、現内閣が之を實行するに就て幾何の誠意を持つであらうか。消極政策の打切、積極政策の採用にして、若しも斯くせざる可からずとする自信の下に行はれるものとすれば、尙ほ之を批判するに堪へるが、然らずして一時の政略に出發して、行はれるに至つては、遂に之を唾棄するの外ないのである。

六　積極政策の影響

積極政策の一端として、既に明年度の歲計に於て、經費が追加豫算を除いて、十七億三千萬餘圓に達することは、上記の如くであり、一方に歲入は十五億六千九百七十三萬圓であつて、歲入不足一億六千六十三萬餘圓を數へるに至つた。政府の計劃しつゝある第二次の税制整理が規模の頗る狹小なるものと爲り、負擔輕減の效果を國民に及ぼす望みのなきに至つたことも、此般の事情から云へば、已むを得ざる所と解される。而して上記の歲入不足は如何にして塡補されるかと云へば一に剩餘金の繰入れを財源とする計畫である。次年度に於て、經費の節約される一方に、收入に增收があり、相俟つて確實に收支均衡の維持される見込みがあるとすれば、一年度に於て、剩餘金を財源として、收支の均衡を求めることは、之を寬假するを得るが、此點に於ける次年度の見込定まらずして、漫然剩餘金利用の端を開くが如き、求めて我國財政を不安の境地に導くものであつて、財政の不信を招くの非難は何としても之を免かれるを得ない。斯る危險を冒して、財政策を一變し、漫然世間の稱贊を博しやうとするが如き、若槻内閣の迷妄驚く可しとする。而して其世間なるものも、一部の投機業者の亞流に止まらざるを得るであらうか。積極政策殊に時機に適せざる積極政策の採用が如何に我國の財政を困惑せしめるかは、遠き將來を待つまでもなく、既に目前に於て、剩餘金の繰入に依つて、財政の基礎を薄弱にし、減税計畫に要する財源を蠶食し、國民負擔の輕減される程度を低からしめる、更に將來の惡影響の恐る可きものゝ

あることは、吾人の戒心を要する所である。

七　公債政策の眼目如何

最後に殘された財政策は公債償還金增額の一事であつて、此事亦人氣取りの打算に出でたことは勿論であるが、現內閣の財政策としては、殆ど一枚看板とす可きものであり、又片岡藏相の肝膽を碎き、智嚢を絞つた結果であるとも認められる。然らば之に對して、吾人は如何なる批判を下すを得るか。元來我國に於ける公債政策ほど不定であり、又無價値であるものは、他に類を見ないと稱するを憚らない。日露戰爭後始めて減債基金制度の設けられた際には、一億一千萬圓を軍事公債の元利金支拂に供へ、前年度に於ける元金償還に依つて、節減された利拂高は之を次年度の元金償還に充て、斯くて濟崩に依つて、償還の步を進める計畫が其緖に就き、其後數年ならずして、右元金**償還高は如何なる場合に於ても、年額五千萬圓を下る可からずと云ふ方針が確定され、殆ど一種の不文律同樣のものと爲つて、**財政計畫を拘束し、公債償還を急速にすると共に、併せて公債市價を騰貴せしめることゝ爲り、更に其後數年を經て、現行制度の下に、公債の償還高は前年度首に於ける公債現在高の萬分の百十六を以つてすることゝ爲り、今回更に剩餘金の一部たる

四千四百五十一萬一千圓を公債償還に投ずる計畫が成立しやうとするに至つたのである。而して右の金額は剩餘金の百分の十三に相當するのであつて、當局者は之を以つて永遠の施設たらしめる意圖であるやに傳へられる。

今回の計畫は兎に角として、我國に於て公債政策の幾變轉したことも亦甚だしとす可きである。公債政策の目的とする所は第一、公債の現在高を減縮して、將來の信用を利用するに便すること、第二、公債市價の昂騰を期して、將來に於ける公債發行に有利なる條件を收め、併せして國家財政に對する信用の增進に資することの二點でなければならない。故に此點から云つて、公債政策には元金の償還されると共に、非募債政策なるものが伴はなければならない。然るに我國に於ては減債基金制度の下に於ける公債元金の償還はありながら、非募債政策は勵行されず、償還される公債よりも、更に大なる金額の公債が發行されて已まないのであつて、減債基金の存在に拘はらず、公債現在高は年と共に、增加すること、甚だ盛であり、大正三年末二十五億六千七十七萬圓を數へた公債現在高は同十年末には四十億四千四百萬圓に、同十四年末には五十億二千六百十二萬圓に增加したのである。加藤內閣は組織の當初に於て、非募債政策を聲明し、若槻內閣亦之に從ひつゝあるのであるが、其非募債政

額なるものは、單に公債を市場に公募せざるの意であつて、一方に郵便局を通じて、「應募者を求めたり」、預金部をして其引受に當らしめたりすることは、非募債政策の下に行はれて、之と兩立するものと解されて居る。左ればこそ、非募債政策を標榜する現內閣の財政計畫に於て、尙ほ公債現在高の滔々として增加する奇觀を呈するのである。唯之に對する唯一の辯護論は公債を市場に公募してこそ、生產業に放下される資本を國庫に吸收して、財政を以つて、金融を壓迫する掛念もあるが、公募を避けて、特別發行を爲すに於ては、此種の憂慮の伴はないと云ふことであるが、吾人を以つて見れば、斯の如きは耳を掩うて、鈴を盜むの愚を擇ばざる言である。公債に依らず、特別發行に依るときは、少なくとも一時生產資本を奪取せざるを得ることは、論者の說くが如くであらう。然も斯の如くして一方に公債が發行されて、其市價を低落せしめ、他の一方に政府自ら高き利廻りの公債を發行して、益々現存公債の市價の低落する勢を甚だしからしめたならば、實際に如何なる結果を生ずるであらうか。公債市價の低落は多くの公債を所有する銀行の資產に減價を來さしめて、其資金融通力を減縮すると共に、公債を擔保として資金の融通を求める者に取つて、擔保價格の低落を招き、兩者相俟つて、財政策の上から、金融を壓迫する弊を惹起さざるを得ない。我國に於て、往年九十七八圓を以つて發行された五分利公債の市價が八十圓臺に、九十四五圓を以つて發行された四分利公債の市價が七十圓臺に低落したとすれば、如何に特別の法律を以つて、公債を其最低發行價格に據つて、資產として計算するを得る規定が設けられて居つたとしても、結局金融を壓迫する影響の伴うものなきを得ないのである。

八　公債償還金增額の效果を疑ふ

斯の如き事情の下に於て、公債價格の恢復策が講ぜられることは、當然の處置であると云へるが、之を講ずるに就ては、政策其ものが飽くまでも合理的であり、且つ有効であることを必要とする。然らば政府が剩餘金の百分の十三を割いて、減債基金を增加しやうとする計畫は果して是等の要求に適合するものと見られるかどうか。如何にも我國の歲計に於て、年々巨額の剩餘金を生じ、之を後年度に繰越さざる可からざるに至るは、著明の事實であり、斯く後年度に繰越して、一般の財源に充て、殊に財政上に遣繰算段を行ふ方便たらしめるよりも、其或る部分を減債に投ずるのは、賢明なる方法であると云はれるであらう。然も本來、每年の我國決算に於て、若干の剩餘金を生む次年度の豫算に其繰入れられることが我國に於ては、年來の

例と爲つて居り、其金額亦増加するの常であるが、此事たる、財政の本則から云へば、甚だしき違例であつて、豫算の編成法改正の加へられると共に、編成の局に當る者が誠意を以つて、之に臨むときは、剩餘金の如き、假令ひ全滅しないまでも、今日に比較して、大に減縮せらる可き道理である。道理上、減縮することを以つて、當然とすゝ剩餘金に對する或る割合の金額を減債基金に投ずることが果して減債の効果を擧げる所以と爲るであらうか。財政當局者にして何時までも剩餘金の生ずる狀態を從來の儘に置かざる限り、減債の効果は遂に求む可からざる次第であつて、此點に就て、財政當局者の爲す所に大なる矛盾の存することが窺はれるのである。

過般の日本銀行利下は銀行業者間に甚だしゝ不評であつたが、公債償還の增額は彼等の間に存外好評であつて、甚だしきに至つては、何故に大正十五年度から、之を實行せざるやを責める者すらある。**我國の銀行業者が自家頭上の利害のみに依つて、國民經濟上の問題に兎角の批判を試みるの醜態は吾人の喜ばざる所であるが、此問題は姑く措き、公債償還の增額は其事**のみを以てして、果して公債の市價――更に廣く云へば、國家財政の信用に對して、幾何の關係を有するであらうか。公債の償還が非募債政策と併行して、始めて公債減却の効果を生ずるに至ることは、既に述べた所である。往年第二次桂內閣の組織されるや、桂公自ら首相として、藏相を兼攝し、財政整理の衝に當つたことがあるが、當時桂公は京阪銀行業者の要望に應じて、公債市價の上進を期圖し、其方法として、一方に減債基金に依る公債元金の償還高を年額五千萬圓以上とすると共に、經費の節約繰延に依つて、歲計に剩餘を求め、公債財源に依る事業費を一般歲計の負擔に移し、兎に角非募債政策の體裁を裝はしめるを得たことがある。固より經費の節約高が少なくして、繰延高が多かつたり、國民の負擔に屬する惡稅の整理改廢を後日に延期して、一意公債の整理に熱中したりした點に於て、議す可きものゝあつたことは勿論であるが、兎に角公債財源の事業費を一般會計に移した點に於て、桂公の手腕が認められるのであつて、假令ひ一時にせよ、公債市價を上進せしめたのも、偶然なりとしない。此般の事は當時大藏次官として、桂公の財政策に參劃した若槻氏なり、大藏省の一吏僚であつた濱口氏なりの記憶に存す可き所であつて、今日公債政策を樹立するとすれば、宜しゝ幾年か前に於ける桂公の故智に學ぶ可き筈であるのに、若槻內閣の下に行はれる公債政策たる、桂內閣當時のものに比較すれば、著しき遜色の存することが見出されるのである。蓋し非募債政策なるものは、加藤內閣の成立以來、財政

上の一政綱として、世上に標榜される所であるに拘はらず、實際に行はれる所は單に公債の市場に於ける公募を廢止した一事に止まり、公債が郵便局を通じて、又は預金部引受に依つて、發行されることは、必ずしも舊時に異なる所ない、現に大正十六年度豫算案に於ても、左の如き公債の發行が豫定されて居るのである。(單位千圓)

會計別	明年度	本年度との比較
一般會計	七〇、〇〇〇	減 二〇、〇〇〇
鐵道會計	五三、〇〇〇	增 一三、〇〇〇
朝鮮會計	一八、〇〇〇	增 三、〇〇〇
臺灣會計	六、〇〇〇	增 三、〇〇〇
樺太會計	二、〇〇〇	――
關東廳會計	一、〇〇〇	增 一、〇〇〇
合計	一五〇、〇〇〇	――

斯る公債の發行は之を其儘にして、一方に單に發行額に對して約三分の一又は四分の一に當る程度に於て、公債の償還額を增加しやうとする。其增加が公債市價を騰貴せしめる力を持つであらうか。思ふに銀行業者の聲が公債の償還額增加に隨喜するのは、其公債市價を騰貴せしめて、彼等の所有する資産の値上りを來し、斯くて利益を收めやうとするものに相違なく、曩に日銀利下を非難した彼等が掌を飜すが如くに、公債償還の增額を稱揚するのも、要するに此關係に基くものであるが、上記の如く第一、公債償還の增加が非募債政策に伴はず、第二、償還の財源に充てられる剩餘金が將來如何なる金額に於て發生するか不定であり、第三、隨つて法律を以つて、剩餘金の一部を公債償還に充てる規定を設けた所で、其效果の未知數である以上は、銀行業者の希望する如き公債市價騰貴の效果を齎し、片岡氏の財政策に於ける成效たらしめるを得るとは、斷定するを得ないのである。一方に既發公債を償還して、他の一方に新公債を發行する其間に於て、後者の條件が前者よりも國庫に取つて、不利なるものであつて、結局國庫の負擔を重からしめ、且つ金融市場を壓迫する弊の依然として、除かれざるに相違ない、政府主要の財政策が一場の人氣取りに終始し、然も其效果の出現の覺束なきことは、吾人の認めて不可なりとする所である。十八世紀末から十九世紀の始めに至る二十餘年間、英國の減債基金が如何に財政を攪亂したか、十九世紀の中葉に於ける佛國の公債償還政策が如何に財政の負擔を加重するに至つたかは、世界に著明の事實であるが、近年の日本亦實に兩國の先蹤を追ひつゝあるものに外ならない。我國にして公債整理――更に廣く云へば財政整理の正道に就からうとする以上は、第一、國

債に關する國家信用の現狀、今日の如くなる間は、一切の募債計畫を廢除し、一の國債發行なからしめること、第二、此事にして餘りに急激であつて、實行に堪へないとすれば、募債を財源とする諸事業の經費を出來得る限り緊縮し、必要已むを得ざるものに限つて、之を一般歳計の負擔に移すこと、第三、一般歳計をして此負擔に當らしめるまでに、經費の節約を行ふこととの三點を實現せしめなければならない。是等三點の實現された曉に、償還額を如何に增加するかは、政府の任意に決定す可き問題であつて、其多きを以つて可なりとするを得るであらう。

九　財政整理の目標

之を要するに一國が財政を整理するの道は一方に國民の負擔を輕減緩和し、且つ國民の實力に對して其均衡を保たしめると共に、他の一方に國家の負ふ債務を減却することとの二點に外ならない。而して是等の二目的を併せ達するには、行政を刷新し、時に國家職務の規模を縮少し、經費に一大削減を施すことを以て、其前提としなければならない。我國に於て、財政整理の行はれざる可らざることとは、敢て今日に始まつた事ではない。然も其整理の實現されたものとして、憲政會の內閣の施政下に於て、吾人は何を數へ可きであらうか。第五十一議會に於て行はれた少許の減税（九千萬圓の收入を減じて、八千二百萬圓の收入を增し、差引八百萬圓の國民負擔を輕減するもの）今回の第五十二議會に提案されんとする更に規模の小なる減税幷に今吾人の論評した公債償還金增額こそ、憲政會內閣が逐次實行する財政整理計畫の全部であつて、此以外には、何等の求められ可きものあるを知らない。而して經濟政策方面に於ても、不景氣の狀勢の深刻化する今日に際して、之を緩和し、進んで景氣を挽回する根本策の樹立されるものなく、時に日本銀行の金利歩合に引下の行はれることありとしても、徒に時機を逸し、加ふるに引下の效果を世界に徹底せしめる第二段の準備はなく、爲替相場は徒に急騰して、貿易や、物價に不利の影響を及ぼしても、之を受けるのみであつて、更に進んで之を善用する工風なく、無經綸、無政策の下に、漫然大正十六年度豫算案を編成する。吾人は憲政會に代つて、政友會や、政本黨が政權を掌握した所で、果して如何ばかり現今の狀態に勝れる政治の行はれるかに就て、疑を持つものであつて、此點から既成政黨に國事を托するに堪へずとするの結論に到達するのである。

如何に今日の政黨政治家が國家の經綸に對して、無責任であり、無關心であるかは、明年度豫算案に於て、人口食糧問題調査費であるとか、金融制度調査費であるとか云ふ經費の揭げら

れて居る一事に依つて、之を知るを得るのである。金額から云へば、是等は些細のものであつて、十七億圓表の豫算案を議するに當つて、數へるに足らないとするを得るかも知れないが、畢竟斯る經費の豫算案に掲げられるに至つたのは、我國の政治家に當今の重大問題を解決する知識もなければ、準備もなく、調査會に衆智を集めて、其の判斷に頼らざる可からざるか、然らずんば調査に藉口して、時日を空費しようとするか、孰れか一に出るのである。既に一個の政黨として、世に居る以上は、在野時代に政務を調査し、一旦朝に立つては、直に調査の結果を實現することに努めなければならない道理であるのに、政局に立つて、然る後に緩々調査に從ひ、然も他人の力頼らうとする。其の調査の完了するまでに、果して内閣の命運が全ふされるかどうか、吾人は眞に日暮れて、道遠きの嘆なきを得ない。此の點に於ては、如何なる政黨も同罪であつて、彼等が經綸に關する根本問題を以て爭はず、國民生活に關係なき事件を捉へて、口舌の爭を逞しふうし、又時に立法の府に於て法律の字句に關する解釋を鬪はし、三百代言をして三舍を避けしむるが如き、我國政爭の現狀であるとすれば、人心が次第に既政政黨を離れるのも亦偶然であるとするを得ないのである。(十一月九日脱稿)

僞證事件

杉森孝次郎

一總理大臣の道德、風教の源泉だけがかれにある。國民の道德、風教は國民にそれの源泉を持つ。總理大臣は一つの公職だ。政治職に屬する一つの役だ。政治自身は、一つの社會機能、即ち分業だ。一つの專門だ。その機能、即ち分業、即ち專門は、しかるに、決して道德とか、風教とかいふ名稱のものではない。家庭に於ける幼年者の父母、小學校の先生、あるひは或る時代と社會部分に於ける牧師の位置と比して、現代の總理大臣の位置は全く別の範疇物だ。

國民が總理大臣の善惡から受ける影響は第一に、そして主として、政治的利害だ。國民が賢者の善惡から受ける影響が、代

表的には、衞生的利害であると同様の事理だ。

もしも現任總理大臣が貫祿に於て、閲歴及び品性に於て、足りないとするならば、國民が受ける迷惑または損害は、その足りないことが總理大臣としての政治的職能を制限する限りに於てだ。もしもかれが氣の弱さと、小形の悧巧さとを打ちまぜたやうな性格の持ちぬしであるとするならば、それがかれの公職的活動に反映する限りに於て、國民は特にそれを問題とすべき理由を持つ。

内相當時、若槻氏は、箕浦氏に向つて、もつと積極的に、内心を發表する方が善かつた。反對の方向に感知されたり、推解されたりする餘地がないほど、またさう言說される餘地もないほど明白に意中を告げる方が善かつた。それをしなかつたところに、或る程度の消極的の惡または罪が全然なかつたとはいへない。さうした消極質が、當人の公職活動に一般的制限力として作用することは、國民からいうて、それだけ自治即ち公的機能の活動に不自由することだ。國民はこれを問題、關心件とするといふたらば、必ずしも、あるひは決して、それを罪呼ばはりすることはできまい。

箕浦氏にむかつて、當時、種々の苦しい事情はたとひあつたとしても、斷乎として利權的あるひは利權臭的行動の惡を警、忠告するだけの積極的道德力なかりし若槻氏が、目下の日本の總理大臣として、多少物足らない、賴母しからぬ品性者だとは誰れにも考へられる。それほどの良心、勇氣、識見、技倆では、内、外政の萬端にかけてのかれの改善能力のほども推しはかられて心細い點があるとは誰れにも多少感ぜられる。破邪顯正、爲善去惡が、かれによつて、總理大臣職の上に、雄快、深徹の實現を與へられやうとは、かれの對箕浦松島事件の手法からしては推想されがたい。そして、これは立派に一つの國民的關心事たりうる。

しかし、要點がさうしたところになく、ただ、一國の首相ともあるものが、僞證罪の告訴をされたやうでは、殊に、それをしたものがかく〳〵の人であつて見れば、國民の風敎、道德の上に及ぼす影響が特に恐ろしい、云々といふ種類、程度の議論は、決して聰明なものでない。われらは、道德に於て、總理大臣などを標準、權威、模範とはしない。道德に於ては各人は自主人だ。すくなくともさうあることが最も必要だ。

他面に於て、また、淸節、人格者等の言辭が、利權行動に現に身をやつした人の形容詞として、公人や新聞の世界に盛んに見えることは、これこそ風敎、道德の上に及ぼす侮辱と惡影響に於て深大だといへる。私が見た新聞記事が關する限り、例へ

は尾崎氏の言の如きにも、これと關聯した多少の遺憾も意識される。殊に政治教育、政治道徳を看板とする立ち場の場合に於て、これは看過されがたい。

詐欺罪になるとならんとは、その當の人々自身にとつては大きな利害だらうが、相當の公人としては、利權行動をやつたことだけで、すくなくともそれが世にばれた以上、世間に對してひとへに慚愧した方が見よい。法律上で詐欺となるか、ならずにすむかは、そこに問題とされる餘地をあまりに少く持つ、といふ自覺が當人たる人々にはあつて失敗でない。

告訴されたから潔く引退することを至當とすとか總辭職を義務とすとかいふ風の議論は、すくなくとも、告訴と終審とを取りちがへてゐる。

誰もいふことだが、私利的政變、黨爭が動機または目的で、多少筋ちがひの事件をとらへてはこれに宣傳、策略の死力を盡す現狀はにがにがしい至りだ。かうした空氣及び現象も、勞働無産擡頭と共に、多少あらたまるだらうと考へられるがゆゑに、そのにがにがしい現狀も永くは續かない。

資本主義的頽廢と、時代錯誤的政治組織との混合作用からして、現在の利權、黨爭のやうなものも發生する。それゆゑに、一國民は、現象を問題とするよりも深く、主として、原因そのものを根本的に救除することに轉眼すべきだ。

最後に、比較的に不重要なことながら一言する。時代的にも、個人的にも、若槻氏に不充分な點はあれ、これと認識される。しかし、氏のほどにたのもしくない政治家がまた澤山にある。かれに能ふ限りの最善活動をさせる雅量と社會的良心とが、誰にもあつてほしい。小事を大問題扱ひして大業を妨げ、眞の大問題に對して盲目である狀態がわが政治的世界の最大特徴であることは悲、慨される。

英國の資本主義と勞働運動

在倫敦 谷口吉彦

一 過渡期にある英國の資本主義

私が最初の足を英國に踏み入れたのは、それが最も典型的な資本主義の發祥地であり、從つて資本主義の典型的な發展狀態を跡づけるための材料は、此地に於てのみ求め得られるといふ確信から、單なる歷史的意義を此地に求めたに過ぎなかつたので、現在の英國に於ける經濟組織や勞働運動に對しては、日本の多くの人達と同じ樣に、大きな興味を有ち得なかつたことを告白する。それ故に若しもあの總罷業が私の夢を破らなかつたとしたら、恐らく私は日本から豫定して來た所の、ブリテイシュ・ミユジアムに於ける三ケ月の仕事を匆々に切り上げて、急いで獨逸へ引上げたであらう。若しさうでしたら、私は非常な過ちを犯したことになる。貧乏搖ぎ一つしないと言はれた英國、その大英資本主義國家は、今日すでにぐん／＼動いて居る。その大きな動きは、ブリテイシュ・ミユジアムの書の中や、牛津の修道院では發見できないものである。

社會科學の研究者にとつて今日の英國が有する意義は、その歷史的意義を超越する。今日の英國は、資本主義國家の典型的な發展形態が、如何なる過程を經て新しき組織に移るかを示す所の、現實的な問題を吾々に向つて展開すると共に、それに伴ふ種々の運動が、如何なる形態を採るかを明瞭に示唆する。物としての英國と、人としての英國と、如何に推移し如何に關聯するか？ 今日の英國は、多くの意味に於て吾々に向つて現實に生きてゐる。

ラッセルが批評する樣に、英國の運動はその哲學を有しない點に於て、露西亞のそれから區別される。英國は理論を知らす、知らうともせす、現實に臨機に着々と蠢動する。彼等は『天上の空虛な勝利に憧憬するよりは、地上に降つてそれを闘ひとる』と誇る。けれども、『理論は後からついて來る。』現實に臨機に蠢動するその運動の中に、混沌として捕捉し難いその

うごめきの中に、一貫して盡きない理論が貫流する。茫漠とした倫敦の市中に投げ出された異國の放浪者も、延々市中を貫流するテームス河を發見して、初めて安神するであらう様に。

それ故に完成されたる理論を英國に求むるものは、獨逸と露西亞から來る逆輸入品に不滿を買ふだけであらう。今日の英國が、社會科學の圖書館として有する現實の意義は、寧ろそれが完成されたる若くは構成されたる理論を提供しない點にある。この意味に於ける英國は、マルクスの時代にさうであつた様に、今日に於ても『世界の寶庫』である。此の寶庫に吾々の求め得るものは、第一に、資本主義から次の時代への過渡期に於ける社會組織である。第二に、この過渡的組織に制約されて生れ出る過渡的運動である。私は以下是等の問題に對して、單なる私の觀察をスケッチするに止める。

二　放任經濟から統制經濟へ

自由放任主義がその發展と共に之と矛盾する獨占に轉化することは、今日すでに周知の理論である。理論を顧みぬ英國の資本主義も、只管に此の理論を追つて走る。否、理論は後からついて來る。

英國に於ける企業の合同及び聯合は、一九〇〇年を劃して急速に發展はして居たが、併し戰前までの狀態では、獨逸及び合衆國に比較して、なほ十年乃至十五年は後れて居たと言はれる。然るに戰時及び戰後の數年間に於て、此の運動は急激な發展を遂げて、全くその面目を改むるに至つた。戰後に於ては、單に産業資本家の合同乃至聯合が急速に行はれたのみならず、また之と併行して金融資本家の合同が急速に進行したのみならず、兩者の密接な結合が、金融資本の産業資本への支配が、顯著に表はれて來た。

一九一九年から二一年に亘るトラスト調査委員會は、殆んど總ての重要産業に亘つて、トラストの成立した事實を指摘して、それ等の營利獨占が、全く彼等の意のまゝに、價格と供給を左右し得て、獨占利潤を搾取して居る事實を明かにした。續續と暴露される是等の事實に、時の資本家政府は遂に堪え切れず、倉皇として調査委員會の閉鎖を命ぜねばならなかつた。然らば是等のトラスト獨占は何を意味するか？　外國市場に於ける英國の獨占的地位が失はれ、非資本家社會からの搾取が困難になると、國内市場の獨占利潤によつて之を償はんとする。國際的獨占の不十分な今日に於て、搾取を有效にするためには、さうするより外に途がない。輸出價格を極めて低く、屢々採算點以下に切下げて、國内の獨占價格を以つて之を補つて居る事實

は、調査報告の随所に發見さるゝであらう。

一九一八年に設けられた銀行合同調査會は、銀行合同が彼等の間に於ける競爭の範圍を縮少して、多數企業家を壓迫し統御するのみならず、預金に對する銀行資本の割合を減少して、一九一七年には既に僅々六名に過ぎず、一般預金者を危險に陷れると共に、其處には明かに『獨占の危險』の存在することを指摘して居る。さうして『若しも是等の合同銀行の間に、利率や營業政策に關する協定が成立するあらば、金融トラストは立ちどころに發生する』と警戒した。翌一九年には、此の委員會の提案にもとづいて、合同を制限する一の法案を計畫したけれども、それが實效を表し得べき筈はない。皮肉にもその年一九一九年は、最近二十年來の銀行合同史上に、最大の記錄を殘して居る。私は茲で、是等の事の善惡を論ずるものでない。たゞ英國に於ける資本主義最近の發展が、殊に一九二〇年を劃して、正に放任經濟から統制經濟の域に進んで居る事實を指摘するに止める。

三　營利統制から社會統制へ

かくの如き營利獨占は、すでに資本主義が有する唯一の辯護を自ら奪ひ去つたものであり、自然放任の經濟から意志統制の經濟に移つて居るから、それは初期の資本主義とは著しくその性質を異にする。彼等は計畫的に意志的に、その生産額を統制し、價格を統制し得る。けれども此の意志統制は、個人的營利を離れ得ざるのみならず、寧ろこれがその基礎的條件となつて居るのであるから、その意味に於ては、この營利的意志統制の經濟も亦、勿論資本主義の一形態に屬する。たゞこの形態は、資本主義がその發展の最後に採る形態である。

然らば、個人的營利を目的とする意志統制の獨占經濟は、何故に資本主義最後の發展階段と言ひ得るか？第一に、それは既に古き社會組織の一面を失つて居ると共に、新しき社會組織の一面を具へて居る。第二にそれは、古き組織の他面を固執すると共に、新しき組織の他面を獲得して居ない。英國にとつては、一九二〇年を劃して略々完全にこの第一の程度に達することが出來た。今日の英國の悩みは、寧ろ古き組織の他面を固執する代りに、新しき組織の他面を獲得せんとするにある。新しき英國の求むる所は、正に營利統制から社會統制への轉化である。然らばこの轉機は、何故に起らねばならぬか？

言ふまでもなく英國は、今日の世界に於て最も資本主義的に發展して居るが、皮相にもその英國が、最大多數の失業者を包藏する。失業は何を意味するか？　生産力の拘束、可能的生産力

の抑制そのものに外ならぬ。專門家の計算に從へば、今日英國の産業に於ては、技術的に可能な生産力は、現實の生産力よりも三割以上の高位にあるといふ。百五十萬の失業者を勞働者の一割五分と見るならば、併せて約四割乃至五割の生産力が、個人的營利を目的とする意志統制によつて拘束されたことゝなる。然るに極めて不完全な社會統制を試みたに過ぎぬ所のかの戰時社會主義すら、その社會的生産力は今日から顧みて驚くべきものであつた。それ故に營利統制から社會統制への解放が、社會的生産力の解放を意味するものなることは、今日すでに彼等の動かすべからざる確信となつて來て居る。然らばこの解放は如何にして可能であるか？問題はこゝで轉囘して、組織から運動に移る。

　私はこゝで序に一言する。資本主義が今日すでに、略々完全な營利主義の統制經濟に移つて居る事實は、放任組織を假定する『經濟學』に對して、其死滅を宣告するものに外ならぬ。併しながら、『經濟學』に對する若き學徒の煩悶は、『死の惱み』ではなくて、『生みの惱み』であつた。失へる淋しさではなくて、求むる悶えであつた。放任から統制へ、更に營利統制から社會統制へと、英國に於ける現實の組織が默々と動いて行く事實は、若き學徒に對して、少くとも何物かを與ふるに十分であらう。

四　偉大な階級對戰

英國に來て何人の眼にも明瞭に映ずることは、その運動が偉大な階級對戰を實現して居る事實である。今日の英國にあつて、階級的利害を超越した政府を發見したり、階級的色彩のない政策を、求め得たとすれば、訪問者は先づ顧みて、自己の階級的錯覺を一應疑つて見る必要がある。さうして訪問者が階級的錯覺を免れ得れば得るほど、階級對戰の事實は、より明瞭にその眼前に展開するであらう。

　五月の總罷業を中心として、それに先だつ九ヶ月と、それに續く今日までの間に、偉大な階級對戰が如何に進行しつゝあるかは、すでに日本の讀者にも周知の事實であらう。私の見る所では、英國に於ては、資本陣營の將帥たちは、勞働陣營のリーダーたちに比べて、遙かに賢明であり、勇敢である。彼等は客觀的事實を認識してそこに自己の階級哲學を建設するだけの叡知を有ち合せて居る。そしてこの哲學を實現するためには、何ものをも辭せないだけの勇氣を有する。即ち彼等の運動は、新しき戰後の組織に對應する。然るに勞働陣營に於ては、少くともその一部の將帥に於て、賢明を缺き鬪志を失つて居る。彼等は哲學を有せず、若人は古き哲學に執着する。彼等の運動は十

九世紀後半の、若くとも戰前の古き組織に對應する。英國の勞働陣營に於ては、將師よりも伍卒に於て賢明であり、敢爲である。總罷業をコールするよりも、コール・オツトすることの方が、幾倍かの困難と騷擾を見た。此の奇異な現象は何を語るものであらうか？ 勿論そこには陣營組織の缺陷もあらう。併し乍ら、思ふに英國の運動は、此點に於ても一つの過渡期にあると考へられる。何れの運動も古きに從つて、惰性を生ずる。古き組織に呼吸して來た今日のリーダーたちは、此の惰性によつて存在する過去の殘滓でもあらうか？、これが下から上に掃蕩されて、陣營内部に縱の統一が貫通される時、勞働陣營は初めて今日の組織に對應するであらう。かくて初めて資本側のそれと有力に對戰し得るであらう。併し乍ら此の内面的な發展運動も亦、今日すでに默々と進行して居る。既にマクドナルドは、議場で大聲叱呼する表看板に過ぎないではないか。

五　資本陣營の攻勢

新しき組織に對應する新しき運動は、階級對戰の上に種々の特異な色彩をもたらす。資本陣營が、應揚な防禦戰から決死的な攻戰に轉化するのが其の一。此の轉機は、資本家自身のデフレイション政策によつて其の勢を強める。英國の資本家及び之を代表する今日の保守黨内閣が、總罷業の前後に於て、其の攻擊的精神を遺憾なく發揮して、勇敢に挑戰して來た事實も亦、すでに日本の讀者に周知であらう。二億の大金を惜げもなく投出して買收した九ケ月間の戰鬪準備に、勃々として抑へ切れぬ腕の雄叫び、これが弱者の哀訴に耳をも借さず、總罷業を強制執行したのは極めて當然であらう。されば此の總罷業が、『無條件降伏』に終るべきことは、その必然の運命であつた。併し乍ら資本陣營の攻擊的精神は、勞働側の『無條件降伏』をもつて滿足すべく餘りに旺盛であつた。彼等は今やその戰法を換へて、猛烈な追擊戰に移つて居る。敗殘の兵を集めて苦鬪を續けて居る坑夫同盟は、四ケ月に近い罷業を強制されて餓死に瀕して居る。此の間にあつて、階級的利害を超越した筈の英國政府が劃策し得た努力は、如何にして殘兵の糧道を斷つべきか？の一途に過ぎぬではないか。

倫敦を訪れたほどの日本人ならば、何は見ずとも先づ第一に、テームス河畔の議事堂は見落さぬであらう。議事堂を訪れるほどの興味をもつ人たちに私は忠告する。其時計臺を仰ぎ見た足の序でに、ブリッヂ街を一つ隔てた北側の五番地に立ち寄られよ。其處が資本陣營の參謀本部である。彼等があり餘る資力に任せて準備した階級對戰の陣容は、來訪者を驚かすに十分

であらう。雙手に持ち切れぬ程の宣傳文書は、乞ふに任かせて無償で與へられるであらう。私は幾十册とも知れぬそれ等のパンフレットやリーフレットの中から、たゞ一册を取り上げて見る。それは『クツク氏とは何者か?』と題する。讀者はすでに此の册子が、如何なる目的で、如何なる内容を有するかを察知さるゝであらう。私は煩を厭はず最初の一二頁を讀んでみる。

『炭坑爭議の解決を得るために費されたすべての忍耐と勞苦が、何故に水泡に歸したかといふことは、過ぐる二三ケ月の間、國内のすべての部分に亘つて、多くの人々によつて考察されて來た。罪は何人にあるか?……鑛主の貪慾か? 坑夫の無理か? 政府の無能若くは無情か?

『此の册子の目的は、坑夫達がクツク氏によつて代表されて居る限り、何人が調停者となつても、合理的な妥協に達することは金輪際不可能であることを明かにするにある……。

『此の紳士(クツク氏)は、神經質でヒステリーを病んで居る……。彼れは實力を有つて居らず、リーダーとしての彼の能力は、他のリーダー達から非難され輕蔑されて居る……。

『煽動家としての資質に於ても彼れは貧弱であり、何等重要なものを有たぬ。彼れが間違ひだらけの語法で泡をとばして辯ずることとすら、彼れの體力に過ぎて居る。だから屢々演壇から卒倒しては扶けてもらつて居る。頭へ上るロシアの酒が、淺薄で熱狂的な彼れの頭に强すぎた。彼れはレーニンの賤しき使徒を以つて任じて居る……。』

私にはこれ以上讀み續ける根氣がない。これだけの人身攻擊をなし得る勇氣さへあれば、倫敦の往來を敵もないのにタンクでねり廻る位のことは出來るであらう。

六　勞働陣營の統一

資本側の決死的な攻勢に對して、勞働側に起る一の發展は、分裂から統一への轉化である。英國の勞働運動が、ゾムバルトによつて刻印せられた『英國型』を固執したのは、寧ろ古い組織を反映する古い運動であらう。新しき經濟組織の發展は、すでに新しい英國型を實現しつゝある。かの勞働黨があらゆるものを包括して茫大な一黨を組織したのは、すでに一九〇〇年であつたけれども、それは陣營内の統一と言ひ得る程のものでない。全國的に統一された一の陣營を組織するに至つたのは最近のことであり、勞働組合が地方分權から中央集權に移つたのは、資本側の攻擊が著しくなつた昨年來のことである。

此の統一運働は、種々の形態を採つて今日旺んに進行しつゝある。私はその一例として、日本の一部では殆んど問題にされ

ない消費組合運動と、獨立勞働黨との關係をあげる。獨立勞働黨は勞働黨内にあつて最も有力（勞働議員一五四名中、一〇六名は之に屬する）な團體であり、且つ黨の先驅者を以つて自任する少壯者を包含して、英國の運動を見る上には一の重要な團體であるが、彼等が統一運動に對する今後の努力は、主として消費組合運動との結合に向けられて居る。『社會主義國の管理に寄與せしむる目的を以つて、消費組合運動を助長し擴張する』といふ決議は、既に一九二二年のノッテインガム大會で可決されては居るが、此の方面に對する努力は、今日まで殆んど忘れられ居ることに氣付いて來た。今年四月の大會では、『勞働者の必要品に對する營利をなくするための直接利用と、社會主義國家の缺くべからざる部分としての究局的發展との目的をもつて、消費組合運動の組織を擴張し發展せしむる』決議をなした。これにもとづいて獨立勞働黨は特別委員會を設け、着々とその研究を進めて居る。例へば『消費組合が社會主義目的を達する程度、生産分配及び國際貿易を社會化する手段としての消費組合運動の利用、消費組合員と勞働組合運動及び勞働黨との關係』等々の諸問題これである。最近に至つては、『政治運動と消費組合運動が結合するまでは、總罷業は成功し得ない』と主張するものもあり、中には『消費組合の石鹸で顏を洗つて居たなら、自由黨は七年早く亡んだであらう』と言ふものもある。

勞働陣營の統一にとつて唯一の障害をなすものは、昨年のリバプール決議であらう。併し乍ら、周く知らるゝ樣に、それはジノヴイエフ書簡の衝動に對する幹部の政策であり、且つその幹部の多くは、惰性によつて生き殘つた過渡的存在でもある。それ故に幹部の懸命な努力と、また多くの場合に幹部案を容れるといふ傳統とに拘らず、終日の大論議を續けてなほ三十二萬の反對投票を見せて居る。最近の新聞によれば、この十月に開かれる筈のマアゲートの勞働黨大會へは、共産黨員復歸に關する多數の提案が、すでに各支部から提出されて居る。けれども幹部連は、黨の原則に關する決定は次の三年間變更し得ないといふ規定を楯に、是等の支部提案を一蹴しつゝあるから、今年の大會には共産黨問題は恐らく論議されないであらう。併し乍ら是等の事情は、少くとも勞働陣營の内部に於て、統一運動が如何に力強く動いてゐるかを語るものであらう。けれども此のことは、後に述ぶるが如く、必ずしも彼等の運動の共産化を意味するものではなからう。

七　鬪爭主義と議會主義

消費組合運動から共産黨まで渾然と統一されてゐる若くは統

一されんとしつゝある英國の勞働運動が、如何なる方向にあるかを見定めることは、かなり困難な仕事でなければならぬ。私はたゞ自分の摘み上げた二三の點を以下に述べる。

昨年九月のスカボローに於ける勞働組合大會は、『資本主義を崩潰せしむるために鬪ふ』ことを宣言して、英國の運動に一時期を劃したと言はるゝが、このことは英國今日の資本主義から來る必然の結果に外ならぬ。資本主義組織に避くべからざる恐慌と、それに續く永續的な經濟的沈滯、これに刺激された資本陣營の統一的攻勢、是等の間にあつて、獨り勞働陣營のみが、滅裂な改良主義に終始し得やうとは、如何にして考へ得らるゝか？

併し乍ら英國の勞働運動が、分裂から統一へ、改良主義から鬪爭主義へ轉化したことは、必ずしも暴力鬪爭を意味するものではなからう。彼等の主調は、依然として議會主義の範圍を出ないと言へよう。數世紀に亘る議會政治と、これに培はれた多數尊重とは、今なほ捨て難い執着を感ぜしむる樣に見える。『議會に於ける勞働多數が、根本的な何事をなし得るか？』といふトロツキーの嘲笑に對して、彼等は答へる『なるほどこれは大きな冒險ではある。確かに意志と勇氣を要する。……併し同時に、議會に對する傳統と多數に對する服從本能とが、如何に深くイギリス精神に刻印されて居るかを知る者にとつては此の冒險は試みるだけの價値はあると、何人も認めるであらう。議會に於てのみならず、教會に於て、勞働組合に於て、はた又倶樂部に於てさへ、此の多數に對する尊重は、代々のイギリス人を教え込んで居る……』と、

鬪爭主義と議會主義とが、如何なる關係に立つかは、もとより問題であらう。この問題も亦、多くの問題と同じ樣に、たゞ形式的にのみ決定さるゝ樣に見える。その時、その社會に於ける物質的組織と、それから必然に生れ出る人間の運動と、その關係に於てのみ問題は解決さるゝであらう。

英國の議會主義は、その組織された勞働陣營と、之を反映する政治鬪爭の力とを顧みるとき、初めて解釋し得らるゝ。一九二四年の總選擧は、偶然の反動事情のために、四十名の勞働議員を失つたけれども、それでも勞働黨の總得票は、四三〇萬から五五〇萬に增加して居る。其後に行はるゝ各地の補缺選擧は、殆んど彼等の勝利に歸して居る。私が此地に來てから行はれた二つの補缺選擧は、何れも保守黨議員の補缺であるが、それでも常に勞働黨の壓倒的勝利を示した。併も此の二つは、勞働黨がひどく英國民の同情を失つたと報告されて居る所のかの總罷業の直後に行はれたものであつた。

最近の新聞紙は更に興味ある一插話を傳へて居る。鐵の都バ

アミンガム市は、チエンバレン一家の幾代かにわたる牙城であつて、往年のロイド・ヂョージも命から〴〵逃げ歸つたことは、日本でも有名な話である。そのチエンバレンは今の保守黨内閣に保健大臣となつて、坑夫の救濟金を打ち切つたり、政府の特殊契約で自分の會社を肥したりして居る間に、その傳來の牙城が全く顛覆してしまつた。一昨年の總選擧に勞働黨の肉迫を受けた彼れは、一萬三千に於ける七十七票の差をもつて、危機一髪の生命を保ち得たが、賢明な彼れは、次いで來るべき運命を自覺して、最近その地盤の拋棄を宣言するに至つた。オスワルド・モズレーは、勞働名鑑にさへ名前を見出せないほどの一介の靑年である。これがよく、幾代かの間累積した資力と濫情主義で固めた根城を覆し得たのは、不思議の樣でもあるがまた當然でもある。ロイド・ヂョージを走らせたチエンバレンが、無名の靑年に走らされやうとは、十年前の何人が想像し得たらうか？

勞働陣營の侵略が刻々に進めつゝある是等の事實を目撃して、組織された陣營の力を信じて居る彼等が、議會主義に執着するのは理由がある。併し乍ら彼等の議會主義も、是等の信仰を前提としてのみ可能であり、從つてそれは決して絶對的なものでない。『若しもトロツキーが正しいならば、若しも所有階級が權力によつてその特權を防禦するならば、吾々はクロムウエルの鬪つた樣に、議會を後ろに之と鬪ふであらう……。』これが恐らく彼等の多數を代表する意見であらう。

暴力鬪爭が不安な捷徑だとすれば、議會主義は堅實な迂路であるかも知れぬ。併し乍ら今日の英國に於ける議會主義は、必ずしも漸進的な進化主義を意味するものではない。『一千年後の極樂を期待して、餓えたる勞働者も今日を送つて行く』といつた漸進主義は、最早今日の彼等を滿足せしめ得ない。彼等の期待は、『比較的短い期間に』、『吾々の一生に』、若くは『此の二十年間に』、更に『次の勞働内閣に』、彼等の主張を實現するにある。從つて彼等の主張は、多くの批評を免れない不徹底さを包含するであらう。けれども現實に即して着々と履行する彼等の運動が、百年後の徹底よりも、十年後の不徹底を選むは當然である。こゝに彼等はそのすべての弱味と強味を併有する。彼等の主張は、理論の徹底を追ふ學徒の賞讃を得ぬにしても、其日の生活を忘れ得ぬ勞働大衆を捉ふるに十分である。『最低賃銀』を決議したり、『家族手當』を主張する彼等を目して、直ちに改良主義の汚名を浴びせるは酷であらう。露西亞のネツプが問題になり得ると同じ意味に於て、彼等の主張は問題になり得る。たゞ吾々の茲で觀察し得ることは、今日の英國に於ける一般の傾向が、露西亞の今日まで進み來つた途をば、之を其儘に進まうとするのでなく、寧ろ之を逆に行かうとする點にある。此處に彼等の所謂『理性による變革』が存在し、『建設的政策』が存在

する余地を發見する。

八　理性による建設

倫敦に來て議事堂を見物した序でに、資本陣營の參謀本部を覗いた訪問者は、事の序でに足を伸して、同じ街路を一町ばかり西に行かれよ。其處には獨立勞働黨の本部が發見される。更に時間と根氣が許すならば、其處から十分ばかりで行けるエクレストン・スクエアの三十二番地と三十三番地を訪ねて見られよ。前者が勞働組合の本部、後者が勞働黨の本部である。資本陣營の武者振りと宣傳振りに、少なからず面喰つた訪問者は、後の三つの勞働陣營にも亦、之に劣らず多數の文書が陳列されて居るのを發見する。併し乍ら、若しも訪問者にして、是等の文書を一瞥するだけの根氣があるならば、彼れは全く豫期に反した新たな興味を感ぜずには居られぬであらう。

勞働陣營に堆積された文書は、資本陣營のそれとは全く性質を異にして、其處には最早一枚の宣傳文書も發見されぬであらう。私は前に、勞働將帥の罵詈と誹謗との外何物も發見されない一の資本家文書を紹介したが、此處ではもはや之に類する一冊の冊子も發見されぬ。それ等の殆んどすべては、彼等の所謂『理性による』產物であり、『建設的政策』である。私はそれ等の中から、數日前に發表された許りの小冊子『勞働黨の農業政策』をとり上げる。此は昨年の大會決議に本づいて、勞働三陣營から選定された多數の專門家より成る聯合委員會の調査報告であつて、今秋の各大會で論議するため豫め發表したのである。その豐富な內容は、茲に紹介すべく餘りに複雜であるが、要するに土地國有案と之に伴ふ農業政策の具體案である。類似の冊子はあらゆる重要問題に就て發見さるゝであらう。銀行國有論、炭礦國有論、國民敎育案、食料管理案等々、彼等の建設的努力の結晶でないものはない。

社會主義と言へば破壞主義を聯想し、社會主義文書といへば宣傳文書の外何物もないと考へる程度の論者は日本に一人も居ないかどうか？　少くとも今日の英國に於ては、すべてが此の逆になる。英國の資本家は、社會主義者の建設を破壞するに忙殺されて居る。英國の資本家文書は、宣傳と破壞の外何物をも含んで居ない。それ故に新聞、雜誌から圖書、冊子の類まで、それ等を瞥見するには、先づ以つてそれが何れの陣營から如何なる目的で出されて居るかを吟味せねばならぬ。併し乍ら、失ふものに對する自暴的な執着と、それから來る絕望的な破壞運動に、何等の內容を有ち得ない資本家文書に失望した訪問者も、生み出さんとする建設的努力に充ちた勞働文書に接するならば、其處には『經濟學』を失つて『生みの惱み』に悶えて居る若き學徒にとつて、その畢生に値する多くの問題が橫はつて居ることを發見して、限りなき慰安を覺ゆるであらう。（一九二六、八、二六、）

無批判的批判の批判

學生檢擧事件に對する批判に於ける或る傾向の代表的諸見解の檢討

大山郁夫

一

マクス・アドラーは、その著『マルキシズムの國家觀』(1)の或る箇處で、マルキシズムに於ける經濟理論と政治理論との間の矛盾を發見したことを誇つてゐるハンス・ケルゼンの所論を痛撃して、さうした誤謬は畢竟するに、マルキシズムの經濟理論及び唯物史觀に關する理解の缺乏から來たものであることを指摘し、更らにそれに附け加へて、次の通りの、骨を刺すやうな、皮肉な評語を下してゐる。——

『ケルゼンが、それに關して、不幸にも、マルクス及びエンゲルスの經濟學上の體系に於ける「唯物史觀」に就いて廣く行はれてゐる定論——いかにもそれはただブルジョア諸學者の間にだけではあるが——に呼びかけて加勢を求めることが出來るといふことは、この際何の足しにもならないのである。さうした定論はただ、マルキシズムが今尚ほ依然として、知られてゐるよりは寧ろ批評されてゐるといふことを、そしてまた、人々が今尚ほ依然として、マルク

ス及びエンゲルスの諸著書からの相當量の引用によつて、彼等の全生涯の業績そのものを研究する手數を省き得るものと信じてゐるといふことを、證明してゐるにすぎないものである。』(2)

(1) Max Adler, Die Staatsauffassung des Marxismus, Wien 1922.――ハンス・ケルゼンの『社會主義と國家』(Hans Kelsen, Sozialismus und Staat, 1. Aufl 1920; 2. Aufl. 1922) への駁論として書かれたもの。

(2) 同書第二一六頁ページ。

アドラーのこの言葉は、單に、マルキシズムの國家觀に關するケルゼンの見解が、わが國に於ても若干の追隨者たちを見出してゐる際に當つて、我々に多大の興味を與へるといふだけではなく、それと同時に、一般のマルクス批評家たちに向つては無論のこと、だが、さうでなくとも、幾らかでもマルキシズムの研究に指を染めてゐる人々に向つてもまた、要領を得た警戒を與へてゐるものとして、充分に傾聽の價値のあるものだ、といふことも出來るのである。

けれども、私が態々ここにそれを引用したのは、實はさういふことのためではなく、それ以外に別に當てがあつてのとである。もとより、マルキシズムに對する、有意もしくは無意の、隨分と見當の外づれた樣々の批難が、現在の我國に於ても相當に跋扈してゐることは、たしかに事實であるが、しかしそれといふのも畢竟、マルキシズムが我國の社會運動及び社會思想の上に於て、段々と有力なる地位を確立しかけて來たことの反應だと見るとき、――さう見ることに何等の無理がないやうに私に考へられる通りに、――それは却つて、我國のマルキシストたちからは、或る程度の滿足感を以て迎へられなければならない現象でさへあるかも知れないのである。だが、私は今茲で、さうしたことよりも、私たちには差し當つて一層緊切な關係のある――しかし同時にそれと深い緣つづきになつてゐる――或る他の一問題を問題にしようとしてゐるのである。

それは、簡單にいへば、今日の我國の學生間に勃興しかけて來てゐる所謂社會科學研究に關しての、根本的に的を外

づれた見解が、如何に意外に廣く行き渡つてゐるかを指示する諸事實に關聯してゐるものである。しかもそのことが單に一般世間だけに、——或ひは更らに一歩を進めて、さうした問題に關しては、概括的に一般世間といはれるものよりも、或る程度に、より多くの理解を有してゐることが當然のこととして期待し得られる新聞雜誌上の評論にさへも、——限られてゐるものとするならば、私たちは實際それを幾分不快に感じない譯には行かないにしても、それにしても結局は、例の黄金に譬へられる沈默を守り通すことが出來よう。だが、有態にいへば、さうした間違つた見解は、不幸にも、我國の學界の一角に於てさへも、相當に深い根を張つてゐることが、明かに見られるのである。學術研究上の諸問題に關しては、一般世間や新聞雜誌などから、如何に無理解な評價が加へられようとも、少くとも學界だけからは、相當に信頼のできる批判が下されるだらうとは、一般人たちの常識に於て認められてゐることである。もつとも、さう認めるのが抑々の間違ひだ、といふことには、或る確實な根據があるにはある。けれども、さうなると、問題は全然別個のものとなつて來るのである。いづれにしても、學生間の學術研究上の諸問題に關する學界の批判が、現在に於ては、世間で相當に重く視られてゐる、といふ事實は、何物を以ても消すことが出來ないものである。だとすると、さうした學界の批判のどの一點かにでも缺陷があることが私たちに認められるとき、私たちが最早それに對して堅く口を噤いでゐられなくなることもまた、當然のこととして認められなければならない筈のものである。

　私は從來既に、例の學生檢擧事件を中心として、學生間の社會科學研究に關する諸問題を、絶えず論究しつゞけて來た。それにも拘らず、私が尙ほその上にこの一小論文を附け足さうとしてゐるのは、全く上に述べた理由に基づいてゐるものである。從つてそれが、學界の一角に對する私の小さき抗議の聲として聞き做されても、私に於て別に文句を言ひ立てる理由がないのである。

二

一般の社會事象の動きに對してと同樣に　學生間の社會科學研究の傾向に對してもまた、公衆の批判の方向の決定の上に少からざる指導力を示して來た新聞雜誌の上に現はれたところの、たとへば學生檢擧事件などに關する記事や論評の多くが、如何に當て込み氣に充ちたものであり、且つまた度々非常に煽情的なものでさへあつたかについては、私は本誌に於ても、一再ならず注意して來た。實際、それらのうちには、先年の震災の際に我々が深き悲痛感を以て經驗した例の流言蜚語の記憶を喚びさましたものさへあつたのである。が、社會科學研究の學生たちの立場に對して、それらの新聞雜誌の論評に優るとも劣らざる誤解や無理解を暴露したものとして、我々は更らに、同じ問題に關して官憲側から出された樣々の意見を擧げることが出來る。そのうち、學生間に於ける左傾思想の流布を傳染病の蔓延に見立てた岡田文相の談話に關してもまた、私は既に一言を費しておいた記憶がある。たが、さうした官僚臭の高い月並的觀測以外に、もつと實際的意味を持たせられてゐるかのやうに見える樣々の聲明が、絶えず官憲側から世間に向つて發せられて來た。たとへば、學生たちが、『社會科學研究に名を藉りて』危險思想及び危險行動に沒入して行つてゐる、といつたやうなことが、始終官憲側から漏らされて來たやうなことが、それである。かういふ言葉の裏には、誰れにも容易に看取される通りに、少くとも二つの隱れたる意味が含められてゐる。その一つは、學生たちが『社會科學』といつて居るのは、實は彼等の危險思想の上へかけられた保護色であつて、危險な内容に、安全らしい外裝を施してゐるものにすぎないのだ、といふ意味である。他の一つは、學生たちは何かといへば『研究』と言ひ出すが、しかしそれは實は、彼等の不穩な宣傳や行動やに對する外部からの干渉を遮斷する障壁にすぎないものだ、といふ意味である。

官憲側が學生たちに對して、臆面もなく、かうした卑俗な惡聲を放つてゐるのは、一つには、彼等自身の宣傳の目的から出て居るものとも見られるし、また一つには、年來『思想善導』に『名を藉つて』社會科學研究の上に壓迫を加へて來た彼等の日頃の習慣から派生して來た考へだとも見られる。尤も、それは宣傳として見れば、單によくもかうまで惡性を帶びたものだと言へるだけではなく、更らにまた、それは、どの點から見ても、彼等が動もすれば、いかにも『前途ある學生たち』の身の上を氣遣つてゐるやうに見せかけてゐるその殊勝げな態度を著るしく僞善的なものとして世間の眼に映ぜしめる効果を擧げてゐるものでもある。だが、宣傳にせよ、習慣にせよ、ともかく彼等がさういふ人聞きのわるい聲明を公にすることを憚らないのは、究極に於ては『社會科學』の本質と『研究』の意味とに對する彼等の無知から出て來てゐるといふことだけは、何人にも拒めない事實である。

だが、官憲側に於て示されてゐるところの、學術研究上の諸問題に關する無理解といつたやうなものを我々が眞面目になつて取り上げるやうなことは、餘所目には餘りにも滑稽に見えることだかも知れない。いづれにしても、私は茲ではこれ以上、それを追跡して行く必要を認めない。けれども、若し、我々には最も近接的な地位におかれてゐる我國の學界のどの一部に於てでも、社會科學研究學生たちの立場に對して、官憲側の態度の上に示されてゐるそれと同じ種類の誤解もしくは無理解が少しでも行はれてゐるものとするならば、問題は自ら別個のものになつて來る。そしてその場合には、我々は最早、その誤解もしくは無理解を、誤解もしくは無理解のままに打ち遣つておく譯には行かなくなるのである。殊に、萬一その誤解もしくは無理解が、同じ名の社會科學に幾分でも交渉してゐる學界の何れかの一部に行はれてゐるといつたやうな、常識的にはあるまじきことに見えることが實際にあるとするならば、我々は尚ほ更らそれを不問に附しておく譯には行かなくなるのである。といふのは、まづ第一に、我々は社會科學學徒として、社會科學の名に

於て、さうした誤解もしくは無理解と戰はなければならないことを感じるからである。更にまた第二には、さうした誤解もしくは無理解を基礎づけてゐる彼等の社會科學上の立場を否定することは、それと正反對の方向を指してゐる我々の社會科學上の立場の肯定への必然的道程だからである。かう考へるとき、我々は最早や、その仕事が我々に如何に不愉快なものであらうとも、それから逃避することが出來ないのである。ただ、そのとの先決條件となるものは、さうした誤解もしくは無理解が、果して我國の學界に於て、——殊に社會科學に或る程度の交渉を持つ我國の學界の何れかの一部に於て、——幾分かでも行はれてゐるか否かを見究めることである。我々はまづこの最も手近な仕事から差し掛からなければならない。

三

學生檢擧事件の經過が發表されてから間もなく、それに關して諸家によつて試みられた各種各樣の批判が、或る一時期に亘つて、盛んに新聞雜誌の紙面を賑はしたものであつた。殊に『改造』及び『我等』の如き、社會問題に深い交渉のある二三の評論雜誌は、當時特にその目的のための一欄を設けて、事件關係學生たち、及び一般の社會科學研究學生たちに多大の同情を寄せてゐると見られてゐる學者、社會運動家、政治家などたちの意見を掲載したものであつた。で、私たちのやうに、學生間の社會科學研究の傾向に比較的に深い交渉を持つてゐるものは、それらの評論雜誌のその企てに對しては、一種の感謝ともいふべき氣持を感じないではゐられなかつた。殊にそこに名を列ねた執筆者たちは、大抵は皆、關係問題に對して最も多く發言權を持つてゐるものと一般世間から豫想されてゐる人たちであつたから、從つて彼等の批判の影響が可なり廣い範圍にまで及ぶであらうことが綮せられた時に於て、私たちの期待は一層大きくな

らざるを得なかつた。そしてまた、私たちのその期待は、決して全部充されずに終つたものでもなかつた。即ち、少くともそれ等の諸家の或るものは、社會科學研究上の諸問題に關して、私たちの立場と同じ――若しくはそれに接近し――立場から、勇敢にその所信を披瀝することによつて、一般世間に向つて、當該問題に關する批判に關して、或る確固な據りどころを與へることに努力してゐたことが明かに見られたから、彼等の正しき見解が、讀者たちの批判の方向を指導する上に於て、極めて好ましき效果を舉げたであらうことは、私たちには疑へないことであつた。――だが、それと同時に、全部が全部までさうだつたか？といふ段になると、私たちは遺憾ながら、それを無條件的に肯定することが出來ない地位にあるのである。問題はそこにある。

四

我々は我々の私生活に於て、屢々我々自身の立場に對する理解の伴はない同情を他人から寄せられて、覺えず苦笑させられることがある。しかし、それが單に我々の苦笑を促すだけに止まつてゐる間は、我々には尚ほ我慢が出來る。だが、一旦それが更らに高じて、我々を或る程度の困惑狀態に導くやうなものになつては、我々は最早一種の救はれないやうな氣持を感じさせられない譯に行かなくなるのである。今假りに一例を設けていへば、たとへば或る青年が、好意ある先輩から、何かの點で意に滿たない配偶者を押し附けられるといつたやうなことは、單に安價な一場の笑劇の上に始終見られがちのことであるばかりでなく、眞面目なる現實人生の上に於てもまた、屢々實際遭遇されがちのことである。そして、現實人生に於ては、さうした理解なき同情を振り切る勇氣を缺いてゐるものは、大抵の場合、それぞれに悲劇の主人公になつて行くといふのが、その究極の到着點であるやうに見える。

ところで、それと同類の運命の悪戯は、我々が學生間の社會科學研究上の諸問題を考察してゐる際にも、また、屢々一我々の面前に現はれて來るのである。殊に我々は、學生檢擧事件の批判が諸家によつて盛に供給されてゐた間に於て、一最も多くさうした場合に直面せしめられたことを感じたのである。我々はもとより、初めから事件關係學生たち及び一般の社會科學研究學生たちに對して惡意を以て掛つてゐる樣々の批難――時としては根も葉もなき罵詈讒謗――については、さうしたものが、官憲側から出た場合と、新聞雜誌側から出た場合とに拘らず、少しでもそれらに取り合つてゐることの無益なことを、充分に呑み込んでゐる。けれども、それと同時に、我々は、如何なる意味かで學生たちに同情してゐるらしく見える人々から出た親切げな言葉だといふと、それが學生たちの立場に對する完全なる理解から來てゐる場合と否とを問はず、それに或る親しみを感じようとするばかりでなく、動々もすれば、無差別的にそれに感謝したいやうな氣持にさへなるのである。さういふことは、或る受難の境地の上におかれたものの心情としては、一應は尤も千萬のことのやうにも考へられなくはないが、しかし實はそれが隱くされた一の陷穽であることを、我々がどれほど知り拔いておいても、決して知り拔きすぎるといふことはないのである。

さて、學生檢擧事件を中心として、事件關係學生たち、及び一般の社會科學研究學生たちの立場に對する完全なる理解から出た純粹なる同情に即して正しき批判を下した人々も少からずあつたことは、前に言つた通りであるが、しかし、一樣に同情とは言ふものの、當該問題に關する全然見當違ひの解釋から出た理解なき同情を以て、無責任な批判――若しくは無批判――の言葉を、口から出任かせでかのやうに、出鱈目に發した人々も相當に多くあつたのである。そして、その最も極端な場合になると、例の『社會科學の研究に名を籍つて……云々』といふ官憲側の言ひ分を裏書きしたやう

な立論をしながら、しかし學生たちの心情にも同情すべき點がある、といつたやうな、どつちつかずの曖昧な反語を弄したものすらも、彼等のうちに、相當數に見受けられたのである。從つて、さうした前提から學生たちに同情するやうな態度を示してゐた彼等の或るものは、學生たちの行動は全然他愛もない小兒病的性質の範疇を出てゐないものであるのに、政府がそれをさも重大視してゐるやうに見えるのは、全く大人氣ない沙汰だ、といつたやうな結論へ、意識的か無意識的かに落ち込んで行つたのである。尤も、それほどまでの結論は、さう澤山は出なかつたとは、或ひは言ひ得られるかも知れないが、しかしそれに首尾を接してゐる位に見られた迷論が相當量に生産されてゐたことは、たしかな事實である。たとへば、彼等のうちの或る他のものは、學生たちが今回の事件を動機として、かういふことには無差別的に憤慨することに相場の決まつてゐる教授や先輩や同志たちと提携して、自由擁護若しくは獲得運動を起さうなどとしてゐるのは、明かに運動の對象を取り違へたものだ、といふやうな愚にもつかぬことを得々と述べて、暗に學生たちをさうした運動から遠ざからしめようとしてゐたかのやうに見えた態度を示してゐた。彼等は更らにまた、學生たちが或る特殊の主義の下に熱心に行動するのは結構なことだが、しかしさうした行動は、動々もすれば、彼等をして學問上の眞理に盲目ならしめるやうになりがちのものであるから、彼等は宜しく、一つの傾向に凝り固まらうとしないで、様々の諸傾向に對する注意の自由な柔軟性を維持するために、幾らかその行動を抑制しつつ、勉學の方へも氣持を轉換させて行くべきだ、といつたやうな、一寸聞くと如何にも尤もらしく響くが、しかしよく考へると何のことだか解らなくなるやうな助言を與へてもゐた。等々。かういふ種類の、いくら高價に見積つても、淺薄極まる凡俗的常識論以上には見られないやうな様々の意見の見本は、學生檢擧事件を中心としての社會科學研究上の諸問題に關する諸家の批判のうちに、際限もなく提供されたものである。

さうした種類の愚論迷論、乃至、奇説怪説が、白晝公然と大手を振つて横行してゐるやうな狀態が我々の眼前に出現してゐるのは、私から見れば、その根本に於ては、今日の學生たちの間に現實に用ひられてゐる意味に於ける『社會科學研究』の本質及び内容に對する理解が如何に一般的に缺乏を告げてゐるかを、如實に物語つてゐるものに外ならないのである。事實上、『社會科學研究』といふ合成語を分解して、『社會科學』といふ言葉に就いて見ても、また『研究』といふ言葉について見ても、それらが今日學生たちの間に現實に用ひられてゐる意味に於ては、單に一般的に極端に誤解されてゐるばかりでなく、それを幾らかでも理解するために必要な努力が一般的には餘り試みられてゐないやうにさへ見られるのである。否、それは單に一般的にさうだと言へるだけのことでなく、更らに驚くべき事には、さうした誤解や無理解やは、我國の學界の一部——しかも當の社會科學と密接の交渉のある筈のそれの一部——にも、深い根を張つてゐるのである。私はそれを、單なる一片の架空的想像から言つてゐるのではない。私は幾つもの具體的實例を以て、それを證明することが出來る。のみならず、私はやがて、それを證明するであらう。が、私は玆では、寧ろ先づ、さういふ事實は一體、何に基因してゐるのであるか？　と問うてみたい衝動を抑へることが出來ない。。我々からみれば、それはまさしく、少くとも社會科學の關する限りでは、我國の學界の無視すべからざるほど廣い一部が、現實社會の上に動いてゐる現實問題の現實的討究から、段々遠ざかつて行きつつあるといふ、一の根本的事實の反映でなければならないのである。だとすると、再び少くとも社會科學の關する限りでのことだが、我國の學界が、今日の學生たちに對して、段々と現實的指導力を喪失しつゝあるといふやうな、一般的に熟知されてゐる現象が既に充分に生じて來てゐることも、決して偶然ではない、といはなければならないことのやうに、私には考へられるのである。

學者たちが、一般的抽象的問題としての——若しくは彼等自身の問題としての——社會科學研究上の諸問題を論究し

てゐる際に於てならば、『社會科學』といふ言葉に關してなりと、または『研究』といふ言葉に關してなりと、或はまた、その他の如何なる言葉に關してなりと、彼等が彼等自身の獨特の概念を氣の濟むやうに製造した上で、それを種に色々と議論に取り掛るのは、全く彼等の勝手次第といふものであつて、少くともそれは、他に向つて何等の支障を來たさないものだ、といへることは事實である。だが、彼等が一旦、或る特殊的具體的問題としての、——そして我々の當面の場合に就いていへば今日の學生たちの現實問題としての、——社會科學研究上の諸問題についての討議に從事してゐる際には、彼等はまづ何を措いても、少くとも當該問題の鍵と見られるところの『社會科學』とか『研究』とかいふ言葉に關しては、その特殊的具體的場合に於て、——そして我々の當面の場合に就いていへば、今日の學生たちの間に於て——現實に通用されてゐる通りにそれらの意味を理解するとに努力することから出發しなければならないのである。もとより、かうした際にも、學者たちは、彼等が或る堅實な確信の上に立つてゐると思惟する限り、究極に於ては、さういふ言葉に關してでも、彼等自身が任意に製造した全然別種の概念を基準として、學生たちの間に現實に通用されてゐるそれらの意味を訂正することを試みるといふやうなことは、當然彼等に許されるべき筈のことではある。そして、その際彼等がそのことに成功する見込があるか否かは、全然別問題として取り扱はれなければならないものだとも、たしかに言ひ得られる。けれども、その場合に於ても、彼等がそれに關して有効な發言權を獲得する先決條件としては、彼等がまづ學生たちの間に現實に通用されてゐるところの、それらの言葉の意味の檢討から始めなければならないといふことだけは、學生たちの側から當然彼等に向つて要求が出來ることである。でなければ、學生たちが『社會科學』とか『研究』とかに與へてゐる意味と、彼等がそれらに與へてゐる意味との間の隔たりが、いつまで經つても取り除かれないまで殘らないとも限らないのである。さうすると、彼等がその際如何に眞赤になつて、千言萬語を怒鳴つて

も、それは畢竟、問題の討究の進行には何等の貢獻をも齎らさないで、寧ろただ彼等の師の無駄な運動に終らざるを得ないことになるかもしれないのである。何となれば、彼等が『社會科學』とか、『研究』とかの言葉に關して、或ることを考へてゐる間に、學生たちは學生たちで、同じそれらの言葉に關して、全然別の或る他のことを考へてゐるやうな結果が出現しないであらうとは、誰れにも保證が出來ないことだからである。

かうした學生たちの現實問題の重要な一つに對して、學生たちの現實の立場に理解のない全然別の立場から下されてゐるやうに見られる各種の批判――若しくは無批判――を、私は假りに『無批判的批判』の類名の下に持つて來て、これから先き、それらの代表的なものの若干に向つて、私自身の立場から、忌憚なき批判を加へようとしてゐるのである。しかも私は、その企てに際して、それらのうちでも殊に、『社會科學』そのものに關聯してゐるものに對して、私の批判の主力を向ようと思ふ。誰れもに容易に氣づかれるであらう通りに、本文の標題は、マルクスの『神聖家族』の小見出しであるところの『批判的批判の批判』から示唆を得たものに違ひないのであるが、マルクスの場合には、兎にも角にも、それは文字通りに『批判的批判』――ブルーノー・バウアーのそれを中心としての――の批判であつたが、しかし私の場合には、遺憾ながらそれの上に『無』の字を冠せざるを得ないものである。私は私のこの取るにも足らぬ一小論文に、壯年時代のマルクスの名文の見出しから取つて來た標題をつけることが、大に倫を失してゐるものであることを知つてゐるが故に、甚だ氣恥しくさへ感じる。けれども、今の場合私は、それ以上に私の考へにぴつたりと來る表現を思ひ浮べることが出來ないのである。で、私は仕方なしに、幾分躊躇しながらも、かうした辯解の下に、それを使用することに決めた譯である。

五

私はこれから暫くの間、學生檢擧事件に關する諸家の批評が最も多量に掲載されてゐる二三の評論雜誌を私の前に置いて、社會科學について或る傾向を代表する學者論客たちの間に於て學生たちの立場に對する誤解若しくは無理解が、如何なる程度にまで行はれてゐるかを示すに足る二三の代表的意見を、それらの中から手當り次第に摘出して來ようと思ふ。そして私はまづ、その手始めとして、今日の學生たちの間に通用されてゐる意味に於ける『社會科學』の概念が、彼等の多くに依つて、最もよく見ても、如何に極めて漠然としてしか諒解されてゐないかの問題を考察してみよう。

官憲側の宣傳や新聞紙の論評の上に於ては、『社會科學』といふ言葉が、一般に甚だ曖昧な、如何にも恐る恐るといつた調子に見える態度で用ひられてゐて、しかも時としては、さうした方面で『社會科學』について語られることそれ自身が、聞いてゐる我々に一種の擽つたさを感ぜしめることすらある。のみならず、例の『社會科學の研究に名を籍りて……云々』で全問題を解決しようとしてゐるかのやうに見られる脫線振りが、さうした方面に於て絕えず演ぜられがちであることは、前に既に述べた通りである。けれども、その際にも私が附け加へて言つておいた通りに、私たちは玆ではさうしたことには一切拘はり合つてゐないことにする。で私は寧ろ直接に、學界の一部――しかも社會科學に密接な交渉を持つそれの一部――に就いて、そこでも如何に同類の喜劇的場面が開かれてゐるかを見とゞけようとしてゐるのである。疑ひもなく、そこでの舞臺の上では、一つ一つの『せりふ』が『學術的』表現で運ばれてゐる。けれども、肝腎の内容に滑稽味のある事柄は、如何に鹿爪らしい漢語――乃至は大抵の聽き手には通じないラテン語やギリシア

語――で述べられようとも、それが理解できる限りの人々に對しては、その滑稽味が少しも減退しないのである。否、それだけではなく、同じ詰まらない事柄ならば、それが表面的に嚴肅に響く表現を以て裝はれてゐるほど、或る意味に於て、益々それの滑稽感挑撥力が加へられて行きさへするのである。

そこで我々の面前には、まづ第一にX大學の社會學の泰斗の一人として知られてゐるA教授が登場する。彼は、いかにも『最高學府』の教吏に相應はしい嚴肅さを保ちつつ、『權威』を以て語つてゐるやうに見える。彼は彼の雄辯の莊重なる進行の末に、話頭を一轉換して、『所謂社會科學の研究會と云ふものについて少し考へて觀たい』と口を切る。それは、聽き手の注意を緊張せしめるに充分である。が、彼がそれにつづいて言ふところを聞くと、彼は學生たちの間に於て現實に通用されてゐる『社會科學』の意味や、その意味の背景をなす社會科會科學研究會の歷史的發達やには一切無頓着に、いきなり彼自身が『社會科學』に與へてゐる概念を持ち出して來て、『社會科學と云へば人間の社會生活に結び附けて考へられる一大科學群の總稱である』と『喝破』して、更らにそのあとで幾らか聲を落して、『しかし(學生たちの)所謂社會科學の研究の名の下に行はれてゐる研究の內容はこの一大科學群の一部分だけに集中されてゐるのではなからうか』といふ、甚だ餘所々々しく響く問ひを提出して、いかにも彼自身が大處高處から物を見てゐるのだといふことを誤りなく聽き手に傳へようとしてゐるかのやうに我々に見られる態度を示す。そして、彼の立場が成る程大處高處に――しかも現實の地上に足を踏みしめてゐる學生たちの立場とは餘りに遠く隔たつた大處高處に――おかれてゐることが、その態度を通じて我々に十二分に印象されることは、たしかである。が、それは兎に角、彼は尙ほ言葉をつゞけて、『若しこの(社會科學研究の)名の下に於てせられる研究が社會生活に即して考へられる多くの科學群の各々に多少で

も觸れてゐるといふことであれば、學問の自由研究といふ名に背かないわけであるが、若しそれが社會科學中の特殊な研究項目丈に研究範圍が限定せられてゐるとするならば、それは冷靜なる自由研究を阻害するものではないであらうか』と、我々にはその意味がよく通じかねること——尤も、彼が權威を以てかのやうに『社會科學』に與へた定義に、我々が盲目的に聽從すると、その意味は幾分髣髴できるもの丶やうにも思へるが——を並べ立てた揚句に、『〔學生たちの〕所謂社會科學の研究會が此樣に其科學的研究範圍を限定して居る……傾向がありとしたならば、……それは……〔以外魚類と云ふ看板を出して、鰻丈しか賣つて居らないと云ふ事になるのではなからうか』と、皮肉のつもりらしい——さうでなくても構はないが——ことを述べて、最後に、『若し此樣な傾向があつたが爲に魚類は鰻であると云ふ樣な感じを未知の人々に與へたとしたならば、左樣な看板を出した魚屋は、少くとも未知の人々に錯誤の感を與へた責任の一半を負はなくてはならないではなからうか』と結んで、學生達の立場に對する無研究のための誤解から生じた奇説怪説——A教授自身のそれをも含めて——に關しては、少くとも、その責任の一半を學生たちに轉嫁しようとする意企からでもあるかのやうに見られる結論に、全議論を導いてゐるのである。（引用句中の角形括弧內の言葉及び傍點は引用者のもの。）

A教授がいかに社會科學研究に從事する學生たちの立場に對する理解を缺いてゐるかは、彼がたとへ設問の形式に於てにもせよ、學生たちが『社會科學』といつてゐるものは、社會科學中の特殊な研究項目に研究範圍を限定してゐるのではないかとの疑ひを揭げてゐるとに依つても、明に知られる。事實上、學生たちの間に通用されてゐる意味に於ける『社會科學』の對象にされてゐるものは全社會生活に相違ないのであるが、しかしその『社會科學』の標識となつてゐるものは、それの研究項目とか研究範圍とかの限界ではなくて、寧ろそれの研究方法（Forschungsmethode）であり、

それの觀察様式（Betrachtungsweise）である。この點を無視して、學生たちの現實問題としての社會科學研究の諸相を批判してみたところで、それからは何等の具體的な成果が産まれないであらうことは、始めから判り切つてゐることである。若しA教授が、『社會科學』に關する彼自身の概念を提げて來て、それによつて學生たちのそれを訂正しようと試みてゐるものならば、學たちは一應それを謹聽することを拒まないであらう。けれども、その場合には、彼はそれをする前に當つて、先づ彼が訂正を加へようとする對象を充分研究し理解することを試みるだけの手數を踏まなければならないのは、當然のことである。ところが、上掲の場合に於ては、彼は全然それを省いてゐるのである。だから彼のその態度は、問題の大小輕重の差こそあれ、アドラーの指摘した通りの、マルキシズムの政治理論を批判する、ケルゼンの態度に比較されることが出來るものである。それ故に、彼が雄辯に語り出した數々の言葉も、畢竟するに、學生たちの當面の現實問題の批判としては、あつてもなくても同じことだ、といふやうな氣の毒な結果に終つてゐるのである。

だが、『社會科學』に關するA教授の見解と、學生たちの間に現實に通用されてゐるそれとの差異を、今少し追跡しつづけて行くことは、その問題から派生する他の多くの關係諸問題を解く上に於て、非常に參考になるものと考へられる。だから、私は以下尚ほ、その企てを、今少し前方へ、だが出來るだけ簡潔に、――殆んど覺え書きの程度に簡潔に、――押し進めて行つて見ようと思ふ。

六

A教授が『社會科學と云へば人間の社會生活に結びつけられて考へられる一大科學群の總稱である』と述べてゐるとき、彼は明かに、最も多くの場合に『社會諸科學』の名で呼ばれてゐる『一大科學群』を、念頭に置いてゐるものらし

く見られる。いふまでもなく、この用語は、學者間に於て、可なり一般化されてゐるものである。そして、ブルジョア側の社會諸科學の方面の可なり廣い一部に於て相當に重要なる典據として取扱はれてゐるやうに見られるゲオルグ・フォン・マイアーの『國家諸科學の觀念及び分類』（3）の中にも、社會生活に關聯する『一大科學群』の總稱としての社會諸科學が、Gesellschaftswissenschaften として、複數の形で示されてゐる。またブルジョア社會學の方面でも、矢張り同樣の用語例が屢々見受けられるやうである。もとより、ブルジョア社會學の方面のことは、私には餘りよく知られてゐないから、『權威』を以ても、何を以ても、それについて有効に語り得る資格が私には完全に缺けてゐるが、しかし、そのことの最近の一適例として、フランツ・オッペンハイマーの『一般社會學』の中にある一例（4）を示す位のことは、私にも許されてあることと見て差支へないであらう。

（3）Georg von Mayr, Begriff und Gliederung der Staatswissenschaften, Tübingen, 1906――この書物は少くとも再版にはなつてゐるが、しかし私が今手許において參照してゐるのは、一九〇六年附の初版のものである。

（4）Franz Oppenheimer, Allgemeine Soziologie (System der Soziologie, I. Bd.) I. Halbband, pp. 111ff.――第一一一ページにある標題では、著者は彼が用ひてゐる die einzelnen Gesellschaftswissenschaften 言葉が示してゐる通りに、社會科學を複數的に見てゐるだけで、それを總稱的に見てゐるやうではないが、しかしそれにつゞく本文の説明中では、必ずしもさうではない。殊に第一三三ページの Die Soziologie als die werdende Universalität der Gesellschaftswissenschaften の項參照。

しかし、A教授がしてゐるやうに、『社會科學』といふ單數の形の言葉を以て、社會生活に關聯する『一大科學群』の總稱とする先例もまた可なり澤山あるといふことは、爭へない事實である。けれども、注意深き學者達は、社會生活に關聯する『一大科學群』について、『社會科學』といふ單數の形の言葉を用ふる場合と、『社會諸科學』といふ複數の形の言葉を用ふる場合との間に、可なり重要なる意味の上の區別を置いてゐる。たとへば、スモールは、その著の『社會

科學の意味』（5）の中に於て、社會諸科學を綜合的に統一されたものとしての視角から見る場合には、その言葉を單數の形で用ひ、それらを綜合的に統一されざる個々の學問の群立體としての視角から見る場合には、それを複數の形で用ひてゐるやうである。たとへば同書の第一章の標題は Unity of Social Science（單數）となつてゐるのに反して、第二章のそれは Disunity of Social Sciences（複數）となつてゐて、更らに第三章のそれは The Sociological Reassertation of the Unity of Social Science（單數）といふ風に原形に復つて居るか、若しくは辨證法的に綜合されてゐるかしてゐる。スモールのこの著書の內容を檢討することは、一種の學問的興味のあることだが、私には今それがしてゐられないから、私は單に茲に掲げた彼の表現様式を顧みることだけに止めておく。

（5） Albion W. Small, The Meaning of Social Science, Chicago, 1919.

それからまた、國家學の方面に於て社會學的國家學（Soziallehre des Staates）といふ一新分野を開拓したゲオルグ・イェリネックも、その著『一般國家學』（6）の中で、『國家科學』と『國家諸科學』との異同に關してだが、同様の趣旨を述べてゐる。即ち同書の第三版の第六ページに載せられてある脚註によれば、ドイツ語では、Staatswissenschaft といふ言葉は、單數の形ででも複數の形ででも使はれるが、ただ前者の場合はそれの個々の部門を指示するものとして、後者の場合はそれのすべての部門の綜合を指示するものとして、用ひられるのだ、とある。

（6） Georg Jellinek, Allgemeine Staatslehre, 3. Aufl., Berlin, 1914.

私は今、上にざつと掲げた『社會科學』の用語例の妥當性について論究してゐる時間を持たないから、ただそれに關する事實の概觀を記載しておくだけに止める。A教授は、さういふ點に關して一言をも費しては居ないが、しかし彼は默つてゐても、內心では彼の所謂『社會生活に結びつけて考へられる一大科學群』を、複數的にでなく、綜合的統一的に

把握してゐるのだ、といへるのかも知れない。さうだとすると、彼がその『一大科學群の總稱』として、單數の形の『社會科學』といふ言葉を用ひたことが、必ずしも理由のないことではなくなるが、その代りに、さうすると、その前後の說明が甚だ怪しいものになつて來る。が、いづれにしても『社會科學』の用語法だけに關しては、彼が一條の活路を持つてゐることは、認めなければならない。そして、この場合に於ては彼れの沈默は黃金の價値を發揮したものだ、ともいへる。それ故に、この方面に關しては、これ以上追跡をつづけることは、よし全然無益ではないにせよ、我々が彼の所說に關して他のもつと重要な分析を試みることの邪魔になるといふ意味に於て有害である。だから、私はそれは茲で打切りにして、それから先き、學生たちが用ひてゐる意味に於ける『社會科學』に對する彼の無理解を示すもののやうに見える諸點を指摘する仕事に移つて行くことにする。

七

『社會科學』といふ言葉の諸用法中の何れが、ブルジョア側の社會諸科學の方面に於て、最も優勢を示してゐるものか、乃至、示さうとしてゐるものかは、私が差し當り今茲で問題にしようとしてゐる問題ではない。私は寧ろ茲では、今日我國の社會科學研究學生たちが用ひてゐる意味に於ける『社會科學』は、それらの諸用法のうちの何れにも直接の交渉を持つてゐるものでないといふ一事を、この機會に於て明言しておきたいのである。

さういふ事情が因つて生ずるやうになつた由來については、學生たちの間に於てその社會科學の研究の傾向が一つの主潮となつたまでの經路を語らなければ、それが局外の傍觀者に徹底しかねるかも知れないが、しかしここでそれを試みることは餘りに枝葉に深入りしすぎることになる虞れがあるから、私は今はそれから手を引くことにしよう。が、そ

れにしても、ただ一言、その結論だけを茲に示しておくことは、必ずしも餘計なことだとはいはれまい。學生たちが、『社會科學』といふ言葉の用法に關して、ブルジョア側の學者たちを蹤づけることを拒んだのは、究極に於ては、彼等が社會生活の研究を通じて、求めてゐたものを、ブルジョア側の學者たちの手から發見することが出來なかつたからである。それ故に彼等が彼等の主要題目である『社會科學』に關しても、ブルジョア側の學者たちの用語例を一蹴し去つたのは、いふまでもなく、ブルジョア側の社會諸科學――社會學を含めての――に對する不信任の率直なる表白に當るものである。このことに關聯して、私は最近數年間に於て、私の狹き視野の限界内に於ても、ブルジョア社會學者達のグループに屬してゐるものと見れば見られる人々の多くが、彼等の因つて立つてゐるところの社會學を一般公衆――學生たちを含めての――の間に普及せしめようとの目的の下に、屢々或る種の計畫や努力やをしてゐたのを見て來た。が、今日では誰れもに知られてゐる通りに、さうしたものの一切が、氣の毒ながら、まづ水泡に歸してしまつた形になつてゐるのである。それはしかし、當然といへば當然である。少くとも、一般の學生たちの關する限りでは、さういへると私には考へられる。といふのは、彼等ブルジョア社會學者たちは、學生たちがパンを求めてゐるのに石を與へた、とも言はば言はれるやうな出方をしたからである。今日彼等の學術が一般の學生たちの間の社會科學研究の傾向の上に幾らかでも感知し得られる程の指導力をすら持つてゐるやうに見えないとに關しては、彼等自身は或ひは、彼等の學術がそれには餘りに深邃なためだと思惟してゐるかも知れないが、我々から見れば、彼等の社會學と學生たちの社會科學との間に、到底調和することが出來ないほどの間隔が存するやうになつて來てゐるからである。かういふ事情を明かにするためには、いくら手數でも結局具體的實例に就いていふ必要があるから、私は本文のこれから先きの進行中に、少くともその最も根本的な要點に光を投げてゐるものと思へるものをなりとも、どこかで擧げる積りでゐるが、しかしま

づそれまでに私は、學生たちが現實に『社會科學』に與へてゐる內容を闡明しなければならぬ。學者たちが、彼等の立場からその內容を訂正しようと試みるのは勝手でもあり、また『うまく行けばお慰み』ともいへるものでもあるが、しかし彼等がそれを企てようとするならば、彼等はまづその對象を知つてから掛からなければならないといふのは、當然至極のことである。學術的勞作の上に於て『盲の垣のぞき』のやうな氣の利かない眞似をすることなどは、どう贔負目に見ても、餘り見上げた圖ではなからうではないか！

八

A教授だけを餘り永く引張り廻はすのは、それをしてゐる我々の方で幾らか氣が差すが、しかし我々の當面の問題中の最も核心的な部分を構成するところの學生たちの『社會科學』そのものに直接に打つ突かつて來てゐるのは同教授だから、我々は尙ほ當分の間、彼から離れて行くことが出來ないのである。

A教授は、『所謂社會科學の研究の名の下に行はれてゐる研究の內容は此一大科學群の一部分丈に集中せしめられてゐるのではなからうか』とか、『若しそれが社會科學中の特殊な研究項目丈に研究範圍が限定せられてゐるとするならば』とか、與謝に物のはさまつたやうな言ひ方をしてゐるのは、少くとも地域的には彼に接近して眼と鼻のさきに生活してゐる筈の社會科學研究學生たちの立場に對する彼の無理解（一）から來てゐるものだと我々に思はれる、といふとは、私が前に既に述べた通りである。が、假りにA教授が疑つてゐる通りに、社會科學研究學生たちがその研究範圍を或る特殊な研究項目だけに限定してゐるといふことが本當だとしても、そのことから一體どうして彼は、『それは冷靜なる自由研究を阻碍するものではないであらうか』とか、『それは研究の自由を自ら局限しつつあるものではなからうか』（傍點

は私のもの。――筆者。)とかといふやうな、その次の疑ひを導き出したものであるかは、到底我々の貧弱な腦力では理解が出來ないことである。いかにも學生たちは、最近盛に『研究の自由の壓迫』に關して當局に抗議して來たが、しかし彼等が『研究の自由の壓迫』といつて居るのは、彼等の自由研究に對して外部から加へられる不當だと考へられる干涉を指してゐるのであつて、彼等が自主的に彼等自身の研究範圍を或る特殊な研究項目に限定するやうなことを指して居るものではないのである。從つて、彼等に取つては、彼等が自主的にさうすることは、『研究の自由を自ら局限』してゐることになるものではなくて、却て研究の自由を自ら行使してゐることになるものである。或はまた、少し氣を廻はしすぎるかも知れないが、A教授が『冷靜なる自由研究を阻碍する』といつてゐるのは、『熱烈なる自由研究(!)を阻碍しない』といふ意味を裏面から言つてゐるのかも知れないといふことに、我々の方で勝手に決めてかかつてみても、それにしてもどうも馴じみの薄い外國語で話しかけられてゐる時のやうに、その意味が我々には確實に捕捉出來ないのである。そしてその揚句の果てには、我々の注意が知らず識らずの間に散漫になりかかつて、結句『最高學府に學生となるもまた難いかな』などといつたやうな、取つても附かないことを考へ出すやうに誘はれて行くのである。

九

だが、A教授が、學生たちの社會科學は、それ自身の研究範圍を或る特殊項目に限定してゐるのではないか? と問うてゐるのは、實は謂はれない疑ひから來てゐるものであらねばならぬ。前に言つた通りに、學生たちの社會科學は、社會生活の全面を以てそれの研究對象としてゐるものである。で、それもその際に附け加へて言つたことだが、その學生たちの社會科學を特に標識してゐるものは、決してそれの研究項目なのではなくて、實は寧ろそれの研究方法なので

あり、それの觀察樣式なのである。この點に關聯して、學生たちが社會生活の科學的研究の必要の認識から社會科學研究會の組織に着手し始めた前後の頃から、彼等はその研究の上に於て、次第にマルキシズムの方法論に就くやうになつたことは、一般的によく知られゐることであるから、玆では特にそれを取り立てて說明するまでもあるまい。、教授が同じ批判中に、彼の知つてゐる或る學生について、彼（その學生）が『何か特定のイデオロギー』を掴んでゐたかのやうにいつてゐるのは、或ひはその方法論上のことを感違ひして言つてゐるのかも知れない。――それは私の推察にすぎないことだが。――また、A教授と同じX大學に一講座を受け持つてゐるB博士が、社會科學研究學生たちが『動もすれば特種思想の信奉に膠着し』がちな傾向のあることをいつてゐるのも、――これも私の推察にすぎないが、――矢張り同じ點を見て、さう言つてゐるのであるらしい。さういふことは、どちらにしてもいいが、しかし、それに關しての一の肝腎な要點と見られなければならないことは、學生たちがその社會科學の研究に際して、方法論上マルキシズムを採つてゐることから、必然的に、彼等の社會科學の研究對象を社會生活の全面の上においてゐる、といふ結論が生じるのだ、といふ事である。いふまでもなく、マルキシズムに在つては、社會が一の現實的全體として――若しくは一の體系として――見られてゐるものである。そして、その社會の現實生活の上には、法律、制度、藝術、宗教、哲學、等等の意識生活の表象の種々相が流動の姿に於て樣々に作用してゐるのであるから、マルキシズムに於ても、無論それらのものの科學的觀察が非常に重要視されてはゐるが、しかし同時に、それらの意識生活の表象の種々相の基底に於て、社會の經濟的機構としての諸生產關係の總體がおかれてあるといふことは、今日では、マルキシズムに於ける方法論の出發點である唯物史觀を少しでも覗いたことのある人々の常識となつてゐることである。

もとより、上に掲げた通りの、マルキシズムに於ける對象の見方に就いて、それの『學的』妥當性を是非するやうな

ことは、學者たちが、手ん手に思ふ存分氣の濟むやうにやつて一向に差支へのないことだが、しかしそれと同時に、さうした對象の見方そのものの中から、社會を一の現實的全體として——一の體系として——把握することの必要を最大限度に强調する方法論上の命令が、不可抗的に生じて來るといふこともまた、決して忘れられてはならないのである。學生たちの意味に於ける『社會科學』の研究對象は、A教授の心配を待つまでもなく、さういふ風に把握されるところの、一の現實的全體としての——一の體系としての——社會生活そのものに外ならないのである(7)。無論マルキシズムに於ては、その方法論の基礎としての唯物的辯證法に於て强調されてゐる通りに、全體の綜合的把握が極度に重要視されると同時に、部分の精確なる見究めが同樣の程度に嚴重に要求されるのである。ただ、マルキシズムに於ては、全體が單なる全體としてだけでなく、また部分が單なる部分としてだけでなく、寧ろ全體が諸部分に對して持つ聯關性に於て、並に部分が全體及び他の諸部分に對して持つ聯關性に於て、更らにまた、さうした全體と部分との、部分と全體との、部分と部分との間の交互聯關性の上に不斷に起つて來る動きの過程(內在的矛盾から來るところの)を通しての交互的地位轉換の關係に於て、的確に把握されなければならないものとされてゐるのである。で、實際上、今言つた意味に於ける全體と部分との間の聯關性が、及びその上に起る動きの過程の法則が、マルキシズムに於ける方法論の出發點におかれてゐるといふことは、今日の社會科學研究學生たちのABCとなつてゐるものであつて、そしてこのことは、その問題に幾分かでも關心を持つてゐる局外者たちにも、充分理解されてゐる筈のことであらねばならぬ。

(7) 私が後にブハリンの或る所說に關聯していはうとしてゐる通り、この意味に於ける『社會科學』は、それを『一般社會科學』と呼ぶ方が或は一層妥當であるかも知れない。だとすると、これから後に擧げようとしてゐる『社會諸科學』に對して、我々が『特殊社會諸科學』といふ名稱を用意しておくこともまた當然だといふことになるが。

兎に角、社會科學研究學生たちが、朧ろげにでも方法論としてのマルキシズムに據るやうになつてからこのかた、彼

等は、現實的全體として把握される社會生活をその研究對象とする科學の一部門の成立を認めて、そしてこれを『社會科學』と呼んで來たのである。けれども、彼等は同時に、矢張りその同じ方法論上の根據から、更に、『部分としての社會生活上の種々相』として把握し得られるもの（研究目的上の或る視角から見て）をその研究對象とする科學の成立の可能性を認めるだけでなく、更らにさうした諸科學の成立の必要をも、充分に認めて居るのである。それ故に、社會諸科學の存在は、彼等の立場から見れば、當然すぎるほどの當然である。けれども、再び彼等の立場から見れば、部分は全體と聯關せしめられて把握されなければならないが故に、今言つた『部分としての社會生活上の種々相』と呼ばれ得るものを研究對象とする社會諸科學の一つ一つは、現實的全體としての社會生活を研究對象とする、『社會科學』から出發して、またそれに歸着する、といつたやうな關係の下におかれてあるものとされなければならないのである。從つてまた、我々の中心問題としてのその『社會科學』は、それ自身に社會諸科學の一つを構成するものではあるが、しかしそれと同時に、それはまた、今述べた通りのそれ自身の本質上から、社會諸科學のグループの中に於て、それに相應する一の特異の地位を占めるものとなるのである。で、結局かうした諸關係の下に於て、社會諸科學は『社會科學』を通じてでなければ、相互間に脈絡もなく、また全體として統一のない個々の學問の群立となるのであるが、しかし『社會科學』を共同の中心的集散地とすることに依つて、それらは始めて社會生活に關聯する諸學問から成るところの、多樣性に於ける統一性を示す一の全一體を構成するやうになるのである。

一〇

或ひはかういふ人もあるかも知れない。――『若し學生たちの所謂「社會科學」がさうした意味のものであるなら

ば、それは「社會學」といふ在り來りの名で呼んで差支へのない譯であつて、何も好んで異を樹てるつもりでもあるかのやうに、强ひてそれを「社會科學」と命名する必要はないではないか？」と。

我々はまた、實際上マルキシストたちの間に於ても、學生たちが、『社會科學』と命名してゐるものと同じ學問を、『社會學』と呼んでゐるものがあることが、屢々見出されることを知つて居る。今私に差し當つて思ひ附くことの出來る一二の例を擧げると、まづ第一に前揭のマクス・アドラーの『マルキシズムの國家觀』の第一章の標題に『政治學と社會學』(Politik und Soziologie)とある中の、その『社會學』といふ言葉が、今日の我國の社會科學研究學生たちが『社會科學』と呼んでゐるものと同じものを指してゐるものであることは、その章の論述を讀めば直ちに解かるのである。從つて、その章中に於て、『マルクス・エンゲルス流の思惟の獨特の意味は徹頭徹尾社會學的基礎の上に存する』(8)(傍點は原文によつて施したもの)と述べてゐる文句中の『社會學的』といふ形容詞は無論のこと、それにつづいて頻出する同じ言葉は いづれも皆その積りで讀まれるべきものである。次に、ブハリンは『史的唯物論』の第三章で、『社會の個々の諸形態をでなく、一般に社會といふものを研究するところの最も一般的なる社會の科學としての社會學に取つては、しかし 或る程度に特殊社會諸科學への命令として、この根本原則を設定することは大切である。といふのは、我々が知つてゐる通り 社會學は特殊社會諸科學に對して 研究の方法論を構成するものだからである』(9)(傍點は引用者のもの、傍圏は原文によつて施したもの)といつてゐるが、その中の『社會學』(Soziologie)は、まさしく學生たちの所謂『社會科學』に當るものである。それからまた、彼が、その『社會學』を『最も一般的な社會の科學』(die allgemeinste soziale Wissenschaft)として性質づけてゐること、並にそれに對して 私が上で『社會諸科學』と呼んだものに相應するものを、『特殊社會諸科學』(spezielle Gesellschaftswissenschaften)として擧げてゐること

は、大に我々の注意に値することである。少くとも、若し今後我々が『社會科學』や『社會諸科學』やに關する我々の用語法を一層精錬する必要を持つことがあるものとするならば、それは我々に取つて、相當の参考價値のあるものである。とにかく『最も一般的な社會科學』といふ言葉からは、我々は『一般社會科學』といふ用語を作り出すことが出來て、そしてそれは學生たちの所謂『社會科學』の新名稱として用ひてもいいやうだし、また『特殊社會諸科學』はそのままで、私が上に掲げた意味の『社會諸科學』の代りに適當に用ふることができさうだと、私には一寸今考へられるのである。

(8) アドラーの前掲書第一七頁。

(9) N. Bucharin, Theorie des historischen Materialismus, Hamburg, 1922, pp. 69—70.

だが、ここで言ひ忘れてはならないことは、かういふ風に、マルキシズムたちの中にも、學生たちが『社會科學』と稱してゐるものを、『社會學』の名で呼んでゐるものがあるのは、たしかに事實であるが、しかし學生たちがそれを取らなかつたのは、必ずしも、彼等が社會科學研究會創設時代にそのことを知つてゐなかつたためといふ譯ではない。彼等がその頃それを知つてゐたか、ゐなかつたかね、それに關しては、別に問題になるものではない。さういふことよりも寧ろ、彼等は從前から我國の學界に於て『社會學』の名に於て與へられてゐた各種の研究や業績やが、單に、彼等が社會生活の科學的研究を通じて知らうとしてゐたものと沒交渉であつたばかりでなく、最も多くの場合に於ては、それと背馳してゐたものであつたことを、いつか知るやうになつてゐたのであつた。しかも、彼等は、その頃から、そのことの最後の原因が方法論上の問題から來てゐるものであることを、無論初めに溯るほど、より漠然とではあつたが、現に角次第に學ぶやうになつたのである。そして彼等はそれと共に、その點に於てマルキシズムが彼等の求めてゐた正し

き方法論を示してゐるものであることを、皆一層と確實に突き留めるやうになつたのである。かうして、學生たちの社會科學研究が、段々とマルキシズムと離れられない關係におかれるやうになつて來たのである。

二

私はさきに、A教授が學生たちの社會科學研究がそれの研究範圍を或る特殊項目に限つてゐるものでないかと疑つたのは、彼がそれに於て專らマルキシズムの方法論が採用されてゐるのを見たところから來てゐるのかも知れない、との推測を下しておいたが、しかし今になつて考へ直ほしてみると、それは或ひは、學生たちの研究が常にブルジョア社會の解剖を中心として行はれてゐて、しかもそれに關するすべての說明が、究極に於て經濟上の諸關係を基點とし、そこから出發し、またそこに歸着せしめられるのを見た所から來てゐるのかも知れない、とも思はれなくもないのである。無論、かういふことは、マルキシズムから見て當然のことであり、殊に經濟上の諸關係がすべての說明の基礎におかれてあるのは、それが唯物史觀の上に立つ以上、避けられないことである。マルクスが『ブルジョア社會の解剖は經濟學の中に求められるべきだ』(10)といつてゐるのも、その意味に於てのみ理解されることが出來るのである。『だが、それはそれでいいにしても、社會生活の全面的研究といへば、全人類社會の概念の研究から始めらるべきであり、少くともブルジョア社會の解剖は、全人類社會の概念の檢討から出發すべきものである筈だのに、學生たちの社會科學研究が專らブルジョア社會の解剖を主位におくのは、何としても、彼等が不當に研究範圍を限局してゐるものとしか見られるの外はないのである。』――と、かういつた種類の批難は、A教授からでなくとも、他の多くの人々かもまた、屢々社會科學學生たちに向つて投げかけられがちである。

(10) Karl Marx, Zur Kritik der politischen Oekonomie, Stuttgart, 1920, p. LV.

だが、ブルジョア社會の解剖は全人類社會の研究から始められるべきでなく、逆に全人類社會の研究こそブルジョア社會の解剖から始められるべきものだといふことはまた、マルキシズムの方法論に於ける歷史主義（Historismus）から來る當然の歸結である。マルキシズムに於ては、『各歷史的時代は、それの獨自の諸法則を持つ。……生活が一の所與の發達時期を經歷しつくすや否や、〔若しくは〕一の所與の段階から他の段階へ轉入するや否や、それ〔生活〕は別の諸法則によつて導かれ始める。』(11)（角形括弧の挿入語は引用者のもの、以下みなその通り。）それ故に、マルキシズムに在つては、社會法則は究極に於て、歷史的必然の法則に歸着するものである。かういふことは、いふまでもなく、上に揭げたマルキシズムの方法論の基礎をなすところの唯物辯證法に於て闡明される動きの過程の法則——若しくは簡單にいへば『動きの法則』（Bewegungsgesetz）——の歷史的適用から、當然のことゝして推論し得られるのである。かういふ風に、若し人類社會をそれの動的の進み行きに於て把握して、『各歷史的時代はそれの獨自の法則を持つ』ことが正當に言はれる以上、そのことを無視して、時間及び空間に超越する普遍的なる人類社會の諸法則を求めるといふやうなことは、無目的なことであらねばならぬ。それに反して、『ブルジョア社會は最も高度に發達したる、そして最も多樣性に富むところの、生產の歷史的組織である。それの諸關係を表現する諸範疇なり、それの編制の理解なりは、既滅のすべての社會形態の編制及び諸生產關係への洞察を、それ〔＝ブルジョア社會〕に賦與する。〔といふのは、〕それら〔＝既滅のすべての社會形態〕の廢墟及び諸要素の上に、それ〔＝ブルジョア社會〕はそれ自身を築き上げ、また一方に於てはそれら〔＝既滅のすべての社會形態〕の尚ほ克服しつくされざる限りものがそれ〔＝ブルジョア社會〕のうちに保有されて居るといふやうなこともあれば、また他方に於ては、曾つてほんの示唆〔＝萌芽〕を示してゐたに過ぎなかつたものが、〔今では

成熟して〕全意義を發揮するまでに進化して來てゐるといふやうなこともある〔からである〕。人間の解剖は、猿の解剖への鍵である。それに反して、より下等な諸種の動物〔の肢體〕のうちに於ける、より高等なるものへの示唆〔＝萌芽〕は、より高等なるものそれ自身が既に知られた後にこそ、始めて理解され得るものである。ブルジョア經濟學は、古代のそれへの鍵である。だが、〔それは〕決して、すべての歴史的差異を抹消しておいて、すべての社會形態のうちに、ブルジョア社會形態を見ようとするやうな種類の經濟學に於て〔求められ得るもの〕ではない』(12)。かうして、ブルジョア社會の解剖は、――もしくはブルジョア社會内部からのブルジョア社會の科學的觀察は、――簡單にいへば『ブルジョア社會の自己批判』は、當然のこととして、全人類社會の研究の發端におかれるべきものである。それ故に、學生たちがその社會科學の研究に於て、ブルジョア社會の解剖を中心的地位においてゐるのは、彼等が『研究の自由を自ら局限しつつある』ことを意味してゐるものでなくて、彼等が自ら正當だと思惟した研究方法を自主的に採用した結果である。

(11) Karl Marx, Das Kapital, Volksausgabe, 3. Aufl., Stuttgart, 1920, p. XLXI.

(12) Kritik, pp. XLI—XLII.

二

しかし、ブルジョア社會學に於ける方法論と、學生たちの所謂社會科學に於ける方法論との差異は、議論だけでそれを片附けようと試みるよりも、それぞれのものから生じた實際上の成果について、それを具體的に例證する方が早道だと考へられる。それ故に我々は、矢張り同じA教授の言說に即して、社會現象に對する彼自身の見方から得られたものと推定されるところの或る一問題に關する彼の論斷を取つて來て、それを同じ問題に關して學生たちの社會科學上の立

場から當然生ずべき可能的論斷と比較して見ようと思ふ。

A敎授は、現在の社會秩序と支配階級との間の或る關係に關して、『社會の秩序維持の形式が幾多の批判を受くべき點を持つてゐるにしても、此秩序維持の任務にある者は此秩序形式に反する者を許さないであらう』と言つてゐる。『何故ならば』——彼によれば——『支配的地位に立つ者から觀れば、此樣な社會生活は其人々の主觀世界に於て最も理想的なる生活形式であり、此樣な社會生活の秩序を維持する事に於て、支配者の考へた世界は最も安全な世界となるからである。』この言ひ方が甚だ不精確なものであることは、一見して明かである。たとへば、そこで『此樣な社會生活は』といはれてゐるものは、一體どの樣な社會生活に關して言はれてゐるものかがよくは解らないが、多分『現在の社會生活は』とか『何れの時代を問はず現在の社會生活は』とかいふ位の意味で言はれてゐるものであらう。そこで、もしそれが前者のことならば問題はないが、後者のことならば、さういふ風に或る特定の時代を超越して、いきなり一般的意味の『現在の社會生活』に關する普遍的法則を求めるやうなことは、學生たちの意味に於ける社會科學の方法論上に於ける歷史主義からは、許されないことである。またそこに『……最も理想的な社會形式……』とあるのは、如何なる立場から見ての理想的なそれかゞ全然判然しないが、それは恐らく、次に言はれてゐる支配者の地位の安全といふ立場から見ての理想的な社會形式といふ意味ではないであらう。だとすると、その支配的地位にある人々の『主觀世界に於て最も理想的なる生活形式』といはれてあるものは、例の絕對的意味の眞、善、美、といつたやうなものの立場からとか、若しくは、普通さうしたものと親類筋の關係におかれてある『政治理想』とか『社會理想』とかからの立場から見ての理想的な生活形式を意味してゐるものと解されるべきものであらう。その場合にも『誰の？』といふ問題が生じるのであるが、それは恐らく『支配者の』と答へられべきものなのであらう。で、私は、右のA敎授の言葉を最も好意的に解

釋して、『一般に支配的地位にある人々といふものは、現存の社會秩序を、彼等の政治理想とか社會理想とかの上から見て、最も理想的な生活形式だと考へるものであつて、……云々』といふほどの意味がそれのうちに述べられてゐるものと見て、それを簡單に檢討して見よう。

一般に支配的地位にある人々が現在の社會秩序を最も理想的な生活形式だと考へるものとする以上は、それからの當然の推論として、現在の我國の支配階級も現在の我國の社會秩序が最も理想的な生活形式だと考へてゐるに違ひない譯である。だが、事實上、さうしたことが、果して存してゐることだらうか？

今假りに政治生活から一例を取つて來ていふと、曾ては我國の支配階級の側に於て『憲政讃美』といふやうな標語が、熱烈なる信仰を以て高唱されてゐた時代もあつたが、その頃に於ては彼等は、多望な未來を約束してゐたものと見られた我國の代議制度及びそれを支持してゐた社會秩序を、政治的にも社會的にも、理想的なものだと考へて居たに違ひないとは言へる。が、今日では果して、さういふとが、續いてゐるといへるであらうか？　今日では我國の代議制度が、政治的にも道德的にも、等々、醜態暴露、破綻百出の狀態にあることは、公知の事實である。それだのに、支配階級は今日尚ほ依然として、それを理想的な生活形式の表象として讃美しつゞけてゐるであらうか？　今年の正月、都下の或る新聞紙上に『余が理想の人物』といつたやうな課題の下に集められた記名投票の結果が發表されてゐたが、それによると、支配階級に屬する人々の中にムッソリニの名を擧げてゐる人々が相當に多くあつたやうに、私は記憶してゐるが、それは獨裁政治に對する彼等の意識的もしくは無意識的憧憬を或る程度に反映してゐるものと見られないであらうか？　更らにまた、第五十一議會後に於て、例の後藤子爵の『政治の倫理化運動』などが提起されたやうなことは、今日の我國の代議制度の腐敗狀態の認識から出たものではないであらうか？　もとよりこの政治の倫理化運動は無產階

級の側からは　階級意識への魔酔劑として　極度に强硬に否認されてゐるが、しかし、支配階級の側からは　痲し痒しの感じを以て迎へられてゐることの具體的證據が幾つもある。それでも、現在の我國の支配階級が現在の瞬間に於ける代議制度及びそれを支持する社會秩序を　如何なる意味に於てにせよ　理想的な生活形式の表象だと考へてゐるであらうか？　否、我々から見れば　或る歷史的時代に於ては　支配階級が彼等の『主觀世界』に於ても最早理想的なものでなくなつた社會秩序や、それに伴ふ各種の意識形態やを、必死になつて維持しようと努力するやうなことがあるところに　歷史の皮肉が見られるのである。A教授が擧げて居るローマ法王の治下に於て多くの學者たちが極刑に處せられた事實が起つたのは、彼の支配下の學們たちが、舊來のドグマを眞理だと信じてゐたり、新出の眞理を誤謬だと考へたりしたゝめでないことは、科學の歷史を覗けば　容易に判ることである。それと同樣に現在の我國の支配階級が、治安維持法を作つたり、それを適用したり、また　學生たちの社會科學研究を壓迫したりしてゐるのは、決して現在の我國の支配階級に取つて、現在の我國の社會秩序や、それに伴ふ各種の意識形態やが、彼等の『主觀世界』に於て最も理想的なものとして存在してゐるがためではないのである。そして、さういふことは、學生たちの社會科學の方法論に於ける歷史主義からは容易に認識が出來ることである。

A教授の議論に就いて批評すべき點は尙ほ幾らでもあるが、しかし、この上それをつづけて行く必要は最早ないであらう。我々は今は、それに關して我々の根本問題は、社會科學上の方法論の問題の上に存してゐるものだ、といふことを一言するだけで充分だと考へる。我々から見れば、A教授が見本を示してゐる通りの固定的な、偏頗な物の見方は、我々の意味に於ける形而上學的のそれであり、そして學生たちの社會科學に於ける流動的な、辨證法的な物の見方は、我々の意味に於ける科學的のそれである。それ故に、A教授がたとへば、『如何なる社會生活の形式が組み立てられよう、

とも、其形式に於ては社會を構成してゐる總ての人々の要求、衝動、關心、と云ふ樣なものが充され得るものでない」といつたやうな、反動主義的な、そして內容の空虛な贅言は、社會科學研究學生たちの立場からは、形而上學的な、非科學的な、固定的な見方から出たものとしか、見えないのである。

三

學生たちがその社會科學の研究に於てマルキシズムを取り入れるやうになつたのは、彼等がマルクス及びエンゲルスの研究の成果のすべてを少しも誤謬がないとするやうな馬鹿げた信仰から來てゐるものではなくて、ただブルジョア社會の解剖に於ける方法論としてのマルキスズムの價値の認識から來てゐるのである。この點を無視したらしい同じX大學のC博士は、社會主義には取るべきところもあれば捨てるべきところもある、といふやうな月並をならべてゐるが、若し彼のいふ『社會主義』に於て、方法論としてのマルキシズムが含まれてゐるものとするならば、我々はそれに對して、方法論としてのマルキシズムの關する限りに於ては、それは全體として取るべきか捨てるべきかを決せらるべきものだといふだけで足りるものと考へる。それは、方法論としてのマルキシズムは、唯物的辯證法の基礎の上に統一されてゐる全一的の一體系だからである。

さうした出發點から踏み出してゐるC博士はまた、我國の現在の大學中、法學部や經濟學部は、今も尙ほ依然として官吏養成所としての舊態を保存してゐて、社會科學研究の府としての面目が發揮されてゐないから、そこに頻々として不祥事件が起るのだ、といふやうなことを言つてゐるが、果してさうであらうか？　この言葉はおそらく、主として官立大學について發せられてゐるものだらうが、しかし學生たちが自發的に社會科學研究會を起すことが傾向となつてゐ

るのは、全國的に一般的に行渡つてゐることであつて、ひとり官立大學内だけに限られてゐるのではない。のみならず、今日の大學は、官立と私立とを問はず、一般にブルジョア的社會科學研究の府としての面目を可なりよく發揮してゐるのである。が、ブルジョア的社會科學が眞の意味の社會科學でないといふならば、それもさうだが、しかしさうすると話が別になる。のみならず、假りに若し、今日の大學が眞の意味に於ける社會科學――若しくは學生たちの間に通用されてゐる意味に於ける社會科學――の研究の府としての面目を發揮するやうにならば、縱し岡田文相の壓迫方針や、治安維持法やが今日のままで存續しようとも、そこで今日頻々と起つてゐる『不祥事件』の原因が絶滅するであらうか?――そこには我々には解きかねる一の謎がある。

一四

以上私は、『社會科學』に關する諸家の批判に觸れて來たが、まだ一つ『研究』といふことに關する問題が殘されてゐる。それに關して私はY大學のD博士が或る會合で述べた意見の一要點を、私が把握したままに紹介する。若しその紹介に幾らかでも間違ひがあらば、それは私の責任である。

D博士は、學生の宣傳や行動やが國法に觸れない限り、それを自由に放任しておくべきものであるといふ意見を持つてゐる點に於て、私は彼を可なり買つてゐる。けれども、『研究』といふ一點に關しては、彼は學生たちの『研究』といつてゐるものは、實は『研究』でなく『學習』にすぎないものであつて、それを研究といふのは、『研究』を冒瀆するものだ、といふ趣旨を述べて、全然『研究』を宗教にしてしまつたのである。その癖彼は、マルキシズムやレニニズムは、科學でなくて宗教だと、我々の耳に響いたことを言つて、それらを皮肉つたつもりでゐたやうである。それは兎に角、彼の『研究』に對する見解は、一定の資格のあるもの――若しくは『折紙づき』のもの――のするべきことであつて、

また學習時代にある學生たちのすべきものではない、といふ風に解釋されるべきもののやうに私には思へた。だとすると、それは著るしく、ギルド・プロフェッサー的、匂ひの高いものであり、從つて、見やうに依つては、免許皆傳思想の産物だといはなければならぬ。學生たちの立場からいへば、研究といへば、未知の世界への學術的探求であつて、それは誰れがやつても、また如何なる樣式でやつても、――殊に個人でやつても、團體でやつても、――それが苟くも學術的性質を失はない限りは、どこまでも研究であることを妨げないのである。更に今D博士が持つ『研究』の定義がどうであらうとも、彼が學生が現實にやつてゐる社會科學上の研究の進行情態のどういふものであるかを、少しも實際について知つてゐないもののやうに見えた。それで居て大膽にそれを批判しようとしてゐた勇氣だけは、聞いてゐた私たちを驚嘆させるに充分であつた。

また私の傳へ聞いたところに依ると、その同じD博士は、或る場所での講演で、日本には擁護する價値のある研究がないから、研究の自由の要求などとは滑稽だ、といつた趣旨を述べたといふことである。この報道は何分にも又聞きだから、或は全然間違つてゐるかも知れない。が、D博士でなくとも、さうした奇怪な意見を持つてゐる人々が、我國に少からずあることは事實であるから、それに對して一言を費しておくのも、必ずしも無用ではなからう。簡單にいへば、さうした議論は、研究を完成の姿態に於てのみ見るものである。ところが學生たちの立場から見れば、研究は一つのプロセスであり、しかも一の不斷のプロセスである。この意味に於いて完成された研究といふものはあり得ない。若しさうしたものがあつたとすれば、それは研究の化石に違ひない。そして化石となつた研究は、別に擁護する必要がなくなつてゐるものである。それ故に學生たちが『研究の自由』を叫んでゐるのは、プロセスとしての研究についてしてゐるのである。それは彼等から見れば、研究の進捗への必須的條件だからである。從つて、彼等は彼等の間に見る

に足るほどの研究がなければない程、益々痛切に研究の自由の要求を感じるのである。

學生検擧事件を中心としての諸家の批判に對して私がいひたいことは、これで決して盡きた譯ではないが、それをいひつづけてゐては限りがないから、もうこの邊で筆をおくことにする。要するに私は、學生たちの社會科學研究に對する局外者たちの言葉は、如何に同情に充ちてゐるやうに聞えるものであつても、それが理解の伴はない同情である限りは、學生たちは社會科學の名に於て、それを峻拒すべきである、といふ一事である。社會科學は理解の伴はない同情の支持を頼みにして立たなければならないほど、その基礎の薄弱なものではないのである。

農學博士 小野武夫著

日本農民史語彙

――博士十數年苦心熱誠の編纂――

採録語數三千百語

讀史研究に愛書家座右必備の書

見本

發することを得」とあるは、公共用水又は口分田の餘水を引きて開田を許したるものならん。（大日本農史）

公文乘（コウブンジヨウ）

官紀を犯して私收する税の意なり、即ち平安朝の頃、國司が規定の賦課の外に種々の名目を設けて、餘分に人民より税物を徵發せるを「公文乘」と云ひたるなり、元より甚だ不法の行爲なれば、桓武天皇は布達を以て之を禁じたり。

〔引例〕桓武天皇、延暦十七年、戊寅勅令、租税調錢は出納限有り、術を收め用に充つること色數一にあらざれば、姦吏の輩が官物を犯用して公文乘と名け、憲章を憚らず、心に貪濁を挾み、競て截留を事とし、田租を剩徵し、調錢、職寫田の直、術、錢等の類を奸折することと有るに至り、贓汚多端なれども、積習悛むること無し云々。（大日本農史）

公奴婢（コウドヒ）

公奴婢とは世の賤民にして政府に屬する奴婢なり。官戸に似たれども、その品等下れるものとす、多くは東北地方の蝦夷人の捕虜等より成れるが多し。（日本法制史）

紺屋役（コウヤヤク）

紺屋役は又一名藍瓶役とも云ふ、藍瓶の數に掛けて出さしむる役錢なり、國によりては紺屋には役錢を出さしめさる處もあり。（地方凡例錄）

估價（コカ）

王朝の頃、國有地たる公田の耕作者よりは夏の小作料として賃租即ち作料を徵收したるが、其の賃租の高は一に各地方の貨物の騰落によりて定められたり、此の時の相場のことを估價と云ひぬ。大寶令に「凡諸國の公田皆國司隨二郷土估價一賃租」云々とあり。（日本農政史）

定價參圓五拾錢　送料三十六錢

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

明治文學のおもひ出

明治和歌史話斷片

齋藤茂吉

○

明治から大正にかけての和歌は、曲折もあり變化もあり、又優れた歌人を出した點でも、建國以來、萬葉集に次ぐ盛況だらうとおもふ。平安朝から鎌倉にかけて、歌人どもは隨分熱心であつたけれども、實質のうへから看て、それから數のうへから看てさう驚くべきものではない。ただ上に和歌に熱心な天皇のましましたことは萬葉集以來注目していゝ點である。

明治天皇は和歌に熱心し給ひ、また大歌人にましました。明治三十八年日露戰爭のをりの御製に、『ともしびをさしかふるまで軍人(いくさびと)おこせしふみをよみ見つるかな』といふのがある。日露戰爭當時には多くの舊派歌人も新派歌人も歌を作つてゐるが、つひにこの一首の御製には及ばない。天皇は先づ先づ桂園派の和歌の教育を受けさせられたと看做していゝとおもふが、その氣魄の大、眞率の調べはつひに流派を絶し給うてゐる。實相に觀入した御歌が多く、破調の歌のあるのは、大歌人にましますことを證據立ててゐるのであるが、私どもの拜讀し奉る「御集」は選集で、割合に整つたもののみであるのは殘念である。

さういふ天皇の盛な御代に和歌運動の盛にならない筈はない。果して、明治三十年前後を起點として新派和歌の運動が起つた。これは當時の舊派歌人に對しての新運動であつたのである。舊派歌人といふのは、香川景樹の末流の宮内省派、それに江戸派堂上派あたりの名殘の歌人がゐたのである。江戸末期から明治の初年にかけて、橘曙覽(あけみ)、平賀元義(もとよし)などがゐたけれど

も、あれは砂金のやうな歌人であつた。凡俗にはその砂金はなかなか分からない。そこで流派を形づくらずに死んでしまつたけれども、後年新派和歌の勃興するに及んで、新派の歌風にどしどし影響して行つた。

舊派歌人と謂つてもその數は實に多い。その一々は私は知らぬ。併し「明治歌集」あたりを一寸見ても奈何にその數の多いかが分かる。ただ明治、大正の歌風をば新派の歌にその特色を見出すとせば、明治天皇の傍に昭憲皇太后樣をおき、三條實美、八田知紀、高崎正風、小出粲、黑田清綱、稻羽美靜、本居豐穎、寶田通文、鈴木重嶺、松波資之ぐらゐを以て代表せしめ、女流に稅所敦子、中島歌子ぐらゐをおき、海上胤平とか、愚庵和尚とかをば特殊な歌人と看做して擧ゐるに止めて、あとは新派和歌運動以後の時期に移つて行つてもいゝだらうと思ふ。

舊派の歌といつても、兎に角香川景樹あたりが當時新派のつもりで詠出した歌風の名殘であるから數多くの中から拾へば相當の作作にも逢着するに相違なく、古今集以來の長い傳統で、氣の利いた良い技巧をも認め得るのであるが、大體からいへば、生氣が無く納まりかへつてしまつて、どうしても堂上人、富豪の弄び物といふ風のものが多い。また「東洋もの」といふ氣のする特徵をも認めることが出來ようが、これにしても模造品の乾燥が目に立つのであつた。海上胤平の如き一種の天の邪鬼の作物でも矢張りさういふ範圍から脫することが出來ない。丸山作樂は萬葉調の歌をつくり、愚庵も萬葉調の歌を作つたが皆割合におとなしい歌である。

そこに行くと新派の歌といふものは、書生派で、壯士のやうな語氣があつた。何の彼といつても、浪六物に出てくる五人男といつた風のところがあつた。そこに止むに止まれぬ師子奮迅の趨勢を藏してゐたのである。日清戰役の戰勝後、何か動くものが和歌壇にも波及した點もあるだらう。

○

新派の和歌は落合直文の淺香社から出た與謝野鐵幹の新詩社、弘綱の家學を繼いだ佐々木信綱の竹柏園派、正岡子規の根岸短歌會等がその重なもので、皆相當の歌人を出してゐる。金子薰園、尾上柴舟、雅川容穗等は先づ新詩社の傍系の如き形で進み、その間に大和田建樹とか中村秋香などの歌人もゐた。直文も、信綱も、舊派の和歌を學んだものであるが、時勢を見拔いて新しい運動に參加した。直文の如きは恐らく槐園・鐵幹から刺戟されたもの丶如くである。新派和歌の運動が起つてからだいぶ經つて、『うつしなば雲雀の影もうつるべし鶉眞日和のう

ららけき空』などといふ歌を作つてゐる。また『若草に鏡をすてて胡蝶まふ狂女髮ながし野べの春かぜ』などといふ歌もあるが、これなどは、「明星」初期の歌風の影響が極めて濃厚で露骨で、實はをかしい程である。

○

與謝野鐵幹は、詩歌集「東西南北」をば明治廿九年に出した時に、『小生の詩は短歌にせよ新體詩にせよ、誰を崇拜するにもあらず、誰の糟粕を嘗むるものにもあらず、言はば小生の詩は即ち小生の詩に御座候ふ』と豪語してその作物を世に問うた。その作は、極めて書生式劍舞流のものであつたが、何處かに生氣に富み、淸新の趣があつた。次いで「天地玄黃」を出した。舊派の歌人を除いて、鐵幹の歌風に同情するものがなかなか居た。

さうなれば、朝鮮で一爲事しようとしたり、歌壇の素人を以て任じてゐた鐵幹も、同志を集めて、雜誌「明星」を發刊するに至つた。程經て出雲の中學に赴任した大町桂月が、『あはれや虎の鐵幹か三十一文字の御師匠さま』と揶揄して來たのは、このあたりの消息を傳ふるものである。『虎の鐵幹』は「明星」に載つた一條成美の新派歌人の花見といふのに、鐵幹は眼鏡をかけ酒樽を持つて虎に乘つてゐるところが畫いてある。それらから謂ふのであつて、「東西南北」にも、『から山に吼ゆてふ虎の聲は聞かずさびしき秋の風たちにけり』などがあり、鐵幹は壯士流、書生流の歌を作り、調の粗雜豪宕を特徵としてゐた。これが「明星」の極初期の作物に見られる。

○

（こゝで一寸申すが、敬語をば便宜のために省略したことを先輩の諸賢に陳謝しておく）與謝野鐵幹は、詩にあこがれる若い男女と交際してゐるうちに、靑年の熱情などゝいふことを切に歌ふやうになり、虎の鐵幹が、『われもまた鏡いだきて秋に泣くよおちし黑髮封じこせな人』などゝいふやうになつた。この歌は鳳晶子に贈つたものである。

戀と名といづれおもきをまよひ初めぬわが年ここに二十八の秋

そや理想こや運命の別れ路に白きすみれをあはれと泣く身

われ男の子意氣の子の名の子つるぎの子詩の子戀の子あゝもだえの子

などといふ歌が增加して行つた。「明星」のはじめには、落合

直文、佐々木信綱、正岡子規等も歌を出し、端唄評釋を佐々醒雪が書き、俳句評釋を高濱虛子が書き漢詩評釋を久保天隨が書き、鐵幹自身は橘曙覽の歌を評釋したりした。英詩、獨詩などの評釋もあつた。

鳳晶子は「明星」のはじめから投稿して居り『居あげをとりて大人(おとな)になりぬるを告げやる文のはづかしきかな』といふのが「明星」の第二號に載つてゐたと記憶する。それから鐵幹と晶子とが相戀愛して夫婦となり、與謝野晶子は思ふ存分その天分を發揮して行つた。

○

鐵幹が晶子を得てから、歌人としての活動が益々鮮明になつて行き、晶子も奔放自在の歌調を恣にし、灯火(ともしび)をかかげて進むの慨があつた。それからは新詩社の歌風は晶子を中心として變化し進展して行つたと謂つていゝ。當時世の歌を論ずるものは先づ天才歌人として晶子を論じた。その論は殆ど讃美の說であつた。上田敏、森鷗外等も晶子の歌には讃歎の聲を放つたものである。先づ開闢以來生きてゐるうちに斯程までに讃歎敬禮された歌人は晶子を措いて他には無い。現世にあつて金があり暇がある和歌史家は、既に世に出でた晶子論を鈔出することも極めて容易であらう。

從つて晶子の歌風は天下を風靡した。新派の歌を學ぶものは、先づ晶子の口吻を一二句模倣しなければ新派歌人の資格ないものゝやうに思へた。この傾向は晶子の歌風の衰へた大正六七年頃までもなほ九州の一隅あたりに殘つてゐたので私は興味ふかく思つたことがある。

それであるから、明治新派和歌の主潮流といふものは、實に新詩社の歌風にあつた。その活動は、明治三十三年ごろから、明治四十二年ごろ迄約十年の間續いたと謂つて可い。新詩社の活動は、晶子を出したほかに、高村砕雨、平野萬里、吉井勇、北原白秋、茅野蕭々、大井蒼梧、石川啄木、山川登美子、茅野雅子等の優れた作家を出してゐる。なほ與謝野寬の數ふるところに據れば垂眦子、清亂、黄昏、齊、花子、琴山、正光、江也、榮一、不抱等がある。その一部はもとの新詩社風に固定し、一部は後年のもつと新しい運動に參加して行つた。石川啄木、北原白秋、吉井勇などが即ちそれである。

明治四十三年に森鷗外が與謝野寬の家集「相聞」に序した時、『一體今新派の歌と稱してゐるものは誰が興して誰が育てたものであるか。此問に己だと答へることの出來る人は與謝野君を除けて外にはない』と云つた。これは序文體の會釋が交つ

てゐるにしても、實際その頃までの新派の主潮流といふものは新詩社にあつたのであり、薫園も柴舟も信綱も晶子の歌調の影響を隨分受けたのは事實である。併し明治四十三年頃の與謝野寛の歌風は、平野萬里、高村光太郎、北原白秋、木下杢太郎等がいち早く西洋もの、上田敏、永井荷風等からの影響で出發した、その歌風に影響せられてゐたし、また、萬葉・古事記あたりの言葉を採つて用ゐたり、「萬葉處雜歌」などといふ題で歌を發表し、『かも』なども入れはじめた。「明星」が終刊號を出し、「スバル」が新たに出で、晶子の編輯で「常磐木」が出たころである。與謝野寛は『けるかも』を認容した頃から「萬葉集講話」といふものを書いたりして、だんだん根岸短歌會の主張に敗北して行くやうな徑路を取つてゐた。

晶子は嘗て、『鎌倉や御佛なれど釋迦牟尼は美男におはす夏木立かな』といふ歌を作つて當時の人口に喧炙し、みんなが偉い偉いと褒めた。大町桂月なども口を極めて褒めたやうにおもふ。明治卅九年ごろであつただらうか、正岡子規門の伊藤左千夫がその有名な歌を手嚴しく批評し、それは「馬醉木（あしび）」といふ雜誌に載つてゐる。その時與謝野寛はどういつたか。寛は「明星」紙上で、『伊藤左千夫の批評ほど自己の愚劣さを暴露したものはない。吾々の歌を批評するならば、もつと日本語を研究して來れ』といふやうな意味でたいへん息張（いば）つてゐた。併し幾ら息張つても、『美男におはす』の歌は餘り高等な歌とは云はれない。所詮當時の女學生達はこんな事を噂合つただらうといふ心理興味ぐらゐの程度の歌である。

○

日露戰役に日本が勝つて、それから日本にも自然主義運動が興つた。歌人等もそれに影響され、柴舟、薫園等の歌風は晶子流を棄てて自然主義流になつた。薫園が「醒めたる歌」などといふ歌集を出したのは、この邊の消息を物語つてゐる。寛等は田中王堂に冗長な論文を「明星」紙上で書かせて、自然主義に對抗しようとしたが、若い者等はそれには靡かなかつた。新詩社の歌風の甘い女學生向のものは段々世と遠ざかつて行つた。

薫園門から出た土岐哀果は羅馬字論者であつた關係から、「なきわらひ」といふ羅馬字の歌集を出した。これは三十一文字の短歌をば西洋の詩に模して三行ぐらゐに分けて書いたものである。與謝野門の石川啄木は、いちはやく自然主義流の歌にかはり、哀果の模倣をして歌を三行に書くやうになつた。

その間に尾上柴舟の門から出た、抒情味の豐かな若山牧水と、新鮮な感覺を持つてゐた前田夕暮とが活躍し出し、新詩社

及びスバルの歌をば論敵の對象とし、『スバつた歌』などといつて難じた。その難じたものゝ中には新詩社同人であつた富田碎花なども交つてゐた。雜誌「創作」が生れ、次いで雜誌「詩歌」が生れた。

與謝野門の吉井勇が直線的な詠みぶりの戀愛歌を歌ひ出し、同門の北原白秋が佛蘭西印象派を思はせるやうな新鮮で纎巧な歌ひぶりを世に示した。

是等の優秀な若手の歌人等は、暫らく新詩社の晶子以後の歌壇を支配したが、一家一流のもとに門下を集めたもので、新詩社の歌風が天下を風靡して、新派和歌壇を一色ならしめたのとは違つて、一人の權威者、つまり一つの敬禮佛があるのでなく、數人の歌人を中心として稍多色な歌壇を形成してゐたのである。

是等の歌風は一見新詩社の象徴主義的な歌風よりも古いやうであるが、明快で平凡なところに强味があり、どこかに溢れてゐる若さがあつた。

○

佐々木信綱の主宰してゐる竹柏會の歌風は漸進的であり、折衷派を以て人に看られた。その雜誌「心の花」は信綱の博大主義の特徴を發揮し、宮內省派の歌をも載せ、根岸短歌會の同人等は正岡子規の生きてゐた頃からも紙面を借りて歌や歌論を發表してゐた。根岸短歌會の「馬醉木」が發刊されてからも、同人の數人は雜誌「心の花」にその歌を發表してゐた。

信綱が新派の運動に著手してからの歌風を伺ふによきものは歌集「おもひ草」である。ついで「新月」が出た。竹柏會は非常に多くの門下生を集めたのであるが、先づ「竹柏園集」第一編第二編に據つてその一端を見ることが出來ようと思ふ。また歌集「あけぼの」には、石榑千亦、川田順、小花淸泉、新井雨泉、印東昌綱、村岡典嗣、木下利玄、大塚楠緒子、片山廣子、橘糸重子、井關照子、吉光寺朝子のものが載つてゐる。

信綱の『雪むろに酒を冷してむろもりが昔の戀を語る夜半かな』を鐵幹が初期の明星で評して、『西詩の俤があつて面白い。初學の人に云ふが、斯樣な作を輕々しく見過してはいかぬ』と云つたことがある。『あぶら繪に見たるが如きくれなゐの雲の中より夕日さすなり』といふ落合直文の歌は矢張りそのあたりの作であらうと思ふ。信綱の歌風は、大和言葉を旨く驅使して、ゆとりがあつてなほ淸新の味を持たせたところにその特色があつた。『をさなきは幼きどちの物語ぶだうのかげに月かたぶきぬ』などの新派初期の作にもその特徴を見ることが出來る。

○そのほか新派には電會の久保猪之吉、服部躬治等がゐる。若菜會の八杉貞利等がゐる。正派の渡邊光風等もゐる。

正岡子規は竹の里人と云つた。その門下に伊藤左千夫、香取秀眞、岡麓、蕨眞、長塚節、安江秋水、森田義郎、鈴木莉房、赤木格堂、そのほか、潮音、茂春、不可得、三子、芳雨、安民、鹿洲、煙村、興安嶺等その他がゐる。

竹の里人歿後、雜誌「馬醉木」を發刊し、ついで「アララギ」の發刊となつた。島木赤彦、石原純、平福百穗、三井甲之、增田八風、篠原志都兒、古泉千樫、中村憲吉、胡桃澤恍内、望月光、堀内卓、釋迢空、土屋文明その他多くの優れた歌人がここに育てあげられ、アララギの歌風は大正四年五年ごろから活躍しはじめて、つひに天下を風靡するに至つたのであるが、明治新派歌壇に於けるアララギの位置は、一隅に潜んでゐた形になつてゐる。これから後のことは大正の和歌史に移り行くのである。たゞ子規歿後に潜んで默殺されてゐた歌風をも一顧して、森鷗外はその觀潮樓歌會に、新詩社、竹柏會、根岸短歌會の諸歌人を招いだのであつた。

○私ははじめ此の小文章を書かうと約した時に、歌の例を引いて稍くはしく書くつもりであつた。然るに書いて見ると範圍が廣汎で到底限局された紙數では書けないことが分かつたから歌を例證することを廢め、大正の歌壇を論ずることをも止めた。

歌の例證をするとなると勢ひ書物が要る。そこで與謝野晶子の自選歌集「人間往來」を送つて貰つた。その卷末記を讀むとかういふことが書いてある。『私は自分の生活の重要な表現として、いつも眞劍に歌を詠みます。それで今の作家のやうに濃厚な歌壇的意識を以て作つたものは一首もありません。特に此事を正直に書き添へて置きます』かう書いてある。私は實に不思議な氣がした。短歌のやうな短い抒情詩は、制作當時には、隨分と純眞になり得るものである。眞劍云々のことは當然の當然のことである。なぜ晶子は斯ういふことを態々ことわらねばならぬかと思つたのであつた。ところが北原白秋の「近代風景」といふ書物の中に、『現代の歌人は歌壇意識が些か强過ぎる。歌人に最も大切なのは歌興をのみ思ひ深めることである。』といふのがある。晶子のは大正十四年九月に書いた文章であり、白秋のは大正十五年三月に發表された文章である。この文

章にも私は實に不思議な氣がした。晶子から、一把一からげに『今の作家』といはれたもの丶中には白秋もゐるのであらう。その白秋が同じやうなことを他に向つて說いてゐる。そこの關係が不思議でもあり、興味もあるのである。

私も『今の作家』の一人だと思ふが、私が作歌する際には、與謝野晶子などは微塵も念頭に置かないのである。また念頭に置いたところで何になるか。

私が明治和歌史の斷片を書いたのは賴まれたからであつて、これは制作とは別途のものである。制作は一圖であつてい丶。この文章の如きは鳥瞰圖やうの看方でなければならぬ。その點を晶子が混同してゐるのは間違である。また、自分の作物をば古人の作物または現代人の作物と全然比較考慮しないといふことも、實は怪しいことであつて、吾々は知らず識らずそれをやつてゐるのである。或る場合には意識してやる。これも制作の一部と看做してもい丶が、短歌のやうな短いものは、制作の一部と看做さずに、自分の作物を客觀した批評と看做してい丶。さうすれば此の種類の批評は極めて大切なことである時がある。

私は明治の和歌を鳥瞰圖の如くにして一顧したとおもふ。さて思ふに、主潮流に棹さした者も、傍系にあつたものも、默殺されて顧られなかつたものも、もう少し『時』のふるひをかけて見なければ彼此は云へぬ。

そこで、差向き舊派の作物も新派の作物もこれを一堂に集めて見、新派といつても明治のものも大正のものも、都會式のものも、田園流のものも、悲しきものも愉快なるものも、『けるかも』も『べらなり』も並べて見るといふことは無駄ではない。それが單に制作方面のみではなく、鑑賞の點から云つて、テエンヌ流の考をば、役たゝせずに濟むこともあり、役立たせていゝこともある。大正和歌の『かも』の据ゑ方が奈何の經路を經來つたか、第三句切が奈何の經路を經來つたか、桂園派の第三句切とどう違ふかを看得るだけでも、多くの作者を一堂に會せしめる要約が具足してゐるとおもふ。（大正十五年十一月一日夜）

大正の歌人を拔きにして單に明治の新派歌人としてでも、なほ此處に列記すべき人々は澤山ゐるだらう。また、太田水穗だの花田比露志だの尾山篤二郎だのは矢張り大正の部類に入れてい丶であらう。（茂吉又識）

明治の基督教文學

正宗白鳥

明治の初期に歐米の文明が崇拜され模倣されるとゝもに、基督教も輸入されて、一部の青年の新思想新情調の原泉となつた。陳腐を厭ひ新奇を求める青年は、傳統的の佛教よりも、外來の基督教によつて、若い精神を躍動さゝれたのであつた。

それで、今日までの文學には基督教の用語や精神が、廣く浸潤してゐるのであるが、特に基督教文學と名づくべきほどの傑作は、今までの所現はれてゐないやうである。世界を通じて、最早基督教の宗教的魅力は衰へてゐるのだから、日本に於ても今後、さういふ文學が繁榮する望みはなささうに思はれる。

明治初年に外國の宣教師と日本の信者との共力によつて爲遂げられた聖書の翻譯は、明治の出版界の重大な一事件であるが、文學上の價値から批判すると、この翻譯は決して巧妙でないのである。文學として劣つてゐることは、讀者の宗教心を湧立たせる上にも、効果が薄くなる譯なのだ。英國のバイブルは、文章に於ても絶大の美と威力とを以つてゐて、その詞句は、妙音樂の如く英國民の耳に響いて、いつまでも忘れないほどの感動を與へたと云はれてゐるし、ルーテル譯の獨文の聖書も强烈な力をもつてゐるさうである。しかし、末世に翻譯された日本譯聖書は、神靈の加護がなかつたためか、平凡なものとなつてしまつた。無論翻譯者の苦心は容易なものでなかつたに違ひないし、一種の新文體が創作されてゐるのであるが、典雅莊嚴などの文章美は全く無いので、決して〱名文ではないのだ。文章の模範とすべきものではない。變挺な譯語が亂出してゐるが、それが今では一般的に用ひられてゐるのは歎すべきことである。「爾の隣を愛しみて其敵を憾べしと言へること有は、爾曹が聞し所なり。然も我なんぢに告ん、爾曹の敵を愛しみ爾曹を詛ふ者を祝し、爾曹を憎む者を善視し、虐遇迫害ものゝ爲に祈禱せよ。如此するは天に在す爾曹の父の子とならん爲なり。……」など、翻譯聖書の一節を開けて見ても、その文章の平板無力が推察される。莊大深刻な戯曲とも云ふべきヨブ記の如き、

天眞素朴な古代人の人情の描かれてゐる創世記の如きは、日本譯で讀むと、芝居の筋書を讀むも同樣である。英文バイブルに比べて見ると、內容が同じくつても、日本のは出し殼のやうである。前に抄錄した文例で察せられる如く、日本譯の文章は、すべてノロ／＼してゐて、人に迫る力がない。飜譯者に、チンダルやルーテルの熱誠がなかつたばかりでなく、日蓮ほどの文才もなかつた。慶長時代に著はされた「マルチリヨの鑑」（姉崎博士の「切支丹宗門の迫害と潜伏」に揭げられてゐるもの）などの方が、まだしも宗教上の文章として優美と熱情に富んでゐる。

聖書の飜譯は、內村鑑三氏ほどの文才のある人がやればよかつたのだ。氏は、日本從來の文章道から批判すると、決して名文家でないのだが、簡素な力のある獨特の新文章を生出した人なので、基督教文學としては、私は最もこの人の者を愛讀して來た。「基督教徒の慰め」や「求安錄」の如き、少年時代の私は幾度讀返したことか。「愛吟」と題した短詩の飜譯は、その多くを私は諳誦してゐる。內村氏としては柄にない詩の飜譯にも、何とも云へない魅力があつた。今讀んでも面白いにちがひない。高山樗牛が氏をダンテに比したのは、あまりに大袈裟であるが、しかし、氏は明治年間最大の基督教文學者なのだ。氏が今日の時世に、たゞ一部の青年男女に崇拜されてゐて、その講演會がいつも一杯になるのは、氏の文學的才能に依るのである。

初期の民友社の文章には、日本譯聖書の系統をひいた文體が散見してゐた。德富蘆花氏の小說のある者には基督教情調があるらしいが、獨步の小說にも、基督教の感化の下に出來たのが少くない。獨步は平凡な基督教的人生觀を持つてゐたので、內村氏は獨步に比べると、表面は彼れよりも健全な平凡な宗教的人生觀を持つてゐるらしいが、その眞相に立入ると、獨步よりも不健全で、そのかはりもつと深刻な性根をもつてゐると、私は思つてゐる。惜むべきは、內村氏が純文學者としての道を辿らなかつたことである。あの熱情、自己の嫌ひなものを憎惡し、好きなものを溺愛する力と、峻烈なる觀察力は、明治以來の文壇人には見つからないと云つていゝ。「基督教徒の慰め」にある亡妻に對する執着、「求安錄」にある死の恐怖に對する煩悶など、氏は小說家としての素質を充分に現はしてゐる。ダンテの地獄篇を日に一章づゝ讀んで、三十三夜眠れなかつたといふ內村氏が、文學が嫌ひだといふのは、基督教に毒せられて自己欺瞞をやつてゐるのだ。氏を高德な宗教家として見るのは、私には滑稽なので、優れた文學的才能を、片意地のために充分に

發揮しないで終つたのを、私は惜んでゐる。

有島武郎氏も、基督教文學者と云つていゝのであるが、氏は内村氏よりも遙かに甘く、その甘さは獨歩以上である。私は年少の頃、内村氏の文學講演を神田青年會館で五六回續けて聞いたが、これが、私の歐米文學鑑賞の基礎になつたくらいに感動さゝれたものだ。ダンテ、カーライル、ホイットマン、ゲーテなどの面目が、氏によつて活躍したのであつた。思ふに、この頃の聖書講演に於ても、氏は聖書中の事件や人物を、氏獨得の洞察力によつて、具體的に生動させてゐるであらう。氏は他の説教者のやうな抽象的な神の道や人の道を説いてはゐないであらう。青年男女に喜ばれる所以である。

これを要するに、明治以來の基督教文學者としては、氏一人を擧げればいゝので、氏の好きなダンテの言葉を引用して云へば、「他は見て過ぎよ」である。

我々の通つて來た時代

木下杢太郎

今卒然と明治の文學に對する概觀を附けて見ようとしてもそれは出來ない。特にさう云ふ問題に注意を拂つて居なかつたから身邊にその爲めの材料がない。然し我々も十年なり廿年なり、さういふ方面の活動は見聞して來た。已むを得ずんば、あまり鮮かでもないが、その印象を錄して見ようか。

文學藝術に對する愛はやはり或る遺傳的の素質と、境遇とに原く。年の間隔のやや違ふ予の姉、兄たちにもさう云ふ素質があつた。彼等は予の青年時代に予の文學を好むことを嫌つたが、予の之を好むに至つたのは彼等が既にさう云ふ雰圍氣を予の周圍に作つたのが原因の一半になつてゐる。

予と十幾つか年の違ふ姉たちは巖本善治植村正久の弟子であつた。予はそれが爲めに、まだ小學校に行かない前から女學雜誌などを見たことがある。又都の花などと云ふ雜誌や谷間の姫百合などといふ本の存在を知つてゐた。少くともその挿繪から

は或る印象を受けたに相違ない。東京或は橫濱から每夏歸省する姉たちは薄暮の海岸で英語の歌を歌つて聽かせてくれた。予のエキゾチスムはこの時に育まれた。幾分漢學の分子を加味した耶蘇教的、洋學的世界が予の五六歲の頃日本の或處に浮動して居たのである。そして片田舍の漁村に於てなほ且何か華やかで掴み難きものの存在を感知した。即ちそれは歐羅巴文明に對する豫感であつた。

小學校に行く頃から予は漣山人の御伽噺を讀み出した。廣業、丹陵などといふ畫家の描いた日本歷史畫集のやうなものを愛したやうに覺えて居る。(尤もさういふ時代の前には美しき表紙を有つてゐる繪本が、一般少年の侶伴であつた。)それ等は學ろ正規的に予に許されたる書冊であつた。

然し兄たちは予より四つ八つ位年上であつた。そして幼年雜誌、少國民、大家論集などを讀んで居た。それ故に予は間接にさう云ふ文學の世界に近いてゐたのである。やがて予自身が少年世界(幼年雜誌は既に廢刊してゐたと思ふ)の月極購讀者となるやうになつた。少年世界の內容とても必しも皆無邪氣ではなかつたらしい。今もなほ朧かに內容を覺えてゐるが、相愛する少年童女が雷に打たれて死ぬといふやうなかなり人情本的な小說などがあつた。

黃金丸、二人むく助などは兄たちの御古で讀むやうになつた。高等小學に入つたのち八犬傳を讀んだ。これは高等小學の三年の時であつた。每日每日讀むので本を取り上げられたことが屢あつた。かういふのは何れも兄たちが讀み古るしたものである。が同時に兄たちの藏書のうちには文藝倶樂部などがあつた。そのうちの三陸海嘯義捐小說の一冊は今も偶然よく記憶してゐる。廣津柳浪が河內屋などをも讀んだのはこの時代であつたか、或は更に遲かつたか。

兄たちは已に反省雜誌、國民の友の時代に入つて居た。冬休に歸省してゐる長兄が老いたる母に爐邊でトルストイのクロイツエル・ソナタを讀んで聽かしてゐる。兄は予に他室に行けと云つたが、母は子供だから分りはしないから居ても可いなどと云つたことがあつた。仲兄は新體詩を作つた。

また予の家に居る親戚の青年は弦齋の小說などを購求してゐた。たしか「血の淚」といふ標題のは予も借りて讀んだ。

予の十三までの間に予の周圍に浸潤して來た新文學の潮流はさういふやうなものであつた。他方にはまた別の流があつた。即ち德川時代の繪本である。馬琴、京傳、などのものが主でそのうち當世女房氣質と北雪美談は今も鮮に目に殘つてゐる。それが福澤諭吉の著書と一緒になつて藏の中にあつた。予より

人一代前の時代の人々の世界である。

明治三十一年に予は上京して獨逸協會の中學に入つた。そこで長田秀雄と知りあひになつた。予は少年世界から移つて文庫に就いた。中學世界にはあまり興味を感じなかつた。それでも生田葵山の鶯の小説などを記憶してゐる。文庫では殊に河井醉茗の詩、小島烏水の文章を愛した。然し千葉江東の文體を眞似て見たことなどもある。實際文庫には發行期日を待ち兼ねるほどの愛執を持つてゐた。われわれは蒟蒻版雜誌を作るまでになつた。一條成美が畫をかき出してから新聲の讀者になつた。長田秀雄とは毎日交遊して、我々は一かどの文學青年になつた。新聲から轉じて明星に移つた。

一方に仲兄は文學界派—藤村・北村透谷を愛した。バイロン、シエリイ等の英國ロマンチツク派がその背景であつた。當時兄はツルゲニエフやホオソオンの小説を愛誦した。紅・露・逍・鷗と稱せられた時代である。

中學時代には予は然し文學よりも繪畫を愛した。三宅克己氏が當時青年の崇拜の的であつた。

明治三十六年予は東京の高等學校に入つた。予は畫工たらむと欲したが果さなかつた。故にその代償として文學に耽つた。岩元禎教授からゲエテの伊太利太紀行を敎はつた。そしてさういふ世界が少しづつ解りかけたが然し最も好んで讀んだものはツルゲニエフ、ゴルキイ、などであつた。

この三年の間は所謂青年の「煩悶時代」であつた。藤村操は華嚴の瀧壺に入つて死んだ。高山林次郎は病が進んで、其青くものが激越になつた。高等學校の内部でも文學派非文學派の軋轢があつた。ニイチエが盛に紹介せられた。純文學といふものに對して一部の青年はまじめに考へ出した。然し勢力ある世間の階級はまだそれを卑しめてゐた。

予の兄は鏡花を愛讀した。また「萬年艸」「藝文」などを耽讀した。

當時の文學界は獨逸文學者が指導者の位置に在るやうに見えた。元老は森博士である。それから高山林次郎、登張竹風などが活動した。然した文學界派中上田敏が殊にその佛蘭西近代文學の紹介を以て文壇に或る清新の氣を入れた。又雜誌明星はパルナスの一部に占據した。

硯友社の一派は已に振はなかつた。それに對して一種の自然主義派が擡頭した。風葉はそれに隨つたが及ばなかつた。田山花袋、眞山青果、正宗白鳥などが主に自己身邊の生活から材を得て多數の小説を作つた。島崎藤村が詩から轉じて小説に入つた。始は客觀的のものが多かつた。後には自己をモデルとした

らしい長篇の小説をかくやうになつた。それでも自己以外の事象が多く顧慮せられてゐる處から藤村はまありを見廻はし過ぎるといふ評判を受けた。徳田秋聲、徳田秋江がその派の傍系であつた。

詩は藤村、醉茗のあとで、蒲原有明、薄田泣菫が世の視聽を集めた。歌は明星一派の風が最も廣く行はれた。殊に與謝野夫人のものが天下を風靡した。

長谷川天溪、島村抱月を論客とした自然主義はその後繼者に活動力の多い作家を見出さなかつた。自然主義はその後繼者によりて一般化したが醱酵力は弱くなつた。その爲め谷崎潤一郎、永井荷風の作風が際立つて見えるやうになつた。

劇は坪内博士が不斷の活動を續けた。歷史劇から新浦島の出づるに及んで世は再び瞠目した。一方に森博士が獨墺等の新作戯曲を飜譯するに及んで青年の間に劇を作るものの數が增した。それで始めは多くは獨逸風の一幕物であつた。又一方からイプセンの感化が多大にあつた。そのうち實際の社會と接近するやうになつて一種の體を作り出し、幕數多きものも作られた。長田秀雄、吉井勇、やゝ遲れて久米正雄、久保田万太郎がこれぞれの特色のある作品を出してゐる。予もホフマンスタアルの感化などをうけて小戯曲數篇を作つた。

一方に黒人らしい作家として益田太郎冠者、山崎紫紅、松居松葉などが活動してゐた。

さういふのが明治四十年から大正の始めへかけての有様であつた。

その後白樺一派がパルナスを占領した。又菊池、芥川等の新思潮の同人が文壇の中心に現はれてその他の一峰に據つた。

予は大正五年滿洲に往き、文壇と離れた。其後は一々の作家一々の作品も漸く予の注意圏内から遠かつた。

大正十三年以來は再び日本に住んで多少文壇の樣子も見聞した。が然し別に書くほどの種もない。

上述の記述は甚だ不精確のもので、時代の錯誤があるに相違ないがそれは寛容して貰ひたい。だが今から回想して見ると、明治の文學は全く過渡期のものであつた。飜譯か又は漸踏みであつた。がその爲め又一方には新しい領域の開拓といふものに向つて多くの貢獻をなしてゐる。當時文學者たることは大した名譽でもなかつたし、又好い生活をする手段でもなかつた。それ故文學の作品の內容にはいぢけか反抗の分子が多かれ少かれ存在してゐた。或時は啓蒙的であつた。或時は西洋のものの模倣であつた。或時は新しい應用であつた。かくしてユマニテエの爲めに貢獻したのである。

今は文學をやる青年も父兄には咎められず、文學者は時として物質的に、又虚名の上に、寧ろ過大の報酬を受けてゐる。その爲めに文學的作品がそれ自身の爲めよりも寧ろ手段として作られるやうな傾向が段々と濃厚になつた。一文學者の一つの作品は次の作品の前の階級ではなくて、いくつもいくつも同じやうな、讀みでのある作品が澤山作らるるやうになつた。作家は材料を捜し廻るのに勤勉であるが、それは必しも次の時代を模索する努力ではない。現代日本の他の方面と同じく亞米利加趣味が、亞米利加の經濟主義が文學の領域にも浸潤し來つた。

それで往昔の青年が時とすると殉教者のやうな態度で文學に就いたやうに、現今の才能ある青年は社會科學の研究に走るやうになつた。日本の現代の文學はもはや彼等の胸を跳らせなくなつたらしい。

平民社時代の社會文藝

石川三四郎

『平民社時代の社會文藝』なんて、それは私の領分ぢやない。堺利彦君が若し別莊に行つてないならば、當然此人に頼むべきだ。然るに堺君は居らず、他に適當な人がないからといつて、編輯會議で私にと確定したのだと箕輪編輯君の傳達。已を得ず御引受する事にした。

が、さて、今から二十四五年前のこと、（明治三十六年平民社創立さる）自身の領分の事ならば兎に角、當時慷慨悲歌の革命家を以て任じてゐた私たちに縁の遠い文藝などに就いては、記憶も何も殘つてはゐない。けれども平民新聞自身、及び其平民新聞を中心とした周圍の人々の文藝思想、といふ樣なことを考へて見ると、朧げながら當時の思想界、文藝界の事が浮んで來る。

第一平民社（第一平民社は四十年に創立さる）の存在した時代は、日本の思想界はロマンチズムが頂點に達した時代であつ

た。從來の古典的祖述的思想傾向は棄てられて、新しい人生觀的思索が起り、更にそれは宗教的人生觀にまで押し進んで行つた。そして底深いミスチックな、頗るロマンチックな宇宙的憧憬が、當時の青年男女には普通の傾向だつた。三十六年に華嚴瀧に自殺した藤村操の如きは其著しい實例である。同年十一月平民新聞第一號が發行されたのである。試みに當時、平民社に集つて來た青年男女を調べて見ると大かたは皆クリスチヤンであつた。安部磯雄、木下尙江は既に青年ではなかつたが、西川光二郎、大杉榮、山口義三、荒畑勝三、更に第二平民社時代に這入つて來た高畠素之、山川均等、何れも基督教會から出て來た人々であつた。私なども可なり熱狂的基督教信者であつた。大杉と同樣に、當時本郷教會を牧して居た海老名彈正氏から洗禮を受けた。海老名氏主宰の雜誌『新人』に綱島梁川の『見神の實驗』が現れたのも當時のことである。

平民新聞は日露戰爭に反對して起されたのであつたが、その爲に、社會主義者でないトルストイの非戰爭論『爾等悔改めよ』といふ長論文を倫敦タイムスから飜譯して、其全部を掲載した。これが、當時既に宗教的感激に滿ちてゐた青年社會に非常な刺激を與へたとは勿論である。例の伊藤證信氏等が巣鴨庚申塚の大日堂に立籠つて『無我愛』宗を宣傳し始めたのも當時である。私は堺君と共に此大日堂に訪問し、それが平民新聞紙上に吹聽されたので、無我苑は一時に日本の思想界の注意を引いた。河上肇君が當時讀賣新聞紙上に連載した『社會主義評論』の筆を擱いて無我苑に走り、伊藤證信の門下生となつたのは、第一平民社が解散した頃であつた。

○

こうした雰圍氣の中に社會主義と非戰爭論を以て立つた平民社に同情を寄せ、又は同志として活動した人々の文藝的生活を振り返つて見ると、それは又、ロマンチックのもので、そしてそれが殆んど當時の社會的文藝の全體を成すのではなかろうかと思はれる。第二平民社の時代即ち明治四十年頃になると自然主義の思想や文藝がぐん〳〵と擡頭して思想界文藝界を壓倒する樣な勢を示したが、それは本論の範圍外である。

さて然らば當時の社會文藝として如何なるものを數へたらいいか。私は先づ德富蘆花の『黑潮』を擧げる。それから、木下尙江の『良人の自白』『火の柱』といふ順序。飜譯の方では堺枯川譯の『勞働問題』(ゾラ原作)『理想鄕』(ヰリアム・モリス)等から、黑岩涙香の『噫無情(レミゼラブル)』(ヰクトル・ユウゴオ)などを擧げることが出來やう。詩の方で言へば、社會主義革命詩人たる兒玉花外の狂熱詩や、石川啄木の生活詩など、日本の詩史の上に一高

位を占むるものと言へやう。英雄主義的ではあつたが平木白星の如きも亦一種の社會詩人と言ひ得るであろう。

○

週刊平民新聞に引續いて寄書してゐた齋藤綠雨の『もゝはがき』や、田岡嶺雲の連載した『亡是公喞々語』の如き、何れも美事な社會文藝中に數へることが出來る。殊に奇才綠雨の『もゝはがき』は恐らく彼の絶筆であつたろう。宿痾に重い身を荷ひつゝ、見ること、聞くこと、思ふことを、筆のまにまに端書に書き送りたるもの、それが『もゝはがき』である。彼は第一平民社が尙ほ熱烈なる苦鬪を續けてゐる間に、明治卅七年四月十三日、本所百本杭の僑居に病歿した。彼は自分の死亡廣告を平民新聞に托したが、其文句は『僕本月本日を以て目出度死去仕候間、此段廣告仕候也、四月十三日、綠雨、齋藤賢』といふのであつた。綠雨の『もゝはがき』から、一二節を摘錄して見やう。

△鷸にありては百羽搔也、僕にありては百端書也、月や殘んの寢覺めの空、老れば人の洒落もさびしきものと存候。

……………

田に棲むもの、野に棲むもの、鷸は四十八品と稱し候とかや。僕のも、並夫れ調あり、御坐います調あり、愚痴あり、のろけあり、花ならば色々、芥ならば樣々、種類を何と初めより一定致さず候。

△壯使ひの、これは極めて急なれば、車に乘りて行けと命ぜられたる抱車夫の、御用となれば精限り駈けて駈けて、必ずお間は缺かざるべし。されど車に乘るといふは、わが日頃の哲に反くものなれば、仰せなれども御免下されたし、好みてするものはなき賤しき業の、わが身も共々に牛馬に比せらるゝを恥ともせず、おなじ思ひの人の車に乘りて、命をも絞らん汗の苦しきを見るに忍びねばと、足袋股引の支度ながらに答へたるに、人々共しをらしきを感じ合ひしが、しをらしとは本此世のものに非ず、しをらしきが故に、此男の此世の車夫とは落ちしなるべし。定かや足は得洗はで、病の爲に程なく歿したりとぞ。

△いつの年でしたか、私の乘りました車夫が、足元へ搦みな[illegible]いた紙鳶の絲目を丁寧に直して遣りましたから、お前は子持だねと申しましたら、總領が七つで、男の子が二人あると申しました。

△悠然と車上に構へ込んで、四方を睥睨しつゝ驅けさせる時は、往來の奴が邪魔でならない。右へ避け、左へ避け、ひよろひよろもので往來を叱咤されつゝ步く時は、車上の奴が癪

癖でならない。どちらへ廻つても氣に喰はない。」

何といふ豐かなユウモアであろう。何といふ溫かい情緒の逬りであろう。何といふ洗練された筆の歩みであろう。三十餘年にして死に瀕してゐることを自覺してゐた人として、何といふ落付き樣であろう。彼の言ふ所、假令社會主義にあらずとするも、その美事な社會文藝であることには何の障りにもなつてゐない。

○

次に些か木下尚江の小說『良人の自白』を紹介して見やう。處が是に就ては堺枯川君が當時の平民新聞紙上に巧みな紹介をしてゐるから、それを其儘借用する。堺君は記して曰く

△『良人の自白』は、其題名が暗示してゐる通り、又作者の廣告文に明記してゐる通り、有夫姦と有婦姦とを描かうとしたもので、而して其原因を無愛情の結婚に歸せんと試みたものである。………更に此の無愛情の結婚を生ずるに至つた大原因を明かにせんが爲に、現社會の私有財產制度と其制度の必然の結果たる家族制度との弊害を縱横に抉り出してゐる。即ち此に於てか社會主義的思想の全篇に橫溢する事を認めるのである。

△人物に就ては、前にも云へる如く、主人公白井俊三はドウしても餘り上出來では無いと予は思ふが、小作人與三に至つては神來の妙を極めてゐる。請ふ予をして少しくここに、與三を敍せる著者の熱文字を紹介せしめよ。

『ヒヨイと目を上げると、煮しめた樣な汚穢い手拭で頰冠した眞黑な男が、其の日に燒けた眞ツ裸體の上へ、山なす桑葉一籠を背負つて、腰より高き山路の草を踏み分けて下つて來たる一歩毎に右の方に體の甚だ傾くのは、片足跛いて居るのであらう。頰冠りの下からギロリとした眼を瞬きしたが、勘之丞父子(大地主)の姿を認めた時、忽ち蝮の如くグツと一つ睨み付けて、重き荷物を揺りながらピツタリ〳〵下りて行つた』

『俊三も老婆も、愕然と振り向いたが、畫に描いたる鬼の如き顏が、ヌツと戶口を這入つたのである。蓬の樣なる頭髮は眞黑な顏へかき紊れて、雨の雫が、ダラ〳〵と肩から胸から流れてゐる。厚い唇は柘榴の如く張り裂けて、怒氣を含める蛇の兩眼は、圍爐裡の火に映つて血の樣に輝いてゐる』『與三は繩の手を休めて、俊三をキツと見つめた「勘之丞の田地なぞ作つちや居ねえぞ、「天頭樣の田地を作つて居るだぞ」

『闇にも知れる封印（執達吏の施した）を睨んで齒がみをしたが、松ケ枝の樣なる腕を組んで、チツト考へこんだ、病人は又たウナつた「あゝ、新米を食いてえ」グイと與三は立ち

上つた、――ヒョイと框を飛び下りるや、短い片足が俵に懸つた、ブツウリ――封印をムシリ取つた』

『天兩様が半作しか呉れさつしやらねへのに、地主が全作取り上げるつて法が何處にあるだ』

『××××ツて勿體振るが、「××が藥一服でも持つて來た例があるだか」與三の髮は逆立つた。「フザケルないツ」聲は滿廷に響き渡つて、後ろの玻璃窓がピリ〳〵と動いた』（此一節は刑事法廷の所）

△かくて本篇は家族制度の弊害を寫すと同時に貧民小作人の爲に氣を吐くこと萬丈の觀を呈した。而して第一篇の終りに『社會概』聲を出して、『華族の妾の頭に光るは何ですえ……可愛い百姓の油汗！』『大臣大將の胸に光るは何ですえ……可愛い兵士の髑髏！』『お金持衆のコップに光るは何ですえ……可愛い工女の血の涙』といふポンポコ節を歌はしめ、白井俊三をして『機運！』の一語を放たしめて筆を止めた處、眞に本篇中に磅礴せる大精神を見るに足る。

先づちよつと右の如き書き振り。純然たるロマンチシズムであることは言ふまでもない。當時此種の小説を名けて傾向小説と稱し、純文藝の方からは些か疎んぜられてゐた様に思ふ。尚ほ中篇、後篇からも、紹介したい輕妙な點、美しい描寫など頗る多いが、割愛して置く。

○

當時平民社に出入した青年學徒の間に社會劇團組織の企てあり、社會講談に熱中するものあり、或はレ・ミゼラブルを演じ、或は『火の柱』を演するといふ有様であつた。所謂新派劇の中野信近が淺草常盤座に於て『良人の自白』を上演した際なぞは、平民社は總見に出かけたものであつた。又、平民社の社友であつた原霞外は社會講談を書いて其れを自ら演じて何時も吾黨の集會を賑はした。原は當時既に講談社會に頭角を顯はしてゐた伊藤痴遊の門弟となつて、伊藤の前座として公開の高坐にまで昇る程になつた。支那革命の先輩、宮崎滔天が自らの『三十三年の夢』を浪花節に談り歩いたのも當時であつた。『浮世がまゝになるならば、乞食に絹の着物を着せ、車夫や馬丁を馬車に乘せ』なぞと云ふ様な文句を、持つて生れた美音でうなるのを堺等と遠方まで聞きに行つたこともある。之も亦、當時に於ける社會文藝の一つに數へることが出來るであらう。社會主義者の松崎源吉なぞも、浪花節で主義の宣傳をやらうと志し、一心亭辰雄の門下に入つたが、どうも上達が六ケしいので中止して了つた。

○

平民新聞に助力せられた有力な藝術家として、小川芋錢、平福百穗、兩畫伯の名を逸してはならない。竹久夢二君の如きも幾度か才筆を揮つて紙上を賑はしてくれた樣に記憶する。就中小川芋錢氏は純樸の情と敦厚な筆とを以て、或は自然と人生とを描寫し、或は世態と諷刺とを畫き、直觀の美、形象の說法を以て深く世人を感動せしめた。平民新聞が小川氏の畫筆によつて、紙上に光彩を添へたことは、何れほどであつたか知れぬ位だが、恐らく小川氏も亦平民新聞に依つて漸く世間に認められたのではないかと思ふ。小川氏の此關係が、佛蘭西の諷刺畫家ヘルマン・ポオル氏に似てゐる上、其筆致までが髣髴してゐるのは奇と言ふべきである。そして、其人物から見れば、先年死んだサンチカリストの畫家スタンランを想起せしむるものがある。

○

要するに當時の日本は、日露戰爭といふ開闢以來未曾有の一大事件に遭遇して非常な激動を受けた時代であつた。日本の精神界は、實に魂の飛躍に自ら驚いた時代であつた。宗教的感激は一般青年の魂を搖り動かした。宮崎虎之助は『幽衷明』を著はし、自ら豫言者と稱し、神と稱して、自己崇拜の道を宣べ傳へやうとし、德富蘆花は雜誌『新紀元』に掲載し始めた『黑潮』一第二篇の稿を斷ちて、ヤスナヤ・ポリヤナにトルストイを訪ふべく出發した。見神の實現者が到處に現はれた。

非戰論に伴ふてトルストイの研究が盛んに行はれた。早稻田の學生などが、トルストイ研究會を組織したのも當時であつた。飛躍の魂は饑えてゐた。饑え渴くが如く何物かを求めて熱狂してゐた。そして外國文學は貪る樣に耽讀され、講究された。殊に日露戰爭の影響を受けて露國文學が流行した。トルストイを初め、ゴルキイ、ドストエフスキイ、ツルゲネフ、アンドレエフと、批評も考察もされずに、玉石混淆的に、先づ耽讀された。內田魯庵がトルストイの『イワンの馬鹿』を譯し、露文學の達人長谷川二葉亭のものが讀まれ、ゴルキイの短篇ものなぞが盛んに飜譯されたのも當時のことである。魯庵の『復活』や『罪と罰』やの飜譯物が世に出されたのもそれから間も無くのことであつたと思ふ。こうした形勢に投じて新たに興つたのが、自然主義の思想と文藝とである。

○

最後に記すべきは、平民社の友人にして、屢々平民社出入の青年達と議論を戰はしてゐた久津見蕨村の思想である。社會主義の花爛漫たる當時にありて、獨り個人的無政府主義を懷抱して世外に嘯いてゐた彼の姿を顧ると、彼も亦一人の先驅者であ

つたと今更尊く思はれる。彼の思想はスティルネルや、ニイチエの系統を承けたもので、二十世紀の老子とでも稱すべきであらう。彼は或時平民社に來て青年達と議論を戰はした後、一書を平民新聞に寄せたが、其中に次の如く言つてゐる。

『前略……僕の理想は、恐らく諸君の理想の世間よりしてユトピヤ視せらるゝの、夫れよりも更に更にユトピヤなるなからんや。……僕は總ての個人をして總て悉く完全の自由を得せしめたる狀態に到らんことを慾す。』

『僕實に斯理想を懷いて今を見る。今は獸類と僕の理想の個人との中間に彷徨せる半獸半人の世なり。矛盾の世なり。戰鬪の世なり。僕は此故に僕の完全の自由を半獸半人の上に求めざる可らず。即ち有り能ふの力を振つて半獸半人の間に戰ひ、僕の完全の自由を捕獲せんと欲す。出來得べくんば英雄たらん。能ふべくんば富豪たらん。然らずんば、一管の筆に世を嘲りて超然冷然たる生活に甘んぜん。夫れにも戰ひ敗れなば、陋巷の餓死、亦何ぞ怨みん。而して敢て社會の公平と稱する分配に滿足して我が完全の自由の發展に適應することを欲せざるなり。』

當時の平民社同人は大ていマルクスの崇拜者であつた。幸德の如きも、私の論文『小學教師に告ぐ』を以て無政府主義なりと批評した程であつた。其所へ巌村の個人的無政府主義が論戰に來るのであるから、其激戰の樣は大てい今からでも想像がつくであらう。ニイチエの思想は之よりも以前に戸張竹風等によつて紹介されたが、巌村ほど徹底的ではなかつた。岩野泡鳴が半獸主義を唱へる樣になつたのは尙ほ後日の事である。巌村の著『無政府主義』は當時の作物であつて、日本思想史の文献として、、一地位を占むべきである。私は日本を脫走してから、再び歸來して後にも、遂に巌村を見舞ふの機會を得ず、却て先年其訃音に接して驚いた。近時其全集の出版を聞いて私かに悼んでゐる。

明治初期虚無黨文學

木村毅

一　瀕出せる虚無黨文學

茲に謂ふ虚無黨文學とは、虚無黨を題材に取扱つた文學なる意味を、縮約した急造不熟の言葉である。歴史小説とか家庭文學とか云ふ類ひの由來ある成語でなきは斷るまでもない。

さて、明治十五年と云ふ出版書籍の數もまださう多くなかつた時代に、虚無黨に關する著書が三種も出てゐると言つたら、讀者は多少の驚きを禁じ得ないであらう。假りにその年政治小説が幾篇出てゐるかを調べると、自由民權論の沸騰期であつたに拘はらず、木田清三郎の『民權膝栗毛』一冊しかなく（新舊時代自由民權號所載吉野博士調査の『政治小説年表』による）、外の飜譯小説の方面は、『花柳春話』『寄想春史』以來、一部讀書界の嗜好がその方面に向いてゐたのに、桑野鋭の『蝶舞奇緣』（原書不明）と、大久保勘三郎の『群芳綺話』（ボツカス原著）の二冊しかない。（愛書趣味飜譯號所載、齋藤昌三氏の調査による）

然るに虚無黨の文獻は左記の三種がある。

(1) 杣田策太郎譯『魯國疑獄烈女の疑獄』（明治十五年四月發行）

(2) 西川通徹譯『露國虚無黨事情』（同上九月發行）

(3) 川島忠之助譯『虚無黨退治奇談』（同上九月發行）

そして、一ケ年の中に、三冊も續出してゐるのは十五年だけだが、併しその前にも後にも虚無黨に關する書がちよい〳〵譯されたり、刊行されたりしてゐる。右表の(1)『烈女の疑獄』はウエラ・サシユリツチ（Vera Zassulitch）の大官狙撃事件を記叙したものだが、同じ彼女の事を書いたものがその前年なる十四年にも一種出てゐる。

田島象二譯『婦女立志歐洲美談』（第三章は全部ウエラ・サシユリツチの傳なり）

がそれである。その後二十年までに或は刊行され、或は書目に見えるものに左の三書がある。

宮崎夢柳譯『鬼啾々』（十六年發行）

冷々亭杏雨（實は二葉亭四迷）『通俗虚無黨形氣』（十九年譯、不刊）

黒岩涙香譯『片手美人』（二十年發行）

二十年以後虚無黨は日本の讀書界の關心と游離し去つたか暫く文獻がなく（少くとも私の手に入らず）、そして日露戰爭前後になつて又二三種見當るのである。

田口掬汀作『魯國奇聞虚無黨』（三十六年十二月文藝倶樂部所載）

塚原澁柿園作『虚無黨』（單行、發行年月不詳）、

松居松葉譯『虚無黨奇談』（三十七年九月發行單行）

日露戰爭前後の刊行はこの際除外しておく。明治十年代に私の謂はゆる虚無黨文學がなぜ斯く湧出したのであらうか。この謎の一半は世界年鑑が説いて呉れる。

見よ、一八七八年（明治十一年）の項には『露國の虚無黨、顯官を暗殺し、又暗殺を企つ』とあり、翌七九年（明治十二年）の項には『虚無黨、モスコウ行きの皇帝の列車を要撃せんとす』とあり、更にその翌八〇年（明治十三年）には『二月露國冬宮殿内の變、虚無黨撲殺の嚴命出づ』とあり、又その翌八一年（明治十四年）には『三月露帝アレクサンドル二世暗殺さる』とある。

そして謎の殘る一半は、明治元年に生れ、當時を丁度物に感じ易い十四五才の少年として經過せられた内田魯庵氏の回憶が、最も明白に解いてくれる。

『八十一年の三月一日の亞歷山第二世の暗殺は暗殺その物が當時まだ珍らしかつた爆彈で行はれた爲に殊に著しく世界を震撼したが日本も亦少からず動搖し虚無黨の名は洽く一般の人心に根強く刻みつけられた。日本は國情が相違してをるから露西亞に行はれたやうな大逆を想像だもするものは一人もないが刺客は決して珍しくなかつた。當時の自由黨の志士の中には刺客を理想とするものさへあつたらしかつた。それ故に君主に危害を加へる虚無黨を恐れ憎み呪ひつゝも其壯烈なる勇氣に共鳴を感ずるものは無いでもなかつたらしかつた。且つ屢々新聞紙等に由つて報道される虚無黨の神出鬼沒の陰謀は丁度昔の傳奇小説を讀むと同じ感があつて、當時の青年の好奇的空想を唆つたのは、恰もジゴマの活動寫眞に等しいものがあつた。明治十七八年の頃、川島忠之助氏の『虚無黨奇譚』（？）が好奇を以て迎へられたのは、明に當時の青年の心理を語つてをる。かういふ意味で虚無黨の實行は恐れ或は憎んでゐても虚無思想には興味を持つものがあつてステプニヤツクの著書の如きは早くから讀まれてゐた。』（トルストイの思想の移入及び傳播）

これ以上一言を贅するの餘地もないが、假りに蛇足の附加が許されるならば、かの北歐の强國は瀕りにわが北海を脅かし、ヲロシヤの昔から、プーチヤン來航の當時（この時ロシヤの小説家ゴンチヤロフと、今の詩人川路柳虹君の曾祖父に當らる左衛門尉聖謨と會見した記錄が殘つてゐることは新村博士の「南蠻更紗」に徴せよ）、千島、樺太の交換から『魯國』が『露國』に換字さるるまで、わが國に取つては恐ろしい夢魘であつたので、單に暗殺に好奇心を感ずる以外、それがロシヤに起つ

た事件といふので特別の關心を持つたであらう　當時の愛國志士の中には、敵愾心から、彼等志士が皇帝や爲政家を威嚇したといふ點で、それを味方の如く考へた者もないとは限らない。

二　立志社の社會黨小說

明治初期に虛無黨文學の潮出せる事に就いて、當時の文書に記錄を徵し得べきものは只一つ竹越三叉氏の『新日本史』（明治二十四年刊行）がある。曰く、

『土佐に三政社出現せり。一を立志社と云ひ、一を靜儉者と云ひ、一を中立社と云ふ。立志社は明治七年板垣等が征韓の議論に敗れて歸りし時、共に歸りし陸海軍士官兵卒の設立せるものにして、社員一千餘人あり、洋學所を開き、法學部を設け、日日夜々、自由民權の說を講じ、或は佛國革命を童謠に作つて市街に歌謠せしめ、或は露國社會黨の非運を小說に作つて傳唱せしめ、以て自由民權の說を平民に知らしめんと勉めたり。』（上卷一九一）

この傍點を打つた一項が事實とすれば、それはわが國に於ける最も早き虛無黨文學（と同視してよからう）の出現でなければならないが、立志社からさうした小說が出た否かを私は疑つてゐる。その時の童謠漢詩は私の手許にも一二蒐集し得たが、小說は未だ一つも手に入らない。或は竹越氏は立志社以外か明治十四五年に出た前記の諸書のことを混同して記憶違ひをして居られるのではあるまいか。

尤もさうした小說が刊行されたにしても、それが散逸して了ふと言ふことも有り得ない事ではない。實は私が前揭した諸書の多くも、どの明治文學史にも記載せられて居らず、危く逸書となり掛つてゐたのであつた。少くとも十四五兩年に刊行せられた諸書に就いては、吾々はその標題だも知らなかつたのを、たまく前引内田魯庵氏の回憶が出でゝ（大正八年刊行トルストイ全集附錄）吾々の探索的興味を刺戟するに到り、その餘の諸書はこの一二年の明治文學研究熱勃興と共に、自ら浮び出て來たのである。但しそれらの諸書を解題するには恐らくロシヤで起きた事件の年代順に隨ふ方が、記述の整理に便宜であらう。

三　烈女ウエラ・サシユリッチに關する二書

世界年鑑一八七八年（明治十一年）の項に『露國の虛無黨副官を暗殺し、又暗殺を企つ』とある事は前に引用したが、少くとも後者の『暗殺を企つ』の方は、ウエラ・サシユリッチの事を言つたものでなくてはならない。なぜならば彼女が時の警視總監トレボフ中將を狙擊したは、そして負傷はせしめ得たが暫

殺する迄に到らなかつたのは、更に最後にその犯行者が妙齢の佳人なるの故を以て世界を異常に衝撃したのは、實に一八七八年二月一日の事であつた。

ウエラ・サシユリッチ！——それはたとへ此の事件は別にしても、決して讀者の耳に全然不熟の名ではあるまい。諸君は恐らくクロポトキンの『自叙傳』に依つて彼女の名を知つてゐるであらう。長いけれど茲に抜いておかう。

『それと同時に、セント・ペテルスブルグ警視總監トレポフ將軍は、其の未決監臨検の際に、政治犯人の一人ボコルウボフが此の萬能の暴君に對して帽子を脱がなかつたのを見て、それに飛びかゝつて一撃を加へ、其の囚人の抵抗に遭つて更にそれに笞刑を加へるように命じた。ほかの囚人等は、其の監房中で此の事を聞いて盛んに激昂の聲をあげて、其の結果看守や警官等に手ひどく打たれた。ロシアの政治犯人はシベリアの追放や或は懲役の間に蒙つた一切の艱難を默つて忍んでゐた。が彼等は體罰だけはどうしても容さないと堅く決心してゐたのだつた。一少女のヴエラ・ザスウリッチは、ボゴルウゴフとは個人的には少しも知らなかつたのだが、ピストルを握つて警視總監を訪ふて、そのピストルを放つた。トレポフは僅かに傷ついたゞけだつた。アレキサンダア二世は此の勇敢なる少女を見に行つた。彼れは確かに彼女の非常な美貌とその内氣なのに打たれたに違ひない。トレポフはセント・ペテルスブルグに多くの對反者を持つてゐたので、其の反對者等はいろ〳〵と運動してボゴルウボフの事件を普通刑法の審判にかける事にした。そしてヴエラ・ザスウリッチは法廷で宣言した。彼女はたゞ、此の事件を世間に知らせて多少の改善を施さしめる一切の方法がなくなつたので、已むを得ず兇器に訴へたのだ。ロンドンタイムスのセント・ペテルスブルグ通信員ですらも、此の事件を新聞に載せるように頼まれながら、そんな事はあり得べからざる事と思つて遂に載せなかつた。で、彼女は誰れにも話さずに、トレポフを撃ちに行つたのだ。そして彼女は、今其の事件が公けになつて、トレポフがほんの少々傷ついたに過ぎない事を知つて、非常に喜んでゐた。陪審員等は滿場一致で彼女を無罪にした。そして彼女が裁判所を出ようとした時、警官等は再び彼女を拘引しようとしたが、門前の群集の中にゐたセント・ペテルスブルグの一青年が彼女を此の捕手から救ひ出した。彼女は國外に出て、やがてスヰツツルの私達の中に來た。

『此の事件は全ヨオロッパに非常な感激を起させた。彼女が放免されたと云ふ通知の來た時、私はパリにゐて、其の日あちこちの新聞社へ訪ねて行つた。新聞記者等は皆熱心になつて此

のロシア少女の爲めに激烈な論文を書いてゐた。『兩世界評論』ですらも、一八七八年の其の評論の中に、其の年の間に、ヨオロツパの輿論を最も感動させたのはベルリン會議のゴルチヤコフ公爵とヴエラ・ザスウリツチの二人だとまで云つた。此の二人の肖像はいろ〳〵な暦に相並んで載せられた。斯くしてヴエラ・ザスウリツチの此の献身的行爲は西ヨオロツパの勞働者に非常に深い印象を殘したのであつた。』（大杉榮氏譯、革命家の思出、六一〇―六一二頁）

又或は讀者は彼女の名を『共產黨宣言』英譯についてゐるエンゲルスの序に依つて記憶してゐるであらう。

『第一の露譯はバクニンの手に成り、一八六三年の頃、ジエネヴーなるヘルエン氏のコロコル社より出版せられ、第二は彼の女丈夫ウエラ・ツアスリツチの手に成り、一八八二年同じくジエネヴアに於て出版せられたり』（幸德秋水、堺利彥氏共譯）

以上に依つて事件の輪廓、及び彼女の業績はほゞ分ると思ふが、たゞ何故に彼女が虛無黨と關係あるかに就いては一言の說明を要するであらう。

彼女は陸軍大尉の遺兒で、そんな運動とは一切關係のない女であつたが、革命黨の女傑ネツチエーフトと多少の知己あり、たま〳〵ネツチエーフトはスパイの嫌疑ある同志を射殺してスキツツルに脫走した。憲兵がその遺品を檢査した所、中からサシユリツチの手紙が發見され、たゞそのためにのみ彼女は一味と見られて投獄追放され、その間に具さに官憲が虛無黨員を虐遇する實狀を目睹した。その後數年、彼女の兔罪なる事が分明し出獄してみると、母はその間に餓死してゐるのであつた。その間の怨恨が彼女を驅つて此の擧に出でしめたのである。

さて右のサシユリツチの事を記した田島象二の『婦女立志歐洲美談』と柚田策太郎の『烈女の奇獄』とは、恐らく共に、當時移入せられた "Eminent woman and tales for girls" などと言ふ類ひの書に據つて譯したものらしい。兩書或は同一の原書を用ゐたのではなからうかと思はるゝ節もあるが、かなり違つた文章として表現せられてゐる。田島象二は今日から言へば種のヨタな賣文家で『哲學問答』『小說文語錦繡』アーネスト・サトウの序翰ある『日本佛教小史』などの著もあれば、醉多道士の別號を用ゐて狂詩の書も編述してゐる。降出降止霖雨濃。居續籠レ房雌與レ雄。朋輩女郞時出レ顏。嬲言呀大屑好中などいふ激濁の愚詩を詠んでゐるのも彼だから、筆路は烈女を傳へるに不適當である。文章の一例を示せば左のやうである。

『薄命なるサシユリツチは年齡僅に二十才を超へさる一少女の

身を以て思ひも寄らぬ寃罪に陷ゐり、無期遠謫の刑に遭ひて、永く此の世の月日に訣れ、其老衰の母に別れ、遠く異域に托して胡笳に骨を委ち、悲馬に心驚き、月黒く草白き配慮の人とはなりにけり。』（三〇頁）

『烈女の疑獄』の方は文も樸實の氣を帶び、讀んで遙かに面白い。元來サシュリッチかが無罪の判決を受けたのは、彼女と一面識もなき少年紳士アレキサンドロフが挺身して雄辯を揮ひ、彼女を庇護した効によるらしいが、その大雄辯の概要がこの書の大部分を占めてゐるので、一讀肉躍り、骨動くの感動を與へずにはゐない。譯者柚田氏については、奥附に福島縣士族とある以外、私は何の知る所がない。

四　『虛無黨退治奇談』

世界年鑑一八七九年（明治十二年）の項に『虛無黨、モスコウ行きの皇帝の列車を要撃せんとす』とある事も前に引用した通りだが、川島忠之助氏譯の『虛無黨退治奇談』は、實に此の壯擧を材料として構想した萬波重疊のかなり面白い小說である。『烈女の疑獄』『歐洲美談』次に說く『露國虛無黨事情』などが凡て百頁以內の片々たる小冊子なるに、これは三百頁近くの、當時にあつては大冊である。

原作者はフランスの Paul Vernier だが、これはラ・ルースの中にもその名の見當らない程の無名作家である。隨つて布置や統一を欠ぎ、多少の混雜は免れないが、何しろ事件が事件だから讀者を魅了するには充分である。

序は漢文で依田學海が書いて居り、別に梅園小史が題詩五篇を寄せてゐる。その第一に、

夢暖溫泉場裏春。魂寒鐵道客車宿、要知外佛內魔證。須見書中一美人

とあるがこの美人の名はアンナで、虛無黨の一重鎭である。

ロシヤ參政官の息ボリスは外遊中であつたが、フランスでアルベル青年と知己になり、相携へてロシヤに歸朝した。その汽車の中で大切な密書をアンナに盜まれて了つた。そこで二人が虛無黨討滅を企畫する事から事件が生じて、アンナが溫泉場に於ける戀人との邂逅、大官毒殺の謀計、ボリスとアルベルが術策を用ゐてのアンナ誘引、皇帝の列車轉覆のために設けた地雷火、密偵の苦肉の策、同志間の反感等いろ／＼な經過もあるが、遂にアンナの戀人ステパンはアンナを救ふために、ボリス等の前に一切の謀計を告白し、アンナに最後の接吻を許された上で自刃する。アンナは自分を救ふがために戀人が同志を裏切り且つ眼前に自刃したのを見て發狂する。ボリス等は告白により

皇帝謀殺の計あるを知つて二人には構つて居られず、各驛に打電するが、その時は既に皇帝の列車はモスコウに向け發車した後である。ボリスの一電よくそれを救ひ得るや否や？これが一篇のクライマックスである。譯文の一例を示さう。

『君等余ヲシテ一生ノ思ヒ出ニ猶一同アンナト接吻シ其傍に斃レシムルヲ拒絶セザルベシ……余君等ニ約スニ實事ヲ語ルヲ以テセリ……君等ノ至尊ト仰グ亞歷山第二世ヲ載セシ列車ハ今頃莫斯哥ノ邊ニテ粉韲トナツテ飛ビ散ルゾ噫專制主義倒レテ自由ノ新世界ヲ啓クハ今日ニ在リ我死ストモ何ゾ憾マン哉ト（ステパンは）絶叫シツツ少婦（アンナ）ノ胡床へ馳セ寄リケリ』

併し地雷火は爆發が數分おくれて皇帝の列車は無事なるを得た。ボリスを助けて　虛無黨一網打盡の効を擧げしめたアルベル青年はフランスへ歸つたが、幾程もなくトランプ札を貫付してゐる懷劍で心臟を刺し通された彼の屍體がセイヌ河に浮き上つたのを、夕刊記事として結んだ所など、今では常套のテクニックだけれど、多少の餘情はある。

譯者川島翁が八十に垂んとする高齡でありながら今なほ健在で居られるのは最近に到つて知つた事だが慶賀の外ない。當時虛無黨に興味をもち、ロシヤからの新歸朝者南木如長からこの原本を獲て、譯述された經過は自序にもあるし、吾等の親しく翁を訪ねて伺ひ得た所でもあつた。翁がジュール・ベルヌの『八十日間世界一週』（明治十二年出版）の譯者としての効績は多くの文學史に見えるが、もし內田魯庵氏の回憶にでも上らなかつたら、この書の如きは危く逸書となり終る所であつた。尤も內田氏の文で書名は知つたものの、數年搜したのに手に入らないので、私は一時、魯庵氏の何かの思ひ違ひではないかと疑つた事さへあつた。然るに此の春吉野（作造）博士の書架にこの書を發見して內田氏の言の誤りなきを確かめると共に、大いに垂涎したのであつたが、旬日後、博士は別に一本を得て私に寄贈せられた。その前後巌松堂の古圖書目錄にも見えて、それは齋藤昌三氏の手に落ちた。川島家にも依田學海が漢文で批評を詳密に朱書した一本が藏されてゐる。吉野博士、川島家、及び私のものは模様の輪廓の中に書名を書きこんだボール表紙だが、齋藤氏のは全面に髑髏を白抜きにした紙表装である。但し本文には差異はない。

五　マルクス最初の紹介者

西洋通徹譯の『露國虛無黨事情』は末廣重恭の序文のついた七十餘頁の冊子、『余頃者譯ニ英文雜誌記ニ魯國虛無黨之事情一者一編』以揭ニ自由新聞ニ　また『如ニ新聞追次著ニ不レ便ニ観覽一、編

以爲ニ一小冊子ニ」の自序に依つて編述の次第は明かである。この書は發賣禁止になつた。内容については別に言ふ程の事もないが、ヒーゲル、スコペンホウエルなどの奇讀の固有名詞の見えることと、それから一個所マルクスの名も見える事などが多少眼を惹く點である。このマルクス全盛の世に於て、日本に彼の名が傳はつた最初はいつ頃であるかを究めるのも多少の好事心を滿足させる事であらう。私は別に注意して調べたわけではないが、この書及び宍戸義一の譯した『古今社會黨沿革說』にその名が發見せられる事と、兩書とも明治十五年の出版である事とを言つておく。なほ本書で不思議なのは左記のやうな一節の存する事である。

『此時に當り社會教育の全權はトレストイ侯の一手に存したり。魯國新聞紙の記載する所に依るに、侯は最も卑劣なる小人にして其教育上に主義とせし所の如きも可成人民を愚昧に保ち以て壓抑の主義を幇助せんとするにあり』（同書一八——一九頁）

これは事によるとトルストイ伯の、あのイワンの馬鹿流の、農民の簡朴さを禮讚した主張を言つた事ではなからうか。もしさうとしたらこの書全體に渉る譯者の理解力に大なる疑をおかないわけには行かない。又もし別にトレストイ侯なる人があつたとしたら、私は自分の無知識を恥入る次第である。

宮崎夢柳の『鬼啾々』は未だ寓目の機を得ない。

涙香譯の『片手美人』はフランスの探偵小說家ボアゴベの作である。英譯は"The Cold Hand"と言ふのだが、フランスの原題は知らない。これは『鐵假面』などと並べて涙香物の中で私の最も好きな作である。私は『鐵假面』によつてフランス革命直前のルイ王宮に興味をもち、『片手美人』によつて虛無黨の興味を刺戟せられた事を白狀しておく。

六　二葉亭の『虛無黨形氣』

以上の諸書はウエラ・サシユリツチに同情した以外、多くは虛無黨を敵視し、憎惡してゐる。元より虛無黨の神出鬼沒の活躍、勇猛果敢の動作、周到綿密の謀策を、或は壯とし、或は痛快とし、或はいたく共鳴を感じてゐる事は掩はれ難いが、虛無黨を他面、陰謀、毒殺、奸計、暗殺、刺客、爆發彈などの概念と結びつけて惡物視し、憎惡してゐる。それが當時の日本人一般の考へであつた事は、古い新聞雜誌に散見する記事に依つても窺はれる。

所がここに唯一人、虛無黨を彼等とは全然別に（即ち今日から言へば正當に）解してゐた人があつた。二葉亭四迷こそ實に

その人であつた。

明治十九年二葉亭はツルゲエネフの『父と子』の初めの方を『通俗虚無黨形氣』と題し飜譯した。その事は二葉亭の自談にも、坪内逍遙博士の回憶にも見える。

『浮雲以前にも飜譯などはある。今もいつたツルゲーネフのファーザース・アンド・チルドレンの冒頭を、少々ばかり譯したことなどもあるが、坪内さんに見せたばかりで物にはならなかつた』（二葉亭全集第四卷七二四頁）

『二葉亭は例の「父と子」の幾ページかを其の式で譯して來て（虚無黨氣質と題して）見せたことがあつた。それを私が大阪の日野商店へ世話したことがあつた。舊日記抄を見ると、其の前金三十圓を二葉亭に渡したといふ事が書いてある。それは十九年四月四日の記事だ、あの原稿を日野商店はどうしたか知らん。無論、殘稿を催促しても來ず、其の第一稿とても、遂に世に出でずに埋もれてしまつた。』（坪内博士回憶漫談）

日野商店がこれを出版する積りでゐた事は確かである。なぜなれば十九年四月加藤瓢乎がオーネエの小說を譯した、『鍛鐵場主』が日野商店から出てゐるが、その奧付廣告を見ると『春酒家朧助譯、冷々亭杏雨譯、通俗虚無黨形氣（近刊）』とあり、その廣告文は杏雨即ち二葉亭が署名して書いてゐる。それは單に虚無黨に對する二葉亭の見解の一端を窺はしめる許りか、稀世の珍篇であるから全文を引用するであらう。

『素人了簡には虚無黨とさへ申せば何うやら煙硝臭い樣に思はれますが、全くは匆々左樣な淺はかなものではないさうで御座います。魯西亞で虚無主義の芽を出しましたは今を距る四十年以前の事ですが、最初の程は誰一人其と心付くものもありません。所を先年佛蘭西で物故なられた杜ルゲーネフ翁が、流石名家といはれる人だけあつて、違つたもので御座います。疾くも其と心付かれて之を一部の小說に編み、世に公に致した所から、遂に世人の惡しみを受けて危險な眼にも出逢つたゆゑ益々有名に成つた、と申すは即ち此虚無黨形氣のことで御座います。一篇の本尊と申すは虚無主義を主張する一箇の豪傑で、之をさる架空主義の紳士に憎ませて、激論の末遂に一場の騷動を醸すといふ事が全編の骨子で、其他本尊の豪傑が思を懸ました女丈夫を以て彩色と致し、男女數名の鼻の端の虚無黨論者を附景物に添へて、お慰ながら御覽に成りまする中に、自然とかの虚無恬淡の主義、又は之を奉ずる人々の言行風釆から、硝藥臭いのは此主義の眞面目でないことまで逐一お解りに成りませうから、御見聞を博く遊ばす一助にも相成らうかと存じます。加之言文一致一途の主義に基いて、紳士社會に行はれまする上品

な東京語を以て飜譯して御座いますから、至極面白く出來てをりまして、惡く申せば岡朝子の猿眞似ですが、賞めて申せば此の小說などが日本新文章の嚆矢に相成りませうか。とはいふものの是とても手前一箇の私見で、下世話に申す味噌を上げる類かも測られませんゆえ、好弱(よしあし)は御覽の上、御勝手次第に御評判を願上ます。（冷々亭主人述）

日露戰爭前後に出た虛無黨文學も、上記初期の文獻と對比して言ひたい事があるにはあるのだが、豫定せられた紙數を超過したから、これで擱筆するであらう。

追記――十一月號新舊時代に『鬼啾々』の事について左の如き投書が載つてゐるのを發見した。『此書は露國虛無黨の事情を書きたるものにて四六版二三百頁、最初「自由の燈」か「自由新聞」かに登載せるを一冊の單行本となしたる樣に記憶致候。或は秘密出版でもあるか、最初の頁にシントペートルの警視總監にて陸軍中將かを一少女が狙擊し、捕へられ、辯護人が法廷に於て辯論し、被告が逃走したる樣な記事をウロ覺へ致し居り候』云々。もしこれが事實とすれば『鬼啾々』も亦ウエラ・サシュリツチを題材とした書であること、疑ひを容れない。

「藝苑」の出た前後

馬場孤蝶

（一）

今手元に何の記錄もないのだから、確なことは云へないのだが、明治三十五年の春頃のことであつたらうかと思ふのだが、その時分英國へ留學することになつてゐた平田禿木君の紹介狀を持つて、一人の青年が僕のところへ尋ねて來た。紹介狀はその青年は平田君の敎へてゐた高等師範附屬中學を出て、一高の文科在學者であつて、何かと自分が後援者の位地に立つてゐたのだが、今度洋行するに就ては、あとのところ應分の援助を賴むといふ意味であつた。その青年は栗原古城君であつた。栗

原君はそれから、僕のその時分住まつてゐた飯田町五丁目の家へ尋ねて來て、同じ一高にゐる同志の人々の話をしてくれた。

その連中で書いたものを綴めた『花雲珠』といふ回覽雜誌を持つて來て見せてくれたのは栗原君であつたかと思ふ。その『花雲珠』の同人といふのは、生田、森田、五島、中村、栗原、川下などの諸氏であつた。もうその時分でも、生田君は星郊の號で、森田君は二十五絃の號で、五島君は梧桐夏雄の號で、『新聲』（新潮の前身）、『文庫』、『明星』などで、書いたものを公にしてゐたかと思ふ。

栗原君が僕の家へ最初につれて來たのは森田君であつたかと思ふのだが、森田君はまだそれほど肥つてゐなかつた時分で、和らかに肉づいた顔にあどけないやうな表情の出てゐる可笑らしい青年であつた。生田君も來てくれたらうかと思ふのだが、それに就ては、何等の記憶も遺つてゐない。

ところが三十六年の夏頃かと思ふのだが、森田君のところから、轉居の通知が來た。本郷の丸山福山町四番地の伊藤方へ移つたとある。此の番地は何うも樋口一葉女史の最後に住んでゐた家のと同じなので何うかすると同じ家ではないかなど丶、少し想像を馳せてゐると、間もなく栗原君がやつて來て、

『森田が越しましたよ』

と云つたので、

『福山町四番地だといふのだがね、何うも一葉のゐた家と同じ番地のやうに思ふね。一葉のゐたうちだと、路次の突き當りで、かういふ間取りなんだがね……』

僕はさう云つて、一葉女史がゐた時分のその家の入口のさまから、間取の大體を說明した。栗原君は眼を輝かして、

『それは實に不思議です。全くその家に相違ありません。森田にさう云つてやつたら、さぞ喜びませう』

あとは、何時もの雜談になつて、栗原君は歸つて行つた。

それから間もなく、僕も念のために、森田君の宿を尋ねてみたが、それは確に一葉女史のゐたうちに相違なく、唯女史の隨筆『そゞろごと』のなかに出てゐる池が埋められてしまつたのみで、家のなかはそつくり昔のまゝであつた。尤も、一葉女史の住んでゐた時分には『濁り江』に出てゐるやうな銘酒屋がまはりに幾軒もあつたけれども、もう森田君の時代にはそんな家は一軒もなくなつてゐたことは此所にいふまでもないであらう。

（二）

その家では先づ『花雲珠』の同人會が催されたかと思ふ。中

村古峽君、川下江村君などゝ知り合ひになつたのは、その時からであつたのであらう。

そのうちに、その家で一葉女史の記念會を催すことになつた。集まつたのは、『花雲珠』同人の外に、與謝野寛、同晶子、小山内薫、同八千代、蒲原有明、河井醉茗、上田敏の諸君と樋口邦子、同悦、それと僕とであつたと記憶する。第二回の時は、少し來賓側の方の顏ぶれがちがつて、與謝野君ご夫婦の外に、三宅克巳、山川登美子、増田（後茅野）雅子の諸君も來會してくだすつた。

もうその頃には、『花雲珠』の同人諸君は皆大學へ入つてゐたので、月一回ぐらゐであつたと思ふのだが、上田敏君の西行町十番地の家で、研究會のやうなものを開くことになつた。その時には小林愛雄君なども來られるやうになつたかと思ふ。その前後であつたが、雜誌を出さうといふ話が出て、與謝野君の仲介で、上田君と僕とが明治書院へ交渉したが、話は纏まらなかつた。

そのうちに、島崎藤村君が信州から出て來て、西大久保へ家を持つたので、森田君を誘つて島崎君を尋ねたことなどもあつたが、島崎君の善く知つてゐる銀座の細川芳之助君（後に近松作淨瑠理の研究家になつた細川賀茂君）が出版業へ手をつけてみたい氣になつたので、島崎君が口をきいてくれて、細川君のところから吾々の雜誌を出して貰ふことになつた。

それは三十八年の秋から後のことだと思はれるが、吾々は島崎君戸川秋骨君にも同人になつて貰ふ考であつたので、島崎君のところへ頼みに行つたのだが、兩君の承諾を得られなかつたけれども、雜誌は出すことになつて、上田君の宅へ島崎君にも來て貰つて、内容その他に就て相談會を開いた。

その會合は僕は何かの都合で出席ができなかつたやうに思ふ。島崎君はその前から、その雜誌ではスケッチの奬勵をすることにして、投書の添削などもしてやつたら何うだらう、自分も添削を引き受けてもいゝんだがといふ意見であつたのだが、その相談會の席上でも、島崎君からそれに類した意見が出たらしい。これは、雜誌經營の上からも着實な意見には相違なかつたが、何にしろ、『花雲珠』の同人は、文壇的功名心にも可なり燃えてゐる全く年少氣鋭の人々であつたので、自分たちの雜誌をば所謂る青年雜誌にする傾のある意見だといふので、島崎君の提言には反對者が多かつた。上田君からは、島崎君の意見に從うとすると、雜誌が投書雜誌になる虞があるといふやうな意味の手紙が來たこと覺えてゐる。

それでとにかく、雜誌は『花雲珠』同人の文壇へ打て出る機關

として發行することに話は纏まつて、名を何うしようかといふことになつたが、上田君、平田君などで明治三十三年頃に出した『藝苑』といふ雜誌があつたので、その名をそのまゝ繼承しては何うだといふ意見が出た。上田君がそれは自分に取つては非常に滿足だと云つたので、名はそれにきまつた。

初號の日附けは三十九年の一月一日となつてゐたらうと思ふのだが、それには、島崎君に短篇小說を書いて貰つた。確『朝飯』といふのであつたかと思ふ。上田君は『鏡影語』と云つたか、『鏡中語』と云つたか、確には覺えてゐないが、何だかそんなやうな題名で、當時の創作や評論に對して、短い適切の批評を加へたものを書いた。生田君も號を長江と改め、森田君も草平の號を用ゐるやうになつたのはその時からであつたらう。僕はチエホフの『六號室』を譯載した。

四十年へかけてのことであつたと思ふのだが、生田君の計畫と斡旋の下に、藝苑講演會といふのを催すことになつた。九段の中坂下にユニヴアーサリストの教會があつたのだが、其所の牧師さんの赤司氏と生田君が心安かつたので、會場には其所を借りた。第一回の時には、島崎君と平田君が出てくれたと思ふ。第二回目かには島村抱月君にも講演して貰らつた。小林愛雄君の世話で、澤田柳吉、藤井環その他の音樂家諸君にも、講演の間で演奏して貰つた。

（三）

此の講演會などはなか〳〵良い計畫であつて、當時若い文學愛好者の間には可なりな好評を博したらしかつたが、まだ文壇と世間との交渉が幾らもなかつた時代であつたので、雜誌の方の賣れ行きなどはいふが程のものではなかつたと思ふのだ。島崎君が自分だけの發意で細川氏に話して三十圓だけ編輯費を出して貰らうことにしてくれたけれども、それだけでは雜誌の擴張などはできなかつた。

そのうちに、上田屋の輕率振りに對して、生田、森田、川下などの諸君から不平が出だした。川下君の書いた論文の言辭が少し激越に過ぎたといふので、上田君が雜誌へ載せるものとしては、川下君の再考を求めたといふのが動機であつた。それは先づ何うにか納つたが、それからは、前記の若い人々と上田君との間が何うもうまく行かなくなつた。それにはいろ〳〵理由もあつたらうと思ふのだが、此所に書き得ることは、氣鋭の諸君が追々自分自身に對して不平を持ちはじめる時期になつて來たので、その不平のやり場をば雜誌の編輯振り、從つて上田君の方へ振り向けてしまつたといふ傾も餘程あつたらうと考へられ

る點である。

とにかく、結局、皆に上野の三宜亭に集まつて貰らつて、編輯を全部生田君に托するといふことに話を纏めてしまつた。それから後、僕などが少しは勉强して物を書くべきであつたのだが、すつかり怠け癖をつけてしまつたので、殆ど何も書かず、他の諸君ももう大分文名はできると共に、生計の關係から、無報酬の原稿を書いてはゐられない狀態にだん〱なり行くので、雜誌の內容はしだいに寂びれて、遂に廢刊することになつてしまつた。因にいふ森田、川下、生田三君の文集『草雲雀』が出たのは四十年の十一月で、それは川下氏の死後であつた。

此の雜誌を起す當初には、島崎君は『君がやり給へ』としきりに云つてくれたけれども、元々上田君の勢力を文壇に廣く植へつけたいといふ考でもあつたし、第一怠け者である僕には、雜誌を引受けてそれを育てゝ行くといふやうな勉强心がなかつたのだから、編輯その他社中の統率をばすべて上田君にまかしてしまつたのだ。

雜誌の終り頃になつても、生田君から、僕自身が統率者の位地に立てば、どんな專斷があつても皆がそれに服從すると云つてゐるから、是非雜誌を引き受けてくれと、懇々勸說を受け、上田君からもその前後に於て、雜誌の編輯を僕が引受けるのが一番宜しいといふ意見を通じて來たけれども、上田君を謂はば雜誌編輯の仕事から隱退させるに就ては、若い人々の味方を僕がしたのであるから、そのあとを引き受けるのは、上田君に對して甚だ義理の惡るいことであつたし、それに前に云つた通り、不勉强な僕では、よし引き受けても、雜誌の前途は知れてゐるやうな氣がしたので、すべて斷つて成り行きにまかせてしまつた。

今思へば、島崎君が折角あゝやつて吾々のために生れさしてくれた雜誌であつたのだから、僕などはもう少し勉强して、雜誌の命をもう少しでも長からしめなければならないところであつたであらう。まことに汗顏の至りである。

雜誌の終り頃か、或ひは廢刊後であつたか、今明に記憶してゐないが、生田君の發案であつたと思ふが、閨秀文學會といふのを起した。これは、ユニヴアーサリスト教會で赤司氏が英語學校をやつてゐて、その教場を借りて使へるので、與謝野晶子君にも出て貰らうことにして、あとの講師は生田君、森田君、三枝文學士、それに僕も加はつて、文學の講義をすることにした。それは四十一年の夏であつたらうかと思ふ。その時の聽講者のなかには、平塚雷鳥、林千歲、青山(後山川)菊榮の諸君などがゐたことを記憶してゐる。當時のことなのだか

ら、會員の數は多くはなかつたけれども、會員は皆熱心な人々であつたので、會の維持に就いても何か然るべき方法を立てようと云ふので、與謝野君の斡旋で、金尾文淵堂から吾々の講義錄を出すやうな話が始まつたのであつたが、何か支障ができて(何うも出版者の方に於てであつたやうに思ふ)、それは實現しなかつた。さうすると、折角の擴張計畫が頓挫した以上、もう會そのものを續ける興味がなくなつたから、解散しようではないかと云ひだしたのは、森田君であつた。與謝野晶子君などはその解散を非常に惜しんで、會員中の二三の人々をつれて、わざ／＼僕の家へ尋ねて來てくださつて、會が解散したら、會員のうちの熱心な人々で講話を聞きたいといふ人々を僕の家へよこしてもいゝかといふ相談があつた。僕はこれを引き受けて、僕がその秋引越した大久保余丁町の家へ、文話を聞きに來なすた方が二三人はあつた。平塚君も確に一度はおいでなすつたと思ふ。その時分から、規則正しく每週英語の稽古に來なすつたのは青山菊榮君であつた。大貫(後岡本)かの子君も每週おいでなつたと思ふ。

そのうちに、森田君と生田君とで金葉會といふのを起し、閨秀文學會の仕事をつゞけ、その會の主催で講演會なども、ユニヴアーサリスト教會で開いたのであつた。その會には一度ぐらいは講話に行つたかも知れぬが、會そのものとは僕は何等の關係もなかつた。

此の會の最後が、『煤煙』事件であつたのだが、これに就ては、可なりよく内部の事情を見聞してゐるので、小說の形にでもすればいざ知らず、事實の平叙をなすことは遠慮しなければならぬであらう。

(をはり)

明治文壇印象記

高須芳次郎

□文人の運不運

近來、明治文學研究の風潮が勃興しはじめたにつれて私は折折、現在比較的に人々の間に忘られてゐるやうで、その實ちつ

と人の心に最も深く印象を留めた或二三の名流、大家などの事を思ひ出す。例へば、史論史傳の方面で相當立派な仕事をした山路愛山、新聞文學に新生面を開いた澁川玄耳、硯友社に於て一異色を放つた川上眉山、評論家として至極眞面目な道を歩いた大作嘲風、人物評論の上に獨自の世界を築きあげた鳥谷部春汀の諸氏などがそれである。それから上田敏（柳村）の文學評論なども樗牛との比例上、も少し推重し回想されてもよいと思ふ。

人には運不運がある。若し樋口一葉女史が創作上正當に認識せらるゝに對して、それに對立すべき一人を飜譯文學の方面に求めるとしたら、若松賤子女史（巖本善治氏夫人）を相當價値ある人として推さねばなるまい。また高山樗牛氏の評論に匹敵すべき器量ある人を赤門派の中に物色するとしたら、當然、上田敏氏を擧げねばならぬ。それから紅葉、柳浪二氏と共に硯友社に光彩を加へた眉山氏の業蹟は、公平に見て、もつと認識すべき必要がある。けれども以上の三人（賤子、敏、眉山）が割合に持囃されないで、忘れられ勝になつてゐるのは、やはり、一つの運だ。それ丈正當に價値を批判すべき人が出ないのだ。いづれかと云へば、運のわるい人である。

ところが、北村透谷、高山樗牛、長谷川二葉亭氏などは、その周圍に有力な友人を持つた爲めに、當に今人の印象中から去らないのみならず、その業蹟は正當に認められ、何等の遺憾がない。透谷氏の如きは寧ろ過當に評價せられてゐる。透谷の著作はすべて未製品で、今日讀んで共鳴すべきものは極少い。けれども、その友人中には、島崎藤村氏の如き友情の厚い人があつて、常に透谷の業蹟を明かにすることに力め、推讃の辭をつくしたので認められすぎる程認められた。勿論、彼れの悲痛な最後が一般の同情心を刺戟するにもあるであらうが、結局、文人としての透谷は運のよい方である。

それから高山樗牛は、その情熱、才藻の上にすぐれたところがあるので、嘲風臨風氏らが推奬せられずとも、青年間に大きい反響を生ずべき可能性が充分にある。が、今日樗牛の著作を讀んで彼れの生前に於けるやうに興味を感じ得ぬ部分が相當にあるのを見ると、やはり、彼れの友人が力をつくして、樗牛の面目を世に紹介するに力めたことが、樗牛の價値を增した一因となつたことをいなめない。樗牛も幸運のよい人である。

詩文人の運不運は、生前に於ても、歿後に於ても、その遇不遇の上に影響するところが極めて深い。認められるべくして認められず、また認めらるゝ必要なきものが過當に認められることがあるのは避け難い事實だ。殊に現時のやうに創作中心の時

代、小說戲曲本位の時代になると、評論、隨筆、史傳の類は正當な價値を認識せられない氣味があつて、さういふ方面に關係するものは、やむなく、運のわるい部類に數へられねばならない。現に愛山、春汀、玄耳、嘯風四氏などは、余りに忘れられすぎた氣味がありはしまいか。私はそれを遺憾とする。それで私はさういふ方面の人々について思ひ出したことをすこしかばり記したい。

□謎の川上眉山

私は自分の嗜好に阿るわけではないが、何を措いても、山路愛山はもつと人々に思ひ出されて宜い人だと思ふ。それに愛山の全集も當然出版されねばならぬと考へる。ところが、今日、愛山を說くものが割合に少く、彼れの代表的著作が新たに訂正公刊せられないのは淋しいことだ。

か、愛山の文學的成功は寧ろ大正時代に入つてからであるから、暫くこれを擱く。愛山とは仕事はちがふか、文壇に意味ある仕事を殘したのは川上眉山である。今日、眉山は唯『ふところ日記』によつて記憶せられてゐるやうだが、彼れの業跡はもつと闡明せらるべき物を多分に持つてゐる。

一體、眉山はどんな人であつたらうか。彼れが自刃した爲めに、ひどく沈欝、偏屈な人にされてゐるけれども、其實、さうでないらしい。巖谷小波氏が編した『眉山珍文』によると、洒落縱橫の風流才子で、平生諧謔を好み、ヒユウモアの味を充分に解したことは、紅葉などと少しも變らぬ。が、そんなら唯以上の如き人物であつたかといふと、必ずしも一概に洒落の才人とのみ押片けることが出來ない。

私は眉山の生前、唯一度しか逢つてゐない。それは明治三十二年初夏のことで、眉山は當時、牛込南山伏町にゐた。その家はすこし露次を這入つた突當りにあつて、質素な平家であつた。その時、眉山と何を語つたか、すつかり忘れてしまつたが、その秀麗、球のやうな彼れの風采から受けた第一印象は、他の硯友社諸才人とすこしちがつたところがあつた。それは眉山の樣子が詩人的で幾分、自己の內面生活についても凝視を怠らぬ人だといふ感じである。一見、彼れはいかにも洒落であつたが、それと共に超世俗的な一面が確かに見えた。或はもうその時分の眉山は、『眉山珍文』を書いた明治二十三、四年頃とちがつて、人生に對し、社會に對し、次第に思索の眼を向けてゐたのではなかつたか。

眉山の思想上に於ける懷疑的傾向と一種の人生觀を示した『ふところ日記』は『代表的名作選集』の解題によると、明治

三十四年に出たことになつてゐるか、私がそれを見たのは明治三十年乃至三十一年の春である。それは私が大阪にゐた時分で、京町堀の書肆太華堂の店頭で買ひ求めた或旅行雜誌の卷頭に出てゐた。眉山の思想の一轉化を知るについては、云ふところ日記』が重要資料となるので、それが最初公にせられた頃が三十年乃至三十一年であるとすると、その時分から、眉山は今迄の風流生活にのみ安んじてゐることが出來なくなつて、宗教、哲學に親しみ、一度烈しい懷疑に陥つた後、翻然として宇宙の大愛を自覺するに至つたのではなかつたか。

さう考へると、二十三、四年代の眉山は早熟の風流才子で一時、無自覺的な享樂生活を送つたものと思はれる。恐らく、當時の手紙を讀むものは、眉山後年の自殺を到底想像だもすることが出來まい。例へば眉山が小波と某所で遊んだ時の感想を述べた手紙は、いかにも彼れの洒落な樂天的氣分を浮べてゐる。

元祿ぶりならば一足下がつて外套の裾をつかまへ、昨夜はおかげ／＼と手を合せて拜む所、實にあの時の嬉しいやうな恥しいやうな、變——な氣になつて流石の胸中も頗るどきまぎして、何が何だか一切夢中でポツとして仕舞つたよ。再來一向人事を辨へず、腹中の蟲がテンと面白くして續々胸にこみ上げて來るんだもの、僕アモウホントに居ても立ても立きれない、實にいゝお正月、昨日暦を繰つて見た所、年廻りは○で一點の黑なしだらうぢやないか（下略）

それから彼れが醉中に筆を走らせた手紙には青春時代の快活な彼れの俤が明るく浮び出てゐる。後年の彼れとは別人のやうな趣が見える。

・（醉筆御免）

第一に申すことは、およし様とおきく樣とにくれ／＼よろしく

「此事をシスターに傳へて吳れなければ君も親愛の兄でない」

○

次に云はれない前に遺失物御屆

一紫吟社發句廻狀
これはファザー書齋に於て
一風呂敷包
內箱龍膽紋服
これは二階書室

右は斷申置候間あとでスッパ抜ツこなし

○

次に

御酒馳走過分
・次に
今夜は非常に面白かつた
（中略）
終に臨んで萬歳
　オヤ誰のために？　ハテ云はぬが花、
聞く内が本、マア當てゝ見たまへ、恐らくこれは當るまい
今夜　　　時節㡳到來
　若殿恭硯姉先生
およしさんは美しくなつたねエかしこ
おきくさんは話せるねエかしこ
小間使は捨置けないねかしこ
以上

□眉山の死因

　眉山には右に見るやうな明るい輕快な一面が最後迄あつたやうだ。それは硯友社同人に略ぼ共通した傾向で、今も巌谷小波氏らの肌合にはさうした點が見える。唯小波氏は藝術上、思想上懐疑に陥つたり、或は行詰つた苦痛を感じたりしないやうだ。この苦悶は眉山にのみ見るところで即ち眉山は一度人生的に行詰つて、一方を打開し、『ふところ日記』にあるやうな悟道めいた考へに到達した。ところが、最後に來つた藝術上の行詰りは、彼れを苦め、彼れを悩まし、どうにも解決が着かなかつたものと見える。

　一體、眉山はいつも新しい方へ、新しい時代へ進んでゆかうとしてゐた。彼れが明治二十八年、社會小説『書記官』うらおもて』の二篇を出したのは、當時文壇の新傾向に共鳴した爲めで、作品として成功はしなかつたが、着眼、文體、題材の上に新らしいところがあつた。その後、眉山は『朧富士』に於て悲戀の女を描き、『絃聲』於て夜半の絃聲に共鳴する幽微な心境を描き、『松風』に於て熱情の詩人を描いて心理描寫に力めたが、一息物足らぬ所があつた。期待をかけられた『暗潮』の大作は途中で筆を絶つて了つた。蓋し彼れの研究、工夫が足らず、精力、熱力執着力に乏しい爲めに、その新意圖は兎角、彼れの期待した程度に實現せられなかつた爲である。それからくる焦燥、失望は、彼れの藝術上に於ける重荷であつたにちがひない。

　彼れは晩年、當時文壇の新人らが集つた龍土會にも度々出て、そこに新しい氣分、新しい思想、新しい趣味を吸ひ込もう

と心がけたが、先輩なる彼れの地位にあつては、思ふやうに内心を打開けて會員と話合ふところ迄ゆかず、新しい時代の蔓に手を觸れはしたが、それをしつかり摑めないうちに世を去つた。そこに深く同感すべきところがある。

以上の如き藝術上の行詰りが眉山を死に導いたかどうか。はつきり斷言することが出來ない。それに死ぬ前の眉山はいくらか冴えないところがあつたにしても、沈鬱、偏屈ではなかつた。すくなくも、いろいろの話を輳合して見ると、厭世、哀觀の風がなかつた。田山花袋氏は一概に眉山の死を藝術難に歸し、また眉山自殺の當時、某々新聞は生活難を以て眉山の死因と見なしたが、それらも正確といへないと思ふ。彼れの死をさう簡單に考へるのは輕卒であるまいか。寧ろこれを一つの謎の儘にして置いた方が正しくあるまいか。

眉山の最後を思ふと、勢ひ透谷の最後を連想するが、そして共に同情を寄せざるを得ぬが、それと共に眉山は透谷の如く、もつと研究せられてよいかと思ふ。透谷の作品が未製品なるが如く、眉山の作品は多く失敗にちかい。いつも新しい意圖が裏付けられてゐながらも、それが徹底的に實現せられない。いかにも、物足りないところがある。けれども又そこに眉山の特色があり異つた色合があつて一種の興味を惹く。

それに眉山が硯友社に於て占めた地位も特殊的である。彼れが風流才子を以て自任し、皮相な樂天氣分に終始した時代は、紅葉、思案とも比較的親しく、殊に小波と親しかつたが、後に哲學、宗教の事を考へるやうになつた時代は、次第に小波氏とも疎遠になり、紅葉、思案諸氏とも余り往來しなかつたやうだ。この事は小波氏自らその事情を述べてゐる。

眉山の哲學癖は既に二十三、四年の頃から片鱗を現はして洒落、輕妙な筆で紅燈緑酒の趣味を記する間も「爭はざる時は勝もなし、負もなし、此時混然として本元の一氣生ず、これ悟道なり。」といひ、「無常々々、逝くものも無常なれば、止まるものも又無常なり。」といひ、「正念工夫堅固不退、これを八字の名號として、朝夕三度掌に書して、嘗めて後、つく〴〵浮世を觀じ給へ。」といふなど、眉山が二十歳前後から佛教、哲學方面に少し宛親んでゐた樣子がわかる。

さういふ傾向が大分加はつて來た頃の眉山は硯友社のうちにゐても、精神的に孤立し、どの方面にも、彼れの同感者を見出さなかつたことは想察に難くない。ある時代は、紅葉を凌ぐかも知れないと推想せられた眉山の仕事については、も少し詳しく研究せらるべきだと私は思ふ。

□闡明せられぬ上田柳村の業蹟

それから私は評論家としての上田柳村はもつと人々から思ひ出され、注意されて宜いと信ずる。私は柳村と何の面識もない。それに打開けていふと東京時代の柳村は嫌ひであつた。それは彼れの言動が私にはひどく衒學的であるやうに見えたからだ。勿論、後でそれが誤解であつたと知つたが、兎も角、晩年の柳村に對して持つほどの好意を東京時代の彼れに持つことが出來ぬのは私の先入的感情の所爲ばかりでもあるまい。

今日、柳村の譯詩は相當重く見られ、既に公刊せられたが、それと共に何故、彼れの散文集が出ないのかと私は不思議に感ずる。私が始めて柳村の文章を知つたのは、『帝國文學』『江湖文學』『文學界』などに於てであるが、彼れが幽韻微韻を談き、ギリシヤの藝術、思潮などを紹介し、文藝復興期のヨオロツパを論じ、ダンテを談じ、細心精緻の學風を高調し、時に南歐情調を唱へたことなどは深く私の心を動かした。それは樗牛のやうに生氣、熱情に滿ちた文章によつてゐない丈に烈しい感激を誰にも與へなかつたが、地の下を流るゝ清泉のやうに、心の底に徐ろに沁み込む力を持つてゐた。

それから明治三十一年、樗牛の『釋迦』が『世界歷史譚』第一編として出た後で、柳村の『耶蘇』が第二編として出たことを忘れることが出來ない。柳村は既に高等學校時代に『春の夕、基督を思ふ』と題する名文を書き、同窓の人たちを驚かしたことがあつた。さういふわけで、クリストについては、早く研究し、鑽仰して、『耶蘇』の出來は出色であつた。丁度、柳村の清新、流麗な文致が『聖書』の詩篇などのか感化ら生れ出たやうな味を帶び、再誦して尚ほ飽かなかつたのを今も覺えてゐる。

彼れの『耶蘇』の次ぎに見たのは譯文集『みをつくし』である。當時の文壇に於て、この位、擬古文を巧みに書いて、歐西藝苑の名花の匂ひを人々に傳へるものは、鷗外を除いて他にあるまいと思はれた。が、私は『みをつくし』を『耶蘇』ほど愛誦することが出來なかつた。それは柳村好みのスタイルに附纏ふ一種のアフエクテイションが私に煩はしさを感ぜしめた爲めであつた。が、それにしても、少壯翻譯家のうちに於て得難い才筆であることを認識しないわけにゆかなかつた。

柳村の『文藝論集』が、はじめて春陽堂から出たとき、私は第一に購求した。あの赤と白とで表紙に一種の異國情調を漂はしてゐたのを今も忘るゝことが出來ない。それと同じやうな體裁で廚川白村の文藝論集も出たが、白村の分は到底柳村に及ば

なかつた。確かに一二段、下位にあると思ふ。が、柳村の『文藝論集』は樗牛の『時代管見』や『文藝評論』のやうに賣れなかつた。確か再版もしなかつたらしい。樗牛の評論は熱と力とによつて直ぐに青年を動かすけれども、柳村の評論は學者的で、こつとりとしてゐるために、青年には迎へられない氣味があつた。けれども具眼者は時によると、寧ろ柳村の評論を可としたのである。

柳村は常に海外文學の研究者として終始したが、必ずしもそれに囚はれなかつた。彼れには獨自の見識があつて、是非、取捨の判斷を誤らなかつたやうに思ふ。それは柳村の遺著『現代の藝術』のうちに於ても、よく現はれてゐる。それに彼れは日本の古典文學に對しても深い興味を持ち、『伊曾保物語考』や『小唄』を編し、『源氏物語』その他の代表的作品について充分の味解を有したのは人の知るところである。

以上の意味に於て、柳村の業蹟はもつと明かにすべき必要がある。彼れが世を去つたのは大正五年であつて、いくらか大正時代の文學にも關連を持つが、主たる活動は明治時代にあつた。彼れの十八番ともいふべき「海外騷壇」は『帝國文學』の異彩で、西歐の新聲を逸早く紹介し、明治文壇に有力な刺戟を與へた。神話、傳說の新研究についても、柳村の紹介は有識者の注目するところとなつた。私は今日、切に柳村を思ふの情に堪えないので、新しく彼れの散文集が公にせられ、彼れの眞摯な言論、詩味多き論說が現代の新人に稗益するところあらんことを期待する。

□忘れられんとする名譯家若松賤子

次ぎに私は若松賤子女史について一言したい。賤子が世を去つたのは、明治二十九年の頃である。今から丁度三十年前のことだ。當時、高山樗牛は賤子の死を悼んで、「吁嗟若松賤子女史逝けり、『小公子』、『わすれ形見』の名を知るもの誰か閨秀文家若松賤子其人の名に想ひ到らざるものぞ。女史は實に閨秀文學者中優に一頭地を占めたるものなり。而して芳齡尙ほ老に及ばずして忽ち悲むべきの報に接す。風饕雪虐、由來天の名花を妬むや何ぞ慘なる。雁行するもの小金井氏田邊氏あり、後勁に一葉ありと雖も、而も文壇寥落の嘆なき能はざる也噫。」と云つた。

賤子は巖本善治氏の夫人で賢明を以て知られてゐた。一體、巖本氏は『女學雜誌』の主筆で、その卷頭に掲げた隨想錄は當時、天下一品と稱せられ、私らは『精神界』の清澤滿之氏、『東京獨立評論』の內村鑑三氏の感想小品と共に深く愛誦した。巖本

氏の文章は『聖書』などの感化を受けて、清新雋逸の風趣に富み、一字一句、靈威を帶びたやうに思はれた。今日讀んで見たら、或はそれほどでないかも知れないけれども、兎に角、綱島梁川の宗教的隨筆に共通した一面が確かにあつたやうに思ふ。

賤子の夫君が既に文學趣味に富み、且『女學雜誌』には島崎藤村氏らも時々寄稿してゐたので、賤子がこの方面に頭角を擡げたのは偶然でない。勿論、賤子の目的は文學を通じて、クリスト教的思想を一般に普及したいといふ上にあつたらしく、一葉女史の如く、最初から文壇に一地歩を占めやうなぞとは考へなかつた。文壇に於て知ると知られざるとは、素より賤子の問題としたところでなかつた。それ丈に賤子には淸高な俤があつて、いかにもゆかしい。

賤子の得意としたところは云ふ迄もなく、翻譯文學である。私が今日も忘れることが出來ないのは、賤子の譯文『小公子』である。『小公子』はバアネット夫人の手になつた甘い家庭小說にすぎぬ。けれども賤子の翻譯は原作の風味をよく傳へ、丸で創作を讀むやうに消化されてゐる。が、それはひとり『小公子』に留らない。『女房演說』『忘れ形見』の名譯がある。それに小說『お向ふの離れ』がある。英文集『巖本嘉志子』がある。

翻譯に於て賤子は閨秀中の二葉亭であるといつてよからう。唯二葉亭ほどの分量を譯してゐない丈のことである。近時、明治小說が多く紹介せられるが、名翻譯家賤子の業蹟が存外、閑却せられてゐるとは甚だ物足りない。當然、『若松賤子集』が出なければならぬ時代だと思ふ。若し小金井喜美子女史の翻譯を合せて收めて一冊とするならば、更に妙であらう。

明治維新と國字問題

革命的社會意識の反映としての文化的諸問題

長谷川如是閑

一

明治維新は、中世の封建國家から近代的の民族國家へ移ると同時に、立憲國家への緒を開いたもので、政治的には確に一大革命であり、さうしてそれに伴ふ政治思想の進化は顯しいものであつたが、暫らく、その政治的乃至社會的の思想内容を離れて、これをその表現形式なる言語、文字、文章といふ點から見ると、それらのものゝ革命的進轉は甚だ緩慢なものであつた。

なるほど、維新當時の言語や文章と今日のそれとを比べれば、僅か五六十年間にこれほどの變化のあつたことは、他國の歷史には珍らしいことかも知れないが、然し、維新の社會的變動それ自體が當時の言語、文字、文章等に及ぼした影響は甚だ急激であつたとはいはれない。無論、これらのものは所謂文化要素であつて、ある社會的變化の完成について新らたな形の産れるもので、維新後の數年間で、それらの新しい形を生じなかつたことは寧ろ當然のことであつたかも知れない。明治の文學が、自分の時代の新らたな内容とそれに沿ふ表現形式をとることになつたのが、漸く春の舍朧時代から始まつて、二葉亭や美妙齋紅葉山人等の初期にやゝその形をなしたので、さうなるまでには明治も三十年近くの歲月を要したのであつた。それまでは一方に幕末の文藝の形式がそのまゝ戯作者達の生活の延長と共に殘存し、他方に漢文口調と和文口調の不恰好な妥協からなる政治小說の類が生れたに過ぎなかつた。劇その他の藝術もそれと同じで——寧ろそれ以上で、明治二十年代までの劇は、殆んど維新前のそれを模倣するに止まつてゐて、默阿彌のやうな天才が出て、頻りに新しい社會事實をとり入れたが、それを古い皮袋に盛ることを免れなかつた。

維新後の思想的變化は、反之、驚くべく急激で、當時の西洋思想は、今日ロシャの思想が入り込んでゐるよりも遙かに急速に、また遙か一般的に侵入して、明治の初めより十年頃までの間に、我邦にとり入れられた西洋の思想の内容の量的にも夥しいものであつたことは、當時の凄まじい飜譯事業の嵩によつても察しられる。それらのうちには政府の國營事業としての出版の量もたいしたもので、そのうちには『百科全書』の飜譯の如うな大規模なものもあつた。しかもそれらは皆、今日のそれのやうにアカデミックな要求によつてゐるのではなく、丁度今日無産階級の間に勞働文献が要求されてゐるのと同じく、直ちに當時の社會的政治的運動に於ける指導意識として要求されたのであつた。さういふ目的のために、自づから、その表現形式の如きは第二位に置かれ、西洋の文獻を在來の漢文崩しの口調で書

き直すだけで、表現上の苦心などは顧みられなかつた。もし苦心するとすれば、福澤一派のやうに、今迄少しもさういふ文獻に親しまなかつた一般平民にも理解せしめやうとする通俗化の苦心であつた。が政治や法律やに關係する人々は大體その相手を智識階級と見て、福澤翁のやうに一般民衆を相手と考へることはなかつたから、その表現は、彼れらの激越の精神に適當する漢文口調が最も適切であると考へたのであつた。まして當時の文藝方面の人物は、皆劇作家の殘物であつたから、幕末の双紙類の言語文章を更さら眞似するのを技巧と心得てゐた位であつた。

さういふ表現上の風潮は、文藝方面の新時代の先驅者といはれる人達をも可なりに支配したのは已を得なかつた。當時の政治家が副業としての西洋小說の飜譯などは無論、彼等の草する論文に少し色をつけたやうなもので『此ノ室內ニ二人ノ相對シテ物語ルアリ其一人ハ此家ノ主人ナルベク年紀凡ソ十五歲許ニシテ其身體甚ダ肥大ナラズ又タ疲羸ナラズ軀幹身材スベテ尋常ニシテ此ノ時代ノ社會ニ行ハル、文武ノ教育ニ飽クマデ其身ヲ慣ラセシハ其身體動作ノ嚴正ニシテ弛緩ナラザルヲ以テ之ヲ知ルニ足レリ而シテ其容顏ハ眉秀テ眼淸ク眼球甚ダ大ナラサレドモ烱光ヲ放チ……』といふ風のもので、圈點などを施すのも論文そつくりであつた。がこれらは政治家の餘業として、彼等の平生馴らされた表現法を用ゐる外はないのであるが、專門の文學者の表現法についての考も、その思想內容の西洋化したのに比べれば、保守的であつた。先驅者としての逍遙先生も明治十八年に、文體論として『小說神髓』に論じて居る所によると所詮雅文體は時勢に適せず、さりとて『俗文體』—口語體——は今以前には不適當なりとして、小說の文體としては。馬琴流の『雅俗折衷體』が適當であると說て、その後長い間『雅俗折衷體』といふ言語が文章論の上で流行したのであつた。

これらの事實は、社會組織の變革に當つて、文化要素——言語文章——の制度としての保守的態度が、その變革を牽制する傾向をもつといふ一般法則を證明してゐるのである。されば、その反對に、何かの事情から、言語、文章の變化が社會の變化に伴ふ場合には、政治、學術その他一般社會の組織に於て急激な進化の起ることは事實である。バックルは十八世紀のイギリスに於て、言語、文章の急に平易化したことが、その時のイギリスの自由主義民主々義の發達に異常の影響を與へたことを說いてゐるが、それはバックルのいつてゐる通り、その言語文章の一般化によつて、それまで社會の上層の氣流たるに止まつてゐた政治的、社會的空氣が、一般民衆の間に流れ込むためであ

る。かういふ平易化は、文藝家が、貴族の保護によつて生活してゐた時代には決して行はれない、何となれば彼等はおのづから自分を保護してゐる上流者の興味に投じやうとするので、表現も貴族的となる。反之、文藝家が民衆を相手に著作生活をするやうになると、彼等の表現も民衆化する、とバツクルはいつてゐるが、徳川時代の文藝の進化もそれを證據立てゝゐる。徳川末期に民衆文藝が盛んになつたのは、同じく、貴族の保護を離れた民衆相手の著作生活が成立してからであつた。所謂劇作者の出現は、文藝の表現形式に革命的變化を與へた。この民衆相手の著作業が維新後に至つては、政治、法律の方面以外には殆んど成立しなくなつて、明治五六年頃には、劇作で生活してゐるものは、『私共數人に過ぎず』と山々亭有人――後の條野採菊――だつたか誰れだつたかゞ文部省の上申書に書いてゐたのを見たことがある。さういふ形勢の下に於ては、民衆文藝そのものは、前代の模倣に止まる外はなく、それの社會的回復は、やはり文藝家が獨立の著作生活をするにことの出來るやうになつた明治も三十年にならうとする頃のことであつた。

二

文化形式の進化は、社會組織の進化より遲れることは右にいつた通りであるが、然し、社會組織の變化が萠した時には、早くもそこに、在來の文化形式に不滿を感ずといふ意識を伴ふものである。殊に言語文章のやうなものは、民族的色彩の强いものであるから、民族的運動が萠すと、それに伴ふ言語の形式にも新らたな要求が起るものである。近代國家の運動の初期の性質は民族的であつた故に、各國に言語の獨立運動が起つた。それまで全ヨーロツパの上流を支配してゐたフランス語は、イギリスでもドイツでも、その上流社會の用語たる役目を剝奪された。莊嚴に表現はそれに限るとされたラテン語も、少しばかり儀式的に保存されるに止まつて、共通の實用的の學術語としては排斥され、哲學宗教でも何んでも――深遠なものも莊重なものも――各の國語で差支へないのみか、國語でなければならぬとなつた。かういふ事は、無論急激に行はれた譯ではないが、然し、もしさういふ民族的意識が殊に强調される時には、隨分急激に影響する譯である。我邦でも維新後さういふ意識が强調されたのは、所謂歐化主義の反動として『國粹保存』主義の起つた國民的意識勃興の時代で日清戰爭や日露戰爭の前後であつた。然し維新そのものが、封建國家に對する民族國家の運動だつたのだから、維新をもち來す運動が我邦に萠した時に、同時に言語に關する運動が起らねばならぬ筈であつた。

それは即ち本居一派の復古運動として現はれたのである。本居の學說については、今ここにそれを詳說することは出來ないが、それが一種の國語運動としても現はれたことは確かである。元來本居一派の思想は、大陸的軍國主義、即ち帝國主義の否定から出立してゐるが、本居一派をしてさういふ反帝國主義の意識を起さしめもたのは、支那の歷史であつたにせよ、その直接の動因は、我邦の封建組織であつた。されば本居は、軍國的侵略によつて成立した國家を全然否定すると同時に、それから生じた軍國道德を否定することによつて、我邦の封建道德の根柢を爲した儒敎を『聖人とは……已からその道に背きて、君をほろぼし國をうばへるものにしれば、……まことは善き人にあらず、いともいとも惡しき人なりけり』といふやうな口調で痛擊し、完膚なからしめんとした。その同じ意識は、國語の獨立となつて現はれ、さういふ『聖人の國』の言語文字たる漢語字漢を排斥して『やまと言葉』を主張した。

これは近代のイギリス人やドイツ人がラテン語やフランス語を退けたのと動機は同じだが、その効果に到つては、同じやうには行かなかつた。その理由は甚だ複雜だが、主たる原因としては本居が外國語として退けた漢語に代るべき『やまと言葉』なるものが、極端な死語であつたことを數へねばならぬ。カントは在來の哲學者がラテン語やフランス語を用ゐたのを退けてドイツ語で哲學をかいたが、それはドイツの現代語を用ゐたのであつた。その場合は國語はその現代の姿で立ち働くのだが、本居の場合の國語の囘復は、甚だしい昔の姿で現はれ來るので、それは現に使ひ馴れてゐる漢語口調の言語よりも『外國語』なのであつた。

『古記典等總論』と書けばそのまゝ當時の日本人に通用するが、本居はそれを『イニシヘブミドモノスベテノサダ』と發音させて、日本語を取り戾したと主張するのであつた。然し、日本人にも、イニシヘブミ云々よりも古記典等總論といつた方がよく通じて、直ちに內容が推定される。『性質情狀』といへばわかるが、本居はそれを『アルカタ』とよみ直して、日本語だと主張するのだが、『アルカタ』といふ發音をきいて、『性質情狀』と合點する日本人は何時のよにもあり相にもない。

さういふ難局は、漢語と日本語との特殊の關係によることであるが、本居がそれらの事情を顧みずに國語の獨立を主張したのはたとへそれが不可能であらうとも、とにかく在來の表現形式が、在來の社會組織と離るべからさる關係で成立してゐるといふ事實から、在來の組織を否定すれば、それと結びついてゐる表現形式を否定するのは已むを得ないのである。所謂『坊主



□體裁 …百頁

□頒布方法　全部三十七卷。豫約申込者にのみ頒つ。締切期日迄に御申込み下さい。

□刊行期日　大正十五年十二月第一卷を刊行し、爾後第十二卷迄は毎月一册づゝ、第十三卷より第三十六卷迄は毎月二册づゝを刊行し、第三十七卷（最終）は大正十七年十二月配本して完成す。

□申込　先づ御申込みの際申込金として金壹圓を御送り下さい。これは最後の月の會費にあてるのでありますから。最初の月の會費は別に御拂込を願ひます。尚申込金は中途御解約の方へは御拂戻し致しません。（前金一時拂の方は申込金を要しません）

□會費　（一）毎月拂壹册に付　壹圓（毎月五日迄にお拂込み下さい）
（二）全　拂（卅七册）　三十四圓（特製は壹册に付並製の四十錢増）

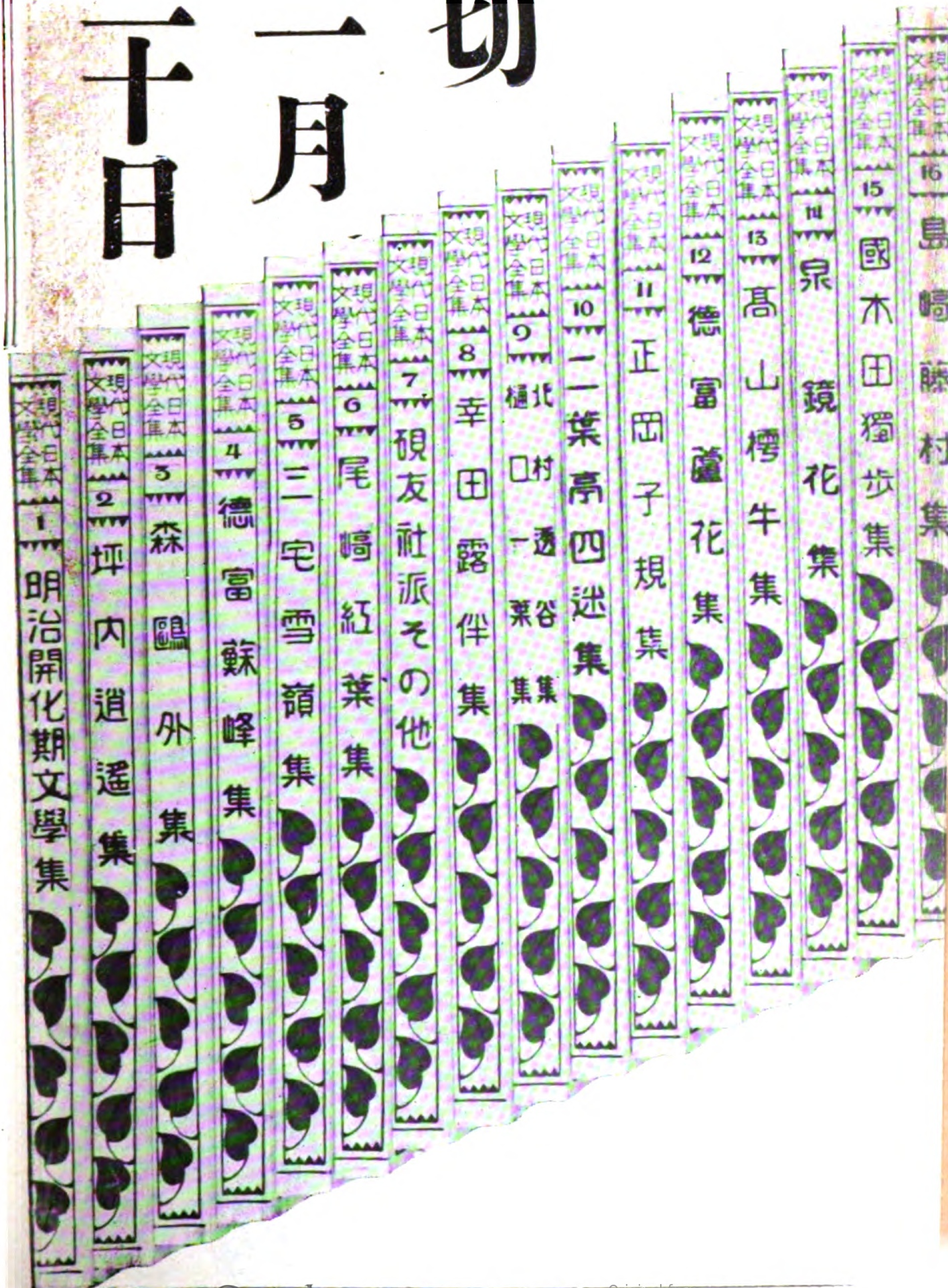
□送本料　會費の外に左の送本料を申受けます。
並製壹册に付十錢。特製壹册に付十四錢。尚書留送附を希望せらるゝ向は別に書留料十錢を御增し下さい。

申込所　東京芝區愛宕下町　振替東京八四〇二　改造社

（裏面を見られよ）

（下圖は本全集の全容）

締切 十一月三十日



が惡くければ褻瀆まで』である。そこに本居の運動の意義がある。本居は日本人の言語をやまと言葉にすることは出來なかつたが、漢語を否定することによつて、大陸的帝國主義を摸倣したわが封建國家の組織を否定する意識を昂奮せしめることを得た。

本居の國語運動は維新の革命の先驅として起つたものであつたが、然らば、維新の革命が完成した頃に、その國語の運動はどんな風に結果をつけられたか。

維新後のわが文化形式は、傳來の、支那的性質に基づくものの排斥となつたが、國語の方面に於ては無論直ちに古語の『復活』となつては現はれなかつた。古語の復活といふことは言語の歴史では殆んどあり得べからざる事で、精々現にある古い形式の保存である。國粹保存時代に、擬古文が國學の專門家の間に『復活』したが當時に『保存』された漢文口調ほども普及するに至らなかつた。まして維新當時は、文化的には全く飜譯時代であつたから、外國語を飜譯するに適した言葉が、最も痛切に要求されたのであつたが、それと同時に、十八世紀のイギリスと同じく、言語文章の一般的となることが要求されたのであつた。維新の革命は全く政治階級の政治革命で決して民衆の革命ではなかつたが、封建制度の崩壞は、市民階級の擡頭となるべき順序で、しかもわが市民階級は、封建時代に於ては全く非文化階級として文化圏から排除されてゐたもの故、その階級の勃興が要求される場合には、先づ文化がその階級にまで引下げられねばならぬ。そのことは維新の先覺者が何れも痛切に氣付いてゐたことである。

在來の漢文は、外國語の飜譯に於ては甚だしく不自由であると共に、今日も問題となつてゐる通り、文字の普及といふ點からいつても、象形文字の性質上、時代錯誤の甚しいものである。本居は、漢字をその思想內容を産んだ社會組織の上から排斥したが、いひかへれば、漢字の內藏する思想系統を排斥するためにその字形をも排斥したのだが、維新後の日本は、漢字の思想系統よりは、その形式上の困難を問題とせねばならなかつた。一つはその思想表現上の困難と、一つは、普及上の困難とであつた。

そこで、以前は『國語』の問題だつたものが、維新後當然に『國字』の問題として現はれねばならぬ理由がある。

そこで起つたのが即ち今日まで依然として繼續されてゐる國字問題であるが、その內容も今日の通り、ローマ字說と漢字制限說とであつた。それは早くも維新の當時に起つたことであるが、其後英語說なども起つたといふことをもつても、本居運動

の殿軍が如何に過激化してゐたかを察することが出來る。が中心はやはりローマ字說と假名說とであつた。それを最も具體的に主張したのは、當時の我邦の最高智識階級の團體であつた森有禮を中心とした『明六雜誌』の明六社の人々であつた。

明六社は、森有禮が西周、西村茂樹、中村正直、箕作秋坪、同祥、福澤諭吉、杉亨二、加藤弘之、津田眞道其他の諸氏と共に設立したもので、明六雜誌はその機關だが、その創刊號の冒頭で、西周氏は『洋字ヲモツテ國語ヲ書スルノ論』と題してローマ字說を主張し、その第七號で淸水卯三郎氏は『平假名ノ說』を題して假名說を主張してゐる。西氏も淸水氏も共に幕末の蘭學者で、政治外交の經驗を有し何れも佛國に遊學し、殊に西氏は、ナポレオン三世が幕府に軍需品や軍艦等を貸さんことを申出た當時フランスに居て、猛烈にそれに反對してその相談をぶち壞した見識家であり、淸水氏は、巴里の大博覽會に始めて工藝品を出品して銀牌を得たりした科學方面にも秀た人で、日本に始めて石版術や西洋花火や齒科醫術を輸入した人であつた。かういふ人達の主張は議論は淺薄でも、その實際的の底力をもつたもので、維新當時の革命的事業は、皆かういふ人々のその議論に於てゞなく、その底力をもつて爲し遂げられたのであつた。ローマ字說も假名說も、本居の古語說と同じく、その議論の裏面に潜在する衝動と意識とに於て値打をもつものであつた。

西氏の論は、自から『奇々怪々の一案』と稱してゐるが、これは洋字で國語を表はすといふことを實行的に主張するのは流石に當時にあつても突飛と考へられたのであらう。無論西氏の論は云ひ現はし方と研究法とは簡單で幼稚ではある點で無論今日のローマ字論者のそれとは比べものにならぬが、開拓者として、その議論の輪廓だけは十分に示してゐるのであつた。

氏は、漢字制限說は、歐州で、現在語の外にラテン、ギリシヤ、ヘブライ、サンスクリツトを學びつゝあるのに、漢字を制限して學ばんとするが如きは小量であると一語で退け、和字(カナ)說は『子母音相合す其不便焉より大なるはなし』と退け洋字を用ゐるの利益十箇條を列擧してゐる。第一には『此法行はれなば本邦の語學立つ』第二には、國語に通じて後に各國語に入れば『語種の外、語音の變等既に國語に於て之に通ずれば、國語は唯記性を勞する耳』第三には『言ふ所書く所と其法を同うす、以て書くべし以て言ふべし』第四には『アベセ二十六字を知り苟も綴字の法と呼法とを學べば兒女も亦男子の書をよみ鄙夫も君子の書を讀み且自から其意見を書くを得べし』第五の利は、洋算法に一致することであり第六には外人の日本語の綴字

法が肯綮を得ないからそれを助ける。第七は飜譯の便。第八は外國の印刷に關する機械がそのまゝ使へる。第九外國の術語や固有名詞は强て譯字をつくらずとそのまゝ用ゐられる。第十の利は『此法果して立たば凡そ歐州の萬事悉く我の有となる。自國行所の文字を廢し他國の長を取る是瑣々服裝を變ふるの比にあらざれば、我國人民の性能善に從ふ流るゝが如きの美をもつて世界に誇り傾る彼の膽を寒やすに足らん』といふので、今日の外來思想防禦論の裏をかいてゐるところが痛快である。さうして更らに、ローマ字に三害ありといつてそれを擧げ且つそれを破つてゐる。一は『筆墨其業を失ふ』然しこれは急激に行ふ譯でないからそのうちに轉業をすればいゝ。二の害は『紙の製改めざるべからず。』がこれは洋紙製造會社が近く出來るからいゝ。三の害は諸學者や國學者流が失職の虞があるので厭ひ嫉むことである。がかういふ連中も西洋のラテン學者のやうになつて生活して行けばいゝ。

西氏の考ではローマ字の遭遇する一つの困難は、日本の文體が語法と異ることゝ、文體のうちにも『漢語法』と『和語法』とあり、更らに俗語を主張するものがあつて抗爭することで、さうするとローマ字が何れの語法を採るべきかについて議論が定まらない。そこで氏は、英語その他の洋語のやうに『綴字（スペルリング）の法と呼法（フロナンシエシウン）の法とを立て以てこれを和せしむ。』といつて、その例をあげてゐるが、それは大體左の如きものである。

イカサマ　オモシロシ
ikasama　omosirosi
イカサマ　オモシロ・イ

コレハ　ヨロシ
korewa　yorosisi
コレハ　ヨロシ・イ

キタイナル　ヒト
kitai-naru　hito
キタイ　ナ・・　ヒト

即ち『・』印の字を發音しないことにすれば、同字で雅俗兩樣に使へるといふのである。又『ゴザル』とか『申ス』とい日常語と異る言葉は成るべく使用しないやうにして、自由語と文字の一致をはかれといふのである。そしてローマ字實行の『次序』なるものを次の如く定めてゐる。

第一　アベセ字と我が邦音と配當して之を定む。
第二　我音に四聲の別あり、其法を定む。
第三　語の性質を定めて數種とす。
第四　語に前天と後天との別あり之を定む。

第五　綴方の法を定む。
第六　呼法を定む。
第七　屈曲の法を定む。
第八　働字の法幷に時を定む。
第九　漢字の音を用ゆる法を定む。
第十　洋語を用ふる法を定む。

その內容は明瞭でないが說明は施されてゐない。

　この西氏の『奇々怪々の一案』に對して西村茂樹氏が批評を下してゐるが、『其論說痛快精到少しも遺憾なし果して此言の如くなるを得ば實に文運の大進步にして吾輩操觚者の最も愉快とする處なり。』といつてゐた。たゞ實行上の不利について西氏の三害は未だ盡くさずとして、更らにローマ字の不利を擧げてゐるが、その一は、同音の語を區別することの出來ないこと、第二は漢字廢止は、漢字渡來以前の邦字―さういふものがあつたとして――の廢止よりも（文化的關係が深くなつてゐるので）一層困難なる事、第三はローマ字になると『二千年間の和漢の事跡は曖昧なる事暗夜の如く』たとへそれをローマ字に飜譯するものがあつても要するに二座の勞を免れない云々。然るに驚くべきことには、此老漢學者は、かくの如き不利は、『我國の民に對して之を云ふ者あり文化開化の民よりして之れ言へば此三不利一も不利とするに足る者なし』といつて、目下の急務は國民漢學、洋學の差別なく、國民をして一人も多く學問に志さゝしむるにあり『已に學問に志すときは身から本朝文字言語の容雑多きことを知る、已に之を知れば必ず之を改めんとするの念を生ずべし』と喝破してあることである。

　西氏はローマ字實行の端緒として結社を作つて天下の人材を網羅し『方法よろしきを得ば、サイエンス者アーツなりリテラチユアなりモラルなり、大略一致せざることとなりならして……我文明の凱歌を奏するに至らん』といつてゐるが、西村翁も、それに贊して、その『學術文藝の會社』の組織まで論じてゐる。

　このローマ字說に對して淸水卯三郎氏の『平假名の說』は、漢字の困難については、ローマ字論者と同一だが、洋字を以てこれに代へんとするは新字を作りなどするよりもいゝが、各國皆自國の文字文章を用ゐるに、日本だけ『我邦獨立を他邦に取る者は何ぞ蓋慣習癖の自から改む可らざると愛國心の最も足らざるとに因る』といつてゐるので、その理由甚だ曖昧で、到底西先生の徹底的なものに及ばない然し氏は『讀易く、解り易く言語一樣（口語體の意）の文章を記して以て天下に籍き民の智識を進ましむる者は固り學者教師の任なり然るに之を捨て其の習ふ所に慣れ奇字新語を挿んで以て誇る者は大に其職を怠る者な

り、謹んで顧みずんばあるべからさるなり。』といつて、自から『舍密の階』といふ化學書を平假名で譯述してゐるのはやはり實行的の人物である。

これらの先覺の國字に關する革命的意見は、その裏面に存在する當時の社會的變化に、これらの先覺が組織的に順應しやうとしたもので値打はその態度にある。故にこれらの議論はその內容がどうあらうとも、その人々の社會的態度を表示すると同時に、當時の日本の社會の急激な進化をもち來した社會心理的事實を說明してゐる事柄として重大なのである。

三

然し、これらのローマ字說や假名說の欠陥は、彼等自身がもつと根本的の問題として認めてゐる『書語と口語との不同』を如何にするかについて具體的の見地のなかつたことである。

ところでその重大なる欠陥を充たす學說が當時一個の青年によつて唱へられたのは、ローマ字說や假名說が、堂々たる老政治家の口から出たのと對照して面白ろい事實である。敬宇中村正直先生の同人社から出た『同人社文學雜誌』の第八號に同人社の學生で二十四才で夭折した和田文といふ人の遺稿が揭げられてゐるが、それが『書語口語同ジキヲ欲スルノ說』と題する口語體の主張であつた。私はこの無名の小青年を紀念する意味でその論の大部分を左に抄用することを許して貰ひたい。

『我ガ日本ニ於テ書語口語ノ同ジカラザルハ古來ヨリノ慣習ニセヨ、近時ニ至リテノ發起ニモセヨ、最早之ヲ今日ニ改タメザル可カラズ、良ヤ之ヲ一定ニ歸セシメ得ルコト歲月ノ久シキヲ要セザルヲ得ザルモ、成丈書語ハ言語ニ簡易キヲ維シ口語ハ書語ニ維シ易キヲ演ブレバ現時ノ如ク一事一物ニ就テ書言相反スルノ不都合ハ、漸次已ムニ庶幾カランカ。然リト雖モ、今此不都合ヲ改メント欲スルニ當リ、先ヅ其實因實果ヲ觀察セザレバ恐ラクバ實際ニ適スベキ完全ノ書語口語ニ改メント欲スルトモ得可カラザラン。故ニ我ガ日本ノ書言二語ハ其實因ヲ何々ニ發センカ、其實因ヲ觀、現近ニ降リテ、其實果ヲ察セザルベカラズ。觀想スルニ此ノ書口二語ハ漢學未ダ舶來セザルノ時代ニ際シテハ、彼此相反スルノ不都合ハ有セザリシト雖モ、和學ハ至ッテ不充分ノ有樣ナリシが、人皇第十六代應神天皇ノ時、百濟國ノ漢學者王仁來リテ、論語ヲ獻ジ、且皇子稚郎子ノ侍讀トナレリ、而シテ先キニ和學ニ從事セシ志士學者ハ爭テ漢學ヲ學ブ事ヲ志ザシ、之ヲ大ハ政治上ヨリ、小ハ一身上に活使シ、以テ文敎日ニ益々盛ンニ、月ニ愈々明ラカナルヲ至ラシメタルト雖ドモ、如何セン我ガ日本ノ慣習タルヤ學事ハ上等社會ニノミ行ナハル、ヲ以テ、其書語ハ日用常語ニ活使シ難ク遂ニ書口各相反スルノ不都合トハナレリ、是レ我ガ日本ニ漢學ノ輸入セシ始メニシテ書語口語ニ變革ヲ起セシ第一紀元ナリ、降リテ安政年間ニ至リ、港市ヲ開キ、外交ヲ通ゼショリ、俄然トシテ志士學者ハ漢ヲ轉ジ和ヲ變ジ、一途ニ英書ヲ學ブ事ヲ志ザセリ、而シテ爾來今日ニ至ルマデ之ヲ大ハ政治上ヨリ小ハ一身上ニ活使シ、以テ文敎日ニ月ニ昌

ンニナラシメタリ、之ヲ彼ノ漢學ノ始メヲ輸入セシ時ニ比スレバ、大ニ其趣キヲ異ニセリ、何トナレバ、彼ハ書語口語ヲシテ、益々相双セシメ、此レハ書語口語ヲシテ愈々相同ジカラシメタルニ非ラズヤ、是レ我ガ日本ノ書口二語ニ變革ヲ起セシ第二紀元ナリ、是ニ由テ之ヲ觀ルニ、現今我が日本ノ書口ノ二語ハ、和一變シテ漢ト混ジ、和漢再變シテ英ト混ジ、以テ此ノ和漢英ノ三體ノ雜駁書言ヲ成セリ、而シテ口語ニ書語ヲ雜ユルハ上等社會ニ限リ、下等社會ニ至リテハ、昔ヨリ云ヒ傳ヘ、話シ來リシ俗語ナリ、(瑣少變化ハアルニモセヨ、)是レ上等社會ト下等社會ノ間ニ常ニ言語ノ相異ナル所以ナリ、吾徒之ヲ聞ク、文明ヲ以テ世ノ木鐸ト爲ル英佛ニシテ亦都鄙ノ間ニ於テ其言語自ヅカラ相同ジキヲ得ズト、……世ノ論者云フ、漢字廢ス可シト、或ハ云フ、英ノ文法ニ倣フテ假名字而已ヲ用ユ可シト、此論可ナリ簡ナリト雖モ未ダ之ヲ現今ニ行フ可カラズ、故ニ吾徒現今ニ於テ書口二語相同ジキヲ欲シテ、古往ノ貴因ト、近來ノ實果トノ二者ヲ照考スレバ、和漢英三體ヲ併セ用ヰザルヲ得ズ、而シテ我ガ日本固有ノ書語ヨリ漢英二語ニ至ルマデ、専ラ日用ニ適スルモノヲ撰ミ、成文書語ハ、口語ニ演ベ易キヲ筆シ、口語ハ書語ニ筆シ易キヲ演ベ、以テ漸次ニ書言相反スルノ不都合ヲ改タメントス、聖人曰ク辭達シテ已ムト、古今ノ形勢ニテハ書語ノミニテハ筆シ盡サズ、口語ノミニテハ辯ジ足ラズ、若シ夫レ書語ト口語ト次第ニ相近クルヤウニ務メ、果シテ能ク西洋ノ如ク、書語口語合併シテ一トナル時ニ至ラバ、コノ時ヲ以テ我ハ文明境地ノ門ニ入ルヲ得ル時ト曰ント欲ス』

此一青年ノ豫言ノ通リ、我邦ガ『文明境地の門に入』つた今日は書語口語が大に接近し、少くとも一般の文章は口語體となつてゐる。

此の青年を世に紹介した『同人社文學雜誌』の第三號には、後に外務省の支那通で聽へた中島雄氏の『文字改革論ノ未ダ卒カニ行フベカラザルヲ論ズ』といふ題の漢字廢止反對論が載つてゐたのである。それは今日も唱へられてゐる漢字保存說と同じやうな論旨だが、同人社の塾長敬宇先生は、その一文を評して『この說は書生連中に適當するものにして、素人物體には宛てはまらぬなり、素人物體の開化を進むるには成る丈學問を手易くさせざるべからず、學問を手易くするには、行々は日本假名文字にて事足るやうにしたきものなり、』云々といつてゐる。やはりこの洋漢學の大家も決して時代意識を失つてはゐないのである。

四

一般民衆の生活を離れた階級的意識に反對する社會的意識が、當時の政界學界の大先輩達の心理に行渡つてゐた事實は、今日の政界や學界の大家が、見事に社會的意識を失つて、階級意識に逆轉してゐる事實と比べて實に悲痛な對照をなしてゐるといはねばならぬ。私の高調したいのは、此の對照的事實である。

明治維新は、中世史から近代史に轉ずる過程であつたが、近

代史の特徴は、軍國的生活意識が、社會的生活意識によつて取つて代はられた點にある、以上のやうな國字問題の急激な勃興は即ち、生活上の轉化に應ずる言語の轉化をもち來さうとする切實の運動だつたのである。即ち階級生活の生んだ言語から社會生活の言語に移らんとするものであるが、論者の各が、何程かの程度でその事を高調してゐるのは、誠に驚くべき意識的態度といはねばならぬ。現今の社會の先輩に、これほどの現代的意識をもつてゐるものがあるだらうか。殊に當時の實際政治が、西洋の劃時代的思想——何等かの意味で革命的の思想——を直輸入して、直ちにそれを彼等自身の社會的乃至政治的行動の指導意識とした點である。幕末の儒者で自由黨の先輩であつた土居光華が始めてバツクルの『英國文明史』を讀んだ時の感じを、自から飜譯した同書の序文に述べてゐるが、よく當時の時代人の意識——軍國階級的意識から市民階級的意識へと轉じた——を表現してゐる點で興味がある。そのいふ所によると、自分は幼少から春秋史記等の支那の歴史は勿論、大日本史その他の日本歴史を大略通讀したが、鴻門の會だとか川中島の戰だとか博徒が競馬場で家産妻兒を賭して勝負を爭ふやうなもので、面白ろいことは面白ろいが、更に之が爲めに何等の利益を我身に附與せられ亦之を以て將來何等の作用に充つべきを覺へず』『余は此の如き歴史の無用無益なるを覺知し、之を讀むを屑とせず』して、西洋の歴史を讀んだが、やはり、ナポレオンがロシヤを討つたとか、ネルソンやウエリントンがこんなことをしたとか全く支那や日本の歴史と同じことを記した記錄に外ならないことを發見して『余は大に失望の嘆を發した』がバツクルの文明史を讀むに至つて、『之を前者の諸史に比すれば殆んど暗夜を度りて白晝に入るが如し、其快實にいふべからざるものなり』といつて喜んでゐる。

當時は漢學者でさへも、人間の歴史とは、生活する階級のそれであらねばならぬ、戰爭する階級の歴史の如きは『無用無益なるを覺知し之を讀むを屑と』しなかつたのである。今日の學者政治家の何人がこれほど確かな社會意識に眼覺めてゐるだらうか。彼等の歴史は依然として戰爭する階級とそれに共同する階級との歴史ではないか。

これらの事實は皆明治の始めから十年前後までの事實である。今日の社會的大先輩大政治家大學者等の意識は、當時の人々のそれに比べると、『白晝を度りて暗夜に入るが如し』である。國字も歴史も、依然として支那人の所謂『呉下の舊阿蒙』といふやうな古臭い『昔語』でいひ現はすに適した狀態であるのは當然である。

明治文學の回顧

阿部次郎

一

獨逸語に Orientierung（オリエンティールング）といふ言葉がある。位置方向を定めるといふ意味である。山川地理の世界に於いても、思想精神の問題に就いても、或る一つの境域を捜るためには、これに對するオリエンティールングが正しきを得なければならぬ。**これが定まらなければ、その世界にあらはれて來る個々の都邑や、山**樣水態や、人物や、作品や、業績の意義を、全體との關係に於いて正當に認識することは六かしいからである。日本の文壇で批評がいつも不振と云はれてゐるのには樣々の理由があり得るが、批評家が現代文學に對して自分自身のオリエンティールングを作り出さうとする努力を怠り、そのための研究と準備とを整へて、それから評壇に乘出すべき義務を誠實に考へてゐないのも、その重大な原因と云はなければならぬ。併し問題が現代に近づけば近づくほど、吾々の限界は目前に立塞る事物に掩はれて、正當なオリエンティールングを發見しにくい。廣い眼界と、明敏な頭腦と、包容と同感との心豐かな人が出て來て、明治大正文學の研究に、長い時間と誠實な努力とを捧げてくれることは、日本文學の將來に於ける發展と進歩とにとつて極めて望ましい仕事である。**固よりこの仕事は氣輕に考へることが出來るほど容易な事でもなく、素質と素養と根氣との三拍子が揃**つてゐなければ、勞して效の少い結果を招ぐに過ぎないであらう。併しそれだけに、この仕事に堪へる人で而もこの仕事に興味を持つ人を發見することは、益々望ましくなつて來るのである。

私がこの漫錄によつて企てようとするのは、固よりこの仕事に對して小さい雛形を提供しようとするのではない。假令豆粒ほどの見本であつても、出鱈目の主觀的構成ではなくて歷史的眞實を含むものを作製しようとすれば、隨分多量の讀書と深刻な思索とを經て來なければならぬ。自分には到底それをしてゐる

る餘裕が與へられてゐないのである。併し身を以て明治文學に接觸して來た一人として、自分の受けて來た感化影響を物語ることは比較的樂な仕事であらう。この接觸は、偶然で、主觀的で、オリエンテイールングのたしになるやうなものでないことは固より云ふまでもないが、それでもそれを發見しようとする興味を刺戟する微少の効果があるまいものでもない。——このやうな希望が、見出しのやうな山本君の出題を、ついうか／＼と引受けさせることになつてしまつた。

ところがやり出して見ると、これも亦樂にやれる仕事ではないことがわかつて來た。一人一人の先輩が自分に與へた感化影響を綜合的に考へ定めるためには、幼年少年青年の時代を通じて私自身の生活の自叙傳的聯絡を、背景として頭の中に略描して置く必要がある。そのためにほこりだらけになつてゐる明治時代の日記をひつぱり出して拾ひ讀みしてゐるうちに、自分の興味は危く自叙傳そのものを書く方に誘惑されさうになつて來た。この場合そんな時間潰しの道樂を始めては大變なことになるから、今度はその時々面白いと思つて讀んだもの丶話を飛び／＼に素描して行く方針をとらうとしたが、さうすると昔愛讀した本が弟から弟へと傳はつてゐる間に九分通り散佚してしまつて、それをちよい／＼讀みかへして見る便宜がすつかり失はれてゐる。結局又すつぽかしてしまひたくなつたが、それでは二三日中に原稿が屆くつもりで待つてゐる上村君が困るだらう。今行きあたりばつたりに筆をとるのは、澤市のせりふに云ふ「まゝよ、天ぼの皮、やつてのきよう」ぐらゐのところである。原文の引用を缺く印象記は、對話の部分を缺く叙事小說のやうなもので、これを面白く讀ませることは、自分のやうな腕前では全く覺束ない話である。

二

最初に私が明治文學の影響を受け始めた場處と時とを云つて置く。場處は山形縣莊內である。鶴岡に六里、酒田に三里、最上河の岸で、月山と鳥海山とを南北に仰ぐ山寺といふ百姓の村である。その當時汽車に乘るには何處まで出たものか、ついぞ父にもきいたことがないが、多分仙臺まで（今汽車で七時間ばかりかゝる仙臺まで）出なければならなかつたのだらうと思ふ。從つて一體に東京の文明をパースペクテイヴを歪めずに受取るには最も不適當な位置に立つてゐたことは、最初から記憶して置かなければならぬ。時は明治廿七八年頃、丁度日清戰爭の時代が、私の高等二三年（今の尋常六年及びその卒業）の時代で、當時の文明に對する意識的な反應を幼稚な書き物の上に

遺し始めた頃に當るのである。當時自分が時代の影響を受取る途は、第一に、父から買つてあてがはれる書物雜誌、第二に、小學校の先生の談話教訓、第三に、父の本箱の中から搜し出した大人の本であつた。父の本箱からは、四書のやうな漢籍の外に、井上圓了先生の哲學や佛教に關する本と、古い國民の友とをとり出して讀んだ。この三つとも今に至るまで自分に影響を殘してゐるが、當時最も新しいものとして自分に刺戟を與へたのは最後のものであつた。今でも鄕里の家の座敷の雨戸の戸袋には、「願くは眞面目なれ」と筆で書いた私の落書が殘つてゐるが、あれは多分國民之友にあつた短い論文の見出しであつたと思ふ。小說らしい小說の最初の面白味は、國民之友の附錄として發行された（或ひは朝野新聞の附錄であつたかも知れぬ）靑表紙の小冊子のうちにある Wilkie Collins の飜譯であつた。その後今日に至るまでこの人の小說を一冊も讀んだことがないので、それが The Woman in White であつたか Moonstone であつたか、若くは The Black Robe であつたかはわからないが、兎に角寂しい森の中を流れる河をすべつて一人船を漕いで行く少女の姿がその後も長く私の心の中に殘つてゐて、高等學校時代に至るまであの先を（譯文は未完であつた）讀みたいといふ氣が絕えなかつた。それが果されなかつたのは、どういふ譯か彼の小說を手に入れる機會につひぞ出逢はなかつたからである。

小學校では何よりも西鄕南洲の「遺訓」の影響を受けた。一體に莊內は大西鄕と特別な關係のある地方である。最後に至るまで忠實な佐幕黨として一貫した莊內藩は、大西鄕等を將とする薩藩の兵を受けて戰つた。其結果遂に降服して和議を結んだが、その際に於ける南洲の態度の美しさが莊內人に深い印象を殘したらしい。これはずつと後に或老政治家にきいた話であるが、莊內が降服して間もなく、猪衍川口に屯營して警戒を加へてゐた薩軍の諸將が一夜焚火をしてあたつてゐると、西鄕はのそりと其處に出て來て、「俺はもう江戸へ歸るぜ」と云つたさうだ。そのとき其處にゐる連中は、莊內が降服したと云つてもまだ〱何時返り討にやつて來るか知れない、今引上げるのは時を得ないと云つてとめたさうだ。併し西鄕はきかなかつた。「男が一度降參したと云つたらもうそんな卑怯な眞似をする筈がない、江戸へ歸れば仕事が山ほどある、こんなところに愚圖愚圖してゐられるものか」と云つて引上げてしまつたさうだ。かういふやうな態度が深く莊內人の心を捉へたのであらう、西南戰爭の時には、西鄕がもう少し持ちこたへてゐれば、莊內もこれに應じて兵を擧げる手筈になつてゐたとは、故老の話に傳へ

られるところである。南洲崇拜の風は私の小學校時代にはまだ明かに殘つてゐた。さうして高等三年の受持であつた赤澤先生といふ情熱家が吾々にこの血を流し込んだ。彼の敬天愛人の理想が恐らくは私の經驗した最初の倫理的情熱であつた。さうして私は小學校の上級でこの情熱を鼓吹されたことを、今でも非常な幸福として感謝してゐる。當時の雜記帳には不思議に政治上の興味が多く、「西園寺文部大臣の教育意見を評す」といふやうな生意氣な標題を殘してゐるのも、恐らくは大西鄉の感化の戲畫である。

併し父に買つて與へられた書物からは、大西鄉の英雄主義とは頗る方面を異にする多淚多感の影響を受けた。父は落合直文小中村（後の池邊）義家氏共著の「歷史讀本」を、出るに從つて吾々に買つて與へられたが、父の後を慕つて佐渡に渡る阿新丸の話、俊寬をたづねて態々鬼界ケ島に赴く有王の話などを、本當に淚をぽた〳〵こぼしながら幾度も繰返して讀んだことは、今でもあり〳〵と想起することが出來る。併し私がこの書物から受取つたものは、たゞ歷史上の人物に對する同感のみではなかつた。當時の言葉でいふ和文の中を脈々として流れてゐる物の哀れが――蟲の聲、風の音、澄渡る月、千草の露などに對する淚脆い感動が、この時以來長く私の心に拔くべからざる根を卸した。固よりこのやうな感じ方は私の生活を潤す情感のしめり氣となつただけではなかつた。それは又弱さと脆さと女らしさとして私を惱す方面を持つてゐた。併し全體から見て、小學校時代から日本文學の傳統的感情を注ぎ込まれて來たことは、私にとつて決して不幸な事件とは云へないであらう。

三

二十九年莊內中學に入學してから以來中學時代に讀んだ書物や雜誌は、當時の日記から拾ひ出せば相應に詳しい年表が出來るほどであるが、今は固よりそんなことをしてゐるべき時期ではない。雜誌に就いて云へば、小學校で讀んでゐたものは小國民と幼年雜誌であつたが、中學に入ると共に、それが少年文集と文庫とに代つた。中學では宮本和吉早田熊（この二人の忘れ難い友人の名を擧げることを許して貰はう）などといふ讀書仲間があつたので、自分で買へないものも交換して澤山讀むことが出來たせいもあらう、二年から三年にかけては、中學新誌新聲太陽（これは父がとつてゐたので小學校時代の初號から暫く讀んだことがあうたが）世界の日本帝國文學早稻田文學日本主義から哲學雜誌までそれに加つて來た。そのうちで感化の多かつたものは、最初のうちは文庫に出て來る美文と新體詩であつ

た。それは私の熱心な愛誦の對象となつたばかりではなく、又私の制作衝動を刺戟し、私の制作の樣式をも規定した。その後愛好は當時の帝國文學に於ける所謂三大美文家鹽井雨江武島羽衣大町桂月の三氏に移つたがこの場合には模倣を刺戟されることが割合に少かつたらしい。思想の方面では最初最も多く德富蘇峰氏のものを讀んだ。そのうち今記憶に殘つてゐるのは「京都の花は縱に散り東京の花は横に散る」といふやうな警句風のものだけで、とりとめて深い印象を刻まれた文章は想起し得ないが、私の世界主義的な考へ方が、內村鑑三先生の「警世雜著」その他の諸書によつて植ゑ込まれる前に、既に蘇峰氏の文章を通して培はれてゐたことは爭へないやうに思ふ。この豫め培れてゐた傾向（テンスポジシヨン）は、明治三十年ころ高山樗牛氏が日本主義に加担した當時の私の態度にあらはれてゐる。當時の一中學生であつた私の日記には、蟷螂の斧を揮つて、頻りに氏の日本主義に對する論難を試みてゐるのである。併し同鄕の先輩としてこの人はいつでも私の頭の中に特別の位置を占めてゐた。今度中學二年時代の日記を讀みかへしながら、夢に樗牛と逢つた話をその中に發見したとき、私は思はず微笑せずにはゐられなかつた。その他今から顧みて興味があるのは、その頃民友社の十二文豪中にある某氏の「ゲーテ」を讀んで、恐らくは特に感銘した言葉らしく、「如何なる時にも良心はこれ不利益なり」といふ文句を二三回繰返して引用してゐることである。

併し中學二年の末から、山形中學に轉校した三年の初にかけて、私の前には、もつと奧から自分の魂に作用し、もつと私に永續する影響を與へた一群の人達があらはれて來た。內村鑑三、樋口一葉、森鷗外、島崎藤村などの名が、特別の親しみを帶びて考へられるやうになつたのはこの時である。當時の內村先生は今のやうに深く狹く聖書の研究に籠らうとせずに、社會萬般のことについて活潑な評論を試み、自然と歷史との一切を通じて先生の見た神を傳へようとしてゐられる時代であつた。私の若い心は先生の清新な文章と廣い視野とによつて數知れぬ未知の世界に對する愛を喚び醒された。私一個の場合には、それは特に和文的センチメンタリズムの臭氣を洗滌する力として役立つた。固より一方に於いて、私は一葉女史の「たけくらべ」や「濁り江」の主人公に多感な淚を灑ぐ少年であり、特にその「うつせみ」が比較的世評に上らぬことを遺憾として中學四五年の頃に態々これを推奬する評論を書かうとしたほど兒女の氣に充ちた泣蟲であつた。併し女史の作品には和文的センチメンタリズムとは異れる清新な深さがある。この清新な深さに同感するところに當時の私の――さうして恐らくは一般に日本文

學の――進歩があつたことは爭はれないと思ふ。私が最初に一葉全集を買つたのは明治三十年であるが、丁度その頃私は又太陽の臨時增刊で鷗外先生の譯された「埋木」を讀んだ。一體にあの臨時增刊は私にとつて忘れ難い讀物で、當時の日記には坪內先生の「當世書生氣質」に對する少年らしい同感と、二葉亭主人の「浮雲」のリアリズムに對する驚きとを可なり詳かに書いてゐるが、就中私の少年の夢を動かして何時までも記憶から拭ひ去ることの出來ない人生の姿を刻み込んだものは「埋木」であつた。アンネツトやゲザの姿の忘れ難さに、私は彼等を主人公として數篇の抒情小曲を作つたことを記憶してゐる。後に山形で友人から水沫集を借りて讀んだとき、私は「埋木」について「舞姫」を集中の白眉に加へた。埋木や舞姫がクライストやレツシング以上に深い印象を與へたことは、當時の私の趣味がまだどれほどセンチメンタリズムに囚へられてゐたかを物語るものであるが、此處にも從來の文學に比して淸新な深さが際立つてゐることを思へば、文庫愛讀時代が趣味として旣に遙かな隔りを持つてゐるといふことだけは許されるであらう。

四

日記によれば私は明治三十一年の春に莊內中學にゐて島崎さんの「若菜集」を讀んでゐるが、これは多分誰かの持つてゐたのを借覽したのであらう。山形に轉じてから古本屋でこれを發見して自分で買ひ取つたときの喜びは、今でもはつきりおぼえてゐるからである。それから落梅集夏草等の詩集を經て、大學在學當時帝國文學に「破戒」の短評を書くときまでの間、私はずつと引續いてこの人の作品の尊崇者であり、熱心な愛讀者であつた。

一體に吾々の讀書には二つの時期がある。一つは作品を自分自身の內生の代表者として、而も亦自分以上にゐて自分を引上げてくれる恩人として、全然傾倒してこれを讀む場合である。もう一つは、作品と自分との間に或距離を置いて、作品を尊重しながら而もこれを批評的に讀む場合である。吾々が本當に作品から深い感化と敎育とを受けるのは、後者よりも前者の方が遙かに優つてゐる。併し吾々が段々獨立して來るにつけて、前の時期から後の時期に轉ずることは如何にしても脫れ難い自然の成行である。これは先輩が進歩をとゞめたことを意味するのではない。後輩が自分自身の道を步み始めたことを意味するに過ぎないのである。その後に至つても先輩がどれほど彼自身の道を遙かに步いて行つたか、後輩が彼に定められた道を進みながら猶先輩から受け得たところがどれほど彼の力になつてゐる

かは、後世の史家がこれを明かにして呉れるであらう。私は島崎さんに就いて一番はつきりこの時期の轉換を經驗した。併し私は何時までも面問に、少年時代にその人から自分の情感の泉を開いて貰つたことを感謝してゐる。さうして引續いてこの人自身の誠實な勞作を尊敬してゐる。

　これは大學卒業後の話であるが、私にこの轉換を經驗させたものは不思議にも島崎さんの「春」であつた。私は一葉女史や島崎さんを通じて「文學界」時代の生活に深い關心を感じてゐた、さうして誰かがこの時代の生活を書いて呉れることを待ち焦れてゐた。然るに今島崎さんがそれを書かれるといふことをきいて、私の期待は非常に大きかつた。併し毎日待兼ねて新聞を讀んでゐるうちに、自分はいつも前置を讀んでゐるやうな心持で既に結末に來てゐることを發見した。これは曾つてクライストの物語り（エルツエエルン）を理解し兼ねたやうに、對話によつて或場面を描くことの少い敍事的な書き方に慣いた私が惡かつたのかも知れない——今になつて私が時々さう思ふことは事實である。併し兎に角に「春」をきつかけとして島崎さんに對する私の轉機は來てしまつた。私は今これをどうすることも出來ない。とは云へ私が前に云つた意味で長く追隨することの出來たのは、あらゆる先輩のうちで島崎さんが第一である。私は茲に正直にこの事を告白して、深謝の意を表して置きたいと思ふ。

　始めて讀んだ時の印象の强さから云へば、德富蘆花氏の「不如歸」も島崎さんの「若菜集」に劣らなかつた。私が山形に轉校してから、莊内中學に於ける宮本や早田とは戀人のやうな心持で夏休に一緒になる時期を待兼ねてゐた。さうして三年か四年の夏休に、宮本と鶴岡に近い田川の溫泉で落合つたとき、宮本が持つてゐたのがこの小說であつた。私はこれを讀みながら止度なく淚を流した。それを見られるのが恥かしさに、仲善しの宮本から顏を見られることを避けた。かういふ思出を持つことが出來た點に於いて、私はこの小說の作者にも深い感謝の情を捧げる。その後この人の「自然と人生」や「思ひ出の記」に對しても私は第一類に屬する讀者であつた。併し高等學校に入つて「黑潮」を讀んでから、私の上にはおのづからなる轉機が來た。

　幸田さんのものは寧ろ時過ぎてから回顧して讀んだ。「五重塔」や「對髑髏」が印象に殘つてゐる。紅葉山人のものでは「多情多恨」がとびぬけて面白かつた。泉鏡花氏も「湯島詣」や「照葉狂言」によつて好きな作者として尊敬してゐた。齊藤綠雨氏や廣津柳浪氏をもそれぞれの意味で推重して讀んだ。詩では島崎さんの外にも、土井さんや薄田さんのものに好きなも

のがあつた。土井さんの作品では、有名な「秋風五丈原」よりも「暮鐘」といふシラー張りの詩を殊に愛誦した。泣菫氏の作中では「尼が紅」といふのを特に記憶してゐる。

五

私は明治三十四年に中學を卒業して第一高等學校に入學した。明治の末年までは猶十年間が殘つてゐるのである。この間上田敏、清澤滿之、三宅雪嶺、最後の正岡子規、晩年の高山樗牛、國木田獨歩、夏目漱石、正宗白鳥などといふ名について語るべきことはまだ／＼多く殘つてゐるが、豫定の枚數と時間とが將に盡きんとしてゐるから凡て割愛しなければならぬ。

“Kie man wird, was man ist.” とはニイチエの自敍傳のサブタイトルである。吾々が吾々のあるところのものになるまでには、どれほどに複雜な因果の交錯が必要であるか。これは個人に就いても時代に關しても同樣に云ふことが出來るであらう。極めて限定された一小視點から自分の四十年間の生活を回顧しただけでも、具體的に事實に當つて見れば、歴史に對する肅然たる感情と、先輩の事業に對する敬虔な思ひとが自分の心の中に湧いて來ることを覺える。茶化せば茶化しても茶化しても茶化しきれないやうな世の中ではあるが、自分も亦茶化さるゝに價するものゝ親玉であることを自覺する者は、小さい人間の小さい勞苦の痕にも嚴肅な尊敬の情を捧げることが出來るであらう。誰か明治大正の文學を眞摯に研究してその間に正しいオリエンテイールングを作り出さうとする人はゐないか——私は劈頭の言葉を再び繰返して、茲にこのとりとめのない漫錄の筆を擱かう（十月八日午後十二時）。

今と昔

廣津柳浪

私は今日の文壇の事は一向知らない。尤も、雜誌や新聞紙上の文藝に關する評論や隨筆、時としては小說をも讀むことが

ないではないが、一切文壇人との交渉がないのだから、私が見て居る文壇の外觀と内容とには、大きな相違があるのかも知れない。私は今日の文壇人が名を成すのにも、生活の安定を得るのにも、私達が筆を執つて居た時代に比べると、頗る容易らしいのに驚くのである。私達の時代には、名を成すことの難いのは勿論、生活の安定を得ることの困難さには隨分苦しんだものだッた。私は若い人達から、其創作――多くは處女作――發表の依賴を受けて、其始末には隨分頭を惱したものだッた。其頃は發表機關たる雜誌の數が極めて尠かつた。文藝倶樂部、新小説、都の花――後の文藝界――反省雜誌――後の中央公論――國民の友の數誌に過ぎなかつた。それさへも、反省雜誌は每號創作を掲載すると云ふのでなく、國民の友は多くは既成作家の作物、それも人を撰んで執筆を依賴すると云ふ遣方なので、先づ門戸を開いて居たのは、僅かに文藝倶樂部、新小説、都の花の三誌に過ぎなかつた。門戸を開いて居たとは云ふものゝ、無名の新人の作物よりは、定評ある既成作家の作物の方が、其作家について愛讀者があるだけでも、安心して載せられる樣なので、どうしても無名作家のものは歡迎しない。況してさう云ふ人達の處女作と來たら、相當有名な人からの推薦があつても、喜んで手を出さうと云ふ書店はなかつた。これは今も昔もほゞ同樣であるかも知れないが、併し今日は雜誌の數が非常に多くなつて居る上に、雜誌の多くが稿料を支拂つて居るやうである。昔はさうは行かなかつた。前にあげた文藝始め三雜誌の發行所、即ち博文館春陽堂金港堂などこそ相當の稿料を支拂つて居たが、其他にさういふ店は餘りなかつたのである。で、創作界へ乘出すことも、生活の安定を得ることも、今日に比べて遙かに困難だつたのである。

今日は文運隆盛と云ふのであらう、雲の如く叢がつて居る作家達を、立派に養つて行くだけの雜誌や新聞紙や書店があるのだから、大いに祝福しなければならない次第だ。まだ／＼と見て居た若い人が、雜誌に一二度名が見えたやうに思つてると、やがて若い婦人と同棲して居る――斯う云ふのをさらに見掛ける。一朝名を成すと云ふやうな才人が、何時の世にも無いとは限らないが、併しさうとは思はれない人達が、雨後の筍のやうに頭を擡げて來る。そして、帽子に衣服に履物に、流行の粹を追ふのを競つて居るらしい。尤も、これは世の中全體が、けばけばしい派出好みになつて居るのだから、文壇人にのみ往時へ還へれと望んだところで、それは望む方が無理なのかも知れない。

服裝など、以前は階級に依つてそれ／＼極つて居たものである

る。極つて居たと云つても、各人各様の好尚があるのだから、必らず斯うであらねばと云ふ譯には行かないが、職人の女房は職人の女房らしく、下町娘は下町娘らしく、山の手の娘は山の手の娘らしい内に——其階級的粉粧の内に、各人各様の好尚のあらはれがあるのであつて、今日のやうにカフヱーの女給だか、良家の娘だか、どれをどれと見分がつかなかつたり、ホテルのボーイが大島の二枚重で祭の街を歩いて居たり、荒物屋の亭主がセルの袴に山高帽を被り、紙卷莨を啣へて公園をぶらついて居たりするやうな圖は、以前は全然見られなかつたものだ。それは階級の撤廢されゆくあらはれで、當然さうあるべきで、何も非難するにはあたらないが、兎に角變り行く世相の劇しいのは驚かざるを得ないのである。

で、私は小説を書くのに、人物の服装には隨分注意したものだつた。それは、成るべく説明を用ゐないで、其人物の階級を示したり、其性格をあらはしたりしたい爲めであつた。紅葉君も小説中の人物の服装には、充分注意を拂つて居たやうで、『僕の描いた服装について妻の意見を質したら、どうも淋し過ぎやしませんかと云つたが、或はさうかも知れない。』と、或時私へ話したことがあつた。紅葉君は何事にも凝性だつたから、あれかこれかと餘り考へ過ぎて、つい作中の人物よりも自分の好尚が餘計加はつて、妻君の目には淋しく見えるやうな扮装を撰ぶことになるのではなからうと思つた事があつた。今日のやうに階級がこはれ、服装がみだらになつて來ては、服装に依つて階級を現はすと云ふ事は、全然出來ないことではないが、ちと難かしくもあらうし、またそんな必要はなくなつたやうでもある。

そして、私達作家はどうだつたかと云ふと、今日の人達に比べると、服装なぞずツと質素だツたと思ふ。不斷着には木綿物も着たし、他所行きでも銘仙ぐらゐであつた。ぞろりとお召や大島を着たりしては居なかつた。お召なぞ女の著る物で、男で著る奴は藝人か成金ぐらゐに思つて居た。私の知つて居た作家に就いて、今斯う目を閉ぢて物色して見ても、そんな藝人じみた物を著て居た人は一人も見出だすことが出來ない。根岸派と云はれた露伴君、篁村君、思軒君なぞ、みな分相應の服装をして居た。早稻田派と云はれた人達もさうであつたし、鷗外君、不知庵君、緑雨君なぞもさうであつた。何かと云ふと引合に出される硯友社の同人は如何かと云ふと——其中でも別けて目指されさうな紅葉君はどうだツたかと云ふと、新規な物や流行を追つたものなど見向きもしないで、克明な服装をして居た。地質にしても、特に高價な物を着て居たのを見たことがない。紅葉

門下の人達が、其師の風姿を語る場合に、八幡黑のニコタの鼻緒をすげてなぞ書いたのを見たことがあるが、地方出の人など、何か贅澤なものの一つでゝもあるかのやうに思はうが、八幡黑がそんな贅澤なものでもない、紅葉君が江戸兒で、多少イナセの好尙を有つて居たところから出た好みに過ぎないので、今日の作家達――ばかりではない一般にだが――が、桐の下駄の柾目を選んで、拾金廿金を惜しまないのに比べたら、物の數ではないのである。

今日の作家が贅澤で、昔の作家が質素だつたと述べたからと云つて、何も今の作家を貶さうとためではない。これは斯うなつた時世の然らしむるところで、餘程克己心の强い人でもなければ、この趨勢に逆つて、本來の自己を守つて行けないのは無理もないのである。而も、稿料の如きも――頃日何か問題になつて居るやうにも聞くが――其數字から見ると、非常に多額が提供されるのださうだ。特に婦人雜誌なぞ、明治時代には想像も出來なかつたほどの報酬を拂つて居るとのことである。そこで私が作家となつた時代を振返つて見ると、稿料などは實にミジメなものであつた。此項は成るべく私に關した事に就いて書くことにしたい。他人の事は記憶しても居ないし、自分の事だと差し障りがないからでもある。

私が始めて處女作『籔中樓』を東京繪入新聞へ書いたのは、明治二十年の六月からであつた。其時の稿料一回七十五錢だつた。新聞社の方で云ふには、一枚四十錢として、四枚書いていただけば、尠くも一圓五十錢は差上げなければならないが、私の新聞では從來そんな稿料を拂つた例がない。それに毎日の事だから、どうか半額の七十五錢で、御承知が出來ますまいか。それさへも、私の新聞では破天荒なのだと云ふことだつた。一介無名の書生の作物に一回七十五錢拂つてくれると云ふのは、私に取つては望外の喜びであつた。一回七十五錢と云へば、一ケ月先づ二十圓である、當時非常に窮迫して居た私に、此一ケ月二十圓と云ふ收入は、雀躍するほどの喜びだつた。無名の作家など、百枚二百枚の綴つた原稿を、泣の涙で、僅かに五圓か十圓に替へて居た時代ではないか。それには當時の生活狀態に就いて語つておく必要があるやうだ。

私が明治二十一年から二年にかけて住んで居た谷中三崎の家は、六室を有つた二階家だつたが、家賃は僅かに三圓であつた。米が一圓に一斗七八升。憲法發布の日に、兩國の中村樓で開いた博文館の祝宴の歸途、私が兩國の橋の上で雇つた俥代が、降雪後の路を谷中の三崎まで二十錢だつた。今から思ふと嘘のやうな話だ。二十四年に矢來の中の丸へ移つた家が、間數

が四ツで、庭も相當に廣かつたが、家賃は三圓七十錢で、十年住んで居た間に五圓になつたが、僅かに一圓三十錢の直上げに過ぎなかつた。矢來へ移る前に、根津權現の傍にも深川の木場の奥の平井新田にも居たことがあつたが、其時は中央新聞の小說を擔當して居たので、時々出社したが、其俥代が根津からも深川からも、銀座四丁目の角の、今山崎洋服店のある處まで、どちらからも夕〻の九錢であつた。矢來へ移つた後、二十五六年の頃都新聞社へ通勤したが、矢來から內幸町まで朝夕送迎をして、一日二十五錢、月七圓五十錢で月極にしていたゞきたいと、俥屋から懇願されたことがあつた。三錢五錢と云ふ俥代のあつた時代である。下級の巡査など、僅か六圓か七圓の俸給で妻子を養ひ得た時代である。月二十圓の收入は、二三人の家族なら、充分一家を支へ得られたのだから、獨身者が下宿屋に轉がつて居るには充分過ぎるのであつた。私は斯うした時代に處女作を書いて、斯した報酬を得たのであつた。通貨の價値が、當時と今日とどう云ふ割合になるものか、比較して見たら、或は何かの參考になりはしなからうか。

其後都の花に『小舟嵐』など書いた時代が、一枚四十錢、文藝俱樂部に載せた『男蟷螂』が、よくは覺えないが一枚五十錢位。私の創作中 多少世評の好かつた『今戸心中』『河內屋』など、一枚八十錢位だつたと記憶して居る。反省雜誌――中央公論の前身――の依賴で書いた『靑大將』が一枚八十錢だつた。其時は樗牛君の『我袖の記』と桂月君の何とか云ふ小說と三人同席したのだが、麻田君が矢來の宅へ見えて、何程差上げてよいかと稿料を問はれたので、博文館同樣一枚八十錢と答へると、即座に稿料を置いて歸られたが、其後、柳浪の稿料が一枚八十錢ださうだが、隨分高いではないかと、本鄉方面で噂されたと聞いて意外に思つたことがあつた。ひどい難産で、今でも自分では書損つたと思つて居る『河內屋』が、再興の新小說の第三卷として出た時、春陽堂の番頭の吉さん――伊藤某と云ふのだが吉さんで通つて居た――が駈付けて來て、今伺つて來たんですか、大層な評判で、『雪中語』はじまつて以來の傑作と云ふことです、どうも難有うございました。これはほんのおしるしまでゞすがと一封を置いて歸つた。あとで其一封を開けて見ると、金五圓也が入つて居た。此事を紅葉君へ話すと、ほう其れは僕にもないことだと云つたが、『雪中語』はじまつて以來の傑作で、あの通り春陽堂と關係の深かつた紅葉君にも例がないと云ふ、稿料以外の謝禮ではあるが、それが今の人達の一枚の稿料にも及ばないとは、當時の質素であつたことが知られるではないか。

其頃私の家へよく來た或作家が、もつと稿料を高くしてはどうか。君が先に立つて上げてくれなければと、私へ相談したことがあつた。私はそれに對して、稿料を上げるのも悪くはないが、本屋の方にも十露盤玉の關係があるだらう。もつと讀者が多くなると、今の小學校の子供達が大きくなつて、我々の著作を讀むやうになると、本屋でも充分十露盤が持てるやうになる。さうすれば本屋の方から稿料を直上げして來る。いや、そんな正直な本屋なぞありはしない。いや、無いとは限らない。まア〳〵と云ふやうな話をしたことがあつたが、今日はちやうど私達が待つて居た時代が來たのではなからうか。いや、果して私達が待つて居たやうな本屋が出て來たかどうか、些と覺束ないやうである。

稿料直上げに就いて、こんな話もあつた。やはり私に關して居ることなのだ。確とは覺えないが、三十五六年頃だつたと思ふ、都の花の後身文藝界が發行された時だ。紅葉君が私へ、文藝界に書く稿料の直上をしてほしいと云ふ相談があつた。それは門下生の爲めだつた。君の稿料はこれ〳〵より安くしないやうに賴む、さうすれば内の者達のもこれ〳〵にしたいからと云ふのだ。私は承知した。そして、一二回は何事もなく濟んだが、或日文藝界社主任の某――後博士になつたが今は死んで居る――が來て、自分の手に來る原稿と、店へ賣込まれる原稿との間に、稿料の差があつて困ると云ふ。それはどういふ事かと訊ねると、某君――近年死んだが名は秘しておく――の原稿が店の方へは安い稿料で持込まれて、私の手から入るものは稿料が高いといふ譯で、どうも遣りきれなくつて困る。ついては以下の分も何とか考へてもらへまいかとの相談だ。いや、私の方には事情があつて、切角の相談だが應じかねる。事情がなければどうでもよいのだが、今はさうは行かない。そこを何とか願へまひかといふやうな事から縺れて、私は文藝界へは斷じて書かないことにした。其後紅葉門下の人達との交渉はどうなつたか、私は何も聞いて居ないが、私だけは手を切つた。

軈て露國との戰爭が始まらうとした頃、金港堂の編輯員だと云ふ某子――後京橋の方で出版業をやつて居たが、今はどうして居るか知らない――が來て、私は今度編輯を引受けることになつたが、御覧の通未だ若い、それに何等の經驗もない、それで大役を引受けたのだから、果して重任に堪へ得るか覺束ない、どうぞ私を助けると思つて、書いて下さる譯には行くまいかと云ふ。私が文藝界へ執筆しなくなつた事情を話して斷ると、いや文藝界へではない、單行本――戰爭を背景にした小說本を出したいのだと云ふ。それならば書いてもよいと引受け

た。而も、其男が其頃『何子』とか云ふ小説――若い人達の間に大分好評だつたらしかつた――を書いた青年作家でもあり、其時の態度が眞卒らしいのに同情して、稿料なぞも安くして書いてやつた事があつた。其小説は『風流士官』と題したやうに思つて居る。私は此事から、その博士になつて死んだ男から怨まれて、或文學會へ誘き出されて、耻辱を與へられやうとしたことがあつた。この事は、折があつたら委しく書いて見たいと思つて居るが、今は略しておく

　私は氣の弱いところがあるのであらう。人から賴まれると、ついいやと云へなくなる。稿料なぞに就いてもさうだ。前に書いた金港堂の若い編輯員に懇願されたやうな場合に臨むと、それを振切ることが出來ない。逆境に在る小ひさな雜誌などから、社運がこれ／＼だなど丶云はれると、私は乞はる丶まゝに應じたものだ。これは逆境になぞ居たのではなからうが、今の新潮社の佐藤君が經營して居た『文庫』だつたか『新聲』だつたかにも、當時私の宅へ同居して居た中村吉藏君の紹介で、何か書いた事があつた、それは安い／＼稿料でゞあつた。そしたら、その後その雜誌に、柳浪も同情を有つて居て云々だが、併し耽溺して居て云々と云ふやうなことでた丶いてあつた。同情した上にた丶かれては溜つたものでないと、苦笑を禁じ得なかつたことがあつた。

　つまらないことを長々とならべて來たが、度々紅葉君を引合に出した序に、紅葉君の事に就いて今一つ書きたい。私は紅葉君に對して何一つ羨しいと思つたことはないが、紅葉君が讀賣新聞社へ入つたことだけは、後になつてひどく羨しく思つた。讀賣新聞社には高田早苗と云ふ好支配者があつて、作家に深い理解を有ち、出來るだけの自由を與へて、紅葉君をして其全力を創作に注かしめた。高田主筆が執つた紅葉に對する態度は、一傳統的に其後繼者にも傳へられて、紅葉君の作物が休載に繼ぐに休載を以つてし、他の新聞社ではとても堪へ得られることではないのだが、讀賣新聞社は能くそれを忍んで、作家をして充分其力を盡さしめたのだ。紅葉君を大成したものとしたら、其一半は讀賣新聞社、否高田博士の理解の賜物だと云つて然るべきだと私は思つて居る。紅葉君が讀賣新聞社へ入社したのは、二十二年の暮か二十三年の春だつたと記憶するが、私も少し後れて中央新聞社へ入社した。併し、私は志を得ないで都新聞社へ移つた。折から同社では、社員の間にごた／＼が起つて居て、そのごた／＼は軈て鎭つたが、そのどさくさまぎれに、一小説記者――假りに斯う名づけておく――として入社した私が、今日で云ふ社會部長の椅子に倚ることになつたばかりでな

く、自分の本領の小說と、俗受の小說と二つ書いた上に、直譯——私の希望で——させた探偵小說へ筆を入れるのだつた。每日此三つの小說に筆を執つた上に、所謂三面記事までも、自分でも書き、他の書いたものに加筆をもした。こんな馬鹿〳〵しい努力をしたのは、社長の楠本氏の立場に同情したのと、其依囑を信じてのことだつたが、併し何の酬ひらるゝこともなしに同社を去つて了つた。そして、私は二十八年に『黑蜥蜴』を書いた頃から、辛やく息を吐くことが出來たのだつた。私と紅葉君とは無論天分に於いて違ふところがあらうが、私も當時の讀賣のやうな社へ入つて居たら、今少し早く何か書き得て居たかも知れなかつた。私が紅葉君に就いて羨しく思つたことは、これ一つだつたことを此に告白しておく。

(完)

子規のこと

高濱虚子

私は今うちくつろいだ氣持ちで子規のことを書いて見ようと思ふ。

私は子規が死んで、子規居士と戒名がついた時、「これから升(のぼ)さんを呼ぶ時分には我等仲間は子規居士と呼ぶことにしやうぢやないか。」と碧梧桐にいふた。それからは子規とは呼棄てにせずに必ず子規居士と呼んで來た。が、今此筆を取るに當りては、どういふものだか子規居士と呼ぶことに窮屈を感ずる。升(のぼ)さんと生前通稱を呼んだのと同じく、子規と呼棄てにする方が、今の私の氣分にしつくりはまるやうに思ふ。

私が國許にゐてはじめて子規に手紙を出したのは私の十八歲の時であつたから、子規は二十五歲であつたのだ。發句といふものを子規が作ると聞いたので、私も眞似て見て、十七字を並べて手紙の端に書いてやつた。子規は一々其を批評してよこした。今考へて見ると其頃の子規は發句は判つてゐなかつたの

だ。其の改作したり○點をつけたりしたものを見ると大概月並臭氣を脫せない程度のものだつた。第一子規の作るところの句が月並であつた。後年力を極めて攻擊したところの俗惡な月並調子のものであつた。子規は平氣で私達の作る句を其俗惡な調子に改作したり、又平氣で○をつけたりしてゐた。其を考へて見ると、子規は俳句が判つてから師表となつたのでなく、俳句の判らぬうちから師表となつたのだ。

後年漱石が斯んなことを言つて笑つた。

「子規といふ奴は、よく人のものを直したり批評したりしたがる奴であつた。僕が俳句を作つたといつて見せると、すぐ改作したり○をつけたりしてよこす。それから又漢詩を作つたといつて見せると、其を直してよこす、又僕が英詩の眞似をして作つて見せると、奴、判らぬ癖に、ヴエリー・グードなどゝ批評をしてよこす。」

斯んなことを言つたことがあつた。これはよく子規の性質を說明してゐると思ふ。

人間のうちには常に人の意見に聽從して人の後へにのみゐることに安住してゐるものもある。又常に人の先に立つて、判つても判らなくつても、人に敎へねば滿足出來ぬものもある。

子規は後者の方に屬した人であつたやうに思ふ。其に就てももう一つ著しい例がある。

後年不折と親しくして、種々洋畫の話を聞いた。併しいつかもう洋畫の批評家になつてゐて、不折を指導するやうな態度を取つてゐた。

斯ういふと子規のやうな俳人が今の俳壇に餘り多いのに驚くであらう。我こそ人の指導者であると自分の力も計らずにうぬぼれる人が俳壇には殊に多い。其等の人は忽ち我こそ子規の第二世、第三世だなどゝ氣取るかも知れぬ。

が、子規は單なるお山の大將ではなかつた。さういふ大將顏がし度い人であつたが、其に研究心が旺盛であつた。又骨惜みといふことは藥にし度くもなかつた。病弱の體ではあつたが、二六時中休むといふ時はなかつた。二三度茶屋遊びもしたことがあつたやうだが、其間も堪へず人間の研究を怠らなかつた。同僚の茶屋酒の飲み具合を見て居つた。又自分の心の茶屋酒にひたる具合を研究してゐた。而して茶屋遊びをして歸つた時にも俳句分類をして夜を更かした。

發句といふ古來の稱呼に滿足することが出來なかつた。俳句といふ新語を稱へはじめた。さうして知らぬ顏をして、之を天下に普及せしめた。

俳句についても絕えず研究を怠らなかつた。子規は常に人を

指導する形を取つてゐたから、絶えず人から指導されてゐた。これは後年子規も自白したことがある。はじめは俳風、蝸亭、鳴雪に教へられ、ついで碧梧桐、虚子に教へられたと。

はじめは人の句を月並臭氣のあるものに改惡して置きながら、漸次其人から教はつて、漸く其人の月並臭氣ある句に染まりかけたのを、又挽め直ほすに苦心するといつたやうなことも多かつた。漸次其人から教はるといふのは、其の人の句に、却つて子規が感化されることをいふのである。其は其人は意識しないで作つてゐる句であるが、子規の不斷の研究心は其句が、文學的に見て、自分の作る句よりも優れてゐることを終に知るに至るのである。されば其人から教はるといふもの丶、其人は教へる考もなく、唯無意識であつて、子規の研究心が取つて以つて自己の範疇中のものとするのである。

そんな鹽梅に子規は先づはじめ眞暗闇で俳句の指導者を以て任じ、漸次指導するところのものから教はるところがあり、又不斷の研究心は漸くにして自己の標準を定むることを得るに至つたのである。子規の偉いのはお山の大將であつたといふのではなく、全くこの細心の研究、不斷の努力にあるといふべきである。お山の大將だけならば今の俳壇にも數へ切れぬ程ある。

漱石の英詩を、子規は其點の造詣に漱石に及ばぬのを自覺した爲めに、ヴエリー・グードで蹈破したが、やがて自分で英文學を研究する氣があつたならば、始め出鱈目に改作する位の事は敢へしたであらう。斯くして漸次自己の智　を開拓し、遂に「始じめは　石のは判らなかつた。自分の直したのが却つて間違つてゐた。」と自白するであらう。尤其は英文學の造詣が漱石以上になつた時である。

不折の繪畫にしてもさうである。はじめは種々不折の說明を聞いた。其を聞いて居る間に、子規の心の中には漸次或標準が定まりつ丶あつた。やがて不折の繪畫に對して眞向上段より批難を試みるのであつた。

子規は途中で新聞記者たらんとした。「小日本」の發刊せらる丶に當り、主として之を擔當し、自ら三面の編輯に任じた。何故に子規は新聞記者たらんとして努力したか。

子規は又俳句の事を一時第二とし、和歌の方面の事を第一と志したかの觀があつた。其は又た何故か。

子規には一つの信念があつたやうに思ふ。要は我といふ人間を、人の集まりの此社會に突き出す上に於ては、職業は何でもかまはない全力を盡くせばよい。全力を盡くして我といふものを出せばよい。

丁度孔子が、羊を牧する事、會計をする事、凡を完全に行つた、

といふたのと同じやうな事になる。

　子規が新聞記者にならうとして努力したことは、其環境が新聞記者にならしめるやう出來上つてゐたからである。子規の頭には何にならう、彼にならうといふ種々の計畫もあつたらう。併し其先輩たる陸羯南に引立てられて新聞記者になるべく極めて都合よく運んだ時に、彼は快心した。彼はさうして新聞記者になる以上は優秀なる新聞記者にならうとした。彼の勤勉は非常なものであつた。

　同濟戰爭は勃發した。彼が從軍記者とならうとして、人々のとめるのも聞かずに、敢行したのも略其心は讀破が出來るやうに思ふ。

　彼は從軍記者として最善の努力を盡くすといふ以外には考はなかつたであらう。否考へは無いことは無かつたであらうが、當面の目的としては唯最善の從軍記者たらんとするにあつたであらう。

　一時、俳句の方は第二に置いて、和歌の革新運動に熱衷した其志も同じことであらう。俳句に盡くすも和歌に盡くすも畢竟は同じことだ、俳句の復古運動も大方はかたがついた。澤山の後進のものがゐるからどうかならぬことはあるまい、前途尙爲すべき多くの事があるが、餘命最早幾くもない、暫く俳句の事は棄てゝ置いて、兼て氣になつてゐる和歌の革新を試まうと。

　子規が又好んで社會批評のやうなものを試みたのも同じ心を以て推し量ることが出來る。

　子規の行つて來たあとを顧みると、何所か動がぬところがある。大磐石のやうな心持がある。新聞記者にならうとし、小説家にならうとし、寫生文を書き、俳句の復古運動、和歌の革新運動、數へ來ると隨分種々の事に手を出してゐるやうであるが、其でゐて何所やらに嚴として動がぬところがあるのは、此の士臺の信念があつた爲めであらう。

　いつか私は子規に言つたことがある。

「世間の人が、升さんは政治家になる資格は十分にある。體が元氣であれば大臣位やれぬことはない、と言ふが、どうぞな。」

　子規は暫く默つてゐて後ち斯う答へた。

「あしも政治家になれん事はあるまいといふ自信はある。併し假りにも文學に志したものがさう輕率に政治家になるやうなことはしない積りぢや。」

　輕率な事はしないといつたのは事實であらう。子規は決して輕率には行動しない。併し其環境が子規に好都合であつたならば、子規は必ず政治家になつたであらう。一度新聞記者になつたことがあるやうに。

從軍して、血を吐いたといふ事は、子規をして一意俳句に専心ならしめるやうになつた一大原因である。其の須磨の一月餘りの靜養は、遂に「俳諧大要」を生み「俳人蕪村」を生み、それより四五年間の俳句界に於ける子規の大活躍となつたのである。

和歌の革新運動は其俳句界の革新運動――復古運動――の餘沫である。木に竹をついだやうな運動でなくて、釣竿の尖を延ばしたやうな運動である。其處にも亦、自ら暗闇に行手を探しながら、こちらだ〳〵といふが如き聲も聞かれた事であらう。が、一度俳句界で經驗し來つたことを和歌界に應用したのである。俳句によつて養はれた文學標準は之を和歌に應用して誤る事が少なかつたであらう。和歌壇が二三年の叫びに直ちに響應した感があつたのも偶然ではない。

當初の發句といふものが判らなかつた子規に、今は日本全國の俳人が導かれてゐる形である。其が僅か子規の十年間の研鑽の賜物である。

女の足

秦豊吉

序

日本の藝術家で女の足の美を説いた人は、私の知る限りでは谷崎潤一郎一人である。妖艶で病的な女主人公の脛から足の爪先に至る美さは、小説「富美子の足」の中で、國貞の繪のやうに描寫され讃嘆されてゐる。けれども浮世繪師に描かれた日本の女の素足は、僕らの感じる足の美とはよほど遠い。日本では足を出すとか、足許を見るとか、土足とか、足に關しては醜惡野卑な想像ばかりさせられて、少しも潑剌たる足の力や脚の快樂を顧みない。ゲエテは旅先からクリスチアネに手紙を出して、いつもお前の傍にゐる心持でゐたいから、どうぞお前の穿き捨てた踊りの靴を送つてよこしてくれ、と言つた程女の足を愛慕した一人だ。僕は日本の女にも大に足を愛し足の美を感じてもらひたいと思ふ一人だから、西洋人の足の觀念をここに少し調べてみやう。

足

足といふ言葉はサンスクリトの「歩く」といふ言葉と關係が深い。即ち人間が之によつて立ち上り且動くものだ。そこでどの民族でも足を大事なものに思つて、殊に足には特別な生活力が隱されてゐるものと見て、昔から足と性欲又は生産力と結びつけて考へてゐる。西洋の諺から見ると、足の方が腕よりも大切なものに思ふ場合も多い。例へば「足は體を載せるが、指には出來ない」とか「好い足は好い目だ」とか言ふ。足は肉體全部を背負つて立つ機關だから、足が丈夫ならば體が丈夫に考へられ、足が弱く病氣があれば、體全部が邪魔され束縛されるのである。獨乙の言葉で考へても、足といふ文句を使つて、健康、不健康、その他死に至るまでの種々の生活狀態を言ひ現したものが多い。強く成るといふ意味に、足の上にくる、弱く成るといふ意味に、足から離れる、と使つてゐるし、足を得な

い、高い足の上に生きる、自由な足の上に立つ、一本足又は兩足で葉の中に立つ、最後の足で行く等無數にある。

足は歩く意味ばかりには考へられない。足は第二の手として物を摑む役にも立つものである。靴でいぢめられない野蠻人が足の親指を手の指同樣に使つて物を摑むばかりではない、腕を失つた人が足で繪を描いたり、刺繡をしたり、樂器を鳴らすものがゐる。足を手同樣に使ふのは、原人時代の遺物として今日では無くなりつゝあるが、古代の人間が今日よりももつと手の代りに使つた事は、古代埃及の彫刻に屢々見る處だ。

生活の象徴としての足

そこでこの足が各人種の間でどう考へられるかといふと、これは民族によつて殆ど獨立した象徴に用ひられてゐる。最共通で且自然な考へ方は、歩む、行く、おもしろひさまよひ、巡禮、家に歸る、といふ意味から更に進んで、生活そのものゝ意味に結び付けられた場合が見られる。ラテン語で、進み行く、といふ言葉と、生長する、といふ言葉に共通な意味のあるのもこの一例である。

古代埃及人は足を以て進歩、生活の營み、生活そのものゝ象徴にした。姉妹で兩樣に成つてゐるイシスとネフイチスは足と密接な關係を持つてゐる。人が死ぬとその足の裏の皮を剝いで、ネフイチスに獻じたものである。今日でも木伊乃の足の裏の皮の剝いであるのが發見される事がある。ネフイチスはこの獻じられた足の皮を、再びあの世で死んだ者に穿かしてやるのだといふ。イシスは死んだ者の足を強くして、その運動力を強くしてやる神樣だ。いづれにしても足の神樣として「かの人の足はイシスとネフイチスの足の如くあれ」といふ呪文の文句がある位で、同時にイシスは現はれたる生活の母と日の出を、ネフイチスは隱れたる生活の母と日の入りを現し、この二人の神樣の足はこの世とあの世の生活の營み、生活の強さを肉體化したものに考へられてゐる。

羅馬埃及時代になると、石の上に足の裏の型をとつて、イシスの神に獻じたものである。之に對する說明として、その時代の巡禮が神社に至つた參詣の印だといふ說もあるが、さうばかりではない。寧ろ新たなる歩く力、生活力の象徴として奉納したものと見る方が正しい。又多くの場合に石に足の形を彫り付けたものがあるが、之の方こそ巡禮なぞが無事に健かな足で再び家に歸れるやう、神社に奉納したものである。これは巡禮ばかりでなく、遠くに旅立をする人、出征する軍人なども同じ事をしてゐる。

更に進むと足そのものの紀念碑といふものが埃及時代にはある。フイレンツエには四角い台石の上に大理石の裸の足があつて、その上にサラピスの頭が載つてゐる。チユウリンには草鞋を穿いた大理石の足があつて、その後にヘルポクラテスと思はれる子供の像が立つてゐる。同じく草鞋を穿いた大理石の足の上に、神樣が玉座に座つてゐる像が、アレキサンドリアで發見された事がある。その神樣は頭が欠けてゐるがサラピスであつた。

古代基督教徒になると、足を以て新しい世界に移り行く象徴又は希望の表現に用ひてゐる。獨乙の言葉に「足と共に神を持つ」といふ言葉があるが、幸先好くどこかへ行くといふ意味である。古代基督教徒時代の石に、兩足の足形を彫りつけたものがあるが、これは幸福に終りたる人生の旅を現して、神の許に歸へる悅びを意味したものだ。或はかういふ足痕を基督の足痕に結び付けてゐることもある。これはペテロ前書第二章の「爾曹をして己の跡に隨はしめんとて、型を爾曹に遺し給へばなり」とある文句からも來てゐるし、クレメンチアの讃美歌には「基督の足痕、天の道なり」といふ一句もある。羅馬郊外のクヲ、ワヂスの寺と呼ばれてゐる古寺に、所謂基督の足痕が大理石の上に殘つてゐる事は、伊太利見物のお客樣は誰も御承知だ。

力の象徴としての足

足は更に力、支配、權利の意味をもつてゐる。足で踏める物は、自分に隷屬し服從するものである。羅馬人は戰に負けて奴隷にした人間の頸に足を載せたものだ。獨乙語にも足の下にある人を持つ、足の下に強ひる、ある人の足許に自分を投げるなぞの言葉がある。何れも支配、服從の意味である。ゲルマン民族では普通にある人を足で踏むとか、一片の土地を踏む、とかいふ事を所有の印として行つた。中世では大名が家來の右足を自分の右足で踏んで主從の關係を結んだ風習がある。或は花婿が結婚式がすんでから祭壇の前で花嫁を踏むといふ中世の習慣も、夫としての力又は權利を得た印しに行はれたものである。魔術師の右足を踏んでやると、魔術を使ふ神通力を失ふ、といふ迷信もある位だ。

足の接吻

この隷屬服從の精神から、最この意味を徹底さしたものが、足の接吻である。新約の路加傳にあるのが、有名な「涙にて其足を濡まし其足に口を接け香膏を塗り」の文句である。希臘人

や羅馬人は神の石像の足に接吻するのが普通であつた。この習慣は今日でも羅馬のペテロ寺で我々も見る所だ。人間の足を接吻するのは、奴隷のする事とされてゐたのである。ヂオクレチアヌス王は足の接吻を誰にも要求したといふ話がある。

右足と左足

手についても、右の手が男性で左手が女性であると同じやうに、足についても右は力強い幸福を約束する男性を現し、左は幸福を余り多く持つてこない女性を現すのである。これは希臘羅馬時代から今日に至るまで同樣で、歩くとか旅に出るとかは右足から初めると好い、とされてゐる。獨乙でも閾を右足で踏むと福があるといふ。土耳其で花嫁はお婿さんの家に右足から入ると、夫婦仲が好い、と言はれてゐる。左足については、左足で躓くと失望する事に逢ふとか、左足から寢床を出るとその日惡い事がある、とかいふ。

足と母性

左足が女性であるといふ事から、左足は母性として惠みとか女の生產力の象徵に用ひられてゐるが、それはすべての惠みを生み出す母なる大地と足とが常に接觸してゐて、其大地の力は足を通じて人間の肉體に入つてくると信じられたからである。希臘の神話にあるヘラクレスとアントイスの角力の話はこの點をよく說明しゐる。アントイスはその足が地上に接してゐた間は、土の神が力を與へるので負けなかつたのである。

足はかくの如くに大地の生み殖やす力を傳へるものと考へられたが、これは女の左足から初まつて、次第に轉じて男の足でも、又右足でも、或は足痕でも祝福や生み殖やす力を持つてゐるものと考へられるやうになつた。舊約の詩篇第六十五章には「また恩惠をもつて年の冕冠としたまへりなんぢの足痕は脂したたれり」とある。ルウテルは「主の步みは畑を肥えしむ」と言つてゐる。かういふ神樣の足の威力は更に轉じて、英雄とか王樣とかの歷史的人物の足の威力に後には移つてきてゐる。エピルスの王ピルスは脾臟を病める者に右足を觸れて之を癒したといふ。この王樣の右足の指はよほど靈驗があつたと見えて、この王樣の死體を燒いた時にも、足の指丈は燒けずに殘つたといふ話がある。セルビアの王ステフアン、ヅシヤレ、ネマニツチが第十四世紀の半ばにラグサ共和國の王として入國してきた時、坊さんが之を祝福して「我陛下の步み給ふ所、すべてに薫高き花よ、萠え出で開け」と言つてゐる。

右のやうな男の足の關係は、寧ろ第二の意味であるが、第一

の女の足が生み殖す力の象徴として用ひられてゐる例は頗る多い。ナポリにある聖アンナの奇蹟を行ふ足はその一つである。これは十字軍の時に東洋から分捕つてきたもので、千八百八十八年にナポリの人の妻の守り神になつて、そこの會堂に祀られる事になつた。ナポリの女はこの足に觸れたり接吻したりして、健康と幸福と子供の出來るのを祈るのである。聖アンナは南伊太利にゆくと姙娠した女や産婦の守り神になつてゐる。

高い岩の上や泉の傍に女神が殘した足痕といふものは、どこの民族でも敬はれてゐる。その足痕を裸の足で踏んで、御恵を受けやうとするのが普通のやり方だ。

女の足と花

女の裸の足が生み殖す力を持つてゐるとされてから、女神の奧深い足痕から、種子や花や實が生へ出るといふ傳説を生じて、しかもこれが殆どどこの民族にも見る事の出來る物語や童話を生んでゐる。古代埃及、印度、羅馬、獨乙の至る所に、貴婦人とか女王とか、或は哀れな下女の足痕から花が咲いた話がある。ブレンタノの「ラインとミユツレル、ラアドラウフの童話」の中にも、王女の歩いてゆく足の下から、さまざまの美しい高貴な花が咲き出る物語があるし、カルデロンの「私の萬能の女主人」といふ脚本にも、エヌスの足痕に優しい花が咲き出す話がある。瑞典の童話にも魔術師が好い娘を奪ふに、娘の足の下から薔薇の花が咲く事を以てした話がある。印度では美しい女が足を飾つて、ゴルダメカといふ貴い花に觸れると、その花が咲くといふ。波斯の話では、後家が新しい亭主を夢中で探して歩くと、その足痕から三色菫が飛び出してくるといふ。その三色菫の花は死んだ亭主の暗い目で、別れた女房を地面から見てゐるといふのである。

女の足と鵠

女の足の生産力の意味から更に、子供の生れるのは鵠が子供を持つてきて、母親の足を嘴で噛むのだといふ傳説がある。この場合に鵠を、、、ものだといふ人もあるが、これは酷である。鵠は希臘時代から生れた物を運ぶ鳥であつたと稱せられてゐる。

足痕

唯足ばかりでなく、足痕といふものにも、力と生命と、神又は人間の個性の本質が藏されてゐるやうである。これは西洋ばかりでない、ほかの民族にもこの點が多少認められる。ある人

の足痕に惡い事をすると、自分にも惡い事があるといふ類である。獨乙のメクレンブルクの迷信には、泥棒の足痕に棺を打つ釘を打ち込むと、その泥棒は死ぬといふ。同じくウエストフアレンの話には、泥棒の足痕をそつと取り上げて、それを皿の中に入れて、そのまはりに棺を打つ釘で筋を引き廻すと、泥棒の足の裏に傷が出來て、盜んだ物が還るといふ。トスカナの魔女は火曜日と金曜日に人間の足の形を押したものを集めて、その人間に害を加へるのである。ある黑んぼの女にこんな事をしたものがある。夫婦の足痕を發見すると、男の足痕には犬の毛を女の足痕には猫の毛を入れて、その儘埋めてしまふ。すると夫、婦仲が惡くなつて、二人は犬と猫のやうに成るといふのである。

或は南スラブの女は自分の愛する若者の足痕に、金盞花を植える。すると男はこの女が戀しくなつて、きつと女を訪問にくると思つてゐる。尤もオルデンブルクの迷信には、姦通した者の足痕を踏むと、足を折るといふから、足痕についても決して好い事ばかりある譯でもないやうだ。

なぜ足が情欲的か

かういふ風に足には生命が隱されてあり、足からは惠み又は豐穣の精神が流れ出るもので、殊に女の足の母性といふ事から、ここに一種の色情的刺戟が生れてきてゐる。これは昔から至る所の人間の間に擴がつた想像であるか、なぜ特に歐洲では足にそんな性欲的想像が附隨してきてゐるか、もつと情欲と直接關係ある部分が度外視されて、足といふものに纏つた色情的想像が存在するか、といふ問題になる。

その原因の第一は足が常に物を生む力のある「母なる大地」に接してゐる感念から來てゐる。足は人間を動かして、しかも之を支へてゐる器官である。母なる大地の力は常に足を通して人間に傳つてくるものだ。かくの如くに希臘人を初め多くの民族が考へてゐたのであるが、もつとその前の事を調べてみると、人間の腰から下が足ではなくして、蛇のやうな尾に成つてゐるか、或は他の動物の足の恰好をしてゐて、大地ともつと深い關係になつてきてゐるである。

これが殊によく現れてゐるのは、神樣や惡魔の類に、その足が動物の足の恰好をしてゐるものの多い事である。馬の足、驢馬の足、バツカスのやうに牡牛の足などがある。プルタアクの書いた所によると、エリア人の女は牡牛の足を持つた神樣を、喇叭を鳴らして水の中から呼び上げ、神樣は女の處にやつてきて、これに生産といふ事を授けたとある。獨乙の迷信によると惡魔の足は馬の足である。ベルヒタといふのはカロリンゲン王

朝の先祖の母であるか、その足は白鳥の足である。傳説に出てくる小びとは牝牛か馬の足である。西洋の傳説の小びとは地中に於ける生産を象徴したものである。ペルラリニンツ、ペルラプリンツ、ペルラプフは、生と死を授ける三人の處女の神様だが、これも白鳥か山羊の足を持つてゐる。山羊は元來が生産を現した動物で、生産といふものの母性の神様は山羊の足の女だ。

サバの女王は獨乙の傳説によると白鳥の足を持つてゐる。佛蘭西の古い彫刻にも水を渉るサバの女王の足を動物の足にしたのがある。バルキ女王の足の話はもつとそれよりも古くて、紀元六百五十年に出たエステルの書にこんな話がある。ソロモンがバルキ女王を硝子の部屋に待ち受けた。女王はソロモンが水の中に腰を掛けてゐると思つたので、着物の裾を少し端折り上げた。するとソロモンは女王の足に毛が生へてゐるのを發見した。そこで「女王の美は女子の美なり。されども女王の毛は男子の毛なり。毛は男子の扮飾なれども女子にありては醜にして見るに堪えず」と言つたとある。ペルシヤのタバリの記錄によつても、このバルキ女王の足に山羊の毛が生へてゐるのは、母親が惡魔だつたからだといふ。中にはバルキ女王はアラビアの森の惡魔で、死骸を食ふといふグウルを思はせるやうな、驢馬の足を持つてゐたともある。かういふアラビア、ユデアの傳說の性質は、明にバルキ女王の惡魔的なテルル質の發生由來を示してゐるもので、この驢馬の足といひ、酒の神バッカスの牝牛の足といひ、惡魔の馬の足といひ、ペルヒタの白鳥の足といひ、相通じて動物的で原始的な意味を持つてゐるのである。

女の腰

このやうに足といふものは人間の體の中で最動物的であり、半人間的であつて、「母なる大地」と形の上にも質の上にも關係が深いが、此足は更に人間の前のものに最近い場所にある。昔の單純な想像によると、人間の生み殖す力は決して上からくるものではなくして、下から上つてゆくものだとしてゐる。從つて多くの民族の信じてゐる所によると、足の上の部分即ち股とか腰とかいふ場所に、自然の生み殖す力が集り又はそこから發生するものだとした。聖書を讀むと至る所に出てくる言葉に「かの腰の種子」とある。ラテン語の「女」といふ言葉は「股」といふ言葉から轉じたものである。ヂオニソスは豐滿なる生產の神であるが、これがツオイスを母の膝から切り取つて、自分の股の中へ隱し入れ、そしてツオイスを自分の股から生んだと傳へられる。ギリシア人の神話には、かうした二度の誕生や生命の

不滅の生産を取扱つたものが多いが、從つて股に、殊に母性的の左の足や股に、象徴的な輪や眞珠の紐を巻き付けたものが彫刻や壺の模様に多く現れてくるのである。

女の股や女の腰を淫猥極まるものと見るのはカソリック教である。この宗派の僧正職に任ぜられる坊さんの爲の儀禮文書によると、最後の塗油式に女の足に油を塗る事を坊さんに禁じてゐる。女の腰に油を塗る時の祈禱の言葉にはこんな文句がある「この神聖なる塗油により、神はおん恵深き慈悲の爲に、なんぢが常になんぢの腰の快樂によりて犯したる罪を許し給はん」。瑞西のバアデンといふ處ではこんな事が行はれる。若い不姙性の女は夜そつとエレネンロツホといふ温泉に行つて、その温泉の噴き出してくる筒の中へ腰まで浸つて、それで必ず子供が出來ると自分で信じるのである。こんな風習は日本にもいくらもある事だ。西洋でも子供の出來る温泉の話は、千五百七十八年に出た本にすでに昔の迷信だと書いてある位だから古いものである。ポオランドの迷信では女の腰は繁榮とか幸福とかのまじなひになる。

この女の腰又は足と情欲との生理上の關係も隨分昔から論じられた所で、例へば足の不具になつた男女は、滿足の足を持つた者よりも情が深い、とは西洋でも言ふ所である。支那の女の纏足による運歩の風情と支那人の色情との關係も、この點から容易に説明が出來やう。

歩きつき

女の足と情欲との關係から問題になるのは、その歩きつきである。女がびつこをひいたり、或は尾を振る形で歩くのは、別にある刺戟を與へるものである。印度のカリダサの戯曲の中で、王様が愛する女の歩きつきにすつかり惚れ込んで「神の如く美しき者かな。その腰重荷にして徐ろに歩まざるべからず、白鳥の歩みを持てる優しき女なるかな」と言つてゐる。腰の邊に肉が多くて、重さうによろめきながら、腰の上で揺られるやうな歩きつきは、白鳥のよたよたした歩きぶりに似てゐるが、これが上品な印度の女の特に刺戟する美しい點の一つとされゐる。

ゲルマン民族の間では、立つてゐる時でも横になつてゐる時でも、足をばたばた上げたり下げたりする運動を、一種の快樂に考へてゐる。例へば百姓の女は藁の俵を足で踏んで一種の快樂を高める。アンドレアスの晩、トオマスの晩には、眞夜中に裸の足で寢台の縁を踏んで、魔法の文句をいふと惚れた男が現れてくるといふ迷信もある。傳説によるとトオルといふ親父が

實らしておいた穀物を、その娘のトルヴルが足で踏んで穗から實を出す、と言ひ傳へられてゐるが、昔は穀物を穗から出すのに、から竿で打たないで足で踏んだものである。かうして穀物の穗を踏んだりするには、强い大な足が便利である。そこで大な足を持つた女は特に生産力が强い、といふ意味が生れて來て、南スラブあたりには、大な足の人間は前のものも大い、といふ言葉がある。獨乙の迷信では大な足の女を、「子供の足」を持つといふ。子供の足とは大な幅の廣い女の足の別名で、これは生産といふ意味ばかりでなく、姙娠をした女を暗示したものだ。「大な足」といふ事は姙娠してゐる意味の言葉である。これは腹の子供の重荷が母親の足にかゝつてゐる所から來たものだ。大な足なればこそ、よく姙娠の重い負擔をしつかりと支へてゐられるからである。お産の惡魔のベルヒタは頗る大な足を持つてゐる。子供を持つてくる惡魔のベルヒタは、足をぱたぱた鳴らし乍ら現れてくるものである。この足ぶみは恐らく一種のお産を助ける意味らしい。同じく聖ルチエがお産の惡魔になつて現れる時は、足が大いか靴を大くしてくるものだ。

獨乙の傳説に出てくる小びとは、地下の火によつて地上に蒔いてある種子を育てる、といはれてゐるが、この小びとが又靴を造ると普通言ひ傳へられてゐる。小びとの足痕を探し廻つてはいけない。もし物珍しく小びとの羊の足の痕を探すと、すべての豐年の惠みは止まつてしまふといふ。羊は勿論生産の象徵である。

足の裏をくすぐる

足と情欲との關係はまだある。それは足の裏の纖細な神經がくすぐられると、色情的な快樂が交つてくる事である。この足の裏をくすぐる事は、ロシアの戀愛秘法の一つで、蒙古韃靼の民族から傳つたものらしい。ステルンの「ロシア風俗史」に書いてある所によると、ロシア皇后の禁裡には、足の裏をくすぐる丈の役目の女が大勢公然と抱えられてゐて、皇后の快味を增大させるといふ事以外には仕事がない。これを公然と宮中の役目にしたのが、女皇アンナ、イワノウナである。この女皇が死ぬと王子のイワンはまだ赤ん坊であつて、獨乙のブラウンシュワイヒから嫁にきたアンナ、レオポルドウナが攝政になつた。この女攝政のお傍に仕へた足の裏係りの女は六人を下つた事がなく、この六人は又競爭でその女攝政の快味を增す事に力めたといふ話である。かういふ女は足の裏をくすぐり乍ら、猥雜な物語をしたり淫な唄をうたつたりした。エリザベタ女皇の時代

にはこの足係りの女は隊を爲してゐたものださうだが、それがみんな上流の名門出の女だつたさうである。

尤もこの風習は敢てロシアの秘法ばかりではない。ギリシア時代の彫刻に、森の神パンや酒の神のお供のサイレネスが、自分で自分の足の裏をくすぐつて悦んでゐるものを、羅馬や巴里の美術館に見る位である。

足の匂ひ

足に關する情欲的なもので、近代的産物は足の匂ひである。裸で歩く人種や度々體を洗ふ人種には、足の匂ひの感覺はない。歐洲北方の國民で、寒さの爲に足をなるべく强く卷いて被ふておく爲に、足に汗をかく、洗ふ事が少い。從つて古くなつたチイスのやうな匂ひを發するのである。足の匂ひを最好むのは、女の足に接吻し、舐め且吸ふを厭はない、足を愛慕崇拜する男である。

裾に隱れた足

女の足が裾に隱れ、靴下に包まれてゐる場合に、偶然その隱れた所が露れた爲に、異常な性的昂奮を感じる狀態は、日本にも久米の仙人物語以來澤山ある話である。勿論これは衣裳に包まれ隱される事と、これが露出する事との對照から、印象が强烈になるばかりではなく、足から膝へ、膝から上へと想像力が誘引されるからである。ストリンドベルクの小說「痴人の懺悔」に、主人公が女の靴下や膝の下に美しい靴下止めを見て、腦中が幻想に恣にされさうになつて頭を振り向ける處が書いてある。俄雨に裾をよごすまいとする女、淺瀨の水を渉る女の姿は、日本でも西洋でも風俗繪の盡きない題材である。

衣裳に隱れたのではないが、步いてゆく女の足の裏が白く閃いて見えるのは、後から行く男の目を刺戟するものである。印度の女にはその足の裏を特に美く見せる爲に、赤い漆をそこに塗る風がある位だ。

然し裸の足を見せる事を、賤しい眞似だとした風習は、昔から又いくらでも實例がある。プルタアクの書いた物によると、埃及の女がはだしで往來を步く事を、すでに醜いものだとしてゐる。支那の繪で足を露はした女があれば、それは娼婦だと見てよい。ウオルガ河畔の土耳共の女、中央亞細亞の土耳古の女、ランゴバルドの女も、いづれも裸の足を見せまいとする仲間である。

獨乙の中世では女の足を見る事を以て、死刑に値する罪だとしてゐる。尤も女が從者の前で眞裸になる事は差支へない。中

世紀の僧院の物語にも、女の裸の足に誘惑された哀れな坊さんの話は隨分ある。ヤコブ、ド、キトリイの話には、神聖な隠仙を誘惑したひどい女の事がある。その女は道に迷つたと稱して、一夜の宿を乞ひ、爐にあたり乍ら着物を脱いで、裸の足を見せた。隠仙は遂に墮落したといふ事である。キトリイの本には賢人アリストテレスがアレキサンデル皇后に誘惑された話も書いてある。皇后ははだしで、散らし髮で、アリストテレスの傍を歩いては誘惑し、遂に目的を達したとある。

　プラトオムの第三談話の中にはこんな事が書いてある。羅馬時代の處女又は處女らしく見せやうとする女は、その足を出來る丈長い裾に隠して、歩く時にも決してその足が人の目に觸れないやうに、ごく内輪につゝましく歩いたものださうである。日本の女の長い裾はどんなものであらうか。これを今日の膝を危く越さうとする短い裾や、膝の下までの靴下の女風俗に比べると、風俗の變遷もおもしろいものだ。

　十六世紀、十七世紀時代の西班牙の女は、襟や肩や胸なぞを露はす事は全く勝手であつたが、足丈は決して人に見せなかつた。靴をはいた足でさへも、禮儀正しい女はそれを他人の目に曝す事を以て死に當る恥だとした。それで歩く時は長い着物の裾で隠し、馬車から下りる時も足を見せないようにしたものださうである　皇后の足の話なぞをすると罪に成る。フイリツプ四世のお后と決まつた女に、ある人が町で高貴な絹の靴下を贈物として獻上した。するとその女のお伴をしてゐた男は忽ちその靴下を側に投げ捨て「西班牙の皇后は足なんぞをお持ちでない、不行屆者め」と叱りつけたといふ。ドルノイ伯爵夫人の西班牙紀行を讀むと、西班牙の女が男の御機嫌をとる最後の方法は、自分の足を見せるのださうである。これを「最後の愛の贈物」と名を付けてある。

踊り子の裸の足

　裸の足が情欲的刺戟になるといふ實例は、今日いくらでも至る所で見られる。宴席やレビユウの舞台の上で、大勢の女が裸の足を揃つて振り廻したり跳ね出したりして踊るのは之が爲である。ロココ時代にマダム・ド・サン、ユベルテイといふ巴里のオペラの有名な踊り子で女優が、足をむき出しにして裸の肩で散らし髮といふ姿で舞台に出て大に喝采を博した。すると次の日には早速警察から止められて、今度は肉色の靴下をはいて、薔薇色の英吉利絹の着物に髮を着けて舞台に出た。見物は一層刺戟されて拍手は前よりも盛だつたさうである。キルヘルミネ、シユリオデル、デフリエンは有名な獨乙のオペラ歌ひであ

るか、これも有名な足の持主である。この女が古いオペラの「瑞西の一家」のエメリネで出た時は、これも裸の足で舞台に出た。それは雪のやうに白くて、繊細な青い靜脈が透いて見える足であつた。尤もこの時の世評では、裸の足は裸の全身と同じだと主張する人が多くて、善良なる風俗を害するものだとされた。近代で最この裸の足で歐洲を驚かしたのは、今もまだ生きてゐる踊り子のイサドラ・ダンカンである。ダンカンの踊りの形は希臘の彫刻を理想として、それでショパンを踊りボチセリを踊らうとした。體には輕い薄い物を着けた丈で舞台に出たから、戦前の服裝と禮儀のやかましかつた社會は頗るおどろいたのである。

ダンカンのお弟子のモオド・アランも同じだが、もつと進んだのに至つては、ミス・ド・グレイは舞台の上で着物を脱ぎ、靴や靴下を脱ぎ捨てて、朦朧たる光の中で有名な幻の舞踊トリビイを踊つた。尤も今日の歐洲では裸の足を見せる位何でもない。乳を見せ、腹を見せ、辛うじて前を隱す丈である。數十萬弗の保險を足にかけたといふ米國の踊り子の話もいつか聞いた事があつた。

足の飾り

足を一層美くする爲に、これにさまざまの金銀青銅細工の裝飾品を着ける事も多く見受けられる。印度人の高貴な女には、歐洲の女が指に飾る寶石に優るとも劣らない丈の寶石を足の親指に飾る風がある。踝にも金や銀の輪をはめて、その輪に大な眞珠を飾る人もある。印度の女には足の上や裏に赤い漆を塗つて、男の目をひかうとする者がゐる。今の歐洲では爪磨きのマニキュアの店で、大概足磨きのペディキュアもやる事は、御承知の人も多い。野蠻人の女には金屬製やその他の材料で造つた輪を足首につけたり、腓に飾つたりするものが多い。

小さい足

小さい足は男の目に殊に美しい風情を想はせるものだ。千八百九十三年には米國シカゴで一番小さい女の足の競爭會があつた。その時の一等賞の女の足は、十九センチメエトル半であつた。支那の女の纏足は誰も知つてゐる。殊に小さい足は裾の下から露れる時が最美しいので、色情美術に好んで用ひられる動機だ。尤も小さい足ばかりではない、可哀いい小な靴や上衣は常に情欲的である。

足の愛慕

かういふ風に足を愛慕する感情は、決して近代ばかりの產物ではない。足を愛慕する男にとつては、足を眺めるのが無上の快樂で、或は足に接吻し、足を抱き、或は足に踏まれても構は

ない。クラフト、エビングの說く處によれば、足を愛慕崇拜するのは、服從の精神から來てゐるといふが、女の足に踏まれ、壓され、蹴られて快しとするのは崇拜に基く服從かも知れないが、裸の足に接吻し、匂を嗅ぎ、抱き、舐めるに至つては、明に性欲に基く愛慕である。少年時代の追憶に女の足に關する暗い夢を持つてゐる男は少くあるまい。或は女中の裸の足に少年の足が偶然觸れたとか、乳母の裸の足を見てそれが初めての情欲の刺戟になつたといふ話はいくらでもある。レチス、ド、ラムブレトスは子供の時分にある百姓の女の足に挾まれて、足の愛慕者になつたのは有名な話だ。かういふ足のマゾヒズム又はサヂズムの場合では、女の足は明に情欲の器官又は象徵である。足で踏みつけるなぞは、一種の强姦かも知れない。

美しい女の足を崇拜愛慕するのは、北方神話にさへすでに出てゐる。冬の巨人チアシの娘スカヂイが美しい男の足を見て婿選みをしたといふ神話がある。十四世紀の詩に騎士スタウフエンベルク物語といふのがある。この騎士がある妖女を見染めたが、女はもし騎士がほかの女に心變りをしたら、公衆の前で自分の足を露すと誓つた。ところが騎士は王樣の叔母と遂に結婚するに至つた。するとこの結婚の披露の席上で、廣間の天井から膝までの人間の足がぶら下つて來た。これが象牙のやうに白い美しい足で、しかも天井に何の痕も殘さずに皆の目の前で消えてしまつた。勿論これは妖女の足で、騎士は遂に運命を覺つていづことも無く立去つたといふ話である。この妖女の裸の白い足といふのは、輝くばかりの白い體を持つた白鳥の處女の傳說に關係してくるのである。

足を美く見せる法

このやうに女の足を愛慕崇拜した時代は、ルイ十四世時代を以て絕頂とする。ところが今の日本では段々足をむき出しにする風が盛になつてきたにも拘らず、美しい足はごく稀だ。或は全く無いといつても好い。日本の女の胴は醜い程長いのに、その上に足は見るに忍びない位短くて非美術的だ。足が體に續く關係がまづくて、足が短過ぎたり、曲つたり、しまりが無かつたり、太過ぎたり、不細工だつたりする。もう少し何とか恰好のよいものにしたいと思ふのは、恐らく僕一人ではあるまい。ここにごく簡單な誰にも出來る方法で、親を怨まずに多少手を入れる方法がある。これをまづ今の日本の洋裝美人に勸めたい。それには第一にもつと形の小さい靴をはく事と、第二にもつと踵の高い、思ひ切つて踵の高い靴をはく事、第三にもつと肉にぴつたりと合ふ薄い狹い靴下をはく、この三つである。靴が小さければ足は小さく見える。踵が高ければ、足に變化が出來て可愛ゆく見える。薄い絹の靴下をはいた足は、裸の足より遙に誘惑的である。今の女のやうに、だぶだぶで、踵が草履のやうに平の靴をはいて、木綿の靴下に皺を寄らしてゐては、なるほど女の足の美などは當分日本では問題にならないなあと思ふ。これも敢て僕一人ではあるまい。」

劇壇百年の迷夢を破る

邦枝完二

悲しき芝居王國

秋空一杯に各々の旗印を飜へした、見るからきらびやかな「眠りの塔」が、幾十百ともなく、鐵筋コンタリートで組み上げた砦の中に、高々と聳えてゐた。砦の外に立つた二三の少年は、この塔の土臺に白蟻の附いたのを知つて、これを注意すべく、塔の上に在る人々の名を叫びながら、頻りに石を投げてゐた。が、悲しいかな少年の力では、石は漸く塔のなかばに達するに過ぎなかつた。塔の上の人達は、兩三度顔を出して投石者を見たが、石が遙かの眼の下で落ちるのに氣付くと　少年が誠意を盡した心遣ひなどは知らうともせずに、一片の冷笑を投げた儘、再び甘疑の夢に落ちてしまつた。「馬鹿め。お前達がどんなに汗を流して投げたところで、ここまで石が屆くものか。無駄な眞似はしねえがいい」――聲が小さいので、はつきりとは聞えなかつたが、窓から顔を引込めた時の彼等の樣子には、さうした冷然たる色が、憎いまでによく讀まれた。

時が經つた。少年は倦むことなしに、毎日同じ行爲を續けてゐるうちに段々大きくなつた。が、未だに彼等は「眠りの塔」から降りやうとはしなかつた。しかも、少年の力と勢とが加はるにつれて、石は次第にその高さを增して行つ

た。そして遂に何年かの後に、最初の石は目的通り、見事に塔の頂上を射たのだつた。

想ひもかけぬつぶての一撃に會つた彼等は、愕然として永い眠りから覺めた。が、時は既に遲かつた。白蟻は塔の柱の眞芯(まつしん)を、思ふが儘に喰ひ破つて、彼等が騒げば騒ぐほど、あわてればあわてるほど、塔は梢のやうに搖ぎ出した。勿論飛降りるだけの勇氣のない彼等は、唯徒らに、喚き叫ぶばかりだつた。

さて、これは決して、偶然に出來上つた、一篇のお伽噺ではない。多數の因果的强氣病者の立籠る芝居王國が、これと同樣な運命のもとに、百千年の耐久力を豫期して建てた、高い「眠りの塔」を崩されるのも、極めて近き將來に迫つてゐるのだ。見たまへ、惰氣相繼ぐ各都市の因襲的劇場は、明らかにそれを物語つてゐるではないか。興行者を見よ。俳優を見よ。更に各部所に就て働きつゝある從業員達を見よ。彼等は常に、己が乘る舟は南風に帆を孕ませて、波靜かなる海上を、いとも安全に走るものとのみ信じてゐるのだ。雲の出づるを見て、偶々嵐の來ることを語る者があつても、左樣な警告は、狂人の譫言として退けられるに極つてゐる。劇海に吹く風は、常に順風であるのが當然とされ、千に一つも嵐があれば、何か特殊な神力に依つて、舟はその圏外へ出られるものとさへ、盲信し切つてゐるのだから堪らない。——悲しき芝居王國。そこに住む人々のすべては、各自が、己れに勝る智者はないと己惚れてゐるのだ。

事々物々、日に月に進歩せざるなき今日に於て、十年一日の如く、否、百年一日の如く、何等大海の激浪を蹴ることなしに、河川の緩流に棹をさしつゝ、しかも大魚を得んとしてゐる者が、この都市居住者の樞要の地位を占める者の中にあると云つたら、人々は定めし、その迂遠にして貪欲なるに呆然たるものがあらう。或は、彌が上にも生活爭鬪の劇しい現代に、そんな馬鹿氣た者がゐやうとは、信じられないかも知れない。が、これは決して讀者の好奇心をそゝるための、奇言や弄句ではないのだ。

讀者よ。試みに各都市に散在するあの大伽藍の如き建物の中に、足を踏み入れて見たまへ。現在堂々たる藝術の殿堂を構へて、四隣を壓するあの大劇場の内容が、川に依つて鯨を獲んとするものと、同じでないと誰が云へよう。實際どの一つを見ても知れる通り、彼等は、蠟燭の光の下に生活を續けてゐた數十年以前から、今以て唯の一歩だに出てはゐないのである。彼等は云ふであらう。貴樣の眼には、あの巍然たる建物は見えないのか。あの煌々たる照明は這入らないのか。あの燦爛たる裝飾美は見えないのか、と。幸にして盲目でない私には、如何にも

列擧された物、その他樣々の新樣式を豐富に盛つた諸設備は、有難いまでによく見える。が、誤解してはいけない。私の求めむとするものは、百の形式美ではなくて、一の內容精神の進步に外ならないのだ。

成る程、今更その一々を指示されるまでもなく、芝居王國の形式的外觀が、驚くべき速力で進步發達したことは、呶々するまでもない。あらゆる劇場は鐵筋又は鐵骨となり、客席には椅子を据え、廊下には絨氈を敷き、役者は技藝委員と稱し、作者は天鵞絨の服を纏ひ、出方は燕尾服に改まる等、縷々盡くるところを知らぬ有樣は、正に之れ大正文化の標本とも謂ふべき華々しさを思はせるものだ。が、その內容に於て、その精神に於て、よくどれだけの進步を爲し得たであらうか。更にもう一番忌憚なく云へば、昔日の芝居者根性から、眞實に脫した者を、幾人數へ擧げられるであらうか。おそらく全國幾萬の劇界生活者の中から選んで、十指を屈するにさへ、一方ならぬ努力と困難とを感ずるに相違あるまい。

そこには、十重二十重に固められた城壁がある。そこには、嘘と空虛な權力とで築き上げられた櫓がある。そこには、追從と不誠意とで掘られた溝がある。そこには、金力と秘密で磨かれた劍がある。そしてそこには、いつ陽の目を見るとも覺へぬ密雲が層を深くして動かない。口に文化を唱へながらも、芝居者的精神の腸に沁み透つてゐる人達は、一步出づる者が、一步先に新らしき土を踏むの道理さへわきまへることなしに、この城廓の奧深くに立籠つてゐるのだ。猜疑と嫉妬の內爭を續けながら、しかも、外敵に當るべき何等の用意も爲すことなしに。

……

たとへ指を屈することの稀なるにせよ、雨中猶よく陽の光を仰ぎ得る日が、悲しき芝居王國に、果していつまで續くであらうか。一度その城門を叩いた人なれば、思ひなかばに過ぎるものがあらう。午後三時に眼が覺めても、一日中眠つてゐた者より、まだ、そこにいくらかの取柄はあるのだ。この意味に於て、私は芝居王國の城內に向つて、敢て第二第三の火矢を射掛けやうとするものに外ならない。

興業者は弱者?

およそ現代程、演劇の興行者が、弱いみじめな立場にある時代は、過去のどの演劇史を繙いても、容易に發見することは出來まい。これを一々の研究に俟つまでもなく、一目瞭然として事實が事實を語つてゐる。俳優に對する彼、官憲に對する彼、上演脚本に對する彼、演藝記者に對する彼、俳優の後援者に對

する彼、その他種々の關係事項に對して、現代の興行者が執りつゝある態度併びに知識からは、遺憾ながら、眞に敬服に價する一項をも、摘出すことが出來ないのだ。

明らかに時代が異つてゐた。明らかに生活が單純であつた。が、それは多く世間一般の過去を指すのであつて、芝居王國に於ける過去の生活は、寧ろ今より遙かに複雜であつたことは、各種の記錄が傳へてゐる。因襲と秘密から生れる一種の力强い圍の中には、眼に見えない幾筋もの絲が引かれてあつた。そしてその絲には、一本一本に、相當の威力が籠つてゐたのだ。興行者の太い手が、ある確信をもつて、その絲の元を掴んでゐたのは云ふまでもない。無論今でも興行者は、引くべき絲の一端を掴んでゐる。しかし、形の上では同樣であるに拘らず、事實は雲泥の相違があるのだ。絲を掴んだ彼の手には、何等頼るべき力が籠つてゐるのでもなく、偶々力の籠ることがあるとすれば、それは「金」に繫がる絲を、先方から引かれる時のほかは、斷じてないのである。

俳優は暴君にも等しい振舞をしてゐる。即ち、興行者の權威が地に落ちた結果、往時とは主從轉倒の形となつて、興行者はひたすら俳優の機嫌を損じまいと努め、俳優は「おれが儲けさせてやる」といふ鼻息で、芝居國を濶歩してゐるのだから呆れる。勝てば官軍敗ければ賊。それでいやなら舞台へ立たなくとも、三度の飯は立派に食つてゆけるのが、今の所謂幹部俳優なのだ。昔の俳優には、座頭とか書出しとか云はれた者の中にも借金で鶴屋の前が通れなかつた、といふ人なども珍らしくはなかつた。それが今では、幹部とか大名題とか名の付く者は、その中のどの一人を拔いて見ても、なまじの興行者などよりも、遙かに富んでゐる。日歩三十錢の金を借りてゐる興行者があつても、驚くには當るまいが、同じ利の金を貸し込んでゐる俳優があるに至つては、聞いただけでも、びつくりせずにはゐられまい。今の劇壇は、かうした主腦俳優を中心として、その下に働く興行者に依つて出來上つてゐるのだ。考へるまでもなく、良い惡いの問題は、おのづから容易に解決されるではないか。

興行者の權威が地に落ちた原因には、大別して二樣あると思ふ。その一つは、興行者自身が全くの素人であつて、演劇に對する知識の極めて貧弱だつた事。他の一つは、玄人ではあつたが、金と人格との持合せに乏しかつた事、この二種であつた。而して兩者同樣に缺けてゐたのは、好きアシスタントを持たなかつたことだつた。その周圍には、餘りに芝居者的の玄人と、餘りに芝居者的の素人とが多過ぎた。前者は緣日の見世物小屋で働く男と同樣な、恥づべき行爲を敢てし、後者は他人の帽子

にたかつた埃までも、いちいち氣にするやうな、小さな量見に終始してゐる、この中に立つて、しかも俳優に一歩も二歩も讓つてゐる興行者だ。假令意見があつたとしても、よく行はれる筈のないのは、必然過ぎる程必然だと云はねばならない。

かりに彼に藝術的鑑賞眼の持合せがあつたとして、しかも彼が選定した戯曲を上演すれば、興行的にも成功に極つてゐるとしても、俳優が新作物の仕勝手を嫌うか、または新たにセリフを覺えることの退儀さに、首を横に振ることがあれば、興行者の權威などは、芥粒のやうに飛び去つて、忽ち二の句が繼げぬ有様となるのだ。十年一日の如く、舊派ならば「大倉卿」とか「廿四孝」とか◎新派ならば「己が罪」とか「不如歸」とかを繰返して、演劇を腐つた鯛以下に下落させてしまふその罪は、興行者の不見識にあらずして何であらう。幹部俳優の横暴をなじる前に、私は先づ、興行者の不見識を攻めずにはゐられないのだ。僅かに自己の使用人の一少部分だけが、意志の儘になるのでは、餘りに心もとないではないか。

現在の興行者は、内外に二つの敵を控へてゐるのだ。その一つは、當然味方であるべくして、實は大いなる敵に相當するところの俳優と、他の一つは、時に味方となり、時に敵となる千變萬化のわざを心得てゐる、各新聞社の演藝記者である。内部、にあつて、常に俳優にいぢめられてゐる興行者は、外部に向つては、更に手剛い相手を引受けねばならない立場にあるのだ。新聞社に在つては、他の記者とは、おのづから異つた取扱ひを受けて、餘り幅の利かない演藝記者も、一度劇場の玄關を跨ぐに及んでは、直ちに「お社の方」になり、「先生」になつて、赤の他人が見ては、まつたく以て空々しい程の待遇を受けてゐる。私は、新聞演藝記者の全部を指して、「幇間的野武士」だとは云はない。が、中にはこの言の如何に適切であるを思はせる者も、決して皆無だとは云へないのだ。

一興行者は云ふ。「芝居は弱い商賣です」と。演劇の興行なるものが、果して待合の如く、または博徒の如く、弱い商賣であらうか。彼自らが、演劇を然く弱い商賣だと信じてゐるならば、自らを卑しむことの、これより甚しきはあるまい。なる程、演藝記者が自己の新聞紙上に書く劇評の一言一句は、或る程度まで、一劇場の入不入を左右する力を持つてゐるに相違ない。しかし、演藝記者も亦天下の新聞記者である以上、良を否とする如き、全然相反した批評の筆は、執れるものではあるまいと思ふ。萬ケ一、弱い商賣といふに付け込んで、待遇の厚薄に因つて筆を天地するが如きことがあれば、眼のある觀客は、それこそ默つてゐる筈はないのだ。興行者が、もし實際に弱い

商賣であると信じてゐるのなら、私は聲を大きくして叫びたい。何故堂々と陣を張つて、强い商賣にならぬのか、と。いぢめられる事を豫期していぢめられてゐるなどは、男子としての面目が丸潰れではないか。

興行者よ。知つての通り、今の世の中は、弱くなつてゐたら切りのない時代だ。内外いづれに對つても强くなつてくれ。そして演劇の仕事が如何に尊いかを、より以上自覺して、伊太利亞の首相ムツソリーニのやうな見識のもとに、愛と誠意の努力を續けて貰ひたいのだ。

俳優の馬鹿悧巧

時に彌次馬になり、時に紳士面をする者に、代議士と稱する人物があり、時に博徒となり、時に市民代表となる者に、市會議員と稱する人物がある。時に馬鹿になり、時に悧巧になることを、家常茶飯の如くに實行してゐる者は、如何に變り種の多い日本でも、さう滅多にはあるまい。大正の代の俳優こそ、當に唯一のその變り種なのだ。

現代の芝居王國に於て、最も權力のある者は、何と云つても俳優である。彼等が舞台に於ける一擧手一投足は、直ちにその劇場の盛衰に拘るものとして、興行者はもとより、苟も芝居道の飯を食ふ程の者は、恰も大名の家來が、その主人に對する如くに、叮重これを努めるに吝でない。まづこの不思議に叮重な取扱ひが、俳優をして今日の馬鹿悧巧さを、自然に知得せしめてしまつたのだ。周圍が悪いのだと云へば、正にそれに相違ない。が、それよりも更によくないのは、當人自身でなくて誰だらう。太鼓を叩き、喇叭を吹く者があつても、當人にその氣がないとしたら、踊ることはおろか、立上ることさへ容易にする筈はあるまい。——偉がりたさの一心から、旦那とか先生とか云つて立ててさへ貰へば、ろくでもない飴屋の喇叭にさへ、いい氣になつて踊つてゐる。これが馬鹿の標本。給金をきめる時には、妻女を手先に使つて、一圓でも餘計に興行者から取つた擧句、右から左へ銀行へ運んでゆく、これが悧巧の標本だとある。大正現代の舞台藝術家は、其九分通りまでが、二筋の綱へ片足づつ上せて、巧みに觀客の頭の上まで渡つて歩くのだから物凄い。

しかし、單に小手先が器用なだけで、何等の氣魄も氣概もなく、唯金を儲けるためにのみ悧巧である人間が、自ら藝術家を以て任じ、他人からも藝術家扱ひにされることを望んでゐるとしたら、おそらくこれ程蟲のいい話はあるまい。今の俳優の多くが、表面如何にも悧巧らしく見せかけて、その實、とんだ馬鹿さを見せてゐるのに氣付かぬのは、己れの藝に努ることのみ

を知つて、あさましくも匠氣に急である結果、藝術家として最も大切な氣魄を全部沒却してゐるのに因るのだ。花柳界併びに、それを保護する一種の高等遊民を觀客として、これに媚び諂らうことを、自己の藝術以上に、大事な仕事と心得てゐるみじめさは、眞に藝術家の自負心を持つてゐる者ならば、到底よくし得る行爲であるまい。しかも、これをしも藝術家と呼ぶ義務があるとしたら、そこらに巣食ふ野太鼓共にも、一齊に藝術家の折紙を付けねばならないのだ。貪欲を滿して、尙且藝術家たらんと願ふは、彼等が日頃信ずる金光樣に、百倍になつて戻ることを祈りながら、程度を越えた寄附金をする心理と、何等異るところがないではないか。

二本の指の力が一本の指の力よりも强いことは、當然過ぎる程當然の話だ。しかも、これほど當然のことさへ、彼等は決して熟知してはゐないやうだ。上は座頭から、下は大部屋に轉がつてゐる、給金三十圓の下廻りに至るまで、「俺はおれ、お前はお前」の小さき爭鬪を、頭の天邊から足の爪先まで滿ち溢れさせてゐる。甚しきは、「あいつが死んでくれれば、おれがその後へ直るのだ。速くあいつが死ねばいい」と、斷えず私かに、同僚の不祥事を祈つてゐるのだから恐れる。表面上頻りに糊飾を盡すが如く見えて、その實敵同士の寄合と、些の異るところもないのは、俳優個々の根性なのだ。かうしてその多くは、己れの乘る舟を、己れで沈めてゆくのに氣付かず、白粉を濃く塗つて、色の戀のとたわいもないセリフを繰返してゐれば、觀客はいづれも大滿足だと信じてゐるに到つては、蓋し沙汰の限りと云ふより他に言葉がない。

舊幕時代の大名の當主は、多く馬鹿であつても事が足りてゐた。それは自ら表面に出て掌るべき、何等の用事もなかつたからだ。が、同じ門閥を貴ぶ職業であつても、俳優の方は到底左樣なわけには行かない。如何に股肱の弟子が掃くほどあつても、自身を陰に置いては出來ない仕事だけに、藝術上の馬鹿悧巧は、一見直ちにその人の價値を、判斷せしむるに十分だからだ。しかも私の最も遺憾に思ふのは、彼等がよくこの大名の眞似をして、聊も恥づるところなき有樣を、目のあたり見せられることである。腰元に伽をさせるよりほかに、腕のなかつた馬鹿大名の眞似などは、冗談にもすべき事ではなからうと思ふ。おんぶと云へばだつこと云ふやうに、彼等が必要以上の給金を貪りたがるのも、その一因は、かうした自墮落な、馬鹿大名的遊戲氣分が、頻りに騷ぎ廻つてゐるせいではなからうか。それにしても、「貧は天命だ。恥を知らぬ者は人間ではない」と喝破した、五代目團十郎の言葉の賢さが、沁々味はれてならない。

、俳優の給金に就て思ひ起すのは、天保年間、かの有名な水野越前守の改革に於て、町奉行自ら給金の取高に關渉した、あの親切なやり方だ。勿論その主意は高給を取る結果として、おのづから生活の奢侈に流れるのを嗜めるためであつたらうが、更にその好果は、爲政者が豫期しなかつたところにまで現れて行つたのだつた。即ち、役者の給金の上るにつれて、同じ率で昇るべき觀劇料が、給金の制限と同時に、一定の價格より以上に取る必要がなくなつた結果、好劇家は無理な小遣を算段せずとも、樂に芝居を見ることが出來るやうになり、太夫元は、役者に居直られる心配から、全く逃れることが出來て、經濟上に、この上もない安心を得た形となつた。

今の俳優の多くが、飽くことなしに金を欲しがるのは勿論よくない。がこの罪の一端は、正に警視廳當局にもないとは云へぬと思ふ。芝居のことと云へば、五分十分を爭ふ時間の短縮や、連中見物の取締りなど、有難がるには餘りに枝葉の問題が多く、ぐつと急所を摑んだ切れ味は、殘念ながら容易に見せては貰へない。ひとつ、もう一歩進んで、觀劇料騰貴の主要素である俳優の給金にまで、關渉してくれたらばどんなものであらう。八十餘年も前に、立派な前例のあることだ。タクシーの賃銀にさへ、どれだけ以上取ること罷りならぬと規定が設けられて、十錢の物を十一錢に賣れば、暴利令で取締られる時代なのだから、幹部俳優の給金を、廳令で引下げたからと云つて、少しも不思議はあるまいと思ふ。否、その結果高い芝居が安く見られるやうになれば、觀衆は小躍して感謝するに相違なからう。

馬鹿になることよりも、悧巧になることよりも、俳優は先づ、世の中には金より尊い物が、いくらもあることを考へて、同時に已が冥利を知ることだ。歷史ある演劇の興廢は、懸つて大名題俳優の双肩にあることを知つたなら、目先の欲や、已惚れにのみ終始してゐる時でないことは、明か過ぎるくらゐ明らかなことではないか

樂屋電燈下の闇

惡を惡とせず、善を善とせずして、因襲を素とする生活の出に、唾棄すべく、侮蔑すべき行爲の、公々然と敢行されつゝある、おそらく芝居王國の右に出づるものはあるまい。大阪の釜ケ崎の一部には、多くの手のつけられぬ無籍者が居住して、月に數回の定日を設け、「泥棒市場」と稱する、贓品の定期市場を開いてゐる。これには所轄警察署でも、實際手を燒いてゐる有様だ。私は私の愛する芝居の樂屋を、これと同一の場所だなど

とは、決して云ひたくない。が、手の付けられぬ反省の皆無な點に於ては、或は相去ること遠くないと斷じても、敢て過言ではなからうと思ふ。

「泥棒市場」は、字にある如く、自ら贓品を賣ることを、標傍して立つてゐる市場だ。勿論これは良くないに極つてゐる。が、良くないうちにも、萬事をざつくばらんにぶちまけて掛つてゐるところに、どこか愛すべき正直さが窺はれる。これに反して、常時芝居國で實行されつゝある惡事は、それに携るいづれもが、一樣に涼しい顔をして、何等良心に恥づべき行爲はしてゐない、と云つたやうな、極めて善良がつた態度のうちに敢行してゐるのだから、寧ろ、憎むべき罪の程度に於ては「泥棒市場」より、上にあるのだとも云へよう。しかもそれは、何百燭光の電光まばゆい樂屋の中央に於て、一種の商取引の如くに行はれてゐるのだ。

第一に、最も劇しいのは、贈收賄の行爲なのだ。これは、贈らぬ者が愚であつて、取らぬ者は更に愚の骨頂だとされてゐるのだから堪らない。各自の身分に應じて、贈る者は必ず贈り、取る者は必ず取る。甚だしきに至つては、贈る者の遲いのに對して、取る者は少しの恥づる色もなく、催促をしてゐるのがある。贈賄者の主意は、自分のためによくして貰ひたい、といふのが、最初の出發點だつたに相違ない。が、今では最初の目的などは、ほんの附たりとなつてしまつて、譬へば店子が家主に家賃を收めるやうに、一種の義務觀念から差出してゐるのだ。——支配人、奥役、舞臺監督、頭取、狂言作者、大道具係、小道具係、照明係、鳴物師、衣裳係、床山、口番、これらは收賄者で、男女優、脚本作家、舞臺裝置者、賣店主等は贈賄者である。尚、收賄者で同時に贈賄者を兼ねた者に、小道具、衣裳、鬘、唄うたひ等がある、支配人、奥役、舞臺監督、大道具等の、自分達に直接主要關係のある者に對して、それぞれ血の出るやうな金を贈らなければならないのだ。

もしも一人の異端者が現れて、この重大な習慣を無視し、自ら清きを持する態度にでも出やうものなら、彼等は忽ち「芝居の定法」を蔑ろにした者として、極度の排斥を敢てする。唄うたひが、大道具に對して贈賄をしなかつた爲に、殊更山臺の傾込をゆるくして、演奏中眞逆樣に墜落したといふ話なども、めづらしくない一例である。そこで如何なる豪情我慢も、衆寡遂に敵しないことになつてしまふのだ。

一口に云ふ「芝居者根生」は、この附屆の時に於て、最も遺憾なく表裡を盡してくれる。實際義理人情のすべてを通じて、金で解決されることとの最も速いのは、芝居王國なのだ。或る大

劇場の食事が、價格に比較して、如何にも貧弱なことを話した時、その劇場の一從業員は「まづいのが當り前です。會社に多大の家賃を取られた上に、××に賣上の一割といふピン（附屆の意）を切られてゐるのですからね」と、その眞相を私に知らせてくれた。××と云ふのは、他からも色々と良くない噂さを聞いてゐる人物だけに、さてこそと肯かれたのだつた。客の災難はいふまでもないが、かうした人物が重要な位地にあつて、經營方針を樹ててゐる劇場を思ふ時、そぞろ悵然たらざるを得ないではないか。

俳優は、道具方、衣裳屋、床山その他に對して、初日に附屆をしたほかに、中日の附屆といふものをする。二十日間の興行ならば、十日目にこれを實行するのだ。自由勞働者が百日の稼ぎを、一日で取つてしまふ程の地位にある俳優達には、無論こんなことは、幾度重なつたにしても、どれ程の負擔であらう筈もないが、大部屋にゐて、僅に一興行に三十か五十の給金を貰つてゐる下廻り俳優に取つては、二重三重の加税にも増して、この上もない苦痛であるのは論を俟たない。しかもこの一圓なり二圓なりの附屆を怠つたとしたら、彼等は縫ぐるみの犬以下の取扱ひを、甘受してゐなければならないのだ。少しく祝儀でも貰へさうな客と見れば、平身低頭平蜘蛛のやうになつて、心にもない世辭や愛嬌を振り撒くのも、思へば彼等は、右樣な理不盡な金の出所を、給金以外に求めねばならぬといふ、悲痛な切實さに迫られた結果に外ならないのだ。どんな寒空にも、一枚しかない上さんの羽織を質に入れて、中日の附屆をしてゐる例を見た時、私は、白晝忽然として闇の襲つて來たのを覺えた。

さて、第二の不愉快なのは、「知れずに濟めば得策、知れたらあやまるまでだ」といふ、如何にも下等な根性を、多數の人達が持合せてゐることである。當に虫のいい泥棒根性だ。——例へば小道具師に、今度の舞臺で、農家の茶の間用の長火鉢がいるのだから、なるべく古いのを持つて來て來れ、と註文を出しておく。すると小道具師は百も承知でゐながら、當日になると、思ひも掛けない新らしい物を持つて來る。これは註文と違うぢやないかと云へば、さうでしたかしら、と白ばつくれた顏をする。そして、家に有合せの物がなかつたので、わざわざ新らしいのを買つて來たのだと云つて、折角の努力を認めてくれない事を、寧ろ不平らしく述べる。普通考へたら、如何にも馬鹿げた話なのだが、かうして、新らしく買込んだ火鉢の代を、興行者から取らうとするのだ——これは小さな一例であるが、小道具師のこんな小細工は、まだ罪の輕い方で、經營者の一員である幹部とか主任とか云はれてゐる連中が、ひそかにやつて

ゐる行爲の中には、まぬかれて恥なき鐵面皮の不快さが、數うるに遑なきまでに山積して、第三者の氣持を暗くしてゐるのだ。

善惡いづれを採るも、それは採る人の自由だ。が、陣を敷くのなら、堂々と敷いて貰ひたいと思ふ。山門に於ける石川五右衛門は、惡黨かも知れなかつたが、爛漫たる櫻花を見おろして、振煙管を喞へた所に、云ふに云はれぬ大きな茶氣がある。尠くとも昔の芝居者には、この茶氣があつたやうだ。現代の芝居國の住人は、茶氣も洒落氣もなく、唯々陰氣な惡事を、ちよこ〳〵と繰返してゐるに至つては、餘りに能がなさすぎるではないか。賄賂の多寡に因つて、役の輕重をきめたり、當然親切であるべきことが、不親切になつたりするなどは、米の飯を食つて生きてゐる人間の、斷じて取るべき手段ではないのだ。

下廻り地獄眞景

勞働者を研究する多くの人達は、世の勞働者中で最も氣の毒な者は、自由勞働者だと云つてゐる。成る程、身は何等の藝をも持たずに手に何等の職を有せざる勞働者は、唯牛馬と同様、肉體の力を資本に働かねばならないのだから、氣の毒には相違ない。が、手に「職」なきは、「食」なきが如し、と、古人の戒めにも有つて見れば、何とも止むを得ない次第だとも云へるわけだ。

芝居王國に住む、下廻り俳優と稱する勞働者は、その外見的生活様式に於て、腕に職のない自由勞働者と、おのづから趣きを異にしてゐるのは論ずるまでもない。つまり、前者が身に何等の技のないのに比して、後者は幾年か打込んで來た「藝」といふものを持つてゐるからだ。しかも異とすべきは、現在身に一つの「藝」を持つてゐる演劇の勞働者が唯、健康體だけを資本にしてゐる自由勞働者と同様な、否、更にみじめな生活を續けて行かねばならない現狀である。これは何故か。云ふまでもなく、芝居王國の現在組織が、依然として百年前のそれと相去るところがないのに因るのだ。私が彼等の生活狀態を指して、下廻り地獄と稱するのも亦、過重の言ではないと信ずる。

雨の日の富川町、或は太田町あたりを訪れた者は、そこ此處の屋内に、仕事に溢れた自由勞働者が、怨めしさうな眼を上げて、やけな日を送つてゐるのを見るであらう。彼等の胸には、おかげで飲みそこなつた今夜の泡盛の味が、如何にも未練がましく漂つてゐるに相違ない。が、更にもう一歩進んだ彼等には、えい面倒臭え、どうともなれといふ、捨鉢なあきらめがあるのだ。一度雨さへ上れば、身ぐるみ脱いでも、ぼろ絆纏一枚

あれば、仕事に出るには、事を欠かないと云ふ強味があるのだ。陰慘な暮しのうちにも、いざとなれば、度胸を据えて事が済むだけの、周圍があるのだつた。

しかし、下廻り俳優（相中以下稲荷町と稱した者の總稱である大部屋連中）には、たとへ身を捨てるまでも、これと同じ眞似は出來ないのだ。そんな筈はない、詰りは見得があるからだらう、と誰かが云つたが、そこが苦しいところなのだと思ふ。自由勞働者の方は、白晝眞ッ裸でも仕事は出來る。が、因果にも下廻りの俳優と稱する勞働者は、假令衣裳は借り物でも、人氣を賣るのが商賣である以上、まさか尻切絆纏一枚では、樂屋入りさへ出來ない仕末だ。結局は質屋の番頭が親より大切になつて、たとひ羊羹色でもなんでも、時には紋附くらゐ引掛けてゐなければならない。そこから彼等の悲哀は生れて來るのだ。

實際、芝居王國に於ける彼等が、すべての周圍に對して如何に權威なく、如何にひけ目を持つてゐるかは、一度樂屋口を潜つた者ならば誰しも容易に知ることが出來よう。大部屋にかたまつて、少しの生氣も希望もなく、その日その日を送つてゐる彼等を見る時、もしも仕事に溢れた自由勞働者の姿を、自暴自棄そのものだと云ひ得るならば、彼等の姿は、地獄の血の池に泳ぐ、亡者の形にも譬へべきだ。それは恰も、幾度も浮ばうとしては蹴られ、浮ばうとしては蹴られて、遂に精も根も盡き果てた結果、底深く沈んで行つた、小犬の死骸にも等しいものだと云へる。彼等は與へられた役のために、止むを得ず白粉を塗り、止むを得ず砥の粉を塗る。そして止むを得ず太刀を佩き、止むを得ず槍を擔いで舞臺へ出る。その悉くが、止むを得ずにあらざるなしの有様なのだ。

下は七八歳の子供から、上は六十歳を越えた老人に至るまで、大部屋生活をしてゐる者の胸には、その日を大過なく暮すといふことより外に、何物もあるまい。否、ないのではない。あつても、考へるだけの餘裕が持てない程、その日の生活に追はれてゐるのだ。落語家の口を藉りるまでもなく、どうせ藝道に身を入れやうとまで決心した彼等なのだから、その第一歩を踏み出す時には、どんなにか大きな希望と、理想とを持つてゐたか知れまい。中には不良少女の歡心を買ふのを目的に、舞臺へ立ち始めた者もあらうが、多くは未來の座長を夢み、幹部を連想して、好きな芝居の飯を食べるやうになつたのであらう。が、悲しいかな、傳統と因襲とで滿されてゐる芝居道は、遂に彼等の根氣も努力も奪ひ去つて、「勝手にしやアがれ」のその日暮しを、餘儀なくさせるやうになつたのだ。何事も止むを得ずの一點張に終始しつつあるも亦、止んぬるかなと云はねばなる

まい。

さて、それならば、現代の芝居王國に於ける彼等の待遇は、どうなつてゐるかといふに、これは多くの人達が既に知る通り、大名題或は名題俳優との子弟關係（事實は主從關係）に依つて、まつたく動きの取れない立場にあるのだ。例へば、何某は何々劇場へ出勤してゐると云つても、それは何某が、直接何々劇場へ出勤してゐるといふ意味ではなくて、何某は親方の何々屋に付いて、何々劇場へ出勤してゐるといふことになるのである。詰り、お嬢様のお出ましには、必ずお鍋がお供をするのと同一なのだ。從つてその劇場が氣に入らうが入るまいが、役が良からうが惡からうが、そんなことは全く問題ではない。師の走る所、從これを追はざれば即ち不忠……ではないが、さうしなければ、飯が食へなくなるのが怖いからだ。人間、何が悲慘だと言つて、飯か食へないくらゐ悲慘なことはあるまい。茲で私が、現在の名題下俳優こそ、實にこの餓ゑて食なき者だと云つたら、人は或は字句の奇なるを攻めるかも知れない。が、事實はどこまでも事實なのだから、何としようもないではないか、なる程彼等は、お召の羽織を着てゐることもあらう。ラクダの外套を纒うてゐることもあらう。しかしそれは決して、自己の稼ぎに依つて生み出したものではないのだ。所謂旦那筋と稱する親方の贔負客にでも拵らへて貰つた物か、さもなくば、自分の娘を藝者に賣つた血の出るやうな金で、拵らへた物に極つてゐるのだ。

試みに、彼等がしんしようと稱してゐる、その給料を考へて見るがいい。一興行（二十日間乃至二十五日間）に取る高は、二三十圓から、最高級と雖も、百圓を出づる者は一人もないのである。役者といふ名前の付いた彼等にして、尠なくとも平均三人の家族を養ふ義務ある者が、今時、これだけの金で、どうあがきの付けやうがあらう。金の前には、藝も、意見も、考慮も、名譽も、見識も、その悉くが消滅してしまふ彼等を見て、啻に芝居道の習慣だとのみ看過してゐられやうか。このまゝに放任して置くならば、彼等の藝が現在以下に墮落して、遂には救い難い結果となるは勿論、我が劇壇の將來は、何等の希望もなき、支離滅裂の物となり果てるのは當然のことだ。如何に名幹部俳優が生れようが、如何に優秀並びなき演出者が生れようが、如何に傑作戯曲がものされようが、彼等を無視しては、到底完全な表現を見ることが出來まい。彼等の多くが、自暴自棄の結果、自己の立場も忘れ果てて、酒に、女に、賭博にその身を持崩してしまうのも、そこに、何等の進むべき道を作つてやる者がないからだ。劇場の經營者は、一刻も速く、この自ら太刀

を振ふ力のない落武者のために、一方の血路を開いてやらねばならぬ。

俳優會社を起せ

現代の劇場組織に於ける缺點は、實際枚擧に遑なき程であるが、分けても、興行者觀客何れの立場から見ても、最も不成算的の組織だと思はれるのは、一劇場が七人も十人も（或はそれ以上）の幹部俳優、即ちスターを專屬として、莫大の給金を支拂つつあることだ。全世界いづれの劇場組織のうちに、斯樣なとてつもない制度を、實行してゐるところがあらうか。

假に一劇場に、七人のスターを專屬せしめてゐるとして、これに一興行平均五千圓宛の給金を支拂ふとすれば、三萬五千圓の金は、これだけでも直ちに消えてしまふのだ。しかもその劇場のスターとすれば、各自に一つづつの出し物をさせないまでも、必ず相當以上の役を振りあてねばならない。七人の中四人に出し物をさせて、三人に相當以上の役を付けるとすれば、さしづめ困難を感ずるのは、上演脚本の選定である。座頭から各自順々に自己の出し物を決めて行つて、さて寄せて見たら、全部で十五幕二十一場あつたといふやうな話も、まつたく笑ひ事ではない事實なのだ。

既に不成算的な給金を拂つた上に、更に俳優の我儘な、そのくせかなり貧弱な頭で選んだ、不成算的な出し物を持出されたのでは、如何に興行者が俳優に使はれてゐるやうな現狀にあるにもせよ、やり切れないのは當然だ。大都市の一流劇場が、一芝居開ける度に、いくらかづつの損失を續けてゐるのも、現在の不合理な組織が破壞されない限り、寧ろ、當然過ぎるくらゐ當然のことだと思ふ。恐らくこの儘の組織で進んだなら、今後の劇場の經營は、如何程腕のある興行者が現れても、永續の見込はないであらう。せいぜいその中の一幕を見たいために、出し古された脚本と、見たくもない役者のおつきあひ芝居を見せられて、諸費用の掛り負けから生れる、高價な觀劇料を背負されたのでは、どんなに見物がお人好しでも、さうさうは、辛抱しきれるものではないからだ。

東京一流の某劇場が、一昨年の初夏の興行に、專屬幹部俳優なる者を全部使つて、所謂歌舞伎劇としては、相當人口に膾炙した出し物のみを集めて蓋をあけた。誰と誰の何々、何某の何々にと、プログラムを見れば、さすがに一々頷かれる物ばかりなのだから、勿論劇場側としては、これだけの大物を列べて見物が來なければ、見物の方が惡いのだくらゐの自信を持つてゐたらしい。が、實際開場して見ると、豫期は全く裏切られて、觀客は

凉し過ぎる程しか這入らなかつた。かうなつて見ると經營者も、徒らに見物の方が惡いのだとばかりも、云つてはゐられなくなつた。そして色々と見物集注策を講じたが、如何にあせつても、遂に千秋樂のその日まで、効果は上がらなかつた。──これは、枝葉に亘つていふならば、細かい理窟も立つであらうが、第一の根本は、劇場當事者幷びに俳優が、時勢に對して、飛んでもない戸惑ひをしてゐたのに因るのだと思ふ。曾ては如何に有名な出し物だつたとしても、現在では地方の興行に於てさへ、少し氣の利いた觀客は、面を背けるやうな物を、帝都一流の大劇場が、一種の確信さへ持つて出したのだから凄い。觀客が背を向けて顧みなかつたのに、少しの無理もあるわけはなかつた。誰か今更こけおどしの衣裳や、荒唐無稽の所謂大芝居に眼が眩んで、高値な觀劇料と、多忙な時間とを犧牲にする者があらうか。

しかしこれは、決して悉くを興行者と俳優との罪だとばかりは云へないと思ふ。その根本の欠陥が、多數のスター專屬の不合理な劇場組織にあるのは、云ふまでもないのだ。想ふに某劇場が、少しも吾等の心を刺すところなき狂言を、自信有り氣に列べたのは、目先の安心出來る役の振當と、新作物に手を付けることの面倒さと、興行的の不安から逃れたいための、經營者、俳優等が考へを一つにした現れに相違なからうが、彼等が安全第一を心懸けてやつたことは、却つて、どれ程不安全だつたか知れなかつたのだ。魂のない人形が魂のない出物につれて踊る。そんな藝を歡び迎へた時代は、既に大正以前に過ぎ去つてゐる筈ではないか。芝居王國に吹く風は、もう生暖かい微風ではなくなつたのだ。

さて、かうした不成算的の組織を破壞するためには、どうしたら良いかといふに、それには、私が常に説くところの「俳優會社」を起すのが、最適な方法だと信ずる。即ち、現在の劇場からは、全然專屬俳優を廢止すると同時に、文藝部なるものに數倍の實權を持たせて、上演脚本の選定は、興行者をも文藝部の一員に加へた上、會議の結果決定する。猶また、これまで各劇場の專屬になつてゐた俳優は、安閑と徒食してゐた心持を捨てて、自ら陣頭に立つて「俳優會社」を組織するのだ。無論これは在來の幹部俳優が中心となり、その子弟全部を、子弟關係から獨立せしめて、社員として集容する。そして研究と修養の暇と機關とを十分に與へてやるのだ。

一方、劇場經營者の方では、文藝部の會議に依つて上演脚本が決定されると、直ちに右の俳優會社へ、上演に必要な俳優を註文する。そして事實上、何等俳優に對する義理や情實なし

の、脚本本意から生れた、開演準備に掛るのである。云ふまでもなく、この場合眞に頭もあり、理解もある俳優は、各劇場から引張凧になる結果、かなりの點まで、給料の競上げが行けれるに極つてゐる。が、實際に必要である俳優であるならば、專屬當時に倍する給金を支拂つても、決して經濟の取れない筈はない。五人十人の、さまで必要でもない專屬幹部俳優や、全然必要を認めないその弟子の何某等數十人に支拂ふことを思へば、必要以上に必要な拔擢俳優に拂ふのは、興行政策から云つても、立派に算盤が取れるわけなのだ。しかもかうなることに依つて、俳優は角力と同じく、眞の實力本意になるのだから、これまでは因襲のために出世をしそこなつてゐた者も、技倆さへあれば、どこまでも伸びることが出來るし、これと反對に、如何程名門の家柄に生れても、型の如き大根役者ならば、劇場側が全然取合はぬ結果、自然に陶汰されるに相違ない。判りもしない骨董集めに憂身をやつしたり、待合の一室に痴夢を追つて足れりとしてゐたのでは、何の何左衛門と雖も、一朝にして劇壇の落伍者となること必條である。

腕で來い！　何んといふ生氣のある言葉であらう。門閥の名に隱れて、まだ徴兵檢査も濟まないうちから、藝者狂ひ、お酌遊樂に浮れてゐる連などは、下廻りの中から出た實力のある連中に、忽ち奈落の底へ叩きのめされてしまふに相違ないのだ。やがて來るべきこの日を、信じて樂しむ者は、獨り私ばかりではあるまいと思ふ。

奮起せよ狂言方

ひと口に、實力がないのだから止むを得ないと云つてしまばそれまでだが、芝居王國に働く多くの人々の中で、今の狂言作者ほど、不甲斐ない連中が他にあらうか。柝を打つことと、狂言の書拔を拵らへることと、初日から三日間プロムプターを勤める事と、本讀をする事と、時に俳優の代筆を勤めることとが、その劇場生活に於ける全部であるに至つては、何ともはや、心細い限りではないか。讀んで字の如く、狂言作者と云へば狂言を作る人、即ち今の言葉でいふドラマチスト、劇作家で相違あるまい。その劇作家が、殆ど百人中一人位の割合で、時たま脚本を執筆するに過ぎないのでは、何等關係のない私でさへ、その足腰のなさに、激努一番、褌の締直しを望まずにはゐられないのだ。

「なアにね、今更あつしなんぞが書き物をしなくつても、當節は學校を出た偉い人が、うようよしてゐるんだから、そのお人に任せて置けばいいんですよ」——あきらめとも、皮肉ともつ

かない、こんなことを云つて、狂言方の部屋で、すつかり磨きの掛つた柝を目詰めながら微笑を繰返してゐる人を見る時、私はとても堪らない氣持になるのだ。默阿彌といふ巨匠を生み、南北といふ大家を生んだのは、椅子と疊の相違こそあれ、名前は同じ作者部屋ではなかつたか。一つ流れに棹さす舟ならば、たとへ舟脚の遲速はあつても、ゆくべき道は、同じでなければならぬ筈ではないか。

なる程、僅か十年二十年前に溯つて見ても、劇壇の外形は、かなりの推移を見せてゐる。當時芝居王國の國外に住む者が、假りに驚異に價する程の傑作を書いたとしても、彼等は唯、「素人の道樂」として、または「書生さんのいたづら」として、齒牙にも掛けはしなかつたのだ。偶まその中の一人の作品が上演される場合などは、それこそ猫の國に鼠が這入つたやうな氣持を、彌が上にも味はされたに相違なかつた。狂言作者は白い眼を光らせて、この繼子を、どういぢめてやらうかと考へたであらう。が、今は早や、それも南柯の夢だつた。

狂言作者が、これを「迫害」だと思ふならば、正に文壇人は鼠に化けて、鋭刀鈍刀を取まぜた切先をひらめかしながら、芝居王國の一隅に立籠る狂言作者の城廓を襲つた。そして、昔とは全く立場を異にして「迫害」を加へ始めたのだ。しかして彼等は、先づ被害者としては、この上ないまでに、家財道具までも荒されてしまつた。その結果、僅かに手に遺つたのは、脂肪で黑光りのしてゐる、唯一對の柝子木だけであつた。初め彼等は、畜生今に見ろと思つた。が、次第に憤怒も熱情も冷め果てて、今は弱い皮肉と、はかない洒落の外には、怒ることさへ出來ないまでに、消氣返つてしまつたのである。「かうしてゐれば、三度の飯だけは食つて行けるんだ。奴等に逆つて見たところで始まらねえ」そして彼等は、シャギリが這入つて、二挺を打つ時の、唯その柝の響きだけに、せめてもの慰みを見出してゐるのに外ならないのだ。

「迫害」されたといふ言葉にも、道理はある。が、その前に考へなければならないのは、幾本かの刄を向けられた時に、それを防ぐだけの、用意があつたか、どうかと云ふことだ。遺憾ながら私は、永い間暖かい夢に包まれてゐた狂言作者は、外敵の浸入を見て、徒らにあわてふためく他に、何等の策も、用意もなかつたのだと云はねばならない。敵が鐵砲を打ッ放した時、彼等の手には、默阿彌、南北、如皐等が、さんざ修羅場で使つて、今は刄こぼれさへしてゐる、太刀があるばかりだつた。太刀の數から云へば、何百本あつたか判らない。が、かりに一人が十本づつを振翳したところで、飛道具に會つては、一たまり

もなかつたのだ。遂に彼等は、太刀を武器庫へ收めて、その成行を見てゐるばかり、一人として、自ら立出て戰はふとする程の者はなかつた。そのうちに彼等の心には、「長い物には捲かれろ」といふ氣持が出て來た。捲かれた方が得だ、といふやうな、損得を考へはじめたのだ。

たとへ太刀が折れるまでも、何故立派に戰はなかつたのだと、私は今更、狂言作者諸君の執つた、過去の態度を責めやうとは思はない。しかし、現在執りつゝある態度は、十分責めてもいいと思ふ。廂を貸して、母屋を取られたと愚痴るやうな、そんな小さな量見になる前に、なぜ文壇の作家と對抗して、堂々と腕で爭つて見ないかと云ふのだ。相手は君等の所謂斷出しの素人として、昨日までは、芝居のしの字も知らなかつた連中ではないか。苟も作者と名の付く以上、他人の作の書抜や、本讀、セリフづけなどに滿足してゐたのでは、幾百の流れを祖先に對して、何の面目があるのだ。やつて出來ないのなら是非に及ばぬ。が、努力も奮起もしずにゐて、唯へなへなにまゐつてゐるとあつては、情けなすぎて涙も出ない。

既に四五年以前にもなるが、かつて、狂言作者諸君が一致團結して、戯曲の創作に從事すべく、その發會式を、どこかの旗亭で擧げたとかいふ記事を、何かの新聞で見て、私はひそかに喜んだことがあつた。漸く眼が覺めたやうだが、一生覺めずにゐるよりも、どんなにいいか知れないと思つたからだ。しかし、今にして思へば、それも一時の糠喜びであつて、その後、狂言作者中の誰が、どれ程の新作を發表したとも聞かずにしまつた。根氣がなくて續かなかつたのか。それとも何か芝居道の、愚にも付かない壓迫があつて流れたのか。いづれにしても期待してゐただけに、かなりの失望をさせたのだつた。實際、これが狂言作者だから、まだいいやうなものの、もしも鮨だとしたら、どんなにイキのいい鮨でも、とうに蛆がわいてゐたに違ひなからう。笑ひごとではないのだ。

文壇的の作家が何んだ。君達には、君達の腕がある筈ではないか。乾きそこねた布糊の匂を嗅いてゐるばかりが、狂言作者の能ではあるまい。緊褌一番奮起して、將に死の淵に臨んでゐる芝居王國の運命を、力の限り引戻して貰はふではないか。

愛と責任その他

要するに、芝居王國に住む人達は、芝居王國に對する愛と責任とを、十分に自覺して貰いたいと思ふのだ。自分さへ好ければ、他人はどうでもいいとか、悪い事をしないのは損だとか、己れを偉く見せようとか、その他これに類似した小ぼけな根性

は全然棄て去つて、戀人を愛するやうな心持で、終始したらどんなものだらう。馬鹿も休み休み云へ、と云ふかも知れないが、實際芝居國は、遠からず革命の砲火に見舞れる時が來てゐるのだ。これを建て直すには、眞心から溢れ出る「愛」より他には、何物もない。

内部にあつては、興行者も、俳優も、その他の從業員も、また外部にあつては、新聞社の演藝記者諸君や、すべての好劇家諸君が、演劇を單なる職業視したり、娯樂視したりせずに、生一本の熱情をもつて、愛さなければ駄目だと思ふ。

色々こつぴどく云ひもしたり、書き足りないところもあるが、これも詰りは、吾が芝居王國を愛すればこそ書いたのだ。速く潰れてしまへ、と思つてゐるのなら、憎まれるのを百も承知の上で、こんな惡口は吐かないであらう。切に、芝居王國關係者諸君の、誠意ある奮闘努力を祈つて熄まない。

附記。――これまでにも自分は「劇壇縱横記」「劇壇獨歩錄」等に於て、愛する我が芝居王國の爲に、かなり多くの憎まれ口を叩いて來た。が、心から私の誠意を汲んで、愚説に耳を藉してくれた劇場當事者は、おそらく、帝劇の山本久三郎氏くらゐのものであらう。百里の道を行く者は、童の言葉にさへ、眞を求

めるに吝ではないといふではないか。私は、この一文を、芝居王國に向けて射る最後の矢とするに當り、これに因つて、劇場の最低級に働く人の中にでも、眞に眼覺める一人が現れるならば、せめてもの滿足だと思つてゐる。(十月五日)

文藝雜觀

武者小路實篤

讀んだもの

○

志賀の暗夜行路を先づよむ。

もう前の方は忘れてゐたのを少しづゝ思ひ出す。しかし前の方を思ひ出さないでも、今度の處だけでも面白い。この頃志賀のものは大概自分の經驗したものをかいたもので、それも面白いが、さうでない、純粹の創作的本能だけでかいたものも見たく思つてゐた處なので、暗夜行路はその自分の望みを滿してくれたので、なほうれしかつた。しまいの朝鮮ゆきも、朝鮮に行つたことのないくせにしつかりかけてゐた。朝鮮の人の話も面白い。之からたのしみだ。志賀がこの長篇をかく話をきいてから十年近かくなる。その時から志賀は終りに自信をもつてゐた。志賀はこの長篇が本當のことをかいてゐるやうに誤解されても、又さきのさきを見通すことの出來ない見當ちがいの評にも動かされず、ゆる／＼と自分の目ざす方におちついて自信をもつて進んでゆく點、一寸眞似が出來ないと感心してゐる。僕は自分の自己辯護

性にはあきが來てゐるのだが、ついもつて生れた性質にまける。志賀も自己辯護をしない男でもないが、仕事の方で、それで少しも動かされずに、確信をもつて進んでゆくのをたのもしく思つてゐる。

志賀の持つてゐるもので、近頃生かされなかつた方面が、この作で、今までよりもずつと生長して生かされさうに思つてたのしみにしてゐる。

〇

次ぎに幸田露伴の骨董をよんだ。面白かつた。

この頃自分は人間の心の動きも矢張り生理的のものであり、殊に腦の細胞の働きであるから、その人の腦の細胞の働きの程度のもの切り人間はかくことは出來ないものだと云ふことを今迄よりも、よりよく知つて來た。

そして人間の腦の細胞と云ふものは矢張り常に働かされてゐる部分だけが發達して、他は發達がおくれる。つまりいつも右手許りつかつてゐる人は右の手だけが發達するやうにいつも腦の一部を働かしてゐるものは、その方面が特別に發展するのではないかと思つてゐる。そして一人々々の人間の腦の力は、一人々々の足の力、腕の力と同じやうに、きまつてゐるもので、さう變化はないものと思ふ。時により氣分により、事情により天候により少しはちがうが、そのちがいは人にもよるが大したことはないと思ふ。

だから頭のよく働く人はいつも頭がよく働き、頭の働きのわるい人はいつも働きがわるい。そしてよく働く頭にも限りのあるもので、それ以上にすゝむことは一朝一夕では出來ない。つまり我々の修業と云ふものも、頭の細胞をよくすることに他ならないと思ふ。

さう思つてゐる自分は露伴のものをよむと露伴の頭の動きのいゝことに感心し、その得意の方面では中々深い所に入

りこんでゐるのに感心する。しかし同時に、それは勞作に許された範圍においてゞある。このことは少しもわるいことではない。一人の人に多きをのぞむのはのぞむ方がわるい。我々は勞作畑において自分の知らないいろ〱のことをこまかく、くわしく、種のうらのうらまで見せて、いろ〱の出來事の話をしてくれるのをよろこぶ。痒い所に手がとゞくのをよろこぶ。今度の骨董にしても出處はあるにちがいないが、しつかり大事な處を手ばなさずに話をされてるのがうれしい。實際骨董の生んだ悲喜劇の常識ばなれしてゐる、ケタをはづしてゐる話は面白くもあるし、へんな氣もする。そしてその話が中途半端でとまつてゐず、何處までも發展してゆく處が面白い。へんな運命をもつてゐる。

○

谷崎潤一郎の「青塚氏の話」。之もいかにも谷崎の頭の細胞の一部の發達をもの語る話である。つゞきものであるが、谷崎ものとして完成してゐるもので、外國に紹介されたらよろこぶ人が可なりゐるだらうと思ふ。少しでも特色のあるものをよろこぶ者には、この作はよろこばれていゝものである。筋はつくりものであつても、かゝれてゐるものはごまかしものでも、嘘ものでもない。たゞ特種すぎるのと、一部的すぎるのか缺點だが、其處が又長所である。中々こゝまでは入りこめない。僕は第一回に出た所が一番すきだつたが、今後どう發展するか。ともかく自分の道をゆき切る力があるのはほめていゝ。僕の好みとはちがうし、よんで少し頭が濁るかと思ふが、しかし一人はかう云ふ作家もあつていゝと思ふ。一部の頭の動かし方では中々こまかく、且つ自由である。他の人が眞似が出來ないだけに發達してゐる。

○

水上瀧太郎の「地下室」。一幕もの。(三田文學)この作者のものは何となく讀みたい氣持を自分に起させる。何かまだ

謎があるやうに思ふ。發展しさうに思ふ處がある。

「地下室」は大した作ではない。無難の作である。ごまかしがない。そして人々の會話に調子があり、かく氣持がわかる。氣持ちよくよめた。主人公の倉持善藏のやうなタイプの人は日本にのみあるタイプではないかと思ふが、(西洋にも、支那にもあるかも知れない。ありさうな氣もする)。人間の一面をあらはしてゐる。小使ひの生活にあまんじ感謝して、社長を尊敬し不平を起さない。實際、僕は大臣よりは小使ひの生活の方がなつかしい。嘘つかずにすめるし、人の肩の上にのつかつてゐる不安なしにすめるから。しかし善藏がさう云ふ自覺をもつてゐるわけではない。もつと簡單な男である。道樂者だつたのが貧乏して小使ひになつて三十年間つとめて、その會社の三十年の祝賀會に褒美をもらつてよろこぶのだが、しかしよろこんで許りはゐられない、道樂時代の因果で子供が、女と關係し、それにひつこくつきまとわれて、つい(舞台の外だが)殺してしまう。梗概をかくつもりではないが、その因果の恐ろしさは出てゐないと思ふ。又子供がけがで女を殺したあとの父の苦しみもかいてないのが、少しもの足りない。善藏が褒美をもらつてよろこぶ處は一寸涙ぐませる。

この作で感心する處はいろ〳〵の人がいかにも會社員らしい感じを出してゐる處だが、作者の傑作では勿論ないと思ふ。ともかく現代のある社會相を描いたものとしていや味のない作である。讀んで氣持はよかつた。終りがもの足りないのが缺點である。女とうつかり關係してつきまとわれる濟吉には同情出來るやうにかけてゐたが、殺すのは作者として樂な道をとりすぎたやうに思ふ。殺したことから何か特種の感じが生れてくるならいゝが、それがなかつた。

○

久米正雄の「棧道」(苦樂) 氣持ちよくよんだ。作者は勿論力こぶを入れてかいたものとは思はないが、さすがに文

章も藝術的なすつ切りさがある。二人の名人の心持にたいしても、普通の人より一皮さきを見てゐるのも氣持がいい。しかし思ひつき以上にはまだ出てゐない所がある。作者自身がまだ名人の心境を體得してゐない。勿論體得してゐない所がこの作のねらい所を生かしてゐるが、しかし名人同志の心のもち方にはもう少し常識はづれな處があつていゝと思ふ。柳十兵衛の心境にもつと名人的ひらめきがあつた方がいゝと自分は思つた。しかしかう云ふ註文をこの作に出すのはわるいかも知れないが、さう云ふ註文が出したい所までかけてゐたのはほめていゝと思つてゐる。

（秋らしくなつた。自分の仕事も今一寸暇なので久しぶりに氣持がおちつき、讀んだり見たりするのにいゝ時候になつた）

見たもの

築地が大阪へ「狼」をもつて來た。

ローマン・ローランの狼は前によんだことあるが、大體は覺えてゐたが、部分的には覺へて居ない。それで築地のやり方が、何處まで原作に忠實で、何處から原作をはなれてゐるか自分にはわからない。演出の土方の話だとわりに自由にやつてゐるらしい。又警察署の方の注意もあるのかと思ふ。その演出のちがつてゐる所に反つて演出者の力倆があらはれてゐると思ふが、それは自分にはわからない。たゞ普通の見物と同じ心で、與へられるのをおとなしく見てゐただけだ。

そして感心した。第一作に感心し、又演出に感心した。調子が高いのがうれしい。息もつかさずに全體で見せてくれるのがうれしい。さけられない事實を見せられてゐるので不服なしに見てゐられる。嘘や、ごまかしがないからであ

る。

しかし一人々々の役には不服もあり、不滿足もあつた。湖見が一番役にぴつたりし、役を生してゐた。あの役をあれ以上やれる人は一寸ないやうな滿足さを覺へた。さういゝ役ではないが瀧田の將軍も、革命時代の人物になり切つてゐた所があつた。瀧田と始め知らずに見て感心してゐた。友田のスパイも中々面白くやつてゐた。あとも相當にはやつてゐたがその人でなければと云ふ感じはしなかつた。その點では湖見が役にぴつたりしてゐたと思ふ。しかし一人々々の役についての評は僕は適人者ではない。第一「狼」の本も、番附も手元にないので名を忘れたのも多い。

主人公の科學者は青山がやつてゐたが、適役とは思へなかつた。またあの役はやりにくい役だ。あの科學者の氣持には同感が起るがあゝなるのはあの性質ではやむを得ないし、又ローマン・ローランではあの役をかきたいために他を背景につかつたとさへ見へるが、しかしあの役は一般の人に同情されるのには一寸不向きな所がある。それは何處からくるかと云ふと、ヴエラーにたいする同情からくる。たしかにヴエラーはよくない所があるが一方いゝ處がある。少くも皆に同感を起させる何かゞある。ヴエラーをやつた人の名を忘れたが、中の上位いの出來だつたと思ふが、あの役は男らしく、はがゆくなく、さつぱりしてゐる。それに死刑になるのは少し氣の毒な氣を人に起させる。

科學者の立場は正義ではあるが、少し法律的すぎる。或は規律的すぎる。だから貴族の生命を救ふ方だけに働けば誰でも科學者に同情するが、ヴエラーの死刑や、罰を要求する時、我々は少し反感を感じる、そんなにやかましく云はなくなつていゝだらうと。

しかし當時にあつて、軍律をやかましく云ふ人であつたらあの氣持もわかるが、科學者は軍律の化身としてあつかはれず、正義や自由の信奉家としてあつかはれてゐる所に人々の心の何處かに不自然さを思はせる。

科學者が四人の兵士に守られて引こむ所には感心した。最初の幕の上る時から調子の高いのにも感心するが、大事な所で科學者の立場は人間愛からはなれる。だからあの役はやりにくいだらうと思ふ。日比谷でやつた時、科學者黨とヴエラー黨とが出來てさわいださうだが、それは人情として無理がない。ヴエラーが貴族出をやつけるやつけ方、及びそれを否定する否定し方はさすがに不快な立場に立たされてゐるが、死を恐れずに仲間のために戰ひつかれて歸つて、よばれる所に同情を見物が起すのは無理がない。その見物さへ同情させる處に作者の人のよさと、あれをかいた時の若さが出てゐる。同時に其處に見物の心を統一さゝないものが殘る。

作者は軍規を重じてこの作をかいたのではあるまい。たゞ科學者が自分の死を恐れず、群集の惜みも恐れず正義を主張するその意氣をかきたかつたのであらう。しかしヴエラーの死刑を要求するのは正義かどうか、すくなくもゆきすぎた感じを與へる。

しかしそれはそれとして、全部面白く、調子高くすゝめてゆき、最後に兵士に劍つき銃でまもられて引こむ處まで調子を高めることの出來た作には感心していゝと思ふ。

演出もその調子をよく出してゐたのはさすが築地だと思つた。全體すべてのレベルが高い所が、どんな仕事をするものも藝術にたいする愛と尊敬と熱心とをもつてゐる所が强味だと思ふ。

築地のやり方で僕のいつも感じるのは言葉の調子の高さを出すことのうまさである。しかしそれ以上の調子のたかい沈默を生かす處にはまだ達してゐないと思はれる點だ。その沈默が生れば完成すると思ふ。

山中主催、東西古織錦繡展觀

僕は織物の方のことはまるで知識がない。その方には僕の腦は少しも鍛えられてない。だからこの展觀を批評しやうとは思はないが、しかし見たことをよろこんだ。其處には各國の國の味が出てゐる。

印度、埃及、希臘、ペレシヤ、西班牙、支那、伊太利、フランス、等、等。

第一その數の多いことにおどろく、山中でなければこんなにあつめることは出來まいと思ふ。第二に隨分高いと思ふものが實に澤山うれてゐる。こゝにくると不景氣などは忘れてしまう。

自分はこゝに來て自分は矢張り東洋人だと云ふ氣がした。しかしそれもあてにはならないが、東洋のものの方が親しめるのは事實だと思つた。金でもうんとあつたら東洋のものゝ內に買ひたいものがあつた。

殊に自分をおどかしたのは印度の金更紗であつた。十八世紀のものださうだが、その色や、圖がらの品のいゝのにはおどろいた。實に王宮にふさはしいと云ふのはかう云ふものだと一緒に行つた若い友達とも話しあつた。

實際、かう云ふ味が出るかと云ふことは見ないとわからない。あとで知つたのだが、矢張り土耳古の皇帝舊藏の品だつた。いかにもさうでなければならない品だと思つた。

その他埃及コプチツタ織布にも隨分感心したし、バグダットのものなぞ日本の染物に似てゐてそれでへんに夢の國のものゝやうな感じがあるのに感心したり、まだ何かと感心して歩いたが大概忘れてしまつた。あまり數が多すぎた。

しかし自分がこゝにかきたいのは、それ等のことではなく、同じく其處に出てゐた和蘭、佛蘭西、西班牙の家具類についてゞある。

之も自分が何か云ふのに適當な男とは思はないが、ともかく感心した。それは美しいのに感心したのではなく、頑丈なのに感心した。之はつくられた時は贅澤なためではなく、全く實用向きにつくられてゐる。今其處にならんでゐると

二百圓は安い方で、隨分キタナイ椅子が五百五十圓、机になれば千圓以上、何千圓と云ふのもあつたかと思ふ。ともかく高いものだが、つくられた時は民衆的なものだつたと思ふ。ロダンが今の器械製の家具に嫌惡を感じて昔の家具になつかしさを持つてゐる話をよんだことがあるが、之を見て尤だと思つた。實際、何處までも實用向きであり、丈夫一方でありながら、そしてまた裝飾なしに無雜作につくられてゐるのだが、あたゝか味があり、親切さがあり、手間をはぶかず、よろこんでつくり、又つかい道をよく考へて、一番親切氣を出してつくつたやうに思はれる。實におちついて居、安定さがあり、椅子は腰かける人のことをよく考へ、机はかく人のことをよく考へてつくられてゐる。それを見て新しいものを見ると實際、輕薄に見へる。

使ふものの氣持を尊敬し、愛してつくる處からこのいゝ味が出るやうに思ふ。木も出來るだけ厚く丈夫專門につくり、そして使用目的を十分知つて、その目的にそうやうに心がけてゐる所がうれしい。模樣があつても器械的の模樣ではなく、愛してつくつてゐる。ラスキンなぞがすきさうなものと思つた。之は東洋の作ではないが、矢張りなつかしいものと思つた。

日本の農民藝術のいゝ參考品と思つた。新しき村でも一つ位見本にほしいと思つた。

南畫展

昨日南畫展を見た。どうしても畫のかけない自分は先づ皆の上手なのに感心した。次ぎに上手と云ふことが第一印象にくることを感じた。畫かうとしたものは大したものではないのだ。内から生れてはゐないのだが、筆だけはうまくこなれてゐる。かかうと思つたものはたしかにかけてゐるが、かかうと思ふ方に修行が不足してゐる。つまり南畫をかく

のに目と手を鍛えて大事な頭を鍛えないと云ふ感じの方が強い。

一たい支那のいゝ南畫を見ると、一寸素人でもかけさうに見へて、そのくせ實にどんな玄人にも出せないやうな感じがぴつたり出てゐるものがあるが、こゝのはその反對が多い。自分は畫家は素人とはちがうのだから、技巧のうまいのは當然でもあるし、又うまい方がたしかにいゝと思ふが、しかし南畫である以上は、頭の方、人格の方の修業が第一だと思ふ。興味の持ち所、その興味の生れる所のものをよくすることが大事と思ふ。

その點、支那の人のものが二つ出てゐたが、さすがに考へてゐると思つた。それから小杉未醒もその點は知つてゐると思ふ。しかしその他の人、(全部ではないかも知れない)は、元を忘れてゐるやうに思ふ。

氣持のわるくないのは多かつたと思ふが、どうも面白くない。鐵齋は讀書を大いに奬勵してゐたさうだが、竹田も亦、學問を奬勵してゐたかと思ふが、漢文なんか出來なくつて一向さしつかへはないと思ふが、しかし心の持ち方、自然の美しさの秘密、微妙さ、それから人間の心にある調和感の高さ、深さ、さう云ふものを鍛えてゆくことは何より大事と思ふ。心の調子の高さ、深さが、外のものとむすびつくことが大事なのだと思ふ。

腕は出來てゐるが、形とか色とか、自然とかの見方がすゝまないでは面白くない。それからかく時の心持ちも、自分の心を無心にするのはいゝが、空虚にするのはよくないと思ふ。素人で、畫のまるでかけない自分が云ふのは潜越かも知れないが、折角腕が出來てゐるのに、見るものが單調だつたり、調子がひくかつたり、空虚だつたりしては困ると思ふ。かく時の自分の心のもち方が大事だと思ふ。その心の持ち方が大きくなれば、その心がずつと自づと出ればいゝのだと思ふ。

夫婦は共に生ていゝ子が出來るやうに、自他共に最も深かく調和して生た時、南畫の面白さは出るのだと思ふ。先づ

自分を高め、深かめ、大きくすることが大事と思ふ。それに學問が役にたつなら、學問はしなければならない。

自分はこの頃倪雲林や八大山人（晩年か）や石濤の心のもち方に隨分尊敬をもつてゐる。日本ではその點矢張り蕪村は偉かつたと思ふ。（少しかたいが）大雅もその點隨分尊敬してゐる。竹田も少し細いが、高いのとすんでゐる點で感心する。支那にはいくらでもすきな人が他にゐる。之は少し餘計なことをかいたやうだ。

橋本關雪氏所藏外邦古陶器、波斯、印度小畫展觀

澤山いゝものが出てゐるのには感心した。ギリシヤには矢張り感心する。自分も一生の内一つか二つは自分のわきにおいて愛玩したいと云ふ心を起させる。混合器、水注、大盃、水指（レキトス、）燈火器、其他西紀前七八世紀から紀元前後のもの四十五ならべられてゐる。その他、ペルシヤ、トルコ、伊太利（ルネサンス時分のもの）皆、隨分ほしいものがある。

支那の女俑の内の「狗を抱ける婦人」なぞは僕の見た女俑の内一番立派なものだつた。

いろ〳〵のものを集めて古陶器の方だけで百九十八あつた。よくあつめたものと感心した。又あつめ方も調子の高いものが多く、さすが藝術に志してゐる人と思つた。同氏はまだ他にいろ〳〵のものを持つてゐることゝ思ふ、支那の畫にも隨分すぐれたものを持つてゐる。

自分はこゝに一々批評しやうとは思はない。たゞかう云ふすぐれたものを見ることは、よろこびだと云ふことを語りたい。

他に波斯、印度の小畫も六十二種出てゐた。皆この方でもすぐれたものと思ふ。中に五六點隨分すきなものがあつた。

殊に素描風のものが自分はすきだつた。色彩は實に美しいが、線の美しさの方がより純粹で、調子が高いと僕には思へた。よく見たわけではないからはつ切りしたことは云へない。色のあるものにも隨分おちついたいゝものもあつたが、しかし僕の好みから云ふと、波斯印度の小畫は二三もつてゐればそれで滿足出來さうに思ふ。どうも調子にぴつたり出來ないものゝ方が多い。少し滿足して見てゐるには、自分の內にはみ出たがるものが多いと思ふ。しかし殊にすぐれたものを見ると、そんな氣はなくなる。

しかしこんなにいゝものを展觀してくれた橋本關雪に感心する。隨分日本では個人的でいゝものをもちながら、中々一般の人に見せたがらない、實の持ちぐされになつてゐるものが、どの位いあるだらうと思ふ。惜しいことだ。しかし今それについて論じやうと思はない。

自分は愛しないではゐられない美術品がかうも澤山地上にのこされてゐることを今更に感謝したく思つた。

人間の手によつてつくられたものを、純粹に愛することが出來るのはよろこびである。この世には愛し得ないものが多い。自分の心の熱を奪つてゆくものが多い。處が本當の藝術品を見ると心があたゝめられ、愉快にされ、生きかへる。心を掘りかへしてくれて新鮮な空氣にふれさしてくれる。この慰めは實に自分をよろこばす、殊に畫や彫刻や、陶器類は、一目で見られるからうれしい。陶器類は手にとつて見ないとわからないとスエーデンの皇太子が我等にかわつて斷案を下してくれたが、しかし見るだけでも、見ないよりはずつといゝ。そして愛するものがあることは實によろこびだ。そして自分の內に純粹な愛がまだ豐かに、うるほいをもつて生ることが出來ることを知ることはよろこびだ。それ以上愛が心に目ざめることは人生にとつてよろこびである。

人間の內には實に愛すべきものがある。實によく愛すべきものをつくつてゐる。

見たものではないが、藝術品と贅澤と云ふことについて一寸云ひたい。

藝術品を贅澤品だと思つてゐる人がよくある。たしかに金持は藝術品を贅澤欲を滿足させるいゝ材料にする。彼等は何んでも金目のものを愛する。そして他人にはほこりたい。他人が持つてゐるよりももつといゝものがもちたい。そしていゝと云ふことはもつと高價なものと云ふ意味がふくまれてゐることが多い。

元より金持でも藝術品のよさのわかる人がある。そしていゝものだけを集めてゐる人がある。さう云ふ人は金目をほこるのとはちがうであらう。だがその藝術品によつて自分の生命を高めてゐるか、どうかは疑問である。

露伴はそれを高慢税と云つてゐるが、いゝものをもつことは鼻を高くしたい本能から出てゐる場合も多いと思ふ。しかしそれだけではなく、本當に藝術的要求から買つてゐる場合もあると思ふ。しかしうまい物を食ひすぎて胃腸を害するやうに、藝術品もためることに興味をもち出し、心を奪はれすぎては、その人の生命を害する危險がある。

自己の生命に役立つ範圍では藝術品は贅澤ではない。しかし自己の生命力を奪ばふ傾向が發生して來たらそれはもう贅澤である。

だから生命力の非常に強い人だつたら、そしてあらゆる藝術品から自分の生命の糧をとり得る人だつたら、レンブラントや、ロダンのやうな人だつたら、いろ〳〵の藝術品を買つても贅澤とは云へない。より自分の作品が生るからであり、又より自己の生命をそれによつて深めもし、生かしも出來るからである。

しかし天下の藝術品を他人の生命の糧となり得るものを、うんと買ひ込んで藏にしまつて他の人に見せないと云ふのは贅澤である。それは自分の生命にも不忠實であり他人の生命にも不忠實を意味する。自分は個人でいゝものをもつて

ゐる人は少くも年に一度は、機會があつたら公開して見たい人に見せることが必要と思ふ。藝術品は元來贅澤品とはちがう、人間の生命が贅澤品でない限り、又人間の内にある藝術的本能が贅澤でない限り贅澤品ではない。たゞ藝術品を獨占し、そしてそれによつてつまらぬ心を勞して、そして自分の生命を生々させない者にとつて藝術品は贅澤品である。

少くも我等にとつてはよき藝術品は生命の糧である。精神の糧である。自分の頭はそれによつて自由にされ、豐富にされ、美しくされる。

自分は藝術品を買うことを禁じられてゐたら、三百圓の仕事をするのも厄介だが、しかし三百圓の藝術品が買へるとなれば、七百圓仕事もよろこんでするだと思ふ。それだけの力を起させる魅力のない藝術は、藝術とは云へない。だから自分により多くの金をもうけさしたがつたり、或はよりよき仕事をさせたがるものは、よき藝術品を買ふことを是認すべきである。

石炭なしに汽車を走らせやうとするのは無理であるのは誰も知つてゐる。しかし精神上の糧は贅澤であると云つて、與へるのを禁じてそしてよりいゝ精神的の仕事をしろと云ふのは少し無理である。しかし或る骨董屋で五六寸のいゝ佛像があつたので、いくらかと聞いたら、「まあ十萬圓と云ふ所です」と云はれたのにはおどろいたことがある。ものはよかつた。そして決して贅澤品とは思はないが、しかし十萬圓と云ふ値段をきいたら、贅澤品でないとは云へない氣がする。反つて高すぎて安心もしたが、藝術品を金で計算するのは少し無理である。だが、だから藝術品は贅澤だとは云へない。たゞもう少しやすく、四五圓で買へるものでうんといゝ藝術品があるといゝのだがと思ふ。本のやうに、小さい彫刻とか、木版だとかでいゝものをつくり得る人があれば、この僕の望みは突飛なのぞみではなくなる。

世界に一つ切りない、二つ切りないと云ふことで自慢する時代は段々通りすぎつゝあるやうに思ふ。尤も一方さう云

ふものもあるのは面白い。又三年も四年もかゝつてつくつても生活が出來るやうな作品もあつていゝが、同時に我々の藝術的欲望を心の底から滿足さしてくれる價値ある藝術が、一般の人誰でも買へるやうなものがあつていゝと思ふ。德川時代にはたしかにあつた。今でも一部の人はそれをやらうとしてゐるが、本當にすぐれたものがその內から生れてほしい。その點河野通勢にのぞみをおいてゐる。石井鶴三も一枚賣りの版畫、それを澤山商賣人にすらしたものでいゝ、印税のやうなものをとつて賣り出したらどうかと思ふ。

岸田の版畫などはやすく手に入つたらよろこぶ人は多いと思ふ。他にもさう云ふ仕事をやつてくれると皆がよろこぶ人があると思ふ。

數が少ないから貴いなぞと云ふ考から、解放されて、いゝものはいくら數が出ても、なほいゝと云ふようにしていゝと思ふ。本のやうに。友人に相談してやつて見てもいゝと、ふと思つた。五十錢や一圓位いで賣れるものもつくれると思ふ。藝術的のものが、よき藝術家がやり出しさへすれば、そしてその印税で藝術家は生活が出來るやうになると思ふ。

つい話がそれたが。

自分の生命を生々させる範圍では贅澤とは云へない、贅澤とは自分の生命を窒息させる傾が見へた處から云ひ得るものだと云ふことが自分は云ひたかつた。

推古時代と鎌倉時代の彫刻

題は大きいが、云ひたいことは簡單なのだ。僕の家から奈良の博物館までは四五町だ。だから時々ゆく。自分は推古時代の彫刻を益々愛する。鎌倉時代のは、彫刻としては進んでゐるかと思ふ。中々いゝものもある。味も面白い。筋肉

などのあつかいは實にうまい。しかしいくら何處か幼稚、さう云つてい丶かどうか知らないが、ともかく顔が大きすぎたり、呑氣な所があつたりしても推古の方を自分は實に愛する。

鎌倉時代の作は何處か職人的である。つくるものにたいする愛し方が推古にくらべると表面的だ。意識的だ。推古のは實際愛してつくつてゐる。大きいものは信仰をもつてつくり、小さいものは愛してつくつてゐる。他のくわしいことは僕には説明出來ないが、心の動かし方のちがいがはつ切りしてゐる。推古の方は愛がなかにすつとしみこんでゐる。鎌倉のはそれに比較すると表面からしみこめずに反射してくるものが多い。自分は矢張り愛をうけ入れるだけすなほに受け入れて立つてゐる、推古のものがどうしてもすきだ。愛していつても少しもはみ出ず、全部すなほに受けとつてくれる。(主に小さい彫刻を頭においてかいてゐる)。其處が貴いやうに思ふ。

その愛は無心で邪心がない。我々を生々させてくれるたちではないが、我々の心をうるほしてくれる。

マイヨールとブルデル

二科にマイヨールの彫刻が二つ出てゐた。フランス展覽會にブルデルの彫刻が一つ出てゐた。以前のフランス展覽會には、ブルデルもマイヨールも澤山來てゐたことがある。

又本や寫眞でも二人のものは好きでよく見てゐる。二人の特色をあざやかにかくことは出來ないが、二人のものは自分は今生てゐる彫刻家の内で最も買ひたいものだ。値は僕にはたかすぎるが、いつか買ひたく思つてゐる。

しかし自分の好みから云ふとブルデルの方がより好きである。マイヨールのものは女の肉體を實に愛してつくつて居るやうに思ふ。その愛し方はフランス人らしく、愛撫してゐるやうな所がある。肉感的な所もいく分加味されてゐる。

しかし愛しないわけにはゆかないものがある。小さい彫刻なぞ一寸机の上においておきたい。

ブルデルのものは大きな室か、さもなければ庭にでもおきたいやうなものである。一寸日本間、殊に小さい借家などには不向きだ。机の上におくわけにもゆかない。新しき村のクヌギの林のなかに置きたいとよく思ふ。

見てゐると内から力がわく方の側の作家である。全力的である。他から愛撫するのではなく、内から生命力があふれ出てゐる。ちとかう云ひ切るに不向きのものもあるが、ともかく愛される爲めに存在するのではないところがある。以前に來た女の裸體なぞにも、隨分思ひ切つた形のがあつたが、意力的で、肉感的ではない。自己のために存在してゐる。外形に向つて立つてゐる。

藝術にはいろ〳〵のゆき方がある。ブルデルとマイヨールとはまるで反對と云ひたい所がある。そして兩方とも實にいゝ。

我等は愛するものなしに生るのは淋しい。しかし愛するものなしにも生なければならない。愛撫するだけが我等の生活ではない。時にはいくら淋しくも立たなければならない。それも全生命にもへて、全精神を生かして。

ロダンはもう少し情熱的であり、本能的である。自然のまゝを愛した。ブルデルには意識が働き、理性が働き、統禦が働いてゐる。しかしそれは生命力を統一して目標に向つて毅然として進んでゆく意力が働いてゐる。

マイヨールには所謂現代的の所があり、ブルデルには古ローマ人と云ふやうな感じが何處かにある。

兩方とも自分はすきだ。自分は氣が多いのか、否。人間の生命は豐富であり、多端である。一すぢなはではゆかない。

古今東西のあらゆる天才をあはせたものよりまだ多方面である。人類は。

○

藝術の種類

今度はいろ〲のものがよめるつもりでゐたが、又不意によめなくなつた。自分の頭は自分の思ふ通りにはならないものだ。自分の方が頭の思ふ通りになる。よみたくないとなつてはどうしやうもない。そんな時に無理によんだつて心は他にある。内からあふれたがつてゐるものを出し切らなければ、他からものを入れるわけにはゆかない。噴水の口から水を入れることが不可能のやうなものだ。

藝術の種類をわけたらいくつになるか。人間の腦の細胞のつくられ方、又その働き、その内容がはつ切りわかれば、その要求に應じて生れる藝術の種類もわかるかも知れない。しかしわかつたにしても、あらゆる組み合せが出來るのだから、數限りなく分類され得るであらう。

自分は勿論あらゆる種類についてこゝに書かうと思つてゐるのではない。自分はブルデル、マイヨールなどのことを考へてゐる時、ふとダ・ウインチ、ミケルアンゼロ、ラファエル、チ、アンなぞを思ひおこした。

觀察の名人、生命の巨人、愛の天使、一個の畫家、勿論、さう云ひ切れるわけではないが、その他、ボツチエリー、チントレツト、マンテニア、……等を考へて見ても、實にいろ〲の方面の代表者が居て、人間の生命が如何に豐富なものを藏してゐるかを知ることが出來る。

見る、見るにもいくら階段や、範圍のちがいがあるか。たゞ見るのと、觀察するのは勿論ちがう。一瞥するのと熟視するのともちがう。心を殺して見るのと生かして見るのとちがう。憎んで見るのと愛して見るのとはちがう。輕蔑して見るのと尊敬して見るのともちがう。一々ちがひを云つては切りがあるまい。たゞ淺薄な見方、粗雜な見方、早やわか

り、いぢけた見方のよくないのは云ふまでもない。草の葉一つ見ても、雜草の花を見ても、女の髮毛を見ても、ダ・ヴインチのやうによくその美を見るものは稀である。ダ・ヴインチにかぎらない。見る天才の見方は美しさの根本を見る。美しさの秘密を知る。現象界の空の内に空でないもの、美の極致を見る。精神的の美であれ、肉體の美であれ、ありのまゝであれ、想像が加味されてあれ、美をちやんとつかまへて居ることは事實である。我等に目があたへられ、生るために必要以上に美を感じるやうにつくられてゐると、その與へられたものを極端に生かし、視神經を刺戟することで人間の腦の細胞に最もよき生命を與へる。それが見る天才、視覺の天才、人間に目を與へたものゝ天使である。この天使こそこの地上を最も美しいものにしたがる人類の使命を果す最功勞者である。人類はかゝる人の仕事をよしと見る。その人は庭つくりでも、花つくりでも、家具をつくる人でも、家をたてる人でも、この仕事を助け得るものは賞讃されるべきである。

だが見るだけが我等の全部ではない。見て美しいのはよろこびだが、それだけで我等の生命は滿足しない。

我等は自ら先づ生きなければならない。其處で生きた人間を要する。なるべく全部的に自己を生かした人間を要する。其處で個人々々に與へられた生命を生々させる使命を果すために、藝術家が立ち上ることは必要になる。見られるためのものをつくらず、共に生きるものをつくるものが生づる。つまり我等の目をよく生かすだけではなく、我等の生命を直接に生かさうとするものが必要になる。かゝる藝術家のつくつたものは我等を生々させる。ミケルアンゼロ、ベートーベン、ホイツトマン、などの名をあげれば、この使命を果す藝術がどんなものであるか大體わかると思ふ。我等は自力の許すかぎり大きく生きることが必要である。全部的に生きることが必要である。何ものにも恐れず、よし恐れても更におぢけず、倒れてもはい上つて生られる限り生きることが必要であり、肯定出來る限り肯定することが必要である。だが我等

は自力だけでは生られないものである。他と調和せずには生きられない。自力の親玉孤獨の主ミケルアンゼロは一方まれに見る、キリスト教信者である。人間は自己を卑屈にしたり、空虚にしたりしてはいけない。自分に托された生命を出來るだけ完全に生かすことは實によきことである。たゞこれは困難すぎることではあるが、だからその目的にふさはしい使命を果す藝術は讃美すべきである。

しかしそれだけでは苦しく、又個人的になりすぎ、全體の調和してすゝむのに不都合である。其處で他の人間と調和して生てゆくことが大事である。其處でその要求に應じて生れた藝術家も尊敬されるべきである。それは孤獨の巨人ではなく、愛の天使、調和の天子である。ラフアエルの名をあげればいゝ。個人と個人が調和し、融合し、一つになつて進んでゆくことは大幽にふさわしいことである。

藝術家は人間の內心の要求によつて生れるものである。最も深い內心の要求に從順なのがすぐれた藝術家である。社會の組織と云ふものは人間の內心の要求から生れたものではない。本は生れたものであるが、いろ〳〵不純なもの、病的なものが加はりすぎ、人間の生命に忠實であることを忘れがちになる。藝術家は人間の生命の深奥の要求にひたすら從つてすゝむものである。だから人間生活の目標をさし示すものだが、現代生活とは時に交渉がうすくなる。しかし交渉のうすい時、それは眞の天才の不名譽なのではない。その社會の不名譽なのである。人心の要求により背くものゝ方が恥づべきである。

しかし我等はあまりに理想的に走りすぎて現實を忘れるわけにはゆかない。我等は內心の要求に忠實でなければならない。だが同時に我等は自己のつくられ方に忠實になる必要がある。我等は夢の內にだけ生活はしてゐられない。其處で現實を忘れないために、又人間の實力を忘れないために、現實派の藝術家が必要になる。チ、アンなどもその一人だ

と云つてもいゝと思ふ。彼は高き理想はもたない。見たものを現實的にありのまゝに見てかいてゐる。勿論それも美を忘れてゐるのではない。我等の内心の要求には從つてはゐる。たゞ從ひ方が、理想に向はずに、現實を見てゐる。見るものに愛も生命も自然觀察の深さもあたへないかも知れない。しかし現實を忘れない。

さう云ふものもないと何となく物足りない。

まだ人間は、誰か我等を統一して導くものを欲してゐる。自己の生命も隣人の生命も。個人の生命はもろい。個人はある點以上信用出來ない。其處で何か不死なものに我等の導き手をもとめる。其處から宗教心が生れる。そしてその要求に應じて宗教家が生れる。フラ・アンゼリコーのやうな。

まだいろ〳〵の人がいろ〳〵の要求に應じて出てゐる。東洋と西洋で又要求が理想にちがいがある。自分は今それ等について一々かきたくもなく、又かく力もない。たゞ自分は我等の生命の内心の要求に應じて生れる處に藝術の使命のあることを暗示し、そして日本の文藝の人達に、もつと心の奥そこを動かし、もつと強き内心の要求で仕事をすることを要求するものである。

〇

自分の「生命の王」について、

自分のこの作は一つの冒險であり、一つの試みである。自分はこのゆき方で、更に大きい、更に自由で、更に完成した人類のお祭りにふさはしい、又新しき村のお祭にふさはしいものをかきたく思つてゐる。たゞ力がまだ不足してゐる。もう三歩か四歩進めたらと思つてゐる。

○

我等の內心の要求にきけ。

內心の要求の弱いものは、他人のお伴をするより仕方がない。他人に與へられるもので滿足するより仕方がない。しかし內心の要求の強いものは、他人から與へられ得るものはのこらずとつても、なほ滿足せず、更に進まないわけにはゆかない。

さう云ふ要求の強い人が新しい道をひらく。先づ生々することが必要である。そして自分で直接にぴつたりものを感じることが必要である。自己を守るのではない。消極的になるのではない。更に生きるのである。更に進むのである。

我等の頭腦は自分より賢いものゝ云ふことはきく、だが自分より愚かなものゝ云ふことはきかない。人間はより賢くなりたい動物である。より自分の頭腦を生々させたい動物である。政權によつて支配されてよろこぶ動物ではない。自分よりもよく理性に叫び、又より美しい。より本當の考へに從がふことをよろこぶやうに出來てゐる。

自分よりもよりよく働く頭を愛する。元より働く方面にもよるが、ともかくも自分の生命を根本的によりよく生かしてくれるものを尊敬し又愛する。だからよき文藝は、先づ頭腦をよく働かし得る人から生れる。

料理のうまい人は味覺の發達した人でなければならない。精神上のよき仕事をするものは、先づ頭腦をよく鍛えたものでなければならない。文藝は材料の如何、經驗の如何によつてきまるものではなく、頭の働き、腦の細胞の生かし方によつてきまる。同じ材料をあつかつても、化石した腦の持ち主と、生々した腦の持ち主とは、かくものがまるでちがつてくる。キビ〱したり、痒い所に手がとゞいたり、神經や良心が通つたりするのでなければ藝術品とは云へない。

よき藝術が頭の秀れたものより生れることは當然すぎる。だから自分の頭の鍛え方の不足なものからは、いゝ藝術は

生れない。そんな藝術に感心する人が多いのは、より頭の鍛え方が不足してゐる人が多いことを語るだけである。藝術はよくなればよくなる程、一般の人にはわからない或るものを持つ。心ある人が見れば見る程感心するが、心のない人が見たらなんだ下らないと思ふものも少くない。

尤もいゝものには一般の人にもそれ相當にわかり、そして心ある人にはなほいゝ處を見せると云ふ作品もある。シエクスピアのものなぞはそのよき例である。すぐれた藝術は高さも高いが、廣さも廣い。ドン・キホーテ、や、モリエルの諸作なぞもその適例である。

頭が惡い人が見るといゝものに見えて、頭のいゝ人が見ると下らない、さう云ふものも多くあり得る。

かう云へば愚かものに近いと多くの人が思つてゐる、アンリ・ルーソーなぞはどうかと云ふ人があるかも知れないが、自己の領土においてアンリ・ルーソーは決して馬鹿ではない。他の方面では足りない所があるやうに見へても、自分の見てゐる美についての理解は實に深かく、そして正確で、ぐらつきがない。

藝術は碁のやうに勝負のきまるものでないから、下手が名人の批評をしても、誰もその滑稽さをのみこませることは出來ないが、しかし自分よりも劣つた腦の動き方にふれると人間の腦はかゆさを感じるものだ。それに反して、自分よりも優れた方面をもつ人の腦の働きにふれると、少くも、その方面だけでも生々して、賢くなり得、いゝ氣持のするものである。

さう云ふ氣持を味はゝしてくれない作品には自分は敬意を表しない。

プロレタリア文學については何にも云ひたくないが、しかしプロレタイヤ文學でもその點はかはりがない。ブルジヨアの頭腦と又ちがつた方面が、頭腦をよく生かしてゐてくれゝば、面白い。其處に意味がある。しかし人間の頭はより

鈍い頭の生産物には、敬意を拂ひたくも拂えないやうに出來てゐる事實は十分認めなければならない。だから何より先づ頭を鍛えることが大事になる。

頭を鍛えるには始終同一の傾向のもの許りをよんでゐたのでは駄目である。あらゆる方面で自己よりすぐれたものをよくよみ、そして自分の頭を修業させなければならない。

このわかり切つたことを本當に知つてゐる人が日本に何人ゐるかと云ひたい。

多くの人は人間の頭の出來を考へずに、又人間の藝術的要求を考へずに、また人間の精神的食慾を考へずに、文藝の生れた元因を知らずに、職業的に文學の仕事をしてゐる。

そして人々があきが來てゐてもなほ無理に讀ませやうとする。しかし人間はよみたくないものはよめない。又よますことは出來ない。人々によまさうとするなら、人間の藝術的要求をよく知り、それを滿足させるものをかくより仕方がない。

しかしそれは意識してつくるよりも、自分の藝術的良心や、神經を滿足させるものを先づつくることが必要である。他人の味覺をたよりすぎて自分の味覺を失なつた料理人になつたら、その藝術家は藝術家ではなくつてタイコモチである。（二六、一〇、一六）

東洋古美術
建築、庭園 **畫集**

志賀直哉編

座右寶普及版

編輯責任者 橋本基
寫眞撮影者 大塚稔
製版印刷所 大塚巧藝社

圖版 半切寫眞精巧玻璃版 百五十面
用紙 上等鳥の子紙（二ッ折片面印刷）
寸法 縱一尺八寸五分 横一尺四寸
装幀 和装上下二册帙入
定價一部金六拾八圓（荷造送料共）一時拂不可能の向へは別に御相談に應ず。
内容見本――御見越次第進呈す。
限定版尚ほ十數部あり定價甲乙種共壹部金貳百圓外送料實費

座右寶に就て

座右寶は志賀直哉氏の選編せる畫集にして從來のかゝる美術出版物が美術史的系統を追ひ選編せられたると異り志賀氏個人の精神的、藝術的要求にのみ從ひ自由に集められたる所にその特色を存す。尚ほこれを觀客的に見てもこれまで完全なる寫眞の一般に紹介せられざりし秘佛、或は桂離宮の如きを編入し得たるを珍重とす。

寫眞製版の技術及び用紙等總べて現代に能ふかぎりの最善を盡したる事を信ず。

座右寶普及版刊行に就て

座右寶は最初の計畫により限定版百五十部を刊行したるものなれども豫想以上の好評を得現在其の十數部を餘すのみ。然るに限定版は全く實費を以て頒布したるも其の價格の點より汎く古美術愛好家の希望に添ふこと能はず依て本會は更に普及版を刊行するに至れり。

大正十五年十一月

發行所 東京市本郷區湯島四丁目廿番地
座右寶刊行會
（電話小石川三六八番
振替東京四三七三〇九番）

藤森成吉著　最新刊

故郷

四六判上製

定價金壹圓五拾錢

送料十八錢

現文壇に於ける一異彩――身を挺して勞働者間に投じ、血の滲むが如き人間的、社會的苦悶を體驗せる藤森氏の近業十四篇を收めしもの。その心情の熱烈さと、穏かなる氏の風格は、自らそのふくよかなる藝術的詩韻と綾をなして、この神品をなした。誠に氏に於いてのみ見らるる點々苦綴、而も清冽無比珠玉の如き逸品のみである。恐らくブロ、ブルを問はず一讀再讀三讀して三嘆を措かざるのもの。

藤森成吉著　惱み笑ふ

定價一圓三十錢　送料十六錢

藤森成吉著　東京へ

定價二圓三十錢　送料二十錢

發行所　改造社　東京芝區愛宕下町　振替東京八四〇二

正宗白鳥著

文藝評論

（四六判上製）

定價壹圓五拾錢
郵送料拾八錢

最新刊

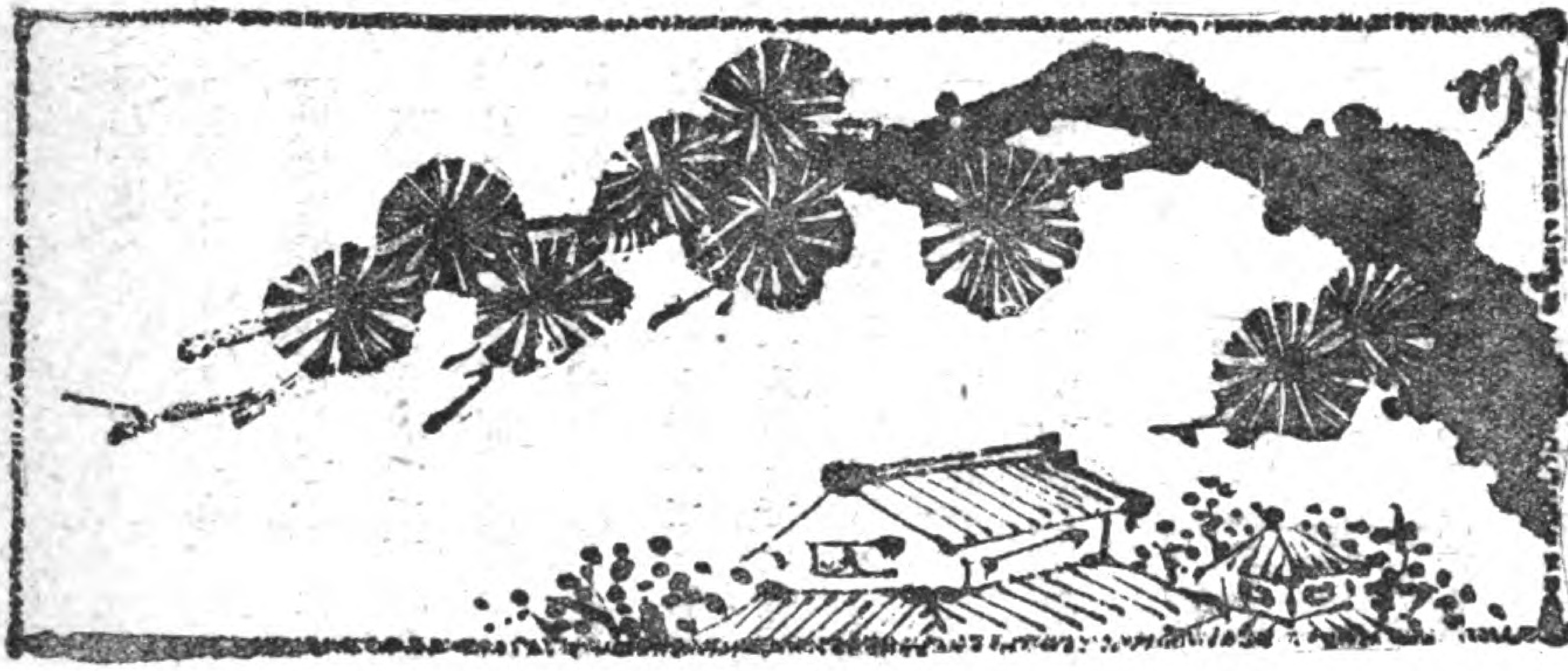
見よ!!白鳥の抜ける名刀は縱横に文壇を馳驅して氏に及ぶ敵なし。氏の明晰なる鑑賞眼と痛烈な肯をさす評論は正に古今獨歩の氏の境地である。氏によつて在來蟠居せる藝術上の虚妄は粉碎され、今や邪道は正道に引摺り返されし感がある。本書は單なる篇々たる隨筆ではない。白鳥畢生の文藝觀であり人生觀である。本書の劃期的な出現が如何に文壇を驚倒しめたか。青年子女を讃仰せしむるか。一讀直ちに明らかである。

正宗白鳥著 戲曲 ある心の影
定價壹圓六拾錢
送料拾八錢

正宗白鳥著 安土の春
定價壹圓參拾錢
送料拾六錢

正宗白鳥著 歡迎されぬ男
定價壹圓五拾錢
送料拾八錢

發行所
東京市芝區愛宕下町
振替東京八四〇二番
改造社



夢遊病患者

（東京驛、第二篇）

正宗白鳥

その翌日。

下關行の特急車の發車間際に、自働車で驅けつけたBといふ、頭の圖拔けて大きな、それに釣合はぬほどに體軀の小さな、中年の男は、重さうな鞄を自分で持つて、改札口の方へ向つたが、そこへ、先つきから彼れを待受けてゐた平野が、彼れの道を遮ぎるやうに、横合から出て來た。

「オヽ」と、Bは驚きの聲を出して、「あなたはどちらへ？」

「君を待つてゐました」

「わたしを？」Bは當惑した顏して、「わたしはこの特急で神戸まで行きます。もう五分しか間がありませんが。……何か急用がおありになるんですか」と、口早に云つて、鞄を下へ置いて、帽子に挿んでゐる乘車劵と急行劵とを出して見せた。

「そんな者は拋棄したまへ」平野は事もなげに云つて、「君のために有利な話があるんですよ。君が神戸三界まで遠道を踏んだつて、どうせうまい話が待つてる譯ぢや

ないんでせう。若しもわたしの話が君のお氣に入らんようだつたら、汽車賃はわたしが賠償しますよ。夜行で立つことにしたまへ」

「さうですねえ。……神戸ではわたしを待つてる人があるんですが」Bは決心しかねた風を見せた。

「思はせ振りは止して、わたしの勸告を容れて呉れたまへ。好意を持つて君にいゝ話を持出さうとしてるんですよ」

「ぢや、折角さう云つて下さるんだから、一汽車遲らせることにしませうか」

Bは、これまで世話になつたことのある平野の勸告を、たやすく振切る譯に行かなくつて、時計の針の進むのを見てゐたが、平野は「急行劵くらゐに未練を殘すなんて、君にも似合はないね。……さあ、そこの食堂へ行つて、一杯やりながら話さう」と云つて、Bの鞄を自分で持つて先きに立つて、否應なしに、食堂の方へ相手を連れて行つた。

Bは、食堂へ入るまでに急行劵だけは引裂いて下へ散した。そして、片隅の食卓に腰を下すと、

「あなたはどうして、わたしが今朝旅行に出ることを御存じだつたのです?」と訊ねた。

「それは不思議ぢやない。君のお宅へ電話を掛けたので、分つたんです。しかし、この鞄の中に何が入つてるか、わたしには略々見當がつきますね。」

「ハヽヽ」

「そんな者は神戸までわざ〳〵持つてたつて、大した値打はありやしませんぜ。外國人もそんなイカサマ物には引掛りやしません。」

「ハヽヽ。烱眼のあなたも見當違ひしましたね。この鞄のなかには書畫や骨董品なんか入つてやしません。一つ開けて御覽に入れませうか」

「いや、それには及びません。わたしの見當違ひなら却つて結構でさあ。君が骨董品の才取り見たいなシミツたれたことをやつてゐられないのは。君のために祝すべきことなんです。」

平野は氣樂さうにさう云つて、ボーイに、麥酒や料理を吩咐けた。Bは相手が何を云出すかと待設けながら落着かなかつた。身體つきが貧弱で財産もありさうでない平野でも、Bに取つては煙つたい一人で、この男の云ふことなら無理を云はれても聞入れなければならぬやうな關係になつてゐた。

「實は君に一つい丶仕事の口を周旋しようと思つてるんです。うまく話が纏まるかどうだか分らないが、君が御承知なら今直ぐに先方へ話を持掛けようと思つてゐます」

平野は、松川の代りにBを隆吉の店へ推薦しようとしたのであつた。自分が受合つた店員雇入れがうまく行かなかつたゝめに、隆吉の信用を失ふことを恐れて、新たに誰れかを搜して嵌込まうと思つた揚句に、ふと、ノラクラ者のBに思當つたのだが、平野の腹の中では、隆吉に對する信用を慮つてゐるばかりではなかつた。昨夕と今朝との間に、彼れの氣持は大分變つてゐた。

「そりや、ちよつと惡くない話ですな。わたしは大阪へでも何處へでも出掛けますよ。……だけど、あなたがよくわたしのやうな者を、そんな堅實な店へ取持つて呉れましたね。その點が少し變ですね」

Bはさつきとは違つて急に元氣づいて、麥酒のコツプを傾けた。

「いや、この話が極るかどうだかまだ分りません。とに角、先方の主人に直ぐに御紹介しませう」

平野はさう云つて、「大將はまだホテルにゐるかな」と呟いて、座を立つて電話で在否を訊ねて來て、光澤のない眼に微笑を湛へて、「丁度よかつた。まだ部屋にゐるさうです」と莞んだ。

「先方でわたしを使つて呉れるとよう御座んすが……」

「なにしろ、君は貿易業といふやつにはたしかな經驗があるんだからな」

「ハヽヽヽ」

Bは苦笑を洩らした。Bがかつて、まがひ眞珠を外人に賣付けようとして失敗したことのあるのを、二人は暗に心に浮べてゐたのであつた。その時Bが買手の目のくらむやうにと、水垢離を取つてある神樣へ祈願したことをも、平野だけは知つてゐた。

「今度だつて、君があの店へ入つたら辣腕を揮へばよろしい。決して遠慮しなくつていゝんです」

「どうも薄つ氣味が惡いな。あなたからそんな寬大な御意見を承るのは珍らしぢやありませんか」

「……あの店は君のやうな人でも入つて、一つ凄いところの働きを見せなければ立行かないらしいんです。わたしはそこまで深くは知らなかつたのですが、松田はよく調べてゐて、あんな店は御免だと云つて、一度承知しかけたものを取消すことになつたんです」

「ぢや、誰れも行き手のないところへ、わたしを抛り込まうと仰有るんですな。」

「抛り込むと云つちやいけないが、あなたの敏腕にお縋り申すと云つたらいゝでせう。……それにね。肝心の店の主人が少しボヤケてゐるんですよ」

「ます〱變ですね。しかし、あなたがお勸めになるのなら、何處へでも行きますよ。どうせ化物屋敷か何かでなければ、わたしに家を貸さうつて云ふものはないんですから」

「しかし、君はわたしなどのやうに齷齪していらつしやらないからよろしい」

平野はうまくもなさゝうに料理を口へ入れながら、隆吉に會ふ時の心得をBに教へた。今までの經歴についても、有力な會社に勤めてゐたように言こしらえる打合をした。そして、平野は言譯見たいに、

「わたしは與野君には隨分好意を持つてるんですよ。君を推薦するのも先方の爲めを思つてるからなんで、氣心の知れた君と共力して、あの店の勢ひを盛返すやうにしたいと思つてるんです。いづれ事が極つた上で、君と一しよに智慧を絞つて見ませう」

「何分よろしく……」

Bは、平野には何か魂膽があるのだらうと察しながら、上べはおとなしくして合槌を打つてゐた。中途半端の時刻なので、食堂は空いてゐたが、彼等の食卓の近くには、黒川が遲い朝飯を食べてゐた。黒川はオートミールの匙を動かしながら眠足りない目を二人の方へ向けて、Bの巨大な頭を奇怪に感じてゐたが、ふと、與野といふ名前が二人の話の中に出たのが耳に入つたので、食事の方をお留守にして、首を傾げて、ボンヤリ聞えて來る話聲を捉へようと努めた。

さうして耳目を凝らしてゐると、Bの頭の格好がます／＼怪物らしく見えだした。微笑を湛へてゐるその眼差しも、惡魔の凄い笑ひのやうに思はれだした。そして、止切れ／＼に耳に入る二人の話聲が、與野隆吉を不利に陷れる陰謀であるやうに聞きなされた。「ホテルの廊下で夜中に會つた時から、與野といふ男は以前とちがつて人間が陰氣になつてると思つてゐたが、かういふ男が影のやうに附纒つてゐるんだな。慾から來た陰謀か。怨みがあるための陰謀か。兎に角、當人に早く知らせて用心させなければならない」と思ひながら、なほ心を凝らして、そちらへ耳を注いでゐた。……あたりを憚つてゐるらしい二人の話聲の切れつ端しや目顏の表情は、黒川にいろ／＼な氣味の惡い想像を描かせた。

それで、彼れは、食事を終ると、二人に氣取られぬやうに椅子を離れて、靜かに食堂を出た。階段を上りながら、隆

吉へ密告することの可否を考へた。そんな差出たことをしてかの二人の悪漢の恨みを買つても詰らないから、默つてらん顏してゐようかと思直して、一先づ自分の部屋へ入つて腰をおろしたが、それでは氣がやすまらなかつた。知人に危險の近づいてゐるのを知つてゐながら、默つてゐる法はないと、ふと道徳的昂奮を感ずるとゝもに、彼れは勢ひよく立上つて、さも人命救助の大事業に着手してゐるやうな緊張した態度で、隆吉の部屋を訪ねて行つた。

平野を待設けてゐた隆吉は、戸口から顏を出した黑川の顏を見ると當てが外れた氣がして、不機嫌を表に現はしたが、平野は朝の挨拶もしないで、相手の側へ寄つて、

「早速あなたのお耳に入れたいことがありまして」と、聲を潜めて云つた。

隆吉は、また黑川の身の上の愚痴を事々しく聞かされるのかと、豫め迷惑を感じながら、

「何か異つた事でも出來たのですか。あなたは昨夕はよくおやすみになつたやうですね」

「いや、例の通りに眠つかれませんでした。電車の音の聞えだした頃からやうやくウト〱しました」

「ぢや、また昨夕も夜中の停車場を見にいらしつたんですか」

さうだらうと思ふと、隆吉は今日は笑へなかつた。自分もこの男と同じお仲間になりかゝつてゐるやうなのが氣にかゝつてゐた。

「そんな話はどちらでもよろしいが」と、黑川は戸口を顧みて、力を底に潜めた聲で、「今階下の食堂で食事をしてゐますと、妙な男に會ひました」と、かの二人の事を知らせた。

「どちらも人相のよくない男でした。あなたはお心當りがおありになるんですか」

「そのうちの年を取つた方の男は、わたしが昔から懇意にしてる平野といふ男らしいですよ」と、隆吉は事もなげに云

つて、「平野は此間うちからたびく此處へやつて來てるんです。あなたあの男にはお會ひになつた筈ですが……」

「いゝえ、生れてはじめて見た顔です。あなたの御懇意な方なら、わたしからとやかう申上げるのはよくないかも知れませんが、あの二人は容易ならん惡企みをしてるに違ひないんです。それはたしかにわたしの耳へ入りました。あなたはよくお考へになつちやどうです。何か思當ることは御座いませんか」

「さうですねえ」

隆吉は、さう聞くと、昨夕平野が松田の不承知を知らせに來てゐながら、松田らしい男と一しよに東京驛の構内を歩いてゐたのを階上から一瞥したことが思出されて、平野の心に對する疑念が新たに起つた。「おれはこれまであの男を信じ過ぎてゐたのか」と、思ひながら、

「それで、その二人の容易ならん惡企みといふのはどんなことなんでせうか。あなたのお氣付きになつたことを、腹藏なく知らせて頂きたいものですね」と、隆吉は、今までと違つて眞面目に訊ねた。

「どうせ財産の横領なんでせうがね。……」黑川は今まで心に描いてゐた暗黑な想像を口に出すのを躊躇して、「財産の横領は何處にでもあることですな。わたしの家でも、仙次郎は上べは金の慾なんぞ微塵も持つてゐないやうな顔はしてゐますが、腹の中では、養父のわたしの生命を縮めて、少しでも早く財産を自分の者にしたいと企んでゐるかも知れません」

「あなたのお宅のお話は改めて承ることにして、差當つて、あなたが食堂でお聞きになつた二人の話を承はりたいんです」隆吉はもどかしさうに云つて詰寄つた。

「さうでしたね。それが大切なことです」

黒川は、彼等の魂膽を打明けようとしたが、惡漢に見込みをつけられてゐる隆吉の顏を見てゐると、痛々しくなつて、言葉がたやすく口から出なかつた。

「わたしも先方の出樣によつては警戒しなければなりませんから、あなたのお氣付のところを知らせて下さい。あなたは人違ひか間違ひをなすつたのぢやありますまいな。わたしも先日からたび〳〵甥と間違へられてゐるんだから」

「間違ひなら結構ですが」

そこへ、コツ〳〵と扉に音がした。隆吉は、「あなたの仰有つた惡漢が來ました。構ひませんから、あなたは此處にゐて見てゐて下さい」と云つて、戸の方へ、聲を掛けた。

かの二人の入つて來るのを見るや否や、黒川は隆吉に會釋して、逃げるやうに出て行つたが、二人は黒川と擦違つても、緣のない人のやうに目も留めなかつた。

黒川は、自分の部屋の寢臺に横たはりながら、隆吉と二人の客との話の樣子を氣遣つてゐたが、知らず〳〵睡りに落ちた。暫くしてふと目を醒ますと、枕許にはボーイが立つてゐて、「與野さんがお呼びになつていらつしやいます」と、知らせた。

「與野さんの部屋のお客樣は、もうお歸りになつたのかい」と、黒川が氣遣ひながら訊くと、

「いえ、お二人ともまだいらつしやいます」と、ボーイは答へた。

「まだゐる？」

黒川はビクッとした。そんな物騒なところへ出掛けるのは躊躇されたが、斷る譯には行かなかつたので、寢呆け顏を

洗つて、わざと悠然とした態度で訪ねて行つた。主客三人は煙草の煙に包まれながら、ニコ〳〵して話に興じてゐた。
「黒川さん、喜んで下さい。この方がわたしの店へ來て下さることになりました」と、云つて、隆吉は、Bを黒川に紹介した。

二人は何氣ない風で挨拶をかはしたが、黒川は、隆吉が手もなく二人に丸められてゐるらしいのを察して、憫みの目を向けながら「それは結構でした。あなたも東京へいらしやつた甲斐があつたといふものですね」と、通り一ぺんの祝意を述べた。

「昔馴染のあなたに久振りでお目に掛つたのを機會に、わたしの店のことにも、これからは時々お力添えを願ひたいと思ひますから、自然Bさんとも御懇意にして頂かなきやなりません。それについて、今夜あなたにも來て頂いて、皆んなで祝宴を開かうと思つてゐるんですが、贊成して下さるでせうね。あなたはもう御用がお濟みになつてるでせうから」

隆吉にさう云はれると、黒川はドギマギしながら、

「さういふことなら、わたくしも是非お仲間に加へて頂きたいんですが……都合で今夜の夜行でゞも立つことになるかも知れませんよ」

「まあ、一日くらゐお延しになつてもよろしいでせう。是非今夜お立ちになるやうでしたら、それまでに、ちよつとでも御出席なすつて下さい。」

「わたくしも黒川さんから承つて、あなたにはお近付きになりたいと存じてゐました」と、平野も口を出した。

「ぢや、成べく都合をつけてお伴することにいたしませう」

黒川は堅く辭退するのは變に思はれたので、さう云つて受合つたものゝ、この三人が緣故の薄い自分を、そんな内輪

の塡りへ強いて招かうとするのか氣が知れなかつた。何か深い穴へでも引摺り込まれさうな恐ろしさが豫感された。

平野とBとが、夕刻の會合を約束して暇を告げたあとで、隆吉は、俄かに出仕度に取掛つた。戸棚から他所行の衣服を出して着替えながら、

「あのBといふ男は、一癖ありさうで、使ひやうによつちや、案外役に立つかも知れません。あなたもあの男に末長く目を掛けてやつて下さい。」と、淡泊に云ふのが、黑川にはいよ／＼不思議に思はれた。

「さつきわたしが内所でお話したことを、あの二人の方にお打明けになつたんぢやありますまいね」

「あんなことは話しませんとも。……さつきあなたのお話があつたので、警戒してゐましたが、あなたの御心配になつたやうなことは斷じてありません。あなたが聞違ひをなすつたんですよ。」

「聞違ひですつて?」

「平野といふ男は、長い間のわたしの親友ですから、氣心はよく分つてゐます。どう轉んでもわたしに對して陰劍なことを企むやうな男ぢやありません。あなたもわたし同樣に平野の人柄を信じてやつて下さい」

隆吉は、急用で二三時間外出して來るから、今夜の會食のことは是非とも承諾して吳れと言棄てゝ、黑川がまだ部屋の中に愚圖々々してゐるのに構はないで、慌てゝ戸の外へ出た。黑川は呆氣に取られた氣味で、椅子に腰を掛けたまゝ、煙草を吸つてゐた。「おれが食堂で聞いたことが聞違ひだといふことはない。ときれ／＼に耳に入つたあの二人の話振りでも、目付でもたゞ事ぢやなかつた。與野は甥の喜代造に馬鹿にされてるやうだが、あいつ店の方が面白くないので、この頃は頭がボヤケてゐて、あの二人の惡企みが分らないんだな。さう云へば、夜中に停車場の上の廊下をうろつくなんて、精神狀態があたり前の人間だつたらすることぢやないんだ。……與野がおれの注意を入れないで、あの二人を輕

卒に信用してひどい目に會はうとも、自業自得なんだが、おれまでも詰らん捲き合ひをつけられちや、たまらない。あの二人の奴おれに秘密話を聞かれたのを勘付いて、與野を煽てゝ、おれを今夜の會合に引摺り込んで、うまく誤魔化さうと思つてるのかも知れないから、用心しなきやいけないな。あいつ等に因縁をつけられちや危險この上なしだ。……うまく口實を見つけて與野が歸ないうちに、此處を立つて家へ歸ることにしよう」

黒川はさう決心して、椅子から立上つたが、ふと卓上の電話が鳴つたので、打遣つて置けなくつて、受話器を耳にあてゝ、「どなたです?」と訊くと、

「叔父さんですか。わたし、喜代造です」と、先方の聲が云つた。

「喜代造さん?。……叔父さんはお留守ですが、どういふ御用なんです」

「そりや、困つたなあ……」喜代造はちよつと考へてゐたが、「急用なんですが、叔父の居所は分りませんか」

「それは分りませんね。わたしは昨夕あなたにお目に掛つた黒川ですが、叔父さんに御用がおありになるのなら、わたしが承つて置いてお傳へしませうか」

黒川は、ふとした好奇心からかう云つたが、云終るとゝもに、後悔した。

「あゝ黒川さんですか。……あなたにならお話していゝんですか。……あなたは今叔父の部屋にゐらつしやるんですか。其處にお一人でゐらつしやるんですか。」

喜代造の方で、それを變に思つてゐるらしいのに、黒川は氣づいて、

「此處で今まで叔父さんとお話してゐたんですか、わたしは一足出おくれたもんですから……」と、相手に怪まれないやうにくど〳〵と言譯をした。

「本當にお一人なんですか。……ぢや、電話よりもわたしがこれから其處へお伺ひしませう。その叔父の部屋で待つてゐて下さい。直ぐにまゐります」

「ぢや、お待ちしてゐませう」

黑川は、いやとは云はれないで受合つたものゝ、いゝ氣持はしなかつた。偶然隆吉に出會つたゝめに、いろんな掛り合ひをつけられるのは困つたものだと思ひながら、部屋の中をうろついた。喜代造を待つにしても、いつそ自分の部屋へ行つてゐようか知らんと、ふとまた卓上の電話が鳴つた。爲方なしに受話器を執ると、

「あなたは黑川さんでいらつしやいますか。こちらは與野さんの代理ですが、與野さんは只今お出掛けになりましたから、暫くそのお部屋でお待ちなすつて下さい」と、女の聲で云つた。

「承知しました」

黑川は、この部屋を出る譯には行かないやうな氣がして、窓際の椅子に腰をおろした。そこから驛前の廣場を見渡すと、例の如く雜沓してゐたが、自分の部屋からは見られなかつた××ビルヂングの一角が目に映つたので、彼れは今までの雜念をまるで忘れたやうに、その方を見詰めた。そのビルヂング内のある會社へは、彼れは先日うち毎日のやうに足を運んでゐたのであつた。知合ひの重役のツル〳〵した禿頭や眉の上の瘤は云ふまでもなく、受付係の目尻の下つた愛嬌のある顔も、上京以來の最も深い顔馴染として、頭の中に深く刻みつけられてゐるのだが、老いたる彼れでも會ふたびに快く感ぜられてゐたその受付女の顔が思浮ぶとゝもに、今の電話の音調がその女の聲であつたやうに思はれた。

「二三度、重役の用向きを電話でおれに取次いだ時の聲が今の聲そつくりだつたが、それはどうも妙だ。おれには若い女の聲は誰れも彼れも同じやうに聞えるのだらうか」

黒川は、若い女の電話の柔しい聲を、も一度聞いてゐるやうな氣持になつてウットリしてゐたが、ここへ、喜代造はノックもしないでソット扉を開けて入つて來て、忍び足で黒川の側へ寄つた。

「お待たせしました」と、呼掛けられた聲に、黒川は我れに返つて振向いて、

「やあ」と云つて窓際を離れて、「何時の間に來ていらしやつたのか、ちつとも氣がつかなかつた」

「何か面白い物を見ていらしやつたんですか。叔父は此處から外を見るのを樂しみにしてゐましたよ」

「さうでしたか。叔父さんもなか〳〵變つた趣向を持つてゐますね。」

「叔父も一種の夢遊病患者なんですからね」

喜代造は嘲笑を浮べた目で相手を見据ゑて、柔かいクションに主人然として身を投げおろした。

「夢遊病患者?それはどうしてゞす?」黒川はその言葉で思當るところがあるやうなので、喜代造の側に腰をおろして問詰めたが、喜代造はニヤ〳〵笑つて直ぐには答へなかつた。

「それで、あなたはどういふ急な御用がおありになるんです?」

「あゝ、それが油斷してはゐられないんですよ」と、喜代造はふと思出したやうに緊張した顔して、「實はね、叔父は今ある男に附狙はれてゐるんです。……」と、勿體ぶつて云つたが、相手が、さてはと驚くのを見ると、「なに、大したことはないんですがね。今度の店の改革で首を切られた店員の一人が、東京へ出て來ても職が得られないので、執念深く叔父に恨みを抱いてゐるんです。そいつが東京驛をうろ〳〵してゐることを、今ある男から聞きましたから、一刻も早く叔父に警告しとかうと思つてるんですよ」

「それは物騒ですね。叔父さんのお身の廻りについちや、わたしも氣遣つてることがあるんです」と、黒川がまことし

やかに食堂での二人の密話を事々しく話して、その二人が最早うまく隆吉に取入つてゐる次第をも語ると、喜代造は
出して、互ひに目と目とを見合はせて、
「あなたはその二人の陰謀をたしかにお聞きになつたんですね。」
「わたしは耳だけは、普通人以上に鋭敏な方なんですよ」
「それで、そのBといふ男は、頭のでかい變挺な顔をしてゐると仰有るんですね」
「さうです。一目見ても一癖も二癖もありさうな男に見えるんですが、叔父さんはその男を馬鹿に買被つていらつしやるんだから危險ですね」
「しかし、東京驛にそんな男が住んでるのは面白いですね。わたしもその男を見たいものだ。わたしはこれで、外形を見たゞけで腹の中を見破る眼識を備へてるつもりなんですよ」
「ハヽヽヽ」
黒川の間抜けの笑ひが相手を馬鹿にしたやうだつたので、喜代造は侮辱を感じて、「わたしがそんなことを云ふのが可笑しいんですか」
「どういたしまして。あなたのお考へは、與野さんから承つて大ひに敬服してるんですよ。只今も夢遊病者といふお言葉を承つて成程と思當りました。もつと詳しくその御講釋を拜聽したいものですが、ここでは何だから、わたくしの部屋へいらつしやらないか」
眞面目か冷かしか分らないやうな黒川の言葉を、喜代造は薄氣味惡く思ひながら、
「いゝえ、わたしは此處で叔父を待つてゐませう。あなたは御自由にお引取り下すつてもよろしいんですよ」と、無愛想

に云つた。

「しかし、あなたお一人を此處に置いてゐちや、與野さんに對してわたしの責任になりさうに思はれますが」

「どうしてです」

「與野さんは貴重なものを、そこらにしまつていらつしやるやうですから」

「ぢや、あなたはわたしが叔父の所有物を無斷で持つて行くことでもお思ひになるんですか。」「決してそんなことは」と、黒川は商人らしく叮嚀に云つたが、「ここは人樣のお部屋ですから、兎に角わたしの部屋へまゐりませう」と、喜代造の手を握つて立上つた。

その手の力は見掛けによらなくて強かつたので、喜代造は自から引摺られて行きながら、

「ぢや、お伴しますよ」と、柔順に云つて、戸の外へ出た。

黒川は戸を堅く鎖して自分の部屋へ入つて行つた。喜代造は多少の恐怖を抱きながら後から隨いて入つた。

「あなたは腕力がお強いんですね。若い時に柔道でもおやりになつたんですか」

「商人が柔道も劍術もやるものですか。だけど、あなたはお若いのに腕つ節は隨分お弱いんですね。智慧の方ばかりが發達なすつたんでせう。」

「知慧の方は兎に角、かう云つちや失禮ですが、麻幹(おがら)のやうに脆いだらうと思つてゐたあなたが、そんなにお強いのは意外でした。それだけの體力がおありになるのに、なぜビク〳〵してゐらつしやるんです」

「その煽てには乘りません」

黒川は不機嫌らしくさう云つた。そして、喜代造の頭の先から足の先までをじろ〳〵見てゐたが、

「Bさんと仰有るのは、あなたのお仲間なんですね。」
「これは驚いた。Bなんていふ男には、わたしはまだ會つたこともありませんよ」
「いや、わたしを欺いても駄目です。Bさんと打合せをして、與野さんやわたしを惡計の網に掛けようとしたんでせう。だから、與野さんを附狙つてるのは　失業者ぢやなくつて　あなたのお仲間なんですね。……わたしがかう見てゐると、顏形までも　あなたとBさんとはよく似てゐますよ。」
「叔父とわたしの顏が似てゐる上に、Bといふ男にまで似てゐちやたまりませんね」
「似てゐるのがお惡ければ似てゐないとしてもよろしい。あなたも叔父さんをお困らせにならないやうになさい。わたしは別に店を任かせてるのが氣遣はしくなつて來たから、直ぐにも歸國するつもりですが、久振りにお目に掛つた與野さんが、ひどい目に會ふのを知らん顏しちやゐられませんからね」
「そんなに叔父のことを思つて下さるのは有難いですが、何でもありやしませんよ。あなたゞつても、身體の中にそれだだけの潜勢力を持つていらつしやるんだから、幽靈に取つつかれてる人間のやうな顏して屈托なさる必要はないんです。叔父だのあなたゞのを附狙つてる男を追拂ふのには、極く僅かな金をお出しになればよろしいんですよ。……假りにわたしをBの仲間としてもよろしい。あなたの紙入れからでも、一摑みの紙幣をわたしにお預けになれば、今直ぐにでも解決されます。あなたの頭の中にもや〳〵してゐる雲を、わたしがその紙幣の力で追拂つて見せますよ。雜作のないことです」
「ハヽヽ」黒川はまた冷かし笑ひを洩らして　「あなたの御自慢の眼識もわたしの腹の中へは屆きませんね。あなたの叔父さんなぞはどうだか分りませんが　わたしは今あなたの仰有つた頭の中のもや〳〵した雲を追拂ふためにならー

掴みの金を投出すくらい何でもありやしません。あの世の悴のところへ持つて行かれない金を、この世の坊に残してやつたつて詰りませんからね。……何ならあなたのお仲間を何人でもこゝへ揃へて御覧なさい」

「人間が揃つたら、皆んなの前へ百圓札を振撒かうといふんですか」

「さう思つていらつしやるといゝ。ハヽヽ」

詩人喜代造も、百圓札に埋められた光景を想像するのは、どんな詩境を空想するにもまさつて快心の事であつたが、相手が本心でそんなことを云つてゐるらしいのが、却つて薄氣味が悪かつた。

「それは結構ですが、本當のところ、わたしには仲間がないんですから困りましたね。」

「そこの驛へ下りて行つて、手當り次第に誰れをでもお仲間にして連れていらつしやつたらいゝでせう。事情を話したら、誰れだつていやとは云ひますまい。ハヽヽ」黒川はさう云つて、一時興奮した後の疲れを感じたやうに椅子の上に足を投出して、「わたしの顔を幽靈に見立てたのは、無遠慮で面白いね。墓場の中を亡者がウロ〳〵してゐると思ふのは、御尤なお考へのやうで面白いが、次手に紙幣を枯れつ葉のやうに思つちやどうです。」

「さう思ふのもいゝですね。あなたは叔父よりは風流心に富んでいらつしやるからいゝ。昨夕廊下であなたに偶然お目て掛つた時から、一風變つた方だと思つてゐました」喜代造は、相手に媚びるやうに云つて、「あなたの戯談に引込まれて馬鹿話をしましたが、叔父がまだ歸つて來ないやうなら、わたしは一先づお暇して、出直して來ることにしませう。實は叔父には昨夕かぎりでお別れにしたつもりだつたのですが、叔父は妙にわたしのことを氣に掛けてるやうですから、わたしも氣になつて、ちよつと様子を見ようと思つたのでした。……あなたには詰らない戯談を申上げて失禮しました」

喜代造は恭しくさう云つて、出て行かうとしたが、
「まあ、お待ちなさい。それではあなたの御訪問が要領を得ないことになるぢやありませんか」と、黒川は椅子から離れて、手を伸した。
その手に掴まつては溜らないと、喜代造は戸口へ行きかけたが、
「まあ、もう少し此處で話して行つて下さい。わたしの云つたことであなたのお氣に障つたところがあつたらお詫びをしますよ」と、相手がさつきとは打つて變つて、懐つこく哀れつぽく云つたので、彼れはまた元の座へ戻つて、今まで氣づかなかつた、壁にかゝつてゐる浮世繪を見上げた。江戸の遊女らしいなまめかしい姿態に心を惹かれたので、それを話題にしようとしたが、黒川はそんな者にはまるきり無關心である如く、
「さつきの話をあなたは戯談だと仰有つたが、Bさんの陰謀だけは戯談ぢやありませんよ。わたしのこの耳でたしかに聞いたのですから」
「ぢや、わたしからも叔父によく警告しときませう。本當にいけないことをしさうでしたら、Bくらゐな奴はわたし一人でどうも取掴まへて、思ふさま泥を吐かせて見せます」
「へゝゝ、あなたの痩腕でそんなことが出來ますか」
「痩腕？」
喜代造は思はず叫んで血相を變へたが、相手の眼差しに打たれて心が怯んだ。
「お心安立でも無遠慮な口を利きましたが、痩腕のあなたのお仲間のやうな方に、われ〳〵はいじめられて亡ぼされて行くのかと思ふと、わたしも心淋しくてなりません。わたしの甥の仙次郎も、あなた方と同樣の年輩で、腕だつて痩腕、

なんですが、その甥のためにわたしも、一年々々壽命を縮められてゐるやうなものです。……上べはおとなしい勤勉な奴ですが、あの男もあなた方のお仲間と同樣にケチな陰謀を企んでゐるかも知れませんね。……いや、陰謀を企んでゐてもゐなくつても、どうせ、わたしの世はあれに讓る外はないんですね」黑川はさう云つて溜息を吐いた。
「仙次郎さんとかはわたしと何の關係もないんでせう。……それにあなたの生命を取らうといふやうな物好きな人間はどこにもゐないでせうから、そんな取越し苦勞はしなくつてもいゝぢやありませんか」
「お互ひにさう云つたりさう思つたりして氣休めをして、それで笑つて生きてゐられるんですね」
そこへ、卓上電話が鳴つたので、黑川は今までとちがつて元氣よく立上つて、受話器を手にした。
「……いつ立ちますかまだハッキリ分りませんが、さういふことなら、可成都合をつけてお伺ひすることにいたします。から、××さんにさう仰有つて下さい」
その電話の應對は、人が違つたやうに快活であつた。
「××ビルヂングに事務所を有つてる××會社の重役がわたしに、晩餐の御馳走をしようと云ふんです」と微笑を洩らして、「それよりも不思議なことには、その電話掛りの女の聲が、さつきあなたの代理だと云つて電話を掛けた女の聲と音色が同じなんですよ。若い女の聲はわたしにはどれも同じやうに聞える。あなたのやうなお若い方はさうぢやないでせうね」
「さあ、どうですか。若い女の顏や聲が皆んな同じやうに見えたり聞えたりするやうになつちや詰らないでせう」
喜代造は笑ひ〳〵さう答へて、相手の機嫌のいゝ折を機會に座を立つて、慌たゞしく暇を告げて出て行つた。
蟬が鳴いてゐる戶外には、眞夏の光がキラ〳〵と照つてゐた。彼れは生返つたやうな氣持がした。「あの老人はおれを愚

弄するつもりであゝ云つたのか、それとも正氣であゝ云つたのか」と、それを一つの問題として考へ〳〵雜踏の中へ入つて行つた。

客の去つたあとで、黑川は顏を洗つて口を漱いで、また寢床に横たはつた。喜代造との取留めのない話によつて、却つて頭が輕くなつたやうであつた。暫くして歸つて來た隆吉は、晴々しく元氣づいてゐたので、自分の部屋へ入らないさきに、黑川を訪れて、二三言無駄口を利いたが、黑川は喜代造の訪問したことは知らせなかつた。

日暮れ頃であつた。喜代造が銀座の大通りで、偶然Bに出會つたのは。

「暫くだつたね。この頃は此方にゐたのかい」と、喜代造の方から訊ねた。

「近日大阪の方へ出掛けるかも知れないんだ」

「何かいゝ仕事が見つかつたか」

「さあ。行つて見なきや分らないな」

「そこのカツフエーへ寄つてコーヒーでも飲まうか」

「いや僕は晩餐の招待を受けてゐて、これから出掛けるところなのだ」

「君が招待される？それは不思議なことだね。」

「東京驛のホテルにゐるお客樣に呼ばれてゐるんだ」

「それは妙だね」喜代造は相手の顏をじろ〳〵見て、笑ひを洩らして、「君を晩餐に呼んだ人の顏立は僕に似てやしないか」

「どうしてそんなことを訊く？。人間が人間に似てるしか以てやしないよ」

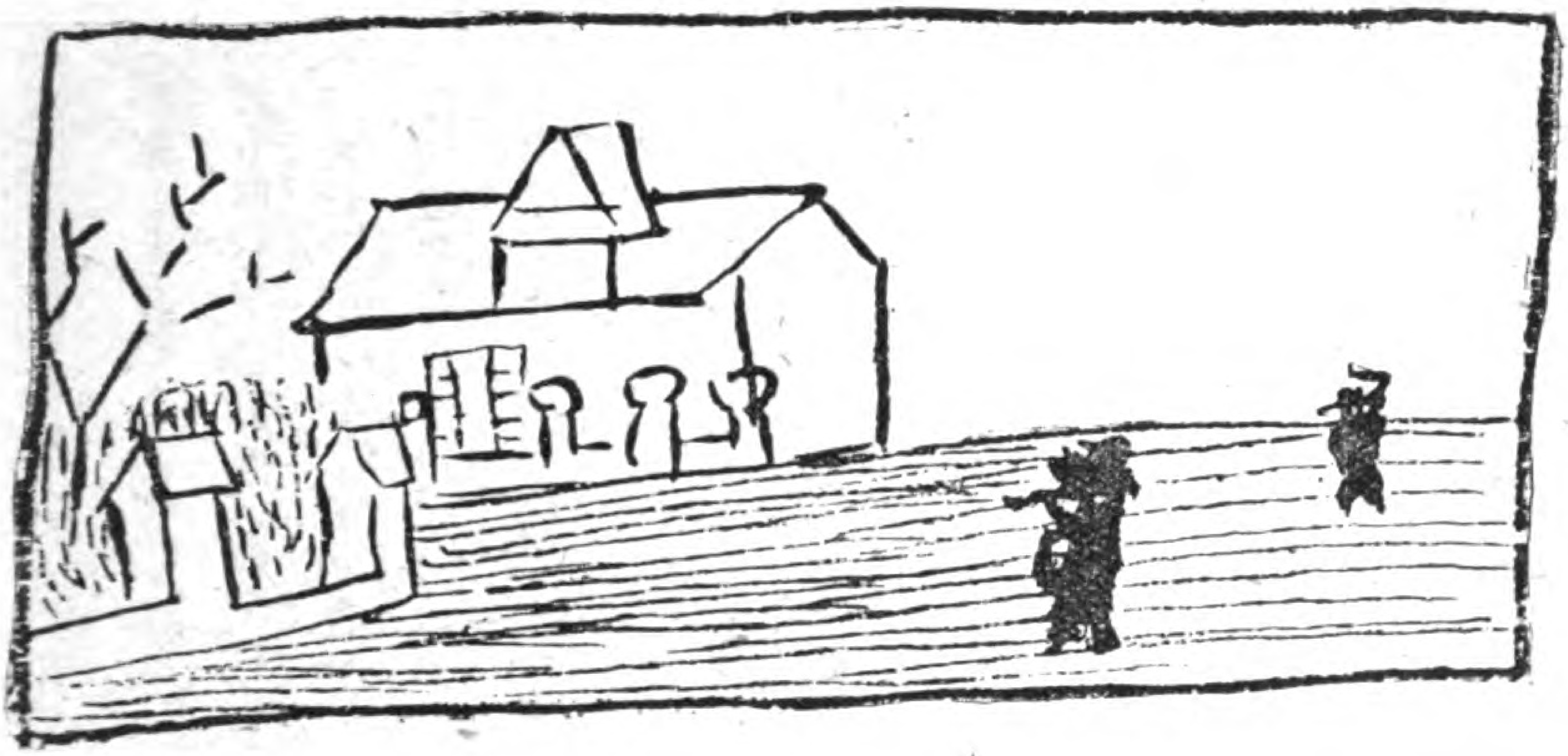
「君は僕の姓を忘れてゐるのか」

「馬鹿ことを聞くぢやないか」

「君も血のめぐりの悪い奴だね。それで陰謀家として恐れられてゐるんだから滑稽だ。………しかし、うまくやりたまへ。おれの知つたことぢやない」

喜代造はさう言放つて、相手の返答も聞かないで足早に行過ぎた。「あいつがホテルの叔父の部屋へ行きついた時に、電話を掛けて、正體をすつぱ抜いてやらうか。あんなヤクザな奴に店をまかすなんて、叔父もよく〳〵呆けてるんだ。」

黒川も叔父もあの二人ともぼけてゐるんだらうが、さう云ふおれだつて、夢遊病患者の一人かも知れないと、一三日叔父に拘つてゐた愚かさを顧みて、心を引締めたつもりで、姿勢を正して自分の宿の方へ足を進めた。



群集（一幕）

前田河廣一郎

人

髪を刈るボーイ（白服）
輕業師
その徒弟（青年）
輕業師に買はれた娘
學生
再渡米する男
朝鮮人（青年）
片眼の男
船の事務長
商人
金歯の男

山高帽の男
船室附のボーイ（白服）
若い女
料理屋の主人
その妻と稱する女
老婆
他の旅客大勢

時

現代、五月ごろ

所

船の中

舞臺

北米シャトル通ひの定期汽船内の、普通、『三等』と呼ばれる、不潔な『C』デッキの一部である。
上層の各デッキに壓迫された、灰色な、船底の、旅客の收容場である。天井の中央に釣るされた大型の電燈が、白つ

ぽい幻滅的な光を投げてゐる。その光の屆かぬ隅々に、微弱な裸電燈が、三つ四つ、未熟の果物のやうにぶら下がつてゐる。正面奥、稍斜なカーヴをゑがいた船腹に穿ちある二つの舷窓（ポート・ホール）から、非現世的な、晴々しい大洋の、午後の日光の餘映がさし込む。

正面奥すこし左寄りに、上甲板へ通ずる、だだつぴろい木製の階段が、木の欄干を伴ひながら、舞台へ滑り落ちてゐる。階段が、天井と同じレヹルに達したところに、『B』デッキの一部が、仄かな電光を溜めてゐる。

階段の左は、三本の鐵柱にすげられた、同じ型のベットが二側に八つ並んでゐる。その前に、『木馬』と稱せられる木の長いベンチ。階段の右は、ちよつとした間隙を隔てて、ニス塗りの板圍ひになつた特別三等室がある。室内は見えない。ただ、その扉のない出口への二段の段々が、横向きに見える。その室内からも、餘り強くない光が射す。特別三等室の前から、やはり二列に八つのベッドが、ぎつしり塡まつて立つてゐる。その前にも木製のベンチ。

これらの細々した裝置を押のけるやうに、舞台中央から前方へかけて、高さ一尺、二間と三間半ほどの、キャンヴアスを張つた壇がある。これは船底へのハッチでもあるのだが、この室内に於ける、唯一の遊歩場、食堂、演技場、集會所なのである。

旅客は、上下二層のベッドの、上の方へは、小さな移動鐵梯子を使つて攀る。寒さを防ぐため、他人から覗かれぬため、僅かな電光の分配を出來るだけ經濟的に使用するため、旅客は、めいめいのベッドに、綱を張つて、毛布や着物、外套などを懸けてゐる。さほど遠くない船尾の舵機室から、蠢くやうな機械の轢音が、追ひかけるやうに室内へ響いて來る。室内全體が、ゆるやかな角度に上下動を營む。人の騷ぎが鎭まるごとに、敏い波濤の音が舵機の音とともに、室内に苛立しい不休（レストレスネス）の氣分を與へる。

澄み亘つたヴァンクーバー近海の午後。長い航海日數の間、同じ個所に幽閉された旅客の、疲れきつた、倦怠的な焦燥が、みんなの顔に表はれてゐる。雪駄、草履、靴穿の者や、寢卷、外套着など、亂雜な五月の氣候に適した服裝。

幕開くと、階段から、中央の段へかけて、まつ黒な人だかり。四五人は、看客に背を向けて、口々に何か騷々しく叫び合ひ、手足を揮ひながら動いてゐる。若い女、右端のベンチに編み棒をしきりに動かしてゐる。

壇上、左端に、髮を刈るボーイ小さな三脚椅子を据へて、商人の頭髮を短かくしてゐる。左端のベッドに、老婆しきりに指を折りながら、何かを數へてゐる。正面奧の右の舷窓から、片眼の男首を出して海を眺めてゐる。室内には、濃い煙草の煙が濛々と立罩めてゐる。

朝鮮人、群集からかけ離れて、舞台前方を洋服のポッケットに手を突込んだまま、往きつ戻りつしてゐる。

朝鮮人（群集の叫び聲の間合々々に）なんていふ喧嘩の多い船だ。――日に三度は、きつと何かないと承知しない連中だからな。

髮を刈るボーイ（商人の肩からタオルを取りはずすと）さあ、色男が出來あがりましたよ。これなら、メリケン娘にもてること受合ひです。（金を受取ると、一段聲を張りあげながら）お次は――どなた？どなたでしたつけ？

中央の群集の二三人あわてて駈けつける。その他の連中も、駈け寄らうとする氣配を見て、ボーイ叫ぶ。

髮を刈るボーイ　ええと――お順に願ひやす。一どきにさうは刈れませんよ。

群集輪を描いて、ボーイの身邊に集まる。『俺だ。』『僕が先さ。』『だつて先刻から待つてるんだもの。』『わつしは横濱を出るときから待つてるんですよ。』などといふ聲が、相殺的に同時に聞える。

壇上中央に殘された金齒の男と學生とは、劇しく蹴り合ひ掴み合ひながら、右端のベンチの方へ轉ろがり落ちる。學生が下になる。ベンチの若い女、毛糸の玉を落としながら立ちあがる。商人、急いで毛糸を拾ひ遣る。二人微笑。

商人　亂暴ぢやありませんか――？

若い女　有難うございました。

學生（苦るしさうに）ま、待て。

金齒の男（首をあげて若い女と商人とを見る）冗談ぢやない――。（學生を放す）

學生と金齒立ちあがつて、商人の方へ詰め寄る。

髮を刈るボーイ（慣れた調子で）ぢやくじッ引にして下さい。一番長い糸を引いた方がお次と。（糸を束ねたものを箱から取り出す）さあよござんすか？――まるで朝鮮人(ヨボ)の飴賣みたようだね。（笑ふ。朝鮮人、きらりと眼をひからしてボーイの方を睨める。群集手に一本づつの糸を握る）そら引いて。引いて！あゝ貴方だ。（料理屋の主人笑ひながら三脚椅子に就く）

群集の一　これで又長いこと待たなアならん。

群集の二　ああ、つまらない。

群集の三　ボーイさん、早くしないと、俺らあシヤトルで刈つちまうぜ。

髮を刈るボーイ　へえへえ、かしこまりました。こちらも商賣ですからね、お客はなるだけメリケン人に取られたかありませんよ。（料理屋の主人へ）短かく？分けるんですな？（群集へ）そりあ、あんた方、シヤトルの床屋――バアバアつて云ひやすがね、向ふぢや――その毛唐の髮結床なんかへ行つてごらんなさい。眼の飛び出るほど取られやすぜ。そこへ行くとこつちとらあ安すいもんだ。――これでづぶの素人でもないんですからね。ごらんなさい、今の

お客なんか、もうすつかり磨きがかかつて（商人を指さす）もうあのとほりでさあ、色男！（笑ふ。群集もどつと笑ふ）

群集の四　又はじめてあがる。（右へ歩み出す）

學生　（若い女を庇ひながら商人へ）君は、この女が一人旅だつてことア知つてるだらう？

金齒の男　よせよ。手前、この女、この女つて、何か自分一人でこの女の人を背負つてるやうなことを云ふからいけねえんだ！

商人　お孃さん、あんたも、えらい連中に憑き纒はれなすつたもんだね。

群集の一　やれ、やれ！

群集ぞろ／＼と右端へ流れる。

學生　憑き纒ふ？　へんなことを云ふね、君は。憑き纒ふのは、この男や、（金齒を指差す）君なのぢやないか？　僕は保護してやつてゐるんだよ。

若い女急に後方のベッドの一つへ姿を隱くす。

群集の二三　やれ、やれ、男らしく話をつけちめえ。

金齒の男　俺はもうやらねえよ。喧嘩はごめんだ。この船へ乘つてから、毎日のやうに掴み合ひばかりやつてゐるんだ。飽きた、飽きたよ。

上甲板へ出て居つた山高を被つた男、階段を降りて來る。

山高帽の男　をい、みんな、素的なビフテキだぜ、見て來いよ。

若い女　（俄かに學生と金齒と商人の間に姿を現はして、手にした寫眞を見せる）折角のご親切ですけれど、あたしにはちやんと

待つてる人があるんですの。ほら、ね、これが谷川の寫眞なんですよ。

再渡米する男（群集中より）なに、谷川？

學生 （寫眞を女の手から受取つて、直ちに金歯へ渡す）いや、そりあ、もう、ちやんと知つてはゐるんですよ。（金歯の男寫眞を商人へ廻はす）だからこそ、僕は、貴女がかういふ狼みたやうな連中に取捲まつちやならんと思つてゐるんですがね。

商人 （感心したやうに）なるほどね、こりや立派な寫眞ですな、――この紳士が、その、貴女のご亭主、といふわけなんですね？

若い女 え、まア――さうなの。シャトルで事業をして居りますの。何だか極まり惡るいので、あたし今まで何も云はなかつたんです。でも（冷笑的に）あんまり皆さんがお騒ぎになるのでね……（群集の手へ寫眞が順々に廻はされる。女あわててそれを取り返へさうとする。群集の二三人寫眞と女とを隔てる）あれ、まあ、どうしませう？ 返へして下さいな、御返へし下さいよ。見世物ぢやないんですから！

再渡米する男 貴女、このふ人は、谷川益三つてい人ぢやありませんか？ マスの谷川つて云ひますがね、我々の仲間ぢや。

若い女 さう、さうなんですの？ 貴方御存知でいらしやるの？

再渡米する男 （ちよつと逡巡して）う、その、知つてるといふわけでもないんだがね。――名前だけは。

若い女 まあ、よかつたわね、あたし、御知合ひの方と御會ひして。

再渡米する男 いや、私はべつに懇意だといふわけぢやないんですよ。ただ、その名前だけは知れてゐる人だ、といふ

ので。――で、何かね、貴女は、この男――いや、この人と、御婚約でもしなすつたのかね？

料理屋の主人首を擡げて聽く。ボーイに首を捻ぢ向けられるが、その都度、女の方へ振り向く。ボーイ怒る。

髮を刈るボーイ　貴方ちつとじつとしてゐなくちや虎刈になりますよ。

料理屋の主人（無意識に）虎刈にねえ――。

若い女（再渡米する男へ近づく）婚約つて、あたしもとからこれの妻なんですの。貴方ご存知なんでせう、谷川のことは？　聽かして下さらない、是非。

山高帽の男（一段と聲を張りあげる）おい、みんな、あの一等食堂のビフテキを見て來いよ。毛唐が旺んにぱくついてやがるんだ。ビフテキよ、こんな大きい！

群衆（異口同音に）ビフテキ？

山高帽の男　さうよ。こんな大きい、脂肪のじりじり浸み出る奴よ。甘いぜ、見てゐても、かうなんだな、ごくりツと喉が鳴りあがる！フオークとナイフで、かう切つてさ、血のじわじわ出るところを、ぱくついてやがるんだ。早く行つて來いよ、今のうちに見て置かないと、失くなつちまうぜ。

群集の三　甘いだらうな、ビフテキは？

群集の一　ビフテキなんて、俺はこの船へ這入つてから拜んだことはないな。

群集の二　その代り、あの女の貌ばつかり拜んでるんだらう？

群集の五　十日も十五日も、毎日冷藏庫の魚と切乾大根と澤庵だけぢや、全くやりきれないよ。一體船會社は、俺達を何と思つてやがるんだらう？

朝鮮人　同感、々々。

群集の二　見ろ、朝鮮人が咬つてやがる。お前達は、あまり食意地ばつかり張つてるからさ。

群集の一　だつて、僕はほんとにこんなに痩せつちまつたよ。

群集の五　ねえ、おい、朝鮮、何と云つたつけな、君は？——尹さんか。『伊藤侯』の『伊』字から『ニンベン』を引いたのだつけな。（朝鮮人暗らい顔をして立留まる。）。さうぢやないか？誰が考へてもわかることだらう？俺達三等旅客がから大勢で乘込まなけりや、船會社は立つて行くもんぢやなからう？

朝鮮人　それは嘘でありません。つまり私達は冷遇されるのです。三等——ですからな、にんげんは三等はいけませんよ、上等、一等に限ります。（自嘲的に笑ふ）

山高帽の男　だからよ、この俺みたやうに、こつちで拙い物を腹一杯詰めて、一等食堂を覗いては、奴等が甘い物を食ふところを眺めて、自分でそれを食つてるやうに感ずればいいおやないか。——結局その方が安あがりで甘い思ひが出來るといふものさ。

群集漸次に若い女の方を離れて、中央の山高帽の方へ來る。寫眞再渡米する男の手へ渡る。

料理屋の主人（ボーイへ）あれあ、お前さん、名打ての博奕打さ。あの娘さんも、きつと欺されて寫眞結婚をしたんだぜ。

髪を刈るボーイ　へえ、さうですかね？随分しつかりした女ですかね。そりや、貴方、何ですよ、私共は永年一つ船に乘り込んでゐますからね、ちやんと金で云ふことを聞くやうな女は一と眼でわかりますからな。（低聲に）それに、内ボーイ仲間で當つて見ることもありますからたな。」

料理屋の主人　マスに引懸つたら最後、大概の女はチャン街へ叩き賣られつちまうんだからね。

髪を刈るボーイ　ぢやいつそのことそれを敎へてやつたらいいと思ひますがね、今のうちに。

再渡米する男　（膠もなく寫眞を女へ返へす）私はあんまりこの人のことは知らないが——ともかく、貴女、アメリカへ行くんなら、用心しなさるがいいよ。男つてもピンからキリまであるんだからね。

若い女　でも谷川はあたしの郷里のれつきとした家柄の人なんですもの。

朝鮮人　（中央壇上にて）私達は虐げられた民衆です。この通り、何です、この室内の汚なさは！そして、上等客の食慾を覗いて、わづかに自分の食慾を充してゐるぢやありませんか！悲慘なことです。それは何故ですか？金を拂はないからです。何故金を拂はない、拂ひ得ないのですか——金がないからであります。何故金がないのですか——

老婆　（通りかかりの料理屋の主人の妻と稱する女に）あれが朝鮮人ですつてねえ。ちつとも、わたしどもと變つたところはないんですね。

料理屋の主人の妻　でも、いけ好かない奴ね。わたしア嫌ひですよ、あんなのは。

料理屋の主人　何だ、ありや、社會主義者ぢやないかね？　へんなことを云つてるぜ。

髪を刈るボーイ　（低聲に）ありあ、私の考ですが、ひよつとしたら、この間日本を脱走したといふ無線電信のかかつて來た共產黨とかいふ奴かも知れませんよ。シヤトルへ着けあすぐわかりますがね。（調子を變へて）何、貴方、この大船ですもの、いろいろな御客さまがありますよ。

山高帽の男　（朝鮮人を遮ぎつて）君はよく說教をしたがる男だね。よし給へ。それよりは、どうだ、みんなビフテキ見物に行かうぢやないか？

群集の一　もう失くなつた頃だらう？

群集の五　行かう、行かう。

群集　（異口同音に）行つて見よう――。

山高帽、金歯の男、學生などを先にして一同中央階段からぞろぞろと攀つて行く。料理屋の主人、あわてて金を取出すと、ボーイを突退けて、つづく。

料理屋の主人　髭は自分で剃る。

髪を刈るボーイ　（タオルを拾ひながら）ええ、おつぎは？（誰もゐないのに氣がつく）何だ、馬鹿々々しい。ビフテキの話を聽くと、もうあれだ。が、無理もないね。コックの野郎とシチヨーヂがごまかすもんで、毎日々々切乾大根ばつかり食はせられてるんだからな。どれ、俺も骨休みとするか。

料理屋の主人の妻　ボーイさん、わたしをちよいとあたつて下さいな。

髪を刈るボーイ　へえ、へえ。どうぞこちらへ。

若い女ベンチへ掛けてじつと考へてゐる。再渡來する男、急いで自分も上甲板へ駈けあがらうとする。朝鮮人何から口笛吹きながら依然として散歩してゐる。

若い女　（再渡米する男へ）あのウ――ちよつと。

再渡米する男　私？

若い女……あのウ、何だか、あたし氣がかりでなりませんの。貴方、ほんとに聽かして下さらない？あたし谷川のことが知りたいんですもの。

稍間。

再渡米する男　云つても貴女は私を恨んぢやいけませんよ。ようごわすか、覺悟してゐませうね。――實は、マス谷川は、大博奕打なんですよ。その寫眞、それは、貴女、どこで撮つたものと思ひますか？

若い女　（呟く）これは、谷川の事務所だつて云つて來てますんで。

再渡米する男　氣の毒ですね。どうも貴女のやうな人が多いから困るんですよ。そりあ、誰が見ても、一度シヤトルの土を踏んだ人間なら一と眼でシヤトルの市役所だつてことがわかりまさあ。そして、谷川は、前科者の……

若い女はぢつとして寫眞を瞶める。泣く。

再渡米する男　（女の肩を撫でてやる）そら云はんこつちやない。しかし、今のうちに知つてゐた方が、かへつて貴女のためになりませう。私は忠告するが、この結婚は思ひ止まつた方がいいですよ。

特別三等室より輕業師に買はれた娘が泣き聲で駈け出す。舞臺用のタイツを着てゐる。親方、同じ服裝で後方から飛び出す。手に革帶を持つてゐる。

輕業師に買はれた娘　親方――勘忍して――

輕業師　この剛情つ張りめ！（革帶を揮つて追ひ駈ける）

娘、顏を剃つてゐるボーイと料理屋の主人の妻のところへ駈けつける。

髮を刈るボーイ　危いツ！

料理屋の主人の妻　まア、何てことを！そつちの親方さん、あまりこの娘をいぢめないで頂戴よ。わたしアすんでのことに鼻を剃り落されるところでしたよ。

輕業師　どうも、はや、誠に濟みません。この餓鬼があんまり横着なもんでしてな。

老婆　横着々々つて、お前さん、わたしんところからお前さんの部屋は丸のぞきだよ。あんまり小さい娘を虐めるもんぢやありませんよ。

輕業師　(怒る)何が丸のぞきだい?——稽古をつけてゐただけぢやねえか?俺が買つた俺の弟子を、躾が出來ねえからと云つて、撲たうが蹴らうが、こつちの勝手ぢやねえか。老ぼれめ、默つてやがれ!

輕業師の徒弟ぶらりと中央階段から降りて來る。

輕業師の徒弟　(つかづかと進み出て)又ですか、親方?

輕業師　何が又だい?何が又なんだい?

輕業師に買はれた娘、隆さん、助けて下さい。おらア殺ろされるだよ。

輕業師の徒弟　親方、大體、あの狹い部屋で稽古をつけるのが惡るいと思ふね。あすこぢや何も出來アしないよ。それよりこの方がよつぽどやりよかないですか?

輕業師　やい、手前、近頃急に生意氣になりあがつたな。濱を出るときア、そんな口調は噯にも出さなかつたぢやねえか?一體、手前をそんなにまで仕上げたなア誰だと思ふんだい、べらぼうめ。貴樣はこの餓鬼に惚れてるんだらう?シヤトルへ着いたら、この俺の眼を掠めて逃げ出さうとでもするんだらう?

朝鮮人　又喧嘩か?

群集ぞろぞろと階段を降りて來る。何か口々に罵り叫んでゐる。學生先頭に立つて昂奮した面持。

學生　馬鹿にしてやがる。僕達を何だと思つてやがるんだ!

若い女急遽立ちあがつて、群集と入り代つて階段を昇つて行く。泣いてゐる。

群集の一　畜生ツ、俺達をまるで犬みたように思つてやがる。

朝鮮人　どうしたのですか？

群集の五　なに尹さん、一等食堂へ行けないやうに、柵を建てやがつたんだよ、船の奴らア！

朝鮮人と再渡來する男　何、柵を？

金歯の男　人を人と思はねえ奴らだよ。俺達があの食堂を覗き見するつていんで、新しい柵を一等室の方へ行かせねえやうに、兩方の甲板へ固く結いつけつちまつたんだ。

學生　三等船室を侮辱したもんだ。

群集　（異口同音に）侮辱だ！

輕業師の徒弟、親方と娘とを拉して特別三等の方へ行く。

輕業師の徒弟　親方まごまごしてると、毆ぐられるぜ。この連中は、この頃すこし氣が荒くなつてるんだから。

輕業師　（强く娘の手を曳く）來い、手前！

老婆　ちつたア毆ぐられでもした方がいいよ、あの藝人は。

群集の三　腹癒せに、一つあの柵をぶち壊はしてやらうか？

朝鮮人　やめなさい、そんなことしたつて何にもなりあしませんぜ。それよりは、どうして私達がこんな待遇をされるかを考へて見ようぢやありませんか？

料理屋の主人　又こいつの社會主義がはじまつたぜ。

學生　しかしあの高慢ちきな外國人が、僕等を尻眼にしてビーフを喰つてゐる光景を君は何とも思はんですか？　柵をめぐらしてね！

群集の一　船の中は自由なんだ。

群集の三　眼で見る分にあ何でもないぢやないか？

群集の五　まさか俺達はあの毛唐の夫婦の寢床の中まで覗き見するやうなことはないんだぜ！

再渡來する男　でも、デーセントぢやないね、他人の物を食つてるところを外から眺めてるなんて。だから日本人はアメリカで輕蔑されるんだ。

料理屋の主人の妻　貴方およしつてば。つまらないぢやないの、そんなこと議論したつて。（タヲルをボーイへ手渡して立ちあがる）

髪を刈るボーイ　さあ、お次は？

誰も返事する者なし。

朝鮮人　みなさん、これは明かに××××××いふことを示す一例に過ぎないのです。

金歯の男　もういい。そんな屁理窟はぬきにしてくれよ。俺達は、あの柵が癪なんだ！

朝鮮人　その柵はずつと昔からあるんです。ただみなさんが氣がつかなかつただけなんです。

山高帽の男　船長へ談判に行かう。

群集　（異口同音に）それがいい！

料理屋の主人妻に引張られて左端のペットの蔭へ消える。

再渡米する男　云つたつて何にもなりやしないですよ。

學生　待遇改善運動だ。

髪を刈るボーイ　お客さん、お客さん達、どなたももう御用はありませんか？もう行ちまいますよ。留めるなら今ですよ！（答なし）

ボーイ道具を纏めて、左端ベツトの間へ去る。

特別三等室より娘の悲鳴。輕業師とその徒弟掴み合ひながら出て來る。

群集の五　何だ、何だ？

朝鮮人　そこにも人權蹂躙の一例がある

學生　この野郎生意氣だ！（親方を掴まへる）

老婆　たうとうやられるね。

群集の一　第一特別三等だなんてに納つてあがるのが目觸りだ。

群集の五　藝人のくせによ。

群集の三　いつも洋食ばかり食らひやがつてさ。

群集の四　その洋食が毛唐の食べ殘りなんだから笑はせやがるよ。

群集の六　懲らしてやれ。

輕業師の徒弟　親方、俺は、もう今日限りお前と弟子でも親方でもねえぜ。いゝか　かうやつて皆樣が見ていらつしやる前で、俺ははつきり申上げるんだ。お前さんとは十年近くもいつしよにゐるが、一度だつて俺達に優しい言葉を掛

けたことのねえお前だ。さあ、皆さん、御聽き下さい。これで私は親方とすつぱりと緣を切りやした。

學生　人身賣買は法律で禁じてあるんだ。

輕業師　この野郎！（血色を變へて徒弟に掴み掛る、徒弟轉ろぶ。親方毆ぐる。）

群集親方を突飛ばしながら、したゝかに階段の欄干へ投げつける。

山高帽の男　さあ　この勢で一つ船長へ談判に行かう！

群集　よからう。やつちめえ！

船室附のボーイ　（中央階段より降り來る）何ですか、何ですか、皆さん、ボーイはこゝに居りますよ。御用がおありでしたら、何なりと私に云ひつけて下さい！そのためのボーイなんです。

金齒の男　お前には用がないや。

學生　このボーイだつて毛布一枚に二弗もぼりあがるんだ。

ボーイ　困つたね。私は、洋食の御注文を戴きに上がつたんですが。

山高帽の男　洋食糞喰らへだ。あの毛唐の餘り物を一皿五十錢づゝで賣りあがる癖に。まごまごしてると、その香具師のやうに蹴飛ばしちまうぞ。

朝鮮人　ボーイさん、私達は、今船賃相應の待遇をして貰はうとして相談したところなんです。貴方は來ない方がよろしい。（ボーイ去る）

學生　皆で一と談判して來よう。

群集（異口同音に）行かう、行かう！

輕業師の徒弟、買はれた娘を連れて、一同と共に。階段を攀り行く。隅の老婆くるりと向を換へて寢る。群集の騒ぐ聲がさわさわ遠くまで響く。親方特別三等室へ姿を消す。

ボーイ再び階段から下を覗く。再渡米の男と朝鮮人と舷窓の片眼の男のみ居るのを見て、つかづかと降りて來る。

ボーイ　朝鮮の方は、貴方でしたね？

朝鮮人　さうです。

ボーイ　ちよつと船長さんが、貴方に御話があるんですて。船長室まで來て下さい。

朝鮮人　私に？――――私に何も用事ありません。私行く必要を認めません。

ボーイ　そんなこと云はずに來て下さい。さうでないと、事務長さんか誰かが來て連れて行きますぜ。

朝鮮人　用があるならこつちへ御出で下さい。私は旅客です。誰からも命令を受ける筈はないんです。

ボーイ　來いと云つたら來たらいいぢやないか！

ボーイ無理に手を曳かうとすると朝鮮人素速く逃げる。

再渡米の男　おい君、何も君は、この人にそんなことをする權利はないぢやないか！

ボーイ　何ですつて？――――この人間は、從々私が監視してゐる危險な男なんですよ。日本で非常な陰謀を企んだ男なんですよ。僞名で變裝して横濱を出たんですよ。

再渡米する男　まるで警官のやうだね。

ボーイ　よし今に役人達が御出になつて引張つて行かれるまで待つてろよ！（去る）

再渡米する男　（右隅の朝鮮人へ近づく）君今のはほんとかい？

朝鮮人（立ちあがる。決然として）事實ですよ！

云ふや否やひらりと階段へ飛びあがつて姿を消す。

再渡米する男あたふたと、朝鮮人のあとを追ふ。

舞台暫らく空虚。

若い女（階段から悄然として降り來る。暫らくベンチへ掛けて泣いてゐる。）死ねない。あたしには迚も死ねない……。

ボーイ（再び現はる。事務長彼につゞく）おや、誰もゐない。——あの、もし、貴女、朝鮮人をごらんになりませんでしたか？ 例のすらりとした男です？

若い女　ええ存じません。

事務長　だからよく注意してゐないといかんと云つたぢやないか？船長さんとこへはあのとほりここの連中が呶鳴り込んでるし、その間にどんなことがあるかわからんぢやないか！

ボーイ　いいえ、その、つい今までここに居つたんですよ。

事務長　捜がしてごらんよ、方々、ほかのボーイにもさう云つて。あんな危險な奴だから何をするか知れあしないんだ。

若い女　あの人が何かあつたんですか？

事務長　いいえ、あれは、日本を脱出した有名な危險人物だつたんです。

ボーイと事務長、室内を捜がして去る。片眼の男、『あッ！』と叫んで舷窓から離れる。

片眼の男　大變だ！朝鮮人が飛び込んだ！

老婆、若い女（共に立ちあがる）まあ——！
片眼の男　おーい！誰もゐないかア！
船長室へ行つた群集この時どやどやと階段を降りて來る。罵倒の聲。
學生　高慢な奴だ！
金歯の男　こんな船つたらないぜ！
山高帽の男　おまけに今度は食堂へ幕を張りあがつた。
群集の五　毛唐の機嫌ばつかり取つてやがる！
片眼の男　おい、おい、あの朝鮮人が海へ飛び込んだぜ！
一同（同時に）朝鮮人が！
片眼の男　いま見たんだよ。私の頭の上からぽちやんと飛び込んだんだ。
再渡米する男、急いで階段を降りて來る。
再渡米する男　たうとう逃げたかな。兼々用意してたんだね。彼奴は！
學生　あの朝鮮人かい？
再渡米する男　追ひ駈けたが、一と足のところで、海へ飛び降りたよ。
片眼の男再び舷窓へ近づいて外を見る。
群集の六　朝鮮人も何もあるもんか！この船は生意氣だ、全體！
群集の一　かういふ待遇をすりや誰だつて怒るさ！

再渡來する男　私は二度も三度もこの船でアメリカへ行つたり來たりしてるんだが、いつだつてこんななんだ。皆さんははじめての航海だからさう怒りなさるんだが、これが船のきめなんだからね。

金脣の男　冗談云つちやいけねえ。あの毛唐の食ひあましを五十錢で賣りつけるのが人間並みの取扱ひと云はれるかい？

群集の三　おいもう一度行かう！こんどはあの柵を乘り超えずに、正面からぶち壞はしてやらう！

群集　(同時に)やらう！

けたたましい汽笛の音と共に、汽船俄然船脚をゆるめる。

山高帽の男　ありあ何だ？

片眼の男　ボートが降りた。

群集の二、三、五　ボートが？

片眼の男驚いたやうに中央へ驅けつける。

片眼の男　おい、陸だ、陸だ！むかうに陸が見える！

群集　(同時に)陸だ？——アメリカか？

群集各自に欣びのあまり跳り狂ふ。

群集の一　アメリカだ！

群集の二　シヤトルだ！

群集の三　もうこんな船に用はないや。

群集の四　いつ船が着くかな？

群集の五　もう上陸の用意をせにやー。

群集の六　ビフテキでも何でも思ふ存分に食へるんだ。

學生　着港前にもう一と談判しようぢやありませんか？、

群集の三　何、もう今日明日に船が着くといふに、そんなことせんでもいいでせう。

群集（各自に）よさう、よさう。

若い女　どこへ着いてもあたしにはもうみんな同じだ。

再渡米する男（近づきつつ）さうですよ。この連中はまだアメリカを見ないから大騒ぎやつてるんですがね、むかうへ行けあむかうで、この船なんぞよりももつと非道い生活があるんです。

片眼の男　陸を見に行かう。

群集　甲板へあがらう。

一同再び去る。再渡米する男舷窓の方へ近より、海を覗く。

再渡米する男　ボートが空で歸へつて來る。これぢや逃げ終せたかも知れないよ。なかなか敏捷な男だつたな。

上甲板の方に、わーーつと叫ぶ群集の聲。輕業師よろよろと特別三等室より歩み出て、頭を兩手に抱へながら、ぼんやり壇のまん中に胡座をかく。

料理屋の主人と、その妻と稱する女、二人ひそひそと語りながら左端より出で、右の若い女へ歩み寄る。

料理屋の主人　お嬢さん、（再渡米する男を指して、低聲に）あの男のことはみんな嘘ですぜ。ありあ、有名な人浚ひでし

てたあ、あんなことを云つちや若い婦人の方をアメリカで誘拐するんです。なに、谷川さんは私んとこへごく懇意にしてらつしやる方ですよ。私達夫妻が保證しますよ。どうせ同じ道なんですから私達で御送りしてあげませう――な、おい。

料理屋の主人の妻　ほんとうにお一人でね、可愛さうに。アメリカは悪い男が多いんですから、よつぽど御氣をつけなさらないとね。

輕業師　ああ、俺はどうしたらいいかわかりやしない！

若い女　そりあほんとでございますの？

料理屋の主人　ほんとですとも。その證據、谷川さんの番地は、シヤトル市北街三十八でせう？そらちやんと私は知つてますよ。

再渡米する男、窓を離れる。夕照の色が射す。群集再び降り來る。

群集の一　たうとう着きましたね。

群集の三　着きました。

學生　諸君は待遇改善の方はどうするんです。

群集　（各自に）シヤトルだ！嬉しいぞ！

船室附のボーイと髮を刈るボーイ　さあ皆さんこれからご飯ですが、どうぞおしづかに願ひます。洋食のお方は？

群集　（我勝ちにと手を擧ぐ）俺だ！俺だ！（ボーイ立ち去る。）

再渡米する男　（獨白的に）厭だね、まるで！

若い女暫らく料理屋主人夫妻を眺めてゐる。決然として。

若い女　あたしはあたしで行きますから、どうぞ構はないで下さい。折角のご親切ですけど！

汽笛再び鳴る。船動く。

片眼の男　（飛ぶやうに階段を降りかける）つかまつた！鮮人がつかまつた！今濡れ鼠になつて、船長室の方へ引かれて行つたよ！

群集　つかまつた？――いい氣味だ、あんな怪しい奴は！

天井の蓋一ケ所だけ開いて、飯を入れた大きいバケツがするすると降りて來る。

學生　めしだッ！

群集　（同時に）めしだ、めしだッ！

再渡米する男　豚！豚！豚！

若い女　（憤然として階段の中央へ走り駈あがる）皆さん、あの朝鮮の方を救ひませう！あたしたちは、重ね重ねの屈辱に怺へ得ないのです！（群集の大半、且驚き且拍手す。他はバケツに取りすがる。）

群集の半分　（同音に）行かう、行かう！

（幕）

聚樂の人　前幕までの梗概

第一幕第一場　月明りの夜曾呂利新左衛門は、秀吉に追はれて泉洲堺へ下りやがて切腹すべき千利休を、土堤の上から大に笑つてやるつもりで利休の舟を待つ。利休と娘お梶川を下る。細川忠興舟にて利休を追ひ名殘を惜む。利休茶を立て破茶碗にて茶をすゝめる。娘お梶を忠興に托し、靜に死を凝視する哲人的な悟りの中に利休一人淀川を下る。

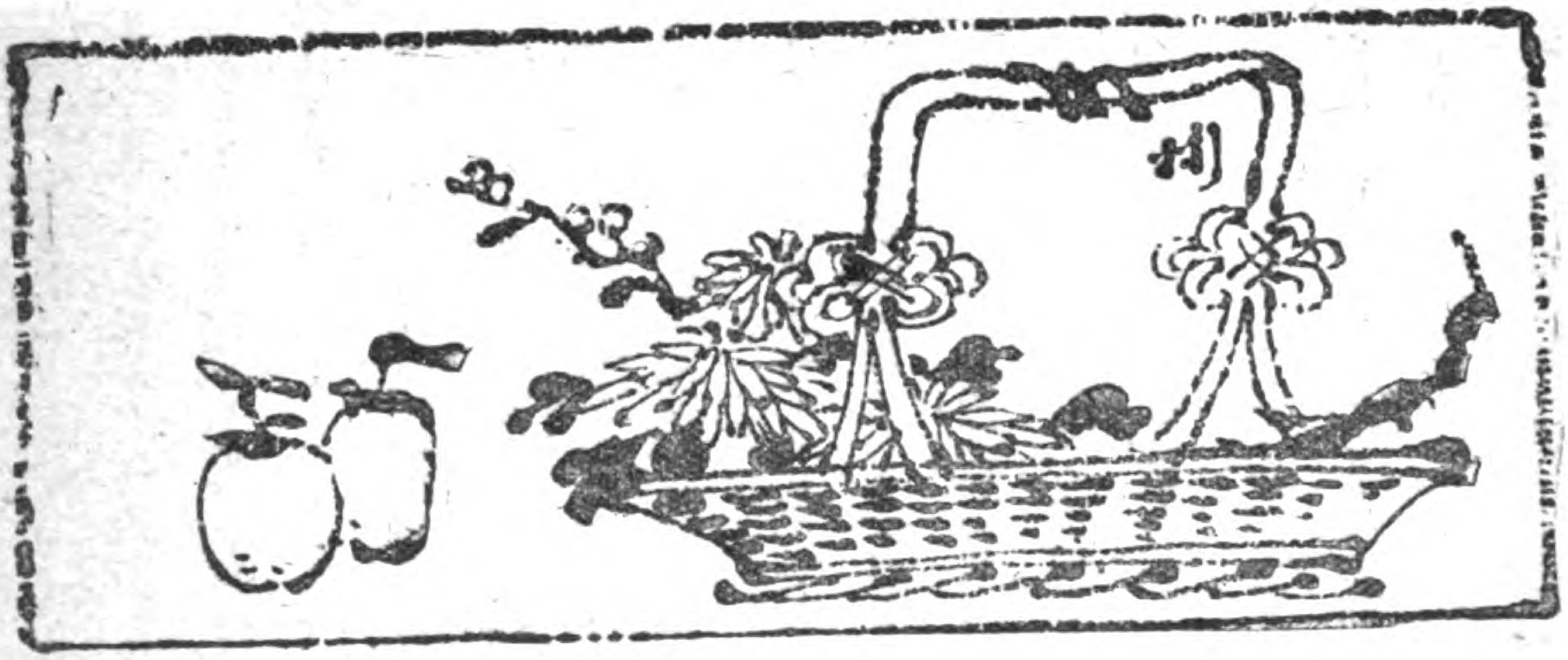
同第二場　聚樂第。新左衛門は淀川で利休の姿を見て深い感激に打たれたことを話す。秀次が大納言新任のお禮に參内の道すがら秀吉を訪ふ。秀吉は自ら秀次の裝束を直し、「いまに日本中をお前にゆづる」といつてうれしさうに甥の秀次を見、自分も急に秀次と共に參内する氣になり、急ぎ馬の仕度を命ずる。

第二幕第一場　聚樂第。秀次は佛書や佛像の中に埋り本を讀んでゐる。亂倫狂暴な弟秀俊が來て「伯父には拾（ひろひ）（秀頼）といふ子が生まれた。あなたを養子にしたことを後悔してゐるにちがひない」と暗に謀叛をすゝめる。秀次は「太閤の心を疑つてはならぬ」といふ。木村常陸介が來て「御身邊をお守りなさるやうに」とすゝめる。秀次は「常陸介お前までが……」と暗然とする。

同第二場　淀城。淀君が拾（秀頼）の爲に後々の事を計つてくれと太閤に願ふ。「天下の一人子を育て上げる母の愛情の爲にはたとへ十人や二十人の命を犠牲にしても何で神佛のとがめがあらう」といふ。

同かへし　拾と秀次の娘お蘭との許婚披露目の宴である。再び弟秀俊が來て「今日の祝は伯父の策略だ。欺されてはならぬ。太閤に叛け」と秀次にすゝめて歸る。太閤登場秀次に吉野の花見を約束して退場。雨が降る。秀俊が門前で戀敵を討たうとして却て敵に切殺された事を聽き秀次驚く。更に秀俊の死骸を見て太閤が冷酷であつた事を聽き、秀次慟哭して「わしも伯父さまのやうに強くなりたい」といふ。たま〳〵誤つて自ら狂女を切殺す。

同第三場　比叡。弟の死以來性格一變した秀次は殺生禁斷の叡山で狩をしてゐる。罪なき老僧を切殺す。そこに太閤不例の報來り、讒言にも太閤が秀次を呼ぶを聽き秀次急に心弱り「こんな暗い心で生きてゐるよりむしろ父上御自分の刄にこの胸を刺れた方が仕合せだ」と叡山を下る準備を命ずる。法螺の音山に響く。



聚樂の人

吉田絃二郎

第三幕　第一場　伏見城の一室

時　文祿四年夏の夜

人物　豐臣秀吉
豐臣秀次
石田三成
曾呂利新左衞門
拾
淀君

秀吉、拾を抱きかゝへていかにもうれしさうにあやしながら部屋中を歩く。病後にてひどく疲れてゐる。淀君が時々拾の顏をのぞきこんでは笑はせてゐる。

石田三成　（下手より登場。）京城の小西攝津から只今たよりがございました。

秀吉　朝鮮の戰さの話ならもう止しにしてくれ。どうか、せめて一二年の間だけわしに戰さのことをすつかり忘れさせてくれ。わしは朝からこの子と遊んでゐたのでやつと朝鮮のことを忘れかけてゐたのだ。わしは今日まであまりに戰さをしすぎて來た。人を殺しすぎて來た。わしには朝鮮より、大明よりこの子一人のことが大事な問題になつて來たのだはゝはゝはゝ……

三成　かつては日本の軍神としてあれほど恐れられなされた殿下が……

秀吉　わしは戰さを忘れはせぬ。だが今では拾（ひろひ）のことがわしの生活にとつて一番大切なことになつたのだ。

淀君　その大切な拾（ひろひ）のことにつきましては、あなたは後々のことをもすこしお考へくださいますといゝのでございますが。（拾を秀吉から受けとつて抱く。）

秀吉　わしはそのことについてなら心配はしてをらぬ。わしには秀次といふ立派な甥がある。後繼者がある。

三成　御心配をなさいます必要はありませぬが、このごろの關白さまの御亂行を何とお考へなさいますか。

秀吉　あれはわしが惡いのぢや。亡くなられた姉のわすれ形見であると思へば人一倍のふびんさも加はり、殊に秀次とは性が合ふといふのだらう同じ甥のうちでもあれだけは別してあまへさせて置いたものだから。まあしばらくあのまゝ放つて置いたら眼がさめる時もあらう。

三成　しかしあのまゝいつまでも御放任なすつては世間の手前もありますし、如何かと思ひます。關白さまのお側には常陸介のやうな立派な人物が附いてはをりますが……

秀吉　ともかく近いうちになほ一度ゆつくり逢ふて心をたゞして見よう。

三成　他のことならばお打ち明けにもなりませうが、世間の噂のごとく萬一……

秀吉　いやわしはそのやうな馬鹿々々しい世間の噂を信ずることはできぬ。わしは秀次を信ずる。秀次の亂行は今天下があまり靜かになつたので、たま〱目立つて見えるだけのことぢや。わしらが若いころの城攻めはずゐぶん無駄に女や子供をも殺したものだからなあ。秀次に何の野心があらう。あれがあのやうなことをするのはわしの血のなかに流れてゐる幽靈にとりつかれてゐるだけのことぢや。わしも若いころは大分人の血を食つたものぢや。あれはわしの眞似をしてゐるだけのことぢや。わしが耳のはたの雷なら、あれは遠鳴りの雷のやうなものぢや。あれは人の殺し方が下手なまでぢや。

淀君　まだあなたがおいでなさいます間はよろしうございますが、もしかして拾とわたくしだけになりましたら、どのやうなことを母子に對してなされますか知れません。

秀吉　…………

淀君　それに北政所さまはじめいろ〱な大名たちも秀次さまにはお力添へのやうでございますから、殿下にもしものことでもございましたら……わたくしそれを思ひますと。

秀吉　お前たちは秀次自身の身になつて秀次のことを考へてやらぬから惡い。判斷がまちがふのぢや。關白をめぐつてゐる人たち、わしをめぐつてゐる人たちが、何故わしと秀次とを一つのものとして考へてくれぬのか。わしはその人たちの誘惑が一番恐ろしい。わしをめぐつてゐる人たちはわしの手をかりて無理に刃を秀次の胸に擬せんとするのぢや。わしはその誘惑を恐れる。明日の自分の心は誰にも信ずることができないからなあ。

三成　しかし殿下、あなたは正宗、氏鄕、忠興あの人々がしげ〱と聚樂へお伺ひいたしますのを何ともお考へになつたことはございませぬか。

秀吉　關白はわしの子ではないか。わしに忠誠をつくすものはまた關白にも忠誠をつくすのが當然ではないか。

淀君　拾(ひろひ)の先き先きのことをあなたは何とお考へなされておいでになりますか。

秀吉　拾(ひろひ)はやがてこの可愛いゝ手に天下を握るだけのことぢや。

淀君　わたくしは母子二人が安穩にいつまでも生きてさへゆけましたらと思ふのでございます。天下を握るだのといふことはどうでもいゝと思ひます。

秀吉　そこだ。わしもこのころつくづくさう思ふことがある。天下を握るまでは天下を握ることばかり考へてゐた。天下を握ることに深い意義があるやうに考へてゐた。さて天下を握り、わしの欲念の絶頂まで登りつめてみると、わしは天下を握るなどといふ空の空なることに修羅をもやしてゐたことに氣がつく。…………だが、拾(ひろひ)の身になれば一國や二國の大名くらゐで滿足しようとしても傍(はた)がゆるさぬ。わしの子に生まれた拾(ひろひ)の不運だ。生きてゆくためには天下を握らねばならぬ。もし天下を握ることができぬなら一身を滅ぼさなければならぬ。天下を握るか、滅びるか二つに一つだ。それを思ふとふびんでならぬ。しかし秀次がゐる間はあの男はかならず拾(ひろひ)を子として育てるにちがひない。

淀君　しかしあの亂暴な御樣子では案じられてなりませぬ。

秀吉　(やゝ考へ込む。)いや大丈夫だ。わしらの血統にはあんなのがある。祖父さまもお若いころはさうであつたさうだ。そのうちには年をとればおとなしくなるにちがひない。もうそれ以上のことは秀次については話してくれるな。でないとわしは何だか恐ろしい誘惑を感じさうだから。

淀君　でも、もしいつまで經ちましてもおなほりになりませぬ時は?

秀吉　その時はその時…………

淀君　あなたは男でいらつしやるからそのやうなあきらめがつきます。わたくしは女でございます。一人の子を育てゝまゐりますにそんな不安な頼りないことでは……

秀吉　それは無理ぢや。わしは今日まで何をするにしても或る程度までの見きはめをつけるだけで、あとはみな運まかせぢや。人間には先きのことはわからぬ。

淀君　それは、しかし、萬一の折にはあなた御自身をさへお捨てになればそれですむことなんでせう。女でも女一人を捨てゝすむ場合ならばそのやうなあきらめもつきます。しかし女に子といふものを與へられますれば、女はその子のためにも、そのやうなあきらめに滿足することはできなくなります。上にも上のないほどの安全を子のためにいのります。子を持つた女の心は子を守るためには蛇にもなります。千人の人の子の命を奪ひながらも己れたゞ一人の子を隱されたために氣も狂ふほどに悲しんだといふ昔の物語も女にはわかります。子を生かしてゆくためには夜叉にもなりませう。羅刹にもなりませう。もしあなたがお弱いお心ならわたくしはこの子のために誰れにも賴りはいたしませぬ。わたくし一人の力でこの子を守ります。（拾泣く。淀君拾をあやしつゝ。）

わたしはお前一人のために生きてゆきます。お前が生まれて來たことが仕合せであつたか、不仕合せであつたかお前にもわからぬであらう。たゞ世界のどの母よりもわたしはお前を身にかへてもいとしいと思ひます。世界のどの子よりもお前は深い母の愛をめぐまれるであらう。お前だけはいつまでもわたし一人のものなんです。（淚をふきつゝ退場。）

三成　では、小西攝津からのたよりにつきましては。

秀吉　お前たちはまだわしを苦しめ足りないでこの上にも苦しめようとするのかはゝはゝはゝ（寂しき笑ひ）そのことについての返書なり、處置なりは左衞門や刑部等と相談をしていゝやうに取りはからふてくれ。

三成　それでは左樣にとりはからひませう。

秀吉　成るたけ朝鮮のことはもうわしに話してくれるな。もうよい加減で軍を引き上げるなら引き上げさしておいい。

三成　では朝鮮軍をこのまゝ引き上げましても……

秀吉　さうだ。

三成　さぞ日本國中の人々がどのやうにか喜びますことでございませう。

秀吉　戰から戰とつゞいたのでさぞ人々は塗炭の苦しみを嘗めたことであらうなあ。

三成　…………

秀吉　鶴松が死なゝんだら、あれほど朝鮮のことについて夢中にはならなかつたであらうが…………わしは利休のやうに悲しいことをちつとこらへてゐることができぬ。利休は恐ろしい奴であつた。死んだ後まで時折わしを脅かす。人間は弱いものだ。もし拾が生まれなんだらわしはこのやうに戰を止める氣にもならなんだであらう。大明は愚かなこと天竺までも戰をすゝめたであらうに。

三成　殿下はとりわけ子煩惱でゐらつしやいますから。

秀吉　さうらしいなはゝはゝは……

三成　それにつけても拾さま後々のためにも何とか充分安全な方法を只今から……

秀吉　そのことなら安心するがいゝ。秀次が生きてゐるかぎりは。わしはあの男を信ずる。あの男についてはもう何もいふてくれるな。

三成　…………

秀吉　お前はともかく增田等と朝鮮軍のことを至急取りはからつてくれ。

三成　はい。（上手へ入りかゝる。）

秀吉　ちよつと待つてくれ。お前を使つて氣の毒ぢやが、誰か使をやつて新左エ門に至急來てくれるやうつたへてく

れ。あまり氣が許してならぬ。すこしあの男のとぼけ面でも見て笑ひたくなつたから。

秀吉　病み上りのせいか今日はひどく疲れたやうだ。（うと〳〵とまどろみかける。舞台やゝ暗くなる。）

三成　かしこまりました。（退場。）

間。

秀次ひそかに登場。女の被ぎをかぶつてゐる。蒼白な顔。幽靈の如し。ひどく神經質になつてゐる。

秀吉　（驚く。やゝ警戒的な眼を瞠る。）何でこの眞夜中にやつて來た。

秀次　わたくしは父上とはなれてをりましたのでは、恐ろしいことが起りさうに思はれてなりませぬのでやつてまいりました。父上がわたくしたちのお祝ひにおいで下さるといふことでございましたのであの後も毎日お待ちいたしてをりましたが一度もおいで下さらないのです。去年、比叡山を眞夜中かけて京へかへりまして直ぐその足で馬に鞭打つて御門前まで驅けつけました時すら、わたくしは父上にお目にかゝることをゆるされませんでした。で、わたくしは今夜は女の駕籠を仕立てゝ忍んでまいりました。

秀吉　わしはそのやうなことについては一度も聽いてをらぬが。

秀次　わたくしも恐らくそんなことであらうと思つてゐました。父上あなたはその意味がおわかりになりますか。父上はわたくしを信じてゐて下さる。わたくしも父上を信じてをります。しかし恐ろしい運命の日が來る時、人間の信頼が何程の役目をいたしませう！

秀吉　それほどわしを信ずるお前が何で京近くを歩くにも甲冑を忍ばせ、多勢の警護を伴れるやうなことをするのぢや。

秀次　わたくしはまだ生きてゐたいのでございます。

秀吉　そのために今夜わしを殺しに來たといふのか？

秀次　わたくしはむしろこのまゝ父上の手で殺していたゞきたいくらゐでございます。このほどからも七枚の誓紙を父上におわたしいたしました。しかしたとへ百枚の誓紙を書きましても自分の心が自分に信じられぬやうな氣がいたします。わたくしはそれが恐ろしうございます。

（曾呂利新左衞門下手より部屋へはいらうとして躊躇する。）

父上どうぞ父上の手で今夜わたくしの心臟を抉つて下さい。」

秀吉　お前は今夜あまり興奮してゐるやうだ。歸つて休んだ方がいゝ。お前の親切を無にして訪ねなかつたのは重々わしが惡かつた。では今度は近いうちぜひ聚樂を訪ねる。そして一緒にまた久し振りで舞はふではないか。

秀次　わたくしは樂しみにいたしてお待ちいたします。

秀吉　わしにしても時々思ふことがある。人間の心ほどあてにならぬものはない。まつたく明日の自分の心が信じられぬからなあ。

秀次　人が別れて住むといふことは恐ろしいことでございます。逢つてゐる間は遠々しい人と人との心でも結びついてゐます。しかし一歩閾をまたいで出ますれば心と心の間には千里のへだたりが生まれてまいります。

秀吉　京と伏見、いへば同じ一つの家ぢや。わしとお前の心の間に何のへだたりが生まれるものか。安心してゐてくれ。顏色も惡いやうだ。お前はわしとちがつてくだらぬ學問ばかりしたので人間が弱くていかぬ。わしを見習ふて、もすこし無學になれ、そしてもすこし大膽になれ。早くかへつてわしを信じてすや〳〵と眠つてくれ。わしはそこまで送つて上げよう。

秀次　ありがたうございます。わたくしにはたゞ明日の暗い日ばかりが眼に映つて來て一日でも心から笑ふことはで

きませぬ。（被かつぎをかむる。）

秀吉　わしの若いころにはそんな病氣はなかつた。お前は氣の毒な子だ。わしを信じて、いつも笑へるやうに明るい心を持つがいゝ。（兩人上手へ退場。）

新左衛門　（下手より登場、考へ込んでゐる。）今日は妙に陰氣なことばかり見たり聞いたりする日だなあ。おれも何だかもう笑ふのも臆劫になつて來たやうだ。

同じくかへし　森の中の祠前

梟が啼いてゐる。

三成　まだ奥の方でございますか。

淀君　向うにかすかにお燈明が見える筈だが。

三成　よくこのやうな寂しいところを毎夜お一人でお歩きになりますな。

淀君　たゞ一人の子のために、恐しいだの寂しいだのといふことは忘れてしまひました。

三成　わたくしのやうな男でもかやうなところはあまりいゝ氣持ではございません。

淀君　ほゝほゝほゝ……弱いこと。時にお前はこのころ殿下がどれほど氣が弱くおなりになつたか知つておいでか。わたしの考へでは殿下ももうお長いことはあるまいと思ふ。殿下はよく物忘れをなさる。夢を見ては泣いておいでになる。幻をごらんなさる。二三日前の夜も叔父信長公が枕もとにお立ちなされ早う來いと仰つしやつたとのこと。叔父上が早う來いといつてお招きなさる姿をあり〳〵と眼をひらいてごらんなされたとのこと。それにまた今朝がたは利休が

お緣側に坐つてゐるのをごらんなされたとお話しなされた。

三成　殿下はまだ御病後のお疲れがおとれになりませぬので左樣なこともあるのでございませう。

淀君　だからわたしは今のうちにいよく\拾のためを圖つて置いてやらねばならぬと思ふ。それについて考へるのだが、わたしが拾を思ふ心の深さ、切なさをかへりみるにつけても、秀次殿御夫婦が御自分のお子をいとしがられるお心を想像することもできる。その結果が拾の上にどのやうにあらはれて來るかといふことも想像することができる。わたしは殿下やお前たちのやうにさうのんきでゐることはできぬ。

三成　そのためにあなたは毎夜この眞夜中に、この寂しい祠に御祈念なされたのでございますか。

淀君　子を思ふ母心には人間の弱い心を頼ることはできなくなつた。わたしは拾が生きてゆく道を切り拓くためには五人十人はおろか百人でも千人でも邪魔になる人たちを呪ひ殺して見せる。もしゆるされることなら、この美しいわしの肌を邪神惡鬼の犧牲にさゝげても拾のためにつくしたい。

三成　それほどまでに拾さまのことを思ひつめておいでなさるあなたの御心を考へますとお氣の毒にも存じます。

淀君　お前は誠心からわたしを氣の毒と思ふてくれるか。

三成　あまりに恐ろしい御心とも存じ、あまりにおいたはしい御心とも存じます。

淀君　わたしも恐ろしい心を知つてゐる。しかしそれも拾のためぢや。母心ぢや。どうせ地獄へ落ちる心ぢや。

三成　地獄へ落ちるのもお覺悟でおいでなさいますか。

淀君　太閤の眼をおかけなされた幾百の諸侯はあるが、誰れ一人拾のために生命をかけて思つてくれる者もない。今はもう地獄へ落ちるわたしの心たゞ一つに育てられて拾は生きてゐるのぢや。

三成　（感激に耐へず。）わたくし、拾さまのために一命を捨てませう。

淀君　ありがたう。かたじけない。わたしと一緒に地獄へ落ちてくれるか。

三成　あまりにお心をおいたはしう存じますので。地獄までもお伴いたしませう。たとへ國を失ひ、城を壞たれ、どのやうな恥をさらしますことがあらうとも、わたくしが世にありますかぎりは拾さまのために盡しますでございます。

淀君　その言葉を聽いて安心しました。ではわたしはこれで……

三成　お別れいたします。

淀君祠の方へ小急ぎに退場。

三成　…………（淀君の後を見送つてゐる。）

巣を襲はれた小鳥のさわぐ音。星の光りが木立の上にきらめく。梟の鳴く音。

同　第二場　伏見城の一室

時　文祿四年七月初旬

人物　豐臣秀吉

石田三成

增田長盛

淀　君

片桐大三郎

幸藏主
土井甚三郎
大沼隼人
加賀新八郎
武士多數

恐ろしい山鳴りにて幕明く。屋根の瓦や壁土などが落ちる音。
多勢の家來や、侍女たちが秀吉をめぐつてあわてふためいてゐる。秀吉は病後の衰弱がひどく面にあらはれてゐるが、かなり興奮してゐる。三成、長盛、幸藏主等秀吉をなだめ引き留めようとしてゐる。

秀吉　わしは秀次に逢ふ。そして一緒に辨ふ。まだ關白は見えぬか。
三成　今日のお催しだけはお取り止めになりました方がよろしいかと存じます。
長盛　夜明け方からの激しい山鳴りとまうし、この地の揺れ方とまうし何となく世の中が騷がしう思はれますので。
秀吉　能は止める。しかし逢ふことは逢ふ。關白はわしの子ぢや。わしは逢ふ。わしは信じてゐる。よしんば殺されるのであつたら秀次の刃に刺されて殺されよう。
淀君　ではあなたは拾のことを何ともお思ひにはなりませぬか。あなたにもしものことがありましたらわたくしや拾はどうなります。あなたは秀次のためにならば殺されてもかもはぬと仰つしやるのですが……。
秀吉　いや、そんな風に考へられては迷惑ぢや。お前たちにはわしの心はよくわかつてゐる筈ではないか。
山鳴りがひゞいて來る。
淀君　でも、危險を冒してまでお逢ひなさるお心がわかりませぬ。

秀吉　お前たちは幽靈にとりつかれてゐるのだ。影法師を見て驚いてゐるのだ。わしはどうあつても逢ふ。

三成　それではどうぞわたくしどももそのお席へお伴をさせて下さい。

長盛　ぜひ左樣にお願ひいたします。

侍女　警護の方もいつもよりずつと御人數をお加へ下されまして、お次の間に控へさせますやう。

秀吉　はゝは……お前たちはみんな臆病風にとりつかれたな。わしがわしの子と二人きりで逢ふのに何の心配があらう。秀次の身になつて考へて見れば、このごろのやうな世間の喉が立てば一層わしと二人きりで打ち解けて語つて見たいこともあるにちがひない。逢ふてさへやればそれですべての誤解は消えてしまふ。わしは一人で逢ふ。間もなく秀次も見えるであらう。（下手へかゝる。）

具足をつけて片桐大三郎下手より走り登場。

大三郎　關白さまお越しの道に警護のため七條口までまいりましたが、今朝ほどの山鳴りにつれて京の町中も諸處に家は頽れ、橋は落ち、崖崩れなどが出來ましてなか〳〵の騷ぎでございます。

秀吉　御所はおかはりもあらせられぬか。

大三郎　御所内には何のおかはりもございませぬ模樣でございます。

秀吉　聚樂では秀次はじめみな何ともなかつたか。

大三郎　關白さまはじめ皆さま御無事とまうすことでございます。關白さまは追々こちらへお成りになりますことゝ存じます。たゞ不思議なことにはあれほど御堅固に御造營になりました方廣寺の大佛殿の正面の柱が折れてしまひました。

秀吉　あの大柱が折れてしまつたか。（不安な影が泛かぶ。地ふたゝび震ふ。）

大三郎　それに大佛殿御造營の折、蒲生殿が三井寺から曳かれたあの大石が眞つ二つに割れまして、その刹那に血痕らしい斑紋がありありと石の表にあらはれたとまうしてをります。

秀吉　そして大佛はどうぢや。

大三郎　あの大きな石が割れるくらゐでございますから、大佛も薙ぎ倒されたやうに鼻を地に叩き付けてのめりましてございます。

秀吉　（わざと不安な心をかくすやうに笑ふ。）はゝはゝはゝ大佛が鼻を地に叩き付けてのめつたか。それでは今度はもつと大きな大佛を作つてやらう。今度こそ朝鮮大明から石を運んで萬代までも壞れぬやうな大伽藍を築き上げてやらう。……

大三郎　京の町中で七八十人の死人と怪我人があつたといふことでございました。昔もこんなことがあつたとか老人らがまうしてをりました。その前の年京中で五六十人の人が押しつぶされて死んだが、その翌年は京大阪、大和、河内かけて三四萬の死人を出すやうな大地震があつたなどとまうし、京中はいまにももつともつと恐ろしい大地震が襲ふてきはいるかと上を下への騷ぎでございます。

秀吉　直ぐ京へ引きかへして、關白道中の警護を一層嚴しくせい。關白はさぞ道に困つてゐるであらう。よく氣をつけてやれ。

大三郎　はい、かしこまりました。（急ぎ退場。）

秀吉下手へかゝらうとする。上手より幸藏主急ぎ足に登場。

幸藏主　かねてお遣しになりました修理亮からの書面でございます。

秀吉　治部、讀んで見い。

三成　はい。（書面を讀む。）

一、關白さまの命にて、一昨夜來また〳〵密かに五百餘の甲冑武器等を聚樂へ相調へられ候由

一、五六の大名へ御手許金の中より黄金二百枚づゝ御貸し成され候由

一、昨日内々にて禁裡へ白銀三千枚、大納言殿へ五百枚、聖護院殿に五百枚獻上致され候由

一、毎夜深更まで聚樂の奥殿にて寄々御評議なされ候由　以上

秀吉（ちつと考へてゐる。）それだけのことか。放つて置け。

小姓　徳川さま御家來土井利勝殿が見えられました。

秀吉　通せ。

土井甚三郎（登場。）主人秀忠お伺ひいたす筈でございますが、甚三郎お使としてまいりましてございます。

秀吉　御苦勞であつた。

甚三郎　實は今未明聚樂よりお使で、主人秀忠へ朝餉の御招きでございました。

秀吉　今朝未明秀次から徳川殿に急に朝餉の御案内を？

甚三郎　左樣でございます。あまり早急のことでもあり、少々不審にも存じましたし、それに生憎のこの山鳴り、忠隣とも相談いたし、ともかく主人秀忠昨夜から所勞でございますので、後刻御返答申上げますといふことにいたしました。聚樂からのお使は一と先づおかへりになりました。早速邸の若者を走らせて見ましたが道々には屈竟な武士どもな

濟させ主人秀忠を人質になさらう御魂丹らしうございました。

秀吉　馬鹿者がッ！何者にそゝのかされてそのやうなことを致したのだ。秀忠殿はどうなされた。

甚三郎　直ぐに伏見の方へお連れいたしました。

秀吉　それはいゝことをした。そして道中よく何事も起らなかつたな。

甚三郎　はい、實は伏見までまいります途中、もし關白さま御膝下の人たちに遮られますこともあらうかと懸念いたしましたので、間道を拔けてまいられるやうにとまうす意見もありましたが、小徑などで追手に逢ひ萬一のこともありますれば德川家百代の恥辱だと存じましたので、京から伏見まで本道をまいりました。

秀吉　さすがは甚三郎だ。それにしてもよく聚樂の計を見拔き使をたばかつてくれたなあ。

甚三郎　家康先達て歸國いたします折、もしわが留守中聚樂と伏見の間に御不祥なことでも起るやうな場合には必ず伏見方へまいるやうにいたせとまうされました。

秀吉　家康殿はすでに先達て左樣なことを言はれたか。

甚三郎　はい。

秀吉　恩愛の絆にとらはれたわしの眼は今まで曇つてゐたのか。わしは德川殿に對しても面目ない。このまゝに放つて置いたのでは第一德川殿に對しても心苦しい。

片桐大三郎急ぎ下手より登場。

大三郎　關白さまはすでに大手ちかくまでお越しになりました。

秀吉　秀次が大手ちかくまで來たといふのか。よくもまあわしをたばからうと思ふて。（甚三郎の方を見て）あの大馬鹿

者がッ！

大三郎　早速立ちかへりまして御城内へ御案内いたしませうか。

秀吉　待て。今日の對面は止めにする。關白に言へ、わしは急に逢ひたくなくなつたから聚樂へ引きかへせと。

大三郎　はい。

秀吉　いや待て、今日まで聚樂へゐてはさま〴〵な噂のみを立てた秀次、このまゝ京に歸したのでは德川殿はじめ世間に對してもすまぬ。………さうぢや、高野へ………（潛然として）このまゝ高野へ登り當分謹愼いたすやうにまうせ。

大三郎　はい。關白さまにはこのまゝ一先づ高野へお登り御謹愼なされますやうまうし上げます。

秀吉　甚三郎、わしの心はわかつたであらう。御主人へも宜しくつたへてくれ。

甚三郎　たゞ〳〵お氣の毒に存じます。わたくしはこれで失禮いたします。（退場。）

法螺貝の音。甲冑をつけた武士多數登場。淀君、侍女等退場。

三成　隼人殿は御門々々の警護をいたされるやう。新八郎殿は直に馬を走らせ京中の警護を賴みます。一々の手配、指圖は重ねてお知らせいたします。

皆々立つ。

三成　なほ關白さま御一身はもとより御身寄りの方々、お伴の方々に對しては充分氣をつけるやう。

皆々退場。

秀吉　右衛門！

長盛　はい。

秀吉　お前は秀次がまだ小さいころから大分面倒を見てくれたやうであつたな。

長盛　關白さま十二歳のころからお附きいたしました。

秀吉　さうであつたなあ………

長盛　…………（愁然として俯向く。）

秀吉　右衛門一走り馬を走らせて、秀次を見て來てくれ。あいつどのやうな顏をして高野へゆくか。

長盛　では急いで行つてまいります。何か殿下のお言葉でも……

秀吉　うむ…………何もない。

長盛　…………（退場。）

間。馬の嘶く聲、法螺貝の音。

秀吉奥の簾を上げて欄干に凭る。そこからは淀の上流や高野への本道が見える。

秀吉　三成！

三成　はい。

秀吉　あの森の下の道、あれが大和への道だな。

三成　左樣でございます。

秀吉　あれが淀の渡しぢやな。

三成　はい。淀の渡しでございます。

秀吉　秀次はあの道を行くのぢやな。

三成　はい、あの道を御通りなさらねばなりませぬ。

秀吉　まだあの渡しまでは來ぬかなあ。

三成　まだらしうございます。

秀吉　あの一かたまりの黒い影はさうではないか。

三成　いかにもさうらしうございます。あッ、たしかに關白さまでいらつしやいます。

秀吉　わしは眼がかすんでよく見えぬが、あの駕籠を捨てゝ立つてゐる男だな。

三成　あのお方でございます。

秀吉　こちらを向いてゐるではないか。

三成　こちらをごらんなされて何かお話しになつてをります。

秀吉　何か話してゐるか。

三成　はい。

秀吉　まだ何か話してゐるか。

三成　お俯向きなされたまゝ水の面をぢつとごらんになつてをります。

秀吉　まだ水の面を見つめてゐるか。

三成　はい、やつぱり俯向いて水の面をごらんになつてをります。

秀吉　三成、お前面倒だが、高野の木食上人へあてゝ秀次のことをくれぐれも宜しく頼む旨のたよりを書いてくれぬ

か。大急ぎだ。そして高野まで早馬を立てゝくれるやういゝつけて置いてくれ。

三成　かしこまりました。

秀吉　三成待つてくれ。花押はわたしがするからいゝか。

三成　はい、かしこまりました。（急ぎ退場。）

秀吉　（なほつゞけて淀の方をながめながら。）

あゝ、まだあの男はやつぱり川の面を見つめてゐるやうだ。

同　第三場　伏見城の一室

時　前の場面より八日後の夜

人物　豊臣秀吉
石田三成
木下主膳亮
淀　君
孝蔵主
稲島左工門
大沼隼人
曾呂利新左工門

武士侍女等

上手に茶室が見える。十六夜の月の光りが空に流れてゐる。いかにも初秋らしい庭。秀吉一人脇息によりかゝつて眠つてゐる。ひどく憔悴してゐる。短檠の燭が一つ燃えてゐる。

舞臺最初は薄暗い。

秀吉　高野からはまだ何のたよりもないと見える。秀次はどうしたか。このごろどうも亡くなられた姉上のお顔が見えて仕方がない。長久手の戰にたゞ一度秀次をひどく叱つてやつたことがあつたが、秀次がしほ〳〵としてわしの陣へわびに來たのも今夜のやうな靜かな夜であつた……（欄干により遠くを眺める。）高野からの使はまだ見えぬかなあ。

三成　（登場。）大膳亮がたゞ今高野から歸つてまいりました。

秀吉　大膳亮が歸つて來たか。早く呼んでくれ。

木下大膳亮　（登場。）たゞ今歸りましてございます。

秀吉　關白はどうであつた。

大膳亮　わたくしが出立いたしますまでは木食上人はじめ高野の法師たちは金堂へあつまりましては、毎日毎夜評議ばかりいたしてをりました。

秀吉　さうであつたか。さぞやつれてゐたであらうな。氣の弱い男だから。

大膳亮　八月伏見を御出立後はほとんどお口をおきゝなされますこともございませんでした。髮をおろしてくれと仰せられましたので、途中の寺を借りましてわたくしお手傳ひまうして御髮をおろしました。墨染のお法衣をお召しになりました姿を拜みましてはたゞ〳〵……

秀吉　……………………

主膳亮　九日の夜は奈良中坊のさる家をお宿にあてましたが、その夜は御食膳におつきになりましても一箸もおつけなさいませんでした。壁に寫つてをります御自分のお姿をごらんなされ、主膳亮どうだよく似合ふかと仰つしやつて寂しくお笑ひなされました。

秀吉　あのいたづら者も法師姿ではのう……

主膳亮　高野にお登りなされてからは御殊勝にただ佛間におこもりなさいましたまゝで、食膳にもお着きなさらぬ勝でございます。たま〳〵何かお話なさることがございますれば京へおのこしの若様方のことばかりでございます。

秀吉　三成お前も聽いたか。

三成　はい……（頭を垂れる。）

秀吉　あの馬鹿者が今になつてそのやうな殊勝な心を見付けたのか。わしはお前に腹を切らせた。誰の中傷でもない。わしの心で命じたのだ。わしはお前を信じた。お前を愛した。しかし拾を愛した。わしは十年二十年の後のことを考へた。わしはお前を信ずることができなくなつた。わしは今はじめてわしの卑しい心に氣付いた。しかしもう遲い。利休奴がまたわしを見て笑ふでゐる。利休、笑つてくれ。しかしわしはどこまでもわしだ。だがお前はどうぞ生きてゐてくれ。お前を預つてくれた木食上人はわしのこの心を察してくれるであらう。わしの心を掬んで屹度お前のためにわしに助命の使を走らせてくれるであらう。わしはその使を待つてゐるのだ。お前は生きてゐてくれ。そして一生を高野で過してくれ。拾に幸福な一生をゆづつてくれ。父といふものゝ迷つた卑い心をさげすんでくれ。

淀君　（幸藏主侍女等をつれ登場。）あなたはまだそんなことを言つておいでになるんですか。あなたは御自分のお心ま

で僞らうとしておいでになります。お願ひでございます。秀次の一族三十人の命を……

秀吉　秀次の妻子眷族の命を助けてくれといふのか。

淀君　いゝえ、みんな一人殘らず殺してくださいといふのです。（秀吉、三成等驚く。）

三成　それはあんまりなお考ではありませんか。

秀吉　飛んでもないことだ。

淀君　お弱いのですね。あなたは何萬といふ人の首や、耳や、手をお切りになつたではありませんか。たかゞ三十人の女や童たちの命ではありませんか。三條の磧に引き出して、すこしは太閤の御威光をお示しになつた方がいゝでせう。今まではずゐぶんあなたを踏みつけにしてゐた方々がありましたから……。

秀吉　何でまたそんなむごたらしいことをせねばならぬか。

淀君　一人でも生きのこつてゐる人があつてごらんなさい、拾がいつまでもその人のために呪はれることになります。ですから、あの方の血がつゞくかぎりは髮の毛一筋この世にのこして置いてはなりませぬ。

秀吉　………………

三成　それはあまりに恐ろしい。

淀君　わたくしは拾のためならば鬼にもなります。さあ、みんなあの人たちを殺してください。

秀吉　わしにはとてもそのやうな勇氣はない。

淀君　あなたはわたしほど子を思ふ心が深くないからなんです。

秀吉　いかに子を思へばとてわしは羅刹の心にはなれぬ。

淀君　拾のためならわたしはよろこんで夜叉にもなります。それがほんたうの母親の愛ではありませぬか。

秀吉　恐ろしいことだ。お前はどうかしてゐる。秀次はまだ死んではゐない。いまに屹度、木食上人から助命の使が來るにちがひない。

淀君　あなたは御自分で切腹を命じて置いて、今さら體のいゝことを仰つしやるのです。

秀吉　わしは後悔してるのだ。

淀君　それは噓です。あなたは拾が可愛くてならないのです。

（蹄の音が聞える。）

秀吉　もう何も言つてくれるな。

三成　蹄の音が聞えましたが。

秀吉　おう高野からの使にちがひない。

三成、主膳亮急いで迎へに出る。間もなく三成急ぎ立ちかへる。

秀吉　誰だ。

三成　左衞門がかへつてまいりました。

秀吉　左衞門一人か………

三成　福島左衞門一人でございます。

秀吉か、不安を感じる、福島左衞門首桶をかゝへて登場。つゞいて主膳亮、曾呂利新左衞門。

秀吉　秀次の首か！

左衛門　關白さまのお首でございます。
秀吉　(あわてゝ首を見る。俯向いてしまふ。)
左衛門　まことにおいたはしく存じます。
秀吉　あのいたづら者腹を切るのにはさすがに驚いたであらうのう。
左衛門　いえ、まことに御立派な御最期でございました。木食上人が御切腹の旨まうし上げましたらたゞぜひもない、ことだと仰せられましたさうでございます。また、わしはまちがつて聚樂へ住むやうに生みつけられたのだ。わしは高野へ來てはじめてわしが探してゐた家を見出したやうに思ふとも仰つしやつたさうでございます。眞つ先に山本主殿、山田三十郎、不破萬作三人それぞれへ殿下の御脇差を下されまして、關白さま御自身御介錯なされました。四番に東福寺隆西堂、五番目に關白さまでございました。いかにもお靜かに正宗の御脇差をお持ちなされ、雀部淡路守が御介錯まうし上げましてございます。
秀吉　木食上人は助命のことについては何も語らなかつたか。
左衛門　御助命のことについては何ともまうしてはまいりませんでした。
秀吉　何のための出家だ。乞丐法師奴が！(ひどく憤る。)
淀君　あのやうなことを。あなたは秀次のそのお首が眼を明けて生きて來たら、また同じことをおくりかへしになるにきまつてゐます。あなたはやはりそのお首が、眼をつむつて歸つて來ることを望んでいらしつたのです。あなたは今日はじめて拾(ひろひ)のために安心なすつたのです。
秀吉　恐ろしい。お前には利休の幽靈がのりうつつてゐる。あの男はわしの心の底をいつもぢつと見つめてゐた。わ

しはあの男の冷たい靜かな眼を見るのがいやであつた。お前の眼はあの時の利休の眼だ。たしかにあの冷たい靜かな眼だ。燃えることを知らぬ茶場のやうな眼だ…

淀君　あなたこそ利休の幽靈にとりつかれてゐらつしやるのでせうほゝほゝほ……さあ後生です、どうぞあの三十人の人質たちを三條磧に引き出して殺してください。いつまでも〳〵拾ひとりを安全に生かしてゆくためにはあの人たちは一人でも生かして置くことはなりませぬ。乳飮子一人でも逃がしてはなりませぬ。幸藏主隼人を呼んでくれ。

幸藏主　かしこまりました。（退場。）

淀君　あなたは躊躇なすつてはいけません。

秀吉　わしにはとてもそのやうな恐ろしいことはできぬ。ゆるしてくれ。

大沼隼人、具足をつけた武士を率ひ松明を持ちて登場。

淀君　隼人御苦勞です。今夜これから直ぐに聚樂へ馳けつけて、秀次の人質三十人殘らず三條磧に引き出して切つてくれ。

隼人　あの奥さまはじめ若さま方までゞございますか。

淀君　一人殘らず殺してくれ。

隼人　でも殿下のお考は……

淀君　殿下のお考をわたしはつたへてゐるだけではないか。

三成　それではかへつて豐臣家のためになりますまい。

淀君　お前までそのやうな弱いことをいふのか。隼人行け。

隼人　はい…………………（躊躇する。）

淀君　よし。お前たちが行かぬならわたしが行く。薙刀を持て、（侍女薙刀をわたす。）

三成　それはあんまりでございませう。もすこしお心をおしづめなされました方が……

淀君　お前たちは母といふものゝ心を知らぬのだ。（薙刀を持ち庭に下りる。）

隼人　ともかくもわたくしまいりますでございます。（武士等を率ひて退場。）

淀君　鎧兜に身をかためてゐるところはいかにも頼もしいやうに見えるが、男といふものはみな弱氣なものだなほゝほ………みんなに拾（ひろひ）のことに氣をつけてくれ、このやうな夜はどのやうな者が忍び込まぬともかぎらぬから……（急いで幸藏主侍女等をつれ退場）

間。

秀吉　…………………（靜かに秀次の首を撫でる。呆然として。）

三成　………………（すゝり上げて泣く。）

秀吉　三成お前は泣くのか………

三成　はい…………………

新左衞門…………………（隅の方へうづくまつて泣く。）

秀吉　新左衞門お前まで泣くか！

新左衞門　はい。わたくしが四十幾年笑ひに笑ひつゞけてまいりましたのも、今日一日に泣き盡すためであつたやうに思はれます。

秀吉　新左衞門お前には子はなかつたのう。

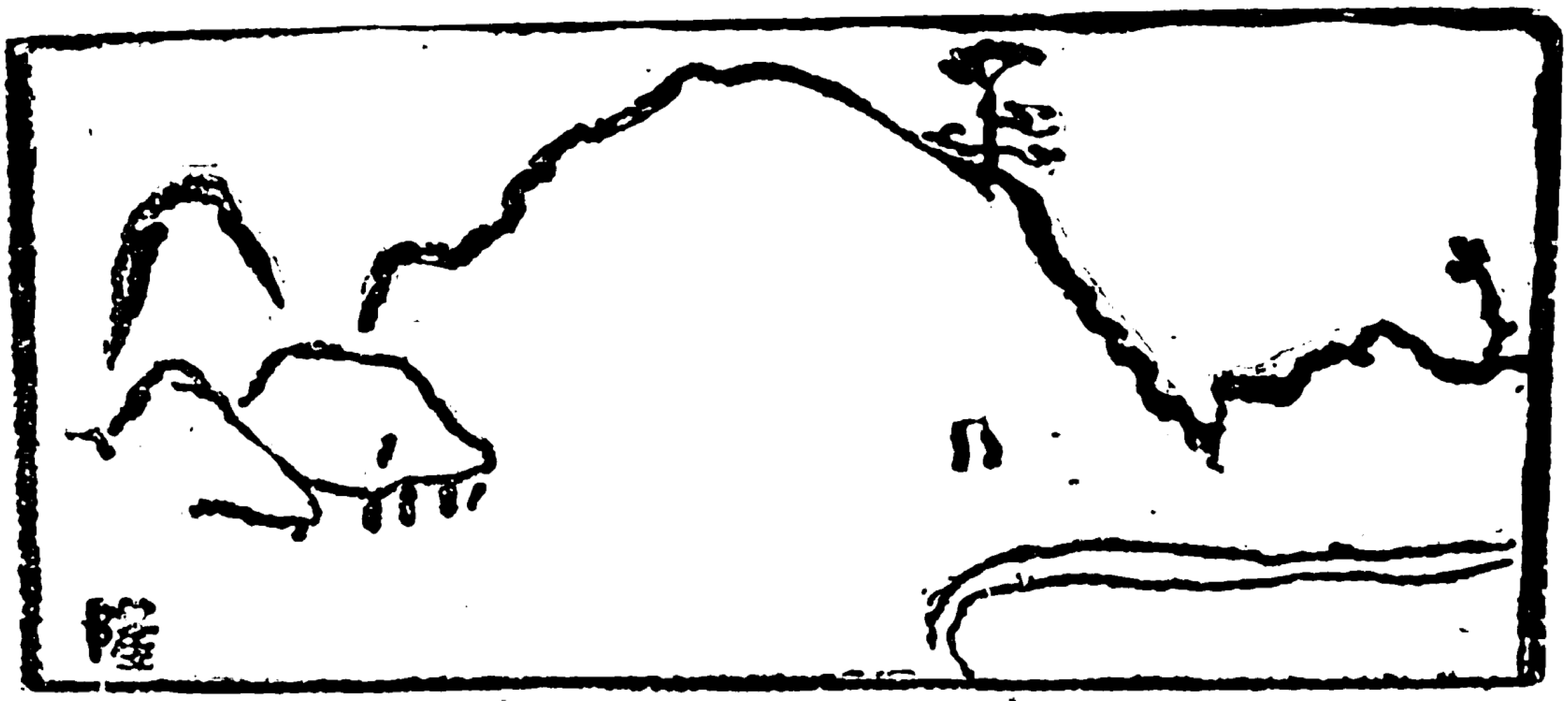
新左衞門　親も妻も子もございません…………（頭を疊にすりつけうづくまつてすゝり泣く。）

秀吉　（さらに秀次の首を撫でゝ。）わしは………お前ほどいとしいと思つたものはなかつたに…………

夜の空を愁然として眺める。茶室の中に千利休が釜の前に坐つて茶を立てゝゐる姿が映る。秀吉不圖その方を見る。姿は消える。十六夜の月の光りが水のごとく室内を照らす

（幕）

──一九二六・七──



プロレタリアの乳

葉山嘉樹

どこへ行かうか、彼等は思ひ迷つた。

どこへ行くと云ふ當ては無かつた。が、今居る處に止まつては居れなかつた。涼しさに、ほつとしてゐると、もういつの間にか、塗丹屋根や窓硝子が、寒さうに顫へ出して、ガチガチと齒を噛み鳴らし始めた。

汽車の笛が、解剖用のメスのやうに光るレールの上を傳つて、ズッと遠方から泌みて來るやうになつた。

彼は逞しい腕を持つてゐた。渡航用カバンのやうな分厚の胸を持つてゐた。頑强な體力から湧いて出る、勞働に對する渇望を持つてゐた。

放浪、旅、さすらひ、は美しい夢であつた。それは彼自身だけでの生活の間は、彼をどんなにか敎育した。學校で學ぶ事の出來なかつた彼は、一本の木も草もない岩石の中に、鑿岩機を揮り進んだ。椰子の林の中を流れる洋々たる河に、デッキの錆を落しながら溯航した。八層樓の大建築の屋上で、一本のロープにブラ下りなが

ら、大東京を（視察）した。これ等の生活は、力強く脈打つてゐる彼の心臓の内側に、殺さなければ削り取る事の出來ない、信念を彫り込んだ。

彼の掘り進んだ山腹を流れる水は、四萬キロの發電所となつた。彼の打ち込んだ鋲は、一萬噸の汽船になつた。彼が尻鍬をし、型枠を外した八層樓には、幾百の會社が事務を取つた。彼が運び歸つた綿花では、數千萬の人たちが寒さを防いだ。それを彼は自ら敎へた。それは人々に無くてはたらぬものであつた。そして彼は、人々に無くてはならぬものを作るために、波打つ腕を振ひ、鞴のやうに荒々しく、その大きな胸を呼吸することを望んで止まなかつた。

彼の仲間たちは、皆彼と同様に、その體中の筋肉と、その微細な頭腦の活動による貢獻とを、人々に與へたかつた。

彼等は生産し、與へ續けて來た。

けれども今は、彼等は去らねばならなかつた。

大小の煙突が、煙なく、寒く晩秋の風に吹き曝されてゐた。

彼等の工場は破産し、閉鎖されねばならなかつた。決して、人々にモスリンが行き渡つてしまつたから、ではなかつた。彼の愛すべき一人の子供でさへ、未だモスリンにありついてはゐなかつた。

實彈演習のための野砲隊のバラックのやうに、工場は人氣がなかつた。昨日まで殘飯や下水を漁つてゐた鼠達も、數千の彼の仲間たちと、どこへか引き移らねばならなかつた。

そこには廢墟があつた。擬寶珠の除れたニコライの廢墟、搖れ落ち燒け崩れて、鐵骨だけが殘つた三越の廢墟、それは地震の生んだそれであつた。

が、これは、一二の重役が、腐れ切つた紙幣を追ふために、横領費消した結果なのであつた。

總ての努力が蕪された。忍從があつた。怖ろしい忍苦であつた。その忍從が個人で試みられたならば、アッシジのフランシスのそれにも增したものであつた。彼等は、老いたる母や、いたいけな子供たちをも、自分と共に飢えに堪えしめた。寢ねがらら雨に打たれさせた。獅子の餌食となるため、演技場に追ひ込まれた。原始キリスト教徒たちにも似てゐた。

鬪爭があつた。略奪に對する抗辯であつた。罪なくして餓死せしめられる事に對する抗議であつた。

野を横切り、山を越え、川を涉つて、彼等は進んだ。パンを求めるために、彼等は進んだ。が、彼等の行く手には無數の、堅固な障害物が設けられてゐた。そして、濃い毒ガスが、彼等の目的物を視界から胡魔化してしまつた。

線路は續いてゐた。その鋭い光は、一直線にどこかの外國へでも續いてゐるのではあるまいか、と思はれるほど、淋しく悠久な光を以て續いてゐた。

彼等親子三人は、晩秋の風に嚙まれて淋しく立つてゐる、停車場の待合室にゐた。

彼等の外に、數百人が廣場に溢れてゐた。子供の泣く聲や、大人たちの罵り合ふ聲やが、喧しく構內に響いた。が、その喧騷にも拘らず、群集の上には、秋の空のやうに冷たく澄んだ淋しさが、蔽ひ被さつてゐた。

今、潮は退いてゐた。暗礁は頭を水面から上に出してゐた。けれども、もう直ぐに滿潮が泡を嚙みながら、暗礁を呑み込んでしまふ。彼らはその暗礁の上にゐるのであつた。止つてはゐられなかつた。が、行く事も出來なかつた。

線路は、外國にまでも、國境を越えて續いてゐた。その線路には大きな都會、小さな村落が、縄の大小の結び目のやうに連なつてゐた。

たとひ、どのやうな陰氣な、打ち沈んだ、不景氣であらうとも、その無數の結び目のどこかには、彼等を容れる處が

ありはしないだらうか。よしんば、今まで彼等が結んでゐた、その小さい貧しい結び目が斷ち切られた場合であるにしても、その他の大きな結び目には彼等を容れ得る處がないだらうか。

晩秋の風は、霜の氣を明日に含んでゐた。冴えて高い晩秋の空は、雪の輝きを滲ませてゐた。總ては、自然の威嚇の前に、段々緊張し、閉ぢ籠り、凝り固る用意を怠らなかつた。蟄蟲は口を閉ぢた。百舌鳥は蛙や小蟲 を木の枝に刺した。蜂は蜜を、蟻は倉庫にクリームを、冬中の用意に貯へ終つた。

だのに、彼等は、たとひ家があつたにしても、その屋根から追はれた。そして行く處は、(どこへなりとも)勝手であつた。

一九二〇年代から後の、プロレタリアの子供たちは、故郷を持つと云ふ事がなかつた。

彼等の故郷は 疾走してゐる汽車の下の、一本の枕木でしかなかつた。

彼は、驛前の廣場や待合室に溢れてゐる、昨日までの「同志」を見た。

彼等と共に驛廳にも押し寄せた。山河を海嘯のやうに押し切つて、×××××雪崩れ込んだ。

列車が入つた。

目に見えない糸で固く結びつけられてゐる、驛前の群集は、思ひ思ひに、各々の箱の中へ乘り込んだ。

——汽車が動き出せば、テープは切れるのだ。折角あそこまで訓練されて來た集團運動の組織は、たとひ失はれないまでも、一先づ打ち切れてしまふんだ。——

彼は、三つになる娘を膝の上であやしながら、窓の外を眺めた。

群集は半分に減つてしまつた。古枕木の柵に凭れて　列車に淋しい目を送つてゐる、幾人かの同志があつた。

廣場前の大通りは、明日も明後日も、ポプラの並木が、寒さに顫へ續けるであらう。大通りの向ふには、亀の甲のやうに、低い丘がズツと續いてゐた。丘には桑の木がブラシのやうに、生へてゐた。

その丘の向ふに河があつた。河に沿ふて彼等の工場が建つてゐた。

彼等の工場であつた。その工場が彼等を搾り、彼等の仲間の幾百人かを、生きながら鰻のやうに引き裂きもした。そこで數多くの悲劇が生れ、死んだ。

一日も、一時間も早くそこから遁れたい、彼等の工場であつた。が、今では、そこは懐しい彼等の工場であつた。

汽車はプラットフォームを離れた。

二つの驛で乘り換えた。

そして、今、汽車は一晝夜走つても紛れ道のない、大幹線を走りながら夜に入つた。

夜に入ると共に、急行に變つた。

强制移民、又は追放者である、渡航鞄は、子供の牛乳を貰つて來るのを忘れてゐた。

子供が、餘り泣くので、デッキへ出て揺りながら、それを思ひついた。

『駄目だよ。お前牛乳を貰はなかつたんだらう。お腹が空いちやつたんだよ。』

彼は、女房へ子供を渡した。女房は子供に乳房を與へた。が、それは乳房を與へただけで、乳を與へはしなかつた。

乳房から乳が出ない結果、子供はやけになつて泣き喚いた。

同乗客は顰めつ面をした。

『あんなに子供を泣かすなんて。』と小聲で批難したおかみさんもあつた。

『うるせえなあ。』と、眠りを覺された男が呟いた。

彼は同乘客の迷惑を感じた。よしんば同乘客の迷惑がないにしても、自分の子供を乳のないことのために、そんなにも抉られるやうに泣かせたくはなかつた。

彼は子供に對する表しやうのない深い憐みに捕はれた。乳を買ふ事を忘れるなんて、彼は自分たち夫婦の粗忽さを後悔した。彼は後悔して、自分自身を責めつけて、車掌室へ子供を抱いて行つた。デッキへ出た、だが、それでも子供は泣き續けた。

彼の深い憐れみにも拘らず、子供は益々喚き續けた。足をバタンバタンさせて狂ひ泣いた。憐れみでは腹が膨れないことは、勿論であつた。

『あつちに行つてて下さい。』

乘務車掌が云つた。

『はい。あのう、此次に止る驛までどの位時間がかかりますか?』

『ええつと、未だ二時間と十七分かかりますね。』

車掌は、大福餅位の懷中時計から、時間を引つ張り出した。

どうもありがたう、と云ふべきである事も何も、彼は思ひ浮ばなかつた。二時間と十七分ー その間、子供は泣き續

けるんだ。もがき續けるんだ。小さな、軟い體を自分自身で消化しなければならないんだ。

思はず、彼の双の腕に力が籠つた。急にスヰッチでも入れたやうに、子供の叫喚は漸に高まつた。彼自身も子供と聲調を合せて喚きたくなつた。足をドタバタさせたかつた。

疾走してゐる汽車が呪はしかつた。いつそ突如！　顛覆して乗客全部が、忌々しい、苦しい、餓じい、寒い、此世の中から奇麗薩張りと、お別れしたらいいのに、と思はずにはゐられなかつた。でも、まだ走り方が足りなかつた。遅すぎた。速く、速く、飛んで行け。子供を引つかかへた彼は、遊動圓木に撥みでもつけるやうに、身を前後に搖ぶつた。二十本の導火線に火をつけ終つて、堀鑿から這ひ上らねばならない、馴れない坑夫の焦燥で、彼の頭の中は渦巻いた。

今まででも、屡々あつた事ではあつたが、彼は「何だつて子供なんぞ産んだんだらう」と云ふ考に打つ衝つた。が、それはアルコールガス爆發のやうに、瞬間的のものであつた。一つ考へに長く留つてはゐられなかつた。後から後から、解決しなければならない。が、どうしても解決することの出來ない問題が、嘔吐のやうに湧いて來るのであつた。

子供は抱かれたまゝ、足をドタバタさせ續けた。その軟い眼の縁には、可哀想な三十女に見るような、薄暗い隈が生じた。その上に用心深さうな、遠慮した眼が半分開いてゐて、睫毛が稀にハッキリと下眼瞼の方に蔽ひかぶさつてゐた。渇いた喉のやうに、眼からは涙の影も光らなかつたが、飢と渇きが燃えてゐた。もう、子供子供した乳の匂ひも、その頬に匂はなかつた。

小さな惡魔のやうに、泣き喚いた。

彼の心のやうに夜は暗かつた。何のためにか彼の氣持は、列車と同じく驀進した。が、汽車は當てがあつたが、彼は何のために急ぐのか、自分でも分らなかつた。

三つになる娘の胃の腑は、熱のある者のやうに乾いてゐるに違ひないことを、彼は知つてゐた。餓じいであらう。出くであらう。それは分つてゐる。だが、そんなにやけになつて泣かなくても、そんなに責めるやうに喚かなくてもいいではないか。

――云ふまでもなく、父や母の手拔かりであつた。手拔かり位では濟まないかも知れない。いや全くそんな事ではない。これがたゞ腹が空いたゞけの事だからいいけれど、もし疫痢ででもあつたらどうだらう？　二時間と十七分の間には、完全に手遲れになつてしまつてゐる。見す見す死んで行くのを。藻掻き死にに、終ひには藻掻くことも出來なくなつて死んで行くのを、默つて見てゐることになるんだ。――

彼は、泣き叫ぶ子供の顏の上に、胸中を締られでもしたやうに、ポトリと涙を落した。

――たゞ、腹が空いただけだから、いいけれど、と俺は思つた。病氣でないからいいと思つた。病氣でもないのに、丈夫でピンピンしてゐて、大きくなるために榮養を欲しがつてゐるのに、「たゞ腹が空いただけの事だからいい」と、俺はたとひ一分間でも考へた。なほ惡いではないか。なほ惡い。俺が餓じがつて育つて來たやうに、此子を餓じがらせて育てて良いと云ふ法はない。それは解つてゐる。それは解つてゐる。だが、どうすればいいのだ。――

汽車は大小の結び目を、ひつたくるやうに手繰つて進んだ。

泣き勞れたのか、ひもじさの餘り心身が消耗したのか、哀れな小さな顏に、陰氣な、淋しい表情を固定させたまゝ、小さな生物は眠りに落ちた。その眠りの間を、發作が二分毎位に起つて、痙攣に似た泣聲を揚げさせた。

彼は、娘をそのまま年老いさせたやうな女房に抱かせた。

そして、ホツとして車室を見廻した。同乘客に濟まない氣がした。と、一方では無理やりに、彼等數百の勞働者を、

例外なしに「ただ腹が空いただけの事」の方に追ひ込んだ。牛脂の固まりのやうな、重役の幻像を睨みつけた。そのフエツトの固まりが自分の形になつて、娘の眼に映る！

——俺は子供を飢えさせた。——

數ケ月に亘る窮乏と、奮鬪と、緊張とに加へて、列車の動搖と人いきれで、意識にかかり初めた霧が、再び子供の飢えと云ふ風で吹き拂はれた。

——そうだ！　食堂車があつた！——

彼は座席の横に置いてあつた、今は飲み盡して空になつた、水瓶（ビール瓶）を取り上げると、上着の下に隱しもしないで、張子の重役の首でも提げるやうな手つきで引つ掴んだまゝ、車室を突き進んだ。

一緒に乘り込んだ彼の仲間たちも、二つの乘換の間に、振り落されでもしたやうに、數が減つてゐた。

昨日までは、同じ目的を抱いて、手を取つて進んで來た仲間ではあつた。が、今では、彼等の共同の目的は、血の氣の通はない一つの抽象に變つてゐた。

新らしい、出來たての一錢銅貨を牛脂で揚げた、そつくりの、彼等の支配人は、今は彼等から姿を隱してしまつた。その呪ふべき、彼等の貯金までも吸ひ盡した、生きた人間は、高い塀の中の植込みに圍まれた、幽邃な座敷に入つてしまつた。そして、その塀際には、請願巡査が『あどけない顏』をして草を拐つてゐた。

しよつちゆう、揚げたての一錢銅貨の實在に對して、生きた反抗を持つてゐるやうに育つて來た彼等は、その對照が隱れると、どこにでも、時には仲間に對してさへ、心の中の煙を吐きつけ勝になるものである。

が、今は渡航鞄の事について語つてゐるのだ。

彼は食堂車に入らうとした。けれども、もう時間が過ぎてゐたので、食堂車の扉は閉ざされてゐた。不思議な事には、その扉が開かないことを知ると同時に、撥かれでもしたやうに、彼は元來た方へと、驅け出した。
――ちよつとの間でも、若し俺のゐない間に、線路の中に娘でも飛び込みはしなかつたか！――
と、彼は感じたからであつた。

――馬鹿な！――

と、彼は、その馬鹿氣た感じに自分自身で嘲笑し、水を打つかけながらも、通路にはみ出した足を踏んづけ、頭を防でこづきながら飛んでゐた。

何だつて、そんな不自然な、あり得べからざる豫感が彼を襲つたのであるか。それは全く唐突な、理由のない豫感でなかつたか。寧ろそれは狂的でさへもあつた。

けれども、彼はその狂的な感じを幾度、實際の出來事として經驗しなければならなかつたか。又は、何等の豫感もなく、極めて平氣で呑氣でゐた間に、どんなに怖ろしい事柄が彼を待伏せしてゐたか。

それ等の怖ろしい出來事について、彼が、その原因であり得た事は、殆んど無かつた。種は蒔かれないで、出し抜けに生へた。子供が荷馬車の轍の下に這ひ込んでしまつた。そして、ぐちやぐちやになつて拾ひ集められた。

彼は漸く背を折つて育て上げた、五つになつた男の子を「馬車の下に這ひ込め」なんて吩咐けて出た事はなかつた。

それだのに、晩酌の一合に、子供の寢顏を見る事が出來るのを樂しみに歸つて見ると、女房もゐないのに、子供だけは、屑桶に捨てられた魚の「あら」見たいになつてゐる！　歸つて來た半狂亂の女房を毆りつけて、も一度薪雜棒で毆り足さうとすると、近所の人から、「おかみさんが、向ひの家に酒買ひに行つてる間に、坊やが、荷馬車の後輪に滑り込

んだのだ』

と云はれた。

『『それでお前さんを、工場に迎ひに行つたのだが行き違ひになつた』のであつた。

彼は振り上げた雑棒を、そのまゝ子供でも抱くやうに、ひしと抱きかかへて、ボロボロ涙を流した事があつた。

そんな時でも「日が暮れやがる」のであつた。會社の原料を積んだ荷車であつても、何でもかでも、休めば「給料」は取れないのであつた。

も一人の子供は、七つになつてゐたが、彼が工場から歸つて、頬ずりをしてやるとすぐ痙攣を起した。痙攣が済むと、もう死んでゐた。

『俺にや小供は育たねえ。』

と、思ひ込んでゐたのであつた。そのただ一人の殘された子供が、ピンピンしてゐるのに、「腹が空つた」ために、死ぬほど泣き喚いてゐるのであつた。そして、泣き疲れた揚句、死ぬ時のやうに、時々、發作的な泣聲を揚げるのであつた。

『今度子供を殺したら、手前も一緒に殺しちやうぞ！』

彼は、女房を充分に嚇し込んでおいた。

——だから、だから——

彼は、追つかけられる列盗棒のやうに、フッ飛んだ。そんな眞夜中に、町中の盗棒なら兎に角、汽車の中を驅けると云ふ法はなかつた。蹴飛ばされたり、突き當られたりした乘客達は、もう一晩中眠られないほど、愕かされてしまつ

た。そしてぶつぶつ呟いたり、怒鳴りつけたりした。

勿論、これらの悲惨な出來事が、渡航鞄だけを待つてゐたのではなかつた。渡航鞄よりも、もつともつと慘めな目に待ち伏せされてゐた仲間もあつた。

それは避けられない事であつた。何故かなら、此時代では總ての勞働者たちが、必要な時に×××××仕組の上を歩いてゐる、豚以外ではなかつたからだ。多くの工業勞働者や農民のうち、一體どれだけの數が、職業病に命を取られないで天壽を完ふし得たであらうか。又、その子供たちは、どの位多く若芽の時代に熱湯を打つかけられたか。

渡航鞄は、そう云ふ狀態で列車の最後部まで驅けつけた。

女房は子供を抱いて、ユラユラしてゐた。汽車の震動と、長い間の疲れと、榮養不足と、恐らく物心ついて以來、決して十分眠らなかつた處の睡眠不足とで、陽炎のやうにユラユラしてゐた。

彼は、取り敢へず安心した。悲劇は起つてゐなかつたからだつた。だが、悲劇は起つてゐなかつたのだらうか。四五年前別れた、一人の同志がN市にゐる事を、停車場の待合室で思ひ出し、そこへ行く事にした事は、安全確實な企であつただらうか？

その頼つて行く同志は、蒸餾水のやうに純粹な、おまけに提灯見たいな穏かな男であつた。その男を捜す事は、どんなに骨を折つても出來なかつた。彼は蓮のやうに泥の中に根を下してゐた。だが同樣に、生活は蓮の葉のやうに水面に危く泛んでゐるのであつた。

防波堤の隅や、石垣の隈や、岩壁の凹んだ部分などに、木屑や、野菜の切れつ端や、その他のあらゆる屑が、波のま

ゝに吹き寄せられる。勢よくモーターボートや、ランチが走り過ぎると、塵埃の浮島は一度に壊れてバラバラになる。中にはバラバラになつたために沈んで行く切れつ端しもある。

その藻屑の運命にも似た、渡航鞄であり、女房であり、提灯ではなかつたか。

彼は、女房と並んで腰を下した。

『少しは眠るかい？』

と訊ねやうとした時、呻るやうに泣き出した。その聲は、自分の小娘の泣聲とは思へなかつた。單純な泣聲ではなかつた。噛まれて死に瀕した犬が、微に上げ得る最後の喚きに似てゐた。未だ三つにしかならないのに、路傍に行き倒れた老人の、喉を鳴らすのと同じ響きが、その泣聲に血を混せた。

彼は再び、反射的に立ち上つた。

『死ぬのではあるまいか？　病氣ではなしに、餓え死にに死ぬのではあるまいか？』

じりじりと腹を燒かれ、喉を締め上げられて、これから燃え上らうとする若い命を、風を與へないで消して終ふやうな、そんな慘酷な眼に合はせる！　生きたまゝ蛇の腹の中で死ぬ蛙、その同じ苦しみを今、彼のいたいけな小娘は味つてゐるのであつた。

それを彼は又、『じつとして見て居』なければならないのであつた。『じつとして見てゐられる事』ではなかつた。けれども、彼にはどうする事が出來やう。若し、それが可能でさへあるならば、彼は娘の食ふために、彼の指さへ與へたかも知れない。彼は胼胝だらけの掌を眺めた。その眼を子供に移す時には、子供の顏は、濃霧の向ふに僅に見える小島のやうに霞んでゐた。

若し、此子娘が、二時間と十七分を待ち切れないで、今此處で、藻掻き死に、狂ひ死にに、死んだとしたらどうであらう？　種々な慰さめや、哀悼の言葉や、もう役にも立たぬミルクの贈物などが、乾いた畑に灑ぐ雨のやうに降りかゝるだらう。それよりも『乳も持たずに乗り込んだ』無謀の父母を責めるであらう。『せめて、ビスケツトやウエーツアー位でも持つて乗るのが、親の勤めだ』と、云ふであらう。

誰が、渡航柳や女房の心臓の中から、親としての考への余裕を引き摺り出したか！　又はそれ程逞しい體軀で働き続けた、渡航柳の中味を奪ひ去つたか！

堪え難い焦燥は、渡航柳の體を落ち着かせては置かなかつた。ビクビクと、彼はつつかれたやうに體を顫はせた。悲しみと、憐愍と、憤りとの三つプロペラーが、素晴らしい速さで回轉した。

『今、俺たちをこんな目に會はせた重役達は、絹夜具にくるまつて、暖く寝てゐやがるんだ。俺達八百と、その家族二千人とを、餓死の境に叩き込んでおいて、奴等は消化剤と睡眠剤で眠つてゐるんだ。奴等の子供たちは、一人づつ、理想的な乳を持つた乳母に抱かれてゐるんだ。畜生！』

彼は心の中で燃え上る焰と火華で、跳り上らうとする足を、立つことによつて抑へつけた。

だが、『今は憤つて許りゐる時でない』ことを彼は知つてゐた。『いい醫者はどんな時でも、冷靜さを失はない。今は、子供に乳をやらねばならない時だ。』

か、彼はどうして、それを手に入れゝばいいのか。

彼は、半分夢中で、車掌室へ入つた。そして、そこの腰かけに自分の體を投げつけた。

車掌は、硝子扉を越して客室を見た。客室は混んではゐなかつた。

『向ふに行つてて呉れませんか。』
車掌が云つた。
『ええ。』
彼は又、つつかれたやうに立ち上つた。
『もう、どの位すると次の驛につきますか?』
彼は、ボンヤリ車掌の顔を見ながら聞いた。
『あと、一時間と四十分ですね。だが、どこか具合でも悪いんですか?』
『ええ。』
彼は何氣なくそう云つた、か、ふとわれに歸つて云つた。
『私ぢやないんですか、子供に乳を忘れて來たので、子供がひどく飢じいのです。』
『あ、そうですか。ぢやあ、別段次の驛まで待たなくても食堂車で貰つたらいいでしよう。』
『ええ、行つて見たんですかね、もう寢てゐるんですよ。』
『起きませんか?』
『起きなかつたですよ。』
『ぢやあ、私が起して見ませう。』
車掌は直ぐに立つて、氣輕な歩調(あしどり)で先に立つた。
渡航鞄の廣い胸の中は、感謝の念が入り切れなくて、眼にまでも溢れ出さうになつた。

子供の前を通る時、彼は女房に云つた。

『車掌さんが食堂を起して下さるさうだから、大抵乳か手に入るだらうと思ふよ。』

さうして子供の頭を撫でた。

『ああ、此お子さんですか。さつき泣いてましたね。腹が空いたんぢや堪りませんよ。可哀想にね。』

車掌も、子供の頭を撫でた。

女房は車掌に、泣くやうな顔で笑つて見せた。

全身が飢えたために火傷した子供は頭を撫でられて、再び切るやうに叫びを上げた。

食堂車の扉は、譯なく開いた。それは彼が慌て過ぎてゐたから、通路の扉でなく、コツク部屋の扉を開かうとしたから、開かなかつたのであつた。

『ねえ、君、君、ねえ、ボーイさん。』

車掌はテーブルの上に長くなつて、寢てゐるボーイを搖り起した。

ボーイは、夢の中の人間でも見るやうに眼を開いた。

『牛乳はありませんか?』

車掌が云つた。

『時間外ですから。』

ボーイは、夢の續きのやうに呟いた。

『どうするんですか？』

向ふ側に寢てゐた、コックが眼を覺して聞い

『赤ん坊が飢えてゐるものですから、時間外だとは思ひましたけれど、車掌さんに起して頂いて。濟みませんが、少し分けて頂けないでしようか。』

渡航鞄がコックに云つた。

『あゝ、あんたの子供さんですかい。』

コックは、彼の見窄らしい風を見ると、いきなりテーブルから跳び下りた。

そして、コック部屋へ入つて行つた。

コックは、サイダーの空瓶に入つてゐる牛乳を棚から下しながら、思つた。

「車掌なんぞ頼みやがつて、小生意氣な野郎だつたら、百圓出したつて、一滴たつてやりやしないんだが。あれぢや、車掌まで見兼ねて連れて來たんだよ。きつと。ええつと、これだけつか無いんだが、やつちやうと、朝コーヒーに入れるのが無くなつちやうぞ。ええツ、コーヒーに乳が入らなくたつて、飢えやしないや。やつちやえ、やつちやえ。」

コック、もう夜が明けでもしたやうな、晴れ晴れしい顔で、サイダー瓶をブラ下げて出て來た。

『これだけつかありませんよ。コーヒーに入れるだけのやうですからね。だから、マア、これだけででも、一時を凌いどいて下さいな。驛に着けや、又取つといて上げますからね。』

『どうも、ありがたう御座いました。これで小供が助かりました。御禮の申し上げやうもありません。』

渡航鞄が云つた。

『どうも有りがたう。叩き起して濟みません。』

車掌が云つた。

『いいえ、なあにお互様ですよ。貧乏人はお互でさ。』

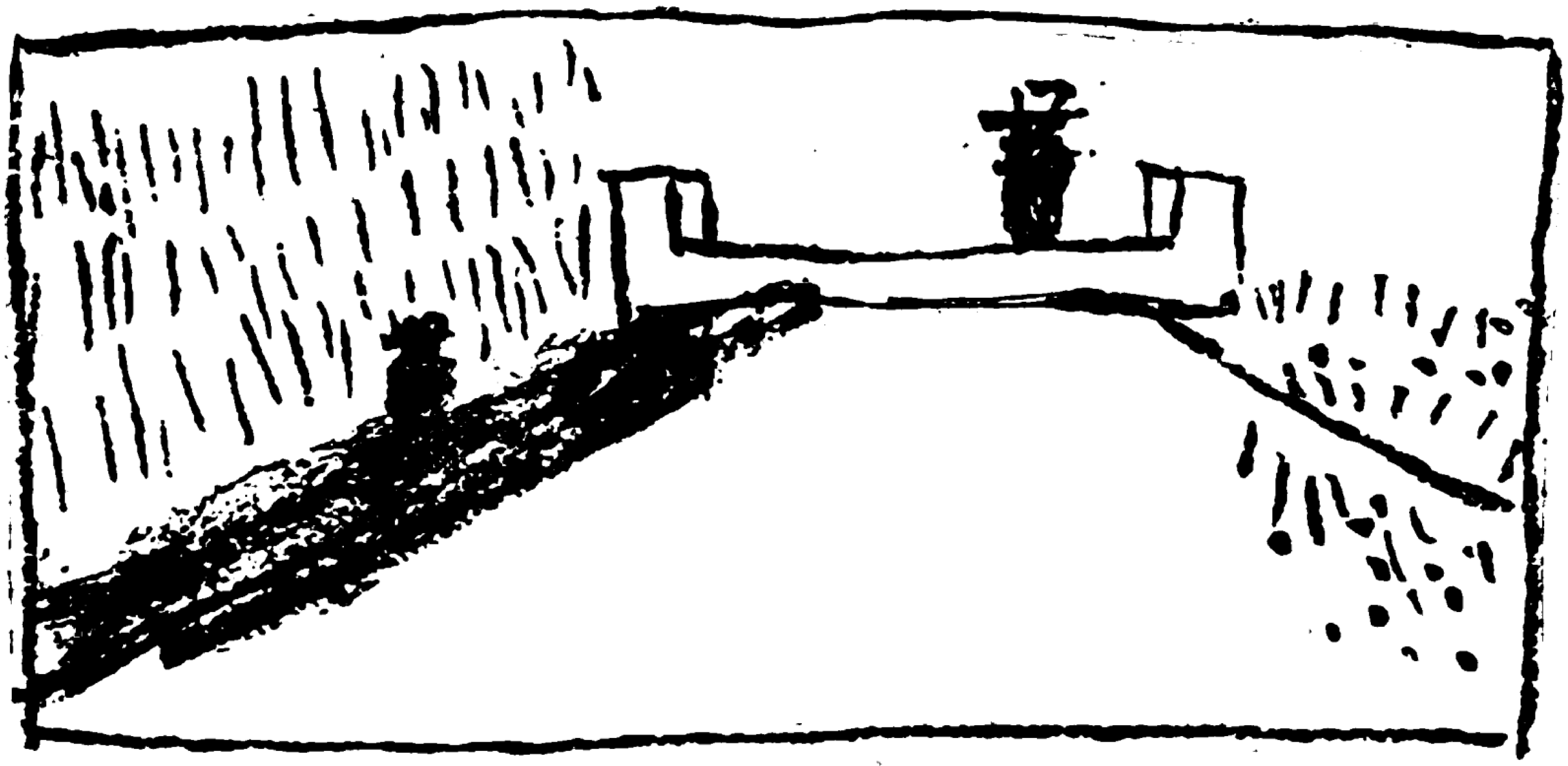
『で、お金はいくら上げればいいでしようか？』

渡航鞄が訊ねた。

『お金？ 要りませんとも。百圓持つて來たつて、腹の膨れた白い手にや賣りませんよ。「時間外」でさ。仲間にや取引ちやありませんや。ハハハハ。若しあるんだつたら、や、どうも失禮。又、何かお子さんに菓子でも買つてやつてお與んなさいな。』

通り雨のやうに、渡航鞄の眼から涙が落ちた。がそれは晴れ晴れしい涙であつた。

――一九二六、一〇、一七、――



暗夜行路

志賀直哉

三

謙作は十日目にお榮を連れ、歸つて來た。蒸々暑い日中の、長旅で、汽車の中は苦しかつた。

下關から電報を打つたので、直子が大阪あたりまで出迎えて居るかも知れないと謙作は思つた。「お歸りの時は何所かまでお迎ひに出ようかしら」そんな事を直子がいつてゐたのを彼は想ひ出してゐた。で、彼は神戸でも、三ノ宮でも、汽車の止まる度、プラットフオームに下り立つて見た。大阪では列車が驛へ入る前から首を出してゐたが、此所まで來ると、その賑はしさが彼にやつと歸つて來たといふ氣をさした。

彼はプラットフオームの人込みの中に直子の姿を探したが、見えなかつた。彼は何か輕い失望を感じながら、いつそ、はつきり出て來るやう、云つてやればよかつたと思つた。

お榮は腰掛に横向きに坐つて、うつら〳〵してゐた。一年半、——一年半にしては多事だつた、——そして漸く歸つて來たといふ事は何人にも感慨深くありさうな事だが、お榮はもうそれをさへ想はない程、疲れて見えた。謙作にはお榮の感情がそれ程乾いたやうに思はれた。

「いらつしやいませんか」居ずまいを直しながらお榮は物憂さうに袂から敷島の袋を出し、マッチを擦つた。お榮は久しく止めてゐた煙草を此一年半の間に又吸ひ始めた。

謙作の方は僅か十日の旅でも、歸つて來た事がいやに意識された。今乘込んで來た連中は何れも見知らぬ人々だつたが、それが皆、知人かのやう思はれるのだ。彼は今度は間違ひなく出てゐる直子の晴れやかな顏を想ひ浮べ、汽車の遅い速力を歯がゆく思つた。

九時何十分に汽車は漸く京都驛へ入つた。謙作は直ぐ群集から少し後ろに離れて直子と、それに附添つて水谷が立つてゐるのを見つけた。彼は手をあげた。

水谷は直ぐ人を押分け、馳寄つて來た。そして未だ動いてゐる列車について走りながら、荷を受取らうとした。謙作は末松なら分つてゐるが、水谷が迎ひに來てゐる事が何んとなく腑に落ちなかつた。自分とのそれ程でない關係からいつて何か壺を外れた感じで漠然不愉快を感じた。

彼は小さい荷物を水谷に渡しながら、

「赤帽を呼んで呉れ玉へ」といつた。

「いゝですよ。づん〳〵お出しなさい」

さう云ひながらお榮の出す荷物も一緒に水谷に忙しくおろしてゐた。

直子は一寸羞むだ微笑を浮べながら近寄つて來た。
「お歸り遊ばせ」そしてお榮の方にも頭を下げた。
「兎に角赤帽を呼んで來ないか」彼は直子に云つた。
「いゝですよ。奥さん」水谷は自分の働きぶりを見せる氣なのか、又さういつた。謙作は苛々しながら、
「いゝですつて、君、これだけの荷が持つて行けるかい」と云つた。
大きなスーツケースが三つ、その他信玄袋や、風呂敷包みが幾つかある。水谷はそれらを眺めて今更に頭を掻いた。そして、
「ぢやあ、僕が呼んで來ませう」と、急いで赤帽を探しに行つた。
謙作は忘れ物のない事を確め、お榮を先に列車を下りた。
彼は簡單に、
「直子です」とお榮に紹介した。
「榮でムいます、何分よろしく……」二人は叮嚀に挨拶を交はしてゐた。
「どうぞお先へいらして下さい」かういひながら水谷が赤帽と一緒に還つて來た。
「毀物があるんだが、それだけ持つて行かう」
「どれです。これですか？」
「僕が持つて行くよ」謙作は高麗燒を少しばかりと李朝の壺を幾つか入れた一ト包みを取上げた。
「大丈夫です。僕が持つて行きますよ」水谷は奪ふやうにそれを取つた。

一體さういふ所のある水谷ではあるが、今日は一層それが謙作には五月蠅く思はれた。

彼はお榮と直子を連れ、改札口を出、そこに立つて赤帽等を待つた。

「どうして水谷が來てるんだ」彼は直子に訊いてみた。

「今日自家(うち)へいらしたの。此間要さんが來て、三晩ばかり泊つて、その時水谷さんや久世さんもいらして、お花で夜明しをしたんですの」

「何日(いつ)」

「四五日前に」

「要さんは何日歸つた。末松は來なかつたのか?」

「末松さんは一度もいらつしやいません。要さんの歸つたのはさきおとついです」

「敦賀へ歸つたのか」

「九州の製鐵所へ見學に行くとかいつてゐました」

「八幡だね」

「えゝ、八幡」

謙作は何んとなく不愉快だつた。直子の從兄が、來て泊る事に不思議はないやうなものの、自分の留守に三日も泊り、その上、自身の友達を呼んで夜明かしで花をしたといふのは余りに遠慮のない失敬な奴等だと思つた。又、直子も直子だと思つた。

僅か十日間ではあるが結婚してこれは初めての旅だつた。彼は直子がその間、淋しさに堪えられないだらうと思ひ致

賀行きを勸めた位で、自分も朝鮮でも少し見物したい所もあつたが、さう氣樂にしてゐる事が直子に濟まない氣がし、且つ自身も早く歸りたく、彼は直子に會ふといふ事にかなりいゝ豫期を持つて歸つて來たのだ。然し會つた最初から、何か、直子の氣持がピタリと來ない事が感じられ、それに水谷の出てゐた事が一寸彼を不機嫌にすると、それが直ぐ直子にも反射した爲めか、直子の氣持も態度も變にぎごちない感じがし、不愉快だつた。

水谷が毀物の風呂呂敷を下げ、赤帽について二コ〳〵しながら出て來た。

「チッキの荷もあるんでせう？　直ぐとらせませう」

謙作はそれには答へず直接赤帽にいつた。

「市内配達があるだらう」

「御座ります」

「衣笠村だけど屆けるかね」

「さあ、市外やと、一寸、遲れますがな」

「さう。ぢやあ一緒に持つて行から」謙作は側で何かいつてゐる水谷には相手にならず。割符を赤帽に渡した。

荷共俥四台で行く事にした。謙作の不機嫌に幾らか氣押され氣味の水谷はそれでも別れ際に。

「二三日したら末松君とお伺ひします」

と云つた。

「それより末松にあした行くと云つて吳れ玉へ」

「承知しました。あしたは末松君も僕も學校は晝までですから、お待ちしてゐます」

「少し用があるから一緒に出たいと末松にいつて呉れ玉へ」

謙作は苛々とした。

俥は烏丸通りを眞直ぐ北へ走つて行つた。電車が幾台も追越して行つた。謙作は一番後ろから大きな聲で前に行くお榮に「東本願寺」を教えた。それを引きとつて年をとつたお榮の俥夫が何か切りに說明してゐた。六角堂でも俥夫は馳けるのを止め、歩きながら、說明した。

「夜とはいへ、電車通りをお練りで行くのは少し氣が利かなかつたな」彼は一つ前の直子にこんな事を云つた。彼は自分は今はそれ程不機嫌でない事を示したかつた。

直子は何かいつたが謙作には聽き取れなかつた。彼は直子が何んとなく元氣がないのが可哀さうになつた。そして彼は、

「水谷に荷を宰領さして皆で電車で行けばよかつた」心にもないこんな事をいつた。

衣笠村の家へ歸つたのは十一時頃だつた。眼差しの仙が馴れた飼犬のやうな喜び方で玄關に迎ひ出た。謙作にはそれが直子の氣持よりもずつと近かく來たのが、變な氣がした。直子は自分の留守にさういふ連中と遊んでゐた事を後悔し、それで心の自由を失つてゐるのだ。然しそれを今は何んとも思つてゐない事を早く示してやらねば可哀想だと彼は思つた。

家の中はよく片附き、風呂が湧いてゐた。「いゝお住ひね」お榮は座敷で茶を飲み了はると、立つて、台所から茶の間と見て廻つた。

「お榮さんの寢る所は何所にした？」

「分らないから、今晩だけ兎に角二階の御書齋にとらして置きました」
「うん」そして彼はお榮に「今晩は疲れてゐるから早く寢るとよござんすね。風呂へ入つて直ぐお休なさい」と云つた。
「私は後で頂くから、謙さんお入んなさい」
「瀬戸物の荷を解どくから、僕はゴミになるんです。今日だけ先に入つて下さい」
謙作は玄關の間で藁に卷いた壺や鉢をほどいて出した。
「高麗燒の方は少し怪しいのもあるやうだ」
直子は辰砂の入つた小さい李朝の十角壺を取上げ
「これ、綺麗だこと……」と云つた。
「お前には角皮張の綺麗な函を買つて來た。然しそれも欲しければやつてもいゝ」
「えゝ、頂きたいわ」直子は兩手で捧げ、電燈の下でそれに見入つてゐた。「何んでせう、べたべたするのね」
「さあ、油でも塗つてあるかな」
「お榮さんがおでになつたら、お風呂一緒に入つていゝ？」
「左うしよう」
「此壺を洗つてやるの」
「折角いゝ味になつてゐるのを無暗に洗つていゝかな」
「いゝのよ。これぢやあ、きたなくて仕方がない。シャボンとブラシですつかり洗つてやるわ。もう頂いたんだから、

いゝでせう？　私の物になつたらもう骨董ぢやあないのよ」
謙作は日頃の直子らしくなつたと思つた。
二人はそれらを座敷へ運び床の間に並べた。
「私の壺が一等ね」
「李朝の物ではそれはいゝよ」
「惜しくなつても、もうお返ししませんよ」
謙作は異ふ荷から角皮張の函を出して來てやつた。直子はそれも喜んだが、所々少しはがれかけた所などを氣にした。それを見て謙作は云つた。
「お前には今出來を買つてくればよかつた。何んでも見た眼が綺麗ならいゝんだから」
「さう輕蔑するものぢやあ、ないわ」
「實際さうぢやあないか」
「段々分つて來てよ」
謙作は直子が湯上りの化粧を濟まして來るのを待ち、お榮のこれからに就いて相談した。直子は此家に一緒に住みたいと云つた。謙作はそれがどれだけ考があつての返事か余り信用しなかつたが、變な事を云はれるよりは遙かに氣持がいゝと思つた。
「お前がさう云ふのは、それは大變いゝ」
「いゝも惡いも、それが當り前ぢやありませんか」

「子供から世話になつた人で、實際はさうだが、お前とは全で異ふ境遇で來た人だからね。そんな點で若し合はないやうでは面白くない。世話するとして、必ずしも一緒に住まねばならぬといふ事はないのだから、近所に小さい家を別に借りてもいゝと思つたんだ」

「却つて困るわ。そんな事」

「お前が差支えなければ、それでいゝんだ。若し望まないやうならさうしてもいゝと考へたまでなんだ」

「私、嬉しいわ。何んでもこれからは御相談出來て」

謙作は兩方ともさう癖のある性質ではなく、案外折合ひがいゝかも知れぬと考へた。實際お榮は過去は過去として新しい境遇にも順應する方だつた。

謙作は自分の留守中の事を直子が少しも云ひ出さないのを少し變に思つた。自分の一寸した不機嫌がそれ程直子にこたへたのかしら。然し、直子がその事を悔ひ、觸れたがらないのはいゝとして、此方も一緒に全く觸れないやうにしてゐると、却つてそれがその事に拘泥つてゐる事にもなりさうなので、簡單に話せたら話して了ひたいと思つた。そして今後はさういふ事にはもう少し氣を附けるやう云ひたかつた。然し、彼は却々氣輕にそれが云ひ出せなかつた。折角互に機嫌よく、お榮の話も氣持よくいつてゐる時それを切り出すのは努力が要つた。自然、兩方沈默勝ちになつた。

「要さんはいつ卒業するんだ」彼はこんな事から云ひ出した。

「今年卒業したとか、するといつてましたわ。八幡は見學もですけど、多分其所へ出るやうになるんでせう」

「歸りには又寄るのか」

「どうですか。何しろ來たと思つたら、直ぐ出かけて、翌日は又久世さんや水谷さんとお花でせう。話しする暇なんか

なかつた。夜明しでやつて、そのまゝ、又晩の九時か十時まで、三十何年かしたんですもの。人生五十年やるなんて、迚もかなわないから、私、途中で御免蒙つたわ」

「それで要さんは翌日たつて行つたのか？」

「朝、私がまだ寢てゐるうちに默つてたつて行つて了つたの。本統にひどいのよ。何の爲めに來たか分かりやしない」

「それは花をしに來たんだ。水谷が手紙でゝも誘つたんだらう」

「さうよ」

「豫定の如くやつたんだ。然し留守なら少しは遠慮するがいゝんだ。水谷の下宿でだつて出來る事なんだ。」謙作の口調は不知、非難の調子になつてゐた。

「…………」

「末松はさういふ點、神經質だ。水谷はその點で俺はいやだよ」

「それは要さんもいけないのよ」

謙作は不圖「お前が一番いけないんだ」と云ひさうにしたが默つて了つた。

「もうこれから斷るわ。實際失禮だわ。御主人の留守に來て、幾ら親類だつて、あんまり失禮ね」

「それは斷つていゝよ。要さんは會はないから、どういふ人か知らないけど、従兄としてお前が親しければ尚、はつきり斷つて差支えない」

「…………」

「兎に角、水谷は不愉快だよ。何んだつて、今日も出迎えなんかに來てゐたんだ。それもまるで書生かなぞのやうに、

いやに忠實に働いたりして。あゝいふおつちよこちよいでも矢張り氣がとがめてゐるもんで、あんなにしないでゐられなかつたのだ」

「…………」

「水谷は末松も誘つたに違ひないのだが、十日ばかり旅をした者を、わざ〳〵出迎へる程の事はないから末松は出て來なかつたんだ。その方が余ツ程氣持がいゝ」云ひ出すと謙作は止まらなくなつた。

「…………」

「一つは末松は俺が水谷を厭やがつてゐる事を知つてるから向出て來なかつたのかも知れない」

「…………」

「水谷にはこれから來る事を斷つてやらう」

「…………」

「惡い奴とは云はないが、あゝいふ小人タイプの卑しい感じはかなわない。あいつの顏を見ると反射的に此方は不機嫌になつて了ふ。たまに、機嫌がよくて、一緒に笑談なんか云つて了ふと、あと、屹度、自己嫌惡に陷る。何方にしても、あゝいふ人間とつき合ふのは馬鹿氣てゐる。末松は神經質な所がある癖にどうしてあんな奴とつき合つてゐるのかな、あんな奴とつき合つてる奴の氣が知れない」

謙作は明らかに自分が間接に要の惡口を云つてゐる事に氣づいたが却々止められなかつた。

「本統に惡かつたわ。もうこれから氣をつけるから、許して」

「お前もいゝとは云へないが、俺はお前を責めてゐるわけぢやあない。他の奴が不愉快なんだ」

「私が悪いのよ。私がしつかりしてゐないから。皆が私を馬鹿にしてゐるんだわ」

「そんな事はない」

「私、もう要さんにもこれから來てくれるのよして貰ひます。それが一番いゝ」

「そんな馬鹿な事があるかい。叔父さんとの關係でそんな事出來るかい」

「叔父さんは叔父さん、要さんは要さんよ」

謙作はあの上品なN老人を想ひ、その愛してゐる一人兒に對し、一寸した不謹愼、それも學生として、別に惡氣もない事に、自分の我儘な感情から、こんなに思ふのは濟まないといふ氣もした。N老人の自分に對する最初からの好意に對しても濟まぬ事だと思つた。彼はかうした一寸した感情から、段々誇張され、理不盡に、他人に不愉快を感ずる欠點を自分でもよく知つてゐた。彼はN老人に濟まなく思ふと同時に、自分の氣持に對しても幾らか不安を感じた。實際考へやうによれば何んでもない事なのだ。それが、自分の感情で、一方へばかり誇張され、何か甚く不愉快な事のやう思はれ、殊に默つてゐる間はよかつたが、一度云ひ出すと、加速度でそれが、變に堪えられない不快事になつて來る。これは自分の惡い癖なのだ。氣を滅入らしてゐた直子に今は不機嫌でない事を示し、直子も折角氣持を直した所に又、それを云ひ出さずにはゐられない。實際自分はどうしてかう、意地惡くなるのだらうと思つた。彼は又氣持を直すその道を探すのに迷つて了つた。

「然しもういゝよ。他人はあつさり考へられる事を俺は時々變に執拗く拘泥るんだ。一ト通拘泥ると自然又直るんだが、中途半端に見逃せないのだ。今日プラットフォームに水谷の顏が見えた瞬間から不愉快になつたんだ。つまり水谷の來るといふ事が壺を外れた事だ。何か不純なものをそれが暗示してゐる氣がしたんだ。そして結局それが當つたやうなも

のだが、もうそれもいゝよ。俺の氣持が分り、これからさういふ風に氣をつけて呉れるなら又何はない。お前も氣にする必要はないよ」

間もなく二人は床に入つたが、互に氣持よくなつた筈で、何んだか、白々しい空氣の爲め溶け合へなかつた。當然謙作はさうして弱り切つてゐる直子を自身の胸に抱きしめてやるべきだつたが、それがわざとらしくて出來なかつた。直子は泣きもしなかつたが、夜着の襟を眼まで引上げ、仰向けに凝つと動かずにゐる。それは拗ねてゐるのでない事は分つてゐながら謙作は此變な空氣を拂ひ退ける事が出來なかつた。口では慰めたが、自身の肉體で近よつて行く氣にはなれなかつた。

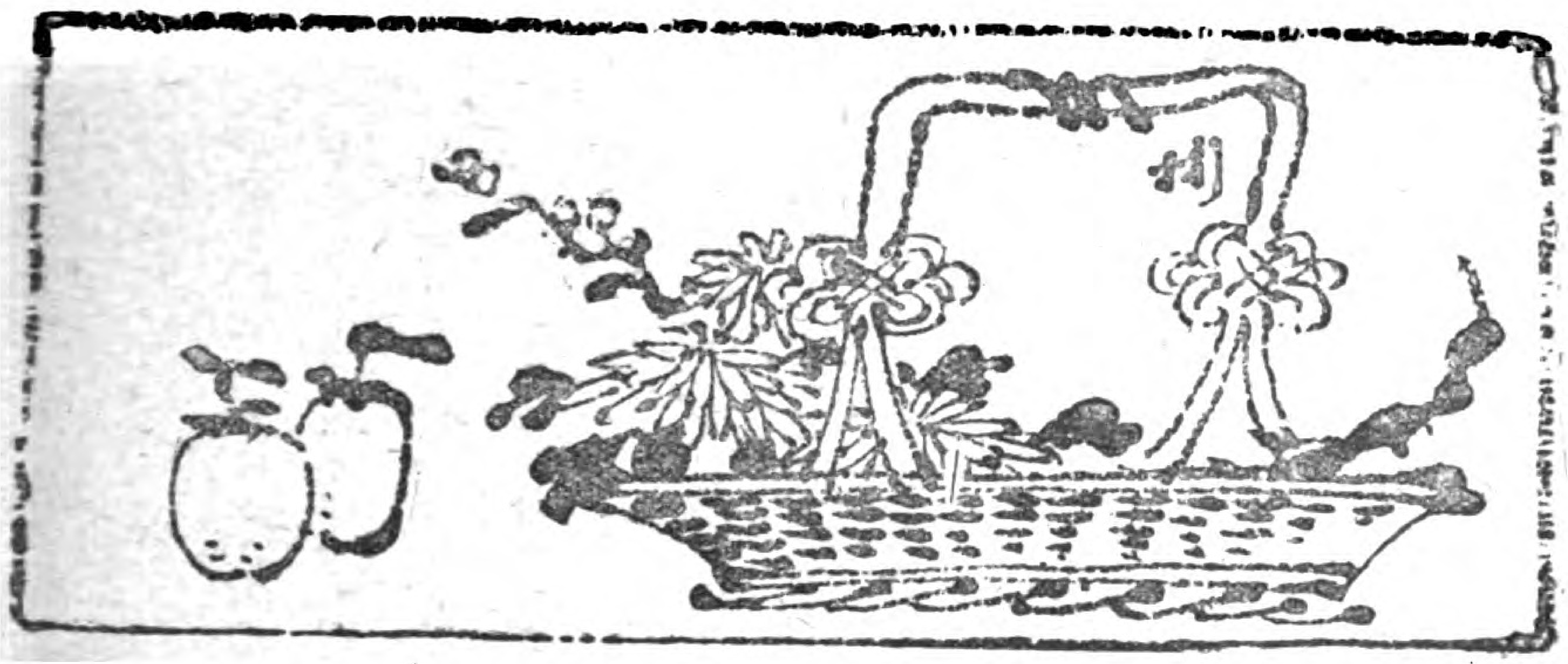
かうして一夜を明かす事は堪えられないと彼は思つた。何か自分の感情を爆發さす事の出來るやうな出來事なら却つて直るのも早いのだがと思つた。彼はかなり疲れてゐたが、さういふ直子を殘し、一人眠入るわけに行かなかつた。眠れなかつた。彼は手を出し、直子の手を探した。然し直子はそれに應じなかつた。彼はむつとして少し烈しい調子でいつた。

「お前は何か怒つてゐるのか、」

「いゝえ」

「そんなら何故そんなにしほれてゐるんだ」

（つゞく）



青塚氏の話

谷崎潤一郎

（前篇のつづき）

「ところでちよつと此方の部屋を見てくれ給へ」と、彼は私を廊下の反對の側にあるその工房へ連れて行つたが　そこで私の眼に觸れたものは、床、壁、天井の嫌ひなく、あらゆる空間に陳列してあるお前の手足の斷片だつた。殊に奇異なのはお前の體の部分部分を、──秘密な箇所や細かい一とすぢの筋肉など迄を、──著しく擴大した寫眞が、方々に貼つてあることだつた。成る程これだけの寫眞があつて、此れを毎日眺めてゐるとすれば、あの靈妙なる有田ドラッグ式素描が畫けるのに不思議はないと、私は始めて分つたのであつた。が、それにしても彼はどうしてそれらの寫眞を手に入れたか、お前に會つたこともない彼がいかにして撮影したであらうか。──此の疑問に答へるために彼が出して見せたものは、いろいろな繪から切り取つた古いフイルムの屑だつた。短かいのは一とコマか二たコマ、長いのは十コマ二十コマぐらゐづつ、彼は總べてのお前の映畫から彼に必要である場面を集めて

ゐるのだ。「夢の舞姫」が床に落ちた薔薇の花を拾つてゐるところ、血の滴れる足で舞台で踊つてゐるところ、趾の血型の大映し、「お轉婆令孃」の乳房の下からみぞおちのあたりがハッキリ現はれてゐるシーン、「夏の夜の戀」の凹んだ臍が見える部分、――凡そ彼が詳しい描寫で私を驚かした場面の數々は、みんなそこに備はつてゐるのだ。彼はお前の耳の形と、口腔内の齒列びの樣子が知りたさに、それが明瞭に寫つてゐるたつた一とコマのフィルムを得るべく、常設館から常設館へと、或る一つの繪を追ひかけて、一度は岡山へ、一度は宇都宮へ行つたと云ふのだ。

「………世間には僕と同じやうな物好きな奴が多いと云ふことを、僕はその時に發見したね。なぜかつて云ふと、由良子孃の或る一つの繪が東京と上方で封切りされる、それからだんだん地方の小都會へ配附されるに從つて、不思議とフィルムのコマの數が減つて行くんだ。勿論それは地方地方の檢閲官がカットする場合もあるだらう。けれども此の方は何處の縣でも大體の標準が極まつてゐるから、そんなに無闇に切る筈はない。最初に二十コマあつた場面が、次から次ぎへと旅をする間に十五コマなり、十コマなり、ひどい時にはしまひに一つもなくなつてしまつたりするのは、變ぢやないか。此れは途中で切り取る奴があるからなんだよ。由良子孃がやつて來るのを待ち受けて、彼女の手だの足だのをまるで餓えた狼のやうにもぎ取つて行く奴があるんだ。さう云ふ人間が大勢居ると云ふ證據には、田舍の町の常設館の映寫技師に聞いて見給へ。彼等はちやんと心得てゐて、金さへやれば望みの場面を一とコマなり二たコマなり、こつそり切つて賣つてくれる。それが彼等のほまちになつてゐるくらゐなんだ。………」

彼の仕事は考古學者の仕事に似てゐた。考古學者が深い土中から數世紀前の遺骨を掘り出して來て、何萬年の昔に生きてゐた動物の形を組み立てるやうに、彼は日本國中の津々浦々に散らばつてゐるお前の手足を集めて來て、やがて完全な一個の「お前」を造らうとするのだ。壁に貼つてある大きな寫眞は、彼がそんな風にして手に入れたフィルム

を、引き伸ばしたものなのであつた。彼は一定の比例に依つて部分部分を引き伸ばして置いて、それに從つて粘土で一つの原型を作る。さてその原型へ當て嵌めながら、ゴムの人形を縫ひ上げる。恰も靴屋が木型へ皮を押しあてて靴を縫ふのと同じやうな手順なのだが、仕事の難易は勿論同日の談ではないのだ。第一彼はお前の肌となるところの、質感的な色合と柔かみを持つゴムを得るのに苦心をした。私が手に觸れた鹽梅では、それは女の雨外套などに用ゐる、うすい絹地へゴムを引いた防水布、――――あれによく似た地質であつて、あれよりもつと人間の皮膚に近いやうなものだつた。彼は大阪神戸東京と、方々の店へ註文を發して、やつと五軒目に氣に入つた品を手に入れることが出來たのであつた。さうしてそれを縫ひ上げるのに、粘土で作つた「原型」に就いたばかりではなく、腑に落ちないところや分らないところは生きた「原型」に當て嵌めても見た。彼は一と通り縫ひ上げたゴムの袋を、わざわざ靜岡まで持つて行つて、××樓のF子の乳房に合はせて見たり、信州長野へ持つて行つて○○樓のS子の臀に合はせて見たり、東京淺草のK子の肩や、京都五番町のA子の背筋や、房州北條の女の膝や、別府溫泉の女の頸などに、一々合はせたのであつた。

しかし私は、彼がいかにしてあの燃えるが如き脣を作り、その脣の中に眞珠のやうな齒列を揃へることが出來たか。いかにしてあのつややかな髮の毛や睫毛を植ゑ、生き生きとした眼球を嵌め込むことに成功したか。いかにしてあの舌を作り、爪を作つたか。それらの材料は一體何から出來てゐるのかと云ふ段になると、ただ不可思議と云ふより外には想像もつかない。彼も「こいつは秘密だよ」と云つて、ニヤニヤ笑ふばかりであつたが、その薄笑ひは私に一種云ひやうのない、恐ろしい暗示を與へないでは措かなかつた。或る何かしら不潔なもの、物凄いもの、罪深いものから、此の材料は成り立つてゐるのぢやないだらうか? 私はさう思つて戰慄した。話に聞いた、航海中の船員が慰み物にすると云ふゴムの人形なるものが、實際あるとしたところで、此の半分も精巧なものではないであらう。或る程度まで人間に

似せた袋を縫ふだけなら、不可能なことではなからうけれども、此のゴムの袋は鼻の孔を持ち、鼻茸までも持つてゐるのだ。さうして全く人間と同じ體温を持ち、體臭を持ち、にちやにちやとした脂の感じを持ち、唇からはよだれを垂らし、腋の下からは汗を出すのだ。彼がさう云ふ人形を三十體も拵へたのはなぜかと云ふと、………………に由つて、いろいろのポーズが必要であるからだつた。たとへば………………、膝の上へ載せる時のポーズ、立つて接吻する時のポーズ、………………………、……

呆れた事には、「ちよいとこんな工合なんだよ」と云ひながら、彼はそれらの人形を相手に、私の前で彼獨特の享樂の型を示すのであつた。(彼は絶えず酒を飲んでは元氣をつけてゐた。)そしてしまひには、「……………………………」とか、「此の鼻茸の味はどうだらうか」とか、いよいよしつツこく絡まつて來て、揚句の果ては私にもそれを舐めて見ろといふのであつた。

「あ、さうさう、君は僕が女房のよだれを舐めるなんて馬鹿だと云つたね。ほら、此の通り……此の通り僕は舐めるんだぜ。これどころぢやない、………………。」

彼はいきなり床の上へ仰向けに臥た。股を開いてしやがんでゐる人形が、彼の顏の上へぴたんこに据わつた。彼は下から兩手を擧げて人形の下腹を強く壓さへた。人形の臀の孔から瓦斯の洩れる音が聞えた。私は此狒々爺の顏から禿げ頭へねつとりとした排泄物が流れ始めたのを、皆まで見ないで窓から外へ飛び出してしまつた。そして眞つ暗な田舍路を一目散に逃げて行つた。

* * *

由良子よ、私がお前に話したいと云つた事實は此れだけだ。

私はお前が、此の話を一笑に附してくれることを心から祈る。呪ひを受けるのは私一人で、お前は快活であることを祈る。しかし私は此の事があつてから、お前の映畫を作ることに興味を失つたばかりでなく、寧ろ恐れを抱くやうになつてしまつた。どうも私には、お前を美しいスタアに仕上げて、お前の姿を繰り返し寫眞に映したりしたことが、結局あの爺にお前と云ふものを奪はれたことになつたやうな氣がしてならない。お前はお前の知らない間に、あの爺に丸裸にされ、手でも足でも、あらゆる部分を愍まれてゐたのだ。そればかりならいいけれども、私の戀しい可愛い由良子は、此の世に一人しか居ないもの、完全に私の獨占物だと思ひ込んでゐたのに、あの晩以來、その信念がすつかりあやふやになつてしまつた。お前の體は日本國中に散らばつてゐる。あの爺の寢室の押し入れの棚にも畳まれてゐる、お前はそれらの多くの「由良子」の一人であり、或は影であるに過ぎない。………さう云ふ感じが湧いて來る時、私はお前をいくらシツカリ抱きしめても、此れがほんたうの、唯一の「お前」だと云ふ氣になれない。果てはお前が影である如く、私自身まで影であるやうに思へて來る。私たち二人の眞實な戀は、破れない迄も空虚なもの、うそなもの、それこそ一とコマのフイルムの場面より果敢ないものにさせられてしまつた。

今となつてはもう悔んでも取り返しの附かないことだが、私はあの晩あの爺にさへ會はなければよかつたのだ。私は幾度か、あの晩のことが夢であつてくれますやうに、そしてあの爺も、あの丘の上の無氣味な家も、跡かたもない幻であつてくれますやうにと祈つただらう。しかしその後あの丘のほとりを夜晝となく通つて見るのに、あの家が正しく彼處にあることは事實なのだ。私は今では、あの爺がどう云ふ名前の、どう云ふ人間であるかと云ふことも略知つてゐる。そればかりでなく、お前の背筋を持つてゐると云ふ五番町のB樓のA子にも、乳房を持つてゐると云ふ靜岡のF

子にも、肩、臀、頸の女たちにも皆會つて見て、彼の言葉が決して僞でなかつたことを確かめたのだ。その女たちは彼の本名を知らない様子だつたけれども、彼が珍しい變態性欲者であること、時々寫眞器やゴムの袋を持つて來ていろいろ無理な註文をすること、彼女たちを呼ぶのに「山良子」と云つてゐることなどを、一樣に語つた。

しかし山良子よ、私の唯一の、ほんたうの「山良子」よ、私はお前にその男の名前や身分を知らしたくないのだ。お前もどうかそれを知らうとはしてくれるな。私は今はの際に臨んで、お前に隱して行くことは此れ一つだ。そして私は、來世でこそは眞實のお前に會へることを堅く信じて、まぼろしの世を一と足先に立ち去るとしよう。……………(前篇終り)

歲晩斷片

■多忙裡に歲末號を編輯せねばならぬ。いつもながら不思議な感慨に打たれる。しかし本年はいろ／＼の意味で記憶さるべき年であつた。無産黨が聊か目鼻がついたと、旣成政黨がボロ百出で全く大衆から離れ去つたと。

■海の彼方には英國總罷業あり、支那は渦亂愈深く、なり行きて唯今では收拾の見込が立たず、此間に立ちて深く考へねばならぬ我國はだんだん姑息の細道を辿り行くのみである。

■勞資階級の對立も浮いたお祭行列が少くなつて恐ろしい淵があるやうな氣色を意識させて來た。

■今年は若槻と箕浦との醜い一幕で幕が下るのか、それとも波動が大きくなるのか、どちらにしても差支はないが、吾人等に深い情味が動かず、何れを見ても責任のなすり合ひは矢張りセチ辛い時代の一映劇であらう。

■私どもは政治的にかうした良心の麻痺した若槻、床次、田中が一日も早く民衆より葬り去らるるのを希望するものだ。

■本年中本誌で一番問題とされたのは七月號の禁止處分、それに「支那號」の發刊であり、創作では藤村氏の「嵐」武者小路氏の「愛慾」藤森氏の「犧牲」が最も問題とされた。

■本月號に佐々木惣一氏の論文が登載されたのは嬉しい。そして久方振りの力作である。歲末論壇の壓卷である。

■本社の計畫せる「現代日本文學全集」は出版界に前例なき大革命のこととて、その反響も偉大である。讀者間の批評もたいしたもので申込者も我國の全階級から殺到している。我社は大衆の激動に應ゆる爲めに全力を擧げて完璧のものとしたいと思つている。

改造定價

冊數	定價	郵税
壹冊	八拾錢	貳錢
半ヶ年	五圓六拾錢	增大號共 郵税不用
壹ヶ年	拾壹圓卄錢	增大號共 郵税不用

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す
▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す
▲外國よりの御註文は郵税實費を申受く
▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事
▲御拂込は振替によらるゝを最も便利とす

大正拾五年十一月十七日　印刷納本
大正拾五年十二月一日　發行

(價八拾錢)

東京市芝區愛宕下町一ノ一
編輯發行兼印刷人　山本三生
東京牛込區市谷加賀町一ノ一二
印刷所　秀英舍

東京芝區愛宕下一ノ一
發行所　改造社
振替東京八四〇二
電話銀座四五五八

世界一の『現代日本文學全集』出づ

△皆さんの一大幸福▽

今日、讀書家の最大幸福と最大要求とは、どの點にありませう？云ふ迄もなく、最廉最低の價を以て、各自の家庭に缺くことの出來ない生命ある最善、最美の書を得るにあります。唯かういふ條件に當て嵌つた書籍が容易に出ない。善書は徒に價高く、良書は容易に萬人の手に入らぬ有樣です。ところが茲に最善、最良の書が最廉最低の價で出で、容易に皆さんの家庭に立派な文學圖書館を作れる實例を見事示すならば、皆さんの歡喜と幸福とは如何ばかりでありませう。その實例は申す迄もなく此の『現代日本文學全集』の出現であります。

△出版界の大革命▽

出版界の一大革命！それは確かに一大革命です。『現代日本文學全集』は各冊共これを市價並にすれば、どうしても一册に付き價十圓以上の內容が盛られてゐます。ところがそれが僅かに**十分一**の價で得られるのです。而かもそれは菊判六號活字三段組によつて普通の册子よりも內容を數倍したもので體裁の上にも最新最良の工夫を凝らし、善美を盡した、現代文學の

一大寶庫たる本全集を全國殘らずの家庭や學校に提供しようといふのです。是れを出版界の最大驚異と謂はずして何と謂はれませうか。

△世界に誇るべき我現代文學の粹▽

今や文學は一部有閑階級の獨占することを許しませぬ。文學の民衆化！それが痛切に叫ばれてをります。文學は人類最高の文化を象徵し、各自の生活内容を豐かにし、美的生命を充實せしめる『生命の泉』です。殊に明治大正に於ける日本文學は、巧みに歐洲文學の精華を取入れて我物とし、今日では最早や歐洲文學と比肩して少しも劣らないのであります。否、將に歐洲文學を凌がうとしてゐます。それは日本文化の大飛躍を裏書するものです。それ等の文學は皆さんの趣味を洗錬し道義觀念を高め、高貴な精神を形造るべき大切な要素を多分に備へてをります。それは確かに世界の誇です。唯その種類や作物の數が餘りに豐富で、これを一目で手早く大觀するのは容易のことでありませぬ。また明治の四十五年、大正の十五年、即ち六十年間に於ては文豪、巨匠雲の如く群り、星の如く輝き、その一人一人の作物を十分味ふには餘程の時間と精力と費用とを要します。

△現代文學の一大鳥瞰圖▽

ところが、此の『現代日本文學全集』によれば、さうした困難は一切排除され、一望の下に明

治、大正を代表する諸名流の傑作雄篇をすつかり味ふことが出來ます。勿論本全集は小說、戯曲を中心として居りますが、その他種々の文學上の作品をも悉く收め**正に千紫萬紅一時に匂ふ藝術の王國**であります。

▽編纂の苦心と努力▽

これまで、明治大正文學に關する叢書類が一二出版はされて居ましたが、何れも內容が編狹で、有力な作者の主要な作品を逸したり、公平な選擇を缺いたりして、これを讀んでも文學全體を大觀することができず、眞髓に觸れることのできない憾がありました。本全集は編纂するに當り特に此の點に留意し、能ふ限り完全を期し、再三再四諸名家の高見を徵し、研究に研究を重ねた上、幾多の苦心を重ねて汎く且つ深く材料を蒐集し、之に嚴選を加へ、居ながらにして千山萬嶽起伏する**近代日本文學界の壯觀を一瞥の中に收め得るの快**を得た次第であります。此の編纂の上に注ぎました辛酸努力は非常なもので、眞に汗血の結晶と云ひたいのです。今やその結集成るに及び、正に一大會心事として欣喜雀躍に堪へませぬ。

△本全集の周到な用意▽

それに本全集は各卷共に著者、作者の肖像、筆蹟、書齋等を寫眞版として卷頭に飾り、居ながら各作家に親炙することが出來るやうに用意してあります。また卷末には周到な著作年表

を入れ、各作品については深切な解説を附し、時代と作品、人物と著作などの關係をも趣味深く記述してありますから、最も愉快に最も面白く何等骨を折らずに明治、大正の文學全般に精通することが出來ます。この點に於ても本社一流の用意を充分に致しましたが、殊に故人となられた文豪名流の作品を選擇するについては、公平嚴正の態度を以てし、有力な第一流大家の所說を叩き、最も愼重に代表作を精選致しました。この苦心、この熱誠、これ又本社のみのよく成し得る一大特色であります。

△僅かな金で完全な文學圖書館が出來る▽

結局、平たく言ふと、本全集は**明治大正文學**の**エッセンス**です、現代文學の一大寶庫、一大圖書館であります。それが每月一册一圓宛支拂はるる諸君の手に入るのです、市價十圓以上の內容實質のものが**唯一圓**で諸君の物になるのです。斯の如きは實にわが出版界に於ける未曾有の佳例です。眞に破天荒だといはねばなりますまい。皆さんは我社が讀書家のため、各家庭のため、全國民のため、なくてはならぬ最高最美の書を最低最廉の價で提供した犧牲的行爲に對し共感せられ、本全集の完成を助成する協力者となつて戴きたい。この國家への奉公、社會への奉仕は當然皆さんの御力によつて實現せられるのであります。どうぞ皆さん、機を逸しないで申込まれんことを切望致します。時は今、今が申込の絕好時機であります。

誇るべき大特色

體裁の上からは

▲菊判六號活字總振假名付三段組で、毎冊實に千二百枚以上の内容が盛られてある。

▲總卷三十七篇を通算すれば、實に普通版の四萬頁に相當し忽ち小圖書館が出來る。

▲若し之を原本で集むれば總額壹千圓以上になるが、それを毎月たつた壹圓で提供。

▲組版印刷は鮮明美麗。用紙は王子製紙會社別誂上等印刷紙「金星」を用ふ。

▲裝幀は杉浦非水畫伯の苦心に成り、製本技術と相俟つて、書齋の一美觀。

内容の上からは

▲明治大正不朽の名作雄篇が悉く集り、その中には絶版となつて、容易に手に入れ難きもの、或は流布稀なる珍本も數多收められてある。

▲故人の篇は、それ〴〵その專門研究家の意見を斟酌して嚴選し、收容各篇には詳細なる解說を加へ、小傳を添へ、或は緻密なる年譜を揭げその上故人の面影又は筆蹟等を寫眞版として揭げてあるから身躬ら故人に親炙するの概がある。

▲現存人の篇は、著者自らの嚴選を俟ち、著作年表、小傳、總て著者自身を煩はしたから、文學研究者には實に唯一の典據となる。

▲校正の嚴密なるとは、辭書の校正以上に出で、而かも著者の習癖を尊重してその特色を飽迄も發揮するに努めてある。後日此の全集はそれ〴〵の定本となるは明かである。

全體の上からは

▲本全集さへあらば實に現代日本文學の精髓を把へ得るのみならず、實にまた現代日本の思想と生活の根柢を衝き得る。

▲單に文學愛好家の寶典たるのみならず、總ての階級の人々は本書によりて高雅なる日本趣味を知らず識らず深める。

▲若し各家庭に一部づゝを備へるならば、家庭の團欒は頓に增し、人々は一生涯退屈することなく暮せる。

◆『尾崎紅葉集』の校正◆

『現代日本文學全集』の校正の嚴正を期する爲めに、我社が拂へる努力は異常なものである。ルビ一字、句讀點一つにも、誤謬のなきことを期してゐる。今『尾崎紅葉集』に就いてその一端を擧げてみると、次の通りである。

紅葉先生は、『私』といふ文字一字についても、その人物と性格と、執筆の時代によつて、左のやうな使ひ分けがせられてある。

私　私　私　私　私　私　私

又、『一寸』についても、『一寸』『一寸』『一寸』『一寸々々』等の數通りの使ひ分けがある。又『出來る』にも『出來る』『出來る』『出來る』等の種々がある。

それから『くるま』といふ文字も、初期のものには『人力車』と書かれたが、一々三字づゝ書いたのでは時代に適合しないといふ―當時の漢字制限―の考へから、『車』といふ一字を用ゐるやうになり、それだけでは猶『人力車』の感じが出ない上に、普通の車と誤られる虞があるといふ所から、『腕車』を用ゐ、猶我慢が出來ず、最後に『俥』といふ新しい文字を創造するに到つた。それ等變遷の跡は、本集に於て判然と區別して置いた。『候』といふ字にも、「女のふみ」には、『〻』と讀ませ、「男のふみ」には、『候』と讀ませられてある。總じて紅葉先生の文字に對して働く神經は異常なものであつた、從つてそれが校正に當るものゝ苦心は並大抵ではない。原本に據るとは云ひながら、原本だつて全然誤謬がないとは云へぬ。異本を調べ、習辭を調べ、原義を辿り、また生前先生に親炙した人々に訊ね合はせるなど、校正者は一字の誤謬を防ぐためにも猶數日を費して悔いない有樣である。

紅葉先生は、體裁の上にも、非常にやかましかつた。會話の括弧には二重括弧『　』を嫌はれて、「　」を用ゐられた。會話の下に附く……にも、會話と文章との間に少しく時間を置くやうな場合の印にも、それ〲やかましい使ひ分けがせられてある。況んや文章の上に凝られた鏤心彫骨の苦心を知らない校正者があつたならば、例へば『多情多恨』の最初の方にある「殘酷は過いね、君が何程思ひ切れないと云つた所で、お類さん樣が生返るぢやなからう」の「さん樣」の大切な「樣」を見落すまいにも限らないのである。

◆英國勞働者と廉價版シェークスピア集◆

『勞働運動指導者としての私の諸冒險』(My Adventures as a Labour Leader by Frank Hodges) の中に、こんな魅惑に富んだ數頁の挿話がある。

若者ホッヂスは十三歳の時、炭礦の雜役に住みこんで、深い坑底の扉番となつた。併し何分にも少年の事だから退屈で堪ら

ない。周圍には鼠が澤山出て來る。それは人なつこい、馴れ易い、多少は人間の顏色や氣持をも讀む事の出來る動物なので、それと友達になつて變化に乏しい時間をまぎらしてゐた。

或る日彼は家からシェークスピアの二ツ折版のコピイを坑内へ持ちこんだ。それには密字で名作は殆んど全部一冊中に收めてあつた。彼は子供の時よくそれを玩具にしたものだが、中味はまだ一行も讀んでみた事がないのであつた。

たま〳〵坑内の單調さは彼にそれを讀んで見る機會を與へた。すると地下何百尺のどん底の中にも、忽ちにして何といふ光彩と驚異とが展開して來たことか。彼の空想に何といふ刺戟があり、彼の情緒に何といふ感動があつた事か。彼は今迄漠然として感じてゐなかつた生命に、この讀書から明瞭な認識をもつに到つた。

ある日一人の年取つた坑夫が來て『俺は字がよめない。その本には何が書いてあるか、お前さん一つ、聲を出して讀んでみてくんな』と要求した。少年は『眞夏の夜の夢』の一節を讀んでやると、その老坑夫もすつかり魅惑されて了つた。

それからといふもの、少年の周圍には急に傍聽が殖ゑた。三分でも五分でも、暇さへあれば坑夫達は少年の周圍に寄つて來て、シェークスピアを讀んで聞かして貰つた。

この記述が日本の出版界に何の暗示も與へないであらうか。乏しい日給の中からでも容易に購ひ得、一冊買つておけば數週間を娛しみ得る廉價版で、どんな高名な文學書をも易々手に入れることが出來る英國勞働者の幸福さよ！

——併し、もうそれを羨む必要はなくなつた。本全集の出現は、日本の從來の出版界の因襲を打破して、文藝の浸潤を遍ねからしめ得る。明日からは地下に働く人にも、深夜の就業してゐる人々にもみんな文藝の德化に浴し得るのだ。兵士は行軍の際背嚢の中に一冊を忍ばせることを忘れまい。タイピストも仕事の暇々に器用な美しい指で繙くであらう。

◆何故に**總振假名**とした？◆

『現代日本文學全集』は**第一**に文藝を民衆の手に解放するのがその目標です。それにはどうしても、どんな階級の人にも、どんな年齡の人にも判るやうに總振假名とすることが必要です。**第二**に時代には時代の讀み方があります。明治開化期と、紅葉、透谷、二葉亭時代より獨歩時代までと、それ以後とは、讀み方などに隨分著しい差違があります。**第三**に各作家はそれぞれの特異と習癖とを持つてゐて、同じ漢字でも、隨分讀み方が異つてゐます。是等を明瞭にし截然と區別を立てるには、多少の困難と闘つてもどうしても總振假名とせねばなりません、そして、**第四**に是等は後日の學者のために重要なる參考資料たることは勿論であります。是れ本集に總振假名の採用を斷行した所以であります。

□第一回配本は『尾崎紅葉集』

第一回の配本は『尾崎紅葉集』に決定した。同集は約一千三百枚以上の内容を盛り、實に三百二十頁に達し、紅葉山人一代の最大傑作たる『多情多恨』『續多情多恨』の全部を初め、名作『二人女房』『色懺悔』『巴波川』『戀の蛻』『やまと昭君』『拈華微笑』『紫』の七篇を收め、更にドストイエフスキイの飜譯『胸算用』隨筆『大鼻毛』『湯の花』『はやりの紋』『末黑の薄』『正月八景』『風づくし』に加ふるに書翰三通（小栗半左衛門氏に宛てたもの一通、小栗風葉氏に宛てたもの一通、杉野喜精氏に宛てたもの一通）と絶筆『病骨錄』を收容し、更に山人の照影二種、「原稿筆蹟」、「小傳」、「著作年表」を添へ、善盡し美盡したるが故に、多角多方面の紅葉山人の全貌を伺ひ得て十分であらう。目下印刷捗々進行中、昨今團體申込殺到せるが故に、申込順によつて順次發送するが、多分十一月二十五日頃より其發送を開始するに到るであらう。

「現代日本文學全集」總内容

第一篇　明治開化期文學集

假名垣魯文　成島柳北　服部撫松　饗庭篁村　須藤南翠　加藤弘之　中村敬宇　福澤諭吉　馬場辰猪　末廣鐵腸　柴四朗　その他

第二篇　坪内逍遙集

役の行者　新曲浦島　ハムレット　陽氣な女房　お氣に召すまゝ　百合若傳説の本源　歌舞伎劇の徹底的研究　史劇及び史劇論の變遷　近松對シェークスピヤ對イプセン　新舊過渡期の回想　回想漫談　その他

第三篇　森鷗外集

舞姫　うたかたの記　文づかひ　雁　青年　阿部一族　生田川　日蓮上人辻説法　埋木　ハルトマンの美學論　その他

第四篇　德富蘇峰集

新日本の青年　七十八日遊記　支那漫遊記　山水隨縁記　頼山陽に就て　海舟先生　嬰公葉酢の花　諸葛孔明　トルストイ翁を訪ふ　故郷　幽寂　インスピレーション　松下村塾　妄言妄聽　女詩人　老樹　蘇公詩存を讀む　透谷集を讀む　「思ひ出す人々」を讀む　勞働者の聲　その他

第五篇　三宅雪嶺集

宇宙　眞善美日本人　我觀小景　人類生活の狀態　時の意義　小泡十種　西郷とガルバルヂー　余の同窓　円頓　丁汝昌　大院君　福澤諭吉　副島種臣　梅花　ピット百年祭　猛虎の説　秋草　雪　亞米利加魂　その他

第六篇　尾崎紅葉集

多情多恨　二人女房　色懺悔　巴波川　戀の蛇　やまと昭君　青葡萄　笑　紫　胸算用　大鼻毛　正月八景　風づくし　[illegible]三通　病骨録

第七篇　硯友社派　その他

巖谷小波　いもせ貝
石橋思案　京かのこ
廣津柳浪　今戸心中　黒蜥蜓　もつれ糸　骨ぬすみ　めぐる小町　變目傳
江見水蔭　炭燒の烟　女房殺し
川上眉山　ふところ日記　大盃　夕だすき　紅葉を弔ふ
柳川春葉

もやの里

小栗風葉

世間師

齋藤緑雨

おぼろ夜　門三味線　短文小唄類篇　新體詩見本　文學一からげ

小杉天外

はやり唄

山田美妙

胡蝶

第八篇　幸田露伴集

風流佛　風流魔　對髑髏　一口劍　血紅星　一刹那　運命　名和長年
突貫紀行　將棋雜考　桑花主人の書中　人心收師の歸元鐘　讀燕窠語錄
新小說發行に際して世に告ぐるの文　新小說編輯者として江湖諸君　並
に新作家に告ぐるの辭　婦女　女の上　作詞者と作曲者との地位の對等
なるべきことを訴ふるの文　すゞみ臺　文人の他に對する態度　文人の
朗月亭羅文　六十日記　當流人名辭書　好色の歌　讀史後評　囈語　文
章　不安　大丈夫引　大丈夫　その他

第九篇　北村透谷集 樋口一葉集

北村透谷

北村透谷の短き一生（島崎藤村）　（第一篇）芝公園地內にて　（第二篇）
高輪東漸寺境內にて　（第三篇）再び芝公園地內にて　（第四篇）麻布箪
笥町にて　（第五篇）國府津在前川村にて　（第六篇）斷篇及び書翰
（第七篇）日誌及び手紙

樋口一葉

濁江　たけくらべ　わかれみち　十三夜　行く雲　うらむらさき　わ
れから　うつせみ　そぞろごと　ほとゝぎす　その他

第一〇篇　二葉亭四迷集

浮雲　平凡　ひとり言　あひびき　片戀　めぐりあひ　椋のミハイロ
自傳　予が創作の態度　予が飜譯の標準　余が言文一致の由來　小說の
題のつけ方　予が半生の懺悔　その面影の作意　私は懷疑派だ　ロシヤ
通信　その他

第一一篇　正岡子規集

仰臥漫錄　病床六尺　曼珠沙華　花枕　歌よみに與ふるの書　人々に答
ふ　曙覽の歌　俳諧大要　古池の句の辯　俳人蕪村　水工傳　八犬傳
短歌　俳句　その他

第一二篇　德富蘆花集

黑潮　漁師の娘　恐ろしき一夜　夏の夜かたり　ヤスナヤポリヤナの五
日　五分時の夢　マリイバシュカートセフ日錄　寫生帖　一枝の筆　故
人に寄す　梅一輪　「みみずのたはごと」より　その他

第一三篇　高山樗牛集

第二十二篇　永井荷風集

第二十三篇　近松秋江集　岩野泡鳴集　上司小剣集・小川未明集

第二十四篇　谷崎潤一郎集

第二十五篇　志賀直哉集

第二十六篇　武者小路實篤集

第二十七篇　有島武郎集

第二十八篇　長谷川如是閑集　島村抱月集　生田長江集　中澤臨川集

第三五篇　名作戲曲集

河竹默阿彌
福地櫻痴　春日局
松居松翁　西鄕と大村
眞山青果
岡本綺堂　修禪寺物語
木下杢太郎　和泉屋染物店
岡鬼太郎　埴生村　その他
中村吉藏　井伊大老
久保田万太郎　雪
小山內薰　切支丹信長
秋田雨雀　國境の夜
倉田百三　布施太子の入山

第三六篇　美文集　紀行文集　寫生文集

美文集
落合直文　鹽井雨江　大町桂月　大和田建樹
武島羽衣　馬場孤蝶　平田禿木　戸川秋骨
柳田國男

紀行文集
志賀矧川　遲塚麗水　小島烏水　吉江孤雁

寫生文集
伊藤左千夫　野菊の墓
阪本四方太　夢の如し

高濱虛子　風流懺法　落葉降る下に
河東碧梧桐
長塚節　佐渡ケ島　芋掘
寒川鼠骨　瀧澤寺
篠原溫亭　浪の音　母及び其周圍

第三七篇　詩歌・俳句集

短歌篇
俳句篇
長詩篇
漢詩篇

別冊　現代日本文學大觀　現代日本文學年表（希望者にのみ頒つ）

現代日本文學大觀
思想大觀
小說大觀
戲曲大觀
詩歌大觀

現代日本文學年表
主要論文、小說、戲曲、詩歌等を包む

以上

怒濤の如き反響

■後藤新平子曰く　新舊の文化をして、死文字に終らしむるか？將た活文字たらしむるか、此問題は單に讀者のみに關る問題でない。多數讀者の心到眼到に便ならしむる媒介を必要とする。其媒介の密度こそ文明の死活を左右する標識塔だ。改造社が今回『現代日本文學全集』を發刊して、各家庭に於ける新舊文化展覧會を開き、一大靈氣の活動を得せしむるやうにしたことは、恰も造物主が森羅萬象の消長を支配するが如く、第二のクリートルとして活動する大樞軸を掌握する改造社が、その豐かな元氣な天分を發揮したるに他ならぬ。この目次の内容を靜かに一讀し、再讀して其處に生きた教訓の資料を收錄し、全日本人の活動の源泉たらしむべく、周到なる用意と、幾多の苦心と、努力とを費やされたことを見逃してはならぬ、即ち此の豫約に應ずることは、苟も現代に生存する人々の當然の義務である。從つて出版界の一大革命を促した改造社の事業をして、成功せしむると否とは此全民衆の力であつて、賴つて相互の力が共同に動かねばならぬ秋だ。本計畫を大觀し其成否は、大正の文化のバロメーターだと言ひ得る。故に我輩は『全國民は座右に一本を備ふべきである』と高唱する。

■德富蘇峰氏激賞　山本兄――貴兄の新進而前は實に痛快と存じ候。薩南の健兒たる貴兄が大正の御代に於て、大日本帝國の文化普及運動の急先鋒たることは、實に地下の諸先輩も、吾等の及ぶ所に非ずと喜びかつ驚かるゝであらう。惟ふに現代日本文學全集が、若し貴兄の宣言通りに成功する日には、實に我が出版界に一大革命を成すものと申すも過言ではあるまい。予は返すぐも此の快擧を賛成し、切に其の成功を祈る。これは貴兄の爲めと云はず、我國民的文化向上の爲めであります。

蘇峰老人

■幸田露伴博士曰く　書物は各々その性質があつて、一般に行き亙らせる事の不可能な書物がある。それは非常に高くなつても仕方がなく、また當然である。眼科の本や梵語の書物などは滅法界高くとも仕方がないと云はねばならぬ。併し一般人に讀まるべき書物は、若しそれが深切に出來てゐるならば、出來るだけ廉價な程よい。その意味で大膽で聰明な書肆は善い書物を廉價にして容易に手に入らるゝやうにする。明治時代に於て大橋新太郎氏はその道理を辨へてゐて、その時代の出版界に貢獻した。今度の現代日本文學全集は、實にその後に初めて見るの壯擧で、大膽で痛快で至當で聰明なやり方であると信ずる。明治の時代に大橋氏の功績を稱へた人は同じ意味で、今日の山本氏の壯擧に驚き且つ感謝するであらう。

■末弘嚴太郎博士曰く　子供の時讀んだ作品をなつかしみ、もう一度是非にも讀みたしと思ふものが、この全集に發見されてたとへやうのない嬉しさを感じた。わたしもこの全集をぜひ

購めたい。

■東京女子高等學院長人見東明氏曰く　古典的のものより我々に緣の近いかうした計畫は早くより出るべきものであつた。しかしかうした大計畫は改造社でなくては出來ない。亂雜な文學を廣く讀むことは文學的の敎養を高めるものではない、かうした選擇せられたものゝみに依つて文學的敎養の効果が得られる。

■三宅雪嶺博士

いまゝでもまんざらならず思ひしに
百萬部計畫とは驚きにけり

■賀川豐彦氏曰く　文學の民衆化は、改造運動の先驅をなすものだ。文學は民族の魂を物語る。それは民族の血脈に流れる熱き火の噴火口そのものだ。活字と共に、宗敎革命が來たり、印刷機械と共に、科學文明が與へられ、改造文學とともに、世界は闇から光明に躍り出たといふ事が出來やう。それだから、民族は文學以上ではないのだ。文學を知らないものは魂を知らぬといつて差支ない。此の意味に於て私は、現代日本文學全集の刊行を心から喜ぶ者だ。

■婦女界社長都河龍氏曰く　此計畫は機宜に適し近時出版界最良の計畫で私は第一番に購讀者となります。

■正宗白鳥氏　僕の作品はもつとも自分の氣にいつた者を精選したつもりです、他の諸氏のも概して當を得てゐるやうだから、明治以來の日本文學の大要を知るにはこれにまさる全集はないだらう、何よりも前例のないほどに廉いのがいゝ。

■室伏高信氏　私は日本が今日は内省され再評價される[illegible]になつてきたと思つてゐる。その時に當つて日本の文化が日本人の前に新らしい裝をして提供されることは甚だ意義のあることである、現代日本文學全集はわれ／＼の最も手近なものだけに最も意義深く且つその選擇も頗る當を得てゐるものと思はれる。

■堀江歸一博士曰く　私は明治初期の文學を見たい爲に春秋二期の古本市に行くが、なか／＼思ふものが手に入らない。貴社の今回の全集は私のやうな文藝家でなくて單に趣味の上から讀むといふ人々にも絕好の計畫だ。私は初篇から十八九篇までが特に讀むことをそゝられる。

■日比谷圖書館長今澤慈海氏　かゝる空前の御企畫に對する諸家のさま／＼な推奬は、定めし自分の云はうとする所を盡して了つたに相違ない。それ故に、こゝではことさらに云はぬが、文學の民衆化なるものは、英國などでも何十年か昔に行はれてをつたので、古い頃の彼國出版業者の思慮ある宣言書などを讀むと、我國が未だにそこに行き着いて居さうもないので、自分は常々情なく思つて居た。けれども時代は進む。今回の御社の御企畫は、この種の事業の皮切のやうな觀があり、誠に欣快に堪へない。たゞ望むらくは、この努力を永久に繼續し、より徹底的な文學の民衆化を期せられたいことだ。これは自分のみならず、我國讀衆の、大出版業者たる御社に對する切なるお願ひであると思ふ。

武藤山治曰く　本全集の刊行されるに際し、私の特に言はん

受領票

口座番號	東京八四〇二番
加入者氏名	東京市芝區愛宕下町一丁目一番地 改造社

一金

受付局日附印

※印を付しある部は拂込人に於て記載せらるべし

通知票

拂込人住所氏名	
※	

口座所管廳日附印

口座番號	東京八四〇二番
受付局	

番號

號印

額正確に記載し一 二 三 十 円 等の文字を用ひず必ず壹、貳、參、拾、圓、錢の文字を使用せられたし若し金額を訂正せらるゝときは郵便局にて受付を斷ります

一拂込通知票裏面の通信文記載欄には拂込人より加入者に宛てたる種々の通信文を記載せられて差支ありませぬ

此の振替用紙中の『申込書』欄の住所姓名は、必ず分りいいやう楷書で丁寧にお書き下さい、草書の走り書きや、インキが散つて文字の不明なものなごは、こちらの帳簿に正確に記入する事が出來ません爲め、發送その他にいろ／＼の不便が生じますから、くれ／＼も御注意を願ひます。

と欲するところは、外國人は外出に際し必ず書籍を携帯して汽車や電車の中でも盛んに讀書するのに日本人には其れが少い。殊にスコツトランドに行くと各家庭に立派な書架が設けてあつて、恰も日本で家具調度品を飾るやうに驚くべき藏書が陳列されてゐる、此の書物に親むと云ふことは軈てスコツトランドから多くの人材を生んだ所以である。然るに日本の家庭には書物を見ることが些い、殊に實業家に於て甚だしい。書物は唯一の心の糧であるから實業家と雖も讀書を缺く事はできない。それには難解な學術書よりも、先づ何人も興味を持ち得る文學書から入つて讀書癖を養ふべきである。殊に本全集に收むる如き選擇された文學は各人の趣味性を美化し人格を向上せしめる。尚ほ本全集の價格が頗る低廉なるは世界中で最も書籍の高價であると云はれる日本の讀書家にとつて此上なき福音と云はねばならぬ。

■**芥川龍之介氏**　『現代日本文學全集』中に「新聞文藝」を收めてゐるのは結構です。まだ今日のやうに雜誌と云ふものの發達しなかつた明治時代の「新聞文藝」は勿論、今後の「新聞文藝」にも面白いものが多いことと思ひますから。――右折角のお尋ねにより、漫然と思ひついたことを申し上げます。

■**久米正雄氏**　私は初め山本氏から話があつた時、現在の我が文壇諸作家の、民衆的な廉價版の全集を出したいからと云ふので、其趣旨に贊成し早速承知した。ところが、後になつて見ると、それが明治大正に亙る代表作の全集みたいな形式になつて居るので、大に驚いた位だ。こんな事なら、私なぞは席末を汚すのも光榮と思はなくちやならぬのを感じて、餘りいゝ氣持はしない。其代り此の全集は餘りに立派なものだ。

■**福田徳三博士**　私は貴社の現代文學全集の計劃を始めて承つたときは其の餘りに大膽なる果して實現せられ得可きやを懸念して居たのであります。然るに貴社の準備は着々進行して、今や印刷に取かゝり他方には懸直なしに數萬の購讀者を確實に得られた由を承つて私の懸念は全く杞憂に過ぎなかつたことを確め、貴社先見の明に敬服すると共に、其の計劃が如何に現代民衆の渴望に應ずるものなるかを知ることの出來たことを、甚だ愉快に感ずるのであります。歐羅巴では此頃價値の甚だ廉な古書良書の複刻が非常な勢で行はれて居ます。殊に古典の複刻に於ては、今迄英獨に比し遙かに後れて居たフランスに於て、精確忠實な校訂を施し、綿密な解題を添へた模範的複刻が、『ギヨーム・ブード協會』や、『ルネサンス・チュ・リーヴル協會』などから續々刊行されて居ます。スコラ學者の代表的著作の廉價版も盛んに行はれて居ます。（複刻でないものでも、例へばマルクス佛譯全集の如きは、二百五六十頁の一冊が僅か五十錢計りで、既に十四五冊出て居ります）。ドイツでは、『ヘルド・フラメ叢書』『インゼル叢書』『ドライ・マスケン叢書』等は氣の利いた而かも十分信頼するに足る複刻の叢書として、新刊物叢書の『ギヨツシエン』や『ナトール及ガイスト』などと對立して居ます。又た『ランゲンシアイト古典獨譯全書』は此頃盛んに重刷されつゝあります。ロシア、ラトヴィア、ポーランド等、私には讀めませんが町々の書店の窓で數多くの廉刷版を見受けました。ロ

シアの『プロレットカルト』は確かに此廉價刷の普及を以て其最有力の手段の一として居るものと存じます。モスコーの町々で最も人員を集めるものは、此等の廉本を山の如く陳列して居る書店でありました。フロレンスや羅馬の町々のそゞろ歩きは、其昔價が高くて手が出せなかつた書物を、僅かな値段で見出される丈けでも、思ひ出での深いものでありました。イギリスの『エヴリーマンス文庫』やドイツの『レクラーム』は最早獨占を誇ることが出來なかつた程、廉價にして善良な複刻物が今日歐羅巴に流行して居て、戰後疲弊の極にある彼民衆の讀書力の旺盛を示威しつゝあります。私は其を實に羨しいことと思つて歸つて來たのですが、今や貴社の現代日本文學全集が確實に刊行せられたる有樣を承つて實に衷心に堪へないのであります。我邦の出版界は其の數量の點に於ては、歐羅巴諸國に比して決して遜色のないことは、須知の事實でありますが、貴社の計劃は、一度成功し、而して他の出版者が踵を接して其例に倣ふ樣になれば、我邦の出版物統計は、更により輝ける記録を作ることになりませう。其はやがて、民衆の向上、健全なる趣味と教養の普及を物語る最有力の證人たる可きことは申すまでもありません。而して其は世界に於ける日本の誇を一つ加へることにもなるでせう。此意味に於て、私は只管に現代日本文學全集の成功を衷心より祈る次第であります。因に、全文總ルビ附とは、甚だ結構な思付と存じます。ルビ附となれば印刷の校正は一層骨の折れることでせうが、何卒飽迄嚴密丁寧に校正して、此點に於ても、模範的の名を辱しめない全集を完成して下さい。

■洗芝郵便局長曰く

私が郵便事業に身を投じて以來、斯うした一社の事業によつて全局員が多忙を極めたなぞといふ經驗を持ちません。全國各地から殺到する郵便物をこの局で一纏めにして貴社の方に配達し、貴社から全國各地の購讀者に發送するものを更にこの局で府縣別に區分して發送するのですが、それが日に幾萬、何千といふのですから、局員の勞苦も買つて下さい。殊に愈々百萬部の配本となると局としては相當の人員と設備とを増さなければなりませんから、豫め上司に意見を具して置かうと思つて居ます。

（一五、一一、六）

■一勞働者曰く

御社の現代日本文學全集の出現は吾等勞働者の爲めには、眞に光明の出現である。われ／＼にはどんな善本良書も今までは高價のため之を手に入れることは仲々困難であつた。こんなことではわれ／＼の向上進歩は期しても實現することが出來なかつた。併し御社の計畫によつてわれ／＼は今後實に容易に文學書に接する機會が與へられた、文學はわれわれに唯一の慰藉であると同時に、御社の企は實にわれ／＼に非常なる光明の出現である。

■京都宮川氏より

文學の民衆化の爲め犧牲的の大壯擧に深き敬意を表します。

■海老澤氏より

我々プロには壹圓が馬鹿に氣に入つた。

■京都中江氏より

我々プロ青年が多年渇望してゐたことが遂に飛び出した――。大改造に依つて實現される我々貧青年の福音――大改造社の英斷――。今更にその偉大さが窺はれる―

ー。

■**小石川齋藤氏より**　御社に於ける今回の御企畫は、實に我我讀書子に取つて地獄で佛に逢つた感じ致し居候。

■**中野小澤氏より**　善事を世に施す靈魂は、神の上たる神にこそあれ。

■**島根縣太田氏より**　「大阪朝日」廿一日の貴社の御廣告拜見、飛び立つばかりの思ひで一字も餘す所なく讀みました。内容は充實してゐるし、定價が驚くほど廉いのが吾等に取つては何よりの惠みです。

■**岡山芳谷氏より**　現代日本文學全集は、田舍に在る私に取つては堪へ難い誘惑に御座候。

■**宮城福地氏より**　現代日本文學全集普及版出版の壯圖は、眞に是れ邦家の爲め慶賀の至り、貴社の企は是れ國民への奉仕、謹んで敬意を表するものに有之候。

■**朝鮮藥師寺氏より**　財源の續く限り購讀致すつもりで御座います。

■**滋賀縣一小學校卒業生より**　私共は恩師に特別にお世話になりましたから、その記念の爲めに現代日本文學全集が一番適當であると思ひ、一部贈呈することにしました。

■**東京一女學生曰く**　文學は女子の情操教育から云つて非常に必要なものになつてゐると云はれてゐるにも拘らず、今まで文學の本は非常に高價で容易に私達の手に入りませんでした。偶々私たちの手に入るものがあれば、それは卑俗なもので、師友や父姉から許されさうもないものです。今回御社の企てられた文學全集は全く第一流の良書ばかりを選ばれてゐるやうですし、その上定價が一冊一圓といふ安さですから、通學の電車賃を少し儉約して徒歩すれば、たやすく購はれますから、私たちのためには非常な福音です。私たちの友達は皆々揃つて會員になると云つてゐます。

■**挿話二つ三つ**　本全集についていろ〳〵と感激多き美談や面白い插話があります。▲東京芝區内の一勞働者さんは「私達は薄給でいくら努力しても兒孫に美田を殘すとは出來ないせめて本全集を殘しませう。」といつて本社の受付に壹圓を投ぜられました。▲また東京でさる職業をして居られる五十恰好のS紳士が來社され「今迄は娘の嫁入道具に鏡と簞笥、長持だけあればそれでよかつたが、これからの世の中は一通り文藝の心掛けがなければ社交上後れを取り勝ちになりますから長女次女の嫁入文庫として此際是非二部だけ戴きます」と云つて辭し去られた。▲その他本社の歡喜に堪へない事は米屋や洗濯屋の小僧さんや法被姿の勞働者達が氣持よく一圓を投じて本集の發刊を祝して下さることです。これを以ても我社の文藝の民衆化といふことが實現された譯です。

明治文學について一寸

武者小路實篤

今度改造で現代日本文學全集を出すくはだてを同社の山本君にきいた時、自分も死んだ人で入れるといゝ人を二三すゝめてみた。自分の意見が通つたわけでもあるまいが、自分が入れるといゝと云つた人は大概入つてゐるのはうれしかつた。之でこの全集は日本の明治以後の文學の最も廣義における一般的な小圖書館の觀を呈することが出來、新しき村でも之をかつて他に三四のものをつけ加へれば、一通そろふわけで大へん便利でうれしい。

自分は明治文學を研究したことはないが、何しろ明治以後の文學の發展にはおどろいてゐる一人である。實際僕達が小學校の時代の作文と、今の小學校の生徒の作文と比較して見ればこのことは露骨にわかると思ふ。

言文一致なぞと云ふ運動が完成され、誰もが自分の思ふことと感じたことをすぐかけるやうになつたのは明治以後の文學の御かげと思つてゐる。自分なんか文學をやれるのは明治に出た人達が言葉を皮膚のやうに內身とぴつたりすることを得さしてくれたからと思ふ、しかし今それ等については云ふ必要がないと思ふ。見渡した處、非常に優れた人はなかつたかとも思ふが、しかし明治以後日本の文壇は實に多勢の注目すべき人を出した。今、名をあげて見るだけでも中々華々しいことがわかる。

鷗外、柳北、敬宇、諭吉、等の名には一々感じが伴ひ、又時代の空氣がわかり、又當時の人の心の狀態がわかる。しかしそんな古い處はぴつたりしない人もあるかと思ふが。

紅葉、露伴、透谷、一葉、なぞになるといかにも明治文學の感じがくる。紅葉の多情多恨、露伴の髑髏、透谷の死、一葉のたけくらべなぞ思ひ出の深いものである。

綠雨、なぞも印象の强い處がある。

逍遙、鷗外なぞも一時代をかたちづくつた人であり、又先驅者でもある。

鏡花、蘆花、樗牛は華々しく人々の心をひきつけた。

雪嶺、蘇峰はその方の代表者として我等に印象の强い人である。

子規、は特筆すべき人であり、啄木は特色のある人である。二葉亭は日本人としては厚味のある人のやうに思ふ。獨步は氣持のいゝ男であり、漱石は人格者である。漱石が死んだ時自分は實にがつかりした。

藤村、花袋、秋聲、白鳥。

風葉、天外も一時代を思はせる。

再び明治文學者として特色のある人々の名をくりかへしてあげると、

紅葉、露伴、逍遙、鷗外、二葉亭、蘆花、鏡花、獨步、漱石

藤村、子規、啄木、樗牛、綠雨。

中々賑かである。その他、兆民、秋水、操山、梁川、滿之。之等は何等かの意味で若い人達に大きな感化を與へた。

僕もそれ等の人に知らず〳〵影響をうけてゐるであらう。

明治はあらゆる意味で面白い時代であつたと云つてい〻。思ひ出すとなつかしい。

雨江、桂月、羽衣なぞも自分は愛讀したことがある。今よみなほしたらどうかと思ふが。

しかしたしかに明治は個人として見ず、時代として見ても實に面白い時である。一國の文明が日本程閉ぢこめられてゐた國は少ないであらう。其處へ世界の文明が一時にふきよせ、歐化の聲に夢中にうかされ、動かされ、それからとるものはとり、四五十年の間にともかく世界と頭をすつかりそろへることとが出來、押しも押されもしない世界の精神的に云つても先進國の一つになつたのだから。

學問から云つても、文學、思想から云つても日本は今や一歩進まうとしてゐる。明治はその混沌時代であり、過渡期であり、ともかく活氣のあつた時である。

それ等の本氣は明治文學に實に露骨に現れてゐると思ふ。

その記念像が改造社の向う見ずな性質と勢力を惜しまない性質とで立派に出來かけてゐる。安いのが何よりで、多くの人は小さい私立の明治大正の文學圖書館を自分の家に持つことが出來るのをよろこぶであらう。

現代日本文學全集内容見本を見て

市川源三

一、日本の文化史中明治大正ほど異彩を放つて居る時代はない。殊に美術に於ては日本と支那と印度と歐米各國とそれ〴〵特色あるものが渾然たる一大藝術品を作り上げて居る。前古に比類も無く、世界の他の國にも比類があるまい。これらを蒐集し精選して一大記念品を後世に殘すことは私人的に經營すべきものではなくて、國家的に經營すべきものと思ふ。

一、日本人の或種類は餘りに讀書に耽り過ぎるが、或他の種類は餘りに讀書に遠ざかり過ぎる。これは日本の書物の價が張り過ぎるのと日本の勞農者及び婦人に時間が乏し過ぎるからである。千頁以上の書物が一圓で讀めるといふチープエディションが出ることは文化事業の第一歩であつて、而も最も重要なことだと云はねばならぬ。

一、客間を飾るに彫刻や繪畫や花卉の美を以てすることも善いが、書籍の美を以てすることは一層近代的で奥床しい。主人を待つ間の手持無沙汰に、書棚を通覽し、自分の讀みたいと思つてゐた書物を見出した時の心地よさと云つたら無い。もう主人と會談の必要が濟んだやうな氣がする。

現代日本文學全集の内容見本を送られて、一見した時、私はふと如上の感想を浮べた。そして直ちに豫約を申込んだ。併し熟〻思ふに、昨今全集物流行だ、從つて杜撰の喰はせものの多いのにも少々閉口して居る。内容の精選と校正の嚴重とを此の際特に希望して置く次第である。」

口田康信著

農村國家と都市國家

（最新刊）

定價壹圓貳拾錢
送料十八錢

最新刊

在來の國家理論は今や危機にある。あらゆる經世家と、あらゆる學徒はこの重大なる問題に直面して如何に深刻なる苦悶を經つつあるか。だが、見よ。篤學にして眞摯なる口田氏多年の學的思索は遂に明快なる解決を吾々に與へた。その理論の透徹と、その結構の完は誠に氏によつてのみなされる處。行き詰まれる吾が農業國家は如何にして文化的國家理念への段階を經べきであるか。今や吾人多年の杞憂は本書によつて直ちに氷解されるであらう。

發行所　東京市芝區愛宕下町　振替東京八四〇二番　改造社

蘇峯・徳富猪一郎先生序文
永見徳太郎編輯及ビ解説

續長崎版畫集

◎異國情調の浮世繪
◎海外文化の大史料

優美高尚ナル紙挾附
寸法 縦九寸 横一尺三寸
木版 三枚
精巧コロタイプ版 二十八枚
定價金拾圓（荷造送料共）
送附方法 代金引換小包
内容見本 御申越次第進呈

東京市外高井戸町字中高井戸三〇
發行所 書肆 夏汀堂
振替東京六七八六七番

おらんだ風景。出島屋舗景。唐人屋舗景。蠻船圖繪。長崎地圖。寫眞鑑。阿蘭陀船。唐人船。ヲロシヤ使節。大淸美人。黑坊。阿蘭陀男女。行列之圖。アメリカ人。唐婦人納涼。阿蘭陀人貨物試量。ゼウキ舟。ストンボート。唐館部屋等百拾九點を收めあり。

前回發行の**長崎版畫集**と一枚も重復するものなし。

發行部數僅少

葉山嘉樹著

海に生くる人々

定價壹圓五拾錢
送料十八錢

最新刊

この一書は惰眠せる現文壇と現代社會に對する大なる巨彈だ。奇怪なる構想。怖るべき××の拳、さりながら尙熱病のやうに反抗する青年、それはやがて將來さるべき太陽の亂舞にあらずして何ぞだ。一讀慄然たり乍ら引入れらるる如く讀返して後に殘る颯爽たる藝術的氣韻と社會的靈の苦悶は融合化されたる眞と美の刻印だ。プロ派に理論あつて實彈なしと稱せる趣味の士は恥ぢよ!!この熱情と、この深刻さ、そしてこの美感の豐かさ。この異色ある葉山を得し事は吾々全社會人の誇りだ。青年も讀め子女も讀め老年も讀め、そして心臟しつかりと押へて三省せよ!!

發行所　東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

改造社出版圖書目錄

（大正十五年八月現在）

（1）經濟及社會

著（譯）者名	書名	內容一斑	版數	型 頁數	定價 送料
法學博士 穂積重遠著	離婚制度の研究	○離縁狀と縁切寺○縁切寺滿德寺○クリスト教の婚姻非解消主義○イギリス其他各國の離婚制度の研究	1刷	菊上 九四〇頁	一〇・〇〇円 內・三六
法學博士 河田嗣郎著	家族制度と婦人問題	（一）家族制度論○家族制度の性質と機能○外五項（二）婦人問題○女子勞働問題等を檢討す	7版	四六上 三五三	二・〇〇 ・二〇
京大教授 宮本英雄著	婚姻の基調	婚姻法の將來○夫婦間の貞操○寡婦の再婚○離婚防止○婚姻媒酌○家族制度と婚姻等結婚に關する研究	5版	四六上 二〇八	一・五〇 ・一八
法學博士 福田德三著	社會政策と階級鬪爭	（一）社會政策序論○「社會」の發見○外三項（二）階級鬪爭と其當事者等其他の深刻なる研究	30版	四六上 六七四	三・〇〇 ・二四
法學博士 福田德三著	社會運動と勞銀制度	（一）社會運動の理論的根據（二）勞働爭議の意義及種類（三）勞銀制度を博士一流に檢討す	15版	四六上 四三〇	二・五〇 ・二〇
法學博士 福田德三著	ボルシェヴヰズム研究	○マルキシズムとしてのボルシェヴヰズム○レーニン國家論○ボルシェヴヰズム○「資本主義への降伏」等	10版	四六上 三九四	二・九〇 ・二二
慶大教授 小泉信三著	改訂 價値論と社會主義	○緒論○ロオドベルトス研究（一）マルクス研究（二）雜錄（三章）○追補河上博士との論戰記錄	8版	菊上 四三三	三・二〇 ・二八
商大教授 孫田秀春著	勞働法總論	○勞働法の基本觀念、研究方法の變遷、理想○勞働法の法源○勞働法の効力等勞働法概論	5版	菊上 三四〇	二・六〇 ・二六
ジノヴィエフ原著 富士辰馬譯	勞働政黨と勞働組合	○組合運動の原則的諸問題○ロシヤに於ける組合運動○勞働組合世界的名文獻の飜譯	4版	四六並 一七四	・九〇 ・一四
ニコライレーニン原著 茂森唯士譯	レーニニズム	○ロシヤ革命の國際的意義○ボリシエヰキーの成功の一根本條件○ボリシエヰーズム發達の諸期等	4版	四六並 二三四	一・二〇 ・一六

著者	書名	內容	版	體裁・頁數	定價・送料
經濟學博士 本庄榮治郎著	日本社會史	○日本社會史の觀念○氏族制度の社會○莊園制度の社會○分裂的封建制度の社會○郡縣制度の社會等	25版	菊上 三六六	二・五〇 ・二四
法學博士 河田嗣郎著	農村問題と對策	○農村問題と對策○農業改造方策○都會と田舍との分裂○農民土地愛着心冷却の傾向等外數項の熱論	17版	四六上 三〇四	二・〇〇 ・二〇
法學博士 末弘嚴太郎著	農村法律問題	○序章○部落有財產と農村生活○永小作の法律關係○小作問題と小作法○小作爭議と小作調停法	[illegible]版	四六上 四一八	二・五〇 ・二〇
法學博士 末弘嚴太郎著	嘘の効用	○嘘の効用○改造問題と明治時代の省察○役人の頭○小智惠に捉はれた現代の法律學○其他八項	42版	四六上 四四四	二・六〇 ・二〇
法學博士 末弘嚴太郎著	法窓閑話	新法學の權威が新しき國民はいかに法律を心得ねばならぬかを說いた法治國民への國民讀本	24版	四六上 四二三	二・五〇 ・二〇
佛國藏相カイヨー著 龜井貫一郎譯	民衆の苦悶	○大戰の回顧○世界的破綻○歐洲再生の力○佛國、一般財政經濟の混亂○佛國賠償問題と戰爭債務等	4版	四六並 二四〇	一・三〇 ・一六
森戸辰男著	青年學徒に訴ふ	近時澎湃たる社會科學問題に關し政府者に對し巨砲を放つ。學生諸君は本問題の內容發展を本書で知れ	18版	四六並 六〇	・三〇 ・一〇
ウンターマン著 森喜一譯	哲學思想の史的考察	○著者はマルクス派學徒で古代より近代に至る哲學思想の史的考察と共に進化學說の變遷を評るもの	3版	菊上 二四三	二・〇〇 ・二二
ヨゼフ・ディツゲン原著 山川均譯	無產階級の哲學	現代のブルジョア哲學に對し無產哲學の新提唱新時代學徒の必讀すべき文獻	5版	四六上 三六八	二・五〇 ・二二
賀川豐彥著	生存競爭の哲學	生存競爭の原理を闡明し生存互助の哲理を說き生命力と愛の力が生存競爭を超越するを進化論的に證す	12版	四六上 三〇〇	二・〇〇 ・二〇
文學博士 高田保馬著	階級及第三史觀	(一)階級篇○階級の本質○マルクス的階級概念外一篇(二)第三史觀篇○經濟史觀より第三史觀まで等	5版	菊上 三四四	二・八〇 ・二四
森戸辰男著	思想と鬪爭	○震災と主義者と反動勢力○國粹主義者と政治的殺人○大杉榮君の追憶○外四項	6版	四六上 三五六	二・〇〇 ・二〇
細井和喜藏著	女工哀史	我國の工場及女工生活を知る世界的勞働記錄十五ケ年の氏の血と肉とから成る本書を國民は一讀せよ	24版	四六並 四六八	二・〇〇 ・二〇
トロツキイ著 茂森唯士譯	文學と革命	○非十月革命文學○○革命の文學的同伴者○アレクサンドル・ブロック○未來派○詩の形○外四項	4版	四六上 三六八	二・〇〇 ・二〇

著者	書名	内容	版	體裁	定價・送料
帝大助教 平野義太郎著	法律における階級鬪爭	○法律に於ける階級鬪爭○階級鬪爭とローマ法○資本主義的法律組織の下に於ける階級鬪爭○外四章	9版	菊上 三三三	二・五〇 ・二六
法學博士 河田嗣郎著	農・政四十三講	○農村問題解決の鍵鑰○小作爭議と農村破壞○外四十一項、農村問題を知らんとする人の必讀の書	5版	四六上 三九八	二・五〇 ・二二
法學博士 堀江歸一著	改訂増補 國際經濟と國民經濟	○世界平和と國民經濟並に國際經濟○世界經濟上より見たるゼノア會議○對外債務廢棄問題○外七項	9版	菊上 三三三	二・五〇 ・二六
法學博士 堀江歸一著	續國際經濟と國民經濟	○經濟組織の改造と政治の革新○政治的議會より經濟的議會へ○產業資金の供給○外九項	5版	四六上 三九四	二・五〇 ・二二
農學博士 小野武夫著	農村研究講話	○緒言○基礎的研究の必要及び其綱領○農村問題とは何ぞや○村落の研究○農家經濟の研究等	5版	四六上 三三八	一・五〇 ・一八
マーシャル著 商大教授 大塚金之助譯	經濟學原理 (分册三)需要・供給・價値の一般關係	現代の經濟學書中、此書程、學としての生命と光の鮮かなるものはない。本篇は主として生產を解く。	新刊	菊上 四九八	三・五〇 ・二六
マーシャル著 商大教授 大塚金之助譯	經濟學原理 (分册四)國民所得の分配	譯者は、晩年のマーシャルに親炙したる人、原理に流れつゝある血を其儘移植したる名譯。	新刊	菊上 五四〇	三・七〇 ・二八
經濟學博士 本庄榮治郎著	近世農村問題史論	經濟史の權威たる著者が近世日本に於ける農村問題を史的に考察したる日本農政史の一方面である。	6版	四六上 三六〇	二・三〇 ・二二
京大講師 山口正太郎著	中世寺院法と經濟思想	○序論○利子禁止思想の歷史○中世寺院法と猶太人○中世寺院法と商業○中世寺院法と組合及び會社等	4版	四六上 三三三	一・五〇 ・一八
ブハリン原著 富士辰馬 濱田千元 譯	唯物史觀	勞農露國第一の理論家たる著者が現代思潮の指導原理たる唯物史觀を平易に徹底的に譯述せるもの	最新	四六上 六四〇	三・五〇 ・二八
ロマン・ローラン著 大澤章譯	先立ちて來る者	深遠たる思想と熱意ある筆致を以て世界の思想界に牢乎たる位置を占むるローランの「先驅者」の飜譯。	1刷	四六並 三九六	一・五〇 ・一六

(2) 政治及法律

著者	書名	内容	版	體裁	定價・送料
法學博士 末弘嚴太郎著	農村法律問題	○序章○部落有財產と農村生活○永小作の法律關係○小作問題と小作法○小作爭議と小作調停法	22版	四六上 四二八	二・五〇 ・二二
法學博士 末弘嚴太郎著	法窓閑話	○法窓閑話○誤判賠償の根本原理○陪審法廢止論○小作人と土地所有權○法律小話(十二話)○外二篇	20版	四六上 四四三	二・五〇 ・二二


滋強飲料
カルピス
カルピスは
敬と愛との贈物
酒店・食料品店・薬店にあり

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF POLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
PRICE: EIGHTY SEN A COPY, TWELVE YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, 1 ATAGOSHITAMACHI SHIBA. TOKIO.

